東北大学耳鼻咽喉科学教室開講一〇〇周年記念誌

東北大学耳鼻咽喉科学教室
開講100周年記念誌

東北大学耳鼻咽喉科学教室

東北大学耳鼻咽喉科学教室
開講 100 周年記念誌

平成 27 年 9 月

東北大学耳鼻咽喉科学教室

大正 15 年に新築された教室の正面玄関（2 頁-図 2）に掲げられた看板で、現在まで保存され教室の入り口に掲げられている

東北大学耳鼻咽喉科学教室開講 100 周年記念誌

目　　次

❁ 発刊によせて　香取　幸夫

❁ 歴代教授

❁ 耳鼻咽喉科学教室創立百周年を祝して　河本　和友　1

❁ 教室の歴史

和田徳次郎教授の時代　髙坂　知節　17
立木　　豊教授の時代　髙坂　知節　20
片桐　主一教授の時代　髙坂　知節　25
河本　和友教授の時代　河本　和友　29
髙坂　知節教授の時代　髙坂　知節　37
小林　俊光教授の時代　小林　俊光　48

❁ 100 周年記念式典

記念式典

開会の辞　小林　俊光　60
祝辞　河本　和友　61
記念講演 1　1978 年 ― 同窓会誌発刊は教室に何をもたらしたのか ―　髙坂　知節　63
記念講演 2　100 年目の教室　小林　俊光　68

リレー講演

小児耳鼻咽喉科と私　飯野　ゆき子　75
耳科手術のパラダイムシフト ― 中耳内視鏡手術の進歩 ―　欠畑　誠治　79
接着法の開発と評価 ― その背景 ―　湯浅　　涼　83
好酸球性中耳炎：新しい名称定着で示された東北大学耳鼻咽喉科教室の力　松谷　幸子　87
大規模健康調査による難聴危険因子の検討　新川　秀一　90
産業医科大学の現状と展望　鈴木　秀明　93
頭頸部がん治療の進歩　西條　　茂　97
聴覚と聞こえ　川瀬　哲明　101
遺伝性難聴の分子機序と治療戦略　池田　勝久　104
東北大そして筑波大における耳科学の基礎と臨床　原　　晃　105

特別寄稿

新しい OSAS 病因モデル　鈴木 雅明　111
頭頸部癌とはいったい？　志賀 清人　114
安全に耳科手術を行うための基礎知識　須納瀬 弘　117

❁ 100 周年に寄せて

＊ 立木教授時代 ＊
戦後も十年経った頃　教室昔話　渡辺 勤　123
「立木教室」での思い出　渡辺 昭夫　124
立木教室の底流にあるもの　櫻井 時雄　125
立木豊先生時代の医局生活　金子 豊　127
立木教授時代の医局の思い出　柿崎 一郎　128

＊ 片桐教授時代 ＊
片桐主一教授と前川重和先生と私　渡利 千里　130
片桐教授と想い出の電気部屋物語　千葉 正敏　131
開講 100 周年に寄せて「片桐教授時代」　堀 克孝　132
片桐先生の時代に在局して　渡辺 孝志　135
片桐主一先生の想い出　湯浅 涼　135
開講 100 周年を迎えて ― 電気部屋の歴史 ―　草刈 潤　137
回想　山崎 義春　140

＊ 河本教授時代 ＊
試作型走査電顕　小野寺 亮　142
河本和友教授時代の思い出　神林 潤一　143
河本教室の頃　橋本 省　144
百周年に寄せて　稲村 直樹　145
河本教室を振り返って　朴澤 孝治　146

＊ 髙坂教授時代 ＊
髙坂教授時代の思い出　古川 加奈子　148
頭頸部グループ創世記～髙坂教授時代の物語～　松浦 一登　149
耳鼻科医になった理由　入間田美保子　150
髙坂教室の思い出　日髙 浩史　151
100 周年記念誌に寄せて　髙坂知節教授時代の思い出　山内 大輔　152
開講 100 周年に寄せて　湯浅 有　153

＊ 小林教授時代 ＊
小林教室の想い出　川瀬 哲明　155
開講 100 周年に寄せて ― 恩師　小林先生　佐藤 利徳　156
東北大学耳鼻科教室って最高です！ ～小林教室の思い出～　小川 武則　157
開講 100 周年に寄せて ― 小林教室の思い出 ―　菊地 俊晶　158

小林教室を振り返って　宮 﨑　浩 充　159
開講 100 周年に寄せて
　～長崎大学時代の小林俊光先生との思い出～
　矢 野　寿 一　160
100 周年によせて　小林教室での思い出　大 島　英 敏　161

❁ 写真で見る教室の歩み　163

❁ 業績リスト　187

❁ 年表

発刊によせて

前列左より河本和友名誉教授（第 4 代）、香取幸夫（第 7 代）、髙坂知節名誉教授（第 5 代）。後列左より小林俊光名誉教授（第 6 代）、川瀬哲明教授（医工学研究科聴覚・言語障害学分野）。
平成 25 年 12 月 15 日、教授就任祝賀会にて。

東北大学耳鼻咽喉科学教室の歴史は、明治 44 年（1911 年）7 月に初代教授の和田徳次郎先生が仙台医学専門学校の教授として着任されたときをもって始まる。本年まで教室として 104 年の歴史を刻んでおり、7 月 14 日には現在の仙台市青葉区星陵町に東北大学病院ならびに医学部が設置されて 100 年を迎えた。教室の開講から現在まで、東北大学耳鼻咽喉科学教室は耳科学、鼻科学、気管食道学、頭頸部腫瘍学など耳鼻咽喉科の扱う広い領域で数多くの先進的な研究成果を発信し、また 470 名に及ぶ秀でた耳鼻咽喉科臨床医を育成してきた。現在は教授交代して 1 年余であり、写真のように新任の私が 3 名の名誉教授と医工学研究科の川瀬哲明教授の手厚い支援を受けてこの歴史ある教室の運営を進めている。本誌を編纂する中で改めて往時の諸先輩の活躍と努力に触れ、身の引き締まる思いである。また、国内外の様々な大学や研究室との交流の中で、ご支援をいただいて発展して来たことを忘れてはならない。今後さらに医学の進歩と耳鼻咽喉科診療の充実を目的に研鑽を積んでいくことが、教室を担当する私達の使命と感じている。

この記念誌は河本和友名誉教授の祝意と 3 名の名誉教授による教室の歴史の紹介にはじまり、平成 24 年に催された 100 周年記念式典の内容、同窓会員による各時代の回想、写真・業績リスト・年表、により構成されている。往時の貴重な資料を提供いただいた名誉教授の方々をはじめ、玉稿をいただいた同窓の諸氏に深甚なる感謝を申し上げる。100 周年記念式典のリレー学術講演会では、医育機関の教授や専門施設の長として活躍している錚々たる 10 名の同窓会員の講演が連なり、本誌に掲載されている要旨から最近の教室の歴史を俯瞰していただければ幸いである。業績と年表の部分では、直近までご披露したく、現在までの記載になっていることをご容赦いただきたい。業績の編纂には川瀬哲明教授に多くの労を頂いた。

教室の 100 周年から発刊までに時間を要したが、東北大学耳鼻咽喉科学教室の歴史を紐

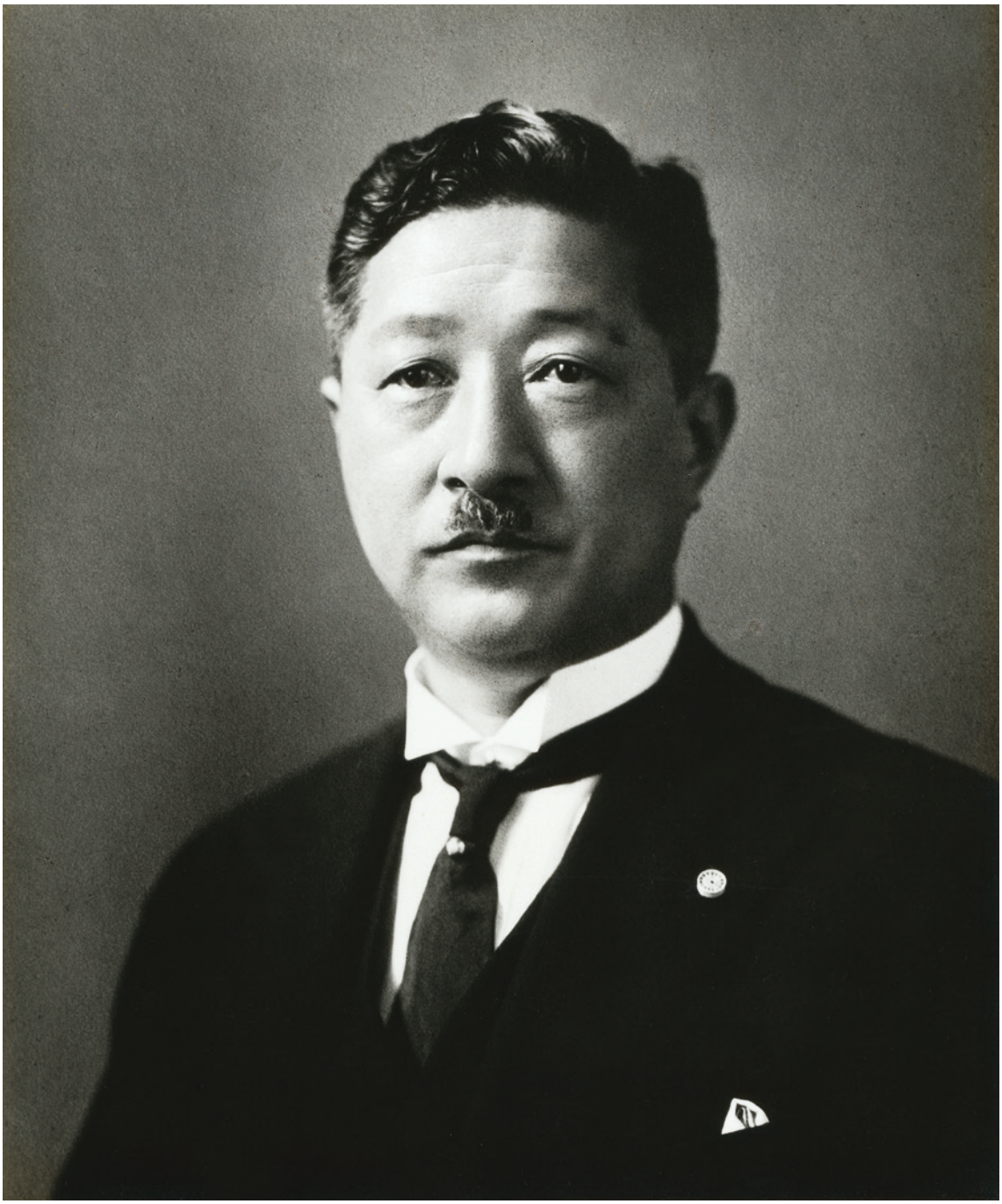
解くに相応しい記念誌が出来上がり、皆様にご高覧いただければ発行者の一人として光栄である。本誌の編集に尽力いただいた編集委員長の沖津卓二氏、編集委員の佐々木美隆氏、柴原義博氏、川瀬哲明氏、古川加奈子氏、宮倉秀人氏、渡邊健一氏、山内大輔氏、野村和弘氏、教室秘書の豊田さと子氏に心より感謝を申し上げる。

平成 27 年 9 月 1 日

香　取　幸　夫

歴代教授

和田　徳次郎	（在任期間　1911～1939）
立木　豊	（在任期間　1940～1962）
片桐　主一	（在任期間　1962～1972）
河本　和友	（在任期間　1972～1985）
髙坂　知節	（在任期間　1985～2000）
小林　俊光	（在任期間　2001～2013）



和　田　徳次郎 教授

立　木　　豊 教授

片　桐　主　一 教授

河　本　和　友 教授

高　坂　知　節 教授

小　林　俊　光 教授

耳鼻咽喉科学教室創立百周年を祝して

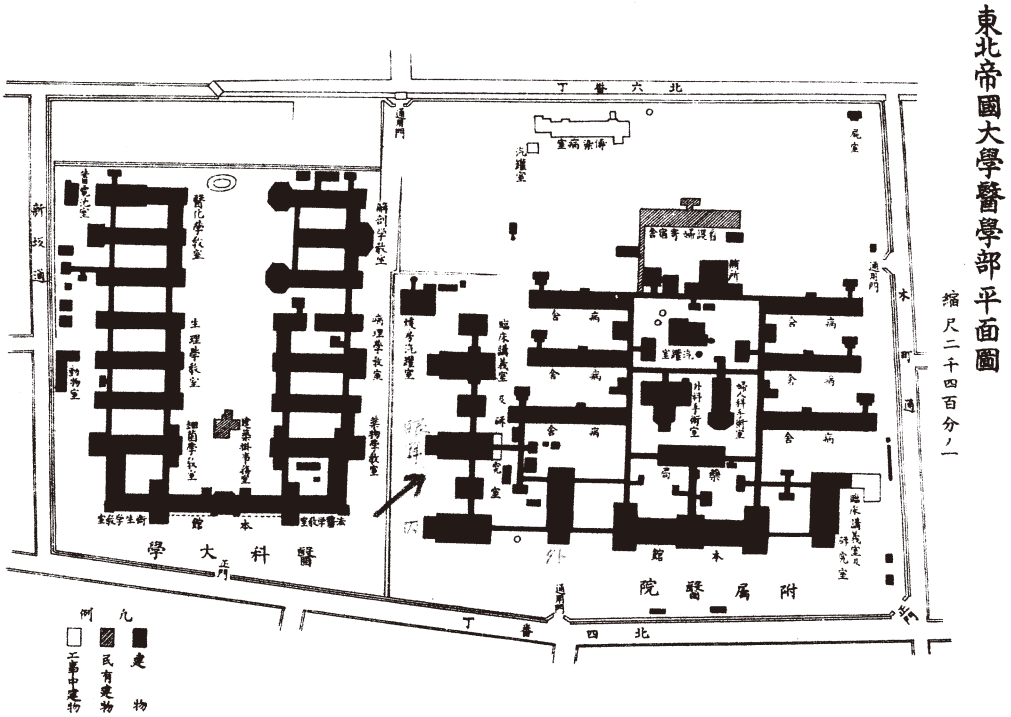
河　本　和　友

教室の創立は明治 44 年 7 月（1911 年）。爾来営営と時を重ね、ついに 100 年の大台に達し、一つの大きな節目を迎えて感ひとしお、心よりお祝い申しあげます。

この長い教室の歴史は、「東北大学 100 年史」「艮陵同窓会 120 年史」更には髙坂教授の「闘いの日々　安らぎのとき」と題する冊子の中に、詳細かつ確実に記述されており興味ある方はぜひ一読されんことを。

此の立派な古事記に比するような基幹と目される記述に、多少枝葉的事項を加味するのも一興かと考え、ここに記してみたいと思います。

初代教授の和田徳次郎先生は、明治 40 年東京帝国大学を卒業、44 年に仙台医学専門学校教授ならびに宮城病院耳鼻咽喉科科長として着任、助手 1 号として三好　桂先生（明治 40 年、仙台医専卒、福島の鉱山病院で外科医として活躍中を辞めての参加）、次に医専を 43 年に卒業した万城目　孝先生、44 年卒の杉若市太郎先生・山室重信先生を加えて 5 名にて発足。



東北帝國大學醫學部平面圖（大正 8 年）　　（艮陵より借用）

図 1

図 2　大正 15 年新装なった耳鼻科
向かって右が正面入り口と研究棟
向かって左が病室
中央の黒っぽい所が手術場と階段教室
三階は戦後増築

教室は東三番丁、元貞坂から木町通と北四番丁の角地に移転してきた、新装なった宮城病院の本館 2 階、いささか手狭な部長室・医局研究室・手術室・予診・診療・溜とあり向かい側は皮膚科であり、看護婦 2 名、25 床の病室は別棟といった状態。

所が大正 13 年 1 月、眼科耳鼻咽喉科共同研究棟が焼失、隣の内科が早々と類焼見舞いの新聞広告をだしたので火もと争いになり医局長が何回も警察に呼ばれ大変だった由。

大正 15 年、耳鼻科独自の病院唯一のコンクリートの研究棟が完成、重々しい両開きの扉の教授室・研究室 5・図書室・医局・動物実験室・外来・97 床の病室・立派な大小の手術室と階段式講義室・地下倉庫とがあり、病院の中央廊下に細い板張りの連絡路があるのみ、正に一国一城の独立した雰囲気にて大いに生活を堪能することができ、忘年会にはザールで医師・ナースの演劇大会があり、患者・家族も共に楽しんだもの、医局では大きなダルマストーブを囲んでの夜の駄弁り、多くの逸話もここから生まれ、実験での徹夜組の転寝用のソファーと、40 年間の長きに亘り大いに楽しませてもらいました。

しかし、戦後、病院の建物の中央化が進み、昭和 41 年に西混合病棟が完成、その 7 階に移転、ベッド数は 64 床今では 45 床ですかな。44 年には 12 階の新臨床研究棟が完成、6 月には同窓の方々に連絡して医局で盛大な分散会を行い、その 8 階に移転。

しかもこの懐かしい旧研究棟が取り壊しされることになり、58 年、1 メートルもある大きな鉄球がクレーン車に吊り下げられ、これを建物に打ちつけて壊す工事、土煙りに周囲からホースで水を散布、ああ医局が壊れる、次は図書室だ、研究室だと寂しきかぎり、そこに立派な図書館が完成、昔の耳鼻科研究棟の周辺の面影は全く雲散霧消となったのが 1984 年。

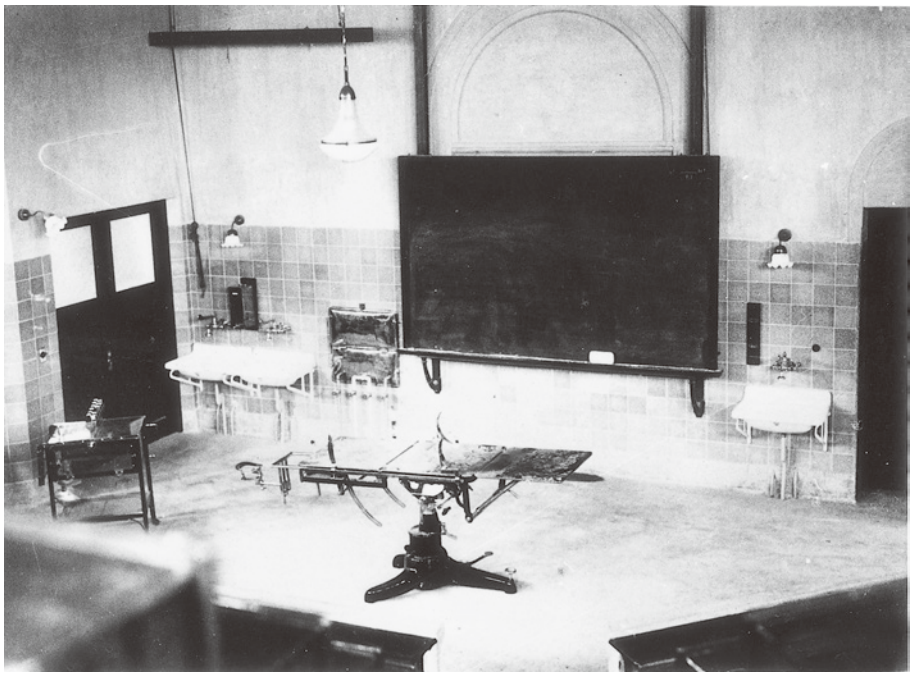


図 3　手術場手前は階段教室　大正 15 年
向かって右側の手洗いは教授専用。左側は教室員用
新人これを知らず用いてよくナースに注意された

図 4　手前より旧耳鼻科・小児科・内科教室
小生の頃はもっと大樹に成長していた
（艮陵より借用）

かくしてここに 100 年の歳月が流れ、7 代の教授がこれを分担し、その重責を全うすべく、その時代時代の独自の歴史作りに励み、総勢 473 名の医師が育てられ、東北はもとより全国に分散して地域医療に貢献、また誕生した教授も 25 名に達し、東北大ここにあり

図 5　片桐教授の最終講義後の宴会
　　懐かしい旧研究棟の正面入り口（昭和 47 年 2 月 27 日）

図 6　旧研究棟より中央廊下への出口
　　この長い廊下を歩きやっと病室へ

と、名声を高め得たものと思いますが、この素晴らしい活躍の詳細が、大昔の資料が焼失して全く無く、先輩の語り草が同窓会誌に僅か残されており、これらを集めてみました。

確かにこの100年といった歳月、大変長い時が流れたものと思います。当初の反射鏡と音叉のみの診療形態と現在の各机上にパソコンのある風景、まさに天地の差ありですが、小生にとっては、それほどの大昔とは思えず、和田臨床の助手1号である三好　桂先生には、しばしばお会いし、時には御宅まで参上し、昔話を拝聴したり、また相談にのって戴いたもので、また八戸の杉若先生は晩年喉頭癌で入院全摘を受けられ、小生もお手伝いしました。

毎夕教授の治療後、鼻腔栄養で漏斗に重湯です、次は味噌汁ですと看護婦が話しかけながら流し込む、最後にワインをグラス1杯、教授自ら、先生入れますよと、お互いにっこり、なるほどこれも医療の一端なのかなと感心させられました。

1等室は広々とした室、片隅に畳張りの高台あり、家族が常に付き添い、茶飲みや来客用、冬は炬燵、医師もこれに入り話し合いをすることあり、入院無き時は飲みつぶれた医師の常宿に利用されました。

昔は、国取り物語とまではいかないが、各大学の縄張り意識がかなり強く、何処の病院はどこ系、何処にとられた、いや取ったなどと医局雀には格好な話題、山形県には新潟出身が多く、京大は福島、岩手、九大は青森県病をはじめ同県内、小坂鉱山病院にはかなり遅くまで派遣、東北大は6県をはじめ、北海道にまで進出し、佐藤善弘先生には、山形、気仙高田、一関、弘前、帯広、室蘭と3年半を駆け巡り、末の住処は室蘭になった由、最南は吉田昌八先生の横浜鶴見の総持寺病院二外科の岡田院長以下全科東北大で関東進出第1号なりと喜んだ由。

片桐先生のクラスは一挙に18名の入局、すべて副手という地位で無給、半年後から地方病院に赴任、先生は登米病院、かなりの高給で大いに喜んだが毎土曜日帰仙するとクラスの悪道連が駅頭に待機しており、そのまま最高の料亭宮古川に直通悪銭身につかずとはこのことかなと痛感した由。

この無給副手で生活に困る人には教授が1人15円のポケットマネーをだされたとか。

小生も帯広厚生病院にトランク、出発は夜行列車、まだ寝台列車は無く、車中2泊3日の長旅でやっと2月厳寒の帯広駅到着。

「困った時は電話しなさい。すぐ駆けつけるから」との助教授の言はいささか無理なことでした。市内の大きな内科個人病院には三内から5名派遣され多忙でした。

この悲喜交々なる病院赴任劇も40年代からの学園紛争で入局者ゼロとなり、赴任者は無くなり、地域医療は崩壊に近く、耳鼻科でも勤務医は、県内、県外合わせても五指に足りず、学部長より、内科吉永・外科佐藤先生に小生の3人で、病院長の苦しい立場に対応せよとのことでしたが、教授の権限無きに等しく、ただ顔見合わせて嘆くのみでした。

この非常事態が次第に収まり、ほぼ昔の体制にもどったのは髙坂教授の時代になってやっとであり、さぞかし大変な御苦労をなされたものと思います。しかもかなりしっかりした研修カリキュラムの下、レベルの高い臨床研修が開始されたことは若い方への大きな福音かと感嘆しております。

次に地方会の変遷について記しますと、仙台に東北地方会が誕生したのが大正 15 年 2 月、発会式に参列したものは 45 名、和田教授の恩師、日耳鼻会頭岡田先生がご来仙され盛大に取り行われ、会報 1 号はかなり立派であったが、教授の病気で活発さを欠きました。

昭和 23 年に岩手地方会が決定され、その範囲をどのように決めるか各地区で問題となり、日耳鼻本部でも行政上これを明確にする必要があり、26 年の総会で長い論争の末その区域化を決定、岩手地方会には青森・岩手・秋田の 3 県が所属、東北地方会には宮城・福島、山形は新潟地方会に所属することに決定。立木教授はいたく御不満のようでした。

同窓の山形の多田先生嘆いて曰く、「それ見たことか、昔から仙台は山形を大事に取り扱わず、その関係はぼんのくぼ的なりとよく言われてきた、大変近い所にありながら項の中央のへこみは見ることかなわず」と嘆かれ、多くの方が、母校の地方会の準会員となってまで仙台に出席するという型をとり、これを見かねて片桐教授が昭和 26 年、東北・岩手合同地方会なるものを立ち上げ東北連合学会として夏に開き、両地方会の回数をプログラムに明記することとした。

大学の無い山形には仙台から応援に行くこととし、小生も前日から参上、会場の設営をお手伝いしたものです。

このような状態で経過したが、やはり己の母校の会に出席したがり、日耳鼻本部も行政上運営がスムースにいかず、50 年やっと各県単位とし、地方部会なる名称で発足、日耳鼻学会の通達事項なども県単位となり流れやすくなりました。

ただ難を申せば、1 県 1 校の会では学会が沈滞ぎみで、出題も大学の中からのみになり易く、どの地方部会もその対応を苦慮、独自の会を開くにしかず、普通の学会と異なり、夕方から参集し、1 つのテーマにしっかり時間をかけ討論、結論出なければ宿題として次回まで続けるといった会、なかなか盛り上がり、人呼んで、夜の勉強会と喜び多数参加、後日専門医制度に学会のグレードを決め点数化する必要あり、その理事会中、夜の勉強会とはいささか表現不都合なりと理事長から苦言あり、臨床懇話会なる名称にした。

大学の責務は研究、教育、診療の三本柱。しかもこれらが同じペースで伸びるのが望ましいとされるが、なかなか至難、皆悩みながらの試行錯誤を続けるを常とする。

東北大の伝統は研究第一義とされ、自他共にそれを賛美する傾向大。

教室の活躍内容は日耳鼻学会より指名される宿題報告と退官時の最終講義に集約して話されると言われます。

和田教授の日耳鼻学会での宿題報告は「扁桃肥大の治療法」(1917)。最終講義は行われず。

その研究は

1. 乳様突起炎の手術の後療法
   a. 開放療法 — 砂糖療法
      氷砂糖を砕いて創腔に入れる、古くから砂糖は創傷や潰瘍に用いられ、殺菌、フィブリン溶解、分泌亢進作用ありと。
   b. 有茎弁による創腔充填、骨膜筋肉片

c. ブシノール療法

2. 中耳根治手術後の植皮術、実験的研究
3. 聴力保存根治手術
4. 乳様突起炎の診断法、膿汁の Ca 定量
5. 中耳真珠腫の化学的診断法
6. 脳波聴検（大変期待されたが病で中止）
7. 脳下垂体腫瘍の経鼻法による摘出、大正 3 年日本で初めて蝶形骨洞より
8. 止血剤

血液凝固促進剤としてリコナイン開発、三共製薬に発売させ研究費の一助。

などと大変な活躍をなされましたが、さすが 28 年という長い歳月、うべなるかなです。

立木教授は在職 22 年、仙台に着任された次の昭和 16 年に宿題報告を熊本で、「ムコーズス菌中耳炎」と題して報告。その内容は片桐教授が同窓会誌に記しておりますが、研究内容は殆ど長崎大にてなされたもので、M 菌の生物学的特異性と臨床症状と診断法の確立に膨大な研究を行い、仙台ではその細菌免疫学的手法で新しい診断方法を開発せんとした。

教授は新しいものへの挑戦を特に好まれ、「何か新しいものないかね」は口癖のようでした。

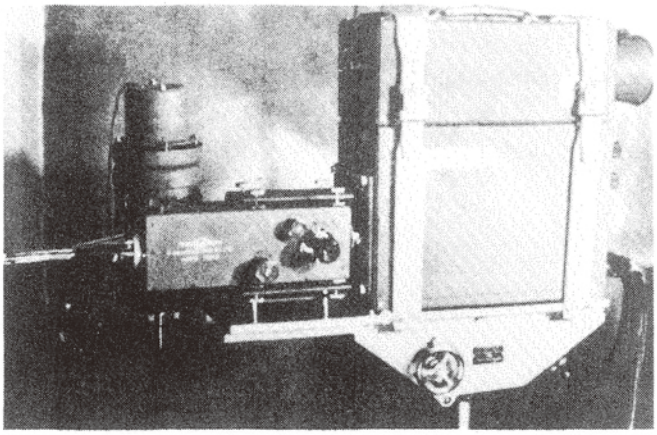
1. 内耳の微細構造と機能について（1947）電顕、電気生理、組織化学の 3 グループが共同研究を進め、この大問題に挑戦し延々として高坂教授時代にまで続き大いに発展中。
2. 自記オージオメータの試作（1954）
3. Teleendoscope の試作（1954）
   本邦で初めて声帯運動をテレビで観察
4. 遠心回転装置による G の研究
5. 等角加速度装置の試作（1955）
6. Hypertonia labyrinthi の概念（1957）
   メニエール病は内リンパ水腫とされているが内リンパ圧亢進と考えるべきだ
7. Multiplane Fluoroscopy の試作（1957）
   発見しにくい金属異物をこのレントゲン装置の監視下に摘出、放射線科と共同で製作
8. 高速度映画による声帯運動の観察（1958）500-4,000 駒で撮影。

教室の研究活動は戦時中は厳しい世相のため殆ど無に等しく、戦後直ちにメニエール病の病因解明に挑戦、文部省科研費を請求、昭和 22 年から開始、17 人がこれに駆り出され、小生もその一人、あらゆる手法が導入され、一般病理、組織化学、位相差、電気生理分野と細分し、お互いに論議を積み重ね、10 年後、昭和 32 年の札幌の総会で、先生が本症の病態は内リンパ水腫でなく内リンパ圧亢進なりとの発表。めまい発作を起こす病態は、この論理の方が説明し易いとのこと。

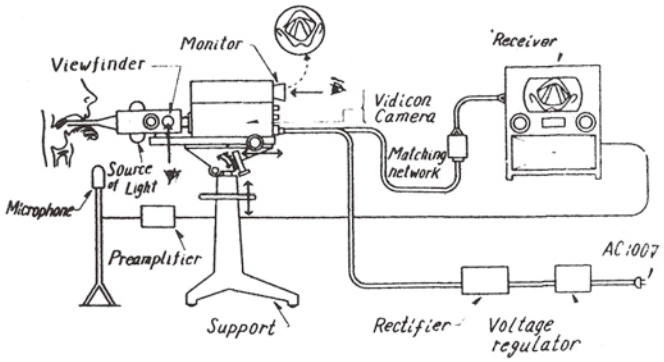
この各分野の一致協力しての活動には他大学の羨望の的となっていました。

次に片桐教授は弘前大学では鼻副鼻腔腫瘍をテーマにされており、東北大に移った昭和37年の教授就任講演では、これを話されたが仙台に戻られてからはこの伝統ある内耳病理をさらに発展させることに力を注がれました。

1. 上顎癌の治療
   当時上顎癌の班研究が組織され、全国から12校が参加、熱海に集合、癌の分類案作りから、診断、治療のガイドライン作りに活動、なかなか論議まとまらず、片桐案では従来のは悪性度面AとPとm-内側、1-外側を加味した案にT_0期はおかしいゼロは何も無いことを示すもので、これでは混乱をきたし易いと猛反対され片桐案は消滅でしたが、先生は一側性副鼻腔炎の中から検診で本症を見つけたく考えられたか。治療は慶応大の全摘に眼摘を加えた案、東北大のサンドイッチ療法（術前術後照射に全摘)、東大の三者併用療法（照射、化学療法、局所清掃、全摘なし）で激論、物別れとなりました。
2. 聴器毒の基礎と臨床
   立木教授時代の内耳病理グループがそのまま活用、カナマイ、ストマイなどの病態を追求、組織化学的手法で見事な有毛細胞崩壊像は見事でした。
3. Ventilation bronchoscopeの試作
   永島医療器と共同で作成、気道異物摘出には大変便利なものでした。
4. 全麻用開口器の試作（東北大型）
   かなり有効な器具でしたが商業ペースに乗らず、外国製に先を越されました。



Outside view of tele-endoscope.



Lay-out of Tele-endoscope.

図7

宿題報告もこの聴器毒の仕事を用いるものと思っていましたら、先生の方針では宿題は教室員全てがこれに参画できるテーマにするのが理想であるとして、耳鼻咽喉科領域のX線学的研究として、全ての領域における新たな診断技術の模索に挑戦、1年半の短期決戦でした。多くの新たな診断方法を開発、大変な反響を得ましたが、残念ながら現在流行の立派なモノグラフを作成する余裕なしでした。

テレビを用い毎秒100コマの映画で嚥下運動三相を解析、被験者の山崎先生の喉頭蓋の動きに皆大喚声を上げたものです。

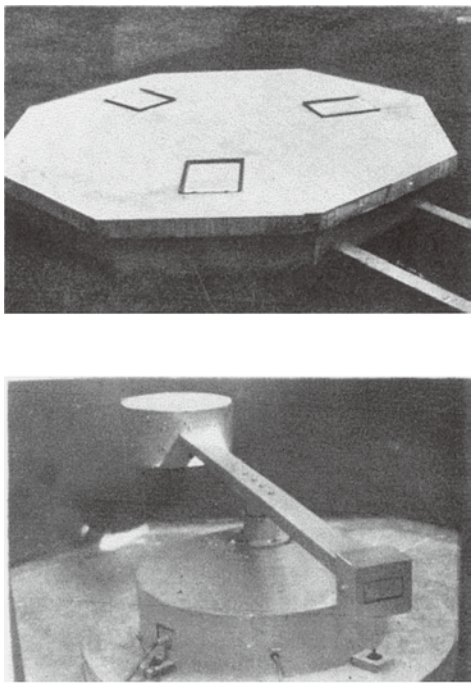


図8　遠心加速度装置
直径4メートルコンクリート製
地下ドーム20Gまで出せる
円形の箱の中に動物を入れる

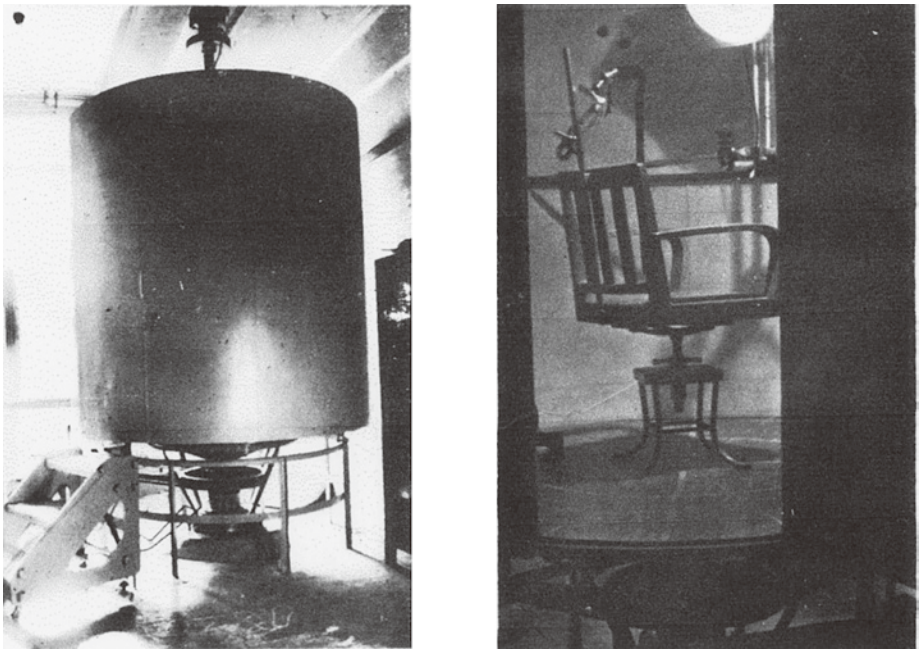


図9　等加速度回転室　全体像と内部
テレビにより眼振を観察したり録画したりする

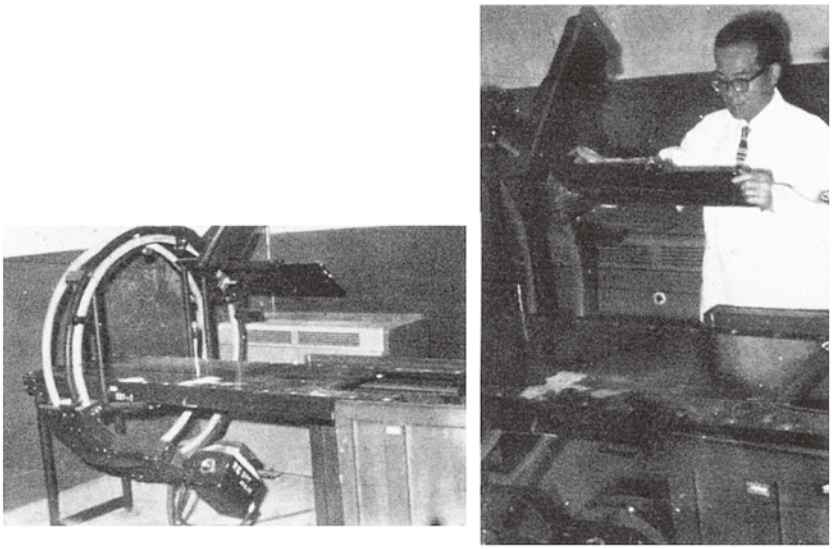


図 10　MULTIPLANE FLUOROSCOPY
下に X 線管球、上に蛍光板あり体の全周を回転し如何なる方向からも透視可能でマチ針摘出に活用

Öhngren の悪性度面 A（anterior）と P（posterior）が基本となる。

T_0：上顎洞内に限局し骨破壊のないもの

T_1：Am または Al に主たる腫瘍の進展がみられるもの＋Amu

T_2：T_1 に P（しかし蝶形骨洞、翼状突起、骨膜を破り眼窩内に侵入したものを除く）が加わったもの又は Aml

T_3：蝶形骨洞、翼状突起、又は骨膜を破り眼窩内に侵入したもののいずれか一つを含むすべての症例

T_4：特殊型（頭蓋底、上咽頭、反対側、のいずれかに浸潤しているもの）

図 11　上顎癌の分類案（片桐）

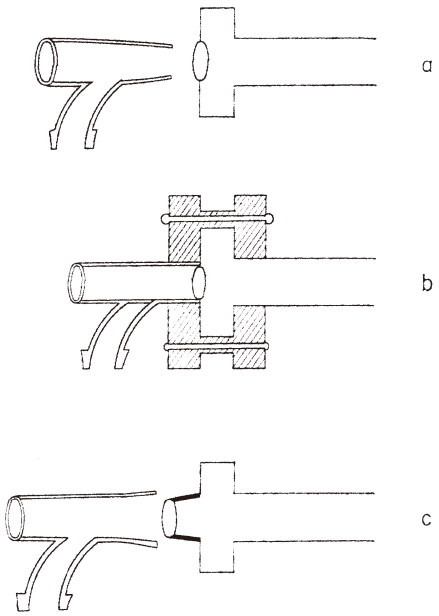


図 12　Ventilation Bronchoscope
a, b よりも呼吸抵抗の小さい c 型にした

図 13　片桐教授就任記念講演　昭和 37 年 6 月
『鼻副鼻腔悪性腫瘍の臨床』に出席終了後医局で宴会
自宅にお送り玄関にて「これですっかり交代劇終了だね　記念に撮るか」と
（右：立木　豊先生）

次に小生の場合。

教授就任の秋に宿題報告の指名あり、通常は教授になり 5 年目ぐらいで教室も軌道に乗った頃、依頼があるのが普通なのにはたと困惑、しかもこの春の総会で親友の京都府大、水越教授が「内耳有毛細胞の病態」と題する宿題報告を発表したばかりで、その内容も東北大と重複する所多く、寧ろ数年前から取り組んだ滲出性中耳炎の本邦における急増傾向の警鐘を鳴らすのが急務と考え、野坂会長に連絡、「教室員に聞いたらあまり聞いたことなき疾患との返事、君には東北大の伝統である内耳病理を発表してほしかった」と嘆かれ「欧米では大問題となっており本邦にも広がるはず」と断言しながら内心はらはら。所が次の年から総会にて 25 題前後の出題となり、シンポやパネルで 5 回も取り上げられるテーマとなり、本症を宿題とした決断を自画自賛したものであり行政と協調してチンパノメトリーを学童検診に導入し「宮城方式」と言われたのに感激したものです（金子・沖津先生担当）。

しかし伝統的に続けられた内耳病理を報告できなかったことを立木教授に謝りました。

髙坂教授は入局後電顕グループに入り、留学では世界的に有名なスミス教授に師事、3 年間の研究活動、共著で鳩の内耳感覚細胞の微細構造から神経支配の様式についての膨大な論文を発表された。

帰国後 100 万ボルト電顕を初めて生物資料に用い電顕レベルでの連続切片観察に成功。

コンピューターにより神経終末の 3 次元構築はまさに圧巻、日耳鼻学会の特別講演（最近のトピックス）として名古屋での総会で報告。後で三宅会長と手を取り合い祝福しました（1980 年）。

宿題報告が 1991 年「蝸牛の微細構造と音受容機構」と題するものにて、これでやっと

立木教授の積年の夢であった内耳の構造と機能のドッキングが半世紀後のこの日に実現したわけで、先生のお喜び如何ばかりかと感ひとしおです。

更に聴覚の加齢性変化の責任部位として、従来は後迷路性変化が注目されていたが、蝸牛内の変化も無視できないとして、電気通信研究所の、曽根教授、鈴木助教授との共同研究にて、新しい世代のデジタル補聴器の開発に成功、CLAIDA と名付け販売、全国よりこれを求めての来仙者あり、難聴者にとっては大きい福音となりました。

また教室で初めて鼻アレルギー班を立ち上げ、特殊外来もなかなか忙しく、スタッフは大変だったと思います。東北六県の関心が小さく、西高東低では困ると東北連合学会の半日をこの疾患にあて研究会を設営し、また北日本頭頸部癌治療研究会を発足させ、仙台と札幌で交代に開催テーマを決めて集中論議し、そのレベルアップにつとめ、更には基礎耳科学の国際シンポジウムを主催、アジア各地より出題するかなりハイレベルな学会、これも注目され、かなり活発な論議を楽しんだ由。

この様な数々の活躍を見ると、どうも眼前の小事に悩むわれらと大差あり。

先生の目は遥か彼方を眺めており、クラーク博士の「大志を抱け」ですかな。

退官時の最終講義では、この素晴らしい御活躍を綜合した「聴覚医学の新たな展開」との内容で、後に続く若い学生等には強力なインパクトになったものと思います。

小林教授の宿題報告は「耳管閉鎖障害の臨床」2005 年大阪で報告、大変難解なテーマ。

小生の滲出性中耳炎では、一人で探しても数日で数 100 件の文献は見つかり、しかもその殆どが国外誌、日本は世界の動向に遅れること 10 年、先生のテーマの文献は極めて少なく前車の轍無き大草原を進まざるを得ず、大変ご苦労されたものと思いますが、本症の病態の確立から、診断、治療方法の開発まで多くの新事実を発見、本邦でははじめてかと思いますが、耳管内ピン挿入を初め、局所療法が、患者への大きな福音になるものにて、是非追試を行いたいと思いおります。

退官時の最終講義では「耳管開放症と側頭骨外科　私のライフワークの見つけ方」と題するもので、他科の方にも分かり易く、特に学生の方のいたく感動しながら拝聴する姿に感動させられました。

特に側頭骨外科なる表現は斬新にして病変が耳周囲はもとより頭蓋底をはじめ複雑な側頭部に広がる特殊領域でありその対応にはスペシャリストが求められるものとの事うべなるかなと思います。大きなテーマですね。

最後になりますが、最近の若い方々の活躍はすばらしきかぎりにて、特に海外進出熱の高揚、外国雑誌への投稿、国外学会への参加など全く日常茶飯事、ARO の学会に 12 題を出題して、国内はもとより国外からも剋目されるエネルギー、この現象髙坂教授になってからの風潮にて、年寄りには驚嘆の的、パリーの国際学会（1961 年）には、立木・片桐・三好先生にて出発、羽田にまで多数お見送りに行ったもの、小生のメキシコ（1669 年）では、200 名弱のツアー、胸にリボンをつけられての旅でした。

小林教授の時には、年間 49 編もの英論文投稿にびっくり、これひとえに長年に亘り築き上げられたリサーチが基盤にしっかり存在するためかと思います。

教室の最初の英論文は和田教授が留学先アメリカフィラデルフィアーのウィスター研究

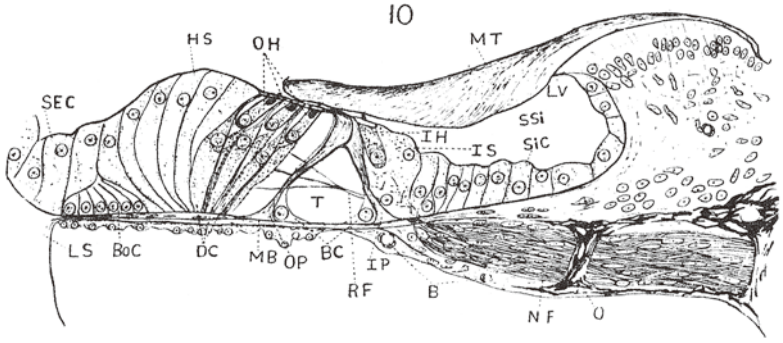


図 14　和田教授の論文中のコルチ器
正確に計測された膨大なスケッチ図　大正 10 年

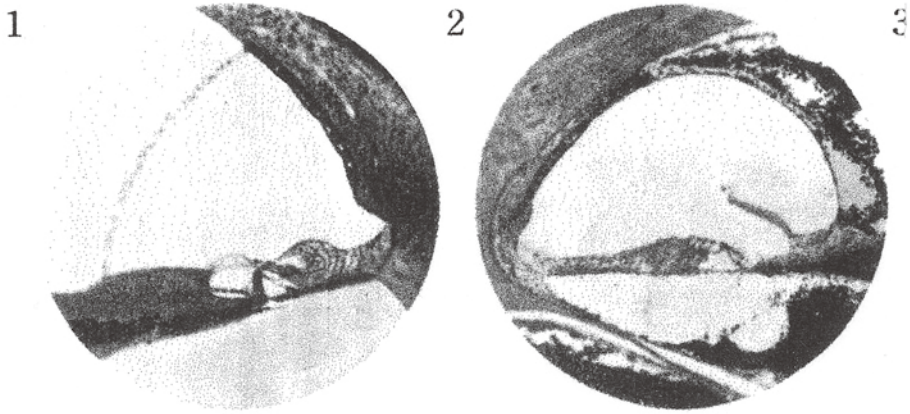


図 15　内耳のシュワルツマン反応
1　弱い反応　ライスネル膜の軽度上昇のみ
2　強い反応　ライスネル膜の上昇と外リンパ腔内出血様所見

所で、大正 7 年から 10 年にかけて行った研究、白ネズミをもちいてラセン神経節細胞の発育過程を追求しその形態学的変化と機能など 174 頁におよぶ大作。

1. Anatomical and physiological studies on the growth of the inner ear of the albino rat. Wada, 1923
2. Experimental studies on the Schwarzman phenomenon of the ear labyrinth.　Kamioka, 1952
3. Studies on the earlabyrinth and its responsiveness to various sorts of medicaments under phase contrast microscope.　Watanabe, 1955
4. Experiments on labyrinthine surgery.　Tuiki, 1951
5. Methods of laryngeal examination.　Tuiki, 1957

立木教授時代は 4 編。

神岡先生の内耳に於けるシュアルツマン反応の所見が、メニエールの報告した少女の剖検像に見られた内リンパ水腫を思わせるライスネル膜挙上と外リンパ膜内への出血様所見が同じ所見なりと大変喜ばれ直ちに英文にしたまえとのことでした。

次いで渡辺勤先生の位相差顕微鏡による耳迷路と薬物に対する反応と教授自身のポルトマン手術と喉頭検査法、全て東北ジャーナルへの投稿でした。

ある教授から「東北大の活躍には感嘆羨ましきかぎり、通常は博士号をボイコット、専門医資格獲得に専念、リサーチをやらんとする人少なく、教室内のスタッフにも事欠き、何か名案ありませんか?」と聞かれたことあり、原因奈辺にありか分かりかねました。

昔、髙坂教授が教室運営にあたり新人に、臨床専門医コース、臨床と研究コース、大学院コースの3つの選択肢のあることを、入局のオリエンテーション時に示したが、小生は希望者皆無と思い、先生もそれを危倶されていましたが、どうしてどうして最初から大学院コース希望者あり、しかも終了後留学まで希望するのにはびっくり、この現象をどのように受け止めるべきか迷いおり、いつの日か教えて戴きたく思いおります。

どうもはきとしないが、東北大は研究第一主義なりとの風潮が根付きおるのか?

昔、動物実験室で動物と頑張ったがうまく進まず、がっくりして医局へ、ダルマストーブを囲んでの駄弁りやぼやきは聞いてもらうと少しは癒されるのか、又少し頑張るかと立ち上がる奴と、アルコールの方に流れる人。

実験終わって医局のソファーにてごろ寝、翌日小使いの小母さんに、親父来るよとたたき起こされるのがその日の始まり､別に何の違和感など全くなく外来へ直通といった日々。なぜなのかな? 強いて言うなればこれ教室の雰囲気なのか、伝統のなせる技と言えば大げさすぎるかも、年とって夢に出てくる風景もこの時の頃が一番多く懐かしきもの。

かかる素晴らしい教室の100周年という記念すべき時、奇しくも7代目教授として香取先生を迎えることとなり、この貴重な素晴らしい基盤の上に更なる発展をしっかり築き上げて戴きたいものと念じおり、その力強い羽ばたき音が聞こえる様にて、御健闘を切に祈りおります。

教室の歴史

東北大学耳鼻咽喉科学教室の歴史とその時代背景

東北大学が 100 周年記念事業の一環として「東北大学百年史」を発刊し、百年史編集委員会の献身的な努力によって、2010 年春に全 11 巻の刊行が完成した。この歴史書は「通史、1 巻～ 3 巻」、「部局史、4 巻～ 7 巻」、「資料、8 巻～ 11 巻」などから構成され、第 5 巻の第 2 編に医学研究科・医学部・医学部附属病院の歴史が収められている（図 1）。耳鼻咽喉科学教室史は第 5 巻の 715 ～ 721 ページ、大学院医学研究科感覚器病態学講座の耳鼻咽喉科学分野は 818 ～ 819 ページに収載されているので興味のある方はご一読いただきたい（医学分館三階開架書棚）。

新刊された「東北大学百年史」によると、耳鼻咽喉科学教室は 1911 年（明治 44 年）に仙台医学専門学校（後に東北帝国大学専門部・1912 年、東北帝国大学医科大学・1915 年、東北帝国大学医学部・1919 年となる）に創設されて、東京帝国大学耳鼻咽喉科学教室出身の和田徳次郎教授が初代教授として任命されている。その後、1940 年に九州帝国大学出身の立木　豊教授、1962 年に東北帝国大学出身の片桐主一教授、1972 年に同じく東北大学出身の河本和友教授、1985 年に同髙坂知節教授、2001 年に同小林俊光教授、2013 年に同香取幸夫教授へと受け継がれて、2015 年（平成 27 年）には創立 104 周年を迎えようとしている。

この 104 年に亘る教室の永い歴史とともにあった国内外の社会情勢を振り返ってみると、日清、日露戦争に勝利して、いやが上にも国威が発揚していた開講当時の頃から、次第に軍部が台頭して太平洋戦争へと突入したが、アメリカの圧倒的な資源力と軍事力によって 4 年の歳月を経て、1945 年（昭和 20 年）には無条件降伏という結末を迎えた。歴史上全く経験していない敗戦という苦難の時代を経て、日本経済がようやく立ち直りを見せ始め、やがて活況を呈してアメリカの企業や土地建物を盛んに買収してはエコノミックアニマルと揶揄されるような経済的な躍進の時代に入っていった。しかし、このようなバブル経済が長続きするはずはなく、バブルの崩壊とともに日本経済の低迷はその後 20 年間も続くことになる。

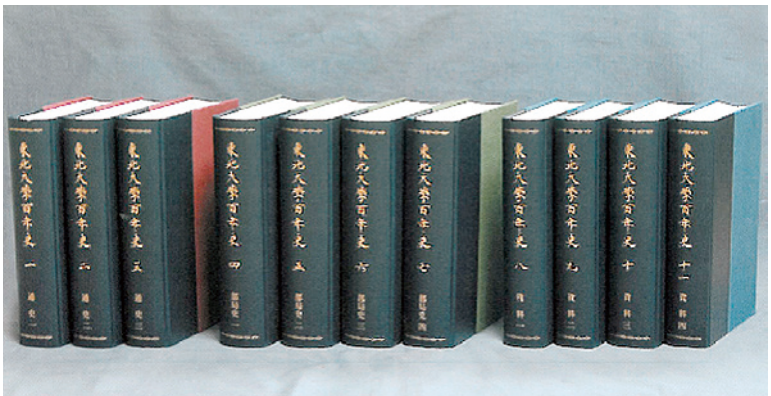


図 1　東北大学百年史　全 11 巻

2001 年 9 月 11 日には、ニューヨークの世界貿易センタービルに旅客機が突っ込み多くの人々が犠牲になるという、いわゆる 9・11 事件が発生した。これが契機となって、アフガニスタン侵攻、イラク戦争へと突入していったのは周知の事実である。

更に、2007 年のサブプライムローン問題に端を発した米国住宅バブル崩壊が世界的な金融機関であるリーマン・ブラザーズにも多大な損失を与え、当行が発行している社債や投信を保有している企業への影響や、取引先への波及などの恐れから、アメリカ経済に対する先行き不安が広がり、世界的な金融危機へと発展していった。日経平均株価も大暴落を起こし 6 千円台にまで下落した。この経済危機はいわゆるリーマンショックといわれ、現在持ち直しつつある日本経済ではあるものの、かつては深刻な影響を与えていた。

このような激動の時代を経てきたにも拘わらず、教室内はその影響を受けつつも基礎的臨床的研究の中枢機関として脈々と運営されて今日に至っている。創立以来、本教室で学んだ門弟の数は 479 名（2014 年現在）に達し、これまでに同窓生が教授として主宰したいわゆる姉妹教室は、弘前大学（片桐主一、粟田口省吾、朴澤二郎、新川秀一）、岩手医科大学（立木　孝、志賀清人）、山形大学（欠畑誠治）、東北大学大学院聴覚再建医工学分野（川瀬哲明）、東北大学加齢医学研究所（本橋ほづみ）、東北文化学園大学（沖津卓二、松谷幸子、高卓　輝）、福島県立医科大学（白幡克二、大内　仁）、信州大学（鈴木篤郎）、筑波大学（草刈　潤、原　晃）、順天堂大学（池田勝久）、東京女子医科大学東医療センター（須納瀬弘）、帝京大学（飯野ゆき子）、帝京大学ちば総合医療センター（鈴木雅明）、日本大学（大島猛史）、自治医科大学さいたま医療センター（飯野ゆき子、吉田尚弘）、奈良県立医科大学（矢野寿一）、産業医科大学（鈴木秀明）、長崎大学（小林俊光）など、18 の大学・大学院・研究所・医療センターとなっている。

このような流れは、今後も粛々と受け継がれていくであろうし、やがては更に充実した近代医学の研究教育機関として大いに発展していくことであろう。

〔高坂知節著「闘いの日々、安らぎのとき ― ある医学徒の回想 ―」（図 2）より引用・加筆〕

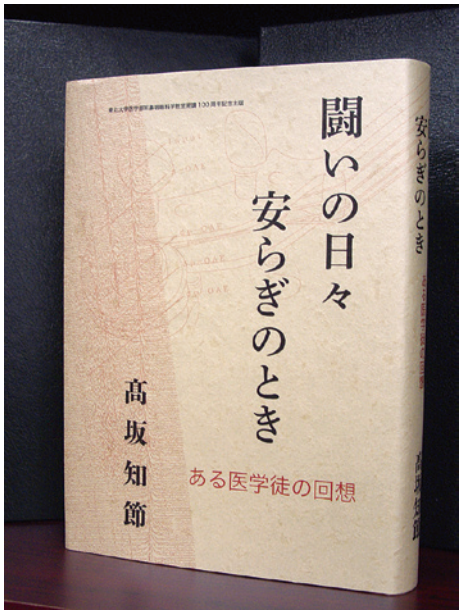


図 2

和田徳次郎教授の時代（1911 年～1939 年）

和田（旧姓亀井）徳次郎教授は、1879 年（明治 12 年）に和歌山県有田郡生石村丹生にて亀井家の次男として出生した。生家は、みかんを中心とした生産農家であったが、学業に秀でていたため、和歌山中学、第六高等学校を経て、東京帝国大学医学部へ進学した。なお、1906 年頃に和歌山市の和田カネと結婚して和田徳次郎と改姓し、その後三女をもうけている。

1907 年に東京帝国大学医学部を卒業した和田徳次郎先生は、岡田和一郎教授の下で耳鼻咽喉科学の臨床を学ぶと間もなく、1911 年 5 月に仙台医学専門学校の教授並びに宮城病院耳鼻咽喉科科長の発令を受けて仙台へ向かい、同年 7 月には耳鼻咽喉科学の初代教授として講座を開くとともに、同年 9 月 11 日には最初の講義を行っている。当時の授業は毎日午前 7 時に始まり正午で終わり、午後は大抵が実習時間であった（図 1）。授業料は年額 30 円、政府が出した金は月に 17 円であったという。耳鼻咽喉科学教室の規模は、教授 1，助手 1（三好　桂）、看護婦 2（見習い 1）、病床数 215 床であった。研究室は科長室 3 坪、医局兼研究室 4 坪といった手狭なものであり、診療には口保式反射鏡に自然光線を受けて行われた。1907 年に仙台ガス会社が設立されたため、耳鼻咽喉科は率先してアウエル氏ガス灼熱灯を用いた。1924 年には、何らかの原因で最初の建物が焼失し、代わって総 2 階建て鉄筋コンクリートの立派な新棟が落成した（1926）。この建物は、現在の図書館医学分館と駐車場のところに位置し、外来棟、病棟（97 床）、当直室、手術室兼講義室（ザール）、直達鏡室、処置室、教授室、助教授室、研究室、図書室、医局、暗室、風呂場、小使い室などからなっていた。1970 年に現在の医学部 3 号館が竣工して移転するまでの約半世紀にわたり、東北における耳鼻咽喉科学の殿堂として君臨し続け、ここから多くの俊英を輩出した（図 2）。

和田徳次郎教授は体躯堂々として長身であったため集合写真では何時も頭ひとつ飛び出しているのが常であった（図 3）。1929 年に入局した伊吹皎三先生のクラスは気が荒く、

図 1　学生実習における和田徳次郎教授（左端）

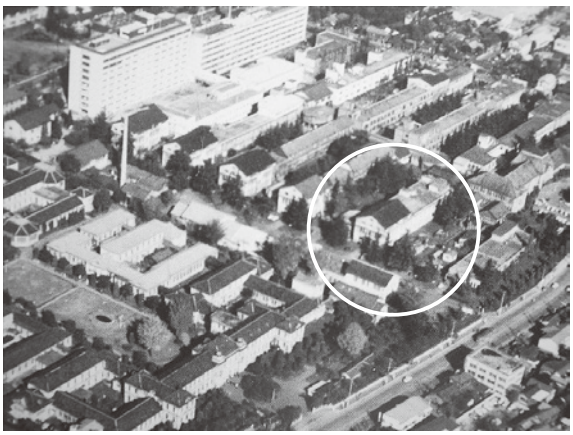


図 2　1967 年当時の医学部キャンパス。左下が基礎研究棟、左上が新装なった病棟。右の白枠内は耳鼻咽喉科教室を示す。

図3　長身の和田教授（後列右から3人目）。

たびたび医局で口論して取っ組み合いの喧嘩になることがあり、ついに和田教授に見つかって「止め給え」と一喝されたことがあった。その時には、皆が蜘蛛の子を散らすように逃げ出したが、先輩に諭されて堤通の教授宅に新入医局全員で謝りに参上したところ「医局に入ったときは乱暴なものだよ。僕らと一緒に東大の耳鼻科に入局した某らは、一度だって手でドアを開けたことが無く、足で蹴って開けていたよ」という先生の話で一堂やれやれホッとしたという逸話が残されている。また、1935年入局の片桐主一先生は、大学4年生の時に耳鼻咽喉科への入局を決めた同級生3人が揃って教授室に和田先生を訪ねたときの模様を一生の想い出として綴っている。それによると、“和田先生は上機嫌で「こんなにも早く3人も揃って入局を申し出た例はない」と大喜びされるいっぽう、耳鼻科医が臨床家としてやり甲斐のある有望な科であることを盛んに強調された”という。また、“いろいろと話しを伺って退室する間際には「君、病院は若い男女が一緒に働くところだから早く身を固めなさい」さらに「家庭は朝飯を食べ、夜寝るところだよ。このことをよく弁えて勉強しなさい」と釘を打たれた”と回想している。和田先生の温厚な人柄が偲ばれる実に微笑ましいエピソードの数々である。

和田教授は、1917年の第21回大日本耳鼻咽喉科会総会において、「扁桃肥大の治療法」というテーマで宿題報告を担当し、その翌年にはアメリカ合衆国フィラデルフィアのウィスター研究所に留学して、ドナルドソン教授の下で内耳の研究に専念することになった。その成果は、英文論文 “The Anatomical and Physiological Studies on the Growth of the Inner Ear of the Albino Rat.　*The American Anatomical Memoirs*, Vol. 10, 1923” として結実している。この研究では、白色ラットコルチ器の発達過程でダイテルス細胞やヘンゼン細胞の発育が進むことによって、コルチ器表面の傾斜が著しくなって蓋膜と外有毛細胞の接着が生じ、その時点で初めて聴覚が出現することを見出している。

1926年には、和田教授以下、大原八郎、三好　桂、山室重信、猪股昌輔、木村謙次など諸氏の発起により東北地方会が発足した。同年2月21日には、大日本耳鼻咽喉科会会頭岡田和一郎東京帝国大学教授の臨席を得て、発会式が臨床講義室（ザール）に於いて盛大に催された。

1931年には、第35回大日本耳鼻咽喉科会総会会長として、東北の地で初めてとなる耳鼻咽喉科の全国学会を主宰した。当時の演題数は標本示説9題を含めて101題あり、耳性髄膜炎やパンジネクトミーなどがトピックスとして取り上げられている。開会に当たり和田徳次郎会長は、演題採択の苦労を述べ、応募演題92題を2/3にあたる60演題に絞ったこと、類似演題をまとめて主題と追討と分けて棄てるに忍びない演題の救済を行ったことなどを述べている。当時の会員数が1,388名と現在の14%程度であったことを考えると、

総会発表にかける会員の熱意が伝わってくる。学会の会期は 4 月 8、9 日の 2 日間であり、東北帝国大学医学部最大の半円形階段式解剖学講堂において開催された。この講堂は、筆者が医学部 1 年次に解剖学の講義を受けた場所であり、高い天井、広い黒板、標本を陳列するためにゆったりとしたスペースをとったフロアなど、アカデミックな雰囲気に満ちていた。全国学会の会場として遜色のない立派な講堂である。

初日の夜には、当時仙台随一と謡われた料亭「宮古川」において恒例の大懇親会が開催されている。参加者百数十名と記載され、大広間に所狭しと座っての大宴会であった様子が残されている。また、2 日目の午後には、東北帝大が誇る金属材料研究所と電気通信研究所の見学会が催されたことも鈴木甚二郎先生が記述している。また、総会の想い出として特筆すべき事として、多田慎吾先生が快晴に恵まれて開催された松島招待会の模様を詳しく記されている。それによると、恩師岡田和一郎教授を気遣われての仙台駅頭からの出発、塩竈神社参拝、塩竈埠頭から 6 隻の発動機船に分乗、仙台、塩竈のジンゲルを総揚げして湾内の簀立てに向かい、捕れた魚を直ちに料理しての珍味に船内が大賑わいであったという。その後に、奥松島の大鷹森に登り松島湾の絶景を楽しみ、午後 5 時には松島海岸に上陸し、やがて 2 日連続の大宴会が松島ホテル楼上大広間で行われたという。最後に、闇夜をついて大きな花火が打ち上げられて総会の全てのプログラムが終了したとのことで、2001 年 4 月に第 5 代髙坂知節教授が開催した国際学会 “Otitis Media 2001” の excursion program を彷彿とさせる、時代を先取りした実に素晴らしい歓迎振りであったことが分かる。

この当時の日本における耳鼻咽喉科会員総数は 1,421 名程度であり、この頃になると東北地方会の会員数も増加して約 150 名となり全国会員数の 10% を占めるまでになっていた。東北地方会誌第 1 号が発刊され、以後 5 年間は定期的に刊行されたが、1939 年に和田教授が急逝されたため、それ以後は廃刊となってしまったのは極めて残念なことであった。

立木　豊教授の時代（1940 年～1962 年）

図 1　長崎大学時代の立木豊教授

1939 年 6 月に和田教授が亡くなり教授不在のまま 9 ヶ月という時間が流れたが、1940 年 3 月 1 日に至ってようやく第 2 代教授として長崎大学から立木　豊先生が着任した。先生は、1898 年静岡県三島市の生まれなので弱冠 41 歳での就任であった。1924 年に九州帝国大学医学部を卒業し、直ちに久保猪之吉門下に入り、1930 年には助教授、1935 年から長崎大学医学部教授として後進の育成に当たっていた（図 1）。専門領域は、内耳前庭迷路の病理組織学的研究であり、ドイツ、オーストリアへの留学を経て、学位論文は「実験性前庭器性眼球震盪の中枢性成立機制に関する実験的研究」により九州帝国大学から医学博士の学位を得ている。

立木教授の東北帝国大学着任当時の模様について片岡直人先生が詳述しているので、ここに引用してみよう。「当時一生懸命に研究しておりましたわれわれ教室員にとり、故和田教授を失いました事は、文字通り晴天の霹靂でありました。失意の中にも今井助教授を頭に重い気持ちで研究を続けて居りましたが、後任の教授も皆目見当もなく、又教室関係者以外の御方が来任されると致しましても、果たして如何様な御方であり、今まで続けて居りましたわれわれの研究の運命も如何様になるかなど考えます時、只茫然と無為の中に医局生活を送らざるを得ませんでした。然しこうした気持ちはあながち私一人ではなく、多くの教室員方の誰もが経験した所であると思います。勿論、今井助教授を始め、当時居られました先輩の諸先生方も、こうした暗い雰囲気の中にも、種々リクレーションなど考えられ、少しでも明朗な生活にと心がけられましたことは、われわれにとって忘れることの出来ない有難いことでありました。その中、新教授も決定を見、長崎大学の立木教授との事にて、教室内にも、やっと光明を得たような次第でありますが、只如何様なお人柄であるかをのみ懸念いたしておりました次第であります。たしか昭和 15 年の 4 月頃かと思いますが、そのある日の午前中、気候もよし、教授も居られない事であるし、われわれは至極のんびりと放心状態で、私も細菌室に居りました。すると何か急に勝気を感じ、あわただしい気配が階下から伝わって来、それと共に山田医局係婦が新教授の御来任を伝えられましたので、急に教室中緊張した空気に包まれ何となくそわそわしておりましたが、やがて今井助教授の御先導で、各研究室を一々見て回られました。かく予報もなく、突然単身にて来局されました事といい、かつその御容姿、お言葉といい、全く平民的でご丁寧であり、且つその中にも謹言味を持しておられるご様子に、われわれ教室員一同はどんなにか満足し、安心いたしましたことであろうか、今もってあの時の感激は忘れられないものがあります。」

立木時代の幕開けはかくも華々しいものであったが、1941 年 12 月 8 日未明に開始された真珠湾攻撃が発端となって太平洋戦争が勃発し、1945 年 8 月の広島・長崎へ原子爆弾投下により民族の存続すら危ぶまれる戦況になってようやく日本が無条件降伏を受け入れるまでの、実に 4 年間という長い歳月を費やした過酷な近代戦争は、日米両国民のみならず南太平洋を含むアジアの諸国に対しても甚大な人的・物的被害をもたらすことになった。勿論、学術活動への影響も少なからず、多くの教室員が戦線に招集された結果、教室の研究活動は停滞を極めることになる。更に全国規模の学会はこれを開催することが出来ず、日耳鼻総会も 1944 年から 1946 年までの 3 年間にわたり休会せざるをえない状況となっていた。しかし、医局はいたってのんびりしたムードがあったようで、某先生は「大戦の開幕と共に、医局員も段々減少すると、逆に入外来も多くなり多忙となる。われわれの行動範囲も自然医局内の生活に限定されてくる。そして、教授会から未だ帰れぬと思った時、もう帰宅されたと思った時など皇軍の武運長久を祈って御神酒をこっそり上げているとノックの音、こちらは敵が居らんと思っているから楽なもの、夏などは無体裁な姿でおっと盃を手にドアに声をかけると如何せんご本尊（立木教授）の御出現となる、その慌てることと云ったら見られたものではない。」と記している。そうこうしているうちに戦況劣悪となり、1945 年には敗戦となった。

やがて、戦地からは命がけで戦った教室員がポツリポツリと生還し、教室は再び活況を呈するようになってくる。渋谷友太郎先生も復員当時の想い出を「昭和 21 年（1946）6 月浦賀に復員船で上陸し仙台に着いたのは 6 月 10 日頃の朝でした。列車はボロボロで満員の乗客の空虚な顔を見て敗戦の実感を味わいました。駅前にたどり着き一面焼け野原の仙台に茫然として大学病院前まで電車で行き土橋通りに一家が疎開していると聞き重い足を引きずりながら玄関を開いたとき、父母共々にただ泣くばかりでした。立木先生に早速お会いしてみると意外にお元気なのに驚くとともに、お話しは研究のことでした。教室は復員された先生がたがボツボツ見えられて、皆何かしら空漠たるものがひしひしと迫ってくるやるせなさにアルコールを飲んで深更まで騒ぎました。」と綴っている。

戦後、初めての日耳鼻総会は、大阪大学の山川強四郎教授が会長となって再開された。会場は堂島川沿いの旧阪大病院 4 階の階段教室西講堂であり、食糧事情悪しき折から、参加会員の多くは米を持参し、知人宅に宿泊するという状況にあったという。立木教授や九大の笹木教授は、同門の山川強四郎会長宅にお世話になったと記録されている。3 年間の休会により溜まっていたエネルギーが爆発したかのような、非常に活発な学会となったようだ。

それから 6 年後にあたる 1952 年に、日耳鼻総会が再び仙台の地にやってくることになった。当時の仙台は、戦災復興の真只中であり、全国の耳鼻咽喉科医を迎え入れる程の体力を回復していたとは思えないが、立木教授が前年の総会で会長指名を受けて、「来年はひとつ、あの歌にあるような 35 反の帆を一杯に張り上げるような、軒昂たる気持ちで仙台においでをいただきたい、そして絢爛たる日耳鼻学会の絵巻を、是非わが東北の地に展開して欲しい」と歓迎の辞を述べられた。その時、学会会場として立木教授の頭には、斬新なデザインで建設された広瀬川河畔の白亜の殿堂「仙台市公会堂」が浮かび上がり、

それが学会を引き受ける時の勇気の源になったと、後になって大内　仁助教授（当時）に打ち明けられたという。

一般演題は 132 題と和田総会の 2 倍になったため、発表時間が 9 分、7 分、5 分と 3 段階に分けて全ての演題を採択する方法をとる最初の学会となった。その根底には、立木会長の「学会は演者の学会であると同時に又聴衆の学会でなければならない」という考えが貫かれていたという。宿題報告は京都大学の福田　精先生が「身体平衡生理序説」、名古屋大学の後藤修二先生が「音感受障碍をめぐる問題、特にその臨床」というタイトルで担当された。いずれも、立木会長が長年取り組んでいる研究テーマに直結するものであり、会長自らが並々ならぬ期待を込めてのテーマの選択と報告者の指名であったことが伺える。福田先生の報告はその後も平衡生理学のバイブルとなった。

また、この学会の特徴として、米国ロサンゼルスから日系の原　初治博士夫妻がはるばる参加されたことが上げられる。原博士は、「日米耳鼻咽喉科学会の架け橋となろう」という崇高な志を抱かれての帰朝講演であったが、米国耳鼻咽喉科の重鎮達による教育映画の数々を持参されてその紹介に努め、斯界に大きな貢献をされたという。後に、原博士は日耳鼻の名誉会員に指名された。

本総会における懇親会は新装なったレジャーセンターにおいて開催されたが、学会当日までにその竣工が間に合うかどうか関係者をやきもきさせただけに、それが無事に完成して大勢の会員が広大なホールに集まり、そこで立木会長が両手を挙げて乾杯の音頭をとられた時には、教室員一同が大いに感激し、涙ぐむものもあったと記録されている。当時の食糧事情では想像を絶する日本酒、お米、ビールなどがテーブルに並び、その豊富な量には参加者一同が眩暈を感じるほどの豪華さであったらしい。アルバイト学生として手伝っていて後に耳鼻咽喉科に入局、国立仙台病院耳鼻咽喉科部長となった高橋健一先生は、夢中でアルバイトしているうちに潮の引くように宴会が終わり、そのうちに「皆本当にご苦労さん。ビールでも、何でもじゃんじゃん呑んで食べてくれ」と担当の吉田昌八先生に言われて、小躍りして喜び、思う存分に残り物を頂戴したと述懐している。この懇親会は、その後長い間、全国の耳鼻咽喉科医に「あの豪華な仙台の……」と語り継がれることになった。

なお、日本耳鼻咽喉科学会が任意団体から現在の社団法人への改組を決定したのは、この年の評議員会と総会であり、歴史的に見ても極めて重要な仙台総会であったことを、この機会に強調しておきたい。

立木教授の講義が特に名調子であったことを記憶している東北大学の同窓生は多い。いろいろな会合で筆者の専門が耳鼻咽喉科であると自己紹介すると、必ずと云っていいほどに先輩達からこの話が出てくる。渡辺　勤先生の回想によると、“「諸君、八耳の王子って誰のことか、知っていますか」医学部 3 年生、始めて耳鼻咽喉科学の講義を聞いた時、立木先生が開口一番、ニコニコしながら云われた言葉である。端正なお顔に髭が威厳を添えていたのが印象的であった。「目は心の窓で明と云い、耳は知識の門戸で聰という。知識は耳から入って口に出ず。その間僅か三寸。之は解剖学的に見ても、耳管が存在しており、奇しくも古人の諺と一致している。」と云った調子の名講義が、いまにして思えば私

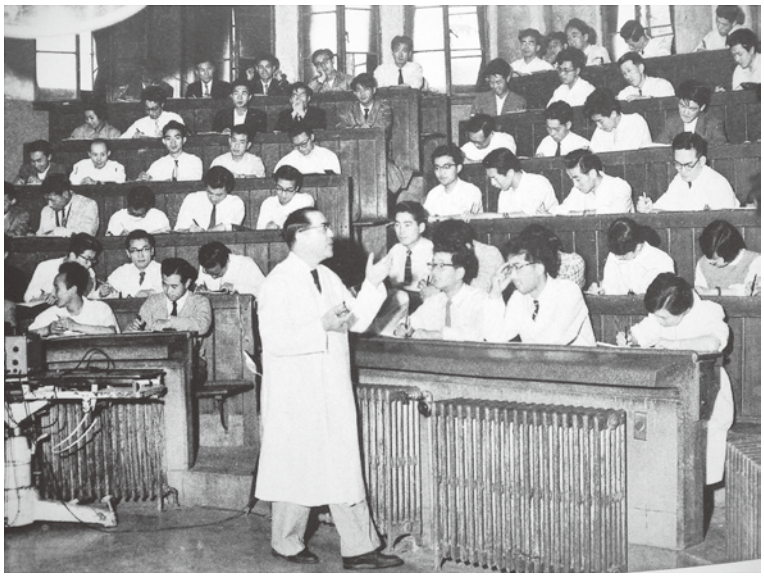


図 2　名調子で評判の高かった立木教授の講義。

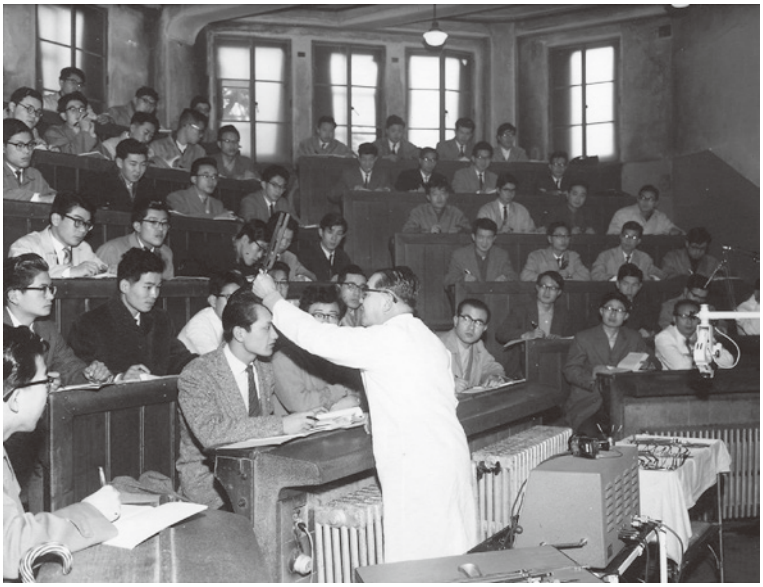


図 3　ウェーバーテストの音叉を学生の頭に置いて実演する立木教授（1961 年）。このクラスは立木先生の講義を受けた最後のクラスで前列右から 2 人目が筆者。

をして耳鼻咽喉科に入局させた一因であったのかもしれない。”

筆者も全く同感であり、立木教授最終年の学生として先生の名講義に引き込まれていったひとりである。（図 2、3）

1950 年代に入って立木教室の内耳研究は破竹の勢いとなり、実験的にさまざまな刺激や負荷を聴器膜迷路に与えてその影響を見る一連の研究が日耳鼻会報などに続々と投稿されて、この時期の論文数は年間 50 編に及ばんとした。開講以来のこの数字はその後暫くの間は破られずに 1980 年代になってようやく更新されたが、いずれにしても当時の研究室の活況が偲ばれる。

研究が活発になるとそれ以外の領域もつられるようにして華々しくなっていくという、いわゆる文武両道はしばしば経験されるところであろう。この頃の血気盛んな教室員は呑んで酔うほどに極めて個性的な芸を披露したらしい。塚本健治先生によると、“吉田秀一先生の大声一番オペラ調で歌う「風の中のとりのように……」、渋谷友太郎先生のムードチックな「君待てども」、和田俊宏先生の異国情緒溢れる朝鮮の歌、神岡蘇二先生のひょうひょうとして歌う「テキサスの2丁拳銃」、六郷正近先生の年期が入った「たにしどの」、小野寺茂男先生の愛情オーバー気味の「マイネ・フラウ」、山崎　隆先生の枯れた(?)「やっこさん」などなど”なかなか多士済々、微笑ましい情景であったらしい。

また、毎年ザールで行われる忘年会の演劇は、そのレベルの高さからいっても大向こうを唸らせるに十分なものであったようだ。ある年に組織・生理研究室から出されたシェクスピアの「ハムレット」は、水もしたたる美男子の神岡蘇二先生がハムレット役、渋谷友太郎先生の黒いカーテンをまとった牧師様役などアッと云わせるほどの適役だったという。加えて六郷正近先生の剣のさばきは、さすが昔ならしただけあってあざやかな殺陣であったし、三好　佑先生の道化師に扮しての口上など全く玄人はだしの好演であったと語り継がれている。

立木先生は、1941年に熊本において「ムコーズス中耳炎」の宿題報告を終えており、さらに1954年には東京慈恵会医科大学で開催された第6回日本気管食道科学会において特別講演「喉頭検査法」を担当し、当時としてはまさに夢のような声帯運動の映画撮影に成功した。この報告が、あまりにも印象的・センセーショナルであったためか学会では珍しい万雷の拍手が期せずして巻き起こったという。ここに立木先生の名調子を引用しておこう。

「1854年、マヌエル・ガルシアの喉頭鏡の発明に始まる、この1世紀間における喉頭科学の滔々たる進運に棹さして……中略……顧みれば1893年、南ドイツの小都市フライブルグに在って、グスタフ・キリアンが夢見たであろうその夢を、再び我らの夢として、而もこの偉大なるパイオニアのそれとは全く異なった形において実現し得たことを深く悦びとするものであり、われわれは本装置を、テレエンドスコープと命名したい……」

このように、立木時代には、研究面で次々と新しい分野を開拓し、特に聴覚医学分野では、ベケシー型オージオメーターの創作とその応用を行ったほか、大型回転装置を用いたクプロメトリーによる前庭平衡機能検査法の確立に加えて、内耳の電気生理学・電子顕微鏡学などの基礎研究分野でも、国際的に十分に通用する革新的な研究業績を上げた。このように臨床研究のみならず実験的な基礎研究を重視してこれらを奨励した立木先生の姿勢は東北大学耳鼻咽喉科学教室の根幹をなすものであり、それ以来連綿と続いてきた「研究第一主義」をこの時代に確固たるものにした。立木先生は、1962年3月停年退官され、以後東北労災病院長としての職責を全うされた。

片桐主一教授の時代（1962 年～1972 年）

立木教授退官の後をうけて、1962 年 5 月 1 日付けで、弘前大学医学部長の重責にあった片桐主一先生が第 3 代の教授として着任することになった。片桐先生は、1919 年 1 月 9 日生まれの 53 歳、専門は頭頸部癌の診断治療である。1935 年に東北帝国大学を卒業して和田門下に入り、1947 年には助教授を経て青森医学専門学校教授に栄転、同校が弘前大学医学部と改組されると同大学の教授となり、後に病院長・医学部長の要職を歴任した。

片桐教室発足当時の陣容は、河本和友助教授、朴澤二郎講師、金子　豊講師、高橋健一講師（長町分院）に加えて助手十名と副手数名からなる。1965 に、河本助教授がニューヨークへ留学することになり、医局長が朴澤講師に委嘱され、高橋講師が国立仙台病院の医長として転出することになり、柿崎一郎講師が誕生した。

この当時の教室は、立木時代の名残として重々しい雰囲気が支配的であったが、片桐教授は、むしろそれを迷惑に思われたのか、いたって庶民的な感覚で教室員に接することが多かった。とにかく教授室からたびたび医局に顔を出されるので、そのたびに医局員が直立不動の姿勢で畏まって対応する姿がユーモラスであった。1963 年に入局した筆者ら 6 名の新入局員は、立木時代を知らない世代なので、平常心で片桐先生に接することができたが、先輩からは時々お叱りを受けることもあった。いずれにしても、片桐時代になって教室は旧帝国大学タイプの威厳を重んじる医局から、自然な流れとして普通の国立大学のようなより民主的な気楽な雰囲気の医局へと移行してきたことは間違いない。

片桐先生のお人柄については、誰からも敬愛の念をもって慕われていたと多くの門弟が語っているが、そのような場面のひとつを柿崎一郎先生の想い出の中から取り出してみよう。“ある時の東北地方会で、基礎的研究の演題ばかり続いていた時に、すでに教室を出ていた元気の良い先輩が「そのような研究は一体全体臨床にどんな役に立つというのですか」とやや詰問的に質したことがあった。演者が答弁にすっかり立ち往生してしまい会場が一時気まずい雰囲気になりかけたときに、やおら立ち上がった片桐先生が「こうした基礎的研究の積み重ねがあってこそ耳鼻咽喉科学の進歩になり、やがて臨床にも役立ってくるもので、こうした研究も大変大事である」という趣旨の発言をされて演者に助け船を出して、その場を取り繕っていただいたことがあったが、このエピソードは先生の優しい円満なお人柄を示す出来事として私の心に深く刻まれた。”

このような逸話からも分かるように、片桐先生は本格的な基礎研究の重要性を早くから指摘されて、多くの教室員を教室外へ留学させるシステムを導入した。三好　保先生を東京医科歯科大学の勝木保次生理学教室へ内地留学させたのを嚆矢として、先に述べたように河本助教授がコロンビア大学へ、次いで金子　豊先生がニューヨーク市立大学へ、更に綿貫幸三先生（ドゥッセルドルフ・ボストン）、柿崎一郎先生（ニューヨーク）、髙坂知節先生（セントルイス・ポートランド）、三好　保先生（セントルイス）、田中克彦先生（ポートランド）、古和田　勲先生（ミネアポリス）、草刈　潤先生（セントルイス）と続

いた。留学期間は1年から3年程度であったが、留学先では内耳の形態学的研究や組織化学的研究、電子顕微鏡的研究、電気生理学的研究など、世界のトップレベルの指導者の下で研鑽を積むことになった。このような機会は立木教授の時代には無かったもので、片桐先生が世界に通用する一層の基礎研究重視策を打ち出した結果と云える。

片桐先生の頭頸部癌手術における見事なメス捌きは多くの弟子達にとって忘れることの出来ない想い出である。柿崎先生は“頭頸部腫瘍に対して手術適応の限界ぎりぎりまで積極果敢に挑まれて、まさに獅子奮迅の働きをされた。手術時における先生の鮮やかなメスさばき、神技そのもののような剥離子の使い方、時には大胆とも思えるようなマイセルの打ち込み方などは、今でもハッキリと目の底に焼き付いて残っている”と手術助手としての印象を書き残している。この点について、髙坂教授も全く同感と述べ、髙坂教授自身の癌手術手技にも少なからぬ影響を与えたという。片桐時代の臨床教育として忘れていけないのは、しっかりした指導者が常勤している関連施設へ教室員を一定期間派遣して研修させるシステムを確立したことである。当時の関連病院として、国立仙台病院（高橋健一）、秋田県立病院（前川重和）、青森県立病院（高倉　稔）、函館市立病院（山口　正）などの基幹病院が名を連ね、このような病院では他の診療科も充実していたために研修の実績が大いに上がった。

1965年の第68回日本耳鼻咽喉科学会総会において、片桐教授は宿題報告を担当し、透視画像解析装置などを用いた機能的なX線画像診断法や造影剤による粘膜繊毛機能の解析など、これまでのX線学的な診断法に画期的な手法を導入した。なお、タイトルは「耳鼻咽喉科領域疾患のX線学的研究」であった。堀　克孝先生は、当時の教室の状況について“この時期は、私にとっても在局中で最も燃焼し、充実した期間であり、終生忘れ得ぬ思い出であります。また、教室員それぞれに臨床的研究分野に大きく目を開かせ「成せば成る」という大きな自信を与えられ、その後の東北大学耳鼻咽喉科教室が耳鼻咽喉科領域のあらゆる分野で発展を遂げる原動力となったものと思われます。”と述懐している。

開講以来の待望久しかった同門会の設立は、片桐時代に入っていよいよその機運が熟成し、仙台在住の重鎮が教室の3階会議室に集まっては数回に及ぶ激論をたたかわし、ようやく片桐教授が初代の会長として選出されて1967年に無事発足することになった（図1, 2）。この時に議論の対象となったのは会則第5条の会長選出のところと聞いているが、その後も教室を主宰する歴代教授が、その都度会長に選出されて同窓会の安定的発展に貢献していることは、当然のこととはいえ嬉しい限りである。なお、発足時の会員数は約158名であったという。

この時代で忘れられない出来事は、1967年から70年にかけて全国に吹き荒れた大学紛争の嵐であろう。日本における高等教育が熟成していくなかで、どうしても通過しなければならない自己点検・自己評価の関門と考えられるこの時期の闘争は激烈を極め、多数の死者や怪我人が出た。この難しい時期に片桐教授は東北大学医学部附属病院長に選出されたため、連日にわたり学生との団交など、厳しい日々を送ることになった。インターン制度の廃止、医局制度の民主化などさまざまな産物を残して紛争のエネルギーは次第に下降線に入った。やがて日本耳鼻咽喉科学会総会が仙台にやってくることになるが、この時の

図 1　1967 年に耳鼻咽喉科講義室（ザール）で行われた同窓会総会後の集合写真。前列中央に立木名誉教授、その右に片桐教授。最後列の玄関前に髙坂教授。故人となった重鎮の顔ぶれが並ぶ。

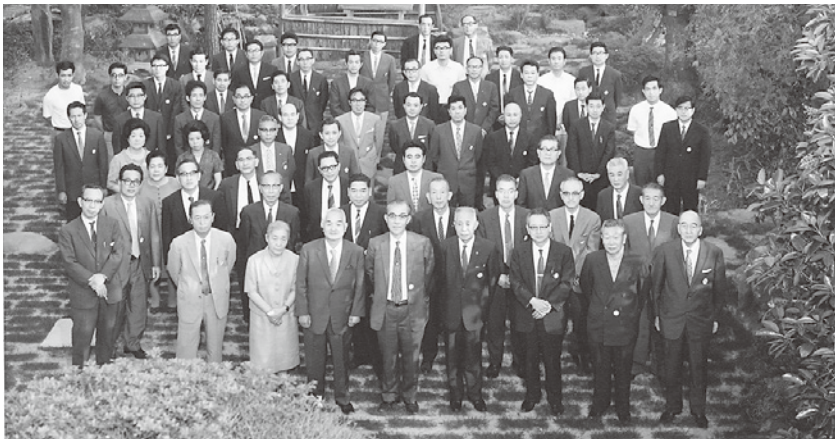


図 2　1971 年艮陵会館で行われた耳鼻咽喉科同窓会集合写真。前列中央が片桐教授。その左 2 人目が医局秘書の山田のよっちゃん。左後方には検査技師の及川ひささんや医局秘書の駒林さんの姿も

総会は、会期が 8 月 31 日から 9 月 2 日までという変則的な日程になった。その理由は、日米安保条約改訂から本年が丁度 10 年目にあたり、5 月から 6 月にかけて 10 年前の安保条約締結時の大混乱が予想されたためである。加えて、1968 年からの学園紛争の余波があり、時折東北大学でも学生達の不穏な行動が報じられていたためである。

そのような社会情勢を反映して、学会は新装なった宮城県民会館が主会場に当てられたものの、企画内容は従来の慣習にとらわれることなく、真に学術講演、発表に重点を置く企画に絞り、祝祭的な色彩を払拭するとともに会員懇親会や役員の招待会は行わない方針となった。財政面でも、産学癒着の批判を回避するために、医療器械業界、製薬業界からの協賛などを一切断り、会員の宿泊・観光なども主催者は介入せずに全てを交通公社などに任せる手法をとることになった。これは参加会員、特に大学の重鎮教授にとっては、極めて冷酷な仕打ちと写ったであろうが、時代の要請はかくも厳しいものとなっていたというべきであろう。実に、質素な学会運営は、今日になって見習うべき点が多々あることに

図3　1971年に弘前で開催された第10回日本鼻副鼻腔学会の折に、草刈繁治先生（潤先生の御尊父）の案内で岩木山頂に登った片桐教授の一行。右から、草刈先生、片桐教授、金子講師、河本助教授、髙坂先生、山崎先生、古和田先生。

気づかされる。

学会プログラムは、宿題報告2題、特別講演1題、シンポジウム3テーマ、パネルディスカッション1テーマであり、1般演題は135題の多きにのぼり、そのうちの44題が展示図説演題となった。3年間のアメリカ留学から帰国したばかりの筆者も、留学中の成果を展示演題として報告した。

このように、片桐時代は、学園紛争という歴史的な事件に巻き込まれて、新入医局員が2年間にわたってゼロになるなど本来の学術活動が制約される不運に見舞われた。しかし、10年間という限られた期間であったにも関わらず、自由闊達な雰囲気の下で意気軒昂な教室員を育て上げ、教室の国際化を成し遂げるなど、数々の偉業を残して1972年4月に八戸市民病院長の重責に就くことになった（図3）。

河本和友教授の時代（1972 年～1985 年）

片桐教授の停年御退官を引き継いで、昭和 47 年 4 月に教室の担当を命ぜられ、昭和 60 年 8 月退官するまでの、13 年半が 4 代目の河本臨床にあたる。

発足当時の医局員は

助教授	朴澤　二郎				
講師	金子　豊（医局長）	柿崎　一郎	三好　保		
助手	佐々木美隆	堀　克孝	髙坂　知節	渡辺　孝志	綿貫　幸三
	湯浅　涼	草刈　潤	山崎　義春	横瀬　宏允	沖津　卓二
	古和田　勲				
医員	田中　克彦	伊勢　郁夫	上野陽之助	矢尾板範子	伊藤　和也
	佐藤　良樹	小野寺　亮	千葉　潤		

以上、23 名にて船出となりました。

昔から大学の責務は研究・教育・診療の三本柱にあり、これが同じ背丈にて成長するのが理想的であるとされるが、言うは易く行うは難しで、大いに悩みながらの試行錯誤を常とするとされている。

先ず教室の運営方針としては、立木・片桐教授の助教授としてお仕えすること 15 年、教室の伝統をそう簡単に変更するのは危険多しと考え、特に立木教授時代、内耳病理探求のため、一般病理から組織化学、分子化学分野、電子顕微鏡分野、電気生理分野、前庭研分野が発生、時には同一目標に向けての活動も可能にて、他大学からも羨まれたもの。

図 1　昭和 47 年度 14 科の月刊誌の巻頭論文中より選ばれた最優秀文への贈呈式。小生の向かって左側が猿にストレス潰瘍作成に成功された並木正義教授。昭和 48 年 7 月

これを簡単に変更するのは愚の骨頂、大いに活用し、新たな手法もどんどん取り入れることとし、もう一つの新しい思考として、助手以上は教育職であり、学生や医員の教育にも参加してもらい、講義の一端も荷うべきであり、そのためにも言動には責任を持ってほしいと要請、教室運営はスタッフ会議（教授・助教授・講師）にて処することとした。

まずは事を急がず、ゆっくり前進し5年目頃から全力疾走にするかと考えていた所に、その年の秋、熊本大の野坂教授から昭和49年熊本での日耳鼻総会で宿題報告を願いたい、立木教授の宿題も昭和16年におねがいしたことあり奇遇ですねとのこと。

教授一代の活躍は退官時の最終講義で語られること多く、もうひとつのイベントが総会の席で、2名の方に宿題報告という特別企画で発表を依頼する仕来たりがあり、これに指名されることは大変栄誉なことであり、教室の研究生命をかけての挑戦となりますが、通常は教授就任後5年目、教室が落ち着いた頃に依頼があるのを通例とするのに、就任の年とはいささかびっくり、しかし二度とない機会、テーマを何にするかに苦慮、教室のメインテーマは内耳病理、所が折悪く、この年の総会で、親友の京都府大の水越教授が、「内耳有毛細胞の病態」として宿題報告を行ったばかり、これを凌駕する新知見なく、むしろ数年前より取り組んでいる滲出性中耳炎（滲中）の方が会員に訴えるインパクトも大、また本症の急激な増加傾向に警鐘を鳴らすのも急務と考え会長に連絡、会長より耳馴れぬ病名、教室員に聞いたら見たことない病態なりとのこと、会長としてそのようなテーマを選んでは責任を問われる、東北大の内耳病理を希望するの言。

いや、欧米では数年前からこの多発に苦慮中、早晩日本にも押し寄せる筈、学会としても大きなテーマになるは必定と強調、やっと了解を得たが、もし増加しなかったら切腹ものだと悲壮感大。

本症に関心を持ったのが昭和43年頃、当時は学園紛争盛んで、デモ学生の医局や病室

図2　宿題報告終了後、会長野坂教授より感謝状と記念品授与。
昭和49年5月17日

への乱入を危惧し、片桐教授は徹夜、小生も付き合う。しかし退屈この上なく、欧文の表題だけでも眺めるかと始めた時、滲中の論文が年 40 編以上あるのにびっくり、日本では殆ど見られず、集めたら 250 編もあったのを少し整理してみた。

丁度この頃、湯浅先生が耳管の機能と造影法を研究中、滲中の耳管通気圧は高いと思ったのに高くない、耳管機能不全の状態にありと考えられる。

また仙台市の就学児童と小・中校の聴力検査が医師会ヒヤリングセンターの協力で続けられており、沖津先生がこれに参画しており、昭和 44 年頃から滲中の増加に注目監視中とか。また金子・古和田先生が昭和 44 年-46 年、ミネソタ大で滲中の電顕を追求中、この三本柱が中心となり研究の輪を広げれば必ず本邦初の内容に到達しうるものと確信を持って会長にお願いをした次第。

発表までの 1 年半、教室員一同各セクションに分かれ昼夜兼行の活躍、全く頭の下がる思いでした。

発表後会場の雰囲気如何かと気になりましたが、やはり釈然とせず後日伺うと、東日本の方々の評価は大きいが西日本は半信半疑、東北地方特有の疾患かな、大昔の中耳カタルのことかなとのこと。

昭和 7 年（1932）鰐淵先生（熊本大）の欧代管狭窄症・昭和 26 年（1951）高原先生（岡山大）の耳管疾患、特に其の成因と治療と題する宿題報告があり、座長の高原先生は今回の報告には賛同しかねる由、評議員招待会では鰐淵先生が小生の隣席となりなかなか対話が大変でした。

後日講演の依頼が多く北は北海道南は鹿児島にまで参上、又多方面から滲中特殊外来を見学に来られ、古和田先生の説明よろしきか、納得する方多く、やはり今まで見落としをしていたとのこと。

翌年の総会から出題が急に多くなり、時には 25 題も集まり 5 群にも分かれ盛会となり、10 年後の昭和 57 年、日耳鼻総会で「滲出性中耳炎の治療」、昭和 59 年「滲出性中耳炎の

図 3　教科書出版記念祝賀会。立木教授より祝辞。昭和 51 年

病態と治療」、昭和 60 年「滲出性中耳炎の病因と病態」、京都での国際滲中シンポジウム、昭和 61 年の「滲出性中耳炎の臨床」、平成元年「滲出性中耳炎の治療」といったシンポかパネルの特別企画が持たれるほど、本症を宿題報告に選んだ決断を自画自賛したき感大なりでした。

しかも、この研究は大学のみでは不可能で、市中開業の方々をも巻き込んでの活動となり、時には同一患者を両者で観察を続けることしばしばあり、他県の医会の方々にも宮城県の方々の本症に対する知識の高いのに驚かれたようです。

更に金子・沖津先生の案で、学童検診に聴検と同時にティンパノメーター（TM）が導入され、測定は養護教諭が行い、判定と診療は校医・TG 委員が行うといった所謂、仙台方式なるものが定着、学校と行政機関をも取り込んだ運動にまで発展し医会の方々にもご面倒この上なくおかけしました（佐久間先生）。

この有力な武器である TM も当初は東日本で特に宮城では早々に全員に近い方が購入されたが、西日本は 20％と低調、後日ティンパノグラムアトラス（沖津・小林 1987）と題する簡明な冊子の出版に助けられたか、利用する人が多くなったとのこと。

かくして滲中への戦いは髙坂教授時代に入り、益々佳境、やっと核心に近づき、本症の由って来る原因への究明が進展、貯留液中にカラゲニン（柴原 1984）、エンドトキシン（飯野 1985）の存在や、免疫複合体による実験的滲出性中耳炎モデルにみられる粘膜病変（朴澤 1986）のように、これら物質の投与により明らかに腔内に液体貯留は実現し炎症が最たる原因にして、これを如何にコントロールすべきか更なる前進が求められるものと思います。

唯、古和田先生と共に嘆いたのが、これら物質投与により発生した滲出液は漿液性の serous で幼小児によくみられる粘調度の高い、所謂 glue ear にはならず、耳管機能不全を長期持続すれば起こるかと思ったが、半年閉塞しても腔内にコレステリン肉芽組織と骨組織のみ発生し成功せず、人間に近い中耳の豚を用いたらと、子豚を求め 8 階の実験室にて用意中、急に逃走、産婦人科に逃げ込み大騒ぎ、厳重な注意を戴き実験中止となりました。

いずれにしても、片桐教授に続いて小生まで東北大の伝統である内耳病理を継承しながら、それを宿題報告に活用できず慙愧の念に堪えず、髙坂教授の宿題報告がこれを達成して戴きやっと積年の重荷がとれ感ひとしおでした。

この他に興味あるテーマとして真珠腫性中耳炎の病態解明、昭和 50 年頃本症が増加する傾向あり、連合学会で報告、地方部会でもその取扱いのワークショップを持ったことあり（昭和 51 年 3 月）なかなか論争多く、では特別にグループを組んで追求してみることとし、本症の手術の多い労災病院を基盤として研修医をまきこんで挑戦、問題点は、鼓膜穿孔部位の特異性と、中心性穿孔にも本症をみること多しとする Rice の論文への評価、耳漏中にみられるコレステリン結晶の意味づけ、本症にみられる骨破壊の様相とその発生機序、本症の病期に inactive と active stage という表現あり、即オペでなく外来観察はありうるのか、などといった問題点を再検討してみた。その結果は、耳鼻と臨床 24 巻補冊に収録されている。メンバーは金子、湯浅、伊勢、飯野、新川、富岡（松谷）、柴原、六

郷先生らでした（1978）。真珠腫塊に接する骨面は強い酸性状態になっており、これが骨破壊作用の主因でないかと考えたが、髙坂教授の時代になり豊島先生のサイトカインが原因かと考えられるとのこと。

この真珠腫性中耳炎に取り組む、慈恵大、新潟大と東北大の3校が、中耳炎懇話会なるものを作り持ち回りで、それぞれの地で会を開き、基礎的問題はもとより手術法などの論議でいたく盛り上がり、かなり長く続けられたとのこと。

本症が耳管機能不全から発症するとの報告が国外にあり、これを追試して耳管閉塞を行い慈恵大が真珠腫の作成に成功したが、東北大はコレステリン肉芽腫にしかならず、その差異がいずれにあるのか不明のままとなり心残りです。

次いで、慢性副鼻腔炎の病態とそれが何故遷延化するのかの解明。これは耳鼻科積年のテーマであり、本症の手術時摘出した病的粘膜を髙坂先生の指導で電顕で追求、その一部を52年米子での鼻副鼻腔基礎問題研究会にて、炎症病理学の立場から炎症修復には結合織の繊維形成過程におけるコラーゲンの対応に問題があるとする思考に対し慢性副鼻腔炎の病態は局所条件としての洞内膿汁の貯留と排泄障害、それに大きく関与する粘膜上皮の繊毛運動障害が大きな因子となるとする当教室の耳鼻医的思考で論争したことあり、2時間も壇上で吊るしあげられたのには閉口したもので、その時の素晴らしい電顕像は今もって目の前に浮かびます。

この病態遷延化に対する挑戦はその後2001年広島大の夜陣教授が、慢性副鼻腔炎の病態と治療と題する宿題報告で粘膜骨病変に原因を求め、2007年昭和大の洲崎教授も鼻副鼻腔の炎症病態、遷延化と治療と題する宿題報告でサイトカインの増加、NOの発生、粘膜リモデリングの障害にその因を求めんとする論旨だが、そのいずれもが一般炎症にもみられる現象であり、本症の遷延化はまだ積年の宿題にて若い方々の挑戦を切に望みおります。

同時に術後性上顎のう胞の粘膜追求も、小野寺　亮・佐藤雅弘先生によりなされ、なかなかすばらしい走査電顕像でした。

電気生理班の活躍もすばらしく、そのまとめ役の草刈　潤先生の言によれば、当時は以前から教室で行ってきた内リンパ電位の研究に加え各種の内耳疾患のモデル動物（一過性虚血・音響外傷・薬物中毒など）を電気生理学的に調べ、その頃一般臨床検査として普及しはじめていた蝸電図所見と比較検討など行っていた由です。このグループからは、三好保先生を初めとして合計14名が次々とセントルイスのトールマン教授のもとに留学しました。同教授は内耳組織や内耳液の生化学的研究で有名でしたが、ここで電気生理学的研究との共同研究を行うのが目的でした。

この様な共同研究は当時他にあまり類をみず、多くの優れた業績が報告されておるとのこと。

前庭研究グループは朴澤二郎先生がチーフとなり、めまい外来の主役も務められ、朝の症例検討会にて、難解なめまい症例では先生の指示を戴くのが常であり、われわれは大助かりでした。

立木　豊教授が学会に1948年、耳迷路外科の経験第一報とする演題で、第8報まで出

されており、途中で「メニエール氏病及びその治療」という冊子を医学叢書より出版（1950）され、メニエールに対するポルトマン手術の成績でした。このメニエール病に対する基礎的臨床的追求がこのグループのメインのテーマにてグループ所属の方々の活躍がなされてきましたが、先生はこのポルトマン以外にローゼン手術も行っており（1952）、朴澤二郎先生は椎骨動脈起始部周囲交感神経叢剥離術（1969）なども行い、それらをまとめて「メニエール病の臨床」と題する冊子を金原出版から1976年に出されました。

偶然にも小生もこの年「耳鼻咽喉科学書」という教科書を出版したので同窓会でお祝いの会を開いて戴きました（図3）。

更に、めまい発作を伴った突発性難聴症例を発見、両者の移行なのか同居なのか、その病態の解明に挑戦し始めた時に（神林潤一・伊藤和也先生）、弘前大学耳鼻咽喉科教授として赴任され、その継続無理となり残念この上なしといった所です。

最後にアレルギー班、新たな組織を立ち上げることは至難の業、スギ花粉症の発表は、昭和39年の斎藤洋三先生の報告で、タイトルは日光杉花粉症、つまり固有名詞つき、日光にはなるべく近づかぬことといった雰囲気の所に髙坂先生帰国、昭和45年9月にアレルギー特殊外来を開設されたものと思います。混合エキスだ、減感作療法などと耳馴れぬ言葉に馴染めず、角　安雄・矢尾板範子先生などその副作用に苦慮されたもの。

第1回宮城アレルギー懇話会が持たれたのが昭和58年、更にこれが発展して東北アレルギー懇話会となり、連合学会の午前半日分をこの演題にあて西高東低の改善に努め、勉強・情報交換・花粉情報などと発展し、会員大いにその恩恵に浴したもので先生の御発案に感謝あるのみです。

図4　福岡大濠公園中洲前にて小生のシンポ「内耳性難聴発症とその背景」にわざわざ来られ、もう福岡にくることないだろうと述懐。片桐教授のカメラ。昭和44年5月

いずれにしても、これら膨大な研究活動はこの13年半の間に入局した54名とすでに在局していた21名の計75名の素晴らしい努力の結果成し遂げられたものであり、誠に有り難きかぎり、今もって感謝の念大なりです。

次いで教育面での活動について補足すると、関連病院構想があります。

現在は充実、完備した研修制度が義務付けられ、2年間各診療科をローテイトしながら、その基礎的研修を行った後、各専門分野に分かれ、己の道を進むことになっていますが、昔は所謂、徒弟制度的指導、俺のやることを見ているだけで充分といった手法、戦後米国の指示でインターン制度が強制され、付け焼刃的な思考での運営のため、はきとした指導医も居らず、医師免許を持たぬ者に医療をさせるわけにもいかず、無給といった制度も困

りもの、学生時代昭和舎に居た関係上舎監の古賀教授の放射線科でごろごろ、手術の助手をやっていました。インターンボイコット運動盛んとなり、昭和 43 年この制度は廃止されたが、厚生省は昭和 43 年に研修医制度を提示したが義務制でないため強制できず、耳鼻科学会でもこの年に理事会の中に教育研修特別委員会なるものを設置、小生も委員として参加、昭和 45 年仙台での総会時に、耳鼻咽喉科卒後教育と題するパネルが設けられ、委員会の作成したカリキュラムなどの論議を 2 時間行ったが関心極めて不良でした。

昭和 40 年コロンビア大学に留学した時、教育面での取り組み方を調べると市中にサテライト病院 3 か所を持ち、若い医師は全員ここをローテイトする義務があり、これら病院の科長は教授職で、大学での各種委員会に出席、特に研修運営委員会は積極的、大学と学外とが密な連携を行って教育する制度にいたく感心、日本でもこの様式をと考えておりましたが、当時の学園紛争の煽りをうけて、入局者ゼロ、勤務医が全滅し、仙台市では耳鼻科医が居るのは国立と市立の 2 か所のみ、やむなくここに研修医の採用を依頼したが、そのような面倒な教育を引き受ける余裕なしとの返事、困り果てどこかに研修病院を新設するより手なしと考えた。

丁度労災病院で医師を求めており、渡りに船とこの研修病院構想を持ちかけたが、院長の槇先生、研修医はいやだとのこと、丁度昭和 42 年から 3 年間学部長として学生・研修医には大変ご苦労なされており、無理からぬ仕儀かと思いました。

それに半年ごとにくるくる医師が変わって研修に来るのも大変とのこと。いや絶対ご面倒をかけることはしない、半年期間の延長も考えます。まずはテストケース、常に改善を考えながら進めますとのことで、この大役を湯浅先生にお願いした。小生自身も心もとなく月 1 回病院に参上し、総回診など行ったりしました。

しかし、このような研修制度は当時何処の科でも行っておらず、若し事故でも起きたら面倒になるよと忠告してくれる友も居ましたが、全くの試行錯誤の日々、研修医の活躍を時々聞いたりオペの記録を見せてもらうなどと気をつかいました。

次いでいわき共立病院の櫻井先生がこれに加わり、この 2 病院の活気あふれる活動が刺激となって病院赴任者が増え、NTT・東北公済・仙台日赤・厚生年金・がんセンター・社会保険・気仙沼・石巻日赤・山形市立・長井と指導医が赴任し、研修医と共に活躍するといった夢にも思わぬ大成功となりましたが、各病院の科長の方々には全く献身的な指導を行って戴き大変なご負担をかけたものかなと後悔しております。

確かに大学だけでは集まる疾患がかなり片寄り、また症例数が少なく、関連病院での研修無くしては卒後教育は成り立たず、この指導医の負担に如何に応えるべきかは大きな問題であり、アメリカでは 1 人の研修医に 10 万ドルの国家予算を計上し指導医にも予算をつけているとのことで、政府もこの点は大いに配慮して戴きたいものと思いおります。

昭和 52 年日耳鼻理事となり教育委員会に属し、6 年間、卒後教育部門を九大の広戸教授とペアで担当。委員長の鈴木教授がこのアメリカ方式の導入に熱心であり、その席上、この指導医の方々の負担に応える案として、総会時のシンポやパネルは大学人のみに任すのでなく、研修病院科長にも、その栄を分かつべきなりとして、昭和 55 年の総会で、「耳鼻咽喉科日常診療の将来 ― 専門的処置の見直し」と題するパネルを計画。中耳の専門的

図5　退官教授の最終講義
いずれの方も定年以前に退官された。昭和60年

処置（通気・鼓膜切開・チュービング）を櫻井時雄先生にお願いしたことあり、さらに昭和60年には教育パネルで「画像診断 ― 側頭骨のCT」をお願いし、中耳腔の疎通性の把握に不可欠なりと報告。以後多くの大学外の人々の出番となりました。

労災の湯浅　涼先生のフィブリン糊による鼓膜形成術などは国内はもとより国外にまで求められ大変関心度の高いものだったと思います。

最近はチューターのレベルも向上著しく、その評価は専門医試験に示されるものと思いますが有能な人材を育てあげて戴きたく大いに楽しみにしております。

以上、百年という長い長い教室の歴史の中の13年半といった短い僅かな期間とは申せ、教室の全てのメンバーが一致一丸となりての活躍には感ひとしおのものがあり、感謝、感激あるのみです。

髙坂知節教授の時代（1985 年～2000 年）

髙坂知節教授は、昭和 11 年（1936）5 月 9 日の生まれで、昭和 37 年に東北大学医学部を卒業し、日立総合病院でのインターンを経て昭和 38 年に耳鼻咽喉科学教室片桐主一教授門下へ入局した。昭和 42 年から 3 年間に亘り米国留学し、キャサリン・スミス教授の薫陶をえて内耳の電子顕微鏡研究に従事し、帰国後は、同教室の助手、講師、医局長を務めて昭和 52 年には河本和友教授の助教授に任命されている。

助教授時代の大仕事としては、昭和 60 年 5 月に開催された第 86 回日本耳鼻咽喉科総会を上げることが出来る。髙坂助教授が事務局長に任命されて最初の相談会を開いたのが総会開催の 2 年前にあたる 1983 年 4 月 8 日であった。随分早い時期からの相談会のように思うが、開催場所が艮陵会館であったことからみて、医局メンバー（河本教授、髙坂助教授、草刈講師、角、鈴木　茂）、と同窓会の有志（沖津貞夫、和田俊弘、三好　佑、金子　豊、堀　克孝）の方々の擦り合わせのための集まりであった。日本耳鼻咽喉科学会評議員の三好　佑先生は、以前から「六十年会」というグループを同窓会内に組織して、日本耳鼻咽喉科学会総会の誘致運動を行っていた経緯があり、このような相談会の開催要請をされたと思われる。この会では、準備事務局と準備委員会の 2 本立てでスタートすることが決められ、事務局は医局に置いて、髙坂、草刈が総務、角が会計を担当するように指名を受け、準備委員会は、沖津貞夫先生（宮城県医師会会長）を委員長、和田先生、三好先生、金子先生を副委員長に決定した。

同年 6 月 7 日には、第 1 回の準備委員会が招集されて、大学から 6 名、学外の準備委員会メンバー 24 名、あわせて 30 名が集まった。冒頭に三好　佑先生から、本年 5 月の大阪における日本耳鼻咽喉科学会評議委員会と総会で正式に東北大学の担当が承認されるまでの仙台総会誘致運動の経緯について説明があり、つづいて、これまでの相談会で話し合われてきた計画について髙坂事務局長から報告され、ここに初めて 60 年総会の全貌が明らかにされている。予算案として、この段階で 5,450 万円ほど金額が計上されているのも興味深い。

第 1 回の準備委員会で募金小委員会が立ち上がり、6 月 10 日には 1 回目の小委員会が開かれ、大学の医局も 500 万円相当を積み立てる事が決められている。また、勤務医会（22 名）は 400 万円を目標額に募金することが決まった。開業医は、誘致運動を始めたころからの組織である「六十年会」が既に募金を開始していたので、それに上乗せする形で継続し、募金の事務局は三好病院に置く事が承認された。なお、それに属していない会員（主として県外の同窓会員）は大学の事務局に振り込むことが決まった。10 月 13 日に開催された第 4 回準備委員会において、いよいよ経理小委員会が発足し、三好　佑先生が委員長に選出され、同時に「六十年会」の寄付金は全額 60 年総会の経理に組み込まれることが承認された。これで募金の概要が決まり、いよいよ本格的な予算編成と財務管理がスタートすることになった。

学術小委員会は金子委員長のもとで、既に数回の委員会を開いて、プログラムの原案作

成に入っていた。10 月 13 日の第 4 回準備委員会では、開会式直後の特別講演に石田名香雄総長が決まり、宿題報告の候補者として朴澤二郎教授がノミネートされた。また、シンポジウムのひとつとして「滲出性中耳炎」を取り上げることになり、外国からの招待講演者はスエーデン、カロリンスカ研究所教授のヤン・ヴェルセル先生に決まった。

河本会長の意向を汲み、研修パネルとして 12 のテーマ、教育パネルの 6 題など、専門医制度の発足を強く意識したプログラム編成となった。中でも、5,000 円の受講料を設定して、学会第 3 日に実技指導を含む臨床講習会が企画された点は注目に値する。「ティンパノメトリー」、「純音聴力検査法」、「めまいのプライマリケア」、「画像記録法」などのテーマが並び予め人数を決めて募集するなど、今日の専門医講習会を先取りした画期的な内容である。ちなみに、1985 年当時に秋の専門医講習会は存在していない。この講習会には、沖津卓二先生、小野寺　亮先生、神林潤一先生らが講師として参加し、裏方としても地方部会や大学関係者が多数参画した。

2 年前に開催日を決めた時から気がかりだったのは初日のお天気であったが、当日は見事な五月晴れとなり、定禅寺通りのケヤキの新緑が美しかった。確か、昭和 45 年の片桐総会の時もお天気に恵まれたと記憶するが、この日は、事務局長という責任ある立場で本番を迎えただけに、髙坂助教授には格別の思いがあった。県民会館の開会式では、河本会長の挨拶に先立ち、リヒアルト　シュトラウスの交響詩「ツァラトゥストラはかく語りき」の冒頭にある有名なファンファーレが会場一杯に鳴り響いた。

会場が、県民会館、市民会館、戦災復興記念館と 3 つに分かれ、各会場をシャトルバスが結ぶという苦肉の策も何とか支障無く運行された。そうは云っても、分散した各会場の担当責任者には様々なヒヤリハットが有ったに相違なく、それについての逐一報告は無かったものの、綱渡り的な思いは最終日まで消える事は無かった。全員野球という河本先生の強い要望を皆がよく受け止めて、稀に見る規模の大きな学会にも拘わらず、それを見事に成功に導いた素晴らしいチームワークに対して無上の喜びを感じている。まさに、「有能な人材が、それぞれの役割をしっかりと認識して、それを全うしたな」というのが率直な感想である。中でも、三好　佑先生は、日本耳鼻咽喉科学会評議員として、早くから仙台総会の誘致運動を立ち上げて、60 年にターゲットを絞り込み、募金活動も併せて行うという先見性を発揮された。学会が無事に終わって、収支決算の打ち合わせの時に体調の不調を訴えられていたが、その当時は、間もなく先生の訃報を聞く事になろうとは想像もできなかった。三好　佑先生の超人的な貢献無しには第 86 回河本総会の成功は無かったと確信している。改めて、先生のご冥福を心からお祈りしたい。

昭和 60 年 5 月に、日本耳鼻咽喉科学会総会会長を務め終えた河本先生が仙台逓信病院長として転出することに決まったのは、まさに青天の霹靂であった。さあこれから教室の発展をと云うときに急遽 8 月末の退職が決まったのである。教室員一同は、突然にボスを失うというショックから動揺するものも少なからずあったが、河本教授が病棟での最終総回診を終えて花束贈呈、記念撮影などが行われ、その後に医局で簡素なパーティが開かれる頃になると、ある程度の覚悟を決めて、後任教授が決まるまでは残されたメンバーでしっかりと教室を支えていこうという雰囲気が広がっていた。

河本時代の教室運営は、殆ど片桐先生時代からのものを踏襲していたが、特に権威主義を排し医局員のチームワークを重視する点では、これまでの時代とは大きく異なっていた。勿論、学園紛争による時代の変化が影響を与えていたことも事実だが、ラグビーというスポーツを通して先生が培ってこられたラガーマン精神によるところが大きいと考える。なぜなら、ラグビーでは、監督が観客席にいて観戦はしているが、競技について直接的な指図はせずに選手の自主性を尊重する。河本教授には適材適所に医局員を配置して、のびのびとプレイさせる趣があった。その結果として、国立仙台病院や市立病院などの片桐時代の関連病院に加えて東北労災病院をはじめ東北逓信病院、東北公済病院、東北厚生年金病院などの市中病院に有能な臨床指導医が赴任して指導体制が充実し、医局の臨床研修システムがこの時代に確立されたので、取り敢えずこの体制を維持することが、残された教室員に託された使命であった。

研究面でも同様であり、昭和 60 年（1985）1 月に開催された滲出性中耳炎国際シンポジウムでは、河本教授の special lecture に加えて、パネルディスカッションに 1 題（高坂）、一般演題に 7 題（飯野、櫻井、草刈、朴澤、古和田、小林、沖津）、併せて 9 題という多くの出題があった。これは京都シンポジウム全演題の約 10% に当たる。また、出版された論文数は、著しい増加傾向にあり、例えば和文論文は 1972 年が 12 編だったのに対して、1982 年には 38 編と約 3 倍となり、英文論文は年間 1 編だったのが 10 年後には 7 編となっている。海外への留学も大いに推進され、草刈　潤（72）、上野陽之助（73）、伊勢郁夫（74）、和田　淳（76）、神林潤一（78）、小林俊光（80）、西條　茂（80）、新川秀一（82）、六郷正暁（82）、柴原義博（84）、荒川榮一（84）、原　晃（85）と 13 年間に 12 名が続々とセントルイス、ボストン、ポートランド、ピッツバークへと出向した。また、留学先で指導に当たってくださったハロルド・シュークネヒト先生、ロバート・キムラ先生（図 1）、リューディガー・イソルデ・トールマン先生ご夫妻（図 2）、キャサリン・スミス先生などの著名な教育研究者たちが教室を訪れていた。兎に角、若さと活気に満ち

図 1　ロバート・キムラ先生（左）の歓迎の席における河本教授。

図 2　トールマン先生ご夫妻（最前列）を招いて割烹松竹において歓迎会が催された。令夫人の右が河本教授。2 列目左から伊勢郁夫、高坂知節、三好　保、3 列目左から綿貫幸三、古和田勳、伊藤和也、草刈　潤、神林潤一。（敬称略）

溢れた大躍進の河本時代を衰退させないように舵取りすることが、次の指導者が決まるまでの間に行わなければならない暫定的な目標となっていた。

無我夢中で過ごした教授不在の1ヶ月が過ぎようとしていた昭和60年9月25日に、医学部長の山本敏行教授から呼び出しの電話があり、学部長室に伺うと「たった今、本学部教授会で君を本学の教授に推挙することにしたが、この決定を受諾しますか」とのことであった。「浅学非才の身ながら、慎んでお受けします」と応えると、「では、これからしっかりと教室を支えていくように、また次回から教授会に出席するように」との言葉を頂いた。その日の夕刻、教授内定を聞きつけて湯浅先生夫妻が南光台の拙宅に早速駆けつけてくれたことは一生の思い出として忘れることが出来ない。

教授就任が決まって、まず実施したことは耳鼻咽喉科病棟診療のあり方の改革である。従来の総回診は、重症例や術直後の患者を除いて治療室に患者を呼び出して診察が行われていたが、それを教授がベッドサイドを訪れて、そこで診察を行うことに改めた。実施に当たっては、看護室の抵抗が無かったとは云えないが、患者重視の姿勢を貫いて説得し、治療台車とカルテ台車を伴いつつ各病室を回ることになった。SGTの実習生と担当医という少人数で能率良く回るので時間の節約にもなり、結果的には好評で、その後在任の14年間余り継続された（図3、4）。外来診療は、教授と助教授が新患を全て診察して、紹介医との密接な連携を心がけることにした。また、総回診終了後の昼休みを利用して、スタッフ会議（昼食をかねて）を持つことにした。これは医局、病棟、外来の連携強化を狙った企画で、在任中は一貫して継続された。病棟や外来からのさまざまな注文が婦長や外来の主任から寄せられたが、これが医局ではいわゆる「チクリ」と称されて大いなる緊張感をもって迎えられた。そのような影響もあって、髙坂教授在任中には1件の医療事故も発生しないという幸運に恵まれた。就任直後から患者中心の考え方とスタッフのチームワークを重視した考え方で大幅な組織改革を行ったことがこのような成果をもたらしたものと考えている。この時の医局スタッフは、助教授：草刈　潤、講師：角　安雄、小林俊光、新川秀一、助手：柴原義博（ピッツバーグ大留学中）、荒川榮一（ワシントン大留学中）、橋本　省（ハーバード大留学中）、大山健二、花島隆敏、原　晃（ワシントン大留

図3　難聴の患者さんには補聴用の集音器も用意した。

図4　新しいスタイルで行われる教授総回診。治療用の器材を伴うので看護師の皆さんには負担増となった。

学中)、稲村直樹（長井市立出向)、大平裕子、渋谷　守、末武光子、池田勝久（仙台市立出向)、谷口和彦、川瀬哲明、高橋邦明、武山　実、桜田隆司、大学院：朴澤孝治、医員：菊地俊彦、鈴木秀明、鈴木　守、豊嶋　勝、伊東善哉、石戸谷雅子、石垣元章、吉田真次、馬場重仁、佐々木　豊、小池修治、佐竹光章、志賀伸之、八木沼裕司、白土正人の総勢 36 名であり、海外出張 4 名、関連病院出向 2 名であった（図 5)。

図 5　1986 年当時のモーニングカンファレンス。総回診の前には担当医が全ての症例報告を行った。教授を囲み、草刈（潤)、粟田口、伊東、栗原、小林（俊)、高橋（邦)、渋谷（守)、石垣、佐々木（豊）らの姿がある。

錚々たるメンバーを擁してのスタートとなり、大いに張り切っていたところ、就任 2 年半（1988 年）という時に、草刈　潤助教授が筑波大学教授として栄転することが決まり、小林俊光講師が後任助教授に昇任することになった。また、筑波大学には、原晃、武山　実、高橋邦明、伊東善哉の 4 名が草刈教授の船出を支えるために同行し、更に、翌 1989 年には朴澤二郎弘前大学教授の要請により、同教室の助教授として新川秀一講師・医局長が赴任することになった。このように、昭和天皇が崩御されて年号が平成へと変わったこの時期に、あたかも年号に同期するかのように教室の構成が大きく変化し、小林助教授を筆頭として髙坂教室は大いに若返ることになった。

医学教育という視点からこの当時を振り返ると、文部科学省主導による大学院の重点化は未だ全国的な広がりをみせておらず、医学部臨床教室の多くは大学院教育よりは、関連病院をローテーションする臨床研修教育に力を注いでいた。しかし、医学研究の基本を身につけて将来の指導者として羽ばたくためには、一時的でも臨床の現場から離れて、朝から研究に没頭する時期が必要であると考えていたので、3 つのコースを設定して、新入局オリエンテーション時に説明し、入局 2 年後の初期研修終了時に自分の望むコースを選択できるという方向性を明確に打ち出すことにした。髙坂教授が示した 3 つのコースとは、① 臨床に専念して専門医を目指す「臨床専門医コース」、② 専門医を目指しつつ論文博士をも志すハイブリッド型の「臨床プラス研究コース」、そして ③ 臨床から完全に離れて朝から研究に没頭する「大学院コース」からなっている。このようなコース選択制を始めるに当たって、果たして ③ の大学院進学コースに希望者が出るのかどうか確信は無かったが、幸いなことに初年度には大島猛史、綿谷秀弥の両君が進学希望を申し出てくれた。その後も、毎年大学院進学コースを希望する者が絶えることなく、中には学位論文を書き上げて学位を取得後に、引き続いて海外留学を志願する者が出るくらいに基礎研究に賭ける意気込みが教室内に満ち溢れる様になった。そうこうしているうちに、政府主導の大学院重点化が決まり、他の臨床教室も慌てて大学院生を募ることになったが、耳鼻咽喉科教室は先進的な大学院重点教室として、何ら慌てることなく粛々と従来通りの教室運営を行うことでこの時期をクリアすることが出来た。20 年ほど経過した今になって振り返

ると、初代和田教室から連綿と続いている研究第一主義を貫き、日本における高等教育の大転換期にも動じることなく王道を歩んだ結果として、この大学院コースから大学の教授が7名｛大島、欠畑、須納瀬、香取、吉田（尚）、本橋（旧姓永渕）、高卓（旧姓鄭）｝、准教授が2名｛古川（正）、日高｝誕生している。

教室の若返りによる新体制がようやくスタートしてこれからという頃に、1991年の日耳鼻総会における宿題報告を担当するようにとの依頼が九州大学から突然に舞い込んできた。直感的に「今は無理かな」との思いがあったので、「暫く考えさせて欲しい」と上村会長から猶予をもらい教室関係者と検討に入った。教室員から100%の賛意は得られなかったものの、むしろ若返ったこの時期こそ好機であるという意見もあって、最終的には受けることになった。この決定から既に20年が経過しているが、これは的確な判断であったと思っている。宿題報告のタイトルは「蝸牛の微細構造と音受容機構」として、物理的な振動が神経インパルスに変換される末梢の音受容機構について微細形態と細胞生理の両面から光を当てて、これまでに得られてきた研究成果と共に、最新の解析方法を駆使して得られる新しい情報を提供することにした（図6）。宿題報告の担当に際して教室の同窓会や宮城地方部会からは研究支援費として多大の寄付をいただき、後顧の憂い無く研究に没頭し、その成果をOtology Japanのsupplement、並びに2年後には英文論文集として発刊することができた（図7）。

東北大耳鼻咽喉科を日本の教室から世界にも通用する国際的な教室へと発展させようとの野望は、片桐・河本教授時代から少しずつ醸成されてきていたが、これを本格的なものに仕上げるという具体的な計画は1991年9月20日から、その第一歩を踏み出すことになった。この日、スエーデンのカロリンスカ研究所からDr. Dan Bagger-Sjöback、オランダのユトレヒト大学からDr. Jan Veldmanを招いて第1回のSendai Symposium on inner ear morphopathologyが艮陵会館で開催されたのである。国内の若手研究者に参加を呼びかけ

図6　1991年、福岡における日耳鼻総会にて宿題報告。この時は、スクリーンが3面あり、それぞれが同期して投影されるように3班のスライド担当を配置した。会場では司令塔の小林助教授以下ポインター担当など数十名が見事なチームワークを発揮して一部の隙もなく完璧に行った。

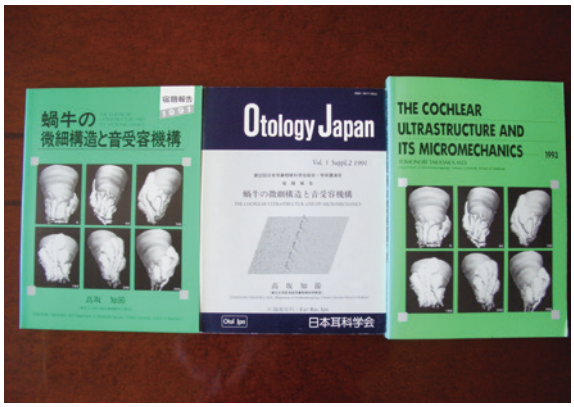


図7　3種類の宿題報告記録集。左端は、学会当日に配布された日本語バージョン。中央はOtology Japan Supplementとして後日刊行されたもの。右端は1993年に発刊された英語バージョン。

たところ、浜松医科大学、大阪大学、東京女子医科大学、大阪市立大学、自治医科大学、北海道大学、日本医科大学、広島大学、関西医科大学と本学から意欲的な研究発表が行われた。このシンポジウムの目的は、通常は日本語で発表されている優れた基礎耳科学研究を海外に向かって英語で発表して、日本の現状を知って貰おうというもので、いわば閉鎖的な空間に窓を開けようというものであった。1992 年 9 月 4 日には第 2 回 Sendai Symposium が開催され、定例化すると共に、2 年分の記録集を出版してアメリカの ARO 学会に持参して配布することにした。第 2 回の招待者はボストン・ハーバード大学の Dr. M. Charles Liberman であり、本学から留学していた川瀬哲明先生との共同研究で聴覚遠心路に関する最新の知見を持参して発表してくれた。その他にも、バッファローのニューヨーク州立大学から Dr. Eri Hashino が鳥の内耳に関する研究発表をしている。国内研究者としては、大学院で精力的に基礎研究をしていた赤池研究室の欠畑誠治、中川尚志、西山研究室の須納瀬　弘、大森研究室の吉田尚弘、外崎研究室の香取幸夫らが発表した。

1993 年からは、中国の上海、北京、韓国ソウルなどアジア各地からの出題があり、いよいよ基礎耳科学の国際シンポジウムとして成熟度を増してきた。国内からの参加者も増えて記念撮影には 80 余名の姿が写っている。この時の招待者は、外有毛細胞が電気刺激によって伸縮運動することを発見した Dr. W.E. Brownell であった。その後も、Sendai Ear Symposium は毎年開催されてその都度講演記録集を発刊してきたために世界的にも広く知られるようになった（図 8）。現在は、さまざまな理由によりこのような国際シンポジウムを開催することが困難な状況となっているが、終了後 15 年を経過した今日でも、Sendai Ear Symposium は世界各地で語り継がれ、同時にこれに参加した研究者達が東北大学や仙台の街を懐かしむ縁（よすが）となっている。

このように毎年国際シンポジウムを開催するいっぽうで、アメリカのセントピータースバークで開催される Association For Research In Otolaryngology、いわゆる ARO にも積極的に参加することにした。この学会は、1973 年に AAO-HNS から分かれて設立された基礎研究を主体とした学会である。設立に当たり、H.F. Schuknecht, J. Tonndorf, H. Davis, T. Konishi, D.J. Lim といった優れた研究業績を残した人々の貢献があったという。発足当時は、ハッピイ・ドルフィン・インという小さなリゾートホテルで行われ、T シャツ姿で発表できる気楽な雰囲気の学会であった。その後、急激に会員が増えたために会場はトレードウィンズというかなり大きなホテルへ移動した。発足から 25 年余り経過した 1997 年の ARO 学会は、演題総数 945 題となり、そのうちポスターセッションが 72%（682 題）を占めていた。ちなみに、この年の東北大学からの出題は 12 題であり、ミシガン大学の 11 題、ノースウエスタン大学の 8 題などを抜いて最多演題数となっていた。

図 8　Sendai Ear Symposium の記録集。1991 年から 2000 年までの 10 年間にわたって仙台で開催された。

第 100 回という節目の日本耳鼻咽喉科学会総

会担当が東北大学に決まったのは、平成8年の福岡総会（平野　実会長）であったが、それに先立つこと十数ヶ月前に、野村恭也理事長からヒアリングを行うという連絡を受けていた。夕闇せまる品川駅に降り立ち、正面のパシフィックホテル高層階の部屋に通され、まず野村理事長並びに数名の側近から受けた質問は、「もし、百回総会の担当をお願いするということになれば、どのような総会を考えているか」というものであった。ある程度の想定範囲内の質問ではあったが、迷わずに、思い切って「21世紀の耳鼻咽喉科を強く意識した総会にしたい」と答えた。結果論ではあるが、このヒアリングが数校の候補の中から、最終的に本学が指名を受けるための大きな関門のひとつであったことは間違いなく、福岡では、これを無事にクリア出来たという安心感とともに、重責を担う緊張感の余り心が震えてくるのを覚えた。後に、東京慈恵会医科大学名誉教授高橋　良先生から「このような希有な機会に恵まれましたという事は、歴史と伝統の元の、日頃のご修練の賜物と、ご運の良さとに由るもので御座いましょう」と丁寧なお手紙を頂いたが、まさに運命的な巡り合わせであった。

本総会の場合も、14年前の河本総会と同じように、池田勝久事務局長が詳細な記録を残している。圧巻は、第百回日耳鼻総会・準備委員会の組織表である。河本総会と同様に沖津貞夫先生に委員長を勤めていただき、それを和田俊宏、中山和彦副委員長が支えるという構成だが、豪華なのは総務（堀　克孝先生）、学術（金子　豊先生）、経理（中山和彦先生兼担）の3つの小委員会に22の担当委員会が組織され、それぞれに約60名の同窓生、医局員が張り付き、ひとりが2から3の部門を担当するという、まさに全員一丸となって勝負に出るという、強い意気込みがひしひしと伝わってくる。そして、これは単なる画餅ではない。各人が、それぞれの担当部署を必死になって担い、まさにチームワークの神髄を発揮してくれた。

募金開始は1996年8月29日とある。正式に決定した直後から、会場の確保と募金開始は、早ければ早い程良いという、伝統校ならではの言い伝えを着実に実行に移したものであろう。河本総会よりも1年早いスタートであり、その甲斐があって、結果的に募金総額は目標額を上回り、会場も国際センターの全館と隣接する宮城スポーツセンターを無事に仮押さえすることが出来た。

理事会に引き続いて行われる会長招待会は、総会の運命を左右する重大なイベントであるが、これを今は取り壊されてしまった最後の割烹料亭「八百粂」で執り行うことが出来たのは幸運としか云いようがない。かの有名な檜の能舞台上で、仙台が誇る芸妓総揚げによる豪華絢爛たる舞と謡いの数々は、外国からの賓客は当然としても、全国から集まっている理事役員の重鎮各位に強烈な印象を与えるものであった。今は亡き塚本健治先生の面目躍如というところである。

学会当日のお天気は、主催者一同が最も気にしていることのひとつであろう。昭和60年の河本総会は見事な5月晴れであった。今回は、前日が雨模様となり、気がかりであったが今回も素晴らしい晴天となった。しかも、前日の雨に洗われた新緑の見事なこと！何時も見慣れている青葉城趾、東北大学植物園そして大手門付近の緑が実に美しく、参加者の皆さんから絶賛を浴びることになった。開催日を決めるときの苦労話は、橋本　省先

生が医局検査室担当の山口和美（現小川夫人）さんに仙台管区気象台に出向いて貰い、過去30年の記録と20年のデータを元に、エビデンスに基づく会期決定をしたという苦心の秘策を披露している。これひとつを取り上げても、各人がそれぞれの持ち場で最大限の努力を払っていることがよく分かる。

100回記念の総会ということで、何か記念になるものがないかと思案していたが、平成9年12月に開かれた準備委員会で「日耳鼻総会百回のあゆみ」編纂の話題が提案された。委員会の反応はあまり芳しいものではなかったが、髙坂教授が日本耳鼻咽喉科学会百年史の担当理事となって編纂した経験から、これまでの学術集会に関する資料がオフィシャルな「九十年史」と「百年史」では分散的に記述されていて、統一感が無く分かり難いので、これを1冊の冊子に纏めて残すことは大いに意義のある仕事であるという見解を述べたところ、「それだけ会長が主張するのであれば小委員会を組織して難事業に挑戦しよう」ということになった。担当には、佐々木美隆先生がチーフとなり数名が委員に選出されたが、おそらく選ばれた皆さんはかなりの重圧を感じたことであろう。このような冊子の編纂はこれまでの総会担当校の協力無くして不可能であり、まずは理事会の了承と、各大学への協力依頼が最初の仕事となった。幸い、全ての担当校から原稿や資料の提供に協力するとの返事を戴いて着手したが、期限が来てもなかなか原稿が集まらないという苦労を乗り越え、ようやく目途が立ちそうになったのが平成11年3月のことである。編集に当たったスタッフ15名とともに巻末に載せる記念写真を撮り終えたときには、万感胸に迫るものがあった。それにしても、同門の本郷直喜先生と多田慎吾先生が残された日耳鼻学会参加報告記（第36回、37回、38回、39回）が、欠如した記録の穴を埋めて甦り、全国の耳鼻咽喉科医の手元に届けられたことは、後輩のひとりとしてこの上ない喜びとなっている。

もうひとつの印刷物として好評を博したのは、いわゆるポケットプログラムである。これを作ろうという案が出されたのは平成10年の学術小委員会だったと担当責任者の沖津卓二先生が回顧しているが、それにしても凝りにこった内容である。まず、6つの会場がそれぞれの色に分類されて、その色のラインが日程表、群別時間割表、各頁のヘッダーに印刷されている。各会場の数字を読むのではなくて、色によって直ちに認識できるようにとの心憎いばかりの配慮である。巻末には、カラー刷りの分かり易い地図、ホテル所在地、グルメ、観光とサービス精神が旺盛。しかも、出来合いの資料をそのまま転写せずに、3人の美女（佐々木和子先生、矢尾板範子先生、青葉祐子先生）が自らの脚で歩いて確かめた「ゆうゆう仙台」という愛情溢れる道案内が心地よい。これに誘われて、暗い会場から逃れて、学会周辺には多くの会員があちらこちらへと散策したに違いない。

第100回という記念すべき節目の学会であるにも関わらず、日耳鼻理事会は6年前に創立百周年記念行事が終わっているという理由で、祝賀関係の式典その他100回を祝うイベントの企画には極めて消極的、あるいは否定的であった。

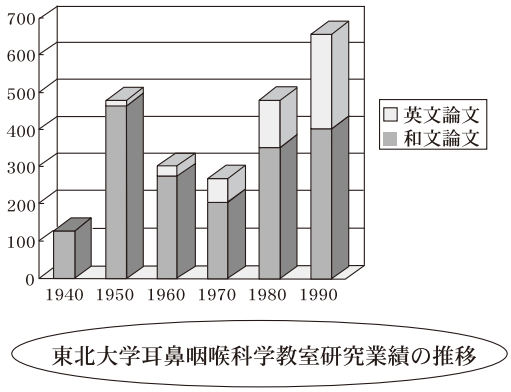
学会最終日の市民公開講座「癌を考える」は、当初100回記念市民公開講座とするつもりで、理事会に諮ったが承認されず、結局は学会の正式なプログラムから外して、「第100回日本耳鼻咽喉科学会開催記念講演会」と銘打って、東北大学の責任で行うことに

なった。更に、学会冒頭の開会式も、特別な企画を入れずに、通常の学会と同様の会長挨拶のみ行うようにとの指示が出されていた。従って、われわれが誇る東北大学交響楽団による祝賀演奏も、開会式ではなくて、やるとすれば別の機会を探さなければならなかった。

苦肉の策として、会員懇親会を「第100回総会祝賀パーティ」と銘打って、冒頭に祝賀コンサートを企画し、八木沼裕司先生が担当となって準備した。当日は、元団員である髙坂知節会長（チェロ）、新川秀一教授（バイオリン）、八木沼裕司先生（ファゴット）の3名が入って、モーツアルトのディヴェルティメント、ヘンデルの水上の音楽の2曲を演奏した。会場が宴会前のため少々騒がしかったが、熱心に聴いていただき大好評のうちに演奏を終えることが出来た。卒業以来、37年振りの現役復帰であり、学生諸君との協演は、まさに会長冥利に尽きる想い出のひとときとなった。

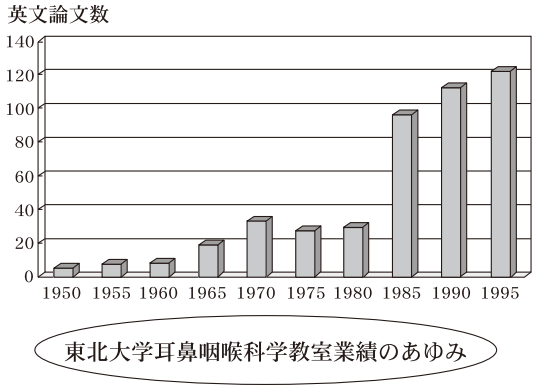
また、この懇親会には、亡き父（髙坂知甫）が車椅子に乗って参加し、多くの先生方と親しく話しができたことも忘れられない想い出である。父は、6ヶ月後の11月に脳梗塞で他界したので、これが最後の日耳鼻参加となった。いずれにしても、第100回総会が滞りなく好評のうちに終了したことは、教室員諸君は勿論のこと、同窓の諸先生、地方部会の諸先生など、実に多くの皆さんの献身的な努力の賜物であり、この機会に心からの感謝を表したい。

髙坂教室時代に海外留学した教室員は、大山健二（86）、朴澤孝治（86）、池田勝久（87）、高橋邦明（87）、稲村直樹（88）、鈴木秀明（86）、川瀬哲明（90）、綿谷秀弥（90）、志賀伸之（91）、田中正浩（92）、佐竹充章（93）、古川加奈子（93）、須納瀬弘（93）、欠畑誠治（93）、鈴木雅明（94）、香取幸夫（94）、草刈千賀志（95）、高橋　辰（95）、千葉敏彦（95）、東海林　史（96）、吉田尚弘（97）の21名に上っている。これに連動するように、英文論文による発表も増加し、15年間の総数は310編、年間平均21編、最も多い年（1991）は30編となっている（図9）。これらの英文論文の中には、電子顕微鏡下の連



東北大学耳鼻咽喉科学教室研究業績の推移

1940年から10年毎の論文数。1950年代に和文論文が急増したが、その後はやや低迷し、1980年代からは英文論文数が伸びた。



東北大学耳鼻咽喉科学教室業績のあゆみ

5年毎に詳しく見ると、英文論文数は海外留学が始まった1965年代から増加傾向を示し、1985代からはSendai Ear Symposiumの主催などが契機となって著しく増加している。

図9

続切片をコンピューター上で再構築し立体画像化して解析する手法を開拓した論文や、Brain4 ノックアウトマウス難聴の原因が蝸牛側壁の繊維細胞系の変化によることを明らかにしたサイエンス誌掲載論文など、現在も盛んに引用されて世界から注目されている論文などが含まれている。

なお、髙坂教室時代に医学博士の学位を授与された者は 50 名、入局者総数は 78 名である。教授に就任してから今日まで、医育機関に残り後進の指導に当たってきた教室員は 30 名（26%）であり、その内訳は教授が 17 名｛草刈　潤、小林俊光、新川秀一、原　晃、池田勝久、鈴木秀明、川瀬哲明、須納瀬　弘、欠畑誠治、志賀清人、鈴木雅明、本橋（永渕）ほづみ、高卓（鄭）　輝、松浦一登、香取幸夫、大島猛史、吉田尚弘｝准教授 4 名｛小池修治、横山純一、古川正幸、日高浩史｝その他 9 名である。また、教室を出て病院勤務医として活躍しているのは 26 名（22%）、そして開業医として地域医療に貢献しているのは 60 名（52%）と約半数をしめている。

かくして、髙坂教授は、約 15 年間にわたり教室の活性化のために全力疾走した後、2000 年 3 月には東北大学を停年退官した。引き続き、同年 4 月からは仙台逓信病院長として郵政民営化の荒波を乗り切るというミッションを全うし、2005 年停年退官となった。さらに、同年 4 月からは、経済破綻した医療系大学を再建するという難事業に挑む学長への就任を要請され、これを受諾し、2011 年の東日本大震災という未曾有の災害を乗り越えて、2013 年の任期満了までの 8 年間（最後の 2 年間は副理事長）を全うした。現在は、河北診療所耳鼻咽喉科の院長として、日常診療を行いつつライフワークの難聴者救済のために余生を捧げている。

小林俊光教授の時代（2001 年～2013 年）

高坂知節教授の退任後 2000 年（平成 12 年）4 月から 1 年間のブランクを経て、2001 年（平成 13 年）5 月 1 日、東北大研究科教授の辞令を受けた。本務は長崎大学のままの兼務としての発令であったが、10 月 1 日より本務が東北大、兼務が長崎大となり併任は 2002 年 3 月まで続いた。第 2 代立木　豊教授（68 頁図 1）が長崎大から東北大に転任されたのが 60 年前であり、巡り合せに身が引き締まる思いであった。5 月 1 日の着任当日、艮陵会館にて教室と関連病院の方々に集まっていただき、教室運営の方針を「これからの教室が目指すもの」として述べまとめを配布した。教室員同志が仲良く助け合う雰囲気の良い教室、そこから人が育ち教室も伸びて行く、「明るく開かれた教室」を目標として掲げた。この年の入局者は 6 名（織田　潔、郭　冠宏、中谷理恵子、馬場　保、堀　容子、宮﨑真紀子）であった。

2002 年（平成 14 年）4 月には 9 名の入局者（天野雅紀、菊地俊晶、北村（柴原）みわ、堀　亨、水谷　伸、宮﨑浩充、矢野寿一、吉崎直人、野村和弘）を迎えた。臨床教授は沖津卓二、臨床助教授は小野寺　亮、大山健二の各先生であった。同 5 月 16 日東京で開催された日耳鼻総会で弘前大学新川秀一教授が「蝸牛における情報伝達のしくみ」と題する宿題報告を発表し聴衆に感銘を与えた。同 5 月 24 日第 87 回東北医学会にて「耳科学の常識と非常識」、7 月 13 日、東北連合学会（福島）にて「内耳研究と中耳・側頭骨疾患へのアプローチ」と題する教授就任講演を行った。長崎大在任中に主催が決まっていた 2 つの学会を仙台にて開催した（平成 14 年 10 月日本聴覚医学会、平成 15 年 1 月日本頭頸部外科学会）。

この平成 14 年から医学部 5 年生に対する開業医研修（スタート時は武山　実、柴原義博、草刈千賀志、神林潤一各医師の 4 医院、以後、鈴木直弘、綿谷秀弥、陳　志傑、中林成一郎、千葉敏彦、古川加奈子各医師の医院が参加）を開始した。また、手術映像を医局・病棟・教授室の 3 ヵ所に常時配信できるようにした（69 頁図 2）。手術画像のケーブルによるリアルタイム送受信は当時としてはまだ珍しく、敷設費用も約 1 千万円と就任当時の乏しい医局財政の大半を費やしたが、学生教育、教室員の手術手技向上に大いに役立ち、10 年以上経過しても活発に使用されており、インフラ整備として有効であった。

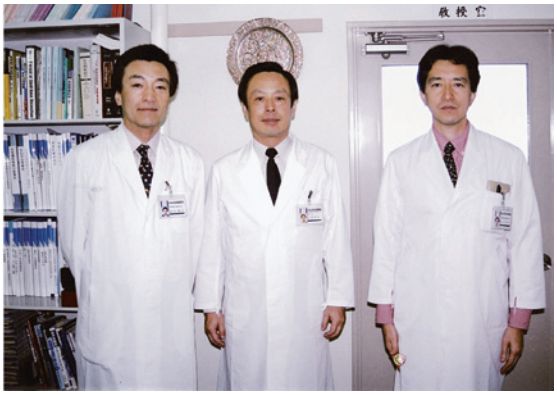


図 1　2003 年 11 月 1 日、池田勝久教授、鈴木秀明教授就任。（赴任前に教授室前にて）

2003 年（平成 15 年）には 4 名（清川裕道、高田雄介、中目亜矢子、長谷川　純）が入局した。この秋には、池田勝久助教授と鈴木秀明講師がそれぞれ順天堂大学教授、産業医科大学教授に選任され教室を一気に活気づけた（図 1）。両教授就任祝賀会は 10 月 12 日にホテル仙台プラザにて 140 名余の参加を得て行

われた。両先生の栄転により、助教授：川瀬哲明・菊地俊彦、講師：志賀清人、大島猛史（翌年より）という陣容になった。同年1月、工藤貴之先生が「GJB2 遺伝子変異による難聴の病態解析」の研究で東北大学医学部奨学賞銀賞を受賞した。この年、聴神経腫瘍研究会、耳鼻咽喉科感染症研究会、エアロゾル研究会、日耳鼻専門医講習会などを担当した。

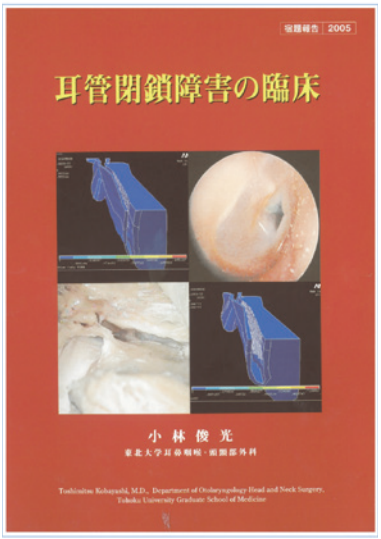


図2　宿題報告モノグラフ「耳管閉鎖障害の臨床」（2005年5月）

2004年（平成16年）新医師臨床研修が義務化されたため、新卒入局者は無く、外科を3年経験した1名（片桐克則）の入局となった。

2005年（平成17年）4月の入局者は3名（臼渕　肇、牛来茂樹、佐藤美香）で、前年と同じ理由で新卒入局者は無く、すでに複数年、耳鼻咽喉科または他科で経験を積んだ方々であった。7月に東北連合学会を担当したが、この年の最大の事業は平成17年5月20日第106回日耳鼻総会（大阪国際会議場）での宿題報告「耳管閉鎖障害の臨床」担当であった（図2、70頁図3）。遡ること1年半、平成15年秋に会長の大阪大学久保　武教授から電話があり打診を受けた。テーマの指定はなかったが、悩んだ末、過去に取り上げられたことがほとんどなく、未解明のテーマである理由から耳管開放症に決めた。関連する臨床的仕事は多少していたとはいえ、研究手法を一から編み出さねばならず、成算のない行き先不明の航海のようであった。準備過程は平成17年の同窓会誌に「宿題報告を終えて：宿題報告は冒険」に記している。読み返すと、教室諸氏の役割分担と活躍の詳細が分かり、教室一丸の切迫感と悲壮感の日々が蘇る。とくに「モノグラフ最終校正の一夜」は誰にとっても忘れがたいものであろう。

準備開始から数カ月は、糸口がつかめず途方に暮れていた。耳管開放症患者の観察から自声強聴がキーポイントであることに気づき、この症状に主たるターゲットを絞ることで仕事が進んだ。音響学的診断法、座位CTの使用、耳管ピン挿入術などを開発し確立した。これらは、欠かせない医療として定着しつつある。また、鼻すすり型耳管開放症に関する知見を増やし、隠蔽性耳管開放症の新たな概念を提唱した。以上の成果は18編の英文論文として順次発表された。なお、当日のコンピュータープレゼンテーションを作成したのは小倉正樹先生であった。「時限爆弾を背中に背負っているような切迫感と悲壮感がありましたが、終わってみれば大変良い経験をして、自分自身の中にあった、いくつかの謎も解決されて、幸せでした」と平成17年同窓会誌巻頭言に記している。川瀬哲明准教授以下、教室の諸君に心から感謝している。

この2005年（平成17年）には、医学部5、6年生による教育評価（講義・実習）で耳鼻咽喉・頭頸部外科が臨床系1位（評価主体である総合診療部を除く）となり第1回東北大学医学部教育貢献賞を受賞した。講義や実習を担当した教室や関連病院のスタッフ、開業医実習や病院実習を担当した非常勤講師、臨床教授・助教授など、多くの関係者の熱意によるものである（70頁図4）。

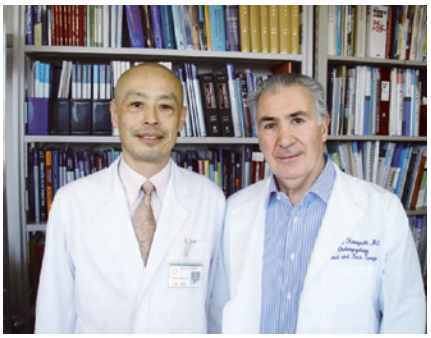


図3　マリオ・サンナ教授来院・執刀（2006年）

2006年（平成18年）の入局者は6名（石田英一、大越　明、織田一葉、大島英敏、澤田朋啓、牧　敦子）であった。4月、西條　茂先生が宮城県立がんセンター院長（平成23年4月より総長）に就任された。この年、文部科学省から教育研究費約2億円（4年間合計）の助成を受け、聴性脳幹インプラント（ABI）における聴き取り改善の研究を川瀬哲明准教授とともに行った。4月、日韓耳鼻咽喉科学会（釜山）における特別講演で「耳管開放症」を講演した。この頃から、全国各地や韓国から、耳管開放症の患者が多数受診するようになった。12月4日～6日、マリオサンナ教授（イタリア）が来訪し、聴神経腫瘍と聴性脳幹インプラントに関する講演を行うとともに、東北大学病院手術室にて拡大経迷路法による聴神経腫瘍摘出術を披露し（図3）、摘出の模様は医局にも中継された。神経線維腫NF2で両側術後残存側の難しい症例であったが、見事な手術で腫瘍は全摘され顔面神経は温存された。両側聾であったためABI挿入も予定されていたが、患者が直前に希望を取り消したためにこれは中止された。この年の海外からの来訪者（講演内容）に、蔡銘修教授（台湾：口腔癌）、マーカス教授・ワンゲマン教授夫妻（アメリカ：内耳生理）などがあった。また、この年、小野寺　亮先生が長年の東北公済病院での鼻副鼻腔疾患への取り組みが評価され仙台市医師会学術奨励賞を受賞された。

2007年（平成19年）の入局者は8名（池田怜吉、乾　智一、小澤大樹、角田梨沙子、鈴木　淳、髙梨芳崇、八幡　湖、山﨑宗治）であった。5月、日耳鼻総会にて、耳鼻咽喉科医の減少傾向に歯止めをかけるべく、シンポジウム「耳鼻咽喉科医の育成を目指して」が行われ、神林潤一先生（臨床教授、宮城県耳鼻咽喉科医会長）とともに登壇した。神林先生は開業医実習が学生に好評で、耳鼻科入局の動機付けになることを述べ、小林は入局者を動機別に、サケ・マス型（地元に戻ってくる）、昆虫型（光の明るい都会に集まる）、彼氏・彼女型（パートナーの出身地について来る）に分類するとともに、耳鼻咽喉科医増加のための提言を行った。6月、小児耳鼻咽喉科学会、11月、日台耳鼻咽喉科学会議をそれぞれ主催した。

図4　病院玄関前にて（2006年）

2008年（平成20年）には3名（荒川一弥、太田　淳、髙田（青柳）生織）が入局した。4月1日、川瀬哲明准教授が、東

北大学医工学研究科聴覚再建医工学分野教授に就任した（図5）。祝賀会に先立ち記念講演会が開催され、川瀬教授の記念講演とともに、教室初代和田徳次郎教授の母校である東京大学の山岨達也教授、二代目立木　豊教授の母校である九州大学の小宗静男教授が記念講演を行った。また、同じ4月1日付で、NTT東北、仙台市立病院などで活躍された沖津卓二先生が東北文化学園大学教授（医療福祉学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻）に就任された。6月14日岩手・宮城内陸地震が発生。直後にトルコの国際真珠腫学会に出席して、日本耳科学会セッションの司会を担当した。Video presentations introducing the originality in otology in Japanと題して、日本の独創的な耳科医療をビデオで紹介したが、最終日の総評で同セッションと日本の耳科学の独創性への称賛のコメントがあった。日本耳科学会理事会の承認を経たプログラムには、東北大関係者も多くその独創性を誇らしく感じた。12月、小川武則先生の努力によって科独自のホームページが初めて制作された。ホームページが外部への広報に役立つことは勿論だが、教室業績の集積など内部の利便も大きいと感じた。この頃、医局行事としてフットサル、野球、テニスなどのスポーツイベントが盛んに行われた。艮陵新聞（2010年9月20日発行）が当時の教室の様子を伝えている。

図5　川瀬哲明教授就任祝賀会にて（2008年）

2009年（平成21年）には8名（奥村有理、鹿島和孝、齋藤大輔、佐藤宏樹、野口直哉、原　陽介、東　賢二郎、本藏陽平、森田真吉）が入局した。年初から、新型インフルエンザの流行が社会を揺るがす大問題となり、韓国の国際中耳炎学会に参加した大島猛史准教授、宮﨑真紀子氏らの教室員が帰国後に、感染防止のために病院長より一週間出勤停止を命じられる事態となった。5月の第110回日耳鼻総会（慈恵医大、森山　寛会長）も一時は危ぶまれたが無事に開催され、原　晃筑波大教授が長年の研究成果を宿題報告「内耳性難聴の治療に向けて ― 病態モデルを用いたアプローチ ―」として集大成し発表され高い評価を受けた。10月の日本耳科学会（東京医科歯科大、喜多村　健会長）で「私のワースト手術」というシンポジウムを司会した。耳科手術の達人とされる4教授をシンポジストとし、それぞれの失敗例をビデオで披露して、聴衆参加型で討議するという型破りなシンポジウムであった。聴神経腫瘍術中に震度5の大地震に遭遇したビデオを供覧し、司会者のイントロとした。4人のシンポジストの症例提示はいずれもインパクトが強く、記憶に残るシンポジウムとなった。仙台では当時も大きな地震が時折経験されていたが、後に発生した東日本大震災の前兆であったのだろう。12月、耳管開放症に対する新しい診断・治療法を日台耳鼻咽喉科会議で特別講演した。また、この頃から川瀬哲明教授と交互に沖縄県立中部病院に出張して耳科手術を行い、若手教室員を同行して教育するとともに現地医師と交流を深めた。

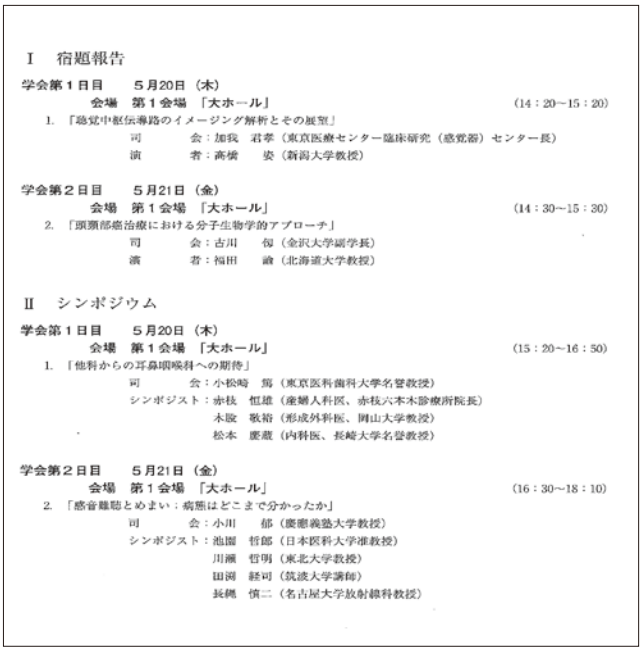
2010年（平成22年）は1名（河本　愛）の入局となった。この年には、第111回日耳鼻総会を仙台国際センターにて主催した。堀　克孝委員長、沖津卓二、神林潤一両副委員

長、大島猛史事務局長をはじめとする準備委員会（図 6）による周到な準備のもとに開催された。参加者は約 3,500 名であった。プログラムは学術委員会（朴澤孝治委員長）を中心に作成された（図 7）。東北大学の川島隆太教授による特別講演「スマートエイジング」、Mario Sanna 教授の側頭骨頭蓋底外科に関する招待講演（図 8）、「他科からの耳鼻咽喉科への期待」（図 9）「感音難聴とめまい：病態はどこまで分かったか」の 2 つのシンポジウム、パネルディスカッション「わが国における頭頸部癌診療をどのように構築すべきか」などが企画され、高橋　姿新潟大教授、福田　諭北大教授による宿題報告が講演された。

委員長	堀 克孝		
副委員長	沖津卓二、神林潤一		
顧問	河本和友、髙坂知節		
委員	佐々木 美隆、渡辺孝志、湯浅 涼、菊田宣男、相馬 廉、中川 悖、佐藤良樹、小野寺亮、角 安雄、西條 茂、柴原義博、六郷正暁、松谷幸子、荒川榮一、栗田口敏一、大山健二、橋本 省、稲村直樹、遠藤里見、朴沢 孝治、川瀬哲明、武山 実、三好 進、八木沼裕司、大島猛史、鈴木直弘、綿谷秀弥、草刈千賀志、高橋由紀子、香取幸夫、吉田尚弘、中林成一郎、松浦一登、入間田美保子、佐藤利徳、千葉敏彦、志賀清人、田畑邦次		
事務局長	大島猛史		
学術	沖津卓二	学術委員会（ポスター委員会）	朴沢孝治、志賀清人、綿谷秀弥、佐藤利徳
		器械展示委員会	中林成一郎、遠藤里見、武山 実
		広報委員会	田畑邦次、荒川榮一、大山健二
総務	神林潤一	評議員会	川瀬哲明、柴原義博
		懇親会委員会	橋本 省、六郷正暁、入間田美保子
		記念品委員会	草刈千賀志、高橋由紀子
		観光委員会（飲食マップ含む）	綿谷秀弥、松谷幸子、栗田口敏一
		宿泊・交通委員会	香取幸夫、八木沼裕司
		招待者委員会	稲村直樹、吉田尚弘
		イベント委員会（野外休憩所含む）	鈴木直弘、三好 進、松浦一登
経理	堀 克孝	募金委員会	柴原義博
		経理委員会	小野寺亮、千葉敏彦
監事	佐々木美隆、佐藤良樹、角 安雄		

図 6　第 111 回日耳鼻総会・準備委員会

仙台国際センター 1 つの会場だけでは手狭であることが予測されたため、当初、新設の東北大学萩ホールとの 2 会場案が検討された。しかし、交通量の多い道路を挟む移動は危険も伴うことから断念し、仙台国際センター中庭に商業用大型テントを張って野外休憩所とし、野立て、牛タン等の仙台名物提供を行い、同時に広さを演出する企画が好評であった。地下鉄東西線は工事中で青葉通りの渋滞の原因となっており、初日はとくに会場へのアクセスに問題があった。将来の総会では、地下鉄東西線も開



Ⅰ　宿題報告

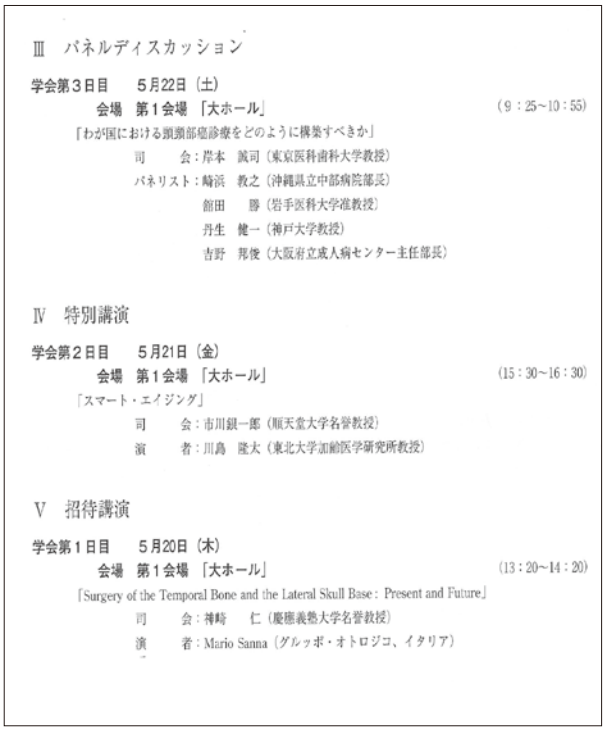
学会第１日目　５月20日（木）
会場　第１会場「大ホール」　（14：20～15：20）
1.「聴覚中枢伝導路のイメージング解析とその展望」
司　会：加我　君孝（東京医療センター臨床研究（感覚器）センター長）
演　者：高橋　姿（新潟大学教授）

学会第２日目　５月21日（金）
会場　第１会場「大ホール」　（14：30～15：30）
2.「頭頸部癌治療における分子生物学的アプローチ」
司　会：古川　仭（金沢大学副学長）
演　者：福田　諭（北海道大学教授）

Ⅱ　シンポジウム

学会第１日目　５月20日（木）
会場　第１会場「大ホール」　（15：20～16：50）
1.「他科からの耳鼻咽喉科への期待」
司　会：小松崎　篤（東京医科歯科大学名誉教授）
シンポジスト：赤枝　恒雄（産婦人科医、赤枝六本木診療所院長）
木股　敬裕（形成外科医、岡山大学教授）
松本　慶蔵（内科医、長崎大学名誉教授）

学会第２日目　５月21日（金）
会場　第１会場「大ホール」　（16：30～18：10）
2.「感音難聴とめまい：病態はどこまで分かったか」
司　会：小川　郁（慶應義塾大学教授）
シンポジスト：池園　哲郎（日本医科大学准教授）
川瀬　哲明（東北大学教授）
田岡　経可（筑波大学講師）
長縄　慎二（名古屋大学放射線科教授）



Ⅲ　パネルディスカッション

学会第３日目　５月22日（土）
会場　第１会場「大ホール」　（９：25～10：55）
「わが国における頭頸部癌診療をどのように構築すべきか」
司　会：岸本　誠司（東京医科歯科大学教授）
パネリスト：崎浜　教之（沖縄県立中部病院部長）
館田　勝（岩手医科大学准教授）
丹生　健一（神戸大学教授）
吉野　邦俊（大阪府立成人病センター主任部長）

Ⅳ　特別講演

学会第２日目　５月21日（金）
会場　第１会場「大ホール」　（15：30～16：30）
「スマート・エイジング」
司　会：市川銀一郎（順天堂大学名誉教授）
演　者：川島　隆太（東北大学加齢医学研究所教授）

Ⅴ　招待講演

学会第１日目　５月20日（木）
会場　第１会場「大ホール」　（13：20～14：20）
「Surgery of the Temporal Bone and the Lateral Skull Base：Present and Future」
司　会：神崎　仁（慶應義塾大学名誉教授）
演　者：Mario Sanna（グルッポ・オトロジコ、イタリア）

図 7　第 111 回日耳鼻総会主要プログラム（2010 年）

業し、国際センターや萩ホールが使いやすい会場に生まれ変わっていることであろう。

2011年（平成23年）1月には小川武則先生が「マイクロアレイを用いた頭頸部癌におけるシスプラチン感受性予測・耐性獲得に関する研究」で東北大学医学部奨学賞銀賞を受賞。3月11日に起こった東日本大震災のために1ヵ月遅れて5月に3名（石井　亮、舘田　豊、橋本　研）が入局した。当時はまだ医局のある3号館への立ち入りが禁止された状態で、病棟の仮医局で生活する日々だったから、彼らにとっては戦時中もかくやと思うような異常事態下での入局であった。大震災による教室の甚大な被害に対して、全国の耳鼻咽喉科医から様々な援助を受けたことを忘れてはならない。とくに、SPIO（野村恭也理事長）の呼びかけに応じて、全国から多額の寄付をいただき早期に研究再開が可能となった。また、長崎大学同門会をはじめとして、各地の地方部会、医会、あるいは個人の方々からも激励とともに寄付や様々な支援物資をお送りいただき、大変ありがたいことであった。震災直後の教室の様子は平成23年同窓会誌に見ることができる（資料：59頁参照）。

図8　招待講演のマリオ・サンナ教授へ感謝状と記念品贈呈。中央は袴姿の東賢二郎先生

図9　シンポジウムIの終了後に司会者と演者。前列左より松本慶蔵、赤枝恒雄、後列左より小林、小松崎篤、木股敬裕の各氏

このような大震災直後の苦難の中、弘前大学准教授であった欠畑誠治先生の山形大学教授、志賀清人講師の岩手医科大学教授への就任（いずれも7月発令）が決まった。前年末に東京女子医大東医療センター教授に就任していた須納瀬　弘先生を加えた三教授就任祝賀会が9月11日に開かれ、震災で沈みがちの教室ならびに同窓会を一気に明るくした（図10）。11月には沖縄に会場を移して第21回日本耳科学会を開催した（図11）。震災直後の3月末、大島猛史准教授と学会会場となる予定であった仙台国際センター、懇親会会場となる予定のホテルメトロポリタン仙台の被害状況を視察した。仙台国際センターの被害は軽いようだった。しかし、全市にわたる甚大な被害の中で（優先順位が高いとはいえないセンターの）復旧の目途は立っていないと係員にいわれた。一方、ホテルメトロポリタン仙台は、誰もいないロビーに天井から崩落したロープが見えた。新幹線は止まっており、津波の押し寄

図10　三教授就任祝賀会　2011年9月11日

学会前日の教室関係者

学会会場

懇親会でのアトラクション

図 11　2011 年 11 月　日本耳科学会（沖縄）

図 12　NHK ためしてガッテン
急増！　謎の耳詰まり病（2012 年 9 月 12 日）。番組収録後、巨大耳管模型の前で小野文恵アナウンサーと。

せた仙台空港も閉鎖されている。招待講演を依頼していたドイツのヘルムス教授に、予定通りの学会開催予定を伝えたが、「冗談を言っているのか」というメールが届いた。後から考えれば当然のことであった。海外での方が、国内よりも、福島原発事故の深刻さが正しく報道されていたのだった。いよいよ会場を仙台以外に移す腹を固めた。秋の聴覚医学会（九州大、小宗静男会長）が博多なので、これと同時開催する福岡案も模索したが、最終的に沖縄を選んだ。川瀬哲明教授からの提案がきっかけとなった。数年前から沖縄県立中部病院（崎浜教之科長、当時）に定期的に川瀬教授と交互に手術に行っていたこともあったが、原発事故の先行きが不透明な中、仮医局で鬱々としていた私達にとって、明るい沖縄の太陽が何よりも必要と思えたことが最大の理由であった。崎浜教之先生や琉球大学鈴木幹男教授の支援もいただき同学会を無事に遠隔地の沖縄で開催することができた（図 11）。同学会では、日本耳科学会として初めての企画となる会長講演を喜多村健理事長から依頼され、「蝸牛電気生理から耳科臨床へのフィードバック：新しい人工内耳時代に向けて」を講演した。

2012 年（平成 24 年）新入局者なし。原発事故の影響で福島県のみならず宮城県の病院も研修先として敬遠された。南三陸耳管ミニシンポジウム 2012 を開催し、全国の耳鼻科医とともに被災地視察と耳管開放症の診断基準の討論を行った（73 頁図 6）。9 月 12 日には耳管開放症が NHK の人気番組「ためしてガッテン」で取り上げられた（図 12、73 頁図 7）。当教室の取材に基づく番組で小林がスタジオ出演した。患者自身の苦しさが他人には理解されにくい耳管開放症をマスコミが詳しく取り上げたのは初めてのことで反響も大きかった。一般人の理解が進むものと期待された。

2013 年 2 月 15 日、退職教授最終講義の演題名は「耳管開放症と側頭骨外科 ― 私のライフワークの見つけ方」とした（東北医誌 125：35-38, 2013）。勤務最終日は 3 月 29 日（金）であり、2 例の真珠腫性中耳炎を執刀した（図 13、14）。

（担当期間のまとめ）

担当期間は 11 年 11 か月であったが、うち 2 年間は卒後研修制度の変化で新卒入局者が無かった。また、東日本大震災の 2011 年と翌年に入局者の減少に見舞われた。総入局者は 53 名であった。海外留学者は 20 名（延べ数）、国内留学者 3 名、英文論文数 180 篇であった。担当期間中の学位取得者は 35 名であり、学位論文タイトルから、耳科学・聴覚学以外にも頭頸部腫瘍、感染症など、耳鼻咽喉・頭頸部外科領域の広範な活動が行われたことが分かる。

図 13　勤務最終日、2 例の真珠腫執刀後
2013 年 3 月 29 日（金曜日）ザールにて

関連病院は集約化を行い、一人勤務病院を極力減らした。河本教室以来、関連病院の充実は当教室の誇りである。小林教室時代においても関連病院の科長には、各領域のスペシャリストが揃い、優れた科長の下、レベルの高い地域医療と後進の教育が行われた。この充実ぶりはしばしば、他大学からの羨望の的となった。すなわち、頭頸部癌では宮城県立がんセンターの西條　茂先生、松浦一登先生、仙台医療センターの舘田　勝先生、人工内耳では東北労災病院の大山健二先生、聴神経腫瘍では仙台医療センターの橋本　省先生、聴覚学では仙台市立病院の沖津卓二先生、音声・嚥下では仙台市立病院（当時、現教授）の香取幸夫先生、仙台社会保険病院（現、JCHO）の朴澤孝治先生、鼻科手術では東北公済病院の小野寺　亮先生、吉田尚弘先生、仙台市立病院の千葉敏彦先生、腫瘍免疫・感染症では東北厚生年金病院の粟田口敏一先生、東海林　史先生、小児中耳炎では東北労災病院の末武光子先生、入間田美保子先生、NTT 東北病院の八木沼裕司先生、好酸球性中耳炎では仙台赤十字病院の松谷幸子先生など、各領域のエキスパートとして全国的にも

図 14　2013 年 3 月 31 日（日曜日）
勝山館での退職祝賀会前に大学病院中央廊下にて

著名な方々が科長に目白押しであったことによる。

その他、特筆すべきは教室から遠隔の地域医療を支えた方々である。昭和50年以降をみても、長井市立病院（山形県）の横瀬宏允先生、いわき共立病院（福島県）の桜井時雄先生、豊島　勝先生、舘田　勝先生、牛来茂樹先生、気仙沼市立病院の鈴木　茂先生、山形市立済生館の小林信一先生、遠藤里見先生、志賀伸之先生、佐々木高綱先生、公立相馬病院の長谷川　純先生などが、長期に地域医療を担うとともに後進の教育に尽力された。各先生のご貢献に心から感謝したい。

医局長は教室の要であり、多方面の調整など難しい仕事も多く激務である。2001年5月就任時の川瀬哲明医局長に始まり、千葉敏彦、大島猛史、志賀清人、香取幸夫、日髙浩史、浅田行紀、工藤貴之、鈴木貴博（就任順）の9名の先生方に務めていただいたが、いずれも持ち味を発揮され名医局長として貢献された。ここに感謝の意を表したい。

海外留学者（留学先）は以下である。2002年：菅原　充（ハーバード大）、2003年：古川正幸（UCSDサンディエゴ）、日髙浩史（ジョンスホプキンス大）、吉田尚弘（デューク大）、山内大輔（カンザス州立大）、2004年：志賀清人（イタリア・スイス・ニューヨーク・ヒューストン）、2005年：野村和弘（カンザス州立大）、2006年：髙田雄介（ピアチェンツァ、イタリア）、2007年：宮﨑浩充（カンザス州立大）、2008年：工藤貴之（カンザス州立大）、2009年：山﨑宗治（カンザス州立大）、2010年：臼渕　肇（ハーバード大）、小川武則（ジョンスホプキンス大）、2011年：髙田雄介、髙田生織（ピアチェンツァ）、2012年：石田英一（ピアチェンツァ）、池田怜吉（UCSDサンディエゴ）、大島猛史（ピアチェンツァ）、山﨑宗治（ピアチェンツァ）、2013年：野村和弘（ヴァレーゼ、イタリア）。

在任期間中の教室在籍者から多くの教授が誕生した。本学医学部教授は香取幸夫教授、川瀬哲明教授（医工学研究科）の2名である。池田勝久教授（順天堂大）、鈴木秀明教授（産業医大）、志賀清人教授（岩手医大）は教室から他大学への栄転、欠畑誠治教授（山形大）、須納瀬　弘教授（東京女子医大東医療センター）、鈴木雅明教授（帝京大千葉医療センター）は一度他大学に出てからの栄転であった。この他、飯野ゆき子教授（自治医大さいたま医療センター）の昇任、沖津卓二教授（東北文化学園大学）の誕生も在任期間中にあった。さらに、2013年4月には松谷幸子教授（東北文化学園大学）、香取幸夫教授就任後には松浦一登教授（2014年4月、東北大学大学院連携講座）、矢野寿一教授（2014年5月、奈良県立医大微生物感染症学講座）、大島猛史教授（2014年11月、日本大学）、吉田尚弘教授（2015年4月、自治医大さいたま医療センター）がそれぞれ誕生した。

多数の教授昇任の栄誉はそれぞれ個人に帰すべきものであるが、教室主宰者として責任の一端を果たせたことに安堵し感謝している。しかし、元を辿れば、これら俊英が卒業時の進路選択時に魅力ある耳鼻咽喉科学教室であったことが何よりも重要なことである。したがって、彼らに入局を決意させた魅力ある教室を運営していた当時の教授（河本和友教授、髙坂知節教授）の功績が大きいと思う。さらに元を辿れば、アカデミックかつ楽しい教室の伝統を醸成した100年間の同門全員の功績として祝したい。今後もこのような教室の伝統が維持されることを期待する。

資料：東日本大震災直後の医局（2011 年同窓会誌 巻頭言より抜粋）

巻頭言（一年を振り返って）

小　林　俊　光（昭和 50 年入会）

大変な年が終わろうとしています。

悟ったこと。大自然の想像もつかない大きさと、人はそれでも生きていくということ。皆が口にする言葉が「生きているうち」。好きなことをして、友人、肉親とも会っておこう。そして、皆、涙もろくなりました。

本誌には大震災の体験記が多数掲載されております。それぞれの立場で苦労され、立派に対応されたことが分ります。耳鼻咽喉科医会（神林潤一会長）の先生方は県医師会（橋本省先生）や仙台市医師会とも連携し、情報の共有化を図り、会員の消息、被災状況の把握、支援など初期から大変見事に活動されたと思います。

大学では災害対策本部が病院と医学部でそれぞれ立ち上がり、大島猛史准教授が医学部、志賀清人先生が大学病院の会議に毎日出席して、大学病院のトリアージ、入院・外来患者の対応、被災地支援に当たりました。東北大耳鼻咽喉科関連病院間の連絡のために浅田行紀医局長が中心となり、インターネットでの情報共有を図りました。tohoku.ent@live.jp に各病院の情報が集積され病院間、教室員の間で共有され有効に活用されました。

被災直後から、全国の耳鼻咽喉科医から支援物資が続々届き、狭い仮医局一室で生活していたわれわれを勇気づけてくれました（図 1〜5）。また、SPIO、日耳鼻学会、長崎大学同門会をはじめとして、多くの義援金を頂き教室の設備等の復旧に使わせて頂きました。教室からは川瀬哲明教授、志賀清人講師が南三陸町、女川町

図 1　震災直後の耳鼻科医局

図 2　病棟の仮医局

図 3　全国から届いたありがたい支援物資

図4　仮医局でおにぎりをにぎる

図5　仮医局での炊き出し

図6　耳鼻科、眼科、皮膚科の3科合同医療支援チーム、前列右から志賀、川瀬

図7　南三陸町、被災直後の公立志津川病院前で。交通網遮断・ガソリン不足のためタクシー（LPガス使用）で往復。左はタクシードライバー。

への皮膚科、眼科との三科合同巡回診療に参加しました（図6）。来年の日耳鼻総会（新潟）では大震災に関するシンポジウムが予定されており、宮城県における対応について、川瀬教授がシンポジストとして、女川でのご自身の津波体験を含めて講演される予定です。

小生は関連病院の被災状況を知るため、3月下旬、南三陸、気仙沼、いわきに向かいました（石巻は常勤の先生方から状況が入っておりましたので、訪問しませんでした）。

最初に向かった南三陸では、被害のあまりの甚大さに呆然とし、志津川病院の前で立ち尽くしました（図7）。気仙沼市立病院では遠藤渉院長を訪問、渡邉幸二郎、河本　愛両先生の元気な姿に安心しました。いわき共立病院の状況は、原発事故の影響でさらに厳しく悩ましいものでした。3人のスタッフが意気消沈していることが会った瞬間に明らかで、第1にすべきことは、彼らを元気づけることと強く感じました。浪江町出身の牛来科長は、家族も関東などに避難しており、心身の疲労は極限に達しているのが見て取れました。それでも頑張っている姿に感動しました。他のスタッフも仙台に家族を避難させて頑張っておりました。放射能汚染への懸念から、この際いわきを縮小してはという意見も医局員の中にはありました。そこで、いわき支援をどうすべきかを決めるため、小生自身がいわきに1週間滞在してみることにしました。4月中旬、1週間宿泊したホテルには原発作業員らしき集団もかなりおりました。放射線科の高橋昭喜教授から借用し、身に付けていた累積線量計の値から、市内の空間線量は0.2マイクロシーベルト毎時と（当時としては仙台に比較しても）、それほど高くないことが分りました。いわき市には原発周辺から避難者が流入しつつあり、耳鼻咽喉科のニーズが高まることが予想されました。医局に戻り、1週間の放射能量を報告し、いわき共立病院への支援体制を医局で検討しました。その結果、教室の諸君の理解を得て、毎週水曜日から金曜日までの3日間を交代で援助することになり、現在に至っております。小生も月に1日、日帰りで現地のスタッフと一緒に外来診察と耳科手術を行っております。最近はいわきも大分安定してきており、良かったと思います。近いうちに元の体制に復帰できればと思っております。（以下、略）

100 周年記念式典

100 周年記念式典

❁ 式次第 ❁

東北大学耳鼻咽喉科学教室　創立 100 周年記念式典ならびに祝賀会

（日時　平成 24 年 11 月 4 日（日）：仙台勝山館）

開会の辞　　小林　俊光

1）記念式典　　14 時～

1. 祝　辞　　河本　和友
2. 1978 年 ― 同窓会誌発刊は教室に何をもたらしたのか ―　　髙坂　知節
3. 100 年目の教室　　小林　俊光

2）記念リレー学術講演会　　15 時～　　司会　小林　俊光、川瀬　哲明

① 小児耳鼻咽喉科と私　　飯野ゆき子
② 内視鏡下耳科手術　　欠畑　誠治
③ 接着法の開発と評価 ― その背景 ―　　湯浅　　涼
④ 好酸球性中耳炎：新しい名称定着で示された東北大学耳鼻咽喉科教室の力　　松谷　幸子
⑤ 大規模健康調査による難聴危険因子の検討　　新川　秀一
⑥ 産業医科大学の現状と展望　　鈴木　秀明
⑦ 頭頸部がん治療の進歩　　西條　　茂
⑧ 聴覚と聞こえ　　川瀬　哲明
⑨ 遺伝性難聴の分子機序と治療戦略　　池田　勝久
⑩ 東北大そして筑波大における耳科学の基礎と臨床　　原　　晃

3）写真撮影　　17 時～

4）記念コンサート　アウラ　　17 時 15 分～

1. 春第 1 楽章 「四季」より／ヴィヴァルディ
2. トルコ行進曲／モーツァルト
3. アメイジング・グレイス
4. 斎太郎節
5. 相馬盆歌
6. 君をのせて
7. 星に願いを
8. 花のワルツ／チャイコフスキー

5）祝賀懇親会　　18 時～

開会の辞　　小　林　俊　光

皆さま、ようこそお集まりくださいました。私たちの教室は、1911 年に創立されました。100 周年の昨年 9 月 11 日に記念式典を予定しておりましたが、東日本大震災のため延期せざるを得ませんでした。あれから 1 年が過ぎ、本日こうして皆様と 100 周年をお祝いすることができますことを、大変嬉しく思っております。

100 周年を皆様とお祝いするにあたり、どのような会にするか、いろいろ考えました。その結果、「オール東北大学耳鼻科」でお祝いしようということになりました。ドクターはもとより、過去に在籍した連絡のつく全ての秘書、そして技官の方々、看護師長の方々を、感謝の気持ちをこめてご招待させていただきました。本日は 140 名を越す方々のご出席がございますが、看護師並びに秘書の方々も、10 名あまりご出席です。なつかしい顔にお会いできることを大変楽しみにしております。またオール東北大耳鼻科にふさわしく、全国からもたくさんのご参加をいただきました。とくに現在教室出身の耳鼻科教授が全国に 11 人おりますが、本日は全員がご出席です。100 周年にふさわしい豪華な会になったことを感謝しております。本日の式典、リレー学術講演会を通じて、東北大耳鼻科のすばらしさを、後に続く若い世代に伝承して、次の 100 年の教室の隆盛につなげることができればと考えております。皆様、本日はリラックスして東北大耳鼻科の一員であることを誇り、喜び、そして楽しく、大いに語り合いながら一日を過ごしたいと思います。

それではどうぞ宜しくお願いいたします。

開会の辞

記念コンサート　アウラ

会場風景

祝　辞

河　本　和　友

教室創設100周年記念、誠におめでとうございます。この長い100年という歳月を6代の教授、初代の和田教授が28年、立木教授が22年、片桐、小生、髙坂教授に現在進行中の小林教授が十数年づつを分担してきたわけで、この間に行われてきた、多くの活躍の様子は、各教授の退官記念誌に詳細に収録されており、また東北大学100年史（2007年）、艮陵同窓会120年史（1998年）の中に、各教室の歴史がまとめられており、この原稿は髙坂教授がご苦労なされて作成したものと思いますが、昨年先生ご自身が出版された回想録の中に37頁にもなる教室の歴史が詳細かつ正確に記述され、小生はこれは教室の古事記に類するものにて、是非ご一読なされんことを、と思いおります。

一応、若い方々のためにあえて、神代の話。

教室創設は1911年（明治44年）7月、1907年東大卒の和田先生が、仙台医学専門学校の教授として着任、大学卒後4年目の新進気鋭、同じ1907年この医専卒の三好　桂助手と看護婦2名、25床で発足、すぐ万城目（1910）杉若、山室（1911）の3名が加わり、東三番丁より星陵地区に移転してきた県立宮城病院を付属病院として利用、この時の病院正面入り口は木町通りの角にあり、敷地は北四番丁から北八番丁までの広大なもの。

この本館2階、皮膚科と向かい合わせで、科長室3坪、研究室4坪、予診、診察室、溜、手術室などあり、初めは自然光を用い、口保反射鏡を用いたため、窓ガラスの桟が邪魔となり、大きな一枚ガラスに取り換え、反射鏡を長く利用すると口角から涎が流れ悪道連に笑われ困った由。

次第に入局者増加し、片桐教授の昭和10年度は、19名の新人が入局し大変だったとか、大正15年に、研究棟、外来、病室、ドーム型の手術室、動物実験室がまとまった。

大変アットホームな耳鼻科専用の城郭が新築され97床の大世帯で忙しく、戦時中は5名の医師のみだったので大変だった由。小生の頃は63床、現在は40床ですかな。

いづれにしても当初の診療風景と医療内容は現在のと天地の差、正に神代時代と思えますが、小生にはそれほどでもなく、三好　桂先生の御宅にはよく参上したものであり、杉若先生は喉頭癌で入院手術、受け持ちをやらされ、鼻ゾンデを用いての食事、夕食は教授自ら行い、最後に葡萄酒を、先生これ入れますよとグラス一杯流し込み、2人でにっこり笑われる風景、まだ目に浮かびます。

先輩諸兄も、その時代その時代の忘れ難い思い出を持ち合わされているものと思います。大事にしたいものです。今もって分からぬのが、親父にしこたま怒られてねと話すが、親父に褒められてねと語る人は誰もいないのが不思議ですな。

所で、最近刮目すべきこととして、小林教授の時代になって急に教授の誕生が多くなったこと。

立木教授の時、初めて、弘前、信州、福島の3大学に教授を輩出し、髙坂教授の時に2校ふえ、今では11名になり、小林教授の大変なご苦労のなせる技かなといたく感嘆しておりますが、このように多くの素晴らしい人材の育成がなぜ出来たのか、その根源奈辺にあるのか不思議のかぎり、また関連病院の充実もすばらしく、昔は単身赴任が常でした

が、今は複数となり、所によっては5名のスタッフで固めるほど、地域医療への貢献度も大きく、その底流に何か教室の伝統といったようなものが存在するのではないかと思われます。ではどのような伝統なのだと聞かれると、はたと困りますが。

昔から東北大の伝統は研究第一主義なりと耳にたこができるほど聞かされますが、研究を行うことは正に日常茶飯事のことで、特にあげつらう必要なき現象かなと思いおりましたが、大学によってはかなり研究に対する温度差があるのに気付きました。

昔、日耳鼻の理事をやっていた時、九大の広戸教授とペアを組み、卒後教育部門を担当、卒後研修のカリキュラム作成から、研修施設の認定、指導医の規定や教育法などに取り組み、昭和45年の仙台での総会で、耳鼻咽喉科卒後教育と題するパネルを企画、これをまとめ、日耳鼻としてのガイドラインを作成。

また当時、研修医の中で評判の高いのがA大で、B大教授も羨み、その実際を見学させろと騒ぐほど、立派な皮張りの研修手帳など回覧して自慢しましたが、その指導項目の中に頭蓋内合併症を5例経験することとあり、小生まだ1例しか経験ないのですが、症例そんなにありますかと質問、皆大笑いとなり手帳は不採用となりました。

この委員会の席で論議が紛争した時、某教授から、東北大のお前から教育論を聞かされるとは心外だ。全国の大学が同じレベルにあるとはかぎらず、俺の前の大学では、研究テーマを与えて数カ月、様子を聞くと全く手をつけてない、それではと文献数冊を机上に置いておくも、読んでなく、やむなく手解きしながら実験を手伝う。それに反して東北大ではどうだ。テーマらしきものを与え、後はぶんなげ、それでもなんとか本を調べ、工夫して実験を進め、時には先輩が手をかすが、しっかり論文をまとめてくる。自分の母校もそうだった。お前は教育者らしい仕事は何一つせずに教育論とはおこがましきかぎりだよ。

そう言えば、立木教授のテーマも漠然としたものが多く、中山君、内耳を電顕で見ることできない？　当時世界でエングストレームだけが成功しており、切片作成に大変な苦労をなされ、日本で初めて有毛細胞を見た時の感激は大変だった由。

小生には、アンプラの中のクプラの動きが見られない？　ガマの膜様迷路を沢山作り透視せんとするが失敗。それでは血管条の中の血流が見られない？　これも失敗。君は駄目なのねと哀れむ顔、大変恥ずかしい思いでした。

先輩曰く、「苦労がたらんでしたな」。

立木教授の口癖、Was gibt es Neues？　何か耳新しいことない？　新しいものに目がなく、本邦で初めて行った研究が多く、われわれもよく真似した言葉です。

教室の中の雰囲気が素直にリサーチに没入し易い環境にあることは事実であり、夕方には医局に集まりストーブを囲んで、お互いの実験の進み具合を駄弁り、ぼやき、一息入れて又夜中の続きを楽しんだもので、よく徹夜もやりましたが、時には町の方に足が向いたりしたものです。

この医局生活の基盤に流れる何かがあるのだろうと思うのですが、はきとせずです。

C大に行ったD教授が大変嘆かれ、教室の中には実験器具ゼロだよ、臨床統計ぐらいしかできず。仙台では手術室の地下にある倉庫に先輩の実験器材が沢山残されており、信

州の鈴木先生の幼児聴検の仕事は、伊藤先生（昭 12）の脳波聴検の器具の再利用から発展したもので、本邦の幼児聴検法を確立しました。

その他病理用の多くの資材、試薬、アルコール類が保存され、よく地下にもぐり活用したものです。このアルコールを終戦時試飲した悪道連たち、メチルアルコールで盲になる人が多かった時、次の日全員が出勤してきたのを確かめ諸手を上げて喜んだが、もう誰もこれを飲もうと言いだす人は無かったとのこと。

どうもわれら凡人には目に見えぬ宝よりその遺産の方が魅力ありですな。

新刊の外国雑誌はまず教授室に保管、全てに眼を通してから図書室に展示、君この論文を読んでみたまえと教授室に呼びつけるのを楽しんでおられた。

血の気の多い連中が「ずるいな、月遅れのを読むのはしゃくだね」と豪傑の武山先生の提案で、ガチャガチャと鍵をかけて親父がご帰宅、それっと数人が教授室に侵入、親父忘れ物したのか逆戻り、あわてて逃げだしたが、彼のみ出遅れ机の下にもぐる、教授、用事を終えて帰られた。いやー危機一髪だったよと胸なでおろしたが、どうして、どうして、頭かくしてなんとやら、小生後日呼ばれて、君、これから新刊雑誌で抄読会をやろうよ、小生思わず苦笑したら先生も笑われた。

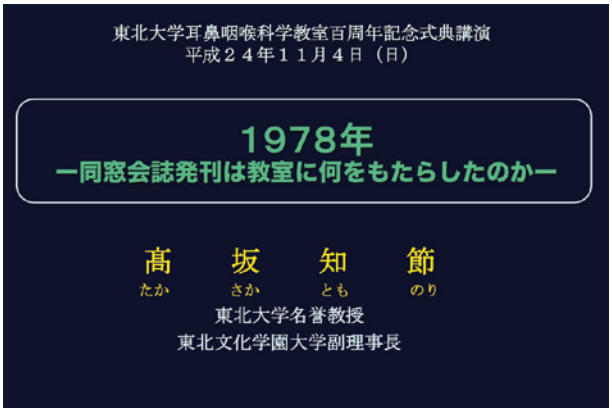
いづれにしても小生井の中の蛙、各大学の教室それぞれに独自の雰囲気をもっており、その中にはリサーチへの熱情が少ない所、教室に長く留まることをしない所もあり、われわれとしては大変恵まれた教室にて、それを楽しむことができるとは、正に研究者冥利に尽きるもの、この先輩の遺産はやはり大事に守りつづけねばと思いおります。

記念講演 1

1978 年　― 同窓会誌発刊は教室に何をもたらしたのか ―

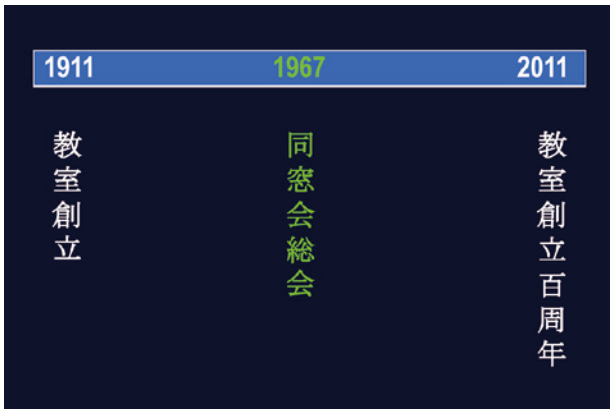
髙　坂　知　節

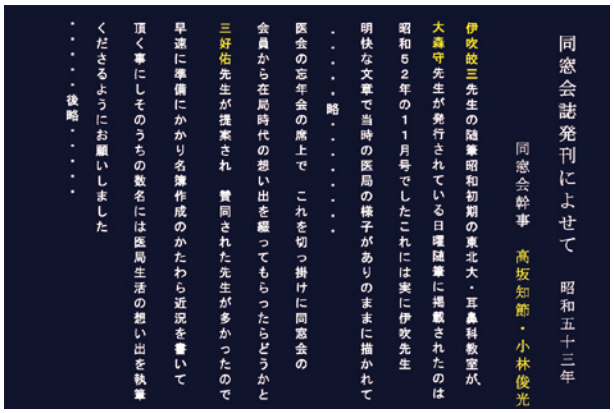
本日は、皆様と共に、教室の百周年をお祝いすることが出来て大変に嬉しく思っております。記念式典で、何か話をするようにとのことで、いろいろと迷いましたが、河本先生、小林先生とも相談して、私は、このタイトルにもありますように、1978 年の同窓会誌発刊が、この教室の歴史に何をもたらしているのかについて、お話しをさせて頂くことにいたしました。これからパワーポイントを使って始めますが、20 分程をお付き合い頂きたいと思います。



東北大学耳鼻咽喉科学教室は、1911 年 9 月 11 日に、和田徳次郎教授によって開

講されましたが、同窓会の設立はそれよりずっと遅く、約半世紀経過した1967年であります。当時、同窓会の発足に向けて教室出身の重鎮が医局に集まり、連日連夜協議を重ねて、10条からなる会則を練り上げて、ようやく第1回の総会が開催されました。そして、初代会長には、主任教授の片桐主一先生が選出されたのです。




同窓会誌発刊によせて　昭和五十三年

同窓会幹事　高坂知節・小林俊光

伊吹皎三先生の随筆昭和初期の東北大・耳鼻科教室が、大森守先生が発行されている日曜随筆に掲載されたのは昭和52年の11月号でしたこれには実に伊吹先生明快な文章で当時の医局の様子がありのままに描かれて・・・・・略・・・・・・・医会の忘年会の席上で　これを切っ掛けに同窓会の会員から在局時代の想い出を綴ってもらったらどうかと三好佑先生が提案され　賛同された先生が多かったので早速に準備にかかり名簿作成のかたわら近況を書いて頂く事にしそのうちの数名には医局生活の想い出を執筆くださるようにお願いしました・・・・・後略・・・・・

初の同窓会総会を終えて、かつての耳鼻咽喉科学教室正門前で記念撮影が行われました。立木名誉教授を始め、片桐初代会長、並びに重鎮の方々が前方に勢揃いして、同窓会の船出を賑々しく祝っているところです。

かくして、難産ではありましたが無事に同窓会が発足しました。しかし、同窓会員を互いに結びつける情報誌のようなものが、必要であることは分かっていたものの、それを作り出して軌道に乗せるには、発足から10年という歳月が必要であったのです。現在では、年の瀬になると必ず皆さんのお手元に届く同窓会誌ですが、この当たり前のようなことが、なかなか実行されずに時間が経過していきました。しかし、1977年に思わぬチャンスが訪れたのです。

それは、この発刊に寄せてという記事に書かれているように、伊吹皎三先生が書かれた「昭和初期の東北大・耳鼻科教室」という随想が、これも同窓の重鎮のおひとりである大森　守先生が発行されている「日曜随筆」という同人雑誌に掲載され、これを読まれた三好　佑先生から、1977年の医会忘年会の席で、「そろそろ同窓会誌を発行してはどうか」というようなニュアンスの提案があったのです。そして、この提案に賛成する方が多く、それを担当するのは、当時の同窓会幹事を務めていた助教授の私と、入局当時から将来を嘱望されていた若き俊英小林俊光先生の二人に割り振られました。当初は、戸惑いもありましたが、

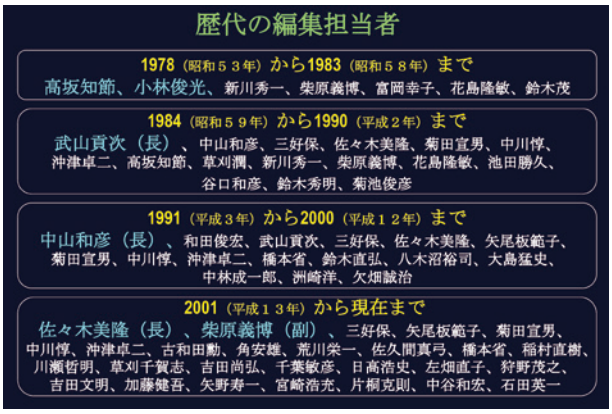
雑誌編集のプロである大森　守先生にご指導を仰ぎつつ、ようやく1978年に出版されたのが第一号の同窓会誌です。

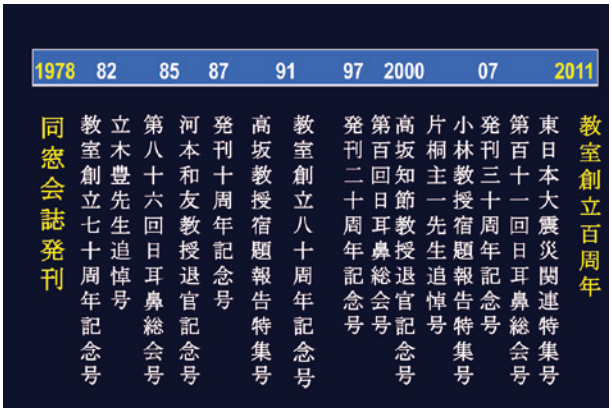
このアズキ色の表紙を見るたびに、当時の苦労を思い出しますが、非常に多くの会員から近況を寄せて頂くと共に、医局時代の思い出を、15名の会員から、それぞれの時代の特徴を盛り込んで、実に詳細に記述頂きました。初版本としては、なかなかの出来であったと、いまもって誇りに思っています。

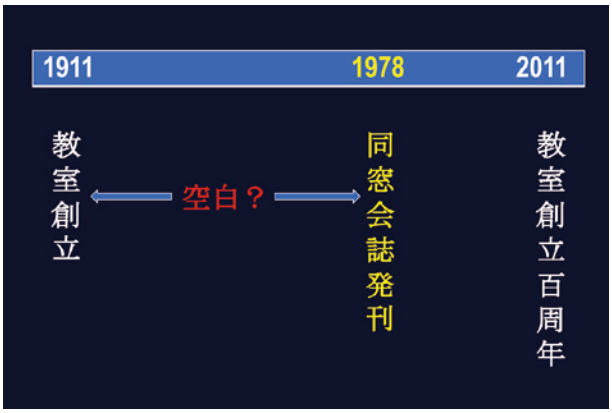
その後は、ご存知のように毎年欠かさずに会誌が発刊されて、これまでに34冊が手元にあります。このように、コンスタントに会誌が出版されてきた背景には、歴代編集委員の並々ならない努力があったことを忘れてはいけません。

初版からの6年間は、先ほどお話ししたように医局が編集を担当していましたが、1984年からは、同窓会に編集委員会を設けることになり、初代の委員長に武山貢次先生が選出されました。この時の編集委員は、その後も長年に亘り編集業務に携わって頂いていることが、この一覧で分かります。特に、中山和彦先生には、二代目編集長、そして佐々木美隆先生には、三代目編集長を担当頂き、今日の重厚な同窓会誌を作り上げて頂きました。この席をお借りして、ご尽力頂いた先生方に心からの感謝を申し上げます。

会誌の内容については、プロの大森　守先生のご指導を仰いだこともあって、初版本から「会員近況」「医局時代の思い出」「随想」「学術論文」「医局便り」「新人の紹介」などの骨子が組まれ、それは今日まで踏襲されております。ただし、武山編集委員長が任命された1984年からは、「支部便り」や「総会の記録」そして会員の消息などが追加されました。やがて、学術欄には、その年の「学位論文」の要旨が掲載され、さらに「教室の思い出は」研究グループ毎のリレー記







事となって「教室の歴史」としてまとめられました。中山編集委員長は、武山委員長と共に築かれた路線をそのまま踏襲され、やがて21世紀に入ってからは、佐々木委員長が、「特別寄稿」や「留学記」を加えられ、「教室の歴史」は「臨床瑣談」と名称を変え、また「想い出の写真」という新しい企画が取り入れられて現在に至っています。なお、教室の節目節目には、テーマを決めて特集号が編集され、より多くのテーマ原稿が集中的に掲載されてきたことも特徴のひとつとなっております。

たとえば、ここに示しますように、平成17年号は、小林教授の大阪における宿題報告の特集が組まれております。本号では、当日の写真と共に、35編という多くの原稿が寄せられています。

歴史的に見ますと、最初の特集号は、1982年の教室創立70周年記念号ですが、その翌年には立木　豊先生を追悼する特集記事が組まれております。その後も、ここに示しますように、教室のビッグイベントに合わせて特集号が発刊され、教室の貴重な記録がしっかりと残されて参りました。

以上、述べて参りましたように、1978年に同窓会誌が発刊されてから今日まで、教室並びに同窓会の記録は、詳細に残されてきましたが、それでは、それ以前の67年間の記録はどうなっているのか、ということが気がかりです。この時代は、全くの空白の時代なのでしょうか？

同窓会誌出版前の印刷物としては、和田教授の時代に発行された「東北地方会誌」があり、当時の学術活動の貴重な記録となっております。また、立木教授の退官記念誌と片桐教授の退官記念誌がそれぞれ残されています。しかし、この3冊で教室創立以来同窓会誌発刊までの67年間をカバーするには、あまりにも少なすぎるわけです。

ところが、同窓会誌が発刊されますと、このスライドに示しますように、当時すでに高

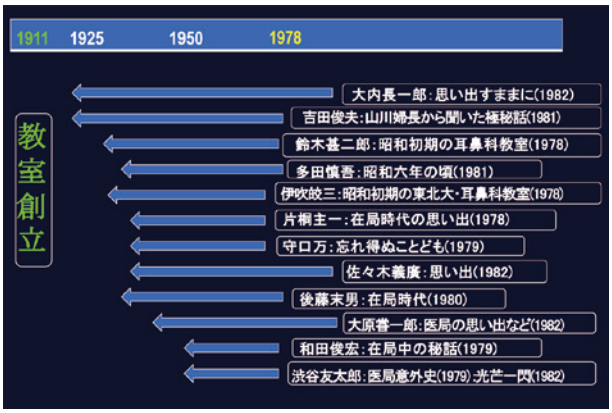
齢となられた長老会員から青春時代の医局の思い出が怒濤の如くに寄せられて、次第に同窓会誌発刊以前の医局の様子が記録として残されるようになりました。

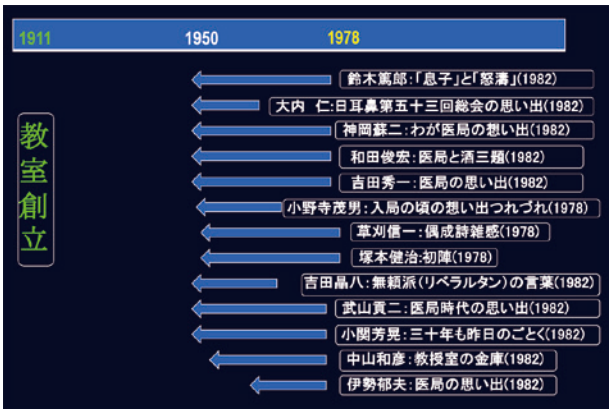
この写真は、和田教授を前列中央に、昭和 12 年当時の医局の先生方が写っている貴重な映像です。教授の両隣に座っている田中寛助先生と後藤末男先生が応召された時の記念撮影で、吉田俊夫先生が「想い出の写真」として平成 9 年の会誌に寄稿されました。

また、戦後の立木教授時代についても、このスライドのように、多くの会員から貴重な記録が寄せられています。執筆されている会員の多くが既に他界されていますので、これらの記録は大変に貴重なものとなっています。

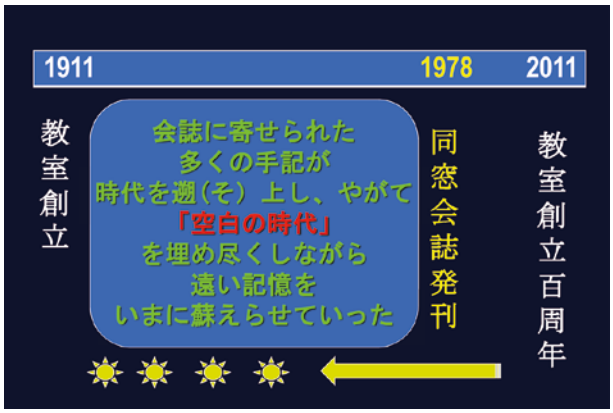
この写真は、1975 年、昭和 50 年に行われました立木　豊先生の喜寿を祝う会記念撮影です。既に故人となられた会員のお名前のみを上げさせて頂いておりますが、その多くの方々がこの 3 年後に発刊された同窓会誌に貴重な記録を投稿くださっております。なお、緑の丸枠にて、歴代編集委員長の、武山先生、中山先生、佐々木先生を示させて頂きました。

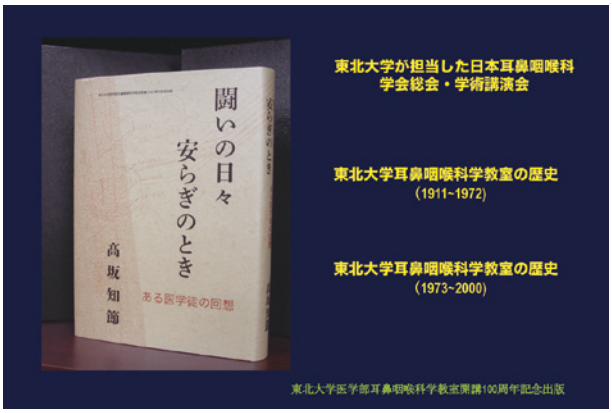
いずれにしましても、歴代編集委員長と委員の先生による大変なご努力によって、同窓会誌発刊以後は勿論のこと、それ以前の「空白の時代」も見事に埋め尽くされて、その貴重な記録が永久に保存されることになったということは、何よりも喜ばしいことであり、これは教室創立から半世紀以上も経過してようやく発刊された同窓会誌の、本当に予期せぬ効果となったのです。





最後になりますが、昨年発刊しました教室開講 100 周年記念出版では、ここに上げております 3 項目、歴代教授が会長を務めた「日耳鼻総会の記録」と、2 回にわけて記述した





「教室の歴史」については、その殆どの資料が同窓会誌に寄せられた貴重な記録を参照し、それらに基づいていることを付け加えさせて頂いて、この記念講演を締めくくりたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

記念講演 2

100 年目の教室

小　林　俊　光

河本先生、高坂先生、すばらしいご講演ありがとうございました。私は 90 周年以後の教室を担当しておりますので、10 年を振り返るとともに現在の教室の様子をお話ししたいと思います。

私は第 6 代教授として 2001 年 5 月 1 日に、長崎大との併任で東北大教授の辞令を頂きました。第 2 代立木　豊教授（図 1）が 60 年前に同じように長崎大教授から東北大に転任されたという歴史に感慨を覚えました。この年、2001 年には 6 名、翌 2002 年には、9 人の入局者がありました。臨床教授を沖津卓二先生、臨床助教授を小野寺　亮先生、大山健二先生にお願いいたしました。3 月 31 日には草刈　潤先生の筑波大学定年退官があり、5 月 16 日に原　晃先生が後任の教授として就任しております。同じ 5 月 16 日に新川秀一教授が日鼻総会で宿題報告「蝸牛における情報伝達のしく

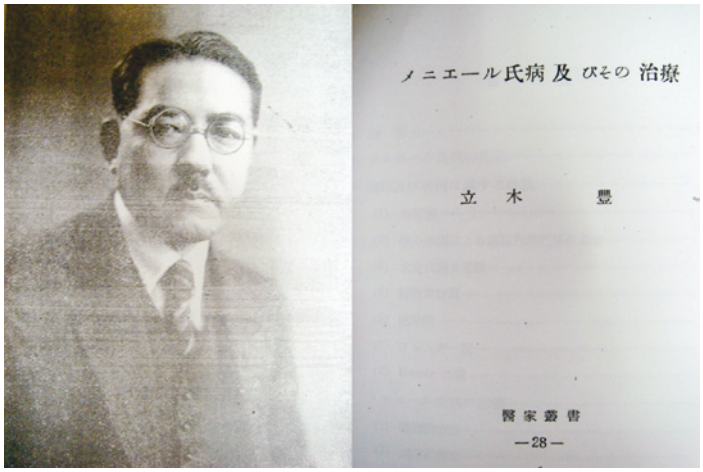


図 1　若き日の立木　豊先生と著書

み」を担当し、素晴らしい報告で感銘を与えました。私の就任講演は、5月24日に東北医学会で「耳科学の常識と非常識」、7月13日に東北連合学会で「内耳研究と中耳・側頭骨疾患へのアプローチ」を講演いたしました。10月3日に聴覚医学会を仙台市民会館にて主催いたしました。この年、院外開業医研修を4診療所にお願いして開始しました。また、手術映像を医局、病棟、教授室の3箇所に配信する工事を行いました。このシステムの導入に約1千万円かかりましたけれども、その後現在まで活用しており有効な投資だったと思います（図2）。

図2　手術ライブ映像の医局などへの配信

2003年（平成15年）は4名が入局しました。1月に工藤貴之先生が銀賞を受賞しました。この年には、4つの学会ならびに講習会を担当いたしました。また、11月1日には池田勝久教授、鈴木秀明教授、飯野ゆき子教授の3教授が同時に誕生するという、すばらしい同窓会の出来事がございました。当時の助教授は川瀬哲明先生とそれから菊地俊彦先生で、講師が志賀清人先生でした。この年の世相を同窓会誌巻頭言に書いたものを読み返しますと、イラク戦後の混乱、北朝鮮の核開発疑惑、拉致被害の未決着、衆議院選挙と小泉政権の継続、自衛隊イラク派遣迫る、治安悪化、家庭内傷害事件の増加、東北地方で地震の群発と、今とあまり変わらない状況に驚きます。

2004年（平成16年）には、卒後臨床研修が義務化されたため、新卒入局者がゼロになるという大事件があり、この年の入局者は3年外科研修を終了した片桐克則先生1名でした。6月の同窓会で飯野ゆき子先生の帝京大学教授就任祝賀会が行われ、それに因んで12月に刊行された同窓会誌では教室の歴史として、飯野ゆき子先生も過ごした昭和50年代の教室が特集されました。その中で、斉藤裕夫先生（昭和48年入局）が「良ちゃん（りょうちゃん：大学病院前にあった軽食堂）で飲み始めて、（その後）国分町に（繰り出して）飲んで、看護婦さんにお土産持って病室に宿泊」という若き日の医局生活をお書きになっています。これは現在の若い諸君には信じられないことだと思いますけれども、私も実際そのようにしておりました。本日は当時の三浦あき元婦長もご臨席ですが、とても良き時代だったわけですね。この年の同窓会誌には、今や伝説となった「独身会」「美女の会」などについても六郷正暁先生、松谷幸子先生がお書きになっております。なぜ当時は医局生活が現在よりゆったりしていたのか、その理由を考えてみますと、一つは関連病院の数ですね、当時、関連病院は3つか4つぐらいでした。ですから新卒の若い医者が大学病院の中に沢山いました。午前中は外来や病棟の仕事をしますが、午後は仕事のないこともあり、そのような時は実験の被験者になったり、医局の奥にあったベッドで昼寝をしておりました。そして、夕方になると先輩に呑みに連れて行ってもらっていた。先輩の斉藤裕夫先生は早朝にたっぷり勉強していたとは知らず、新人の私は夕方以降の行動だけ見習っていたというわけです。

図3　宿題報告「耳管閉鎖障害の臨床」終了後
大阪国際会議場隣接のリーガロイヤルホテルにて
（2005年5月20日大阪）

・開業医実習
神林潤一、柴原義博、草刈千賀志、鈴木直弘、
綿谷秀弥、武山　実、千葉敏彦、中林成一郎、
古川加奈子、陳　志傑

・臨床教授
沖津卓二、小野寺亮、西條　茂、大山健二、
橋本　省、神林潤一、朴澤孝治、香取幸夫、
松谷幸子

・臨床准教授
千葉敏彦、入間田美保子、舘田　勝
小倉正樹、山内大輔、菅原　充、八木沼裕司

図4　開業医実習・臨床教授・准教授

さて、2005年（平成17年）は前年同様に既卒3名が入局しました。この頃の世相について、「経済は回復しつつあるが、世の中は勝者ばかりをもてはやす風潮、東北大耳鼻咽喉科はお互いを大切にする組織でありたい」と同窓会誌巻頭言に書いています。この年、宿題報告「耳管閉鎖障害の臨床」を担当しました（図3）。1年半という準備期間は短く、「時限爆弾を背中に背負っているような切迫感と悲壮感があり、大変な経験でしたが、耳管閉鎖障害について新しい知見を追加することができ、自分自身の中にあった幾つかの疑問も解決され幸運と感じています」と書いております。この年は、海外から多くの来訪者があり、海外に多くの教室員が出張した年でした。この頃、医学部教育貢献賞を受賞しました。4年生への講義と5年生の臨床実習の学生評価点数で耳鼻咽喉・頭頸部外科が一位になり、創設されたばかりの賞を受賞したものです。開業医実習を担当された先生方、臨床教授、准教授（図4）および教室の皆さんの力だと思います。

2006年（平成18年）には卒後臨床研修を終えた4名を含む6名が入局しました。この年、川瀬哲明教授と共同で文部科学省から2億円（4年間）いただき、聴性脳幹インプラント（ABI）に関する基礎的研究を行いました。4月には釜山での日韓耳鼻咽喉科学会で、耳管開放症の特別講演を行いましたが、この頃から、耳管ピン治療を求めて多くの患者さんが東北大学病院に受診するようになり、韓国からの受診もありました。アメリカのマーカス教授、ワンゲマン教授、台湾の蔡教授など海外の先生方が来仙され、マリオ・サンナ教授が東北大学病院の手術室で聴神経腫瘍の摘出を披露したのもこの年です。それから飯野ゆき子教授の自治医大教授就任、西條　茂先生の宮城県立がんセンター院長就任、小野寺　亮先生の仙台市医師会学術奨学賞等のおめでたい出来事が続きました、また、新川秀一弘前大学教授が日本耳科学会を盛大に青森市で主催されました。

2007年（平成19年）には8人が入局しました。5月の日耳鼻総会では「耳鼻咽喉科医の育成をどうするか」と題するシンポジウムに神林潤一先生と私がシンポジストとして登壇し、大学と開業医が学生教育で協力している様子を二人で講演しました。神林先生は耳

鼻科開業医実習のノウハウを、私は「入局者の型分類」を提唱するとともに、耳鼻咽喉科医を増やす方策について、いくつかの提言を行いました。型分類ですが、サケ・マス型、これは地元に戻ってくる学生です。例えば他の地方のA大学を卒業し、実家が仙台だから仙台に帰ろうと。この型はかなり多いです。昆虫型は、とにかく都会に一回行ってみたい、例えば東京に行ってみたい、と光に集まる習性がある。彼氏・彼女型、これもなかなか多いです。彼女の実家が仙台だから、とやって来るタイプです。以上の3つに9割が分類可能です。時々、以上の型に当てはまらない入局者もいるのですが。

この年、6月には第2回小児耳鼻咽喉科学会を仙台市医師会館で、11月には第9回日台耳鼻咽喉科学会議をホテルメトロポリタン仙台で主催いたしました。また、この年には40年以上勤務された渡辺勝男さんが退職され、宮崎綾子秘書もご結婚により退職されました。このスライド〈写真略〉は、この頃、感動して思わずシャッターを押した一枚です。子どもを抱っこして日直をしている某先生が写っております。まだイクメンという言葉が流行る前の光景ですけれども、我々の時代との違いに驚きました。今はこうでなきゃいけないのかなあ、というふうに思ったわけです。

2008年（平成20年）の入局者は3名でした。4月に川瀬哲明先生が、医工学研究科聴覚再建医工学分野教授に就任しました。祝賀会では、初代和田徳次郎教授の母校である東京大学の山岨達也教授と第二代立木　豊教授の母校である九州大学の小宗静男教授に記念講演をしていただきました。この年の10月には原　晃筑波大教授が日本聴覚医学会を東京で主催され盛会でした。11月には東北医学会主催の感覚器シンポジウムが開催され、大島猛史准教授が素晴らしい講演をしました。12月には小川武則先生が中心となって、初めて耳鼻咽喉・頭頸部外科のホームページを立ち上げました。スポーツイベントも、毎月行われるようになり、フットサル、野球、テニスなど、医局員をハラハラさせながら、私も楽しんでおります。

今日出そうかどうか迷ったこのスライド（図5）、12月16日に私自身が鼻の手術を受けたときのものです。目立たないように大学外の市中病院での手術とし（仙台市立病院にて千葉敏彦先生執刀）、SGLの学生も来ないように頼んであったのですが、看護師に連れられてザールに入りましたら、なんと学生が1人立っているではないですか。さすがに、私も、いやあ…と絶句したのですが、「見学してよろしいですか」と学生にすかさず言われ「あ、いいよ」といわざるを得なくて、ええ、ちょっとつらかったです。鼻中隔弯曲矯正と、両側の下鼻甲介粘膜下切除と後鼻神経切断術、合計1時間50分の局麻下、見事な日帰り手術でした。術後経過は非常に良くて、3日後には一側タンポンが入ったまま診療を再開し、4日後には鼓室形成術を執刀することもできました。鼻閉は解消し、快適に過ごしております。鼻の重要性を再確認した次第です。

図5　鼻内視鏡手術を受ける筆者

2009年（平成21年）には8人という大勢の入局者がありました。この年で忘れられないのは、新型インフルエンザの流行です。日耳鼻総会は東京慈恵医大の主催でしたけれども、学会が延期されるのではないかというような話までありました。今になってみれば、笑い話ですが、翌年に総会主催を控えておりましたので、堀　克孝先生、沖津卓二先生はじめ準備委員会の先生方も大いに心配したものです。この年、沖津卓二先生が東北文化学園大学教授に就任され、筑波大原　晃教授は日耳鼻総会で聴覚基礎研究分野での長年の業績を背景にした立派な宿題報告を発表されました。思い出に残るものとして、10月の耳科学会で喜多村　健会長肝煎りの「私のワースト手術」という斬新なシンポジウムを司会したことを挙げることができます。全国の耳手術に堪能な教授4人から、それぞれの忘れられない失敗例をビデオで披露していただき、聴衆参加型の応答機器を用いてディスカッションするというものでした。これは大変好評でした。司会の私はイントロで、聴神経腫瘍の摘出中に大地震に遭遇した時の、迫真の音声が入ったビデオを供覧しました。12月には台湾に出張し、耳管開放症に対する新しい取り組みを日台耳鼻咽喉科学会議で講演しました。また、この頃から、沖縄に出張して手術をするようになりました。川瀬教授と私が年に2回ずつ交互に出張手術をしております。

2010年（平成22年）の入局者は1名でした。この年、第111回日耳鼻総会（仙台）を開催しました。「他科からの耳鼻咽喉科への期待」をシンポジウムとしました。その他の内容について、本日は詳しく述べませんが、先生方に大変お世話になりました。忙中閑あり、これはKスタ（宮城球場）ですね、楽天の試合をグループ席で観戦しているところです。

さて、いよいよ2011年（平成23年）です。1月には小川武則先生が頭頸部癌に関する基礎研究で東北大学医学部奨励賞銀賞を受賞して皆で喜んでいましたが、なんと2カ月後の3月11日に東日本大震災が起こり、とてつもなく大変な年になったわけです〈写真略〉。この年はそれでも入局者が4名あり勇気づけられました。加えて、大変嬉しいことが9月にありました。欠畑誠治教授、志賀清人教授、須納瀬　弘教授の就任祝賀会です。11月には日本耳科学会を沖縄で開催しました。会場を仙台から沖縄に移すという苦渋の決断でしたけれども、結果的には良かったと思っております。この学会で、日本耳科学会として初の会長講演を「蝸牛電気生理から耳科臨床へのフィードバック―新しい人工内耳時代へ向けて」というテーマで担当しました。また、この年の6月に小児耳鼻咽喉科学会を飯野ゆき子教授が、9月には耳鼻咽喉科感染症・エアロゾル研究会を池田勝久教授が担当されました。

2012年（平成24年）1月、震災から1年、被災地支援の意味も込めて、南三陸耳管ミニシンポジウム2012を開催しました（図6）。全国の耳鼻科医に被災地見学に来ていただき、そこで耳管の話をするという企画でした。このような機会を通じて、耳管開放症の新しい診断基準も醸成されております。9月、耳管開放症をテーマにした「ためしてガッテン」というNHKの番組に出演しました。同番組の担当プロデューサーの一人が耳管開放症になったために、組まれた企画です。スライドはロケ時のものです（図7）。耳管開放症は非常に頻度の高い疾患と認知されるようになり、世の中の関心も高まっております。

図 6　被災地支援南三陸耳管ミニシンポジウム 2012

私が担当となりましてから 12 年間の入局者は 53 名でした。海外留学者は延べ 20 名、英文論文は 180 です。私になってから入ってきた若い方々も、最近になってかなり沢山の論文を書いてくれるようになってきまして、まあこれからかなあという感じです。現在のティーチングスタッフは、教授が私と川瀬哲明教授、准教授大島猛史先生、講師が日髙浩史先生と鈴木貴博先生、院内講師は小川武則先生、加藤健吾先生、宮﨑浩充先生の 3 人。

図 7　NHK 番組ロケにて耳管開放症の検診

病棟は 2 グループ制で担当し、悪性腫瘍グループ、良性疾患プラス唾液腺癌・上顎癌などの 2 つのグループに分かれています。現師長は新人時代を耳鼻科病棟で過ごした浦山美輪師長です。外来主任は日髙浩史講師。新患日は月・水・金、特殊外来は、腫瘍術後、唾液腺、喉頭、鼻副鼻腔、口蓋裂、ことばと聞こえ、補聴器、中耳、難聴、めまい、人工内耳、聴神経腫瘍、耳管、などと多彩です。

その他、目立つのは大学院生が多いということだと思います。大学院生を研究テーマとともにご紹介させていただきます。臼渕　肇先生はボストンで聴覚中枢の研究を行って帰国しております。大越　明先生は山本雅之研究室で癌の基礎研究をしています。織田一葉先生は聴覚研究、角田梨沙子先生、小澤大樹先生の 2 人が矢野寿一先生のもとで耐性菌の研究チームにおります。鈴木　淳先生は蝸牛と嗅上皮の研究を大隅研究室で行っています。髙梨芳崇先生は、耳小骨の胎生学的研究と耳鳴臨床、八幡　湖先生は聴覚・めまいの研究を開始するところです。大島英敏先生は、聴覚電気生理研究とともに、中耳・耳管外来、口蓋裂外来、滲中外来などを担当しており、髙田生織先生は耳管の研究を開始しよう

としているところです。また、海外留学中は2名で、池田怜吉先生がサンディエゴ(UCSD)、山﨑宗治先生がカンザスから今はグルッポ・オトロジコにおります。このように若者が大勢育ちつつある医局ですので、今後に大いにご期待をというところです。以上です。ご清聴ありがとうございました。（2012年11月3日）

リレー講演

● 記念リレー講演 1 ●

小児耳鼻咽喉科と私

自治医科大学附属さいたま医療センター　耳鼻咽喉科
昭和 49 年入局　**飯　野　ゆき子**

先ず始めに、東北大学耳鼻咽喉科教室創立 100 周年おめでとうございます。これも、ここまで教室を築き上げられた先達のご努力の賜物と存じます。そしてこの、記念リレー学術講演会のトップバッターとしてお話する機会をお与え下さいました小林先生、そして、川瀬先生、その他ご関係の皆様に心からお礼を申し上げます。

昨年の 6 月、さいたま市にて、第 6 回日本小児耳鼻咽喉科学会を担当させて頂きました。この写真は学会終了後に撮ったスタッフの集合写真であります。この学会を開催するにあたりましては、東北大学の同窓会の諸先生から多大なるご支援を頂き、心からお礼を申し上げます。お陰様で、記憶に残る学会と評価されました。

本講演では、あまり学術的ではないのですが、私と小児耳鼻咽喉科との関わりに関してお話をさせて頂きたいと思います。

私の入局は、河本教授の滲出性中耳炎に関する宿題報告が 5 月の総会でもたれた年で、教室全体がこの滲出性中耳炎の研究に没頭しておりました。私共新人も滲出性中耳炎外来に駆り出され、鼓膜切開、チューブ留置を外来でバンバン行っておりました。時々、聞き訳のない子供さんがいますと、某大学の教授になられました、H 先生などが、奥に連れ込んで行って黙らせて戻って来ました。で、「どうしたの？」と聞きますと、「いや、ただ拳骨麻酔を効かせただけだよ」という様なエピソードはしょっちゅうでございました。入局後数年間は、あまり勉強もせず、いつも遊んでいた様な記憶がございます。毎年秋になりますと、家族ぐるみで芋煮会に行きました。これは、河本教授ご夫妻を囲んでの写真です。河本先生を囲ん

で、ビールを飲みながら、皆でワイワイやっているところです。非常に楽しそうです。

さて、1983 年、東北労災病院に耳鼻咽喉科の副部長として赴任いたしました。湯浅　涼先生から徹底的に中耳手術を叩き込まれました。が、一方、少し基礎的な研究にも携わりました。滲出性中耳炎の貯留液のエンドトキシンの定量に関する研究です。滲出性中耳炎は、以前は無菌的と言われておりましたが、インフルエンザ菌を代表とする、グラム陰性桿菌が関与するという事を報告させて頂きました。この論文は ACTA に掲載され、今でも時々引用されております。また、非常に多くの小児の真珠腫性中耳炎の手術症例を経験し、それをまとめさせて頂きました。この頃が小児に対する中耳手術の出発点になったと思います。一方、お遊びの方も常に前向きで、秋田での東北連合学会の帰りに、わざわざ酒田に寄って、その頃、有名だったポトフというレストランでお食事などという優雅な事もやっておりました。

1985 年、連れ合いが東京大学に移った為、東京に転居致しました。河本先生のお許しを頂きまして、国立病院医療センターの耳鼻咽喉科に勤務致しました。

その間、様々な国際学会に参加致しましたが、これは、1990 年のフロリダでの国際中耳炎学会で、東北大グループとばったり会いまして、ご一緒した時のスナップです。少し顔が赤い先生もいらっしゃいます。

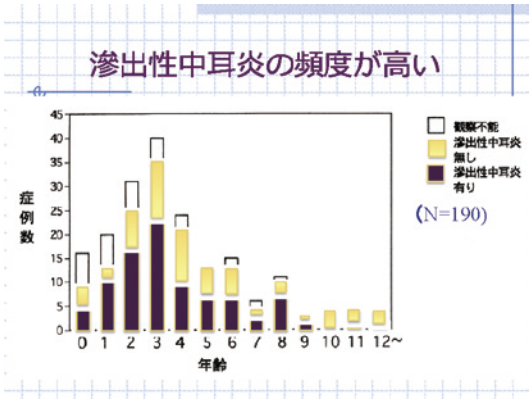
1992 年帝京大学の耳鼻咽喉科に助教授として、赴任致しました。そこで本格的に小児耳鼻咽喉科

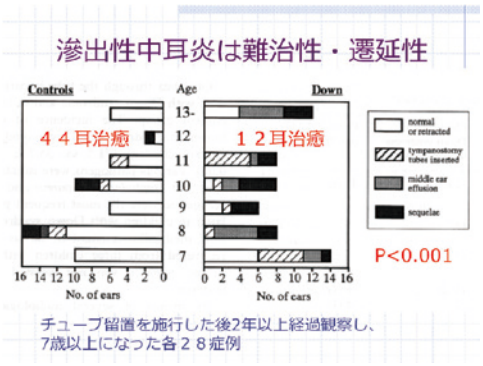
秋田での東北連合学会の帰り
～酒田のレストランで

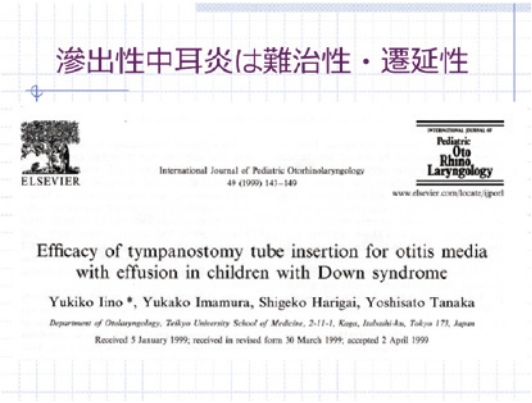
国際中耳炎学会（１９９０年）

との関わりが生まれました。赴任早々右も左も分からない私に、突然鈴木教授が「飯野さん。貴方には、小児耳鼻咽喉科研究会の庶務と会誌編集をやって貰うから」とおっしゃいました。まだ会員でもないのにですよ。その後、この研究会の雑用を一手に引き受ける事になった訳です。2006 年にこの研究会はなんとか日本小児耳鼻咽喉科学会となり、第 2 回の学術講演会は仙台で開催され、小林教授が会長を務められました。この学会は医師会館の会議場で行われましたが、隣接する診療所で神林先生が休日当番医を勤められていた事を記憶しております。

さて、帝京大学はその当時、小児難聴診療のカリスマ的存在であった田中美郷先生が小児難聴外来を担当なさっており、全国からお子さん達が集まって来ておりました。その中に、多数のダウン症児が含まれておりました。このダウン症の子供さんたちの鼓膜所見を取り、中耳炎がある場合にはその治療をするというのが私の役割でした。ダウン症の子供さんは、様々な耳科学的リスクを背負っております。先ず、外耳道が非常に狭いので、所見が取りにくいです。高度の耳管機能障害を有します。側頭骨の発育が不良であり、そして滲出性中耳炎の頻度が高く、難治性遷延性です。また、正確な検査データが得られにくく、感音難聴の合併もあり得ます。さらに、治療に対する協力が非常に得られにくいのがネックです。CT で外耳道面積を計測してみますと、乳幼児でも学童児でも、優位に健常児と比べて外耳道の面積が小さい事が分かりました。この様に、狭い外耳道の







耳垢とりからダウン症児の診療が始まります。これは、各年齢における、滲出性中耳炎の頻度を表したものです。紫色のバーが、滲出性中耳炎有りです。約 60% に滲出性中耳炎が認められました。

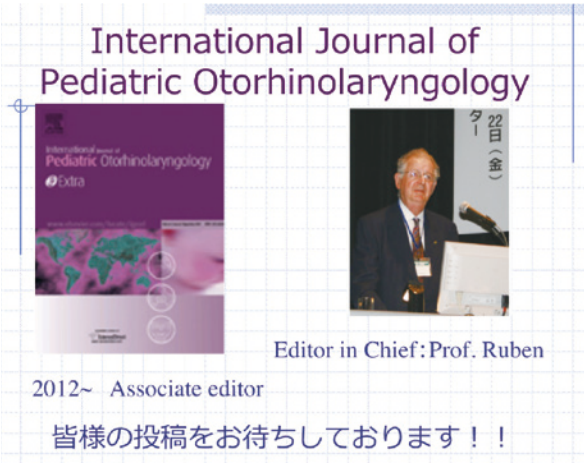
側頭骨の発育を CT で計測致しますと、滲出性中耳炎の有無に関わらず、健常児に比べて優位に側頭骨の発育が抑制されているのがわかります。そこで滲出性中耳炎のダウン症の子供達に積極的に鼓膜換気チューブ留置を行いました。この論文はその結果をまとめたもので、International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology に報告させていただきました。

チューブ留置の結果は本当にがっかりするものでした。留置後、2 年以上経過し、7 歳以上になった 52 児のうち、健常児ですと 85% が治癒するのに、ダウン症児では、たったの 23% しか治癒せず、未だ滲出性中耳炎が続いたり、後遺症が続いたりという結果でありました。

また、多くの小児の真珠腫を経験し、その聴力成績を報告致しました。小児の真珠腫は成人とは全く違った観点で手術を行わなくてはならないという事を深く学びました。これは現在の私の小児真珠腫に対する手術の考えの基礎をなすものとなっております。

2008 年自治医科大学付属さいたま医療センターに移りました。スタッフの少ない中、小林教授のお計らいで、2008 年から 1 年半、臼渕　肇先生にスタッフとして加わって頂き、さらに 2010 年からは、吉田尚弘先生に准教授として赴任して頂きました。お二人共、特に女性の看護師さん達から非常に人気がございまして、臼渕先生は嵐の二宮君に似ているなどと言われておりました。マスクをしていればですけれども（笑）。

2008 年、遂に念願の小児耳鼻咽喉科外来を立ち上げました。この外来は一般の耳鼻咽喉科外来ではなく、小児科外来の一角にあります。待合室には小児用に遊び場もあり、ゆっくりと広々とした空間で診察を待つことができます。耳鼻咽喉科診察室にはユニットの他、耳の診療用ベッドと、モニター付きの顕微鏡があります。カラフルなユニフォームを身に付けた、小児専門の看護師さんが診療の補助について下さいます。



帝京大学で診ていた、ダウン症の患者さんの追っかけもおります。もう、成人になったダウン症の患者さんも大勢います。難治だった滲出性中耳炎も良くなっている方もいますが、癒着性中耳炎になっている場合もあります。自治医大でこれまで 8 例 10 耳のダウン症の患者さん達の手術を行いました。慢性穿孔性中耳炎は、全て帝京時代の鼓膜チューブ留置後の穿孔です。真珠腫も進行例が殆どです。現在のところ、鼓膜穿孔は術後全例で閉鎖し、乾燥耳です。でもよく診せてくれない場合もあり、フォローアップはとても大変です。

さて、今年から、International Journal of Pediatric Otorhinolaryngology のアソシエイトエディターになりました。査読者指名の為の論文がメールでバンバン送られて来ます。苦しんで仕事をしておりますが、世界中の小児耳鼻咽喉科医との関わりが持てるので、非常にやり甲斐があります。

また、テレビ出演も最近では、赤ちゃん番組ばっかりです。益々、小児耳鼻咽喉科にどっぷりと浸かっておりますが、皆様のお陰で充実した毎日を送っております。

最後になりますが、この東北大学耳鼻咽喉科学教室の益々のご発展をお祈りして講演を終わらせて頂きます。ご清聴どうも有難うございました。

● 記念リレー講演 2 ●

耳科手術のパラダイムシフト ― 中耳内視鏡手術の進歩 ―

山形大学医学部　耳鼻咽喉・頭頸部外科学講座　教授
昭和 62 年入局　**欠　畑　誠　治**

はじめに

「常識」や「無理」を超えなければ、前例のない成功やイノベーションは生まれません。現在の「常識」を疑って、今「無理」だと思われていることに挑戦することがブレークスルーにつながります。学生さんにいつも言っていることは、今の医学・医療の「常識」は君たちが中堅として働く頃には「非常識」になっているよ、ということです。

私たちが研修医だった 1980 年代、“Big surgeon, Big incision” というコンセプトを教えられました。優れた外科医は広い術野で、明視下で安全に手術を行うというものです。たとえば腹部の手術の場合、正中切開をおけば、術中に術野が狭くなった場合にも創を広げることができ拡張性も高いというわけです。しかし、現在では、“Small incision, Big surgeon” と言われるようになりました。小さな切開創で低侵襲手術を行うのが、優れた外科医であるというものです。いまや一般外科では鏡視下手術が主流となり、ミニマム創で拡大視しながら安全に手術が行われています。Hand-assisted laparoscopic surgery（HALS）という術式があるほどで、内視鏡が「主」で手が「従」という訳です。

内視鏡は広角な視野を持ち、視点の移動が容易であり、対象への接近、対象の拡大視を可能とした手術支援機器です。内視鏡を使用することで、死角を減少させ、より安全で確実、低侵襲で機能的な手術が可能となります。私たち耳鼻咽喉科の領域でも、硬性内視鏡を用いた副鼻腔手術（Endoscopic Sinus Surgery：ESS） が、Caldwell-Luc 法や和辻-Denker 法などの副鼻腔根本術に代わって普及し始めたのが 1990 年代のことで、現在では鼻副鼻腔分野における標準術式となっています。この ESS が進化して、近年では、開頭せず内視鏡下で深部頭蓋底を手術できる時代になってきています。また、これまで唾液腺摘出術が必要であった唾石症に対しても、外径 1 mm 弱の極細径の硬性内視鏡（sialoendoscope）支援下に唾石摘出が可能となってきています。

しかしながら、耳科領域では 1950 年代から顕微鏡が用いられ、現在でも耳前部または耳後部に外切開をおく顕微鏡下手術（Microscopic Ear Surgery：MES）が一般的です。顕微鏡下の手術では、病変部位の良好な視野と広いワーキングスペースを確保するため広範な骨削開が必要になります。中耳腔へのアクセスルートとして、削開した乳突洞を利用するわけです。しかし、それでもなお解剖学的死角が存在し、それが病変遺残の原因となっています。現在、当教室では外耳道を中耳へのアクセスルートとして利用する keyhole operation である、硬性内視鏡を用いた耳科手術（Transcanal Endoscopic Ear Surgery：TEES）を世界に先駆けて開発し、その改良に取り組んでいます。

本稿では耳科手術の変遷と現状、そして今後の内視鏡下耳科手術の展望について概説します。

耳科手術の変遷

それまで裸眼下に行われていた中耳手術が、顕微鏡下に行われるようになったのは 1950 年代からになります。西ドイツのカールツァイス社が開発した手術用双眼顕微鏡が、初めて医療に応用されたのは耳科領域でした。1953 年に Wullstein が鼓室形成術を発表し、さらに 1950 年代後半に歯科用電気ドリルが骨削開に導入され、近代耳科手

術の時代が幕を開けました。以来、双眼顕微鏡を覗き、利き手にドリルを持ち反対の手に吸引管を持つ現在の手術スタイルが確立しました。

TEES の長所と短所

顕微鏡下手術の長所としては、1）双眼顕微鏡を用いるため術野を立体的に捉えることができること、2）拡大視（～16 倍）ができること、3）両手を用い確実な操作ができることが挙げられます。一方、1）良好な視野と広いワーキングスペースを確保するため広範な骨削開を必要とすること、2）視野は直線的（straight-line view）であるため、解剖学的に死角になる領域が複数存在することが問題となります。

これに対し内視鏡は広角な視野を持ち、さらには先端を対象に近づけて観察できるため、顕微鏡では死角となる部位の明視化が可能となります（looking around the corner）。近年、内視鏡と組み合わせて使用する 3CCD カメラやモニターも高精細度（high definition：HD）となり、標準精細度（standard definition：SD）とは全く比較にならないほどの鮮明な画像を得ることが可能になりました。このことが、耳領域における顕微鏡手術の王座を揺るがすことになります。

A.　TEES の長所

1）　広い視野：顕微鏡下に経外耳道手術を行う際には、一つの視野で鼓室の一部分しか観察できず、視軸を変化させて鼓室全体を確認する必要となる。これに対し内視鏡は広角な視野をもち、一つの視野で鼓室全体を確認できる。

2）　観察したい構造物への接近：顕微鏡の視野は直線的であるため、手前の最狭窄部で深部の観察できる範囲が規定されてしまう。内視鏡は最狭窄部を超えて対象に近づけるため、骨削開を行うことなく観察対象へ接近できる。

3）　死角の減少：視軸角 0° の内視鏡に加え、30°、45°、70° の斜視鏡を併用することにより、深部の入り組んだ構造物も観察可能であり、顕微鏡では死角となる部位でも直視下に操作することができる。

4）　低侵襲：外耳道経由の keyhole operation であり、外から見える切開が不要。最小限の骨削開ですみ、術後の耳介感覚鈍麻がなく、術後のドレッシングが不要。術後の疼痛がほとんどなく、創傷治癒が早い。術直後より眼鏡の装用が可能。

5）　整容面：耳介の変形や乳突削開による耳後部の陥凹がない。外から見える術創がない。

6）　術野画像の共有：EES では助手、看護師、研修医師、学生など手術に関わるすべてのスタッフが術者と同一の鮮明で広角な画像を見ることができ、臨床教育にも有用である。MES でも画像の共有は可能であるが、通常片眼からの出力であるため術者の見ている術野とは異なる。

B.　TEES の短所

1）　2D 画像：立体視でないため深さがわかりにくい。しかし、Full HD system では鮮明でコントラストに優れているため、顕微鏡手術の十分な経験があり立体解剖を熟知している術者であれば、順応は容易である。

2）　one-handed surgery：EES では利き手と反対の手で内視鏡を保持しながら操作を行うため基本的に片手操作となり、MES のように吸引管を持ちながら利き手で手術換作を行うことができない。この短所を補うため、専用の手術器械の開発や助手の協力のもと様々な工夫をしている。

当科における TEES による中耳手術

現在当教室で積極的に取り組んでいる経外耳道的内視鏡下耳科手術（Transcanal Endoscopic Ear Surgery：TEES）とは、中耳手術のほとんど全ての行程を外耳道から内視鏡下に行う Totally Endoscopic Ear Surgery であり、1）低侵襲で、2）明視下で安全な、3）生理的機能の回復を目的とする手術です。難聴や耳漏などの原因となる慢性穿

孔性中耳炎や、骨破壊を伴い様々な合併症を引き起こす中耳真珠腫など全ての中耳疾患が適応となります。特に中耳真珠腫では、高い再発率が問題となっています。

中耳真珠腫の手術目的は、1）病変の完全摘出、2）耳漏のない乾燥耳とする、3）正常形態をできるだけ維持する、4）聴力を温存または改善することです。これらの目的達成のため、これまで顕微鏡下での様々な術式が考案され実施されてきました。しかしながら、中耳真珠腫の長期期間の再発率（取り残しによる遺残性再発や病因を取り除いていないため発生する再形成再発）は、50%に達するとの報告があります。遺残性再発は顕微鏡で死角となりやすい鼓室洞、耳管上陥凹、前鼓室での取り残しが主な原因と考えられています。「難しい手術というのはない。あるのは光の入らない不十分な術野だけだ」という言葉があります。見えないところでの操作が、手術を難しいものにしていうという訳です。

TEESは、中耳真珠腫に対して、1）死角を制御し、2）換気ルートの回復を行い、3）乳突腔の温存を可能とすることで、真珠腫の遺残を避け、真珠腫の再形成を予防し、正常なガス交換能を保存することを目指す術式です。

上鼓室・乳突腔の骨削開は、真珠腫の進展範囲に応じてretrograde mastoidectomy on demandを行うことで、最小限の骨削開での病変摘出を可能としています。これは顕微鏡に比べ広角な視野を持つ内視鏡に適した術式です。TEESはこれまで上鼓室までの進展例に限定されていたが、当科では、片手操作で洗浄と吸引を同時に行いながら骨を削開出来る超音波手術器（ソノペット®、Stryker）やカーブバー（VISAO®、Medtronic）などのpowered instrumentsを使用することで、TEESの適応範囲を拡大しています。

今後の展望

A.　手術器械の開発

EESにおける真珠腫手術はMESに比較し技術的にいくつか異なる点があり、EESの短所を補い長所を最大限に生かすためには専用の手術器械の開発が必要となります。TEESでは骨削開に超音波手術器（ソノペット®）を利用していますが、現在我々が使用している機種は、脳神経外科で広く利用されているハンドピースと最小径の硬組織切除チップの組合せたものです。しかしながら、実際に経外耳道で内視鏡下に操作を行うにはシャフトが太く、内視鏡と干渉して操作に支障を来す場合があります。そこで我々はTEESに適した細さと角度を備えたEES専用ソノペット®を共同開発し、より効率的で安全なTEESを施行できるようになりました。

真珠腫を剥離除去する際にも、現存の手術器具では十分に操作できない場合が多くあります。内視鏡は広角な視野を持つため、鼓室洞など入り組んだ部位の母膜も直接確認できるという大きなメリットがあります。しかし、通常の器具では深部の母膜に到達できず、病変が見えても剥離除去することができないことがあります。TEESでは、内視鏡下副鼻腔手術（ESS）と同様に弯曲のある器具が必要であり、弱弯、強弯の吸引管、剥離子、鉗子などTEES専用の手術器械の開発力が進んでいます。

B.　術前評価の精度向上

我々はこれまでの経験から、中耳真珠腫に対するPowered TEESの適応は乳突洞までの進展に留まるものと考えています。真珠腫が乳突洞を越えて乳突蜂巣まで進展している場合には、TEESでの完全摘出は困難で、その場合には鼓室の病変は死角が少ない長所を生かしてTEESよる摘出を行った後に、乳突洞から後方の病変を顕微鏡下の耳後部切開で骨削開を行い対応する、“dual approach”手術を行っています。

TEESの長所を最大限に生かすためには、真珠腫の進展範囲に関する術前評価の精度が重要です。近年、真珠腫病変に対するMRIのnon-EPI拡散強調画像の有用性が報告されておりますが、部位診断が難しいことが問題でした。当教室では、non-EPI拡散強調画像にMR cysternographyをfusionし、さらにcolor mappingを行うことで、

部位診断に活用しております。CT では同じ軟部組織陰影として描出されてしまう病変を、真珠腫・肉芽病変・貯留液に鑑別し、術前診断における進展範囲評価の精度向上を目指して検討を重ねています。

まとめ

硬性内視鏡を用いた TEES は、明視下で安全・確実な操作のできる、中耳機能の温存を可能とする、低侵襲な “keyhole operation” です。死角がなく手術操作ができることは、術者にとってのみならず患者さんにとっても大きな福音になります。今後は、中・長期的な手術成績について検討していき、改良を加える必要があると考えています。

● 記念リレー講演 3 ●

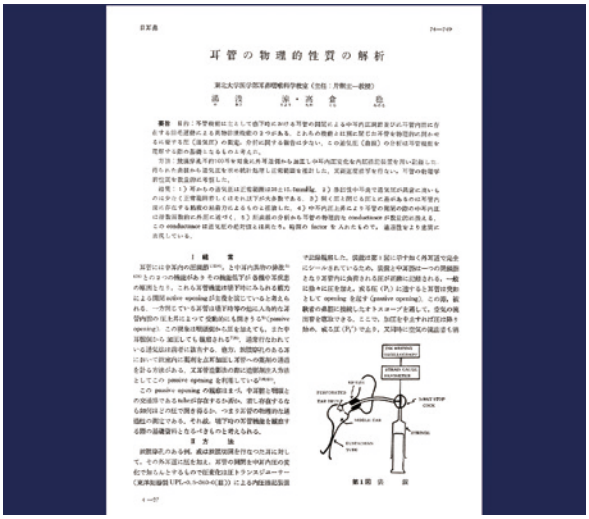
接着法の開発と評価 ― その背景 ―

医療法人仙台・中耳サージセンター/将監耳鼻咽喉科
昭和 39 年入局　**湯　浅　　涼**

本日はこの様な名誉ある講演をする機会を与えて頂きました小林俊光先生に感謝申し上げます。私に与えられましたテーマは、今から 24 年前に開発しました簡易な鼓膜形成術、即ち、接着法でありまして、現在ではむしろ「湯浅法」として全国的に広く用いられている方法であります。

本題に入る前に、私が医局に関わりました約 50 年間を振り返ってみますと、昭和 39 年片桐教授の元に入局し、翌年から函館市立病院で、山口正先生に、その後、青森県病では高倉先生と鈴木知水先生に臨床をみっちりと叩き込まれ、臨床耳科学の道を歩む事になりました。そして、1967 年片桐教授の宿題報告「耳鼻咽喉科領域疾患の X 線学的研究」では、「耳管の造影法」を担当させて頂き、翌 1968 年「耳管の通過性に関する研究」という臨床内容で学位を頂きました。これは日耳鼻会報に掲載された学位論文の一部であります（図 1）。1973 年に河本教授の新たな構想でありました学外研修制度の切り込み隊長としまして、東北労災病院に赴任致しました。そして高坂教授の時代までの 21 年間に、54 名の研修医等をお預かりしました。この間に、1977 年金子　豊先生をトップに本日の講演者の飯野、新川、松谷の各先生、それに伊勢、六郷両先生を加えまして、「真珠腫における骨破壊機序」について、1 年間連日連夜頑張り、翌 1978 年、新潟での第 79 回日耳鼻総会でその成果をまとめた耳鼻と臨床の別冊を配布できました。この業績が評価されまして、1982 年に第 2 回高橋記念賞を頂きました（図 2）。本日の祝賀講演者 10 名のうち、実に 9 名が研修医時代に労災病院で共に過ごした仲間である事は、河本教授と高坂教授の先見の明を今更ながら強く感じております。

そして、昭和から平成に変わる 1988 年に、接着法の第 1 例が行われました。本法の開発当時、術後 1 カ月後に移植弁に周辺から多くの血管新生が見られ、従来法では決して見られない所見に遭遇致しました（図 3）。接着法では移植弁と残存



耳管の物理的性質の解析

図 1　湯浅　涼、高倉　稔：耳管の物理学的性質の解析（日耳鼻 74(4)：749-754, 1971）

図 2　第 79 回日耳鼻学会（1978、新潟）で「真珠腫性中耳炎における骨破壊機序」を発表し、その成果が医学部教授会で評価され、第二回高橋記念賞を受賞（1982）

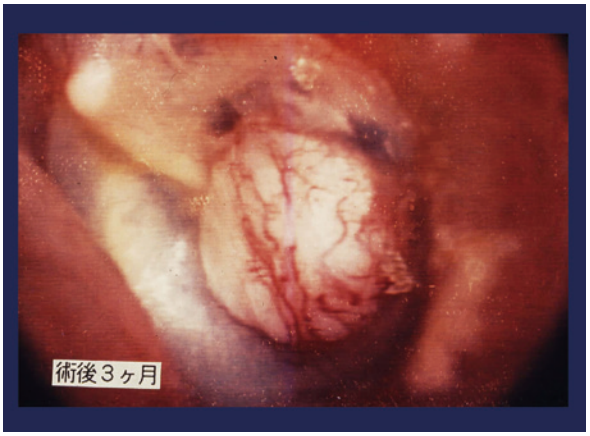


図３　接着法術後の形成鼓膜　（接着部位から移植弁への多数の血管がみられる）

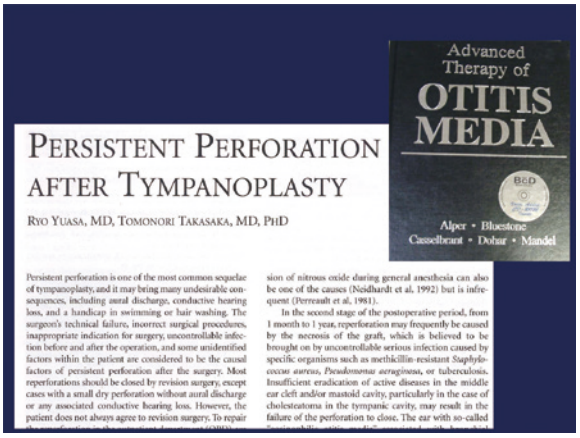


図５　米国での「接着法」の発信（Persistent Perforation after Tympanoplasty in Advanced Therapy of Otitis Media, 2004）

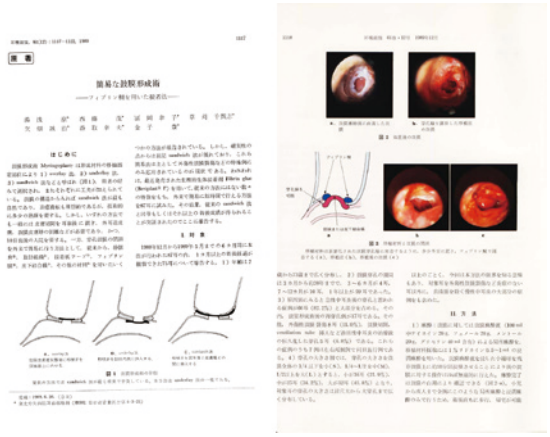


図４　接着法の原著（耳鼻咽喉・頭頚部外科 61：1117-1122, 1989）

図６　シドニー大学での「接着法」の紹介

鼓膜の新鮮化部位との接触部面積が極端に少ないにも関わらず移植弁に血液を供給する為に、この様な生体反応が観察出来た事で、本法の明るい将来を感じました。即ち、両側慢性中耳炎の症例に対して右耳に接着法、左耳に従来法を行ったところ、右耳の経過は従来法の左耳と変わらぬ良好な経過を示し接着法の真価が実証されました。これが接着法の原著で、1989 年耳鼻咽喉科・頭頚部外科に掲載され、現在でも引用されております（図 4）。その後、1994 年に仙台中耳サージセンターを立ち上げこの接着法を応用した低侵襲性鼓室形成術を年間 400 例以上、通算 7,000 例以上を行ってまいりました。本日は、接着法の国内外での展開、評価、今後の発展、そして開発にまつわる秘話などを交えて最後に教室 100 年に渡り、脈々と続いてきた臨床耳科学の流れにも触れたいと思います。海外では 1992 年デンマークでの第 3 回国際真珠腫学会、4 年後のイタリア（サルジニア島）で接着法についての教育講演を行いました。2004 年には Bluestone らによる教科書「Advanced therapy of otitis media」において、髙坂先生とで共同執筆し、接着法の米国からの最初の発信となりました（図 5）。2007 年の 3 月シドニー在住の中耳炎の患者さんが、「シドニー大学では、手術の成功率が半々」と言われインターネットを通じて当院を受診し、接着法で完治した事から、シドニー大学の依頼で接着法の特別講演を行い豪州からの最初の発信となりました（図 6）。同じ年の 10 月に米国耳鼻咽喉科学会 AAO-HNS の教育講演として、始めて接着法が採用され、ワシン

図 7　米国耳鼻咽喉科学会（AAO-HNS）の教育講演での「接着法」を紹介し、その後毎年 AAO-HNS で教育講演（阪上教授と湯浅有）

図 9　第 18 回日本耳科学会（神戸）でのライブサージェリー（仙台から神戸国際会議場へ生中継）

図 8　第 8 回国際真珠腫学会（2008、トルコ）での日本人発表者

図 10　接着法を基本にした「低侵襲性鼓室形成術」の教科書 2 巻を上梓（2003、2007、金原出版）

トン DC で兵庫医科大学の阪上教授とで担当致しました。その後は、阪上教授と湯浅　有とのコンビでシカゴ、サンディエゴ、ボストン、サンフランシスコ、ワシントン DC と本年まで連続 6 年間、米国のみならず世界に発信をして参りました（図 7）。2008 年 6 月 19 日私の 70 歳の誕生日にトルコで開催されました、第 8 回国際真珠腫学会の特別プログラム、Otology Japan セクションにおいて、小林教授の司会の元で接着法を講演致しましたが、壇上の 13 名の日本人講演者のうち、我が東北大学関係者は実に 4 名で、全体の 1/3 を占めておりました（図 8）。この年の 10 月に第 18 回日本耳科学会におきまして、仙台の当院からインターネットを通じて神戸の国際会議場の数百名の聴衆に 1 時間 30 分間にわたり、接着法を用いた低侵襲性鼓室形成術を完全生中継致しました。会場からの飯野先生を始め、多くの先生からの質問にも私は手を休める事なく応答致しました（図 9）。接着法を中心とした低侵襲性鼓室形成術の専門書を金原出版から 2003 年と 2010 年に出版致しました（図 10）。分担執筆が多い手術書の中で、単独執筆の為に接着法など当院で行われている耳科手術の理解に貢献出来たものと思っております。

一方、市民向けとしましては、1989 年の耳の日に「破れ鼓膜よ、さようなら」と題して講演し、その後、2007 年に同じ題で一般向けの書を刊行し、全国の図書館推薦書に指定されておりま

図 11　一般書「破れ鼓膜よ、さようなら（2007、悠飛社）」上梓

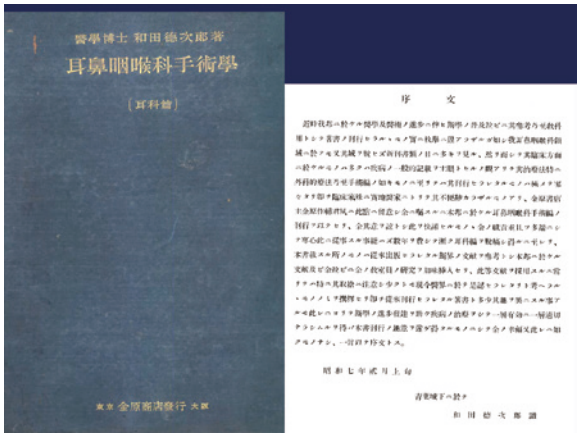


図 13　和田徳次郎先生著「耳鼻咽喉科手術書、耳科編（昭和 7 年初版）」

図 12　特許証（フィブリン糊の微量滴下装置）

図 14　ブータン王国における「ボランティア耳科手術」（2013.5）

す（図 11）。接着法が全国に普及した頃、愛媛大学の柳原教授からフィブリン糊を目的箇所に 1 滴ずつ滴下する装置の開発を命じられ、それから 3 年間を費やしまして、遂に特許を取得致しました（図 12）。

東北大学耳鼻咽喉科学教室での研究内容は内耳の基礎的研究がメインでありますが、臨床面でも素晴らしい歴史がございます。過去の日耳鼻総会の宿題報告では、1941 年（昭和 16 年）に立木豊先生のムコーズス中耳炎、1967 年に片桐教授の耳鼻咽喉科領域疾患の X 線学的研究、1974 年に河本教授の滲出性中耳炎、1991 年の髙坂教授の蝸牛の微細構造と音受容機構でも将来のデジタル補聴器の発展を予測されておりました。そして、2005 年小林教授の耳管閉鎖障害の臨床と、何れも臨床的なテーマでございました。最近、私は当教室における耳科学のルーツを見付けました。これは、初代教授、和田徳次郎先生の「耳鼻咽喉科手術書耳科編」でございます（図 13）。緒言には、「昭和 7 年仙台城址にて」、と記されており、初代教授から現在まで 100 年間続いて来た本教室は基礎耳科学と同様に臨床耳科学も大きな流れである事が判明致しました。これから先の 100 年間は後輩達により、この両道を発展して頂く事を期待して本日の祝賀講演とさせて頂きます。

次が最後のスライドになります。来年はブータン王国でこの接着法を中心にボランティア活動をやりたいなという事で目下検討中でございます（図 14）。同窓の諸先生のご理解とご支援をお願いして私の講演を終えたいと思います。どうもご清聴有難うございました。

● 記念リレー講演 4 ●

好酸球性中耳炎：新しい名称定着で示された東北大学耳鼻咽喉科教室の力

東北文化学園大学　医療福祉部　リハビリテーション学科　言語聴覚学専攻
昭和 51 年入局　**松　谷　幸　子**

この度は東北大学耳鼻咽喉科教室創立 100 周年、誠におめでとうございます。今から 36 年前、東京女子医科大学を卒業し、直ぐに河本和友先生の教室に入局させて頂きました。この時には、医者の卵までにも遠く及ばず、何も分からない、所謂、お嬢さん気分でした。河本先生を始め、朴澤二郎先生、草刈　潤先生、髙坂知節先生など、諸先生の温かなお心がなければ、この時点でとっくに医者は辞めてしまっていたのではないかと思っております。その後、櫻井時雄先生、湯浅　涼先生の元で初期研修をさせて頂き、医学というものの基礎を教えて頂き、一生の宝となりました。その後も両先生の御指導や東北逓信病院の沖津卓二先生の御指導をいただき、その他にもお世話になった多くの先生方のご指導のお陰でなんとか医者を続けて来られたと、心より感謝申し上げます。

東北大学耳鼻咽喉科の教室では、楽しい思い出ばかりで、ついぞ他大学の卒業であるとか、女医であるとかいう事で不利益を被った記憶はなく、女子医大の同窓生を始め、他大学の先生方には、本当に羨ましがられております。また、この様な大切な節目の会に発表の機会をお与え頂き、その懐の深さに改めて感激しております。先程、お話のあった、び女の会ですが、びという字は一応、ひらがなになっております（図 1）。

さて、好酸球性中耳炎ですが、この疾患の概念の提唱も勿論ですが、その後、色々な雑誌で特集が組まれ、この名称が定着したのは、やはり、伝統ある東北大発の提唱であったという事が大きかったと思われます。始めに経験した例は東北労災病院で経験した症例です。この症例は何度手術をしても、一旦良くなった様に見えた中耳粘膜が、またモリモリと腫れて、そこから耳漏が出て来るという経過で治癒に至らず、最終的には、両側の聾になってしまったという例でした（図 2）。

粘膜に覆われた含気腔を形成するという手術は成功せず、粘膜そのものに治癒起点が働かないという事から、他の中耳炎と区別すべきと考え、新しい名称を提唱いたしました。中耳手術のエキスパートである、湯浅　涼先生でも治癒させられなかったという事が、この名称の芽が出た最初です。これが、中耳手術を診る機会が少なかったり、あまり中耳手術の得意でない先生の下であったとしたら、恐らく、その先生の力量不足という事で片付けてしまったのではないかと思われま

図 1　び女の会のパーティで

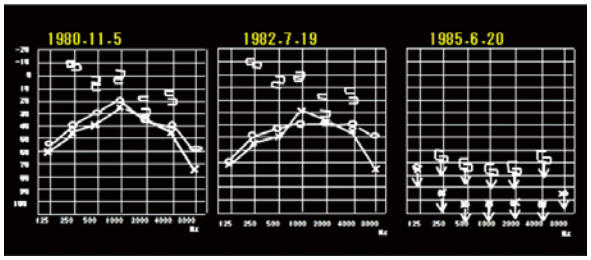


図 2　症例の聴力像

図３　膨隆した鼓膜

図４　切開し、吸引されたニカワ状の貯留物

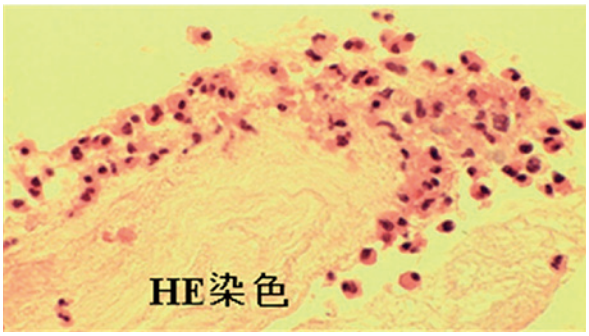
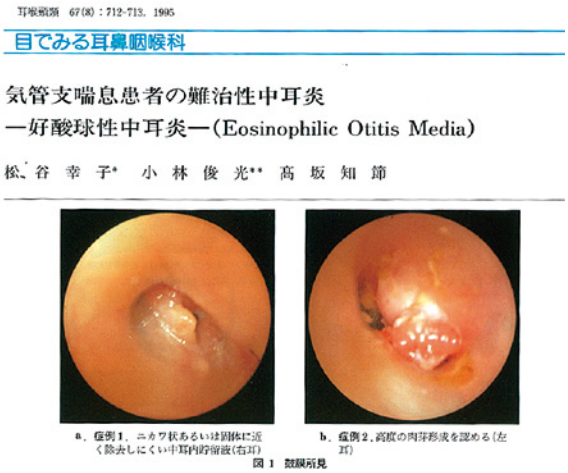


図５　ニカワ状の貯留物の多数の好酸球の浸潤

す。また、難しい中耳手術の症例が集まる労災病院であった為に、稀ではあっても、同じ様な症例が集まり、一定の特徴があると実感出来た事が大きかったと思います。これも河本先生の「疾患ごとに仙台に拠点病院を作る」という構想が実現していなければ、見過ごしてしまったものと考えております。

好酸球性中耳炎の鼓膜ですが、白濁し、膨隆が見られます（図3）。そして切開しますと、ニカワ状の貯留物があり、これを除去しますと、すっかり膨隆は元に戻ります（図4）。


耳喉頭頸　67(8)：712-713，1995

目でみる耳鼻咽喉科

気管支喘息患者の難治性中耳炎
—好酸球性中耳炎—(Eosinophilic Otitis Media)

松谷幸子*　小林俊光**　高坂知節

a．症例1．ニカワ状あるいは固体に近く除去しにくい中耳内貯留液(右耳)
b．症例2．高度の肉芽形成を認める(左耳)
図1　鼓膜所見

図６　1995 年初めて好酸球性中耳炎という名称を発表した

このニカワ状の貯留物と、この中の多数の好酸球の浸潤が特徴であります（図5）。

これをなんと呼ぶかという事を考えました時に、小林先生のところに伺いました。そうしますと「同じ様なアレルギーを専門にしている内科の先生がいるから」という事で、早速、田村　弦先生のところへ連れて行って頂き、その場で好酸球性中耳炎という名前が付きました。芽に名前が付いた訳であります（図6）。

ただし、この芽が出て、名前が付いたというだけでは定着までには至りません。学会で、特に今でも覚えていますが、アレルギーの分野では重鎮でありました奥田　稔先生から、「好酸球性中耳炎ではなく、好酸球増多性中耳炎ではないか？」という御質問を頂きました。その時に学会場で、サッと高坂先生がお立ちになり、「いや、好酸球性中耳炎で良い」と一言仰って頂きました。この一言が好酸球性中耳炎が学会で認知された瞬間であると、今でも思っております。

さて、平成 14 年、小林俊光先生を研究者代表とする全国疫学調査が行われました。この時は、疾患の臨床像をはっきりさせるという意味で、典型的な症状をあらわす成人発症の気管支喘息の患者さんに限った症例を集めました。全国で 190 例集まりまして、鈴木秀明先生が解析され、論文にされました。年齢は 50 歳代にピークがあり、発生頻度は年間 0.05～0.12 人でした。ただ、1 年間

あたりの発生頻度は少ないのですが、この方々は治らず、どんどん足し算になってまいりますので、結構な人数がいらっしゃるという風には思っております。また性別は、男性 38%、女性 61%、不明 1% という結果でありました。この頃から好酸球性中耳炎と認知された症例の報告も増え、芽が全国のあちこちから出て来たという状況でありました。

さて、その後、飯野ゆき子先生を中心にした好酸球性中耳炎研究会で、診断基準を作ろうという事になりました。大項目は、中耳貯留液に好酸球が存在する滲出性中耳炎または、慢性中耳炎。小項目と致しましては、ニカワ状の中耳貯留液、気管支喘息の合併、好酸球優位な鼻茸の合併、従来の治療で抵抗してなかなか治らないというのが小項目。確実例は、大項目の他に 2 つの小項目を満たすもの、そして、Churg-Straus 症候群や、好酸球増多性の症候群を除外するという診断基準を作りました（表）。

そして、この基準で 138 例が集まり、弘前大学の松原　篤先生がおまとめになりました。喘息合併例が 89.9% と大部分で、やはり男性が 38%、女性が 62% と女性に多く、年齢も 50 歳代がピークという結果が出ております。そして、今年の 6 月長崎において行われた The 9th International conference on cholesteatoma and ear surgery で、吉田尚弘先生もご発表され、飯野先生を中心にこの診断基準を世界に発信して行こうとしております。という様な事でやっと花が咲いたという所であります。しかしながら、この疾患の診断基準は出来きましたけれども、治療法は確立しておりません。やはり、実が成る為には、確実な治療法が見付かるというところまで頑張りたいと思っていますので、諸先生方の、今後とも温かいご指導をお願いしたいと存じます。

さて、東北大学耳鼻咽喉科教室の 100 周年にあたりまして、素晴らしいこの土壌に撒かれた後輩達へ、贈りたい言葉があります。「書かれた医学は過去の医学であって、目の前に悩む患者の中に、明日の医学の教科書の中身がある」という冲中重雄先生の言葉です。もう 1 つの私のライフワークは IgA 腎症と扁桃の病巣感染症です。今は「IgA 腎症だったら扁摘をする」というのは普通かも知れないのですが、今から 20 年前はそうではありませんでした。特に EBM の裏付けとなる資料も乏しく、「全く炎症所見がない IgA 腎症の扁桃を手術で除去してしまって良いのか？」と悩んだ時、後押しをして頂いた言葉です。

最後に、私の故郷の福島県の三春の滝桜の写真です（図 7）。長い時間、この様な立派な花を咲かせておりますが、三春の滝桜よりも末長い、東北大学耳鼻咽喉科教室の益々のご発展をお祈りし、この講演を終わりたいと思います。誠にご清聴有難うございました。

表　好酸球性中耳炎診断基準

大項目	
	中耳貯留液に好酸球が存在する滲出液中耳炎または慢性中耳炎
小項目	
1）	膠状の中耳貯留液
2）	気管支喘息の合併
3）	好酸球優位な鼻茸の合併
4）	従来の治療（抗菌薬、鼓膜切開、換気チューブ留置など）に抵抗性
確実例：	大項目の他に、二つの小項目を満たすもの
除外診断：	Churg-Strauss 症候群 好酸球増多症候群

図 7　東日本大震災、福島第一原発事故にも負けず千年以上、見事な花をつける三春の滝桜

● 記念リレー講演 5 ●

大規模健康調査による難聴危険因子の検討

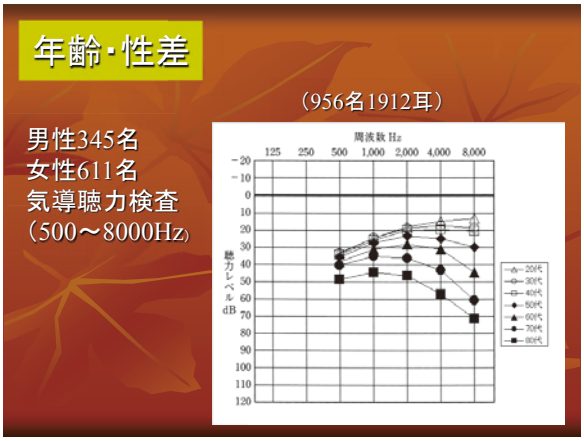
弘前大学
昭和 50 年入局　新　川　秀　一

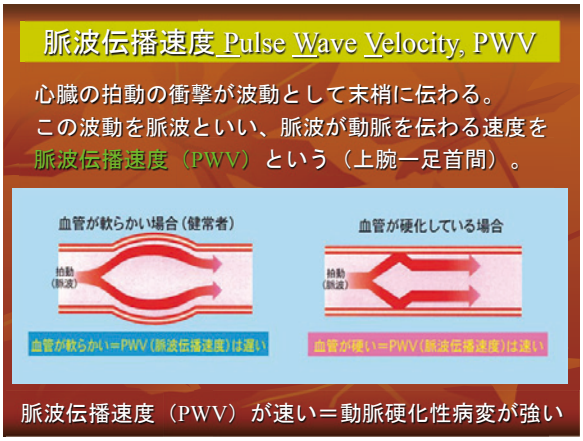
本日は、このような機会を与えていただき、小林俊光先生に感謝申し上げます。これから、私共の教室が参加している大規模健康調査の中で「難聴の危険因子の検討」について講演したいと思います。私は、昭和 50 年に卒業し約 15 年間当教室でお世話になり、平成元年、高坂知節先生のご高配で弘前大学に移りました。もうそれから 25 年が過ぎ、弘前大学教授になりまして 20 年目になります。現在、教授室の部屋からいつもこの岩木山が見えます。このスライドには秋の岩木山を示しております。この岩木山の麓に大規模健康調査の対象である岩木町が広がり、この地区は平均寿命が短いことが知られております。青森県は全国的に見ても平均寿命が最も短く、癌で亡くなる患者が最も多い県です。また、糖尿病で亡くなる方も多く、健康に対する意識も低いということで、この調査が始まりました。私共もその中で、難聴に関わる危険因子にはどういうものがあるのか、平成 18 年から調査を行っております。私が住んでいる旧弘前市の西隣に岩木町が位置します。現在では旧弘前市と合併し弘前市岩木地区と称しております。

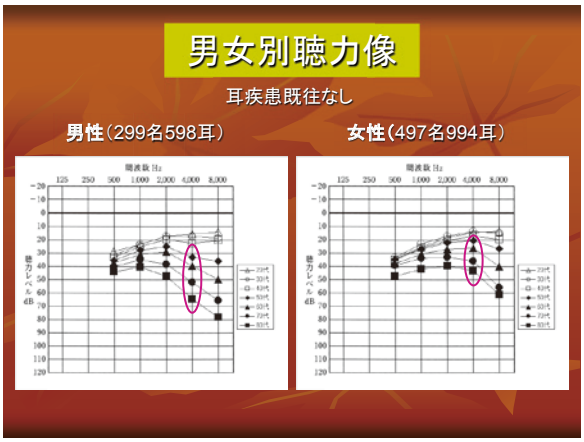
今回の調査項目は純音聴力検査と年齢、性差、動脈硬化、糖尿病、骨密度、遺伝子です。岩木地区在住で 20 歳以上の希望者を調査いたしました。期間は 2006 年から 2009 年の 4 年間にわたり、地区内の保健センターにて検査を行いました。気導聴力検査については 500～8,000 Hz、さらに、動脈硬化、糖尿病、骨密度、難聴遺伝子等を検査いたしました。

約 2,000 耳において年齢と聴力の関係を見ますと、年齢とともに聴覚閾値が上昇しております。また、500 Hz と 1,000 Hz の聴覚域値は環境雑音の影響によって上昇しております。さらに、男性と女性の聴力を比較しますと、4 kHz で女性の聴覚閾値上昇が有意に男性より軽度です。この原因はおそらく男性の方が騒音暴露の機会が多いからではないかと推察しております。

次に動脈硬化の指標の一つである脈波伝播速度について、男性 225 名、女性 432 名を対象として検査しました。この中で、心疾患、高血圧、糖尿病といった全身性の基礎疾患及び、耳疾患の既往を持つ対象者は解析からを除外しました。心臓の拍動の衝撃は波動として血管内に伝わり、これ







	4kHz 標準化係数	4kHz P値	4kHz R^2値	8kHz 標準化係数	8kHz P値	8kHz R^2値
			0.380			0.503
年齢（才）	0.567	**0.000**		0.616	**0.000**	
喫煙量（本／日）	-0.013	0.740		-0.075	0.036	
飲酒量（g／日）	-0.041	0.289		0.004	0.911	
baPWV（cm/s）	0.057	0.242		0.103	**0.019**	

男性	対象者	BS	HbA1c	平均聴力（dB） 1kHz	2kHz	4kHz	8kHz
DM+	22名	131.5	6.9	31.0	31.5	40.1	51.1
DM-	254名	86.2	5.1	28.4	26.5	35.2	41.4

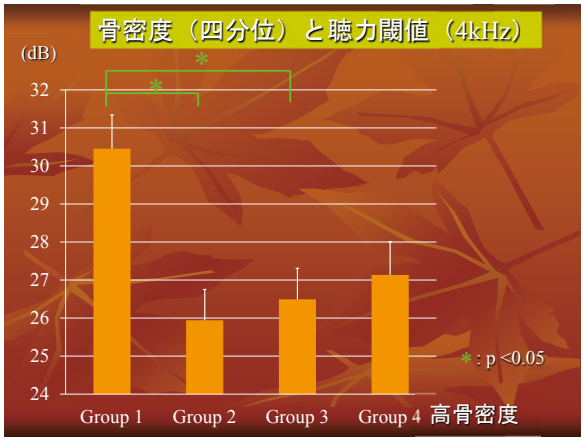
女性	対象者	BS	HbA1c	平均聴力（dB） 1kHz	2kHz	4kHz	8kHz
DM+	12名	131.2	6.5	28.3	29.4	28.8	41.3
DM-	481名	84.0	5.1	28.0	24.6	24.5	35.0

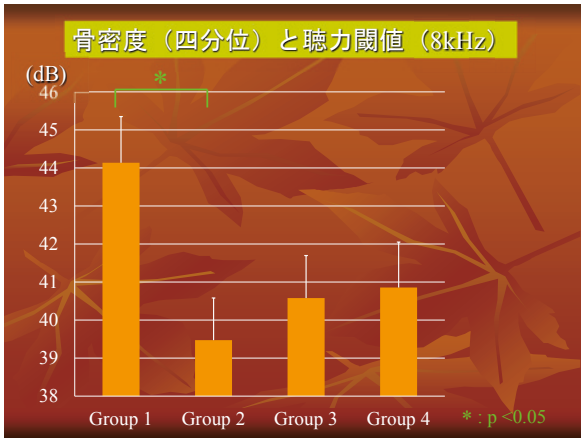
unpaired t-test, ＊：$p < 0.05$

を脈波と称します。血管が柔らかいと脈波は遅くなり、逆に血管が硬いと速くなり、脈波伝播速度が速いという事は、動脈硬化性病変が強いことを意味します。ここで、1 kHz から 8 kHz の聴覚閾値と脈波伝播速度について重回帰分析を行ったところ、男性の 8 kHz と女性の 1 kHz から 8 kHz で有意な相関が得られました。このことは、動脈硬化が聴力障害の危険因子の一つであり、血管病変は内耳に大きな影響を与える可能性が示唆されました。

さらに、糖尿病は聴覚障害と関係あるでしょうか。対象を糖尿病や全身性の基礎疾患を除いた受診者で BMI が正常範囲の者 753 名としました。そして、空腹時血糖やヘモグロビン A1c と聴力閾値に関係あるかどうか重回帰分析を行いました。しかし今回の対象では、血糖値やヘモグロビン A1c と聴覚閾値との関連性はありませんでした。次に、健常者と糖尿病患者の聴覚閾値を比較調査いたしました。すると、男性で 2 kHz、8 kHz、女性で、2 kHz において、糖尿病患者の閾値が上昇しており、やはり糖尿病は聴力悪化に影響を与えることが推察されました。

骨密度と聴力の関連はどうなっているのでしょうか。対象は閉経後の女性 457 名で骨粗鬆症、耳疾患、動脈硬化、脂質異常などを持つ受診者を除外致しました。骨密度は、踵骨超音波測定法によって音響的な骨評価値を得てその骨密度を 4 分位して、共分散分析を行いました。その結果、4 kHz と 8 kHz において骨密度が低い人の方が有意に聴覚閾値の上昇を認めました。骨密度の減少に





伴う聴覚閾値との関係は現在のところ不明です。更なる研究が必要かと考えます。

最後に、難聴に関わる遺伝子検索を行いました。日本人の遺伝性難聴で頻度の高い GJB2 遺伝子を調査いたしました。対象は約 600 名で、GJB2

結果

アミノ酸・塩基変化	ヘテロ型検出頻度(597例中)	ホモ型検出頻度(597例中)	変異アリル頻度(%)
V37I	17	1	1.59
G45E/Y136X	3		0.25
A49V	1		0.08
176-191del16	1		0.08
I71T	3		0.25
235 del C	10		0.84
F106L	1		0.08
R127H	1		0.08
F191L	2		0.17
total	39	1	3.43

遺伝子変異のキャリアの頻度と難聴の頻度を検索しました。軽度難聴を示す V37I というアミノ酸変化でホモ型が 1 例に発見されました。その他、日本人で頻度の高い 235delC などの遺伝子変異やアミノ酸変化がヘテロ型で 39 名発見されました。したがって、GJB2 遺伝子変異のキャリアの頻度は 6.53% で、これらの変異による難聴の発生頻度は 0.0653×0.0653×1/4 なので、ほぼ 1,000 人に 1 人がキャリアでした。この頻度は今までの日本における報告よりはるかに高いことが判明しました。

以上、大規模健康調査における難聴のリスクファクターについて報告いたしました。ご清聴どうもありがとうございました。

● 記念リレー講演 6 ●

産業医科大学の現状と展望

産業医科大学
昭和 58 年入局　鈴　木　秀　明

この度は、教室創立 100 周年、誠におめでとうございます。実は、略歴を用意しておりましたが、先週小林先生から、10 分以内で必ず終わらせるようにという至上命令が下りまして、省略いたしました。私は 1983 年卒業・入局で、2003 年 11 月から産業医科大学に赴任しております。本日は、産業医科大学というのはどういうところなのかについてご説明したいと思います。これが沿革です（表 1）。1978 年の創設で、わずか 1/3 世紀という、母校東北大学の 1/3 の歴史です。それでも結構色々な変遷があり、最近のトピックは 2011 年に初めて分院が開設されたことが挙げられます。

さて産業医とはどういうものでしょうか。明治維新以来、労働衛生に関するいろいろな制度が整備されてきました。その中でも戦後制定された 5 つの法律（表 2）が、労働衛生の中核を成す法令です。特に労働安全衛生法が、その中心となります。産業医がどういう位置付けにあるかについては、この労働安全衛生法で明確に定められております。労働者が 50 人以上の事業所では産業医の選任は義務であり、さらに労働者 1,000 人以上、または有害業務では労働者 500 人以上の事業所では、専属の産業医が 1 人必要であると定められています。この有害業務の中には騒音環境も含まれており、このことは労働安全衛生法施行令第 5 条や労働安全衛生規則第 13 条に明記されています。産業医の資格の中には産業医科大学の産業医学基本講座を終了した者も挙げられています。この基本講座は毎年夏休みに学内で行っていますが、私はまだ受けておらず、必ずそのうち受けたいと考えています。

学内組織は、医学部、産業生態科学研究所、産業保健学部の 3 つのセクションに分かれています。医科大学なのに、医学部という所属が正式名称の中に付記されるのはこのためです。図 1 が産業医科大学の全景で、池があったり森があったりで結構広くて綺麗な敷地です。図 1 の中の緑枠が敷地の全域で、水色が医学部と、オレンジが大学病院、そして赤が産業保健学部（看護学部）それから、黄色が産業生態科学研究所という配置になっています。

本学には奨学資金の貸与制度があるということは皆様ご存じかと思います。6 年間の合計貸与額

表1. 沿革

1978年1月	学校法人産業医科大学　設立
1978年4月	産業医科大学　開設
1979年4月	産業医科大学医療技術短期大学　開設
1979年7月	産業医科大学病院　開院
1984年4月	産業医科大学大学院　開設
1986年4月	産業生態科学研究所　開設
1996年4月	産業保健学部　開設
2011年4月	産業医科大学若松病院　開院

表2. わが国における労働衛生の動き

1875:『官役人夫死傷手当規則』制定
1916:『工場法』施行
1921: 倉敷労働科学研究所設立
1929: 産業衛生協議会発足
1938: 厚生省設置
1947:『労働基準法』『労働者災害補償保険法』制定
　　労働省設置
1960:『じん肺法』制定
1972:『労働安全衛生法』制定
1975:『作業環境測定法』制定
2001: 中央省庁再編による厚生労働省設置

図１　産業医科大学の全景

表3. 産業医大医学部の学費

		納入金	修学資金貸与額	正味負担額	国立系大学
1年次	入学金	1,000,000	718,000	282,000	282,000
	授業料	3,115,000	2,579,200	535,800	535,800
	施設設備費	1,300,000	0	1,300,000	0
	実験実習費	500,000	500,000	0	0
2～6年次の各年	授業料	3,115,000	2,579,200	535,800	535,800
	施設設備費	1,300,000	0	1,300,000	0
	実験実習費	500,000	500,000	0	0
6年間合計		30,490,000	― 19,193,200	＝11,296,800	3,496,800

（年利14.5%）

は、医学部では 1,919 万というかなりの額になります。貸与しているのは、産業医学振興財団というところです。入学金相当分が 70 万余り、授業料相当分が毎年 257 万と、それから実習費が年間 50 万という内訳で、6 年間の合計が 1,900 万余となっています。表 3 に学費を示しましたが、納入金額、つまり本来納入しなければならない額は 6 年間で 3,000 万以上になります。かなりの額ですが、奨学金貸与制度を利用しますと、正味で、1,100 万余りの支払いで済むことになります。奨学金には年利が 14.5% つきます。これは、サラ金法上限ぎりぎりの金利なんですね（笑）。6 年間が修了して卒業する時には、私は実際計算したことがないんですが、計算した人の話によると、返済額が 3,000 万ぐらいになります。ただし卒業後は利子の加算はストップし、返済もいったん猶予されます。返済には表 4 に示したような免除規定があり、2 年の初期研修の後、貸与期間の 1.5 倍、即ち 9 年間、この 4 つの何れかに就いていれば、返還が最終的に免除されます。この中で、24

表4. 貸与修学資金返還免除規定

2年間の初期臨床研修の後、貸与期間の1.5倍の期間（9年間）、下記のいずれかに就けば返還が免除される。

- 産業医（24ヶ月は必須）
- 産業医科大学の医師
- 労災病院の医師
- 厚生労働行政機関の職員

表5. 医局員数の推移

年度	入局	退局		年度末医局員数	
		開業	その他	本学（大学院生）	派遣
2003	1	0	2	14 (2)	14
2004	0	0	0	18 (2)	10
2005	1	0	1	13 (2)	15
2006	0	0	1	12 (2)	15
2007	3	6	0	13 (2)	11
2008	1	2	2	12 (2)	9
2009	4	1	0	12 (3)	12
2010	5	1	2	17 (3)	9
2011	0	1	0	15 (3)	10
2012	1	0	1	15 (2)	10

カ月の産業医の業務が必須要件になっています。ここが少々苦しいところですが、臨床医のキャリアになるべくマイナスにならないように工夫しているという実情です。結局、正味で支払う学費は国立大学と比べると 6 年間で 800 万ほど高いのですが（表 3）、もし優秀なご子弟がおられて、国立大学の志望ではないという場合は、是非、産業医科大学に来ていただきたいと思います。

表 5 に医局員数の推移を示しました。最初の 4 年度は新臨床研修制度のためにひじょうに苦しい時期が続きました。その後 2007 年から続々と入局者があり、これはしめたものと思っていたら、開業して退局する者も続々と出てまいりました。退局者の本音を聞いてみると、スタッフが増えるのを待って、開業のタイミングを計っていたとのことです。世の中はそうそう甘くはないようですね。その後、開業ラッシュも落ち着いてきましたが、最近の 2 年間はちょっと入局者数が奮いませんので、医局説明会等にもう少し力を入れていきたいと考えております。

論文数の推移を参考までに提示しますが（表

表6. 論文数の推移

Year	和文	英文 (corresponding)	計
2004	14	3 (1)	17
2005	21	6 (3)	27
2006	25	6 (3)	31
2007	23	14 (7)	37
2008	12	10 (7)	22
2009	11	6 (1)	17
2010	22	15 (2)	37
2011	16	9 (3)	25
2012	19	11(9)	30
合計	163	80	243

表8. 手術件数の推移(項目別)

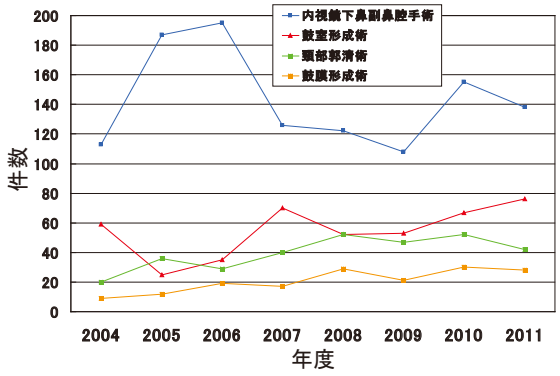


表7. 手術件数の推移(総件数)

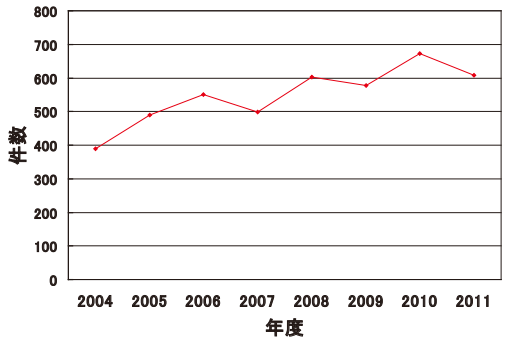


図2　医局員一同

6)、2008年と2009年にちょっと低下しているのが残念なところです。表5と比べてみますと、前の年、2007年と2008年に大量の退局者が出たということが原因のようです。やはり、マンパワーが業績に直結するという現実を如実に物語っています。表7は手術件数の推移ですが、総件数は漸増している状況です。これを領域別に見てみますと（表8)、内視鏡下副鼻腔手術は、コンスタントに毎年100件以上を保っております。頭頸部癌の手術件数をどのような指標で表すかについてはいろいろな方法があると思います。小手術から、ひじょうに長時間の手術まで、幅広いバリエーションがありますが、頸部郭清術で代表させるのが最も分かりやすいのではないかと思います。そうすると年間40～50件で推移しており、病院の規模からみて悪くない実績と考えています。

さて、赴任した当初、中堅どころの医師が全くいなくなり、手術指導にかなり困窮しました。教科書にはいろいろな手技が書いてありますが、とりあえず主な手術を全部画一化して、ワンステップ毎に1つずつ覚えさせていこうという戦略を取りました。例えば喉頭全摘の手順は12ステップに分け、1ステップずつ習得していけば最後には必ずできるというふうな具合です。保存的頸部郭清頸術は11ステップにまとめました。これに対して耳の手術にはバリエーションがあり、画一化するのがかなり難しいのですが、7ステップに分けてそれぞれのステップを多岐選択式とし、丸を付けて行くという手順表を作ってみました。国家試験や専門医試験で多岐選択問題に慣れた若い医局員には評判が良かったのですが、最近は習熟度が次第に向上し、手順表が必要ないという医局員も増えてきております。

これは医局員一同の集合写真です（図2)。一番背が高いのが医局長で、医局秘書が2名おります。今後の課題は2つあると考えています。1つは優秀な学生を入学させて、優秀な医師を育てるということ、2つ目は、地域医療の中核となることです。この2つは我が母校である東北大学では全く当たり前のことであり言い及ぶにも値しない

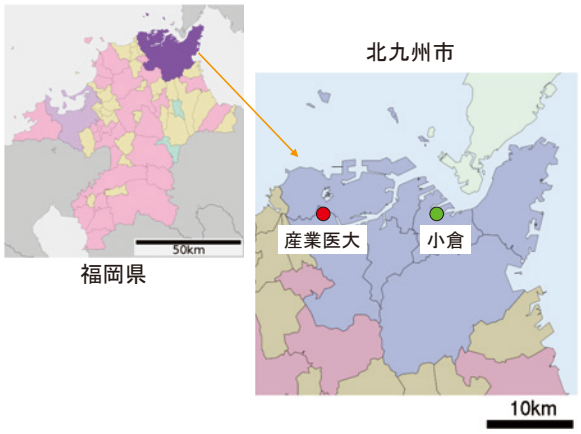


図 3

のですが、そういうところからしっかりと固めていかなければならないと考えています。また、地域の中核の病院としての位置付けが微妙なんですね。福岡県全体の中で、この紫のエリアが北九州市です。北九州の中心部である小倉がここになります（図 3）。産業医科大学は小倉から 20 km ぐらい西の方に離れた位置にあります。人口は、小倉周辺のエリアがおよそ 6 割、産業医大周辺つまり北九州の西半分がおよそ 4 割です。この地区には県内の 4 つの医科大学の医師達が相互乗り入れをしており、さらに小倉地区には産業医大よりも古い歴史を持つ病院が何軒もひしめいています。こういう事情ですが、産業医大も創設以来 34 年を迎え、次第に地域に定着してきていると実感しています。母校の東北大学で学んだことを、この北九州で実践し、そして更に定着するように、今後も引き続き鋭意努力してまいりたいと思います。ちょうど 10 分となりました、ご清聴ありがとうございました。

● 記念リレー講演 7 ●

頭頸部がん治療の進歩

宮城県立がんセンター
昭和 49 年入局　西　條　　茂

教室開講 100 周年おめでとうございます。

私は頭頸部癌治療の進歩と題して発表いたします。

私の前後、耳の話ばかりでしたので、頭頸部癌を選んで頂き、小林先生に感謝申し上げます。

私は、宮城県立がんセンターに勤めております。これが全景で、名取市にあります。

病院の本院、この後ろに研究所があり、緩和ケア病棟があります。こちらに仙台高専があります。（図 1）

現在、1 年間に 1,500 人から 1,600 人の新しい癌の患者さんを受け入れております。

私は 1973 年卒業後、麻酔科で 1 年研修ののち、1974 年から 1982 年迄の 9 年間、医局に在籍しました。私が入局したのは 1974 年で、河本教授の元に入局致しました。同年、長井市立病院耳鼻咽喉科横瀬先生の元に初期研修医として 3 か月赴任、この時、一番有難く思いましたのは、運転免許を取得させて頂いた事であります。翌年、東北労災病院耳鼻咽喉科湯浅先生の元で、研修を半年間受けました。その後医局で金子　豊先生の指導で内耳の研究を行っていたこともあり、1979 年 Mass. Eye & Ear Infirmary, Schuknecht 教授のところの Robert S. Kimura の元に 2 年間、リサーチフェローとしてボストンへ留学致しました。この 2 年間は内耳に関する研究で、帰国後、癌の診療に関わるとは思ってもいませんでした。帰国後、1982 年にいわき共立病院の桜井先生の元で 9 か月、博士号も取得して、1983 年に東北労災病院に移りました。労災病院で突然、癌治療もするようにと言われ、この時は、しばらく将来のことも考えましたが、あまり人生の流れには逆らわない方がいいだろうと思いました。湯浅先生、金子先生の薦めで、当時、斉藤裕夫先生が国立がんセンター頭頚科にスタッフとして勤務していたこともあり、国立がんセンターに研修に参りました。この研修がまさに「眼から鱗」でした。

図 1　がんセンター全景

当時、頭頸部癌で日本の第一人者である海老原先生と、東大の形成外科教授の波利井先生が、もう既に、1983 年（昭和 58）の段階で、遊離組織移植による再建手術を行っておりました。下咽頭癌で咽喉食摘後、空腸による再建手術を見まして、大変驚きました。時代は既に、切除後再建は、微小血管吻合による遊離組織移植が主流になって来る。また、当時は癌だと兎に角、根治的に大きく切除するという風潮から、可能な限り機能温存も考える事が重要になってくるということを、このがんセンターでの研修で実感致しました。

労災病院にその後戻り、1988 年（昭和 63）に、当時 NTT 東北病院外科の山口先生の協力で、遊離空腸による再建手術を労災病院で施行、それは国立がんセンターで見てから 5 年後になり、今から 24 年前のことでした。その後、労災病院で山口先生の協力もあり種々の再建手術も行い、ほぼ 10 年間で 500 例ほどの癌患者さんを診る事が出

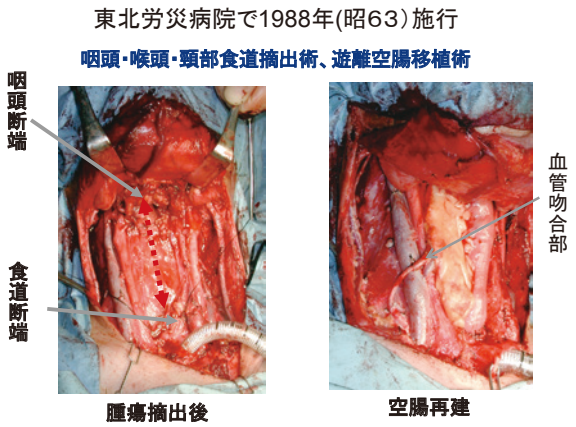


図 2

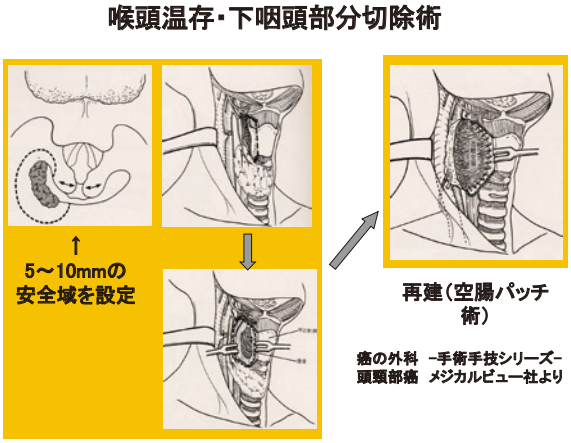


図 3

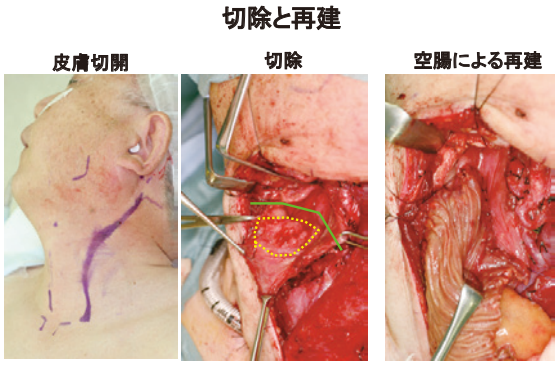


図 4

来ました。

1993 年（平成 5）に宮城県立がんセンター新設に伴いまして、大井先生と 2 名でがんセンターに赴任致しました。

図 2 は最初に労災病院で施行した、進行下咽頭癌に対する、咽喉頭・頸部食道摘出後の遊離空腸による再建術です。これは最近のがんセンターでの症例の写真を使用しています。両側頸部郭清します。咽頭の断端と食道の断端があり、この欠損部に対して、開腹して、空腸を採取し、インターポジションして、腸管膜の動静脈を頸部の血管に吻合します。この症例では、動脈は頸横動脈を使用して端々吻合し、静脈は内頸静脈と端側吻合しております。今ではこの術式が普及し、標準的治療になっていますが、当時、最初にこれを見たときには全くの驚きでした。

頭頸部癌治療の進歩についてですが、先ず 1 番は画像診断の進歩です。現在の CT、MRI、PET も含めて非常に鮮明な画像ができ、3D 構成も容易にできます。それともう 1 つ、最近では NBI と言いまして、咽頭の表在癌など、ごく初期の癌なども見付ける診療機器も出ております。それから、切除と再建手術の進歩、これはもう頭頸部癌に関しては、頭頸部外科医と形成外科の両輪で進むものです。それから、放射線と化学療法の組み合わせが色々進歩し最近では分子標的薬も頭頸部癌に使用されています。超選択的動注化学療法とありますが、これは 1997 年、横山純吉先生が、日本で初めて取り組みました。元々は米国の Robbins が 1994 年に発表した方法ですが、これを横山先生が積極的に改良も加え施行、今では日本中に普及しております。それから現在は、チーム医療による余病の制御という点で、1 人の患者さんに種々の職種が関わって治療を行います。そして治療を完遂する為に、支持療法が非常に発達しております。例えば PEG による（PEG というのは胃瘻のことです）栄養管理、それから、口腔ケアによる合併症の予防、また、麻薬による疼痛の制御など、とにかく治療を完遂するための支持療法は、目覚ましい発展をしております。

次に機能温存手術に関してですが、松浦先生が積極的に施行している喉頭を温存して、下咽頭を部分切除する方法です。図 3 に示しますが、甲状軟骨の外側壁を一部切除して咽頭腔を開窓、がん病巣を直視下に切除し、その咽頭欠損部を採取した空腸でパッチを当てる様に再建します。図 4 に

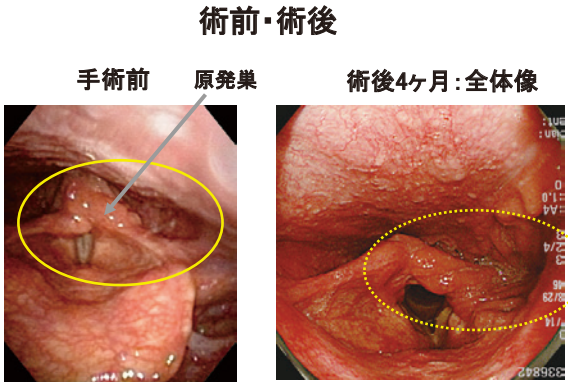


図 5

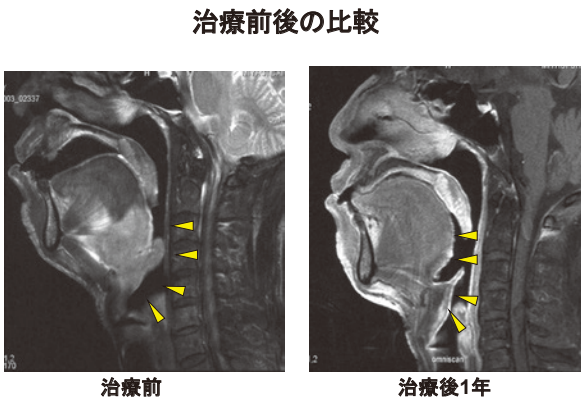


図 7

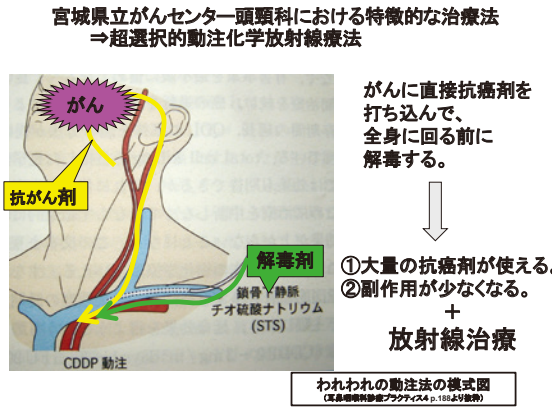


図 6

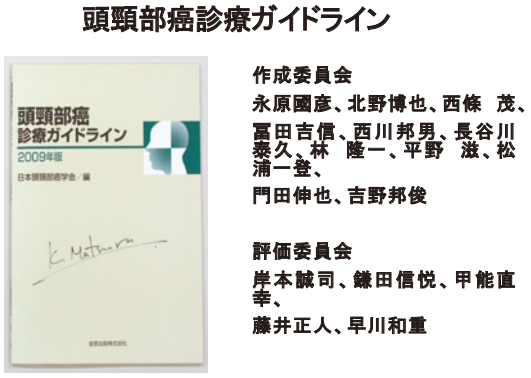


図 8

実例を示します。癌を直視下に切除致し空腸を開き、欠損部にパッチを当てる様に再建します。かつては欠損部が小さいと一期縫縮しましたが、今は再建ができますので、余裕を持って切除が出来ます。図 5 はこの手術の術前・術後の状態です。空腸で再建しますと、一部空腸のヒダが見えますが、ほぼ同じ様な形態に再建ができ、嚥下も発声も十分出来る様になります。機能温存という点では優れた術式です。

図 6 は、横山純吉先生が在任中に積極的に施行した、超選択的動注化学療法を模式化したものです。癌病巣に対して、鼠径部の大腿動脈から細いカテーテルを挿入し、癌病巣近くの栄養血管まで挿入します。その位置から大量のシスプラチンを注入します。注入した抗がん剤はがん病巣を還流し、内頸静脈から鎖骨下静脈に戻ります。その鎖骨下静脈に前もってカテーテルを留置しておき、チオ硫酸ナトリウムというシスプラチンの解毒剤を同時に注入します。この解毒剤により、シスプラチンの副作用はかなり抑えられます。癌に高濃度の抗がん剤を与えると同時に副作用は極力抑制されるという合理的な治療法です。この治療と放射線治療を併用する方法が積極的に行われる様になりました。

図 7 は治療の一例です。舌根に大きな癌があり、通常この様な癌の治療には、舌・喉頭全摘となりますが、この症例では両側から超選択的動注化学療法施行し放射線治療も併施。すでに 5 年生存しております。

2009 年に日本頭頸部癌学会から、頭頸部癌の診療ガイドラインが出版されました。この作成には私と松浦先生、当初は舘田先生も関わりました。京都の永原先生を中心として、頻回に京都へ集合し、最後は京大の宿舎で徹夜作業の末、完成しました（図 8）。

今後の頭頸部癌治療の課題ですが、ロボット手

術ダヴィンチの頭頸部領域における展開がこれからどうなるか。重粒子線、陽子線など粒子線治療の扱い、頭頸部癌の遺伝子学的検索、分子標的薬の導入などが、課題になると考えられます。また頭頸部癌治療の専門医が足りないという事、外科医の減少傾向が顕著ですので、こういった方面も考えなくてはいけないと思います。

最後、図 9 に現在まで県立がんセンターで、活躍された先生方を列挙いたします。臨床に研究にと頑張っていただき、皆さんに感謝申し上げます。

ご清聴有難うございました。

宮城県立がんセンターで活躍された先生方（敬称略）

大井聖幸　横山純吉　志賀清人　舘田　勝　　吉田文明
小川武則　加藤健吾　片桐克則　嵯峨井　俊
西川　仁　清川裕道　山崎宗治　石田英一　角田梨紗子
去石　巧（弘前大）
花澤秀行（新潟大）　Kai　Higashigaido（チューリッヒ大）
田畑貫之（産業医大）
＜現在センターで活躍中＞
松浦一登　浅田行紀　今井隆之　齊藤大輔
渡邊幸二郎　貞安　令

感謝

図 9

● 記念リレー講演 8 ●

聴覚と聞こえ

東北大学医工学研究科　聴覚再建医工学研究分野
昭和 57 年入局　**川　瀬　哲　明**

教室開講 100 周年まことにおめでとうございます。また、本日は、このような講演の機会をいただき、どうもありがとうございました。私が入局致しました昭和 57 年でございますが、ちょうど河本先生の開講 10 周年の年で、教室開講 70 周年にあたる年でございました（図 1）。それからちょうど 30 年たちまして、皆様と共にこの 100 周年をお祝いできますことを本当に嬉しく思います。

さて、私の入局当時ですが、入局後はまず 2 年間ほど関連病院での研修を行い、その後医局に戻りますと、臨床と平行して研究グループに配属され、博士論文を目標に研究をスタートするのがいわば習わしとなっていました。私の医局での研究生活は、草刈先生の “電気部屋” の内耳研究から始まりました。夜遅くまでご指導いただきながら、モルモットに向かい合ったことが昨日のように思い出されます。その後、留学の機会も頂き、ネコの聴神経の研究にも従事しましたが、そのころは “言葉” は “耳で聞くもの” とあたりまえのように思っておりました。ところが、その後、高坂先生のご高配でデジタル補聴器の研究に従事させて頂きましたときに、電気通信研究所の鈴木教授に出会いまして “言葉は耳だけで聞いているのではないかもしれない”、と思うようになりました。鈴木先生は音響工学的に難聴を模擬した模擬難聴音声を使った研究をされていましたが、スライドは、人工内耳聴覚を模擬した音声で私が体験したことです（図 2）。最初、人工内耳模擬音声を聞くとなんて言っているかほとんど分からないのですが、そのときにその言葉を喋っている人の顔を一緒に見ながら聞いたり（視覚情報）、あるいはこれを何度も何度も繰り返し聞いていると、聞こえ方が変わってくるんですね。言葉としてだんだんはっきり聞こえるようになります。

同じ音を聞いているのに聞こえ方が変わるということは、衝撃でした。でもこれはよく考えてみますと、人工内耳の医療の現場で日頃体験していることであるわけです。すなわち、人工内耳では、埋め込み直後はあまり言葉が分からない。し

図 1　昭和 57 年に開催された河本教授開講 10 周年、教室創立 70 周年の様子。この年は、私を含め 5 人が入局。

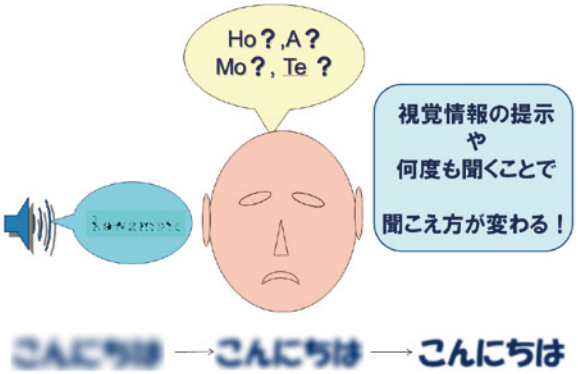


図 2　人工内耳模擬音声で経験したこと　最初は、何て言っているかほとんど聞き取れないが、言葉を喋っている人の顔を一緒に見ながら聞いたり（視覚情報）、あるいは何度も繰り返し聞いていると、だんだんはっきり聞こえるようになる。

かし、リハビリテーションの過程で、だんだん言葉がはっきりと聞こえてくるという過程があるわけです。これと同じことを擬似体験できたのだろうと思いました。

そこで「同じ聴覚情報に対して聞こえ方が変わっていくという過程があるとすれば、聞こえを効果的、効率的に良くするにはどうすればよいだろうか」、「もし脳に聞き取りを改善する力があるとすれば、その力を引き出すのに必要な聴覚情報の条件はどういうものなんだろうか」ということがその後の研究テーマの一つになりました。

こういった研究では、最終的には実際の人工内耳の患者さんや難聴の患者さんを対象に解析することが重要になりますが、実際の難聴患者さんでは、聴覚条件のバラツキも大きく、結果の解析や解釈が難しくなることがあります。そこで、まず人工内耳模擬音声を使って健聴被験者を対象にいろいろ調べてみました。模擬音声は、加工により様々な聴覚条件を模擬的に付与することができますので、解析したい要因の制御が容易であるという利点があります。

もちいた人工内耳模擬音声ですが、最初に聞くと正答率は 5% ぐらいになるのですが、トレーニングに伴い正答率が上昇してきます。ただ、どういうトレーニングをするかによって正答率は大きく異なることがわかりました。

本日は、時間の関係でデータの詳細はお示ししませんが、今回の検討で正答率の改善に有意な影響を与えたのは視覚と正答フィードバックの有無でした（図 3）。すなわち、人工内耳模擬音声をそのまま、ただ繰り返し聞くだけではなかなか効果は出ないのですが、言葉を聞いた後に正答をフィードバックすると、聞き取りがより早く、より大きく改善します。視覚の効果の効果も同様です。聴覚だけでトレーニングしたほうがいいのか、それとも顔画像付きで視覚も一緒にトレーニングしたほうがいいのか、視覚を同時に提示すると視覚に頼るので聴覚だけでの聞き取りの改善が悪くなるんじゃないかとも考えたのですが、結果的には、少なくともトレーニングの初期段階で

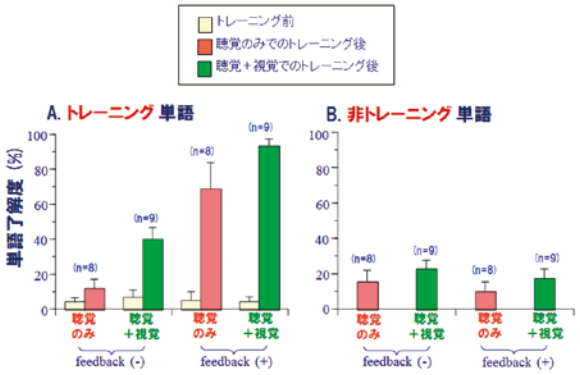


図 3　トレーニング条件の聴覚トレーニング効果に対する影響　「音声のみ」条件のトレーニング群に比較して「音声＋顔画像」でのトレーニング群では、トレーニングした単語の聞き取り（A）、トレーニングしていない新たな単語の聞き取り（B）のいずれにおいても、フィードバックの有無に関わらず、トレーニング後の音声聞き取りが有意に良好な結果であった（Kawase et al. 2009 より改変）

は、視覚の同時提示は非常に重要だということが分かりました。また、限られた単語を使って訓練を行っていますと、過学習といって、訓練した言葉の聞き取りは改善するのですが、訓練に使用しなかった言葉に対する聞き取り改善の程度はやや劣る可能性が示唆されました。

現在は次の段階として、これまでの知見を基にした PC-base のトレーニングシステムを構築中です。近々、実際の難聴の方を対象にしたトレーニング効果を検討する予定です。また、トレーニングにおける視覚の同時提示の効果に関しては、脳磁図を用いた検討を始めているところです。脳機能画像には PET（positron emission tomography）、fMRI（functional MRI）なども用いられますが、脳磁図の利点の一つは、時間分解能が良いということです。実際の脳波を元に脳機能の変化、活動を見ることになりますので、刺激提示後、どのくらいの時間で脳のどの部分に視覚の影響がみられるかなど検討中です。

それからもう一つは、入力側の条件、すなわちリハビリテーションや訓練で効果が得られるために必要な入力情報の問題です。

スライド（図 5）は、人工内模擬音声作成の模

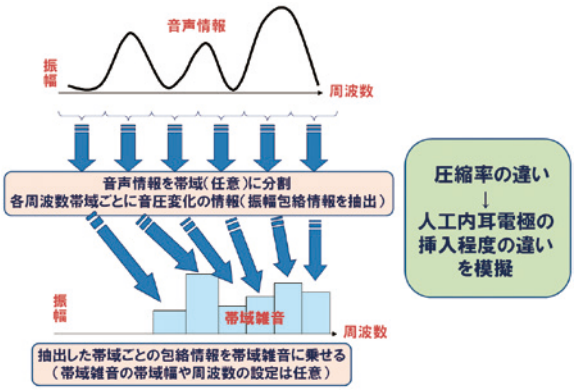


図 4　人工内耳模擬音声の作成方法　音声情報を周波数帯域ごとに分割し、各分割帯域ごとの振幅包絡情報を抽出、抽出した分割帯域ごとの包絡情報を、高周波数側に圧縮されるように帯域雑音に組み込むことで作成（周波数変換帯域雑音音声）。本音声は、人工内耳聴覚の特徴である、(a) 周波数の時間情報が乏しい点、(b) 音声情報が帯域分割されている点、(c) 帯域ごとの振幅包絡情報が圧縮して投射される点などの模擬を意図し作成。

式図ですが、本方法で作成しますと元音声を任意の帯域数に分割して、帯域ごとの音声包絡情報を任意の帯域雑音にのせることができます。

現在までのところ ① 入力情報として重要な周波数帯域は中高音域であること、② 入力帯域数については、1 帯域では情報伝達は極めて限定的であり、帯域数が増えるにつれて、聞き取りは改善すること、③ それから周波数の写像のシフトが大きすぎると聞き取り改善がよくないこと、などがわかりました。分割帯域数は、人工内耳の使用電極数の多少を模擬することになりますが、分割帯域数の影響については、10 帯域以上ではほぼ同等であるというような文献的報告もあるようです。実際、臨床で使われている人工内耳の電極数も 12 電極、あるいは 22 電極が使用されているわけですが、言葉の聞き取りとしての効果は大体優劣つけがたいということになっているように思われます。一方、周波数写像時の周波数シフトの

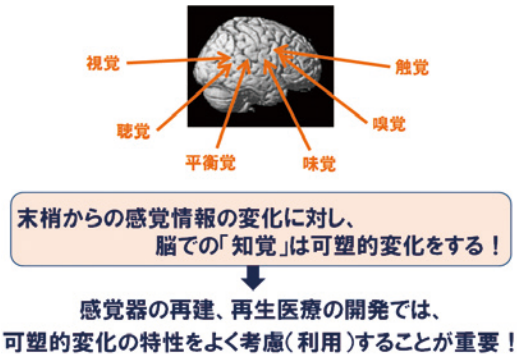


図 5　感覚器の機能再建と脳の可塑性

影響ですが、これは人工内耳の電極挿入深度とも関連する事項です。元来、音声情報は、蝸牛は全体で処理されています。しかし、人工内耳では、蝸牛頂先端まで電極が入るわけではありませんので、少し周波数が高周波数側に圧縮されシフトされた状態で情報伝達が行われることになります。電極が深部まで入りませんと周波数のシフト、圧縮が強くなってきます。入力情報として特に重要な周波数帯域が中、高音域であることを考えますと、深部まで挿入できなかった場合は、むしろ低い周波数の、それほど言葉の聞き取りへの貢献度が低いだろうと思われる帯域の情報は、逆に割愛した方がより良い結果が得られることもあるのではないかと考えております。

最後のスライドです（図 5）。

人工内耳に代表される、聴覚の機能再建とその後のリハビリテーション過程を通し、あらためて感じることは、末梢からの感覚情報の変化に対し脳での知覚は可塑的に変化をするということです。感覚器の再建、再生医療の開発では、この可塑的変化の特性をよく考慮（利用）することが非常に重要ではないかというふうに思っています。

以上でございます。どうもご清聴ありがとうございました。

● 記念リレー講演 9 ●

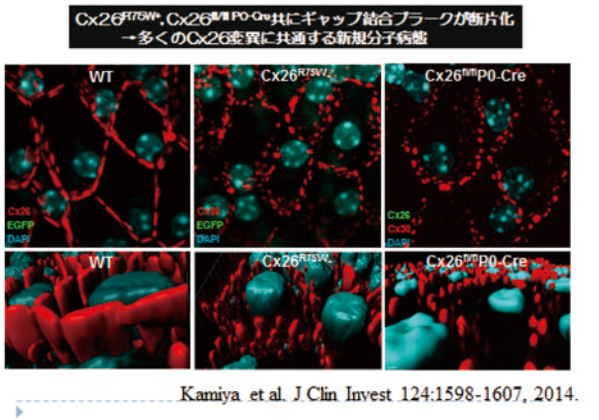
遺伝性難聴の分子機序と治療戦略

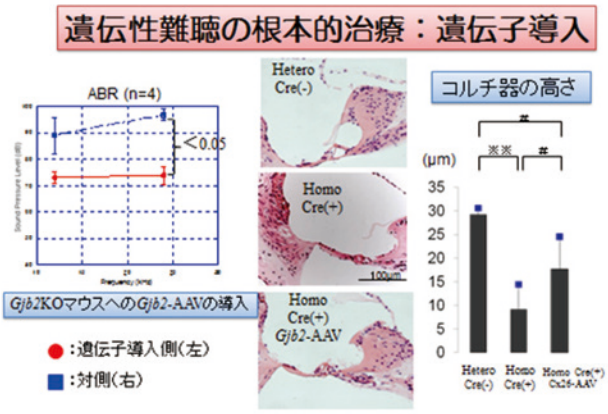
順天堂大学医学部耳鼻咽喉科学講座
昭和 56 年入局　池　田　勝　久

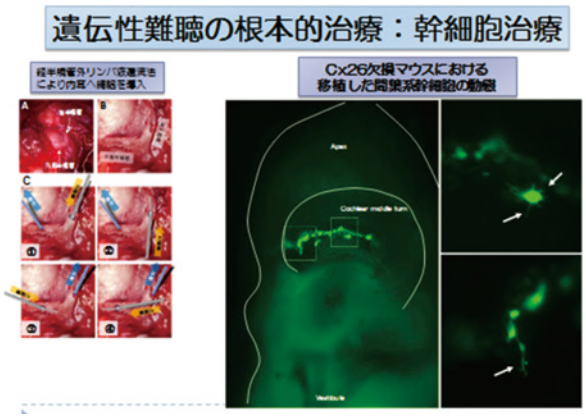
私は順天堂大学に平成 15 年に赴任しました。東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室開講百周年記念式典にて、順天堂での 9 年間の内耳研究の成果を講演させて頂きました。その内容についてご説明申し上げます。

先天性難聴として最も頻度の高いコネキシン 26 遺伝子のモデル動物を用いた研究から、この遺伝子は蝸牛のコルチ器の支持細胞の発育に必須の遺伝子で、その欠失で細胞間のギャップ結合プラークの形成が断片化して、機能不全に至ることが判りました。野生型のコネキシン 26 を幼若のノックアウトマウスに遺伝子導入することで、難聴がレスキュウすることが可能となりました。また間葉系幹細胞の導入による効果についても現在、検討中です。

今後も東京の御茶ノ水の地にて、研究・臨床・教育に努めていく所存です。







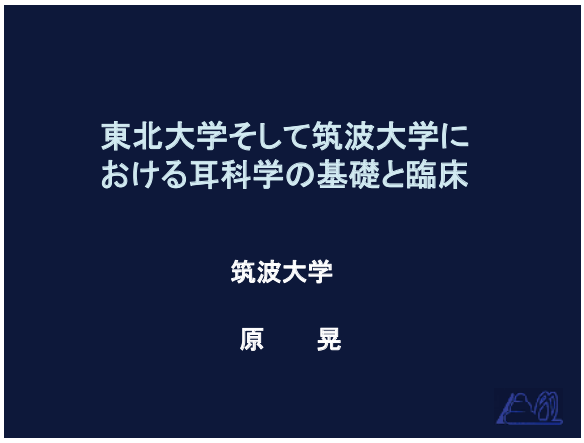
● 記念リレー講演 10 ●

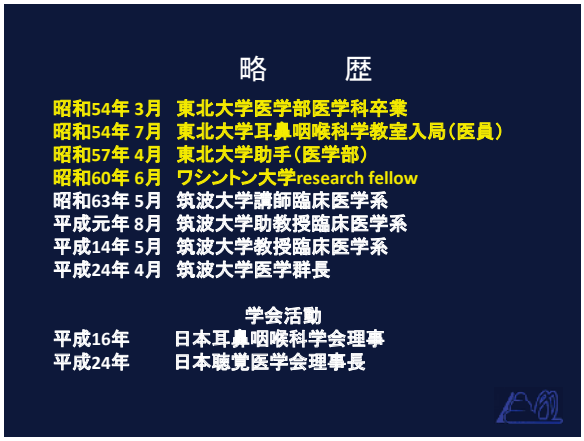
東北大そして筑波大における耳科学の基礎と臨床

筑波大学医学医療系・耳鼻咽喉科
昭和 54 年入局　原　　晃

100 周年本当におめでとうございます。また 100 周年に少しだけ関わりました私としても非常に誇りに思っております。それでは早速始めたいと思います。

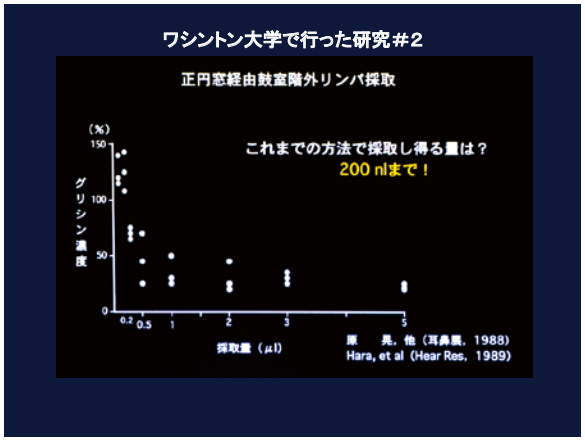
まず略歴ということでございますが、昭和 54 年に東北大学を卒業しまして 54 年入局ということでございます。昭和 63 年までが東北大学での私の経歴ですが、きょうのご発表をなさった先生方はすべて、湯浅先生はその当時から臨床研修といいますか指導医であられたわけですが、そのほかの先生たちはみんな私と同窓で、同じ教室で一生懸命勉強したり遊んだり怖い先生と飲みに行ったりしておりましたけれども、一番大きな起点になりましたのは、助手になった頃でございましょうか。生化学を是非やりたいということで始めたのですが、当時教室にはまったく何もございませんでした。河本先生が裏のどこかに比色計のでっかいやつがあるというお話がございまして、私と一緒に探していただきました。残念ながらその機械は見つからなかったんですけれども、科研費でなんとか買っていただきまして、そこからがスタートでございました。従いまして私のそのリサーチのスタートは河本先生と、そして昭和 60 年に Washington University の Thalmann 教授の教室で今までの電気部屋から行ったポジションとは違うんですけれども、生化学をやろうということで草刈先生にお骨折りいただき、留学致しました。この 2 つが私のリサーチ人生にとっては大きかったのかなというふうに考えております。

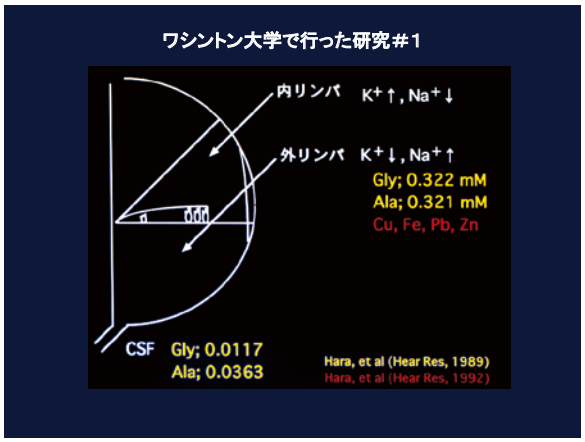


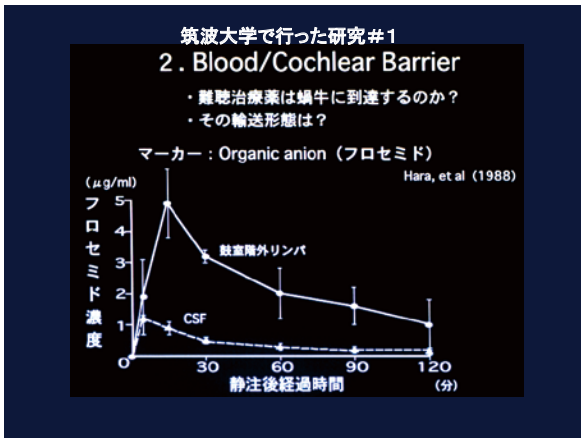


昭和 63 年の 5 月に草刈先生と共に、先生よりは 3 カ月程遅れましたけれども筑波大学に行きまして平成 14 年に教授に就かせていただきました。現在は医学群長ということで、これも草刈先生がかつて就かれていたポジションですが、いわゆる医学部長です。それから学会活動のほうでは平成 16 年から新川先生、小林先生と共に日耳鼻の理事をさせていただいております。それから平成 24 年 10 月から聴覚医学会の理事長にさせていただきました。この学会は鈴木篤郎先生、立木　孝先生を始めとして本学の同窓の先生たちが築き上げた非常に歴史のある会でございます。今後も沖津先生、川瀬先生を始め何卒ご協力の程よろしくお願いいたします。

それでいい写真をと思ったんですがなかなかなくて、これは 1987 年、私のアメリカの最後の年でございますが、ARO でフロリダでの発表風景

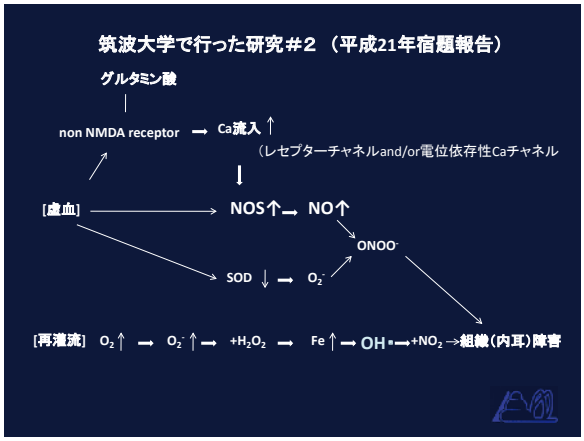


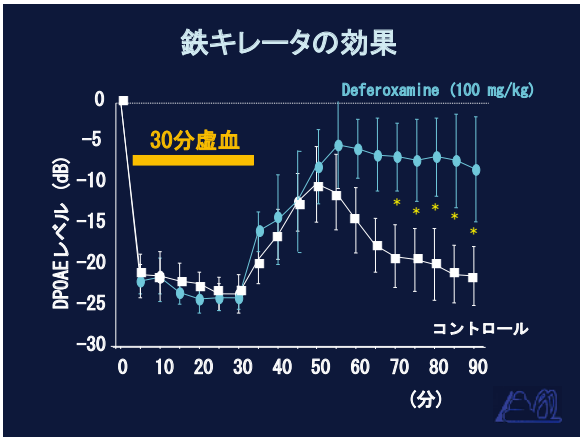


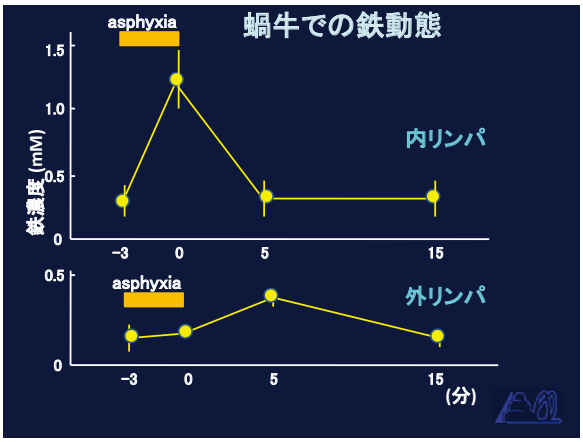


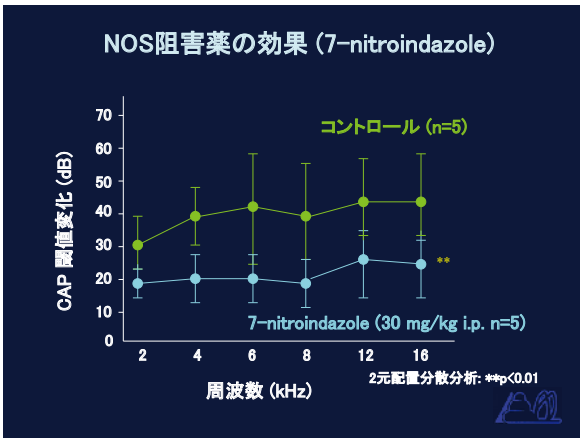
でございまして、これは多分高坂先生のポスターをみんなでお手伝いしている最中だろうと思うんですけれども、菊地先生や池田先生、それから朴澤先生も、まだ僕自身も含めて若い頃ですけれども、姿が見えております（スライド3）。まずワシントン大学といいますか東北大学といいますか、その当時やったことから年次的に少しだけお話しさせていただきますと、とにかく日本では何もできなかったので Thalmann のところに行って HPRC という装置があるのですが、今では当たり前の検査法ですが、その当時は日本には少なくとも耳鼻科領域にはなくて、それで最初にやったのが外リンパ、そして CSF、内リンパのアミノ酸です。そこに書いてございますように CSF のグライシン、アラニンの量と外リンパのアラニン、グライシンの量が違うということで、その次のスライド（スライド5）に示しますが、そこでここからの CSF からのコンタミが起こるんだということの証左を出しました。ここに書いてあります銅や鉄や亜鉛、その他のものに関しましては、筑波大学に帰ってからの仕事でございます。今申し上げましたように蝸牛小管を開けたままでいくと、CSF からの混入がきまして、そのまま取れる外リンパ量というのは 0.2 μl しか取れないというお話がここで一つ発表させていただきまして、今までの生化学的な組成の発表についてはすべて間違いが多いだろう、ということの一石を投じさせていただきました。

次にやりましたのは筑波大学に行きましてすぐやったのは、同様に HPRC を用いて、organic anion のフロセミドをマーカーとして blood brain barrier、blood cochlear barrier の程度というものを検討いたしました。そして CSF よりは弱いけれどもかなり active transport が鼓室階外リンパで起こっているというような話を進めさせていただきました（スライド6）。それで次にやりましたのが、これは結局先程も小林先生からご紹介いただきましたが、宿題報告に繋がるところでございます。ここにお示ししましたように、これは一つのモデルなんですが、虚血再灌流障害というの

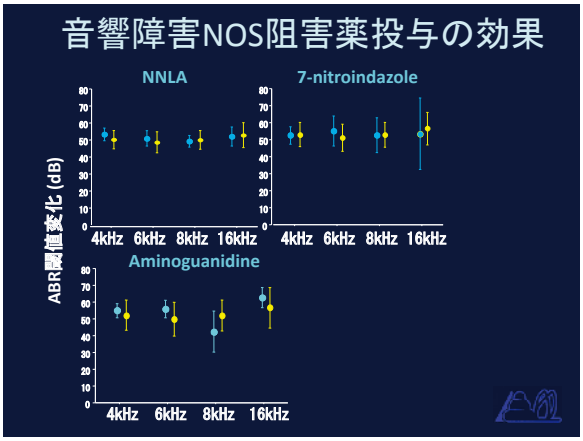


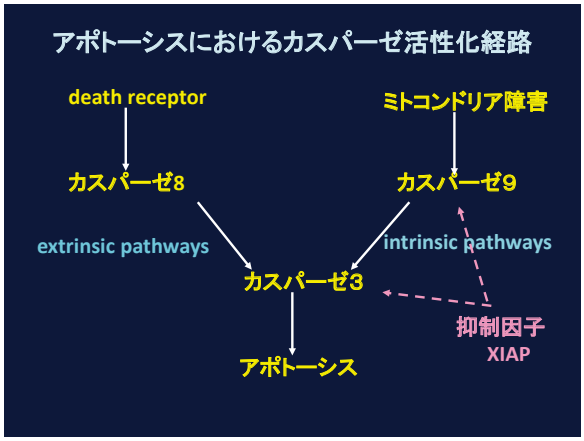


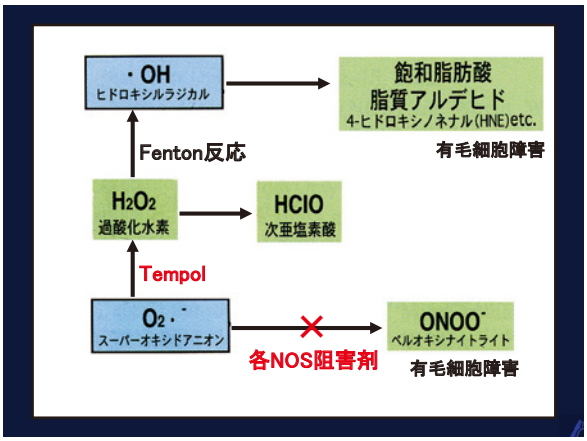


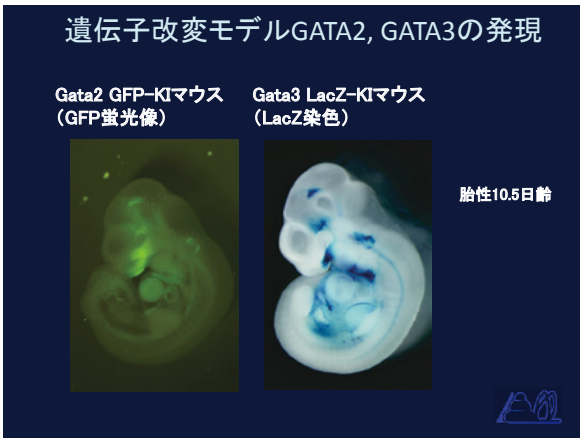


を一つ突発性難聴のモデル動物と考えようということで始めました。虚血が起こりますとグルタミン酸と non-NMD リセプターが結合して細胞内にカルシウムが流入する。そのことと、それから虚血自身によって一酸化窒素合成酵素（NOS）活性が上昇して NO が出る。一方で Superoxide dismutase の活性が低下して Peroxynitrite ができる。一方で再灌流を行いますと過剰の酸素が出てきて、フリーの鉄の上昇が起こって、最終的に細胞傷害性の強い hydroxyl radial ができる。この一連のことをすべて潰していくといいますか、それの蝸牛内で起こっていることをまず行いました。まず最初には鉄ですけれども、鉄が内リンパと外リンパ多少違いますが、asphyxia あるいは anoxia を行ったときにフリーの鉄が一過性に上昇するということを確認しました。実際に鉄のキレート剤である deferoxamine をやりますと、DPOAE が縦軸の指標でございますが、30 分の虚血後に 1 回 DPOAE 上がるんですがその後下がるんです。ところが鉄のキレート剤をやって、先程の図にありましたような hydroxyl radial の産生を抑制するとこの下がりが抑えられるということで、蝸牛の中で虚血再灌流障害においてはこういったものが関わっていることが明らかになりました（スライド 9）。それからこれは NOS 阻害薬ですけれども、これは CAP を指標としております。これはやっぱり NOS の阻害薬を入れますと、やはりコントロール群に比較しますと閾値上昇はある程度抑えられるということでございました（スライド 10）。ところがそれが虚血再灌流障害、突発性難聴のモデルですが、急性音響障害をやりますとこういった NOS の阻害薬はまったく効きません。つまり先程の図の上の部分というのが音響外傷では関わっていないということになります。つまり、これは音響障害ですけれども、音響障害においては NOS のこの系列はほとんど関係していないだろうと。つまり 2 つの系というのはいずれもラジカルが関係しているわけですが、その内容は異なっているだろうということを発表させていただきました。



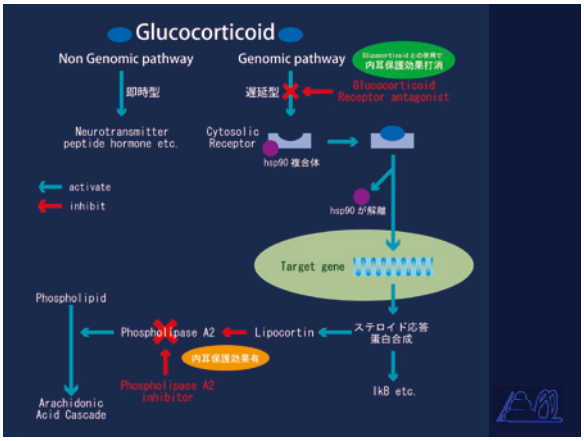


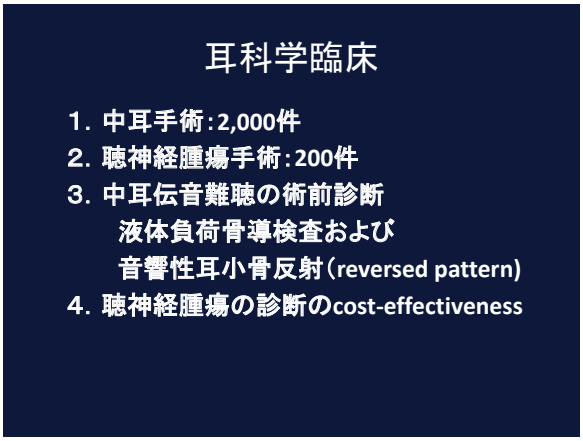


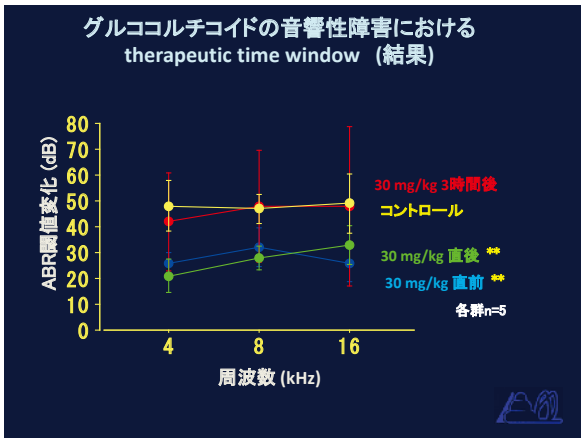


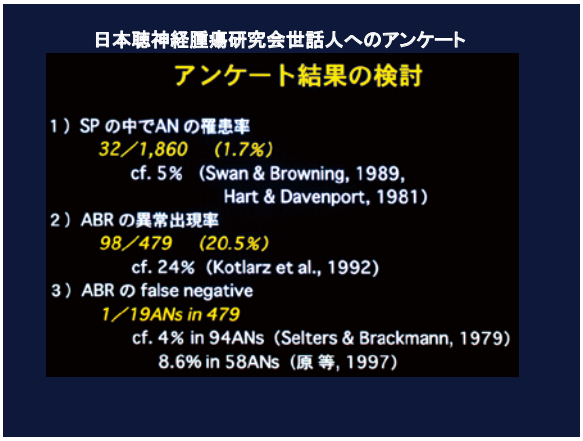
もう一つはアポトーシスです。アポトーシスにはカスパーゼ 8 からの外因性の pathway と、それからカスパーゼ 9 からくる内因性の経路がございますが、これらをいろいろなこういった阻害剤をやることによって、蝸牛で起こっているのはこういった 9、3 といったような内因性の経路であるということを明らかにさせていただきました。それからもう一つこれは、本同窓会でも一度講演いただきました山本くんという僕の同級生なんですが、今はメガバンクの所長をやっておりますが、一時東北大学の医学部長でありました山本くんの教室から、GATA2、GATA3 の改変モデルを借りてうちの医局員がいろいろやりまして、こういったものを作りました（スライド 14）。これはなかなか面白くて、今後さらに発展させていきたいというふうに思います。

もう一つはグルゴコルチコイド。例えば突発性難聴のエビデンスのある薬。実はこれも聴覚医学会が発表しましたが、本当の意味でのエビデンスレベルとしては高くはないんですが、少なくともそれらしいエビデンスのある薬というのはステロイドしかないわけですが、そのステロイドの作用機序というのは実はよく分かっていません。それでここでやりましたのは、non genomic pathway とそれから genomic pathway と 2 つの経路がございますが、いずれにしてもわれわれのやった形では、non genomic pathway がいってこういったお薬が効くんだろうと、内耳保護効果をもつんだろうということを発表させていただきました。ステロイドに関しましてもう一つやりましたのは、therapeutic time window が非常に狭いというお話をしました。少なくとも動物実験におきましては 30 mg のグルゴコルチコイド、直後にやった場合と直前にやった場合、それから 3 時間後にやった場合というふうに分けますと、ここはある程度 CAP 閾値上昇を抑えるんですけれども、3 時間後にはもう効かないと。そうすると人間ではどうなんだということになってしまうんですが、いずれにしてもその therapeutic time window はグルゴコルチコイドにおいても非常に狭いということが動







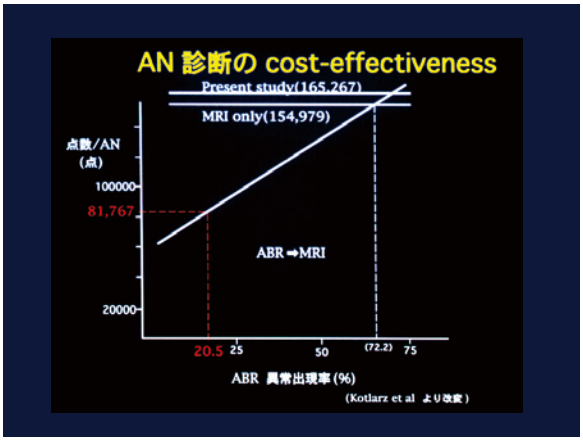


物実験で明らかにさせていただきました（スライド 16）。

臨床のほうでございますが、耳の手術は大体 2,000 例ぐらいはやったかなという感じがします。これを別に威張るわけではなくて、これも湯浅先生、その当時いらっしゃいました佐藤良樹先生のお二人の指導がここのスタートになっているというお話をしたかっただけです。それから聴神経腫瘍も Haupt でやったのが大体 200 例くらいです。それからこれは欠畑先生に怒られるかもしれませんが、中耳伝音難聴の術前診断ということで、彼は鼓膜に穴をあけるわけですけれども、一切あけずに液体負荷骨導検査、これは聴覚に詳しい方はよくご存じのように非常に古い検査です。それから音響性耳小骨筋反射、まったくのアーティファクトなんですけど reversed pattern というのが出て、その出方によって耳小骨の離断なのか固着なのかという、大体 9 割ぐらいの正答性をもってこれが判断できるというようなことも発表させていただきました。

それから最後に一つだけ、聴神経腫瘍、手術もやっているんですが、cost-effectiveness ということで少し検討いたしました。これは日本聴神経腫瘍研究会というのがありまして、今は橋本　省先生が代表世話人でございますが、そこの世話人の先生たちにアンケートを出しまして、大体トータル 1,860 例、日本でやっぱり一番大型のアンケートだと思うんですが、そこでいわゆる一側性難聴、一側性耳鳴で、いわゆる suspected patients、聴神経腫瘍が疑われる患者がどのぐらいいるのかと。これは耳鼻咽喉科だけじゃなくて脳神経外科も入っておりますので、耳鼻咽喉科医の正診率というとちょっと違うかもしれませんが、大体 1.7% ぐらいには本当に聴神経腫瘍がいるということが一つ分かりました。これは過去の報告よりは少し高いということになります。そういった検査の中で最も sensitivity、specificity が高い検査というのは、MRI を除けばですけれども、ABR なんです。その異常出現率、やってその中でどのぐらい異常が出るかというと 20.5% くらいという過去

の報告と同じです。それからABRの中でfalse negativeというのがどれぐらいか、これは実は1例も見逃さないということに関しては重要なんですが、479例ABRやって19例中1例のfalse negativeがあったということになります。これは何を言っているかというと、結局聴神経腫瘍を診断するためにcost-effectivenessの点から何をやったら一番有用なのか、これは結論的には平衡機能検査というのはまったく関係ありません。というのはsensitivityもspecificityも悪いわけです。だからといってその検査の意義が失われているわけではなくて、聴神経腫瘍の診断のためには何がいいかというと、全例にMRIをやると先程言いましたように非常にそれは無駄が多いんです。これは全例の検査の値段、そして全例にもしMRIを最初から行うとどのぐらいになるかというとこういう値段になります。それに対してまずABRをやって異常出現率が20.5%ということで、このグラフに当てはめますと、やはりsuspected patientに対してはまずABRをやってそこで異常が出た場合にはMRIをやったほうが遥かに値段は安く、cost-effectivenessはよいというような結論でございました（スライド19）。以上です。どうもありがとうございました。



特　別　寄　稿

新しい OSAS 病因モデル

帝京大学ちば総合医療センター　耳鼻咽喉科
平成元年入局　**鈴　木　雅　明**

睡眠時無呼吸症候群（OSAS）において、睡眠中の咽頭閉塞は上下顎骨による骨格と舌、扁桃、軟口蓋などの軟部組織とのバランスにより生じると考えられています（解剖学的バランスモデル）。我々はこの解剖学的要因を研究テーマとして 3D MRI 再構築画像などにより解析してまいりました。しかし最近の研究では閉塞性無呼吸の成因として解剖学的要因のみでなく、呼吸中枢不安定性、咽頭筋反応性、および覚醒閾値の 4 つの要因の相互関係により閉塞性無呼吸が生じていることがわかってきました。これらの要因は中枢性無呼吸のみならず閉塞性無呼吸においても重要となるわけです。最近米国ハーバード大学の呼吸生理グループから、患者さんの睡眠中に CPAP 圧をかけて圧を下げたり上げたりしながら各ポイントでの容積流量（L/min）の値を計測し（図 1）、それをグラフ化することにより 4 つの要因の相互関係を解析し、その患者さんが OSAS であるのかどうか、およびその重症度までをも判定できるモデルが提唱されています。今回教室 100 周年記念誌において、この Wellman の OSAS 病因モデルをご紹介させていただきます。

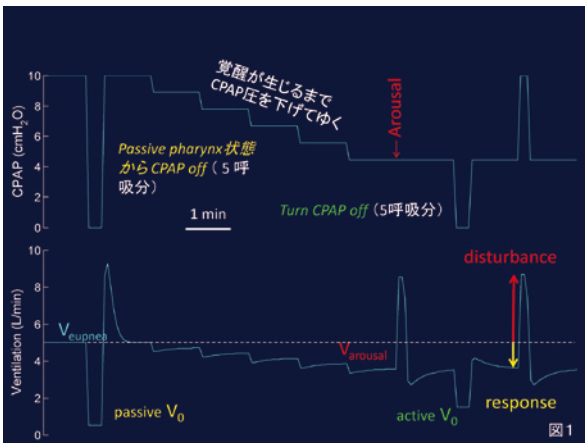


図 1　OSAS 病因計測方法

計測方法

ある患者における至適 CPAP 圧（上気道が完全に開存し筋緊張が消失した passive pharynx の状態）での換気量の点を V_{eupnea} とします（この例では 5 L/min）。この V_{eupnea} 点から安定していた呼吸から CPAP 圧をゼロとした時の換気量が passive V_0 点と致します。この passive V_0 点での換気量がこのモデルにて解剖学的つぶれやすさの指標となります。V_{eupnea} 点から CPAP 圧を下げてゆき覚醒が生じる換気量を $V_{arousal}$ とします。この時の咽頭は筋緊張が働いている active pharynx の状態です。$V_{arousal}$ から CPAP 圧をゼロとした時の換気量を active V_0 点とします（図 1）。

呼吸中枢不安定性は loop gain というバイオエンジニアリング理論にて評価されます。これを簡単に述べますと、換気の変化に対する応答が大きいほど、loop gain は高く呼吸中枢は不安定となり、換気の変化に対する応答が小さいと loop gain は安定しており呼吸中枢は安定しているという理

論です。グラフは縦軸が換気量、横軸が（推定）呼吸出力（ventilatory drive）を表します。この患者さんの例では換気の変化は 1.4 L/min、それに対する換気反応が 3.7 L/min にて V_{eupnea} 点から延びる実線が引けその傾きが loop gain、つまり呼吸中枢不安定性となります（図 2）。

換気の低下が生じるとそれを代償しようと呼吸出力は増加します。CPAP をかけている状態で圧を下げてゆくとこの呼吸中枢不安定性の直線上に沿って呼吸出力は動くことになりますが、$V_{arousal}$ の呼吸出力まで下がると覚醒が生じてしまいます。これが覚醒閾値（arousal threshold）でありこの例では 9 L/min となります（図 3）。一方、筋緊張が消失した passive pharynx の状態である passive V_0 から、筋緊張が働いている active pharynx の状態である active V_0 まで、咽頭筋の緊張の上昇にともない呼吸出力は増加してゆきます。これは咽頭筋の反応性（upper airway response：UAR）と呼ばれます。CPAP をかけていない状態では呼吸出力は筋緊張の上昇にともない、この咽頭筋反応性の直線上に沿って動くことになります。実際には先ほどの覚醒閾値（この例では 9 L/min）を超えて呼吸出力されることはありませんので、active V_0 点と覚醒閾値が交わる A 点までの増加ということになります（図 3）。この passive V_0 点（気道のつぶれやすさ）、呼吸中枢不安定性、咽頭筋の反応性および覚醒閾値の 4 つで表わされるグラフが Wellman の OSAS 病因モデルとなります（図 3）。

上昇してゆく呼吸出力は、覚醒反応が生じないとすれば、呼吸中枢不安定性と咽頭筋の反応性が交差する C 点にて平衡に達し、恐らく flow limitation や低呼吸として呼吸が一定となり安定化します。しかしこの C 点より手前に覚醒閾値があ

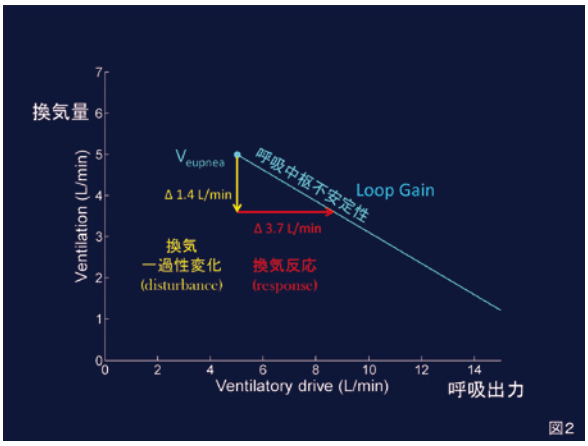


図 2　呼吸中枢不安定性（Loop gain）

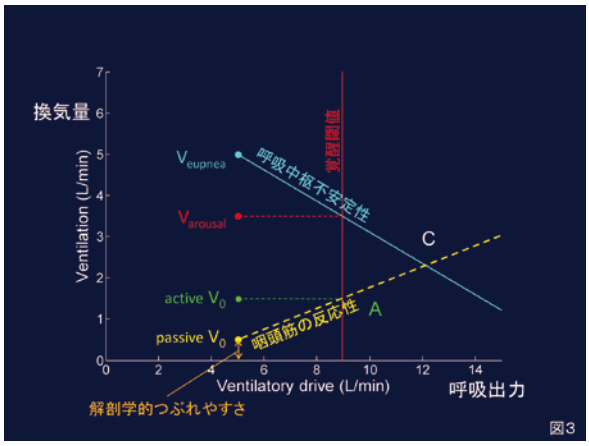


図 3　Wellman の OSAS 病因モデル

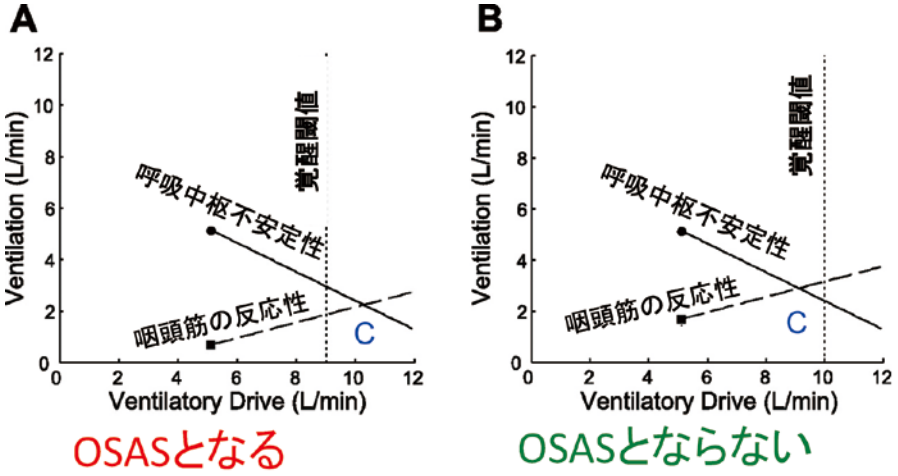


図 4　覚醒閾値と C 点との関係

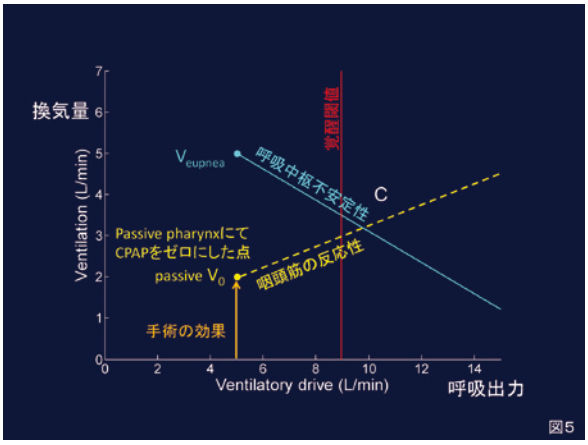


図 5　手術療法の役割

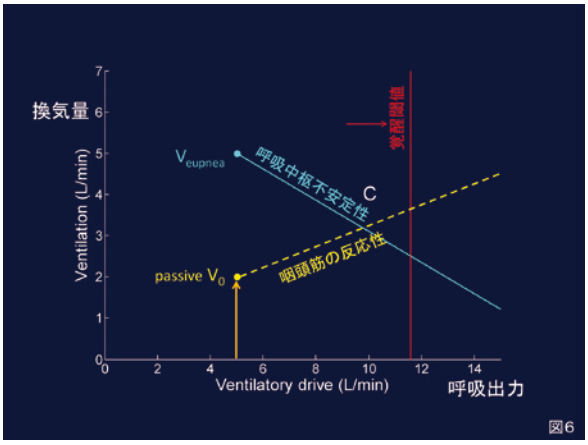


図 6　手術療法＋覚醒閾値上昇

る場合、呼吸が一定となる前に覚醒が生じてしまい、呼吸イベントとなってしまいます。つまりこの患者さんは OSAS となるということになります。逆に呼吸が安定する C 点の呼吸出力まで覚醒閾値が生じない場合、この患者さんは OSAS とはならないということになります（図 4）。

手術療法の位置付け

このモデルにおける手術療法の役割は passive V_0、つまり passive pharynx から CPAP をゼロにした際の換気量をどれだけ増やすことができるか、ということになります（図 5）。しかしこの図 5 の術後の状態では、呼吸出力が C 点に到達する前に覚醒閾値となり、OSAS は治らないということになります。OSAS とならないためには、C 点を覚醒閾値より低い呼吸出力に移動させる必要があり、追加治療方法は覚醒閾値を上げる（図 6）、もしくは呼吸中枢不安定性を安定化させる（図 7）の 2 つとなります。覚醒閾値を上げるためには trazodone や eszopiclone などの催眠鎮静薬が、呼吸中枢不安定性を安定化させるためには酸素投与やアセタゾラマイドが有効であることが、それぞれ報告されています。

ただこの Wellman の OSAS 病因モデルにも問題はあると思われます。4 つの要因の背景は複雑なはずであり、また寄与度には差異があるはずです。たった 15 分くらいの換気量（容積流量）の計測のみで得られた単純なグラフにて、4 つの要因を正しく表すことができているかという疑問は残ります。しかし、このモデルは OSAS は解剖学的要因のみならず呼吸中枢不安定性、咽頭筋反応性、覚醒反応閾値の 4 因子が OSA の成因であることを示唆している点、および手術にて AHI が十分下がらない理由を説明し得る点において、その重要性があると思われます。特に肥満がなく解剖的狭窄が顕著でない、軽症～中等症 OSAS にこのモデルが当てはまると考えられています。

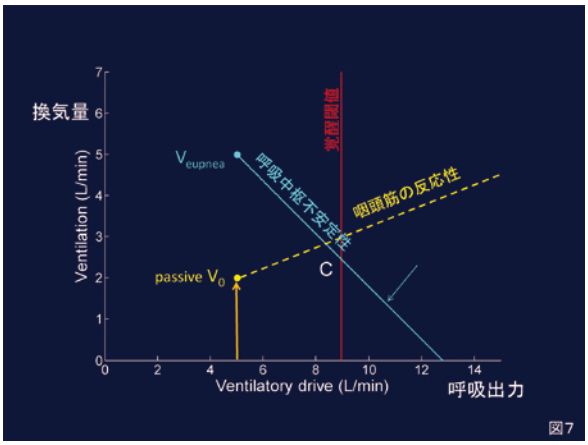


図 7　手術療法＋呼吸中枢安定化

以上を持ちまして私の拙い講義を終了させていただきます。ありがとうございました。

頭頸部癌とはいったい？

岩手医科大学　耳鼻咽喉科・頭頸部外科
平成4年入局　**志　賀　清　人**

教室開講100周年本当におめでとうございます。私が入局したのは平成4年ですが、なにしろ卒後10年経ってからの入局ということで、当時の医局の先生方にもご迷惑をおかけしましたが、快く受け入れていただいた当時の高坂教授には大変感謝しております。また、それ以来20年、岩手医科大学の教授として皆様と共にこの100周年をお祝いできますことを本当に嬉しく思います。

さて、入局前には第二外科では食道外科、医化学第一講座では分子生物学を用いた遺伝子クローニングと遺伝子の発現調節の研究をしていたわけですが、本業の傍ら食道癌の遺伝子変異についての研究を色々な先生方と共同でしておりました。

まず、腫瘍の分子生物学的研究の流れですが、私が医化学第一講座で研究を始めた1980年代初めには腫瘍遺伝子oncogeneが研究の主役でした。その後、腫瘍抑制遺伝子tumor suppressor geneが注目を集め、主役が交代した感がありました。現在主要な腫瘍抑制遺伝子とされているp53も、その腫瘍組織での発現から当初は腫瘍遺伝子と認識されていたくらいです。その後、一時Microsatellite markersを用いた研究が花盛りとなり、さらにEpigenetic change（hypermethylation etc.）の研究も重要とみなされるようになりました。これらの基礎的な知見の積み重ねから「分子標的治療」の考えが出てきたわけです。現在ではmiRNAや腫瘍幹細胞に注目が集まって、多くの研究成果が出始めています。

私が最初に行った研究は腫瘍遺伝子oncogeneの食道扁平上皮癌での働きはどうなのかを探るものでした。方法としては遺伝子増幅を検討するSouthern法、発現を見るNorthern法、Immunohistochemistry、Point mutationを見つけるdirect sequencing、SSCP法などを使いました。

その中で最初にお話するのは11q13に存在する腫瘍遺伝子hst-1、int-2、cyclin D1のなかで食道癌患者のhst-1の遺伝子増幅を調べた結果です。臨床的な予後を増幅ありの症例と無い症例とを比較しましたが、hst-1の増幅は予後とは相関しないという結果になりました（Shiga C, et al. Anticancer Res 1993）。

この他、Northern法で検討したところ、進行癌でc-mycの発現が高いという所見や、EGFR高発現腫瘍症例の予後が不良であるといった実験結果も得られています。

Direct sequencingの新しい方法を確立してK-ras mutationを調べましたが、扁平上皮癌細胞株ではpoint mutationが検出されるものの、摘出標本では見られないということを明らかにしました（Shiga C, et al. BBRC 1992）。

ところで頭頸部癌と食道癌は同じ扁平上皮癌だからたいした違いはないだろうと思って頭頸部癌についても基礎的研究を開始したのですが、意外

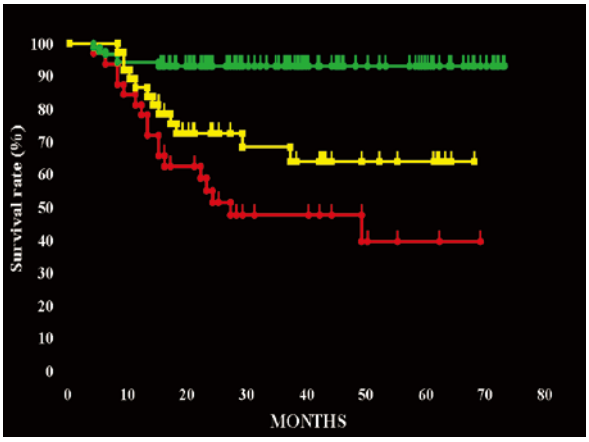


図1

に違いがありました。

図1は喉頭癌、舌癌、下咽頭癌症例の疾患特異的生存率曲線をKaplan-Meier法で示したものです。緑は喉頭癌、黄色は舌癌、赤は下咽頭癌です。宮城県立がんセンターでの治療成績（1999年）ですが、一目ご覧になってわかるように喉頭癌は非常に成績が良いのと同時に、下咽頭癌の予後は非常に悪いことが示されています。喉頭癌は初発症状として嗄声があり早期癌が多い、進行例でも喉頭全摘で根治できる例が多いなどの特徴があり、対して下咽頭癌は症状が出にくいので進行例が多い、リンパ節転移、遠隔転移も多いなどの特徴があります。しかし、同じ扁平上皮癌なのに臨床上これだけの差があるのが当初より解せませんでした。

そこで初めにMicrosatellite markersを用いて遺伝子欠失の検討を行ったところ、有意に中・下咽頭癌、喉頭癌で頻度が高く、口腔癌では低いことが明らかとなりました（Shiga K, et al. Tohoku J Exp Med 2002、図2）

次にepigenetic changeに注目してみました。Promoter領域のhypermethylationが癌で認められる腫瘍抑制遺伝子群をいくつか試したうちで比較的にメチル化の頻度が高かったp16遺伝子について頭頸部癌組織での変化を調べメチル化の頻度をグラフに示しました（図3）。

大きく二つのことがわかりました。女性が男性よりもメチル化の頻度が有意に高く、また舌癌など口腔癌で喉頭や咽頭癌より有意に頻度が高くなっています。このことから女性と男性の癌化のプロセスの違いや口腔癌と咽頭・喉頭癌の癌化のプロセスの違いが浮かび上がってきました。

このように頭頸部扁平上皮癌は同じ扁平上皮癌であっても部位により治療に対する反応、予後が異なり、それらは癌化の過程での遺伝子に対する損傷や修飾が部位ごとに異なっていることに起因する可能性が示唆されました。

もう一つ疑問に思っていたことがあって、それは放射線治療や化学療法に対する頭頸部癌の耐性は何故生じるのかということです。これはその仕組みを解き明かすことにより放射線治療や化学療法に対する効果を治療前に予測できるのではないかということにつながります。

放射線耐性については喉頭癌症例の組織を治療前と再発時で採取し、免疫組織染色などで放射線耐性とp53、Bcl-2の発現増加はよく相関していることを明らかにしました（Ogawa T, et al. Oncol Rep 2003）。しかし、残念ながらこれは治療前の放射線治療効果予測のためには役立ちません。治療中に耐性を獲得したがん細胞がこれらの発現を増加させているため、その増加の程度を経時的に見ていく必要があるからです。

化学療法に対する頭頸部癌の耐性は何故できるかということに関してはCDDP耐性細胞株を作成して関連する遺伝子群の検索を行っています。これは主に小川武則先生の仕事で、字数の関係でここでは詳しくは述べません。

先程も述べましたように頭頸部癌のなかでは下咽頭癌が群を抜いて治療成績が不良で悪性度が高い部位です。そこで私が大学に移ってから、その

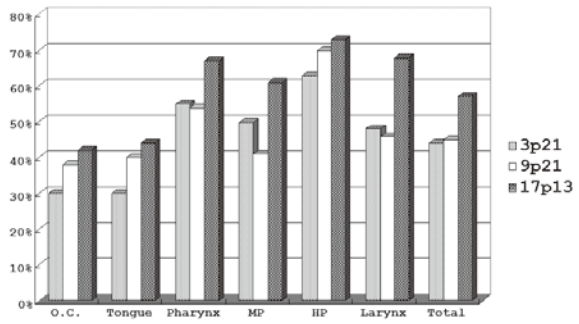


図2　LOH（loss of heterozygosity）の頻度
O.C.（oral cavity）口腔、MP（mesopharynx）中咽頭、HP（hypopharynx）下咽頭
3p、9p、17p染色体3番、9番、17番短腕

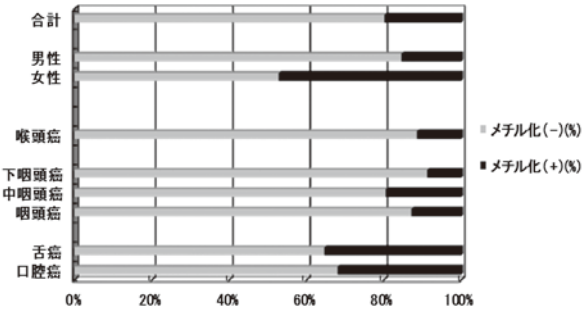


図3

治療方針を検討して次のように改めました。その基本はT4の進行癌以外は喉頭温存の方針で治療し、DOCを加えた同時併用化学放射線治療（CCRT）を行う。早期癌では部分切除術も考慮するということです。進行例の化学療法ではこれまでのCDDP、5-FUに加えてDOCを用いる、いわゆるTPF（DCF）療法（DOC+CDDP+5-FU）を使います。

まとめますと、

下咽頭癌に対するステージ別の治療方針（2001～）

Stage I：放射線治療単独または部切

Stage II：同時併用化学放射線治療（DOC併用）または手術（部切あるいは喉頭全摘あるいは下咽頭・喉頭・頸部食道全摘）

Stage III/IVa：手術（下咽頭・喉頭・頸部食道全摘）または同時併用化学放射線治療（DOC+CDDP+5-FU）

Stage IVb or IVc：同時併用化学放射線治療あるいは化学療法

ということになります。

TPF併用の化学放射線治療は報告がありませんでしたので、phase I studyを行って推奨用量を決定しました。その用量はDOC 50 mg/m^2、CDDP 60 mg/m^2、5-FU 1,000 mg/日です。

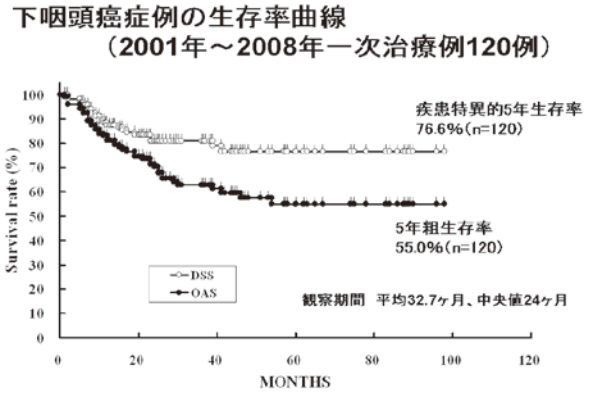


図4

東北大学で治療した下咽頭癌一次治療例120例の生存率曲線を図4に示します。ご覧になってわかるように、先ほどお見せした1999年の統計と比べると飛躍的な治療成績の改善が認められます。疾患特異的5年生存率は76.6%で、5年粗生存率は55.0%です。粗生存率が疾患特異的生存率よりかなり悪くなっていますが、これは頭頸部癌症例は多重癌の発症が極めて多く、肺癌、食道癌、肝癌、膵癌などの他癌死が多いこと、高齢の症例が多く、肺炎や脳梗塞、脳出血など他病死が多いことなどによります。進行例で例数も最も多いStage IVa症例で治療法別の疾患特異的生存率を計算すると化学放射線治療（CCRT）群87%（n=21）、手術（OPE）群68%（n=31）とむしろCCRT群の方が治療成績は良好であり、化学放射線治療が下咽頭癌で有効でありCCRTが下咽頭癌症例の予後改善に貢献していることがわかりました。

これ以外にもTPF療法併用CCRTが有効な頭頸部癌の部位は聴器癌などいくつもありますが、今回は割愛させていただきます。また、横山純吉先生と一緒に行っていた超選択的動注化学療法も上顎癌などで治療成績の向上が明らかとなってきました。

これまで一緒に研究を行って来た共同研究者の方々、頭頸部癌患者を一緒に治療してきた臨床での先生方にこの場を借りて感謝いたします。また、これまで指導していただいた粟田口敏一先生、西條　茂先生、小林俊光先生、どうもありがとうございました。同期卒業である川瀬哲明先生には公私にわたってお世話になりました。

耳鼻咽喉科と頭頸部外科は表裏一体で欠かすことができない領域です。今後も東北大学での両者の発展を祈念して稿を閉じたいと思います。どうもご清読ありがとうございました。

安全に耳科手術を行うための基礎知識

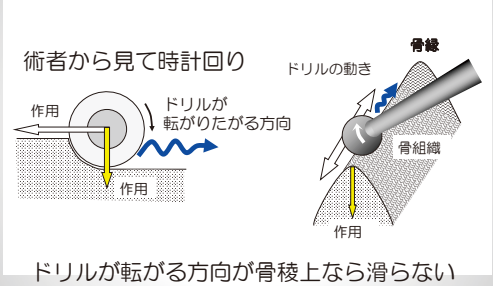
東京女子医科大学東医療センター
昭和 63 年入局　**須納瀬　弘**

側頭骨には「迷路」と称されるほど入り組んだ形状の内耳、2 度にわたって屈曲する顔面神経、内頚動静脈や内リンパ嚢などがごく小さな範囲で複雑な関係をもって位置し、これらの外側に鼓膜と内耳を連絡する耳小骨連鎖が存在している。中耳手術は人体の中で最も複雑、かつ微小で脆弱なこれら構造群を対象とし、手術を成功に導くには副損傷を起こさない解剖学的知識（これは側頭骨実習でしか得られない）と、安全に手術をすすめるための技術が不可欠である。避けて通れない硬膜、脈管、神経などは、解剖に基づいて位置を同定、特性や脆弱性を理解して扱えばさほど恐れる必要はない。

顕微鏡下に思うに任せない柔らかな組織を扱い、永続的障害を残すリスクをはらむ操作を繰り返す中耳手術は本質的にストレスフルであり、術者の疲労や心理的状況が術野に反映されやすい。円滑な手術進行は手技の質を担保する上でも重要である。そしてそのための準備は患者にドレープをかける前から始まる。例えば迅速に視軸を変えて最適な視野を得るには顕微鏡の仕組みを理解して完全に調整をしておくこと、床に椅子の動きを邪魔するケーブルなどの障害物がないことが重要であり、術者が楽な姿勢で手術を続けるには患者の体位を調整しておく必要がある。器械台やモニターの配置を工夫して器械台を整理しておけば、遅滞ない器械の受け渡しが可能となる。

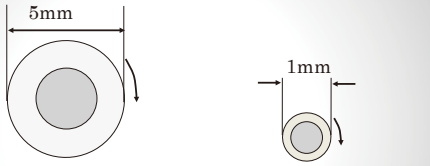
あらゆる手術は、術野の状況を視認、最適な処理方法を判断し、それを実行に移すというステップを繰り返しながら進行していく。耳科手術のコツは多くの経験を重ねた術者のみ体得できる「秘技」のように扱われる感があるが、少なくとも良好な視野の作成と、安全な操作のテクニックには理論的バックグランドがあり、言語化が可能である。経験の深い術者は、術野、顕微鏡の視軸、手の位置関係に配慮してよく見える視野を作り、本来は不正確な手の動きを小さなエラーにとどめる術を知っているのだと思う。例えばドリルは術野で最も侵襲性が高く、医原性損傷を起こしやすい器械である。ドリルの力学を理解して術野でのふるまいに備えた入れ方や動かし方をし、術野に最も適したバーで骨削除ができれば、手術の安全性は飛躍的に高まる。視野の良い器械の入れ方や微細な操作を可能とする鉗子や剥離子の使い方を理解していれば、その後の術者としての成長も違ってくるのではないかと考えている。本稿では平成 25 年に弘前で開催された東北連合学会での講演スライドを提示させていただく。

ドリルの基本特性



ドリルが転がる方向が骨稜上なら滑らない

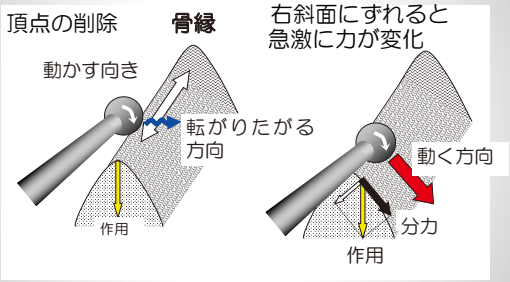
小さなバーは削り取る能力が低い



5πmm/回転　　1πmm/回転
刃の速度　5倍速　　遅＝切れない

そのため骨縁をかみやすくなります

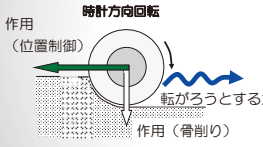
ドリルの基本特性



頂点をはずした瞬間、突然右にスリップする

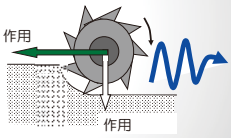
ダイヤモンドはコントロールしやすい

ダイヤモンド
こすって削る



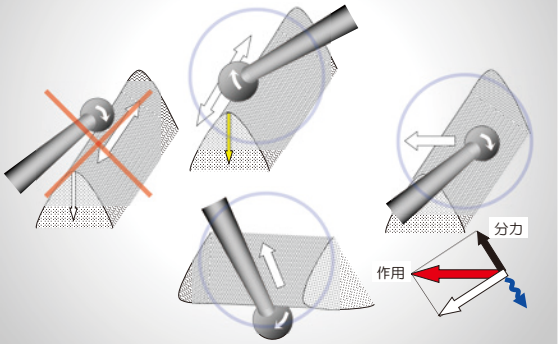
表面が滑らかで変化小

カッティング
引っ掛けて削る

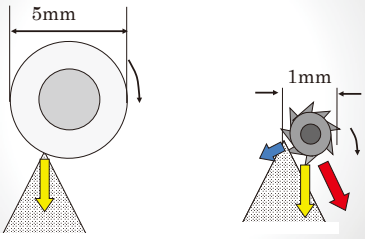


変化大きく制御しにくい

滑落しないドリルの入れ方・動かし方

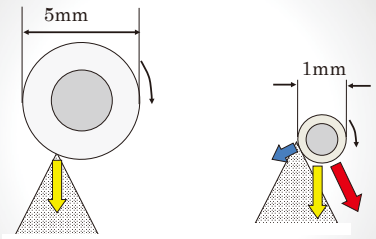


小さなカッティングは扱いが難しい



とくに刃が切れないと最悪

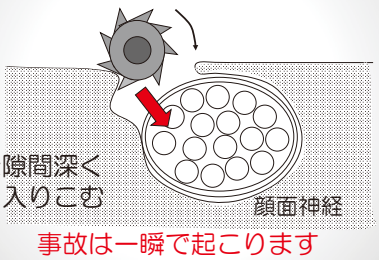
小さなバーは滑りやすい



例えば1 mmのバーは
0.5mm右にずれただけで頂点をはずれます

小さなカッティングの危険を認識する

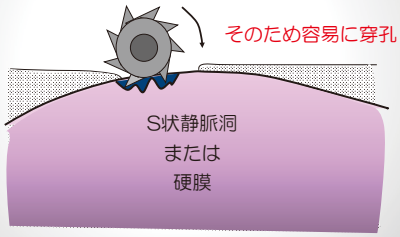
危険は簡単に認識できるとは限らない



事故は一瞬で起こります

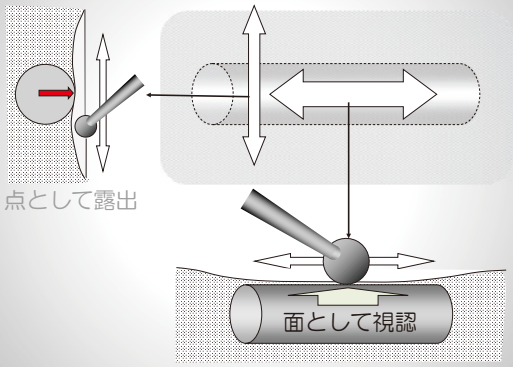
小さなカッティングの危険を認識する

小さなバーは単位面積当たりに加わる力が大きい

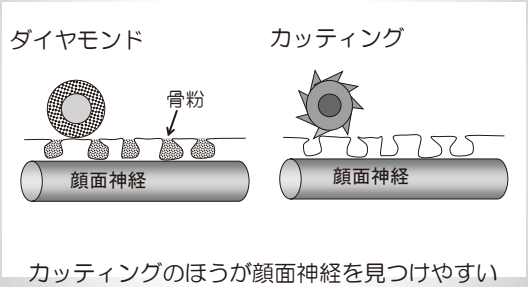


骨面に対して押しつけて使っては危険！

できるだけ大きなバーで構造と並行に

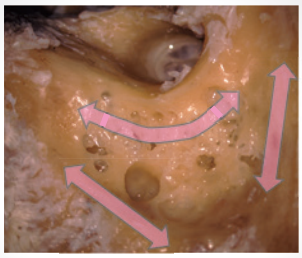


ダイヤモンドは細かな骨粉を蜂巣に押し込みます



カッティングのほうが顔面神経を見つけやすい

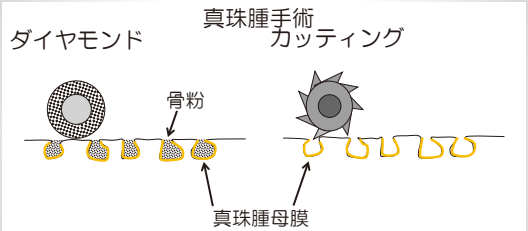
乳突削開の方向



構造に平行に

1 中頭蓋窩硬膜
2 S状静脈洞
3 外耳道後壁（顔面神経）

ダイヤモンドは細かな骨粉を蜂巣に押し込みます

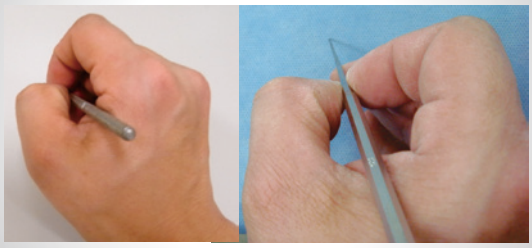


ダイヤモンドは母膜を蜂巣に埋め込む危険あり

→ 遺残の可能性がある蜂巣はカッティングで十分削除

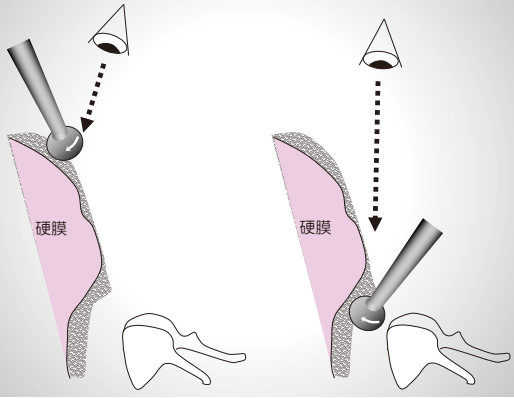
狭い（深い）術野では

「指は視軸の外へ！」

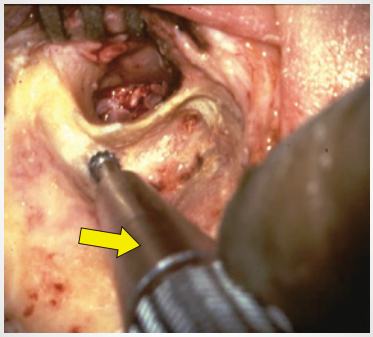


状況に応じて器械の上面を空ける必要があります

見えないところは削らない

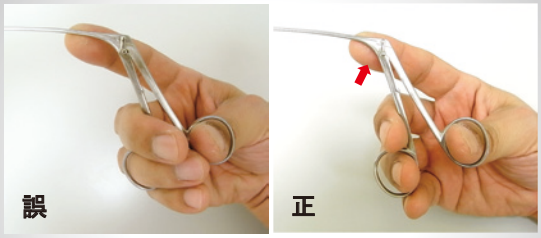


ドリルも同様です

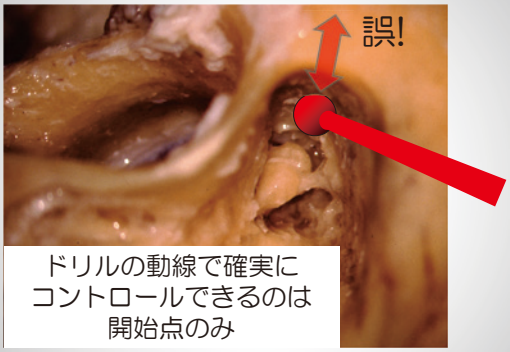


深い術野ではこのように持てなくてはいけません

鉗子は指先で持つ



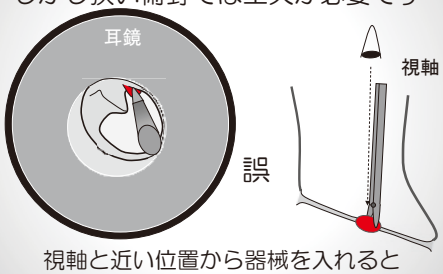
そのほうが
患者の不意の動きに対処でき
指先は鋭敏なので術野からの情報が多く
鉗子の自由度が上がります



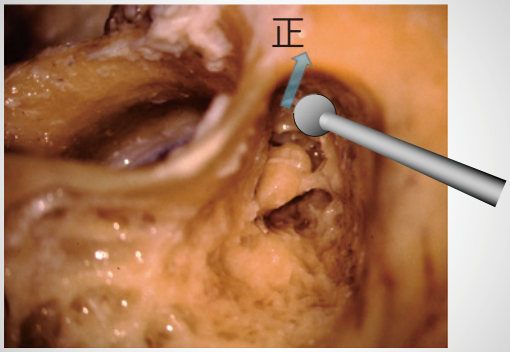
原則：大事な部分に向かう往復運動はさせない

「きちんと見ながら」手術しましょう

しかし狭い術野では工夫が必要です



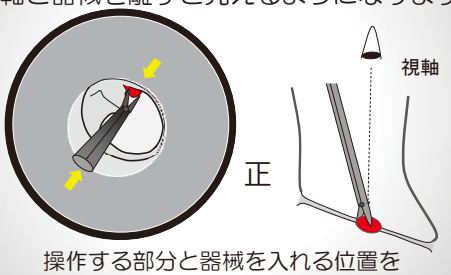
視軸と近い位置から器械を入れると
操作がよく見えません



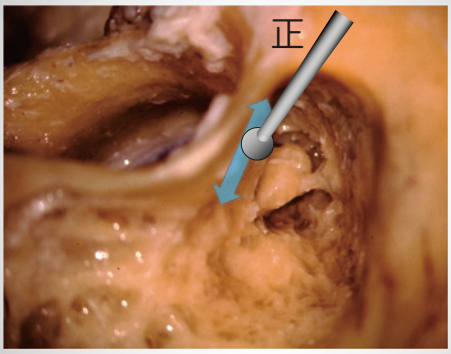
原則：内側から外側へ

「きちんと見ながら」手術しましょう

視軸と器械を離すと見えるようになります

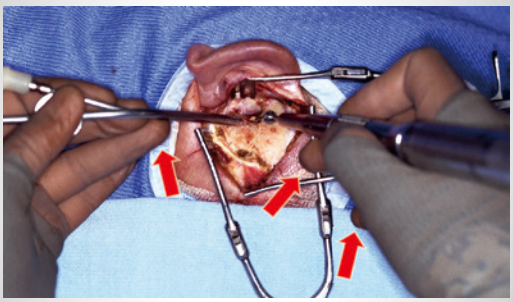


操作する部分と器械を入れる位置を
術野の中でできるだけ対角線上に配置します

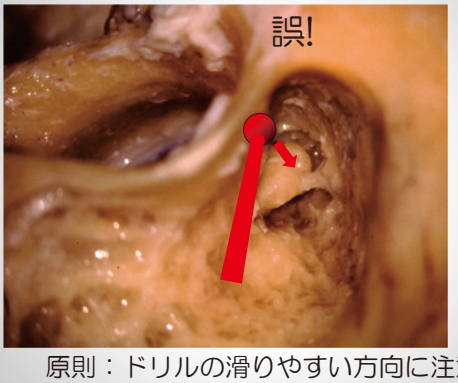


原則：大事な部分と並行に

不確かな手で正確な操作をするには

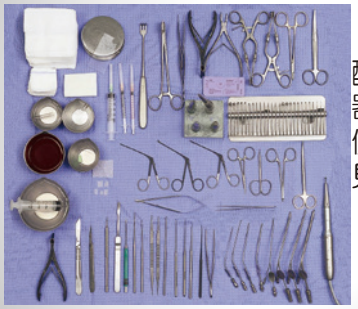


常に支点を求めます



原則：ドリルの滑りやすい方向に注意

効率的手術のため手術室のアレンジは重要



器械台は

配置は一定
器械の数は最小
使用頻度を考え
見やすく

モニターは器械出しの正面

器械出しが術野に習熟
↓
何が、いつ必要か想定できるようになる
↓
欲しい器械や材料がすぐに出て手術が止まらない

長所

顕微鏡を見たままで

両手への器械・材料
受け渡しが可能

患者をはさんで
器械出しと向き合う

眼が術野から離れず
手術が中断されない

100周年に寄せて

～ 立木教授時代 ～

戦後も十年経った頃　教室昔話

昭和27年入局　**渡辺　　勤**

私が入局したのは昭和27年（1952）、2代目教授立木　豊先生の時代で、もう60数年前の頃でした。同級生の立木（孝）、山口（正）両君と、同期の小関先生と一緒でした。

戦災で廃虚と化した仙台の街もようやく復興の兆がみえ活気を取り戻した頃でした。仙台砂漠と称された駅前の大通りも舗装され、常禅寺通りの欅もどうやら並木らしい姿を見せるようになっていました。

ちょうど、その年の春仙台で開かれた日耳鼻の総会が終わったばかりで、教室にはどことなくほっとした空気が漂っておりました。教室からはすでに吉田、和田、三好……の大先輩が去り、大内助教授の下新進気鋭の神岡、島田、河本、小野寺、武山先生達が守っておりました。

始め新米の私達には研究テーマも与えられず放し飼いの状態でした。それを良いことにしばらくの間自由奔放な医局生活を送りました。

やがて遊びに飽きてきた頃、先ず立木　孝先生が研究らしきことを始めました。今までの音叉から脱却したオージオメータによる聴力検査から、彼はベケシー型の自記式オージオメータの開発に取り組みました。

立木　孝先生、いや立木　孝教授の後日談についてはもはや無用でしょう。なぜならば彼のオージオロジー学会での活躍は日本はおろか世界中の耳鼻科医が知っているからです。彼は会長として国際オージオロジー学会を盛岡の地で開催したのでした。

彼は昨年亡くなりました。私は涙ながらにご遺骨を拾わせていただきました。

次に山口先生についてですが、彼は絵描きでした。彼の絵は上手なのか下手なのかレベルが高すぎて私には判りません。しかし彼の芸術性は、確か昭和29年の秋、入局3年目にして見事開花しました。日本気食学会の特別公演で立木　豊教授が「喉頭検査法」を発表されました。その時、彼は高倉　稔先生と組んで喉頭のテレビ撮影に取り組みました。勿論日本で否世界で始めての事だったと思います。

会場の大型スクリーンに写しだされた声帯の映像は、ベートーベンの第九の合唱に合わせて大きく、大きく、ゆっくりと揺らぎました。思わず会場からどよめきと拍手が沸き起こりました。

この映像はNHKのテレビニュースでも報道されました。

その彼も今はいません。函館の地であの時の事を思い出しながら静かに眠っていることでしょう。

三番目に私のことも一言。

ある日、私は神岡講師から位相差顕微鏡で生の内耳を見ることを勧められました。モルモットの蝸牛を取り出し、生の組織を直かに観察しました。

たまたま、一番丁の楽器店でグランドピアノの中を見せてもらいました。低音は太くて長いそして1列、中音は細くて短いそして2列、高音は極細で極短、そして3列。整然とピアノ線が並んで

ありました。

なんだこれ、モルモットの聴毛細胞と同じじゃないか。私は教授に申し上げました。聴毛の地図を作りたいと。教授が言いました。

「それは100年前にヘルムホルツも言ってたよ。君、電顕でもっと調べてみたまえ」

内耳の電顕はエングストロームの文献があるだけでした。恐れをなして、もしかして中山先生ならばと教授室から逃げ帰りました。その直後彼は教授室に呼ばれました。部屋から出てきた彼の右手には黒い小瓶が握られておりました。

それは戦前教授が留学の時に、ドイツから持ち帰ったと言う電顕で組織の固定の「オスミユーム酸」という貴重な宝物でした。

ここから教室の電顕による研究が始まりました。

以後の詳しいことは電顕グループの総大将髙坂教授に聞いて下さい。

中山和彦先生、鈴木　孚先生、今度教室の100年誌が出ますよ。電顕のことひと言だけ書き残しましたからね。

教室を出て10年も過ぎた頃でした。

恩師の立木　豊教授が叙勲の栄に浴しました。

その祝賀会の席で私は即興の詩を朗読しました。

――――○――――

俺達の親父が勲章もらった
勲二等　重光章と言うんだぞ
　菊の香　馥　郁　　紫　宸　庭
　恩　師　被　叙　　勲　二　等
　積　学　育　弟　　幾　星　霜
　胸　間　燦　然　　旭　日　賞
位階勲等　なんするものぞ
それでも思い出すではないか
あの幼い頃に
帽子にススキの穂をかざし
胸に菊の花びらをつけて
大きくなったら
こんな偉い人になるんだと
空を仰いで叫んだことを
今　俺達の親父が勲章をもらった
どうだ　偉い偉い勲章だぞ

――――○――――

擱筆するに当り
教室の輝かしい業績を誇りに思い
後輩諸子の益々の発展を祈ります

「立木教室」での思い出

昭和30年入局　**渡辺　昭夫**

昭和30年6月頃、22年続いた最後の門下生として湯本牧雄先生と入局させて頂きました。

既に中山和彦先生が入局されておりました。社会学に精通し、何時も明るい雰囲気を醸しだしてくれる長兄の湯本先生。

学究一筋、海軍兵学校で培った礼節を重んじ、どんな苦難に挫けることなく、信念を貫く精神力の強い次兄の中山先生。（後に先輩からは立木教授2番目の秘蔵っ子ダ！の声も聞かれました）。

それに何の取り得もない甘えん坊三男の私。それから三兄弟として医局生活が始まりました。御陰様で教室を去る迄、和気藹々の日々を送ることが出来ました。

入局時は、山田のばあさん並びに諸先輩よりこれからの医局生活での心得など拝聴させて頂きました。驚いたことに教授はオヤジと呼ぶのであるとのこと。私にとっては雲の上の方、とてもそんな呼び方は出来ないと思っておりましたが「習うより慣れろ」で何時のまにか素直にい言える様になりました。

しかし、直接お会いするとやはり緊張の度合いは変わりませんでした。

立木先生は端正な顔立ちのジェントルマンであるとは聞いておりましたが、いざお会いするとなると自然と頭を垂れてしまい、しっかり拝顔をすることが出来ませんでした。

そこで、失礼を承知で朝の出勤時間を見計らっ

て医局の小窓からお姿を拝見させて頂きました。ソフト帽子を目深くかぶり、太ブチのメガネを着用され、茶色の鞄を下げられ、颯爽たる英国紳士が、玄関にお入りなるお姿に畏敬の思い一入。

立木先生は、上品・教養がにじみ出ている立ち居振る舞いが立派でその上お洒落、これが本当の紳士なんだと納得、感激したものでした。その後今日まで先生の様な紳士にお会いすることは出来ませんでした。

「どんと祭」の夜医局全員ご自宅にお招き下さいました。テーブルの上には、御馳走とお酒が並べられておりました。奥様には大変ご苦労なさったものと思います。

宴たけなわになりますと、オヤジさんの力強い「黒田節」をご披露下さり、次いで、T先生の「ブグチョン節」、S先生の「東京は丸の内あたりで」、O先生の「ミネソタの卵売り」など会も益々盛り上がり、無礼講で大騒ぎになったことが思い出されます。

医局員・看護婦さん含め、春のイチゴ刈り、夏の海水浴も楽しい思い出、これはオヤジさんの「和を以て貴しと為す」気持ちの表現であろうと思われる、と隣席の武山貢次先生がご教示下さいました。

その事は、その後の病院勤務・開業に役立せて頂きました。

叶わないことと存じますがもう一度お会いご迷惑をおかけしたことのお詫びと、先生の無言の内に教えていただいたことなどが人生訓として、私の人生に大きく役立たせて頂いた御礼申し上げたいと思います。

記憶は、時間とともに遠ざかって、錯憶も多々あると思いますが、ご容赦下さい。

付記：一番目の秘蔵っ子は神岡蘇二先生と聞いております。

立木教室の底流にあるもの

昭和32年入局　**櫻井　時雄**

四年にも満たない医局生活から立木教室を語ることは論外であろうが、少なくなりつつある門下生の一人であればやむをえない。正鵠を射たものとはならないであろうが。

卒後国立仙台病院で研修を行う。専攻する科を決めていない研修医にとって各科の研修は有意義な制度であった。

研修終了間近いある日、耳鼻科の多田格夫先生に呼び止められた。お茶でもと誘われた。既に耳鼻科の研修を終えている。時々街に誘ってくれた。金のない研修医にとって何よりの楽しみであった。院内の喫茶に入りコーヒーを飲みながらとりとめのない話に時を過ごした。やがて耳鼻科に入局しないかとの話題に変わった。何科を専攻するか決めていなかった。耳鼻科は選択肢にはなかった。種々多田先生から耳鼻科の手技を教えていただいた。当時中耳手術の術創を植皮で覆う手技が行われていた。大腿の皮膚が選ばれていた。植皮を準備するよう命じられた。左大腿表面から植皮片を採取し準備した。ややあってザールに見えた。覆っていたガーゼを取るなり怒鳴られた。これでは泳ぐことも水着になることもできないではないかと。二〇歳前後の女性であった。鼓膜、鼻腔など満足に観察できない。まして喉頭など。こうしたことから耳鼻科は選択肢にはなかった。数日後松山耳鼻科部長から呼び出しがあった。部屋に入るなり、立木教授の了解を得たとの話、さらに大学院を受験するようにとの話が飛び込んだ。国家試験すら心もとないのに。

面接試験があるという。指定された日に医局に出向いた。初めてみる医局、忙しそうに行き来する先輩の先生たちの指導に耐える自信のなさに逃げ出したい思いに駆られた。鈴木ですとの声に我に返った。面接にみえた孚先生であった。不安をみてとったのか面接には二人で行こうとの提案に飛びついた。孚先生は何のためらいもなく教授室

に入った。眼光紙背に徹するとの強烈な印象が立木教授との出会いであった。重厚な立木教授に軽妙に対応する孚先生に圧倒された。仙台駅前に市電の停留所があり、その広告ポールにある鈴木耳鼻科の御曹司であるとは知らなかった。自宅に招かれ、満室の病室の先にある自室に案内された。南向きの広い窓ガラスに木々の葉の影を落とし、時折風に揺れる。静寂と温もりが書斎を満たし、書棚には一度も目にしたことのない書籍が並んでいた。枕元に数冊の本のある生活を過ごしてきた余りの差に気付き先が思いやられた。

入局し教カ月をへて始めて目が闇に慣れるかのように周囲が見え始めた。立木教授の下にカミソリのような頭脳を持った大内助教授、その下に立木、山口、渡辺の 3 人の講師陣、研究リーダーとして新井、北条、高倉、朴澤、高橋、中山の各先生からなる重厚な構成であった。耳鼻咽喉科全域にわたる先端的研究がなされていた。夫々の先輩たちは学会で中心的役割を担い活躍していた。こうした研究の成果も知らずに入局したことに呆れられたが後の祭り。種々の失敗を重ね、さらに悪いことには腎炎のため長期病欠せざるを得なくなった。畏友の励ましがなければやむなく退学を申し出たであろう。治療にもかかわらず、蛋白は消えることなく続いた。論文を読むしかない日々、耳鼻科学が大きく変わろうとしていることに気付いた。電顕、組織化学、聴覚、中耳伝音理論、AP・SP の電位、鼓室形成など近代耳鼻咽喉科学に変貌しつつあった。初めての人工衛星の飛ぶのを医局で見た。全てが変わろうとしていることに気付いた。同時に研究者としての資質に欠けることから、限られた医局生活になることを病床で覚った。復学し高倉電気部屋の一員となる。実験に必要なアンプ、動物用人工呼吸器その他の殆どが手作りであった。高倉先生の無限とも思える創造性、周囲の声すら聞こえないほどの集中力、電気生理のみならず、音声、言語、聴覚に及ぶもの広範な知識には驚くしかなかった。学ぶことは真似ることから始まるという。しかし真似ることすらもできなかった。唯一未知な問題への対応、考え方を学ぶことができた。AP、SP は手造りのアンプで初めて観察できた。ある場で教授から直接なにか欲しい器械はないかと話しかけられた。あの時の高鳴る思いは生涯忘れることはできない。

臨床は渡辺講師、塚本先生のもとで手ほどきを受けた。多くの症例は両先生から、Tonsillectomy は教授から直接教わった。同門の先生がこの手術を三分で行うことを話された。そんな日がいつ来るのであろうか。時々症例に丸が付くようになった。手術を自分でやることが許されたサインであった。選択された症例から師の深い思いに気付いた。ある日の予定表に食道鏡があり、ライターが教授、以前から幾度となくその意味するところを先輩たちから聞かされていた。独り立ちする最低の手技であるという。これから遭遇するであろう全てを習得することはできない。しかし必要とされる最低の手技だけはとの配慮からだ。君やりたまえとの師の声に食道鏡を初めて手にした。力をぬいてとの声、食道鏡を時々見ながらの指示、これが見えたらそのまま進みなさいと。術終了。どれほどの時間が経過したのだろう。よかったねとの三浦婦長の声に我に返った。

最大な楽しみは実験終了後の医局での集まりであった。先輩たちの臨床、研究成果から、各分野での問題点など多岐にわたる話題に深夜に及んだ。渡辺勤先生の聴覚ピアノ理論、さらに研究への迸る情熱に圧倒された。人である限り好き嫌いはあろう。しかしこの場の自由闊達な示唆に富んだ議論は多くのことを学ぶ場となり、糧となった。こうした先輩たちはやがて医局を次々と去り後任の河本助教授のもと舞台は次の時代へと動き始めた。公立大館病院への赴任が決まった。軒下を借りての約三年有余の医局生活、数々の恩に報いることができなかった悔いが残った。縁とは不思議なもの、指導を受けご恩のある渡辺勤先生の後任とのこと。信州大の鈴木篤郎教授の無二の親友である戸田院長の下への赴任であった。医局を去る前夜、お礼の言葉を探した。中耳伝音理論、鼓室形成術その後行われた術後の経過など教授室での話題の数々、兄弟の仲より深い孚先生との出

会い、考えることの基本を教えてくれた高倉先生に思いは揺れた。翌朝教授室の前に立った。一礼し見上げた。そこには久保教授のもとで行った師のライフワークである標本が目に入った。或る時師はそれを指差し、Rasmussen bundle が見つからなかったことに触れ、必要であればいつでも見ていいとの許可を得た。詳細は大日本耳鼻咽喉科学全書に記載されていることを知った。しかし難解な論文を完全に読破できず標本を見ることなく最後の日を迎えたことに気付いた。不出来な弟子を前に師はどのような思いであろう。前日練習したお礼の言葉にならない前に師の穏やかな声が届いた。決して無理な手術はやらないようにとの師の言葉に息をのんだ。視線が合う。師の目に一瞬柔らかな光が揺らいだかのように見えた。師は教育者として弟子を選べない。仮令それが凡知であろうとも生計を営むだけの最低の教育はしなければならない。この先どんな花が咲き、実を結ぶかの当てのない中でのこと。しかし師は十分すぎるほどの機会と教えを受けさせてくれた。こともなく終えたのは常に目に見えない多くの支えがあってのこと、平坦な道であろうはずがない。そうした日々が待ち受けているのを師には見えたのであううう。無理せずに大過なく過ごして欲しいと心から願う師の惻隠の心が伝わった。自らを恃みに生きなさいとの師の大きな慈悲に包まれた。一瞬師の温もりは小春日和の陽だまりへと導いた。師に師事できたことに感恩し、僥倖に恵まれた出会いに気付いた。

後日、教授招聘に尽力した稲村家に師は屡訪れたと聞く。その折に稲村直樹先生が師の膝に抱かれ過ごしたという。若き日のさりげない日常のなかで見せた師の優しさこそ魅力ある教室を作る柱となったことが窺えた。

自燈明の教えは年を重ねるにつれ鮮明になり師の心の深さを辿りつつある。師を越えることのできない弟子にとって恩に報いるには師の歳を越えて生きることだと聞く。既に師の歳を越えた。師に魅了され多くの逸材が集まった立木教室の底流をなすのは碩学な師の、時代を拓く大いなる意志であり、加えて裡に秘めた優しさからなることが再認識できた。因みに手元に残っている平成三年改正の同窓会役員名簿には多くの先輩らが綺羅星のごとく並びその層の厚さに立木教室の輝きを見ることができる。

顧みるに稲妻の光の中で見たようなほんの短い医局生活ではあったが、その間多くのことを学び、師から火を灯された。消えゆく記憶にはほのかな薄明かりの中にある医局の日々が映し出された。あの時灯されたこの火を消すことなく灯し続けていきたい。叶うことならもう一度重厚な師の前にあの日のように立ちたい。どんな話題となるのだろう。

立木豊先生時代の医局生活

昭和 33 年入局　**金子　豊**

昭和 33 年入局から先生ご退職 37 年 3 月までの 4 年間先生のご指導の下医局生活をすごした。85 歳の老化のため記憶力の衰えもあるが何せ 60 年前の生活であるのでうろ覚えのことばかりで正確な内容にはなっていないと思うが、医者として教育を受けた最初の時期であるので、いままで同窓会雑誌などであまりふれられていない（?）感激したことを思い出してみたいと思う。

立木先生の耳鼻科の講義は学生時代、すごく迫力があり、教育的で印象的であることは有名であったが、その魅力に引かれ、小松田先生と相談のうえ、佐藤、宇佐神、中塚、角田先生と共に 33 年には計 6 人が入局した。

医局には中山先生、塚本先生、草刈先生など 10 人以上の先生がおられ、医局で歓迎会も盛大にしていただいた。小松田先生は以前は酒が飲めなかったがこの歓迎会を機に酒の味を覚えたという。

山田のよっちゃんが医局の世話役で立木先生の命令を医局員につたえる役で、先生が帰宅したとか、医局員のよびだし役であった。先生のご帰宅

を待って、医局員は何時とはなしに医局に集まり、それぞれ談笑したり、お酒などをいただいたりにぎやかになった。酒に悪酔する先生もいて、大騒ぎもときどき見受けられた。2年目はじめに函館の吉田先生がお父上のご逝去のため急遽八戸に帰らざるを得ない事になり、小生が函館病院に留守を手伝うことになり、3ケ月くらい出張した。ジフテリーが流行しており、気管切開する機会が多く、緊張する毎日であった。3ケ月後医局から、山口先生が赴任され、やっと帰局できた。

当時教室では電気、前庭、顕微鏡、その他の研究班などでそれぞれ高倉、朴澤、渡辺、中山先生が研究を精力的に進められており、各学会でかなり著しい成果をあげておられた。小生は河本助教授の指導の下組織化学を研究することになり、手ほどきを受けた。盛岡の連合学会ではつなぎ温泉に前日医局員全員が宿泊し、愉快に飲みすぎたが、河本先生のご指導に忠実に従って、はじめて組織化学の実験結果を発表できた。次の週の学生講義のとき、教授に呼び止められて、発表をほめられて、大変感激した。2年目に入り、入局後初めての抄読会が行われた（昭和34年6月）。初日には立木教授の演者でWullusteinのTympanoplastyであった。学会で使用された初めての用語（1953）で、歴史的な紹介から、今後追記検討すべき重要な項目であることが簡潔に紹介され、直近の重要な時期に教育のくちびを開かれたと感謝した。当時臨床の諸問題より基礎的な研究課題の方に囚われがちであった新入医局員にとって、臨床問題の取り上げ方、重要性を認識させられたと思った。

翌月の抄読会の人選がすぐ決まり、小生も加わることになった。NY.のDr. Angeluschwaffによる超音波の内耳障害についての論文であった。紹介が下手だったためか、抄読会後直ちに要旨を訳して提出すように命令された。当時の下手な訳文copyは戒めのため今でも手元にある。

毎日診療が終わると実験など始まるため夜半まで医局の研究室に残こらざるをえなかったが、苦にもならず、実験のくぎりに医局で酒をいただいたり、ときには病院周囲の屋台、キャバレーなどに連れて行ってもらったりする楽しみもあった。もちろん月給などない時代で、先輩のおごりにもっぱら頼っていた。昭和36年6月には先生はパリの国際学会に出席にでかけられたが教室の上層部の先生方は、退職記念の準備で忙しい毎日であった。

教室に設備されている診療器具実験器具などが世界的に貴重なものそろいであると知ったのは、うかつにも先生の退職記念講演（昭和37年3月6日）をきいてはじめて認識した。それまで先生がめざした研究のふかいところなど洞察できなかったと全く恥じ入った。すばらしい記念講演であった。いまでも当時の感激を回顧しているがメモを片手に黒板に特徴ある美しい単語を書かれ、リズミカルな口調で教授された姿がわすれられない。

ご退職の際建築したばかりの作並のgreen greenで最後の感謝会を医局員全員で開いたが、普段全くわれわれとは世間話などしなかったので、いろいろ砕けた話に花が咲き、お子様が皆教授になられ御満足でしょうと話したら名前をつけるときだけで、あとは……と笑われてみなが爆笑したのが印象的であった。

立木教授時代の医局の思い出

昭和34年入局　**柿崎　一郎**

私が東北大耳鼻科教室に入局したのは昭和34年で既に55年前になり、私も齢80歳を超え歳月の流れの速さには、ただただ驚くばかりです。私が入局時の医局の在籍者は河本先生以下29名でしたが、現在の存命者は9名を残すだけになっております。今年の同窓会では先輩は河本先生と宇佐美先生だけで、出席者の7割の人達とは充分な面識もなく話し相手は年々少なくなっています。まさに年年歳歳花相似たり、歳歳年年人同じからずの想いがひとしお感じられます。

私は三好（保）、中林（昭）、佐々木和子先生と同期入局ですが耳鼻科を選定するのに一寸逡巡しましたので他の同期の先生達より少し遅れて医局に出頭しました。早速、助教授をされていた河本先生に教授室に連れていかれ「今日入局した柿崎君です」と紹介されました。立木先生は旧制帝大教授に相応しい誠に立派な威厳あるご容姿をされておりましたが、この時は柔和な眼差しで私に何か言葉をかけられました。しかし先生の前で直立不動で緊張していたためか、何を言われたか今全く思い出せません。かくして私の耳鼻科入局第1日目が始まりました。しかし半世紀以上昔のことで、年と共に記憶も茫々として正確なことを記すことはとてもおぼつかないことはご容赦ください。

私が入局した時、立木先生は御在職を3年足らず残されているだけで、私は先生の晩年の弟子になります。しかし先生は心身ともにご壮健で患者の診療に研究の指導に、また学生の講義にとエネルギッシュに活躍されておりました。ただ臨床面の一部、特に気管支異物摘出などは次第に河本先生に任されておりました。私は早速河本先生のパラネーベンになりましたが、インターンで耳鼻科の実地訓練を受けていませんでしたので耳鼻科の「いろは」から河本先生はじめ多くの先輩に指導を受けました。当時カルテの記載はドイツ語が主体でしたのでこの基本的書式を覚え、オーベンの入院患者のカルテ作成、耳血採取による血液検査、聴力検査等を行い、またザールでは助手としてもっぱら鉤引役に専念しておりました。そして新患係、再来係、直達鏡係をローテーションで順次分担しながら耳鼻科診療の基本を教育指導され、入局後暫くの間は慣れる医局生活を夢中で過ごしていたような気がします。特に立木教授が上顎全摘術、喉頭全摘術等の大きな手術をされる時の第3助手か第4助手として鉤引・吸引係や、口蓋裂手術の舌の牽引係を担当する場合には大変緊張したものでした。立木先生が吸引器のことを「ポンプ、ポンプ」とややクラシックな表現で言われていたのが今でも耳に残っております。

また強く印象に残っているのは教授総回診でしょうか、医局全員がやや緊張した雰囲気で見守る中、まず座位の患者から教授回診が始ります。山川婦長とナース一人が立木先生の左右に立ち、脇から主治医が患者の状態を説明し、教授の述べる所見をシュライバーがカルテに記載します。先生がよく「Operationshöle sauber」と言われたことを覚えております。次に手術台で仰臥位の患者を診て、最後に2階一等室の病室回診が終わると廊下で手洗いされ婦長の差し出すタオルで手をお拭きになり、そして医局入口のドアの所で我々に軽く会釈されて教授室に帰っていかれます。この時医局員一同ほっと安堵感と開放感に浸ったものでした。

最後になりますが、思い出の一つとして函館市立病院へのトランクがあります。私は昭和35年・36年と2回函館に派遣されました。函館は道南の中核的病院で手術症例が多く、研修病院として最適な病院でした。私も科長の山口正先生に耳鼻科手術全般、特に扁桃摘出術の指導を集中的に受け、時には術後出血の処置に大変難渋した記憶が鮮明に残っています。

立木教室の3年間は私の耳鼻科医としての基礎を作る貴重な3年間でありました。立木先生はじめ河本先生、御指導いただいた諸先輩の先生に深く感謝の意を表します。

ここに拙文の筆を擱きながら今後の東北大学耳鼻科教室の益々の発展を祈っております。

～ 片桐教授時代 ～

片桐主一教授と前川重和先生と私

昭和35年入局　**渡利　千里**

東北大耳鼻咽喉科教室の歴史が100年になるという。この100年の中で私が在局したのは1960～1967年の間だけ、遠い昔のことである。このたび片桐教授時代のことの寄稿を求められたが、私は教授ご退官記念誌、また同窓会誌にも仙台時代のことを既に記載し、医局70周年のときには同窓会の席で講演をさせていただいており、今更新たに申し上げることもないので、片桐先生と前川重和先生とのことを思い出してみた。

1964年9月のある夜遅く、私は柿崎一郎先生と医局にいたところ片桐先生から電話が掛かってきて今八百条に前川先生といるのだけれど、前川先生が倒れてしまったのですぐ来てくれとのことで二人がそれぞれのバイクで八百条に向かった。八百条は市役所に近く、庭の竹林が歩道から見えた仙台で一番の高級料亭なので勿論私ども若輩は訪ねたこともなかったが、高級車を迎えるための大きい門を開けて貰い玄関までバイクとはお店も驚いたことであろう。部屋に案内されたら、前川先生が横になっていびきをかいておられ、脳出血を起こしたらしいと片桐先生が言われた。そこに中村隆教授と沓澤尚之先生が見えて四肢の反射などの検査をされ、中大脳動脈の何番目かの枝の破綻であり、ただ絶対安静にということで特に治療はなく動かさないで八百条で中村内科が管理することになった。

話は変わるがその4年前の立木豊教授のときに私は前川先生が副院長をされていた秋田県立中央病院に2回、2～3ヶ月のトランクに出たことがある。そこで前川先生に可愛がっていただいたが、そのころに秋田大学に医学部を作るムードがあったようで、先生が外国へ学会や視察に出張されたときには教室から高倉稔先生がお出でになり科長を勤められて日々楽しく秋田で過ごしていた。前川先生は帰国後、私にもう仙台に帰らずにずっと秋田にいるように教授にお願いすると言われ、私は独身の風来坊だったのでそうですかと生返事をしていた。ただ困ったことは中央病院では当時給料が少なく、そこから食費と住居費を引かれるのでとても結婚などできないと思った。前川先生の口ヒゲは有名で昭和天皇に似た風貌があり病院内では前川天皇というのが通称で、和歌山県ご出身なので関西弁で話し、旧制廣島高校で私の父の4年後輩だったのが分かったら、父宛に「秋田の地から先輩に最大の敬意を表します……」との書き出しで名文の親書があり秋田に医学部ができることまで記してあったようだ。2年間で廃校になった秋田県立女子医専にも関わりがおありだったのか、秋田大学の医学部増設については熱心で、教授候補だったのであろう。翌年の気管食道科学会総会で先生は法医学の勉強もされていたのでこれも活用して「喉頭外傷」についての特別講演を担当されることになっていた。そのご準備のために八百条にお二人でおられたようである。

さて、八百条の前川先生は内科の往診治療で3日経っても意識が出ず症状が好転しないので、大学に移り入院されたのだが間もなく呼吸不全で病状が最悪となった。丁度そのころに人工呼吸にはmouth-to-mouth methodが推奨されていて、私はそれを口ヒゲが邪魔になる前川先生に試みたところ一旦は自発呼吸が出て驚いたが、間もなくそのまま静かにお亡くなりになった。1964年9月9

日、丁度50年前のことである。片桐先生がそのとき「渡利君、mouth-to-mouthを初めて見たけれど良く効くのだね」と一言、優しく気遣って私をねぎらってくださったが前川先生との思いがけないお別れを寂しくお認めになる他なかったのであった。そして私は前川先生のために片桐先生とともに過ごす時間が僅かながらあり、畏れ多くて普段はお話しする機会が少ないのに先生といろいろとお話できて緊張もした。

翌年福岡で開催された第16回気管食道科学会総会で前川先生の講演内容はご遺影を提げて秋田の田中弘先生が代わって発表をされた。それから50年の時が流れて、敬愛して止まない片桐先生も他界されて既に13年が経ち、八百粂も10年ほど前に店を閉じて、今はオンワード樫山になっているという。50年間とは果たして短いのか長いのか分からない期間になってしまった。

片桐教授と想い出の電気部屋物語

昭和36年入局　千葉　正敏

医局を卒業して数十年、学問の基本も、記憶力もだいぶ怪しくなりました。片桐先生には、弘前大学、東北大学医局生活と大変長く御世話になりました。社会に出てからも先生の人格に近づこうとしながら遠い結果に終ってしまいました。今度医局の想い出ということで拙い筆をとりました。御勘弁下さい。

小生入局以来、恥しながら聴覚にあまり関心有りませんでした。音声は外耳道より入ると鼓膜の振動→中耳、耳小骨で増幅→内耳で電気エネルギーに変換→大脳聴覚野を刺激、する位の漠然とした知識だけでした。S36年秋、大館公立病院にトランク、桜井先生のネーベンとして耳鼻科全般の御教えを請うて以来、内耳神経生理に興味を持つようになりました。

桜井先生は内外の文献をよく読まれ、時に示唆に富む話を聞かせて下さいました。然し臨床の教室で基礎生理の実験が出来るとは、遠い世界と考えていました。大館から翌年の春、大学に帰りますと吉野、山口先生はすでに三好先生の下で独自の研究構想を持たれ、実験動物で実験をなさっていました。小生は同期の先生から実験器具から動物の扱い方を習い、時に医局に顔を出しておられた中塚先生から指導を受け、モルモットの中耳構造、正円窓の位置、AP、CM、SPの誘導方法、記録法、動物の麻酔まで大変御世話になりました。当時三好保先生は動物の内リンパ液中よりガラス電極を挿入、内リンパ液中より高電位の±Epをオシロスコープ上に誘導、その生態を熱心に記録なさっておられました。実験の成功した夜は附近の寿し屋、どじょう屋で御馳走になりました。その後、先生は1年程で片桐教授の下に学位論文を提出、その後、東京医科歯科大学の勝木生理教室に留学、続いて米国セントルイス大学のスミス教室に数年留学、英文でその結果を発表なさいました。帰国後、数年講師で御研究を続けておられました。然し運悪くかぜの後、重い病気に罹患、現在も自宅で療養生活を送られています。願わくは早く御快癒を祈るばかりです。

話しは元に戻りますが小生は程なくして仙台市立病院の吉田先生下に転出、部屋は渡辺先生の時代に変りました。古い建築1階にありました電気部屋は内部がだいぶ変り使用しなくなった小型防音室を横に使用、内部に猫専用の固定器を設置、猫捕獲用に湯浅先生製作の網を使用してました。病院廊下には猫募集ポスターを張ってました。（河本先生には許可を頂いた）餌は入院患さんの残飯を勝男君に頼んで定期的に与えました。然し猫の飼育室は教授室の真下にあり、終始猫の鳴き声が聞え、太陽が南面に来ると臭気が上昇、教授は何もおっしゃらず、我慢なさって下さいました。今考えると赤面の至りです。部屋一同、天国にいらっしゃる教授に謝りたい気持ち一杯です。

かくして渡辺先生の耳鳴はどのような時に、生ずるかの基礎実験データが出来上り、それが論文になったかと聴いて居ります。（詳細は不勉強で申しわけありません。）これと平行して洲崎先生

は猫の頭上に慢性電極を植え込んで、猫は騒音に如何に反応するかの実験でありました。

即ち猫が覚醒している時、常時頭上からCM誘導を可能にした猫です。聴覚活動の度合を測定した事になります。当時横瀬宏允先生も電気部屋にいらっしゃって、先輩達が行なっている、動物実験の方法論を勉強していました。

最後に当時の先生方はいつも病棟、手術場の三浦婦長、看護婦さん方に感謝して居りました。実験室と手術場が近かった関係から器具、ガーゼ薬品等を軽い気持ちで使い見逃して貰ってました。現在では大変な事でした。当時の良い時代と教授始め他の大ぜいの教室員の大らかな気持ちがあったからでしょう。感謝致します。

以上が私の在局8年の歴史の一端、大まかな記録描写です。思い違いも多々あります。現在の私の年令に勘案して頂き、笑って下さい。有り難うございました。

開講100周年に寄せて「片桐教授時代」

昭和37年入局　**堀　　克孝**

私が東北大学耳鼻咽喉科教室に入局したのは立木教授が退官された直後の昭和37年で、昭和48年11月までの約12年間教室のお世話になりました。その大部分は片桐教授の時代で、教室の100年の歴史の中で後半の10数年間を過ごさせて頂きました。

旧医局に於ける朝会

片桐教授は、就任当初より、教室の歴史と伝統を重んじつつ、これまでの教授を頂点とする権威主義を排し、アットホームな雰囲気の中で、我々門下生を決して叱ることなく、自ら模範を示すやり方で後進の育成に努められました。

手術・検査設備の中央化、旧耳鼻科病棟から西病棟への移転、医局・研究室の新研究棟への移転、SGT制度の誕生、学園紛争、インター制度の廃止などあらゆる面で、旧制度から新しい制度に変わる激動の10年でありました。

私と同期入局は、石川、西条、鈴木、久慈（金田）、富谷先生の6人で、立木教授の後任はまだ決まっておらず、後任の教授は片桐先生との専らの噂を信じての入局でした。

当時の耳鼻科の建物は現在の医学部図書館付近にあり、病棟・手術場・講義室・研究室・医局が棟続きの同一の建物内にあり、午前は外来・入院患者の診察と処置、午後は検査や手術、夜は研究と大部分の時間を医局で過ごすのが通例で、新入医局員は、先輩医師のネーベンまたはパラメーベンとして、新患のベシュライバー、聴力検査、手術の鉤引き、入院患者のカルテ作り、静脈注射、指示簿への記載などの雑用に追われる毎日で、3階に与えられた居室に集まり、いつになったら一人前になれるのかとぼやいていたものでした。

昭和37年5月1日片桐教授の就任が決まり、東七番町のお宅に引っ越しのお手伝いで参上したのが、先生との最初の出会いでした。大した働きもせず、ただうろうろしていただけの我々に、気さくにアルバムを見せていただきながら、先生の医局時代のお話とビールで歓待下さった先生の慈父の如き温かいまなざしに感激したものでした。

教授着任早々の6月、朴沢学園講堂に於いて日本前庭研究会が開催されました。当時の朴沢学園は仙台東急ホテルがあった場所にあり、入局早々の私は、鈴木孚先生からお借りしたコロナでお偉方を送迎する運転手としての役割でした。

10月、大館公立病院へ初トランク、櫻井先生の下で4ケ月間お世話になりました。ジフテリア

の集団発生という得難い経験をし、休日にはスキーに連れて行って頂くなど思い出多いトランクでした。当時は、函館市立病院、青森県立中央病院、秋田県立中央病院、いわき共立病院、水戸国立病院など北海道から茨城県まで、教室員が数か月から半年交代で、経験豊富な個性あふれる指導医のもとで臨床経験を積むトランク制度があり、地域医療を維持する仕組みでもありました。しかし、大学紛争の煽りで入局拒否が続き継続が困難となり、昭和45年からは県外のトランクは次第に縮小し、週1〜2回のパートタイムに移行致しました。

私の入局当時の教室の主な研究テーマは「内耳の基礎的研究」で、前庭研究グループ、電顕グループ、電気生理研究グループ、組織化学研究グループに分かれ、それぞれが各グループに属して研究が進められておりました。その後、頭頸部腫瘍、鼓室形成、耳管機能などのグループが誕生し、宿題報告を機に鼻・副鼻腔、喉頭、嚥下など耳鼻咽喉科領域のあらゆる領域の基礎的、臨床的研究が盛んに行われるようになりました。

昭和39年中央手術室が完成し、手術は中央手術室で行われるようになりました。手洗いからICUでの術後管理まで麻酔科の渡部助教授により厳しいご指導がなされました。片桐教授の執刀による全身麻酔での頭頸部癌、特に上顎癌や喉頭癌手術が盛んに行われ、先生の剥離子による見事な腫瘍の剥離や大胆にして精密なメスさばきに魅了させられたものでした。また、先生の端正な文字と美しいシェーマの手術所見はお見事で、手術後に提出する自己の手術所見のみすぼらしさに恥ずかしい思いでした。

昭和40年5月第17回日本気管食道学会が県民会館に於いて盛大に開催されました。駅前にテントを張ってのお出迎え、宿泊・観光案内なども医局員が直接担当して行う昔ながらのお祭り的色彩が濃い学会でした。私は懇親会と観光旅行の担当で、広い庭園と温室を有し、ゆっくりと園内を散策出来る西花苑で懇親会が行われました。短時間でのバス移送と雨が心配でしたがトラブルもなく無事終了、これまでにないユニークな懇親会と好評でした。観光旅行は事前に河本先生のルノーをお借りして菊田先生と実際にコース通りに走行して企画した飯坂温泉―磐梯スカイライン―磐梯高原―郡山を巡る2泊3日の小旅行で、当日は2台のバスに分乗して飲み物のサービスを行うなど医局員が添乗員としてお世話に当たりました。天候にも恵まれ、参加した偉い先生方からお褒めの言葉をいただきほっとしたのを覚えております。

気管食道科学会エクスカション（檜原湖にて）

昭和40年7月、河本助教授のコロンビア大学留学を皮切に、金子、綿貫、柿崎、髙坂、三好、草刈先生らの海外留学が続き教室の国際化が進められました。河本助教授の留学当時は1ドル360円の時代で海外渡航は、まだ一般化されておらず、多数の医局関係者が仙台駅まで見送り、渡利先生と私は羽田空港まで同行し、DC8で空港から飛び立つ先生ご一家のご無事を祈りデッキからお見送りしたのを昨日のことのように思い出します。

昭和42年3月片桐教授は名古屋で行われた第68回日本耳鼻咽喉学会総会学術講演会の宿題報告を担当されました。「耳鼻咽喉科領域疾患のX線学的研究」というこれまでに経験したことのない新しい分野の演題で、当時の東北大学に於けるこの方面での新技術としては、円軌道移動方式断層撮影法が開発された位であり、はじめは大変戸惑いましたが、誰もが参加出来るテーマでもあり、朴澤先生を総指揮官としてパート毎に研究班が組織されると、耳管・副鼻腔機能・嚥下などそ

れぞれが新しい分野に向かって挑戦し、短期間の中に見事まとめ上げる事ができました。当時は、パソコンも電卓もビデオカメラもなく、フイルムで映画製作する時代で、種々工夫をこらしながらの挑戦でした。私は、三好、石川、高橋、山崎、先生らと鼻・副鼻腔領域を担当しましたが、動物実験、映画撮影、スライドの作成などあらゆる面で渡辺勝男君の献身的な協力が大きな力となりました。この時期は、私にとって在局中最も燃焼し、充実した期間であり、教室員それぞれに、耳鼻咽喉科領域のあらゆる分野の基礎的、臨床的研究に大きく目を開く原動力となったものと思います。

昭和 42 年 4 月西病棟が完成し、耳鼻科の病室は全て 7 階の新病棟に移転し、外来・病棟・手術・医局・研究室が分断され長い中央廊下行き来する毎日となりました。

昭和 43 年に始まった東大安田講堂占拠事件に端を発した大学紛争は、東北大学にも波及し、学園紛争のまっただ中の昭和 44 年 4 月片桐教授は東北大学医学部附属病院長に就任されました。11 月には大学病院封鎖を叫ぶヘルメットに覆面姿の学生デモ隊が医学部構内に押し寄せ、デモ学生集団が病院玄関前にハンガーストライキで座り込み、教室員が実力で排除する事態もありました。病院長としての要職にあった先生は医学部長の槇先生と共に連日連夜、学生との団体交渉で自己批判までさせられるなどご心労は如何ばかりか思いやられました。

昭和 45 年 4 月新研究棟が落成し、旧耳鼻科棟から新研究棟 8 階へ研究室と医局が引越ました。実験室も医局も近代化され快適な研究室となりましたが、古くから伝わる医療器械や立木教授時代に開発された喉頭テレビなど貴重な財産がスペースの関係で移転できず、後にスクラップとして処分されたとのことで、九大の久保記念館のような施設があったならばと残念に思います。

昭和 45 年 8 月第 71 回日耳鼻総会が仙台で開催されましたが、学園紛争の余派で、5 月開催予定の会期を学生が帰省する 8 月末に延期しての開催でした。白ヘルの学生が会場前をデモ行進するのを横目で見ながらの異常な雰囲気の中での学会で、会員懇親会もなく学術講演に重点を置いた実質的な総会でした。

片桐教授は、診療や研究面ばかりでなくスポーツやリクレーションにもご理解があり、野球の早朝トレーニング、ボーリング大会、マージャン大会、ゴルフ、お花見、医局旅行、忘年会、大納会など年中いろいろな行事が続く和気あいあいの楽しい医局生活でした。

昭和 46 年の正月頃、片桐教授の還暦を祝い医局でささやかな祝杯をあげた折に、渡辺先生が西暦 2000 年までのカレンダーを持ってきたのがきっかけとなり、29 年後の 2000 年元旦に塩釜神社で会おうということになりました。遠い先のことで「片桐先生は大丈夫か」という失礼な影の声もありましたが、片桐先生は「僕は長命の家系だから大丈夫だよ。君たちこそ大丈夫?」との一言で先生を中心に 2000 年会が結成されました。先生の退官を前にして、これからも何らかの形で恩師との繋がりを保ちたいという門下生の願いでもあったものと思います。

昭和 47 年 3 月片桐教授は東北大学を定年退官され、八戸の青森労災病院院長として赴任されましたが、大挙して八戸を訪問したり、喜寿、卒寿、米寿、卒寿のお祝いなど、先生をお慕いする多くの門下生が幾度となく先生を囲み集いました。

2000 年 1 月 3 日、約束通り各地から大勢の門下生が塩釜神社に参集し、車椅子ながらお元気なお姿で参加された片桐先生を囲んで 2000 年会総会並びに懇親会が盛大に執り行われました。我々門下生が先生を長い間お慕いし描き続けた夢とロマンの実現でした。

医師として学者として、人間として素晴らしい師の下で、良き友と共に過ごさせて頂いた 10 年間は大変懐かしく、良き時代であったと思います。

片桐先生の時代に在局して

昭和 38 年入局　**渡辺　孝志**

大分古い事ですが私が入局したのは先生が東北大学耳鼻咽喉科の第 3 代目の教授として弘前大学から赴任なされた翌々年でした。そして先生が退任なされた年に私も医局を辞して塩釜にて開業したのでほぼ先生と一緒の医局時代を過ごした事になります。当時インターン時代は夢々耳鼻科の医師になると言う選択肢は無かったのですが先生に「耳鼻科の研修では何をしたのか」と聞かれ「外来では耳管通気等をしておりました」と答えると通気が出来ればまずは耳鼻科医としても一人前とおだてられてぜひ大学院を受験する様に」と言う事になったのがきっかけでした。当時入局したのは 6 名、荒井、高橋（忍）、中川の先生方がお亡くなりになり今は髙坂、矢尾板の両先生と渡辺の 3 名になった事は寂しい限りです。

電気部屋と渡辺電気

入局後、高倉、桜井先生の赴任の後を継いで電気部屋の親分になった三好保先生のもと、千葉正敏、山口両先生に弟子入りと言う事になりました。子供の頃からラジオ少年と言うか電気大好きで今のステレオ自作アマ無線、パソコン自作等々に続く事になる訳です。当時テレビの修理迄手がけていて渡辺電気と言われておりました。三好先生との猫のシングルナーブのスパイクの実験は今想い出しても感激物でした。当時あのデービス教授が雑然とした電気部屋の実験室においでになられた事は重大ニュース。そして今でも「電気部屋を楽しむ会」として小林前教授を会長とし仲良く楽しくやっている次第です。

「二千年会の先生方」
23 年秋、磐梯熱海温泉にて

片桐先生

先生は私にとっては神様みたいなもので学問は勿論当然ですがその人望は正にそのものでした。先生の趣味の一つのクラシック音楽鑑賞特にモーツアルト、ベートーベンを教授室の卓上ステレオでお聞きになっていた様で先生も今のナガラ族？プライベイトの時には先生との音楽談議も懐かしい想い出です。先生は学生運動の最中病院長に就任され、また仙台での日耳鼻総会の会長を務められました。学術講演会、展示のみで懇親会も無く会場の県民会館の外を学会反対の学生運動のデモ隊が取り囲むなか、また総会の会計は医局幹事の私が相当部分を取り仕切っている状態でしたが今考えても楽しい総会でした。先生の退官の際医局、看護部屋（昔はそう言っていた）の総員が医局から病院の玄関迄お送りした時には涙がどうっと出て止まらなかった事を昨日の様に想い出します。医局旅行、退官後の赴任先の青森労災病院に同窓会でお伺いした時の事、先生のご自宅で医局員が何回も夜遅く迄の大宴会の事、「耳鼻科二千年会」の事等々話題は尽きないのですが紙面の都合でそれは次回と言う事で。

片桐主一先生の想い出

昭和 39 年入局　**湯浅　　涼**

1）　初当直

昭和 39 年、ある程度医局の仕事などに慣れた頃、いよいよ新入生にも初当直が命じられた。夕方 5 時過ぎには、医局内は先輩方が診療、研究を一段落し、三々五々に集まってきた。そして、先

輩の一人が「初当直のお祝い（?）だから、酒を暗室から持って来い」との下命を受けて、早速医局の筋向の写真室（暗室）に侵入して、手探りで一升瓶を探し当てて、確認もせずに医局に運びこんだ途端に、先輩からの爆笑。良く見れば一升瓶は何と「キッコーマン醤油」ではないか！真っ暗な暗室の流しの下に10本入りの木枠に収められた一升瓶を探しあてた感覚は間違いなく日本酒であった。まさか「キッコーマン」が10本も暗室にあるとは。これは市内の先輩から毎年、お歳暮として医局に届けられる「キッコーマン10本」であったことを知らされた。さて、醤油で初当直を祝って貰うわけにもゆかず、ある先輩が「教授室には必ず月桂冠の2、3本はあるはずだ。オヤジが帰ったことを確かめて家探しして来い」との命令である。教授室にお邪魔するのは、入局時の挨拶以来2回目であるが、ノックをせずに鍵を使っての入室は初めてである。先輩の進言通り「月桂冠」が執務机の脇に置いてあるではないか！「見慣れた白い下地に深緑色の月桂冠」の箱。しかも2本入りである。早速中身を醤油でないことを確かめて、1本抜き蓋を閉めて元の場所に戻し、退室。今度は誇らしげにゲットした月桂冠を医局の机に置き、初当直の初仕事を無事終え、初当直の前祝をして頂いた。

そして、本来の当直任務も無事終えて、翌朝当直室から医局に戻ったところ、山田（医局の主で初代秘書?）が血相を変えて「あんた昨日オヤジの部屋から酒1本かすめたすぺ、 オヤジさんあんたがやったこと知ってっからすぐに謝ってがい！」とのお叱りである。新入医局員が先輩に言われたから……との言い訳も言えず、教授室に向かう決意を固めて、教授室向いの教授専用？のトイレでお叱りに失禁しないように用を済ませて、3回目の入室。教授からの叱責を覚悟して、直立不動で昨夜の非行をお詫びしたところ、「湯浅君、これが最後だからね！」と昨晩、発覚を恐れ、慎重に元に戻した箱の残りの1本を頂戴して、退室。医局では、昨晩の先輩たちが固唾をのんで、初当直者の帰室を待っていた。そこに、もう一本の月桂冠を片手に凱旋した私に何が起こったのか、きょとんとした顔で迎えてくれたことを思い出す。それにしても、なぜ、片桐先生が月桂冠の2本入りの箱のうち、一本が紛失していたことをあの朝にお気づきになったのか、また、当直医が先輩からの酒盛りを許されていたのか、半世紀以上経過した現在でも不思議であり、また良き想い出でもある。

2） 教授の勘違い

当時、新入局員は5〜6年先輩のオーベン（指導医）とのコンビで入院患者の治療を行っていた。その組み合わせは3〜6か月が1クールで、組み合わせは教授が決定していた。何回目かの組み合わせの際、私のオーベンは髙坂先生となった。入局年度は1年差なのに、異例の組み合わせに二人は驚いたが、教授の決定である。髙坂先生は途端にオーベン面で「ゆーさん、今日入院の患者のカルテ、指示など宜しく！ 俺は床屋に行ってくる、何かあったら連絡を！」と昨日まではネーベン（研修医）同士の仲であった髙坂先輩は意気揚々と私に指示を与えて散髪に。意気消沈の私は、髙坂先生と俺とはやはり、オーベンーネーベンの差か！……。否、やはり、初当直時の月桂冠のたたりが今現れたのか、等と思いつつも、1年先輩のオーベンのもとで、命令通りの日課をこなしていた。その後、何かの宴席で片桐教授に、何故に1年差のオーベン、ネーベンなのかを問うてみたところ、そうだったかね、君と髙坂君とは5〜6年差と思っていたけど、1年違いだったかね…」と。当時、入局すればいずれかの部屋（研究班）に所属して、実験を始めるのが習わしであった。髙坂先生は既に、中山先生、片岡先生率いる電子顕微鏡の部屋に所属し、研究にも打ち込んでいた。一方、私と言えば、親分三好保先生の「電気部屋」に所属はするものの、実験動物の猫狩りや大音響を鳴らすためのアンプ製作などに専念し、基礎研究には縁なく過ごす毎日であった。そんな様子から、片桐教授は我々の入局年度の違いを誤認されていたのかも知れない。しかし、次

のクールでは高坂先生もネーベンに降格し、「ほんの僅かな期間、オーベン面して申し訳なかった。でも、楽しませて貰ったよ」と再び二人は同輩として医局生活をエンジョイすることになり、むしろこの件により二人の絆は深まり、今でも当時のことを楽しく回想している。

3） 日耳鼻総会（1970、仙台）での想出

第71回日耳鼻総会を片桐教授が主催された1970年（昭和45年）は東大安田講堂事件の翌年で学術講演会は急遽5月から8月に延期という異例の事態となった。そのため教室員総出の人海戦で、準備が完了したのは開催初日の朝方であった。その第一会場でのトップバッターは「耳管に関する演題」を発表する私で、片桐教授の会長挨拶の次に登壇する順番であった。しかし、前日からの徹夜作業のため、私は上着を持ち合せておらず、急遽、一緒に朝まで作業された柿崎一郎先生の上着をお借りしての登壇という、いつもながらのギリギリセーフの有様であった。当時は耳管機能に関しての関心、研究は少ない時代であったが、青森県病で指導して下さった高倉　稔先生と片桐教授との連携により、耳管機能の研究の発表がトップバッターに起用された。

そして、借り衣装での発表後、フロアーで耳管機能の研究を開始されていた関西医大の熊沢助教授（当時）から多くの質問、助言を頂いたことが印象的であった。その後、この総会での発表から20年が経過した1989年に、中耳臨床で得た経験からフィブリン糊を用いた簡易な鼓膜形成術「接着法」の開発・普及にも繋がった。基礎研究を避けて、中耳の臨床に専念させて頂いた片桐教授、そしてそれを支援して指導して下さった高倉博士、さらに片桐教授の私に対する指導方針を継承して戴いた河本和友教授、高坂知節教授にもこの紙面をお借りして深謝いたし、片桐主一先生の想い出の最後を綴らせて頂いた。

開講100周年を迎えて
― 電気部屋の歴史 ―

昭和40年入局　**草刈　　潤**

1911年と言うと明治時代の終り頃で日露戦争が終わった6年後であり、随分昔のことになります。従ってこの100年間の教室の歴史やそれに伴う伝統というのは実に重いものがあります。私は現役生活最後の14年間は筑波大学で過ごしました。大学自体は明治初年からありそれなりに伝統もあるのですが、医学部に関してはいわゆる新設校なのでそのようなものは殆んどありませんでした。それ故伝統の無い悲哀を感じたことも少なからずあり、100年の歴史の重みは良く理解しているつもりです。この100年間に当教室の先輩達は数多くの業績をあげております。嘗て当教室に幾つかある研究グループはそれぞれ○○部屋そしてその責任者は社長と呼ばれておりました。そのうちの一つで私も在局時に属していた電気部屋（聴覚生理の研究グループ）を例に取り、勝手ながら7期に分けてその歴史を概説したいと思います。以下の（　）は入局年度を示す。

I）　電気部屋の幕開け前[1,2]：電気部屋の初代社長即ち創始者は後に信州大学教授となった鈴木篤郎先生（S16）です。しかしながら、それより数年前に聴性誘発反応の分野ですばらしい仕事をされた方がおられます。昭和4年に生理学教室に入り、12年に当教室に入局された伊藤儀助先生です。第43回日耳鼻総会（1939）で「人間腦電流ニヨル聽覚ノ客観的測定」と題し杉良平先生（S12）と連名で発表されておられます。音刺激による腦電流（脳波）の抑制現象を利用し、可聴域は30-25,000 Hzであり聴覚の閾値は1,000-3,000 Hzで最も低いなどと結論しています。先生は間もなく医局を去られ残念ながら臨床応用までには至らなかったようですが、当時としては国内はもとより国際的にも最先端を行く素晴らしい研究であったと思います。しかしながらこれらの研究はどうも当教室内ではなく生理学教室で行われ

たようです。

II） 第 1 期[2,3,4,5]：耳鼻科教室で行われた研究はやはり上記の鈴木先生のお仕事をもって嚆矢とするようです。先生は入局した昭和 16 年の秋に立木豊教授の命により、当時研究室で埃をかぶっていた横川電磁オシログラフと真空管増幅器のみで研究を始めました。これが当教室における電気部屋の幕開けです。先生は戦中の大変厳しい時期にお一人で何とか設備を整え、家兎の脳波研究をされております。又戦後には戸田正二郎先生（S12）や山室重遠先生（S19）が加わりました。昭和 24 年 6 月鈴木先生は信州大学にご栄転され、山室先生とともに松本市に転居しております。昭和 54 年定年退官されましたが、在職中はもとより退官後も研究に励み、聴性誘発反応や幼児聴検等の分野で多大なる業績をあげられたことは皆様良くご存じのことと思います。昭和 52 年紫綬褒章を受章されておられます。

III） 第 2 期[6,7]：その後 2 代目社長として電気生理の研究を行ったのは後に福島医大の教授になった大内仁先生（S17）です。しばらくお一人で研究していたようですが、その後新入局者の高倉稔先生（S28）が加わりました。入局の動機や当時の動物実験の様子などを高倉先生が会誌に詳しく書いておられます。日耳鼻会報を見ますと、CM の死後変化に関する研究などの報告が見られ、共同研究者には他に三塚大悦（S25）、渡辺昭夫（S30）、湯本牧雄（S30）の諸先生のお名前があります。この時代に漸く蝸牛電位の一つであるマイクロフォン電位（CM）が研究の指標として用いられ始めたようです。大内先生は昭和 32 年 8 月福島県立医科大学教授にご栄転されました。着任後も先生は引き続きこの分野の研究に大いに励まれ、その後福医大から多くの優れた論文が発表されております。

IV） 第 3 期[7,8]：高倉社長の時代で、前記の CM の他に複合活動電位（CAP）、加重電位（SP）や内リンパ電位（EP）も記録可能となりました。聴覚電気生理の研究法がほぼ全て可能になった時期と言えます。しかしながら、真空管などを使用していた機器による記録ですから、現在とは比較にならぬくらいのご苦労があったことと思います。音響負荷による疲労現象と回復曲線やレクルートメント現象、EP の DC fall や虚血時の変化、CAP の Adaptation などに関する報告があります。共同研究者としては、前記の湯本、渡辺の両先生に加え、桜井時雄先生（S32）と中塚満郎（S33）先生がおられました。その後三好保先生（S34）が新たに加わっております。高倉先生は昭和 34 年度の医学部奨学賞銀賞を受賞されました。比較的短い在職期間にもかかわらず、その後の電気部屋発展の基礎を築いた先生のご功績は実に大きいと思います。昭和 36 年 4 月に盛岡市立病院へ赴任されました。

V） 第 4 期[9-12]：三好先生が社長の時代で、他に吉野幸雄（S36）、千葉正敏（S36）、山口洋（S36）、渡辺孝志（S38）、洲崎啓治（S39）の諸先生がおられました。この間の研究としては、第八脳神経切断後の蝸牛電位の経時的変化や耳小骨筋反射と CM の関係（慢性電極による）などがまずあげられます。三好先生は昭和 39 年 4 月から 1 年間東京医歯大生理学教室（勝木保次教授）に内地留学されましたが、この時習得されたタングステン電極による聴神経単一ニューロンからの活動電位の記録法はその後の電気部屋の研究を更に一層進展させることとなりました。耳鳴と関連づけた実験や聴覚順応現象の研究などがなされていました。また、外側半規管膨大部稜神経の活動電位に関する研究も報告されております。その後、当時前庭部屋の住人であった草刈潤（S40）が客分として参加し、吉野先生他皆様のご指導を得て卵形嚢神経から活動電位を記録しております。三好先生は臨床オージオロジーの方にも熱心でこちらの方には上記の諸先生に加え横瀬宏允先生（S41）、沖津卓二先生（S42）がおりました。県医師会館内のヒアリングセンター設立（昭和 43 年）やその後の運営に三好先生と沖津先生は大変貢献致しております。沖津先生は平成 9 年に幼小児難聴の研究で高橋記念賞を受賞しました。三好先生は昭和 45 年から 2 年間米国セントルイ

ス市のワシントン大学トールマン教授の許に留学しております。同教授は内耳生化学の大家で、聴器の生理学並びに生化学の共同研究が留学の目的です。三好先生の後任には私草刈が参りました（昭和47年）。この共同研究は平成4年まで続き一人2年間で聴覚生理関係では合計11人が渡米致しました。三好先生には設備その他のセットアップを十分にしていただき、その後の引き継ぎが大変容易となりました。先生は帰国翌年の昭和48年ご開業致しております。

VI） 第5期[13,14]**：** 私は昭和49年に帰国致しましたが、以前聴覚生理実験を行っていた電気部屋の方々は誰も医局に残っておりませんでした。そこで私が社長ということになり、まず佐藤良樹先生（S46）や和田淳先生（S48）と実験を開始致しました。この第5期は私が昭和63年3月に筑波大へ赴任するまで続きましたが、この間の電気部屋のメンバーは下記の諸先生です。

伊勢郁夫*（S45）、佐藤良樹（S46）、和田淳*（S48）、神林潤一*（S49）、小林俊光*（S50）、六郷正暁*（S51）、荒川栄一*（S52）、大山健二*（S53）、原晃**（S54）、稲村直樹*（S54）、池田勝久（S56）、川瀬哲明（S57）、武山実（S57）、伊東善哉*（S59）

この間に行われた研究を要約すると、

① 蝸牛並びに前庭器官の内リンパ電位（EP）の研究。
② 一過性内耳虚血、低体温、内耳液のイオン変化などの蝸牛電位に及ぼす影響。
③ 感音難聴のモデル動物（強大音負荷、内リンパ水腫、各種聴器毒投与、腎不全など）の蝸牛電位所見
④ その他（超音波刺激によるCAP、前庭神経単一ニューロン活動電位）。

特に③では当時漸く一般臨床検査として普及してきた蝸電図の所見と対比して、基礎研究の臨床応用などを試みました。国際学会への出題が増え、また英文の論文が良く出るようになったのもこの頃です。

上記の諸先生に付いている＊印はワシントン大学への留学者です（＊＊：当初電気部屋で研究、その後生化学で留学）。そこでの研究内容の詳細については紙面の都合で省略しますが、主として各種負荷を加えた時の蝸牛電位（特にEP）と蝸牛各部位の生化学的所見との関連についての研究を代々行ってきました。論文が多数報告されております。

また、池田先生はミネソタ大（森園教授）、後に川瀬先生はハーバード大（リーバーマン教授）へ夫々留学致しております。昭和59年度には草刈が金賞、また61年度には大山先生が銀賞を受賞しています。草刈は昭和63年に原、武山、伊東の諸先生と共に筑波大学へ赴任致しました。

VII） 電気部屋その後： 教室での聴覚生理研究はその後も小林、大山、稲村、池田、川瀬等の諸先生によって脈々として続けられていましたが、どうもこの頃から○○部屋とかましてや社長などという言葉はあまり使われなくなった様に思います。小林先生は平成4年度に金賞を、また池田先生は平成3年度に銀賞、11年度には金賞を受賞しています。小林・川瀬両教授のその後のご活躍については周知の事で今更書くまでもありませんが、池田教授は順天堂大でまた原教授は筑波大で夫々電気部屋の伝統を守り活躍中です。教室ではその後多数の方々が米国各地に留学されており、特にカンサス州立大（マーカス教授）には合計9名になると伺っております。同教授がPhDコースの学生だった時に、私はトールマン研究室でご一緒致しました。若い時から俊秀の誉高くまた性格も大変温厚な方です。留学者の方々は皆さんなかなか良い仕事をされてきており、私は地方部会における帰朝講演を大変楽しみに致しております。ぜひ可能な限り継続してほしいと思っております。その他その後の状況については紙面の都合もありまた私が書くよりももっと適切な方が他におられるように思いますのでここでは省略させていただきます。

今回例にあげた電気部屋に限らず他の部屋（研究分野）でも、当教室は長年に亘り耳鼻咽喉科学の発展に大きく寄与してきたことは万人の認める

ところであります。またこのような伝統が更に発展し現役の方々に立派に引き継がれており、会員の一人として大変うれしく思っております。次代を担う若い諸君もこの伝統を良く守り日夜研鑽に努められることを期待しております。次の 100 年間も当教室がこのように活躍し続けることを祈念して稿を終わらせていただきます。

参考文献

1. 伊藤儀助、杉　良平：人間脳電流ニヨル聴覚ノ客観的測定．日耳鼻 45：1544-1545, 1935.
2. 鈴木篤郎：電気部屋物語（1）　序章　大きいコンクリートの台．同窓会会誌 29-32, 昭和 59 年.
3. 鈴木篤郎：正常家兎腦波について．日耳鼻 51：86-89, 1948.
4. 鈴木篤郎：幼児難聴　特にその早期発見．金原出版、1997.
5. 草刈　潤：追悼　鈴木篤郎先生を偲ぶ．同窓会誌 96-98、平成 21 年.
6. 大内　仁、高倉　稔、三塚大悦他：酸素欠乏の蝸牛反応に及ぼす影響に関する実験的研究．日耳鼻 60：300-301, 1957.
7. 高倉　稔：電気部屋物語（2）　大内仁先生のことなど．同窓会会誌 53-55、昭和 60 年.
8. 高倉　稔：蝸牛反応による聴覚疲労の実験的研究．日耳鼻 63：257-267, 1960.
9. 三好　保：Dr. Miyoshi and His Friends.　杜英印刷、平成 24 年.
10. 洲崎啓治：電気生理研究の思い出．同窓会誌 19-21、平成 5 年.
11. 横瀬宏允：電気部屋の思い出．同窓会会誌 30-32、平成 7 年.
12. 沖津卓二：電気部屋の間借人．同窓会会誌 37-40、平成 6 年.
13. 草刈　潤：電気生理学．同窓会会誌 22-27、平成 4 年.
14. 神林潤一：医局時代の思い出．同窓会会誌 73-77、平成 12 年.

（参考にした学術論文の大多数は紙面の都合により省略しました。）

2010 年 7 月電気部屋を楽しむ会

回想

昭和 41 年入局　**山崎　義春**

私は昭和 48 年に医局を出たので、もう 41 年の月日が経ってもはや 70 歳を越えてしまいました。元来が昔の事を覚えておらず、近時は忘れてならぬ名を忘れといったところで、仙台の医局のこと頼りない我が脳細胞を検索して思い出している。思い出すままで、脈絡のないこと、記憶違いのあることご勘弁願いたい。

昭和 41 年に入局したので片桐教室の 4 期生である。入局すればどうせ耳鼻科の勉強ばかりするだろうからといって、大内先生が書かれた GM 選書耳鼻咽喉科学を買っただけで、この本は何でも書いてある本だと思うが、学生中はろくに講義に出なかった。そのため教授、助教授の顔もうろ覚えであった。確か高坂先生が新入局勧誘係で、当時の仙台市立病院の裏で大いに飲ませてもらい、入局することになった。

耳鼻科の新患外来では先生がドイツ語で宣う所見をカルテに記入する役割で、いまもこんなことをしているんだろうか？　しかしこの方法によって診た所見の表現の仕方、使用単語がその医局で統一されるんだなと後日思い至った。病棟勤務では渡利先生に入院カルテの書き方を教わり、額帯鏡の裏に山崎と彫ってもらった。翌年 42 年が片桐教授の宿題報告の年で、「耳鼻咽喉科領域の X 線学的研究」という題であった。小生は三好先生、堀先生の下「鼻班」に所属した。ウサギの上顎洞を開け、アルミ粉を蒔いてそれが線毛運動で

移動する様を 16 mm に撮影したり、デンシトメーターなるもので患者の上顎洞陰影を比較してみるとかのお手伝いをした。片桐教授の宿題報告は無事終わったが小生はその時はすでに同期の横瀬先生と交代で秋田県立中央病院へトランクとなった。秋田にいるとき片桐教授からお電話があり、何事かと緊張すると「君はアジアオセアニア学会に同行する気がホントにあるのかね」と言われた。過日仙台で例によって酒の上で一緒に連れて行って下さい等と多分頼んだのであろう、この辺がよく覚えていないが、まさかのホントになってしまった。確か山口先生や草刈先生が嚥下運動の X 線造影を映画に撮っていて、バリウムを嚥下する被写体は小生だった気もする。これを教授がマニラで発表したのだと記憶している。旅行中は父親ほども年の違う教授と常に同室なので様々に片桐先生のお世話になった。その後も調子に乗って迷惑をかけ続け、ある時など、医局員や看護部屋が教授宅に遊びに行って、これは新築祝いだったろうか、小生目が覚めるとお宅の仏間に一人寝かされていて他に誰もおらず、そっと逃げ出したこともあった。よくまあお許しを頂いたものである。

どぜう屋での金子先生の気炎も懐かしい、柿崎先生には長町分院で教えてもらい、先生が初めて購入したマイカーに乗せてもらったこと、文横の寿司屋では湯浅先生に奢ってもらった。小生が顔面神経麻痺を調べたときに吉野先生はその辺のラジオから抵抗器を取り出してその場で永島の電気味覚計もどきを作り出してくれた。心優しい先輩に恵まれて楽しい医局生活であった。片桐教授は小生の在局中をとおして、乱暴な物言いをすることが無く、嫌みを言うこともなく、そういう気風のせいで先輩諸先生も叱る、脅すという事は一度もなかった。こうして思い出すと懐かしいことも多いが、穴があったら入りたい事柄も多く、その辺はなるべく忘れて思い出さないようにしている。その後小生は草刈先生のお誘いもあって朴澤先生率いる「めまい班」に入れてもらって動物実験などをしているうちに片桐教授は 47 年に御退官となり、小生は河本新教授の下 1 年間ご厄介になって、48 年戸川教授のお誘いを受けて秋田大学耳鼻科に移ることになった。7 年間の医局在籍中に結婚し、子供が 2 人でき、その後の苦楽がスタートしたことになる。移ってしばらくして仙台に帰ることがあったが、北仙台駅から大学まで歩く道すがらどういう訳か涙が出て止まらなかった。

試作型走査電顕

昭和47年入局　小野寺　亮

東北大学耳鼻咽喉科教室が開講100周年を迎えられましたことを心よりお慶び申し上げます。当教室は耳鼻咽喉科領域の研究、臨床の分野で常に日本の耳鼻咽喉科を牽引してきた存在だと思っております。私は昭和47年の入局で7年間医局に在籍していました。一時期ではありますが、伝統のある当教室に在籍出来たことを誇りに思っています。

私は入局後、東北労災病院で湯浅涼先生にご指導を頂いた5ヶ月間を除いて、昭和54年に東北公済病院へ赴任するまでの7年間を医局で過ごしました。その間、短期間でしたが、忘れられない沢山の思い出があり、特に河本和友先生には臨床の実際など数々ご指導頂きました。この時に学んだ事が今に生かされています。

在医局当時の教室の基礎的研究は大きくは髙坂知節先生を中心とした「電顕（形態学）グループ」と草刈潤先生を中心とした「電気部屋（生理学）グループ」に分かれておりました。当時、河本和友先生は入局後7年で学位を取得するように指導されていたと記憶しております。私の研究テーマが決まらない時に髙坂先生から走査電子顕微鏡（以下走査電顕）での鼻副鼻腔粘膜の形態的研究をしてみないかとお声がけを頂きました。当時の髙坂先生は透過型電子顕微鏡を用いた鼻副鼻腔粘膜の形態学的研究をなさっておりました。お誘いを受けた後に頂いたテーマは「術後性上顎嚢胞粘膜の超微形態学的研究」でした。このテーマを頂いたことが、その後、私が東北公済病院で行った手術を中心とした鼻副鼻腔臨床を始めるきっかけでした。具体的には正常上顎洞粘膜と術後性上顎嚢胞粘膜の表面を走査電顕で観察し、嚢胞という閉鎖腔粘膜の繊毛形態が手術により開放腔なった時にどう変化するかを調べるという目的でした。

当時、走査電顕という装置は見たことも無く、耳鼻咽喉科では実際に使っている先輩もいませんでした。3号館3階にあった電顕室の片隅に暗幕で囲まれた一角があり、その中に箱形の器械がポツンと置かれていました。これが走査電顕との出会いでした。当時、電顕室で装置の保守管理をしていた技師さんから教わりながら、操作法を覚えて行きました。当時、走査電顕はやっと研究に応用され始めた時期で、東北大にあったものは試作機に近い装置であったようです。焦点合わせやその他の操作はほぼ手動で行わなくてはならず、安定性が無く、頻繁に故障していました。観察材料は手術時に採取出来るので、潤沢に手に入りましたが、装置が動かなくて観察出来なかったことが度々ありました。時間が空くと、夜は医局で麻雀というパターンでした。ほとんどは負けていた様な気がします。

操作に慣れて来て、写真が撮れるようになっても、装置のその日の調子で焦点が合わないとか、写真の濃淡が極端に違うとかで、なかなか安定した写真が撮れませんでした。当時は当然ながらアナログ写真でしたから、ロールフィルムに撮影し、一枚づつ現像していました。今のようにデジタル化していればどんなに楽だったかと思います。隔世の感があります。当時、遅くまで残って現像をしていただいた鈴木（旧姓小野）さんには大変お世話になりました。感謝しています。

何百枚撮ったか忘れましたが、やっと論文に掲載できるレベルの写真が撮れ、学位論文の審査に通過して、昭和53年秋に学位を手にすることが出来ました。

昭和54年1月から3ヶ月間、病棟に柴原義博先生をネーベンに2人の「小野寺グループ」が誕生しました。喉頭全摘の片側を数回して、同年4に東北公済病院へ赴任となりました。

東北大学耳鼻咽喉・頭頸科の今後益々の発展をお祈り申し上げます。

河本和友教授時代の思い出

昭和 49 年入局　**神林　潤一**

昭和 49 年入局組は、青葉裕子、西條　茂、角安雄、飯野（佐野）ゆき子、佐藤雅弘、私の 6 名でした（敬称略）。教室には、河本教授以下、朴澤二郎助教授、柿崎一郎先生、髙坂知節先生、綿貫幸三先生、草刈　潤先生、田中克彦先生、沖津卓二先生、古和田　勲先生などそうそうたるメンバーが揃い臨床、研究、教育にご活躍中で、医局はとても活気に満ち溢れていました。

われわれ耳鼻咽喉科の新人 6 名は、その年から始まった河本教授の新しい臨床研修構想のもと、長井市立病院の横瀬宏充先生、東北労災病院の湯浅　涼先生のもとで順番に研修を受けることが決まりました。当時は現在のような卒後の臨床研修制度はなく、耳鼻咽喉科独自のしっかりした初期研修、後期研修のプログラムをつくられたのは、河本教授の大変先進的な取り組みだったのではないかと思われます。

私は大学病院で約半年間の研修を受けた後、山形の長井市立病院へ配属が決まり、横瀬先生のもとで耳鼻咽喉科医としての基礎を教えていただきました。また、病院では全館当直と夜間の救急外来は研修医の役割でしたので、否応なしに全身疾患にも対応しなくてはなりませんでした。私のような専門科の初期研修医にとって、これはなかなか大変な仕事で、よく内科、外科の研修医仲間をマージャンに誘い遅くまで付き合ってもらったものです。さらに、ひげの名物院長、安藤静男先生（後の山形市立済生館病院長）に私邸に招かれ、研修医としての心得をはじめいろいろ楽しいお話を伺ったのもよい思い出で、短期間ではありましたが収穫の多い 4 か月間でした。

次いで一時大学に戻った後、東北労災病院で研修を受けることになりました。当時、研修医は複数体制で、飯野ゆき子先生が一足先に赴任していました。日々の忙しい外来や、多くの手術を経験させていただきましたが、さらに英会話、アマチュア無線など湯浅先生の個性溢れる研修も受けることができました。その結果、同期の西條先生、飯野先生、私の 3 人は、みごと労災病院在籍中にアマチュア無線免許試験に合格いたしました。夜遅くまで耳鼻科部長室で電気回路の解説を受けたのを今でも懐かしく思います。

河本教授の構想の中で、初期研修終了後われわれは、臨床のみならず研究にも参加するよう求められていました。特に研究テーマ選択について強制はなく、自主的に決めるようにとのことでした。私はいろいろ迷った末、草刈　潤先生がリーダー（社長）を務める電気生理グループ（通称：電気部屋）に加えていただくことになりました。そのときのメンバーは、伊勢郁夫先生（米国留学中）、和田　淳先生でしたが、その他平衡グループの伊藤和也先生、佐藤良樹先生が同じ実験室で研究をされていました。草刈先生のもとで、EP など内耳電気生理の基本を教えていただいた後、河本教授のご高配でセントルイスのワシントン大学トールマン教授のもとへ留学させていただきました。主に内耳の血管環流に関する仕事をさせていただきましたが、昭和 55 年 3 月に小林俊光先生との引き継ぎを無事済ませ帰国の途に就きました。まだインターネットなどない時代、異文化の中での 2 年間は、私にとってとても刺激的で忘れられない体験になりました。

帰局後、再び東北労災病院の湯浅先生のもとで中耳手術を中心に勉強させていただき、昭和 58 年 4 月より仙台赤十字病院に勤務することになりました。赴任早々、河本教授より初期研修医の指導をするようとのご指示があり、6 ヶ月交代でやってくる研修医のお世話をすることになりました。河本教授のご期待にそえたかどうか甚だ疑問ですが、新人だった私が約 10 年の月日を経て指導的立場になった訳ですので、河本教授のお考えになった研修プログラムがちょうど一巡りしたこ

とになったのだと思います。

このたび東北大学耳鼻咽喉科教室が開講100周年を迎え、私の目からみた河本教授時代の思い出について紹介させていただきました。教室の歴史は、人と人の出会いの中で作られていくものだと思いますが、脈々と培われた長い伝統と懐の深さを持つ教室の中で、数多くの素晴らしい先輩がたと仲間に恵まれ、充実した医局時代を過ごせたことを心から感謝しています。

河本教室の頃

昭和53年入局　**橋本　省**

私が入局したのは昭和53年で、河本教授時代の丁度中間くらいであった。病室は4グループ制で髙坂、綿貫、草刈、沖津の各先生がオーベン、また外来は古和田先生がオーベンだった。沖津先生と古和田先生は半年毎に外来と病室を交替していたように記憶している。私は髙坂グループに配属になったが、毎日が無我夢中であまり良く覚えていない。1ヶ月くらい経った頃だろうか、病室に問題が無く、手術日でもなかったので、早々と6時頃に帰ろうと研究棟8階のホールでエレベーターを待っていたところ、河本教授と鉢合わせした。まずい！と心の中でつぶやいたところ、「どう、やっぱり疲れる？」と声をかけて下さった。普通なら、新人は残って勉強しなければならないところを、叱りもせずに見逃していただいたのを鮮明に覚えている。

新人の頃は手術をしたいものである。特に第1例はどんな症例でも嬉しいし、緊張する。ある日、同年入局の大山先生がアデノトミーを第1例として執刀した。当然、私も、と心ははやったが如何せん症例がない。それを見通した髙坂先生は病棟でのベッドサイドの気管切開を執刀させて下さった。確か第1内科の患者だったと思うが、無事、開窓しカニューレを入れた時の感動は忘れていない。

手術の執刀者はすべて教授が決定する習わしだった。もちろん、アナログの時代で、前日に手術申込書の執刀者欄に教授が誰の名前を書かれるかは時にドキドキして見守った記憶がある。初期研修を終わった入局4年目の中頃だったが、拡大上顎全摘の症例があった。いつものように術前日の朝、手術申込書に河本教授が記入されるのを見ていて驚いた。執刀者欄に私の名前が記入されたのである。その夜は酒も飲まずに解剖書と手術書をじっくりと勉強した。翌朝、緊張して手術台に向かい、オーベンの古和田先生の「そうじゃない」「よーしよし」の声に導かれ、術を終えた時はドッと疲れが出たが、それよりも達成感の方が優って、夜まで緊張していた気がする。何より、そんな若い者に執刀させて下さった河本先生の度量には感謝するばかりだった。

当時は教室の研究は電顕形態学と電気生理学が主流だった。私は漠然と草刈先生がキャップの電気生理をやろうかと考えていたが、初期研修が終了する頃に髙坂先生に電顕をするよう指示された。帰局後、佐藤雅弘、新川両先生に手ほどきを受け、内耳の微細構造を研究することになった。電顕は結構根気のいる仕事だったが、案外自分には合っていたのかも知れない。内耳有毛細胞の構造は実に興味深く、次第にのめり込んでいった。その頃、髙坂先生は超高圧電顕を使って蝸牛有毛細胞を研究しており、その結果を持って米国のARO Midwinter Meetingに出席することとなり、私も新川先生と一緒に鞄持ちとして同行させてもらうこととなった。当時、北大助教授の田中先生も一緒にフロリダ州St. Petersberg Beachに着き、学会に出ると、論文でしか知らないbig nameの先生方が大勢出席していた。学会で後のBossとなるRobert Kimura先生とお会いし、その後、西条先生が留学していたBostonを訪問したことが、私の人生を方向付ける大きな出来事になったのは言うまでもない。

一方、医局生活は楽しいことが多かった。夜はよく国分町に繰り出し、病棟の看護婦さんとも飲みに行った。時には夜11時頃になって、準夜勤

と深夜勤が交替になる頃に病棟に誘いの電話を入れ、朝3時頃まで準夜明けの人たちと飲んだこともあった。とにかく、秘書さんや看護婦さんたちとは仲が良かったと思う。

当時は博士号を取ると関連病院に赴任することが多かった。小野寺先生が公済病院に赴任することになり、お別れ会としてラリーをすることになった。佐藤雅弘先生がコースを設定し、医師がドライバー、秘書さんか看護婦さんがナビゲーターとなり、途中迷ったりしながら岩手県の湯田温泉にゴールした。夜は当然遅くまで飲み明かし、翌朝、酒が抜けるのを待って帰ってきたのも懐かしい思い出である。温泉では面白いこともあったが、ここでは書かないでおく。

考えて見ると、私の河本教室時代は楽しいことばかりだったような気がするが、それも若い時代の気楽さ故だったのかもしれない。

百周年に寄せて

昭和54年入局　**稲村　直樹**

東北大学耳鼻咽喉科学教室開講100周年、誠におめでとうございます。

私が東京医科大学を卒業し医局に入局させて頂いたのは、昭和54年の事であり、以来既に36年がたとうとしています。私と同じ年に入局したのは、花島隆敏先生・原　晃先生・遠藤里見先生といった錚々たる面々であり、他大学から入局した私としては、終始圧倒させられる事ばかりでした。また、一学年上には大山健二先生・橋本　省先生がおられ、ますます自分の存在が小さく感じたのを覚えております。しかしながら、いずれの先生方も大変野心家でいらっしゃる割には、右も左もわからない私に色々教えてくれ、夜になると国分町大学に頻繁にお誘いいただき、貴重なお話・体験談・医局の裏話などで大変盛り上がったのが、昨日の如く甦って参ります。いずれにしろ、当時私が強く感じた事は、東北大の医局は臨床から基礎研究にわたり、幅広く御活躍なさっている先生方が沢山いらっしゃったという事です。つまり、こんな私にとっては自分よりも何倍も優秀な先生方と共に切磋琢磨しつつ、自分の能力を高めていける格好の場所であると感じたしだいです。入局当時は、河本和友先生が教室を主宰しており、私が感じたのは先生は恐らく、文武両道の医者を育成する事をお考えになっていたのではないかという事であります。最初は臨床を中心に沢山の症例を経験する事を優先し、4年の研修の後半には徐々に基礎研究にも足を踏み入れるきっかけを与えてくださる様な、個々の研修医に合ったプログラムを考えて下さっているのだなあと当時は強く感じておりました。実際にこの事を痛感しましたのは東北連合学会などの各種学会の時でありました。学会終了後の懇親会の席で、よく他大学の同年代に近い先生方と懇談する機会が有りました。その時感じたのは、まず臨床においては我々の方がより多くの症例を経験し、多くの種類の手術を実際自分一人でプランニングし行っている事、また基礎研究においても既に同時進行的に進め、既に全国学会にて発表している事などであり、他大学の先生方にとって当時は東北大だから出来る事なのだと思っていたように感じ取れました。その後、私は以上に述べたような東北大の医局の幅広く柔軟な教育方針のお陰をもちまして、入局7年目にて当時の草刈　潤先生の御指導のもとで、無事に博士論文を提出する事が出来ました。今から思えば、大学院に入るという選択肢もあるかとは思いますが、私の経験からみれば、9時～5時まで臨床に集中し、その後基礎研究を行っても十二分に文武両道の耳鼻科医を育てられるのではないかと信じております。しかしながら、それを可能にしてきたのは、有能な諸先輩方が作り上げてきた百年にわたる歴史と実績そして良好な教育環境が有ればこそと言えるのかと思います。

髙坂先生が教室を主宰する頃、私は関連病院での臨床修練そして帰局して後輩の指導をするという耳鼻科医としての実績を積み重ねる医局生活を

おくっておりました。そうしているうちに、当時の草刈　潤先生より内耳の電気生理学を修練するための米国留学のお話を頂き、2年3カ月間ワシントン大学にて基礎研究に没頭する事が出来ました。そしてその米国の地においても、東北大学耳鼻科の諸先輩の作り上げた輝かしい膨大な実績を知ることになりました。当時私は大変なプレッシャーを感じながら、今までの伝統を汚すことなく実績を残すべく、連日連夜ひたすら実験に励みました。結果的に約2年間の米国生活で4本の論文を仕上げる事が出来、今から思えば本当に良い思い出でありますし、よく頑張れたなあと懐かしく思う次第です。帰国後は高坂先生のもとで、臨床はアレルギー性鼻炎、頭頸部腫瘍、そして基礎研究はOAEとアレルギーをテーマに沢山の仕事を行なわせて頂きました。また、助手、講師、医局長と歴任させていただき、医師としてだけではなく人としても色々な経験をさせていただきました。

これまでのことは、一重に河本・高坂・草刈（潤）先生のお陰である事は言うまでも有りませんが、加えて東北大学の百年の伝統に帰するものである事は言うまでもない事と思います。

最後に、現在私は名取市に開業し、早19年を迎えようとしております。その間ほぼ順調に仕事を続ける事が出来た事は、東北大の医局で教育を受けた事や沢山の実績を積ませていただいた事によると思っております。従いまして、この度百周年を迎えた東北大学耳鼻咽喉科学教室には、心より感謝するとともに再度おめでとうございますと述べ、締めくくりたいと思います。

河本教室を振り返って

昭和56年入局　**朴澤　孝治**

昭和56年、河本和友教授が主催する東北大学耳鼻咽喉科学教室に入局しました。河本先生は、滲出性中耳炎が、まだ日本で十分に知られていない頃に、宿題報告のテーマとして取り上げられました。1985年京都で開かれた国際中耳炎シンポジウムでは、教室より多くの発表があり、英語のProceedingsとともに医学教育出版社より「The latest Medical Book 滲出性中耳炎」が出版されました。河本先生は、あまり声を荒げられることはなく、研究や、臨床で悩んでいると、そっとメールボックスに参考となる論文を入れて頂くなど、暖かく医局員をご指導されました。河本先生の下では、高坂助教授、綿貫講師、草刈講師、古和田講師が学内で指導にあたられていました。若手医師は高坂先生の形態グループか、草刈先生の電気部屋に所属し毎晩夜遅くまで競うように研究をしたものでした。綿貫先生は内耳の組織化学でワールドフェイマスの名をほしいままにされていましたし、古和田先生は中耳炎のお仕事をされる傍ら漢方医学の耳鼻咽喉科への導入に力を注がれていました。河本先生の時代の研究成果は、Acta Oto-Laryngologica supplement435として1987年に出版されましたが、19編の論文が収録され、142ページに及ぶものでした。

学外では、国立仙台病院に高橋、荒井先生がいらっしゃり咽頭疾患の他、頭頸部外科の先駆けをされていました。磐城共立病院の櫻井先生は、難治な疾患もたちどころに治される臨床の力に、研修医は驚きと共に深い敬意を払っていました。労災病院の湯浅先生は真珠腫をはじめとする中耳手術に腕をふるわれ、臨床のみならず、基礎研究にも成果を上げられました。NTT東北病院の沖津卓二先生はオージオロジーの権威であり、ティン

パノグラムの本も出版されました。東北公済病院の小野寺先生は、当時研修医が最初に教えを請う先生でしたが、東北公済病院を東北の鼻の手術のメッカにされました。

このような素晴らしい先生の下、医局員は、学内外を問わず、臨床に研究に励むことが出来ました。評価の高い研究業績を上げた若手には、同窓会総会で河本賞が授与されました。現在は同窓会奨学賞として継続されています。一方、これまでの広く耳鼻咽喉科一般をカバーする教育から、欧米式に中耳、めまい、聴覚、鼻、アレルギー、頭頸部外科といったスペシャリストを育成する教育方針に変わったのも、河本先生の教室からで、関連病院をローテート研修する教育システムの構築にもご尽力されました。海外留学もさかんで、その後教授に就任し日本の耳鼻咽喉科をリードする先生がきら星のようにいらっしゃり、医局内でのディスカッションもさかんでした。一方、泊まりがけの忘年会、焼き肉パーティーの納会など医局行事もさかんで、河本先生のお人柄により和気藹々とした医局でした。

河本先生は教室を巣立たれ、ご開業された先生への生涯教育にも力をいれられました。最新の耳鼻咽喉科や、境界領域の知識を吸収する機会として、金子豊先生を中心に定例の「金曜会」を開催する他、「臨床懇話会」も先生が初められた講演会でした。学会では遠い存在の他大学の教授をお招きし、身近にじっくりお話を伺う事ができました。大学のスタッフは勿論、若手、勤務医、開業医の先生よりも大変鋭い質問が山のように出るので、「仙台に呼ばれた時は大変緊張した」と、あるご高名な先生からお聞きしました。このような活発な活動を記録として残そうとして河本先生が刊行されたのが、「宮城耳鼻会報」です。

河本先生が、現在もお元気で、お目にかかるといつもながらの優しいお声がけを頂き、又折につけ貴重なアドバイスを書いたお手紙を頂くのは有り難く、又大変嬉しいことです。

髙坂教授時代の思い出

昭和 61 年入局　古川加奈子

東北大学耳鼻咽喉科学教室開講 100 周年記念誌への寄稿の機会をいただけましたこと、大変嬉しく感謝申し上げます。

1984 年耳鼻咽喉科臨床修練で、私は助教授だった髙坂先生のグループ（花島先生、谷口先生、高橋邦明先生がいらっしゃいました）に入りました。髙坂先生が耳鼻咽喉科の守備範囲の広さと感覚器を扱うことの重要性についてとても熱心に教えてくださったことは、私が耳鼻咽喉科を志す大きなきっかけになりました。

1986 年 5 月、大井聖幸先生、大島猛史先生、綿谷秀弥先生、鈴木直弘先生とともに入局しました。私たちは髙坂先生が教授になられて最初の新入局者で、みな元気が良くて個性的でしたので、髙坂先生が大層喜んでくださったと記憶しています。人生経験豊かな大井先生と真っ黒に日焼けして現れた鈴木先生はともにリーダーシップがあり、のちに東北大学准教授から日本大学教授となった大島先生は入局当時からブレインでした。野球部出身の綿谷先生は早速医局野球の朝練担当になり、私も準備運動やキャッチボールに参加し、間もなく朝食係としておにぎりやサンドイッチの買い出しに自転車でコンビニをはしごしました。診療前にも拘らず多くの先生方が参加して部活さながらでした。

病棟では草刈先生、小林先生、新川先生がグループを率いていらっしゃいました。私が配属になった新川グループは結成後日が浅く当時大学院生の朴澤先生と二人体制だったそうで、即戦力になれるよう必死でした。三浦婦長さんをはじめ大ベテランの方々がそろっていた時代で、その迫力に圧倒される日々でした。末武先生の当直見習いをした時は急患の患者さんが多く大変勉強になりましたし、子育てしながら男性医師と対等に仕事をしている姿に憧れたものです。何もできない新人医師たちにひとつひとつ教えてくださった先生方と看護スタッフのみなさまに改めて感謝申し上げます。

2 年目以降は仙台赤十字病院で神林先生に、磐城共立病院で櫻井先生、大学からいらした橋本先生と大山先生、後期研修医の馬場先生と多田先生にご指導いただき、数々の失敗と反省を繰り返しながら臨床を学んでいきました。仙台赤十字病院のテニスコートで休日に神林先生、小林先生、八木沼先生と一緒にプレーしたこともありました。磐城共立病院は地域の中核病院であらゆる急患患者が搬送され、外科系当直の初期対応は研修医一人が行っておりましたので、迅速な判断が要求され貴重な経験となりました。

初期研修を終えて一度大学に戻り、朴澤先生の鼻科学会でのシンポジウムに関連する実験を手伝う形で、モルモットの感作や還流固定、免疫組織学的手法などを学ぶ機会をいただきました。川瀬先生と菊地先生が発表される ARO に同行させていただき、早朝にちょっと緊張しながら髙坂先生とジョギングをしたことも懐かしい思い出です。

私たちの代から毎年二人ずつ初期研修終了後大学院に進学して研究に専念するようになり、大学の特殊外来（難聴、神経耳科、中耳、滲中、アレルギー、鼻副鼻腔、喉頭、頭頸部術後）が充実し、県内外の関連病院が拡充された時期でもありました。「耳鼻科では男女平等、医局と仙台市内は同じだ」と研究する時間を作って学位を取るようにとの髙坂先生の言葉もあり、臨床と研究の両立が推進されました。そしてこの頃医局長の柴原先生の元には相談に訪れるものが相次いでいたという覚えもあります。

これまで数多くの患者さんに出会いましたが、最も印象に残っているのは荒井先生の元で後期研修を行った NTT 東北病院での、真珠腫性中耳炎

からBezold膿瘍を形成した男性です。小林先生に手術に来ていただき良好な経過となりましたが、乳様突起を削開した途端に大量の膿汁が流れ出た光景は今でも目に焼きついています。

私自身は耳鼻咽喉科医として間もなく30年目を迎えますが、100年という長い歴史の中で、すばらしい先輩後輩の先生方に巡り会い今日まで研鑽を積むことができました。東北大学耳鼻咽喉科学教室のますますの発展を祈念しております。

頭頸部グループ創世記
～髙坂教授時代の物語～

平成2年入局　**松浦　一登**

時は平成元年、医学部6年生であった私は未開の外科領域である「頭蓋底外科」に興味を持っていた。医学部スキー部の先輩である香取先生（当時は労災病院研修医・現教授）には熱心にお誘いを受け、部長の髙坂教授からは「頭頸部外科をやるなら東北大だ。」との言葉を頂き、意を決し耳鼻科医局の扉をノックした。

しかし、当時の大学には頭頸部グループはなく、3つのチームがそれぞれ耳・鼻・腫瘍など全てを扱っていた。時を経て平成4年、ついに「頭頸部G」が教授の肝いりで立ち上がった。初期メンバーには鈴木守先生、小池修治先生、大井聖幸先生、佐竹順一先生などが出入りされ、その末席に加えてもらった。何だか怪しげなメンバーで梁山泊みたいな感じであった。手術も今と異なり、有茎皮弁での再建を自科で行っていたため、終了時には皆ヘトヘトであった。グループ活動を開始してしばらくの間、術後夜遅くの医局に戻ると教授室に灯りがついており、我々が揃うと髙坂教授が「無事終わったのか。じゃあ。」と言って帰っていかれた。労をねぎらって下さっていたのである。

大学であったため、鈴木先生を中心に研究も行っていた。接着因子であるインテグリンファミリーの局在と腫瘍の悪性度を検討する仕事だったと記憶している。そんなある日、頭頸部腫瘍学会（今の頭頸部癌学会）において、ある先生から「へえ、東北大は癌もやっていたの？　耳は有名だけど…」という強烈な一撃を喰らった。この時から、日本一の頭頸部がん治療施設へ行って勉強したいと考えるようになった。その後、髙坂教授の采配により国立がんセンター東病院（千葉県柏市）でのレジデント研修（通常3年）を行うこととなった。そこで行われていた癌医療は目を見張るものであり、まるで自分が浦島太郎のような気持ちにさせられた。2年過ぎた時に医局に戻されることとなり、残留を強く願ったものの、「1日たりとも帰局が遅れたらクビだ!」との言葉に後ろ髪を引かれる思いで帰仙した。

帰局後は、仕入れた知識や技量を医局に還元すべく環境整備に努めた。

当時はチーム医療という概念がなかったが、頭頸部癌治療では形成外科との合同手術が不可欠となっていた。東大形成外科より山田助教授（後の東北大形成外科初代教授）が着任されており、早速、形成外科との合同カンファを立ち上げ、症例検討と共に遊離再建手術を常態化させた。しかし、当時の東北大病院手術部には複数科合同で一人の患者を日常的に手術する経験が無く、麻酔科や手術部スタッフに随分と迷惑をかけた。当時の師長から呼び出しをくらい、「今後ずっとこうした合同手術を行うのですか。」と問われ「行います。」と答えたところ、彼女は「判りました。手術室の体制を整えます。」と即答された。今でもその言葉に感謝している。タコつぼ型であった大学病院の手術場の運用が近代化された瞬間だったと自負している。

また、重複癌検索の為、当時の第3内科にスクリーニングを依頼したところ、「大学は検診施設ではない!」とひどく怒られた。しかし、半年すると続々と早期食道癌が見つかるようになり、彼らも驚愕してその後はルーチンワークとして検査を組んでくれるようになった。更にはその評判を聞いて第2外科からは、食道癌患者での頭頸部領

域の重複癌検索を求められるようになった。

このように、我々の頭頸部がん治療のシステム構築は東北大学病院におけるチーム医療の先駆けになったのではないかと思っている。

現在、大学や宮城県立がんセンター、仙台医療センターのスタッフを含めると、頭頸部Gの総数は10人ぐらいになるだろう。今では教室の一翼を担い、日本の頭頸部癌治療において注目を集めるようになった。その歴史は四半世紀前の髙坂教授時代に種が蒔かれ、芽吹いたことが始まりであったことをご記憶願いたい。

耳鼻科医になった理由

平成3年入局　入間田美保子

湯浅（涼）先生の軽い誘いに乗って、十年余の麻酔科のキャリアを捨て一から耳鼻科医を目指したのは、平成3年の5月のことでした。

耳鼻科の手術に興味があったわけでもなく、なにより自分に耳鼻科の適性があるとはさらさら思えず、保育園児2人を抱えて何で今さら耳鼻科をやるなんて言ったのかと、自分の無鉄砲さを悔やんでも後の祭りでした。

あまりに不安で、モンローもダイアナも37歳で死んだ、と年齢以外の共通点も脈絡もないことを考え半分やけっぱちで、気が付くと湯浅先生につれられ、8階の耳鼻咽喉科学教室の教授室で緊張して髙坂先生にご挨拶をしていました。

当時の髙坂先生は総会の宿題報告を成功の裡に終わらせたばかりで、テレビ番組にも出演され、みるからに自信にあふれ、優しい言葉にも力強さがみなぎっていました。

教室も総会の興奮の余韻が残っており、秀才ばかりの集団にすっかり圧倒される思いでした。助教授だった小林先生をはじめ、橋本先生、大山先生、稲村先生、池田先生、朴澤先生などなど、きら星のように頭脳明晰な先生たちが大勢おられ、カンファランスのたびに目もくらむ思いでした。大山先生などは同い年なのにすでに白髪も混じり老成した学者のようで、学問の厳しさを感じさせ（今にすれば私の妄想だったかも）、少し話をするだけで畏怖の念を覚えました。その後労災病院でこんなに長く仕事を一緒にさせていただくとは思ってもみませんでした。

もともと話すのが苦手で麻酔科を選んだ私は、麻酔科と耳鼻科の感覚の違いに度を失い、頭の良い先生たちがすごいスピードで会話し仕事をこなすさまを見て、ほとんど金縛りの状態になっていました。この時救われたのは、同期で入局した6人の男子（下村、洲崎、館田、千葉、中塚、横山、各先生方）が、そろいもそろって体育会系で、わかりやすくて熱意があり、時々ばかばかしく、大学の医局にいた半年間は私のもう一度の青春だと思うことができました。本当に感謝。

その後、労災病院での勤めも長くなった平成13年の日曜日に、当時の小林教授から「耳鼻科でもベテランになったから独り立ちして逓信病院にいかない？」とお電話があり、考える間もなく、逓信病院で働くことになりました。その時には髙坂先生が院長でおられ、一人だけでやっていけるかという私の不安は杞憂でした。

髙坂先生は私をのびのびと働かせてくれ、認めてくれているのもわかりました。手術の鈎引きなども気楽にしていただいたばかりではなく、大変な時や失敗した時には励ましてくれ、私が突っかかっていった時も真面目に受け止めていただいたと思います。

仕事のことだけではなく人生は楽しまなくてはということも教わりました。音楽や、美しいヨーロッパの旅のお話など、受験生を抱えていた私には夢のような話でしたが、いつかはと思い描いたものです。おいしいお酒もたくさんごちそうになり、先生もリラックスされて「あの時はほんとにつらかった。」など本音を漏らさることもありました。その本音からは髙坂先生が熱いだけではなく、教授時代に受けた印象よりはるかに冷静な観察力をお持ちになっていたことを知りました。

今回教室100年の中の髙坂教授時代の思い出を

振り返ってみて、私が耳鼻科医になったのは、労災病院の手術室からも垣間見えた当時の教室のきらきらした輝きに惹かれたからだと思いました。

髙坂教室の思い出

平成5年入局　**日高　浩史**

長い教室・医局の歴史の中で、私が所属している期間は僅か22年ほどに過ぎません。その中の最初の7年間は、髙坂教授の時代でした。入局させて頂いた平成5年頃は、髙坂教室は宿題報告の直後で佳境に入った時期でした。私は、髙坂教授から学位（プラス結婚式の仲人）を頂いた最後の世代に属しますので、その頃の事情を記載する機会を与えて頂いたのかもしれません。

当時の教室は、髙坂知節教授を筆頭に小林俊光助教授、稲村直樹医局長、池田勝久講師、朴澤孝治講師という錚々たる布陣で、まさに飛ぶ鳥を落とすが如き勢いのある教室でした。諸先輩方が日々、耳鼻咽喉科の“梁山泊”の如く精力的に活動されている様に見えました。

学生時代に産婦人科と耳鼻咽喉科のどちらにするか、漠然としか考えてなかった私ですが、両科とも卒業試験に落ちて追試験を受けたことと、両医局ともに医学部三号館の8階にあることが共通していました。そうこうしているうちに、医局説明会が産婦人科より先に行われた耳鼻科に参加したところ、二次会のバーで髙坂教授が、

「君が耳鼻科を選んだなら、俺が一人前の耳鼻科医にしてみせる」

と確信をもっておっしゃった記憶があります。

そんなこともあり、医学部3号館8階のエレベータを降りて左側に曲がることになりました。初期研修の間は、小林グループで中耳手術、さらに臨床から疑問点を見出していくことの面白さ、山形市立病院済生館の遠藤里見先生の下で耳鼻咽喉科の奥と懐の深さ、手術の魅力を学ぶ機会を与えて頂きました。

初期研修の後、医局に戻った私は髙坂教授から聴覚、特に当時、東北大学電気通信研究所の曽根教授、鈴木助教授らと共同開発した狭帯域ライドネス補償型デジタル補聴器（CLAIDHA）の臨床評価に取り組む様に指示されました。実は、その当時、私は不遜にも『折角、大学院にいくのであれば、むしろもっと基礎的な研究もやってみたい』という漠然とした希望もあったような気がします。しかし、内耳の形態学を究められ、数多くの内耳研究を指導された髙坂教授から、

「我々臨床医は、これからは基礎的な研究以上に臨床で研究し、新しい事を打ち出していくことが大切だ」

と説かれたのが印象に残ります。それも教室の中でのお話しではなく、宴会の3次会くらいで蕎麦と日本酒をサシで酌み交わしながら、膝をたたかれながらお話しを伺ったような気がします。すでに私は酩酊状態にあり、いろいろ駄々をこねたのかもしれません。しかし、髙坂教授は父親の如く諭し、取り組んでゆくテーマの魅力をご自身、並びに教室の歴史を鑑みて語られたような気がします。

それから約20年経過した現在、我国の臨床研究の立ち遅れと発展が課題に挙げられ、NatureやScienceよりも（別にSTAP細胞の件があったからではありません）、Lancetや New England Journalに挑戦していくことが叫ばれています。髙坂教授は、既に時代の先を見つめておられたのかもしれません。

先生は、私の希望をお聞きくださり、デジタル補聴器の臨床評価・聴覚心理の研究【指導教官：川瀬哲明講師（当時）】と、内耳血管条の分子生物学的研究【指導教官：池田勝久講師と大島猛史助手（当時）】の両方を行うよう、指導を頂きました。そして私の大学院生活は、朝にPCRの機械を回し始め、日中は爺さん婆さんの補聴器を調整して臨床評価を行い、夜は朝の検体の回収と解析といった生活で始まった記憶があります。

今にして思えば、あの当時に前向きの臨床試験、しかも東北大学電気通信研究所との共同研究

の結晶である“世界初のデジタル補聴器の評価”に携わる機会を与えて頂いたことに感謝したいと思います。せめてもの恩返しの一つは、まだ教室から掲載されたことのない Lancet や New England Journal に臨床研究を掲載することかもしれません。しかし先日、前者への 3 回目の挑戦で門前払いを食らったばかりで、なかなか叶えられることではなく、一生かけても実現困難な挑戦事項なのかもしれません。

教室の流れからみれば、出来の悪い末っ子の如き不肖の弟子にも、耳鼻咽喉科の魅力・研究の醍醐味と魔力（?）を提示頂いた偉大なる Professor Takasaka の教室で医師としてのスタートを始められたことに感謝し、次世代に僅かでも伝承して恩返しができればと願う今日此頃です。

100 周年記念誌に寄せて
髙坂知節教授時代の思い出

平成 8 年入局　**山内　大輔**

私が入局したのは 1996 年（平成 8 年）のことですので、髙坂知節教授が 2000 年（平成 12 年）にご退官されるまでの 4 年間ご指導頂きました。4 年間というのは短いですけれども、私にとっては卒後何もわからないまま右往左往していた学生あがりを暖かく受け入れて下さり、特に臨床医としての基礎、心構えみたいなものを教えていただいた大事な時期でありました。

入局当時は丁度、小林俊光教授が長崎大学へご栄転されたころで、橋本省先生、池田勝久先生、朴澤孝治先生の 3 グループが交代で手術と外来を担っていました。同期は工藤先生で、最初は私が朴澤グループに、工藤先生は池田グループに配属されました。当時の総回診は、まず病棟のカルテ、写真類を医局まで運び、医局で入院患者の症例提示、方針の確認などが行われ、その後病棟回診をするといった流れでした。病棟回診は髙坂教授と耳鼻科医師全員が患者さんのベッドサイドまで足を運び、額帯電灯にて診察をするといったスタイルでした。特に間接喉頭鏡は、曇り止めのためにアルコールランプで温めて使用されていた御姿を今も覚えております。一人一人の患者さんを丁寧に診察する姿勢を教えていただきました。

また、私の最初の地方部会での発表は喉頭癌の KTP レーザー治療の報告で、朴澤先生にご指導頂きました。当時はスライドをパソコンで作成したら、フィルムカメラで 1 枚 1 枚撮影して、これを大学向かいの吉田カメラにスライド現像を注文するといった手間のかかる作業でした。今のようにパソコンで発表直前まで編集できたりはせず、誤りなどがあると再度同様の撮影、現像の作業が必要で、学会発表までに間に合わせる事が大変でした。朴澤先生に直前までスライドを確認して頂き、何とか無事に発表することができました。

医局の雰囲気も当時は人数も多かったためでもありますが、日夜臨床と研究、そして行事も多かったように思います。教室員会の野球大会や、弘前大との対抗戦など“マレウス”としての活動、打ち上げも楽しい思い出です。あまり野球が得意でなくても、とりあえず新人は全員ユニホームを購入して、背番号をいただきました。そのころの髙坂教授は“監督”としてベンチから見守っていただいており、選手は程よい緊張感のなかプレイしておりました。

夏には上田成久先生が企画され、当時の比較的若手の先生と秘書さんで、新潟県村上市の笹川流れに宿泊旅行に行きました。ワゴンのレンタカー 2 台で、新人の私と工藤先生が運転して向かいました。長井からは中野浩先生が病院の秘書さんを連れて参加され、華やかに海水浴、花火などを楽しみました。先輩の先生からは手術や勉強ばかりでなく、いろいろと遊びも教えていただける部活のような雰囲気が、当時の医局であったように思います。

半年の大学生活の後、石巻赤十字病院の石垣元章先生のもとで研修させて頂けることになりました。当時は古い建物でしたが、海、川沿いにあり、震災の津波が届く場所にあったと思います。

研修医でしたのでなかなか仙台までは行けず、忘年会の芸の打ち合わせのために同期の看護師さん3人くらいが泊りがけで石巻まで来ていただいたこともありました。忘年会は泊りがけで松島大観荘にて行われましたが、毎年新人の医師と看護師は、練りに練った宴会芸を1時間近くかけて披露するというのが伝統でした。大学だけでなく、各関連病院の科長先生、病棟や外来看護師もこの日を楽しみにしてお集まりいただきました。

2年目の秋に山形市立病院済生館に異動になり、志賀伸之先生、綿谷先生、上田先生にご指導いただきました。山形は高坂教授のご実家でもあり、私のマンションの向かいには高坂耳鼻科の診療所がありました。一度、耳下腺腫瘍の手術にお越しくださり、夜には遠藤里見先生とともに七日町で食事会をし、楽しい時を過ごしました。その際に、私は鉤引きしていただけなのですが、“成長した”とお褒め頂いて、遠く関連病院にいても見守っていただいているようで、大変うれしく思ったのでした。

開講100周年に寄せて

平成9年入局　**湯浅　有**

東北大学耳鼻咽喉頭頸部外科学講座開講100周年、本当におめでとうございます。一言で100年と言ってもその歴史は深く、そして私がそこで経験させていただいた年月というのは、そのほんのわずかな一部でしかありません。私は高坂知節先生の教授時代に3年目の耳鼻咽喉科医として仙台に帰ってきましたが、実際に高坂先生のもとで臨床を経験したことがほとんどありません。東北大学大学院に社会人大学生として現職の仙台・中耳サージセンターに勤務しつつ研究を行っていたことが理由であり、それゆえ実際には当時の医局の詳細をあまりよく把握しておりませんでした。しかしながら、高坂先生はじめ研究のご指導を賜りました川瀬哲明先生、そして当時大学院生でありました諸先生方のご高配、ご指導ご鞭撻のおかげで、ともすれば孤立してしまいがちな立場の私を温かく見守って下さり、医局の先生方とは本当に親密にさせていただきました。私の医師としての基礎は、もちろん母校である弘前大学の研修医時代にも作られつつありましたが、やはり東北大での経験が大きく影響していることは間違いありません。

さて、私が東北大に来て最初に感じたのは、医局員の先生方の学問的探求心の高さでありました。もちろん弘前大学にも当時教授であられました新川秀一先生をはじめ、宇佐美真一先生、松原篤先生そして私の1学年先輩でありました工穣先生等々、学術的な仕事を積極的にこなす先生方がおり大きな成果を挙げていらっしゃいましたが、それが弘前大学医局の一部の流れであったことは否めません。しかし当時の東北大の医局には、高坂先生の理念の一つでありました大学の役割としての学術的基礎的研究の発展を目指す気概が満ちあふれており、それが医局のメインストリームであった感があります。川瀬先生や池田勝久先生の基礎研究に対する姿勢は、弘前から帰ってきた私にとって新たな刺激でありました。一方臨床でも、週1回の医局のカンファレンスに参加し、大学病院での耳鼻咽喉科領域での最先端の治療の勉強する機会を与えていただきましたし、橋本省先生や朴澤孝治先生、松浦一登先生などの診断治療技術の高さにはいつも感服しておりました。これは中耳以外の臨床経験が極めて少ない私にとって、大変貴重な時間でありました。さらに、高坂先生のご許可をいただき、須納瀬弘先生と共にイタリアの頭蓋底手術の巨匠であるマリオサンナ先生の施設に6か月間留学させていただいたことも大きなイベントでした。もちろんサンナ先生の手術を勉強できたことも素晴らしい経験でしたが、それ以上に半年間の須納瀬先生との滞在が、それ以降の自分の医療、医学に対する考え方に大きな影響を与えた気がします。臨床を行う上でも科学的なエビデンスは必要でありその積み重ねによって医療は発展します。当たり前の話ではありま

がそれを改めて肝に銘じる機会を与えていただきました。その他、諸先生方には仕事だけではなくレクリエーションでも色々とお世話になりました。医局の忘年会で新入りとして一芸を披露させていただきましたし、東北連合学会前日の野球ではサードを守り古巣弘前大と対戦もしました。また大学院の先生方と山形の鶴岡に海水浴一泊ツアーに誘っていただくなど、楽しい想い出もたくさんあります。今後も香取幸夫教授のもと東北大学耳鼻咽喉頭頸部外科学講座のさらなる発展を祈念してやみません。

小林教室の想い出

昭和 57 年入局　**川瀬　哲明**

平成 13 年（2001 年）5 月、小林教授が長崎大学より着任され、小林教室がスタートしました。前任の髙坂教授が退職されてから約 1 年の空席期間を経てのご着任でした。以来、ご退職までの 12 年間、前半の 7 年間は、医局長、准教授として、また、後半の 5 年間は主たる所属が医工学研究科に移りましたが、引き続き、耳科学、聴覚医学に関連した臨床、研究を中心にご指導を頂きました。この間、本当に自由で、楽しい環境で勉強をさせていただきました。小林先生のスマートで爽やかなリーダーシップのもとで過ごさせていただいた日々は、私の医局生活の中でも最も思い出深い期間の一つです。

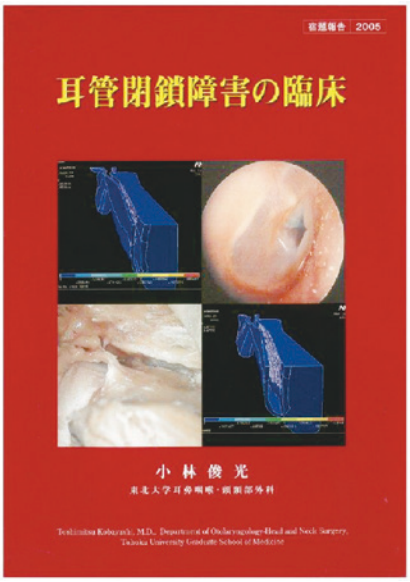


図 1

小林先生は top-notch の臨床家、研究者でいらっしゃると同時に、素晴らしい「教育者」であられました。直接、医局員に指導してくださるときはもちろんのこと、医局内で見せられる姿の一挙手一投足が、医師、人としての模範でした。医局員が何か困難に直面した時にも、「小林先生ならどう判断されるだろうか」、「小林先生ならなんとおっしゃるだろうか」と、多くの若い先生の心のよりどころ、道標になる、敬愛される「師」「Mentor」でありました。

小林先生が、着任されたとき「教育には「理念」が大切だよ」といった内容を医局長としての私にお話しくださったことをよく覚えています。開講 100 年という節目に、改めて、小林先生のもとで、教室に関われたことに誇りを感じる次第です。

さて、写真は小林教室時代の想い出の中からの 2 枚です。

最初の写真は、2005 年大阪での第 106 回日本耳鼻咽喉科学会総会での宿題報告に際し、小林先生がまとめられた耳管開放症に関するモノグラフの表紙です。2001 年にご着任後、2002 年に聴覚医学会、2003 年の頭頸部外科学会、日耳鼻専門医講習会を主催されましたが、そのすぐ後だったでしょうか。一息つく間もなく、宿題報告にむけての医局員一丸となっての取り組みが始まりました。臨床研究、動物実験、疫学調査と、文字通り医局全員で取り組みました。いまでも、モノグラ

図 2

フの中をみると、一日中耳管のことを考えて暮らしていた当時のこと、国内はもちろん、海外からも難治の患者さんが多数受診されていた耳管外来のことが、昨日のことのように思い出されます。

もう一枚は、小林先生のご退職記念の会でのもので、お世話になった弟子が、会場の左右に勢揃いして、「仰げば尊し」を大合唱したときの写真です。医局員の素直な感謝の気持ちが自然な形であらわされた一こまだったと感じています。本当に感激的な時間でした。

先生は御退職後、仙塩利府病院の方で、耳の診療、手術を中心に臨床をお続けになっておられますが、また、同時に今でも後進の指導にもあたっておられます。先生の教室でスタッフの一人として12年間ご一緒させていただいたものとして、先生の育てられた、若い世代の先生方が、頼もしい耳鼻咽喉・頭頸部外科医として、各方面で活躍され、100年の歴史を有する東北大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室が、香取教授のもとで、ますます発展してゆくことを心より期待するものです。

開講100周年に寄せて ― 恩師 小林先生

平成3年入局　**佐藤　利徳**

東北大学耳鼻咽喉科開講100周年おめでとうございます。

私が平成元年自衛隊仙台病院に赴任してから、髙坂先生の御高配により研修登録医という形で週二日耳鼻科教室に通った8年間。その後平成14年から東北大学病院の勤務医として在籍した4年間。合わせて12年間教室で学んだことは、私の人生の宝物です。

小林先生の下では、中耳・耳管を含む耳鼻咽喉科全般に渡る知識を教えて頂きました。

またOAE（耳音響放射）や耳管開放症の研究の際には、小林先生のお陰で医学部他科どころか他学部にも協力を得ることが出来たこと、大変感謝しております。

平成3年と17年の教室の宿題報告で、微力ながら私の研究成果を加えて頂き、大変感謝しております。宿題報告の準備中は、教室員が一致団結し「日本一いや世界一の研究をしているのだ」と言う自負を各自が持てた時期でもあったと思います。その時に集めた基礎、臨床の貴重なデータの多くが東日本大震災で消失したことは誠に残念です。天災は避けようがありませんが、教室員に怪我などが無かったのは幸いです。

小林先生は、一流の臨床家かつ教育者です。更に「ハードルが高ければ高い程、燃える先生」という印象を私は持っています。

例えば、先生が「ヒトでのEP（内リンパ電位）を測ろう」と言い出された時、私は「大変な事だ」と思ってしまいました。聴神経腫瘍を経迷路法で手術するだけでも大変なのですが、EPの測定も大変です（電気生理の経験者なら分かると思います）。誰もやらないのは、大変だと分かっているからでしょう。先生は、ただ闇雲に突き進むのではなく、電気生理の基礎知識を基に卓越した技術があるからこそ、我々をグイグイ引っ張って行かれたのだと思います。学問のための学問ではなく、人々のための学問こそ、先生が追求して来られたものだと思います。

縁もゆかりも無かった仙台という土地に自衛隊の医官として赴任したのをきっかけに、歴史有る東北大学、その中の100年に渡る耳鼻咽喉科教室で、多くの一流の先生方と出会えたことは大変な幸運でした。

小林先生から引き継がれた香取教授の下で、東北大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教室が更に発展されますことを確信しております。

東北大学耳鼻科教室って最高です！
～小林教室の思い出～

平成 10 年入局　**小川　武則**

東北大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室開講 100 周年誠におめでとうございます。2001 年（平成 13 年）5 月から 2013 年（平成 25 年）3 月までの小林教室の思い出を記させていただきます。このような原稿を書こうとすると、“教室ってなんだろう？　医局ってなんだろう?” といった根本的な問題が持ち上がります。私は小林教室で、大学院生活からの学位取得に始まり、日耳鼻専門医、がん治療認定医、頭頸部癌専門医などの各種専門医の取得、そして留学と医師の成長の中での本当に重要な部分で沢山の経験をさせていただきました。でも他の先生方と異なり、耳管研究や側頭骨手術といったメインテーマの思い出話はあまり書けません。大阪の宿題報告はお留守番部隊でしたから。ほとんど個人的な話であることをご容赦ください。メインストリームとは異なる視点からの教室主宰者小林教授、小林教室とは…。

私は、1998 年（平成 10 年）4 月の入局であり、最初の 2 年間で髙坂教授の薫陶を受け、仙台市立病院で沖津部長、鈴木直弘先生の教えを受けました。そして、髙坂教授が退官された翌月の 2000 年（平成 12 年）4 月に大学院 1 年生となりました。「がんをやるなら堀井研でしょ!」と当時助教授の橋本省先生の仲介があり、東北大学分子病理学分野堀井教室での研究生活がほぼ決定し、あとは新教授の号令でスタートできる準備となっていました。その後研究おあずけの 1 年間を過ごしましたが、この間の学会、研究会で華々しいデータを出していた cDNA マイクロアレイ法に惹かれ、“基礎研究では頭頸部癌のマイクロアレイをやってみたいなあ” なんて希望も芽生えていました。“もしかしたら、新教授の意向で別テーマになるかも?” といった漠然とした不安の中、小林教授との初めての挨拶（おそらく医局での飲み会だったような??）で、「がん研究？　OK」と返事ひとつで認めてくださったことが、私の分岐点になっています。2001 年 7 月から大学院研究生活が始まりました。4 年目の臨床復帰までの 2 年 3 か月は基礎研究に没頭する毎日で、なかなかデータも出なく苦しい時も、早朝実験、深夜実験のストレスで目が見えなくなったこともありましたが、昼ご飯時や小林教室恒例の大医局員研究発表会（土曜日一日がかりで国内留学などの大学院生も発表していました）でいつも暖かい励ましの言葉をいただきました。あまりがつがつ論文論文と言われないことも小林教室の特徴で、何のための研究か？臨床応用の可能性は？といった bench-to-bedside、臨床教室における基礎研究の本質を見失わない風土があったと思います。また、医学部奨学賞銀賞をいただいたのが 2011 年。私のつたない研究成果ではなく、小林教授の推薦があったから受賞したといっても過言ではありません。留学生活を許可いただいた 2010 年。震災で大変な中、半年延長の 1 年半の留学をさせていただき、2010 年 10 月から 2012 年 3 月までの貴重な経験となりました。留学前に、「論文書かなくてもいいから見分広めておいで!」と現職助教の給与とともに送り出してもらったことは、他大学の先生から聞いたことがない！とたいそううらやましがられました。

臨床では、頭頸部外科研鑽のために、西條、志賀、松浦先生といった全国的にも高名な先生方を師匠にもてただけでなく、早くから “これからの頭頸部外科医は耳もできなくちゃ！　他手術を知ることが外科医の可能性を広げる” と私のような頭頸部外科志望医に労災病院での研修やイタリアでの研修を勧めてくださいました。これらは実現しませんでしたが、同時に頭蓋底外科研修も勧めて下さり、2008 年から東京医科歯科大岸本教授の手術見学を紹介して下さり、東北大学で頭蓋底手術チームを構築できたことは、私の現在の臨床の柱のひとつになっています。

ざっと今までを振り返ると、最初に書いた “医局って何?” のうち “医局って誰のためにあるの?” といった答えが漠然と浮かんできます。医局は、

主宰者の教授を中心に全国的な仕事をする精鋭軍団みたいな外見があり、それも大きな一面ですが、実は、若手医師を効率よく教育するためにあるのではないか？　言い換えれば、医局内の多くの先生方との関係、ご指導で若手を立派に育てることも医局活動の中心にあるのではないか？といったところです。そうすると小林教授が常々言われていた“仲良くみんなで仕事することがまず大事だよ”といった言葉の本質が少しだけ理解できたようで、私は本当に小林教室の一員で良かったと思っています。

一方で、医局での個人活動は“ご恩と奉公”と古くから言われます。私の小林教室への奉公はホームページ作成（http://www.orl.med.tohoku.ac.jp/index.html）、第111回日耳鼻総会の運営（というかランチ配布で大声出したこと）、レクリエーション活動（野球部や芋煮会）、医局だより編集長（バックナンバーは耳鼻科ホームページで確認できます）など地域で頑張っている先生方からはお叱りを受けそうな恥ずかしいものばかりです。少しでもこれからの後輩指導や医局活動で恩返しできればと思っています。

開講100周年に寄せて
― 小林教室の思い出 ―

平成14年入局　**菊地　俊晶**

東北大学耳鼻咽喉頭頸部外科学教室開講100周年おめでとうございます。同窓の先生方にはいつもお世話になり、ありがとうございます。たくさんのご支援・ご指導をいただきながら、平成26年8月現在、石巻赤十字病院耳鼻咽喉科長を務めております。このたび、開講100周年に寄せての執筆の機会をいただきました。私が入局した平成14年～平成25年までお世話になりました小林教授時代の印象深かった出来事を思い起こしながら書かせていただきます。

～平成14年3月下旬～

3日後に控えたイタリアへの卒業旅行だけを決めて、4月以降の進路を保留していた私に、当時医局長であった川瀬哲明先生から一本の電話がありました（当時は医師国家試験が3月、合格発表が4月下旬、医籍登録が5/15でした）。

「東北大学耳鼻科の川瀬です。進路は決まりましたか？　教授が君に話があるみたいだから一度仙台に来てみませんか？」

（どうして私の電話番号をしっているのだろうか？　そういえば夏休みに2日間見学したとき、教授は不在で、銀河高原ビールを飲みながら連絡先を書いた気がする。卒業旅行は3日後だし行くなら明日しかない）

「では明日伺ってもよろしいでしょうか？」

翌日、医局でびくびくしながら待つ私に紳士が歩み寄ってきました。

「菊地君だね。まってるから。じゃ！」

さわやかな笑顔で私の肩をポンポンと叩き、その一言で誘ってくださいました。私の人生はそこで決まりました。その日のうちに仙台のアパートを契約しました。

2日後、心おきなく18泊20日の卒業旅行に出かけ、そのパートナーと結婚できました。

～平成16年1月教授室にて～

「大学院いかないか」

「はい、わかりました」

「耳管の画像をやってもらう」

（……正直いうと、耳管に興味はないけど3月に結婚するし、院なら異動はなさそうかな）

「はい喜んでさせていただきます」

不純な動機でした。大変申し訳ありませんでした。見透かされたように耳管のテーマをたくさん与えて頂きライフワークとなりました。おかげさまで日本耳科学会に2005年～2014年まで10年連続で演題発表継続中です。発表の度胸だけはついた気がします。

南三陸ホテル観洋より　日の出

～平成 23 年～

3 月に東日本大震災がありました。12 月、復興のために耳管シンポジウムを南三陸でと小林教授に立案いただきました。当初は反対でした。被災地でどのようにふるまったらよいか不安だったからです。

「大丈夫だよ、やろう」「全国の先生に被災地をみてもらうのも復興支援だよ」

小林先生の情熱に後押しされ、成功裡に終えることができました。会場であるホテル観洋の露天風呂からながめる日の出と海の静寂が印象的でした。非常に心に残ったシンポジウムでした。

優柔不断で保守的な自分に小林教授にはいつも道を示していただきました。11 年間ご指導ご鞭撻いただき本当にありがとうございました。

小林教室を振り返って

平成 14 年入局　**宮﨑　浩充**

小林俊光教授のお人柄として、朗らか、情熱的、清廉、無私などが挙がりますでしょうか。弟子の一人として、先生に教えを乞うた日々のことを振り返ってみます。

私は 1999 年に長崎大学を卒業し、そのまま当時小林先生が主催されていた長崎大学耳鼻咽喉科学教室に入局しました。小児科と迷いましたが、耳鼻科講義や臨床実習でふれた先生のお人柄、医局の雰囲気の良さに惹かれて耳鼻科を選びました。同期は私を含めて 6 名でしたが、皆同じような入局理由でした。先生が東北大学から長崎大学に来られたのは 1996 年 1 月で、その翌年からは入局者が飛躍的に増えています。毎年 2 人前後であった入局者が、いきなり毎年 6 名前後となり、医局は毎日大変賑やかでした。

先生が東北大学耳鼻咽喉科第 7 代教授として仙台に戻られることになり、私は先生にお願いして仙台まで追いかけさせていただきました。他大学の先生方にその話をしますと、例外なく大変驚かれます。長崎から遠く離れた、しかもほとんど縁もゆかりもない仙台までついていくというのは、にわかには信じがたいことのようです。決まって、「小林先生はそこまでして追いかけたくなるような先生なのですか?」と尋ねられますが、何度考え直しても、仙台までついてきてよかったと思います。しかし同期や先輩後輩の中には、長崎が地元であるために家の都合で、仙台までお供することを泣く泣くあきらめた方がまだ数名いたことも覚えています。

私は 2002 年に仙台に参りましたが、当時の東北大学は、全国の耳鼻科医の憧れであったと思います。橋本　省先生、池田勝久先生、朴澤孝治先生、川瀬哲明先生、鈴木秀明先生、菊地俊彦先生、志賀清人先生、大島猛史先生、香取幸夫先生、須納瀬　弘先生、鈴木雅明先生、吉田尚弘先生、矢野寿一先生など、本当に錚々たるメンバーです。また一方では小林先生のお人柄に魅かれて、将来が有望な新人が続々と入局していました。2005 年の宿題報告の準備に取り組んでいたこともあると思いますが、当時の医局は連日夜遅くまで大変活気がありました。

また先生は若手の面倒を見るのが大好きで、特に学生への対応は、ご多忙にもかかわらず、医局の誰よりも丁寧で熱心でした。5 年次学生の臨床実習でも、耳鼻科が先駆けて始めた総合病院・開業の先生方の医院での実習が大変好評であり、学生からの評価で耳鼻科は何度か第 1 位となりました。そのようなこともあり、他大学卒業の先生方も含めて、小林教室への入局者が多かったのだろ

うと思います。

私は小林教室では若手～中堅の立場にあり、自分がやりたいことをやり、教室への要望も好きに言っておりましたが、あれこれ言われることもなく、自由な雰囲気で過ごさせていただきました。しかし我々の見えないところでは、先生は特に教室の運営資金などについて日々腐心されていたということを後にお聞きし、ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。小林教室が目指したものは、最終講義でもお話しされておられましたが、「開かれた明るい教室」であり、その姿勢は、朝のミーティング、外来、手術、症例検討会、回診、学会、飲み会などで日々自ら示されておりました。先生の臨床・教育・研究への情熱が、関連病院を含めて教室の隅々まで行き渡り、まさに「開かれた明るい教室」が具現できていたように思います。医師になってからの多くの時間を、仲間と楽しく、小林先生のそばで過ごせたことを大変幸せに感じています。

開講 100 周年に寄せて～長崎大学時代の小林俊光先生との思い出～

平成 14 年入局　**矢野　寿一**

東北大学耳鼻咽喉科学教室開講 100 周年、まことにおめでとうございます。私は東北大学出身ではなく、入局も卒後 9 年目からではありますが、東北大学耳鼻咽喉科学教室の先生方には大変お世話になっており、またとても親しくさせていただき感謝しております。私が東北大学耳鼻咽喉科学教室へ入局するきっかけとなったのは、いうまでもなく小林俊光前教授とのご縁によるものです。

私は長崎大学を平成 6 年に卒業し、長崎大学耳鼻咽喉科学教室に入局いたしました。小林先生は私が卒後 2 年目の時に長崎大学の教授として着任されました。小林先生は今ももちろんお若いのですが、当時はどんなに働かれても疲れを微塵も見せない、まさにスーパーマン的な存在でした。当時の医局員の間では「きっと小林先生の背中には電池を入れるとこがあるんだよ」と、まるでサイボーグのごとく、半分本気で噂されたものでした。

ある日、AT の手術が行われた時のことでした。早朝からの手術でしたが、小林先生は教授室で仕事をされながら、残りのスタッフで手術が始まりました。小林先生は教授室からモニターを御覧になっていて、時々「もっとそっちも削って」なんて天からの声、いえ、的確な御指示が手術室に響いていました。下っ端の私はずっと水かけをしていましたが、なかなか手術がすすまないまま、もう夕方です。「(これは明日まで水かけだ……)」なんて思っていると、夕方遅くになり小林先生がさっそうと手術室に入ってこられました。「(やった～、小林先生来てくれた !!)」まさに救世主です。「ご苦労さん、音楽でも聴きながらやるかい」看護師さんが、術場に唯一置いてあった 1 枚の CD をラジカセに入れました。そして流れてきた音楽はエンヤでした。

「(なんて癒されるんだ～)」と思いつつも、手術はまだ内耳道も開いていないところでした。小林先生の手術ですので、その後あっという間に進んでいったのですが、それでも手術終了は真夜中になります。しかも、エンヤのアルバムは 1 枚だけでしたので、延々とエンヤが繰り返され、引き続き手術の助手をしていた私は意識もうろうとしながら「……またこの曲だ……」。手術後しばらくは、エンヤの曲を聞くと当日の様子を思い出してしまい、エンヤの曲を聴くことができないというトラウマに悩まされたものでした。もちろん、疲れ知らずの小林先生にそんな症状はありません。これが後の世に伝わる「エンヤトラウマ事件」です。

さて、そんなトラウマも忘れかけた夏の頃、私は 4 年目の医師となり、日曜のある日、大学で当直をしていました。医局員も皆帰宅し、急患もなく、とても静かな夜を過ごしていました。当時、インターネットが普及し始めたばかりの頃で、暇に任せて医局でインターネットをしていました。

そして、ちょっとだけ艶やかなページ（本当にちょっとだけ……）を見ていました。すると、医局の奥の方でなにやら物音がし始めます。「(やばっ、誰か来た)」すると「やあ、矢野くん」と、よりによってこんな時に小林教授が近づいて来るのです。素早くパソコンの画面を消そうとしますが、容量の大きな画像をみていたせいか、当時のパソコンはカチャカチャ言うばかりで、なかなか消えてくれません。小林先生に画面を見られないうちに去ってもらわねばならない状況で、小林先生は私に言うのでした。「矢野くん、来年大学院に行かない？　感染症を勉強して欲しいと思ってるんだ。よかったら北里大学の微生物学教室に国内留学しないかい？」幸い、パソコン越しにお話しをいただいたので、今のところ画面をみられていません。「早くこの画像消えてくれ～」小林先生との話も早く切り上げなければ大変危険です。その思いばかりが先行し、大学院ということを深く考えることもなく即答したのでした。「はい、是非行かせてください。」これが後の世に伝わる「大学院、婉美画像事件」です。

そう言うわけで大学院に行くことが決まり、そんな秋のある日、大学院入試の面接です。「まあ、落ちることはないはずだ」と自らの不安をかき消すがごとく、強気で面接試験に臨みました。試験官は3人いました。そして、そのうちの1人が耳鼻科の助教授であられたS先生でした。「(ラッキー、うまく取りまとめて下さいね。)」そんな視線を送りつつ、いくつかの質疑応答もすすみ、無難に受け答えをしていましたが、ある先生からこんな質問を受けました。「君は耳鼻科医だが、耳鼻科出身でノーベル賞をとった人物は誰だね。」「(えっ、そんなの知らん……)」ちらっとS先生の方をみると、「(ちゃんと答えろよ、おれに恥をかかせるなよ)」と、そんな思いが不安そうな顔から伝わってきます。とても助けが来そうな雰囲気ではありません。仕方ないので腹をくくって答えました。「……メニエールです。」S先生の顔がさらに渋い表情へと変わっていったのは言うまでもありません。後の世に伝わる「メニエールノーベル賞事件」です。

さて、あの当時のパソコンが大きな画像もすぐ消えるくらいサクサクであったならば、私は北里大学には行っていなかったかもしれませんし（おそらく行っていたと思いますが)、メニエールノーベル賞事件を起こすくらい知識がなくても大学院に行かせていただいたのはラッキーだったと思います。現在私は、薬剤耐性菌に関する研究を行っていますが、その研究生活はとても楽しいものです。大学院での研究内容が、今現在の私の仕事に直結していることを考えると、人生の分岐点で幸運に恵まれてきたと思います。そして、この道に導いていただいた小林先生には感謝の気持ちで一杯です。

そんな長崎大学時代の小林先生との数ある思い出の一部を御紹介させていただきましたが、小林先生とは東北大学でも御一緒に仕事をさせていただくことが出来ました。その東北大学では、臨床をするにしても、研究をするにしても、学生の勧誘から夜の街でのお楽しみまで、いろいろなことがシステマティックであり完成度の高さを感じていました。時が流れるのは早いもので、私も組織の運営にそれなりに苦労するようになった今日この頃ですが、ついつい物事を行き当たりばったりで決めがちです。今さらながら「小林先生やっぱりすごいな～」という思いと、完成度の高い背景には東北大学耳鼻咽喉科学教室の長い歴史と伝統のもとに、多くの先生によって培われてきた積み重ねがあったんだなと、あらためて感じております。

100周年によせて　小林教室での思い出

平成18年入局　**大島　英敏**

このたび、東北大学耳鼻咽喉・頭頸部外科学教室が開講100周年を迎えられたことに、誠に喜ばしくお祝い申し上げますとともに、100年という長い歴史を支えてきた諸先輩方の研鑽と情熱に、

心より敬意を表したいと思います。私が入局したのは平成18年で、小林俊光先生の教室6年目の時でした。学生6年生の頃、卒業後の進路を悩んでいた私は、医局の見学する機会をいただきました。緊張しながら医局の扉を開けると、偶然にもドアの後ろにいた小林先生と鉢合わせ目が合いました。ギラギラと輝くような目をしていて圧倒的な威圧感のようなものを感じたことを鮮明に覚えています。小林先生はその場ですぐにニコッと微笑み（目は笑っていないような感じでしたが）、温かく迎えてくれました。小林先生の手術を見学し、その鮮やかな手術に、学生ながらも深く感激を覚えました。手術の後はさわやかな笑顔をみせ、丁寧に耳鼻咽喉・頭頸部外科と医局の魅力についてご説明してくださりました。そんな小林先生の人柄にあこがれ、この手術を間近で学びたいと、また医局内は大変活気があり、医局のどの先生方も活き活きと仕事をしている雰囲気を感じ、入局いたしました。入局後は初期研修を行ったのち、東北労災病院で2年間、大山健二先生と入間田美保子先生に耳鼻咽喉科医としての基本をご指導いただきました。その後、大学に戻ることになり、小林先生のもとで中耳・耳管の診療と、耳科学の基礎研究をする機会をいただきました。小林先生の診療の知識や技術に感嘆していましたが、そこには常に患者に対して真摯な態度で真剣に患者と向き合う姿があり、医師としての心構えを学ばせて頂きました。小林教室は、医局員一人一人の自主性を尊重して下さる教室でした。興味があってやりたいことを、医局全体で応援し助け合いながら、各々が学んでいける環境があり、小林先生は時には厳しい言葉をかけながらも医局を温かく包んで自由に学べる環境を作ってくださりました。見学時に感じた、医局の活気があり活き活きとした雰囲気は、小林先生が作り上げた環境によるものであると感じました。私が大学に戻って4年目に小林先生は退職され、小林先生にご指導いただいた最後の大学院生となりました。そのご指導のお蔭で学位をいただき、大学院を卒業し、現在は仙塩利府病院　耳科手術センターで、再び小林先生と仕事をする機会に恵まれました。入局前からあこがれていた手術に直接ふれることができ、新鮮な知識の習得と深い反省をする毎日です。当時のギラギラした鋭い視線は、子供の成長を見るかのような穏やかな目になり（私が勝手に感じているだけですが）、それでも真剣に患者と向かう時に見せる熱いまなざしに、いつも身が引き締まる思いをしています。香取教授へと教室は引き継がれましたが、これまで築きあげられた素晴らしい教室が、100周年という契機に今後ますます繁栄し、東北大学耳鼻咽喉・頭頸部外科の伝統が磨き上げられていくよう心よりご祈念申しあげるとともに、医局員として微力ながらも教室の発展に尽力いたしたいと存じます。

写真で見る教室の歩み

和田徳次郎教授時代　1911 年～1939 年（明治 44 年～昭和 14 年）

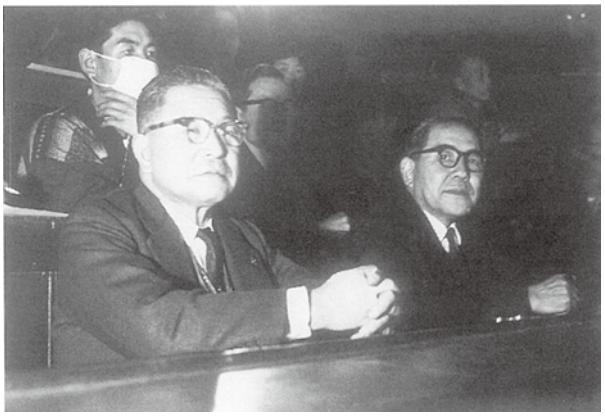
昭和 11 年

昭和 12 年 10 月

立木　豊教授時代　1940 年～1962 年（昭和 15 年～昭和 37 年）

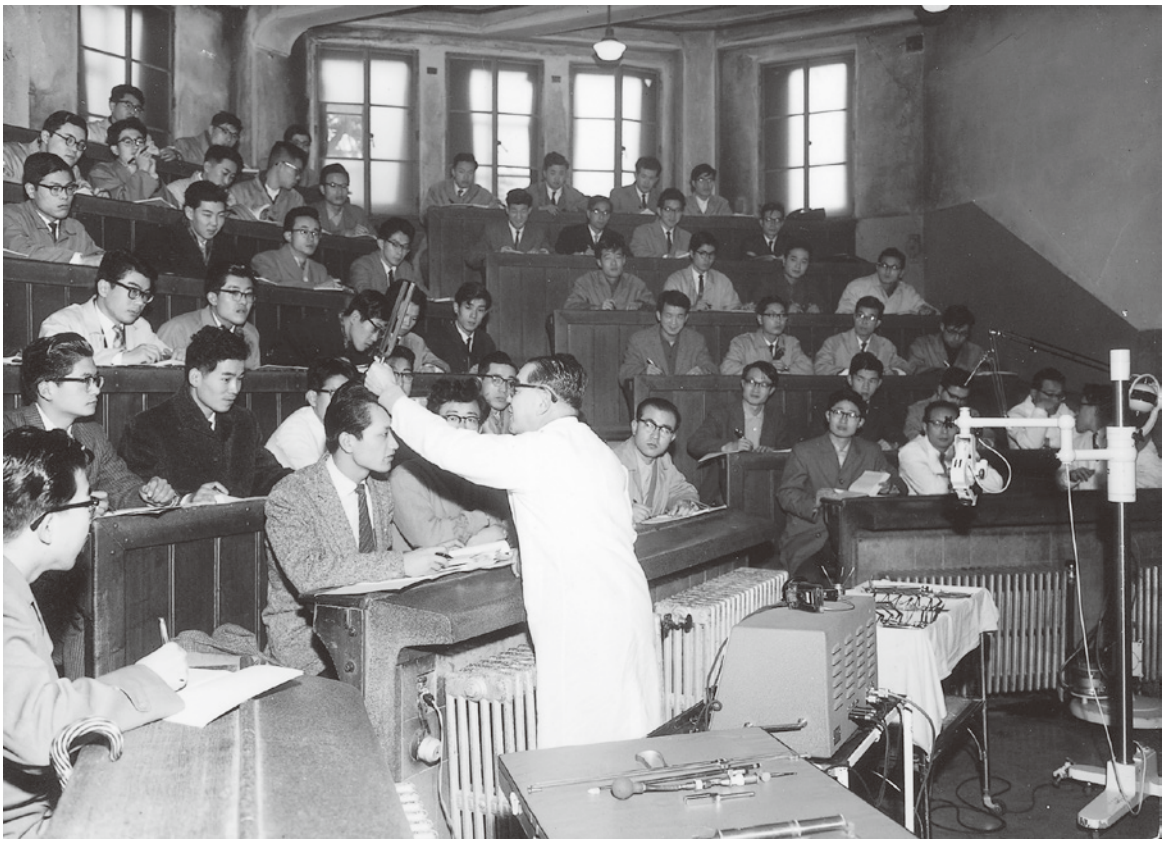
日本耳鼻咽喉科学会　東北・岩手地方会連合学会総会　昭和 26 年

脚本・演出：柴原良平先生
戦後風刺劇　昭和 31 年



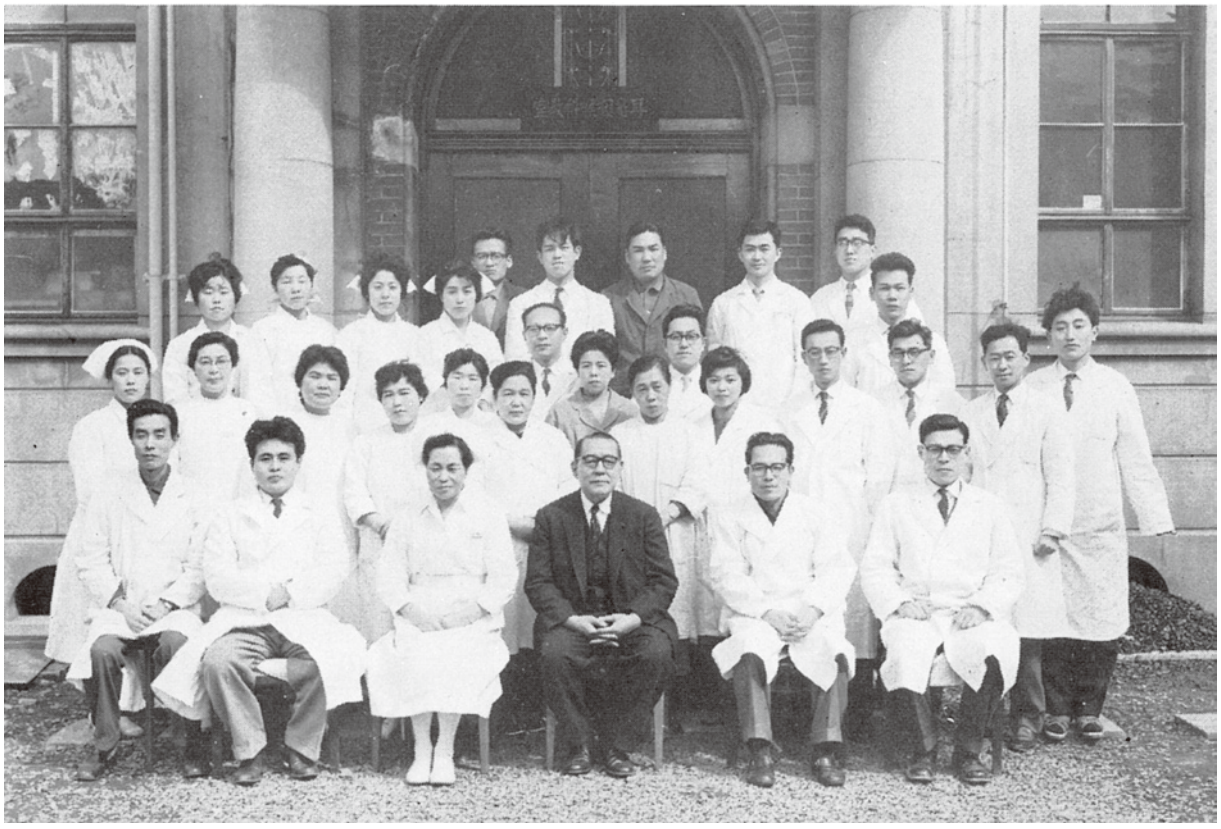
立木豊教授・稲村正三先生　観劇中
後方入院患者、付添その他の方々
昭和 31 年

第 7 回東北耳鼻咽喉科連合会　昭和 32 年 9 月 29 日　青森市自治会館屋上



立木豊教授講義　耳鼻科の階段教室兼ザール　昭和 36 年

昭和 37 年 3 月　山川婦長退官



昭和 37 年 3 月 22 日

片桐主一教授時代　1962 年～1972 年（昭和 37 年～昭和 47 年）

昭和 37 年　山川婦長の墓前
右より片桐教授、三浦婦長、山田さん、髙坂教授、
高田さん、阿子島さん

片桐教授を囲んで金華山にて記念撮影　昭和 43 年

河本和友教授時代　1972 年～1985 年（昭和 47 年～昭和 60 年）

河本和友教授就任祝賀会
割烹「お恒」
昭和 47 年 3 月

医局野球大会にて　昭和 55 年

東北大学耳鼻咽喉科同窓会　片桐名誉教授叙勲祝賀会
昭和 56 年 8 月 29 日

高坂知節助教授　医学部奨学賞「金賞」受賞記念パーティーにて
昭和 57 年 1 月

昭和 57 年　弘前大学との野球定期戦後（弘前）

昭和 57 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室同窓会
河本教授開講 10 周年記念式典・教室創立 70 週年記念講演会
昭和 57 年 6 月 19 日

第 6 回仙南耳鼻科医会　昭和 59 年 11 月 7 日

河本教授還暦祝賀会　昭和 59 年 3 月 25 日

河本和友教授退職記念昼食会
昭和 60 年 8 月 31 日

高坂知節教授時代　1985 年～2000 年（昭和 60 年～平成 12 年）

高坂知節教授就任祝賀会
昭和 60 年 11 月 30 日

立木孝教授とゴルフを愉しむ
盛岡カントリークラブにて
昭和 61 年当時

第 26 回日本耳鼻咽喉科学会　宮城県地方部会臨床懇話会
昭和 62 年 9 月 26 日

東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室　創立 80 周年記念祝賀会
平成 3 年 6 月 22 日

平成 4 年 3 月 17 日　総回診終了後のスタッフ会議

平成 9 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室同窓会
平成 9 年 6 月 21 日

第 100 回日耳鼻総会　平成 11 年 5 月 21 日
国際シンポジウム「新世紀における耳鼻咽喉科学―欧米からの視点―」終了後に
感謝状を贈呈する高坂会長
左から清水　宏教授（ジョンズ・ホプキンス大学、USA）
ヴォルフガング・アーノルド教授（ミュンヘン大学、ドイツ）
ジェームス・スノウ教授（NIDCD, USA）
ポール・ファン・デン・ブレーク教授（セント・ラドボード教育病院、オランダ）

河本和友名誉教授の喜寿を祝う会
平成 12 年 4 月 8 日

平成 12 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室同窓会総会
平成 12 年 6 月 17 日

小林俊光教授時代　2001 年～2013 年（平成 13 年～平成 25 年）

小林俊光教授就任祝賀会　平成 13 年 12 月 22 日

池田勝久先生・鈴木秀明先生教授就任祝賀会　平成 15 年 10 月 12 日

平成 15 年　医局モーニングカンファランスにて

平成 16 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科学教室同窓会総会　平成 16 年 6 月 19 日

第 106 回　日耳鼻総会　宿題報告「耳管閉鎖障害の臨床」 平成 17 年 5 月 20 日　大阪

平成 18 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室同窓会総会　平成 18 年 6 月 17 日

平成 19 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室同窓会総会　平成 19 年 6 月 16 日

東北大学大学院医工学研究科聴覚再建医工学分野　川瀬哲明先生　教授就任祝賀会
平成 20 年 3 月 16 日

平成 20 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室同窓会総会　平成 20 年 6 月 28 日

大学病院外来棟屋上にて

平成 21 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室同窓会総会　平成 21 年 6 月 20 日

総会終了直後の第 1 会場にて集合写真　平成 22 年 5 月 22 日

欠畑誠治先生　志賀清人先生　須納瀬弘先生　教授就任祝賀会　平成 23 年 9 月 10 日

教室創立 100 周年記念式典　平成 24 年 11 月 4 日

小林俊光教授退職記念祝賀会　平成 25 年 3 月 31 日

平成 25 年度　東北大学医学部耳鼻咽喉科教室　同窓会総会　平成 25 年 6 月 22 日

現教室風景

医局の様子　平成 27 年 5 月

朝のカンファランス風景
平成 27 年 5 月

業績リスト

教室　論文別冊リストについて

別表は、教室で保管している論文別冊リストに登録されている論文を公表年順に列挙したものです。当初は、手書きのノート（下写真参考）に記されておりましたが、1990 年ごろからパソコン上での管理に移行され、現在に至ります。

なお、和田教授時代を含めてこのリストに登録されていない論文は記載されていないことを付記します。

紙面の関係で、著者名は筆頭著者のみ（筆頭著者が教室関係でない場合は、筆頭著者と教室関係著者の 2 名）の記載になっています。

1940	高度の呼吸困難と頸部腫脹を来たし気管切開及び頸部外切開を施せる偽性扁桃腺膿瘍（久保）（副咽頭間隙淋巴腺膿瘍）の一例	立木　豊	耳鼻咽喉科
	套管抜去困難症	立木　豊	東京医事新誌
1941	和田臨床外来患者統計	今井龍雄	東北医学雑誌
	喉頭血管腫について	松浦郁夫	東北医学雑誌
	高齢者に見たる興味ある濾胞性歯牙嚢腫の一例	松浦郁夫	東北医学雑誌
	アンギーナの蒼鉛療法について	松浦郁夫	東北医学雑誌
	ムコーズス中耳炎	立木　豊	大日本耳鼻咽喉科会 第 45 会総会
1942	爆破の魚類聴器並に内蔵諸器官に及ぼす影響に就いて	稲村兵助	東北医学雑誌
	鬱血に因る聴器障碍に関する実験的研究	松浦郁夫	東北医学雑誌
	頚動脈結紮に依る聴器障害に関する実験的研究	松浦郁夫	東北医学雑誌
	歯根嚢腫	立木　豊	臨講
	窒息状態に於ける家兎脳波に就いて	鈴木篤郎	航空医学
	発声時軟口蓋運動、特に鼻咽腔閉鎖の観察	鈴木篤郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	假声帯声音に就いて	鈴木篤郎	東北医学雑誌
	声帯ポリープ患者の発生時空気濫費量に就いて	鈴木篤郎	東北医学雑誌
1943	前額洞骨腫 2 例	太宰六郎	東北医学雑誌
	人間及動物の欧氏管の神経分布に関する組織学的研究	堀平八郎	東北医学雑誌

	耳下腺唾液瘻の手術的経験	立木　豊	日本医事及健康保険
	代償聲音の機構	鈴木篤郎	東北医学雑誌
	家兎脳波に及ぼす CO2 の影響	鈴木篤郎	航空医学
1944	細菌感染時並に非感染時に於ける咽頭手術創の治癒機転に関する実験的研究 第 2 編　咽頭切開術編	太宰六郎	
	眼球運動の電気的描写法特に眼球運動角度と描写曲線振幅との関係に就いて	鈴木篤郎	東北医学雑誌
1945			
1946			
1947	肺結核患者の喉頭観察	粟田口省吾	抗酸菌研究雑誌
	Nystangmus に認められる ‘末梢性変化’ と ‘中枢性変化’ との鑑別診断に関する考察	武山貢次	日本耳鼻咽喉科学会会報
	喉頭結核の場合に於ける救急処置としての気管切開の経験	立木　孝	臨床と研究
1948	約半年の間隔を以て、咽頭後壁に、紡錘細胞肉腫硬性線維腫、軟性線維腫の発生を見たる症例に就いて	粟田口省吾	耳鼻咽喉科
	肺結核患者の咽頭観察	粟田口省吾	抗酸菌病研究雑誌
	口蓋扁桃腺摘出後に起れる頸部放射状菌病の 1 例	三好　佑	耳鼻咽喉科
	外科的ヂアテルミーによる上顎癌の保存的根治手術	立木　豊	手術
	耳鼻咽喉科領域の梅毒	立木　豊	最近の進歩特集号
	耳鼻咽喉科領域に於ける結核治療と最近の進歩	立木　豊	臨床と研究
	咽頭結核の局所療法	立木　豊	日結
	耳鼻咽喉科領域に於けるズルホンアミッド又はペニシリンの局所的応用	立木　豊	医学
	耳迷路外科の経験	立木　豊	耳鼻咽喉科
	耳下腺炎と耳鼻咽喉科、耳下腺炎性聾の問題	立木　豊	最新医学
	汎発性構音障害（吶）の 1 例	鈴木篤郎	耳鼻咽喉科
	眩暈と脳波	鈴木篤郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	正常家兎脳波について	鈴木篤郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	急性口蓋扁桃遷延を思はせた淋巴性白血病の 1 例	和田俊宏	耳鼻咽喉科
1949	ペニシリン・サルフアダイアヂン及び外用サルフアニールアミドを使用せる重症ルードウイツヒ氏アンギーナ治験例	粟田口省吾	耳鼻咽喉科
	上顎洞淋巴管性内被細胞腫の 1 症例	粟田口省吾	耳鼻咽喉科
	カラアザール病と耳鼻咽喉科疾患	稲村正三	耳鼻咽喉科
	正常家兎脳波の周期に就いて	戸田正二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	Pralaryngeale Drusentuberkulose 症例追加	立木　豊	臨床と研究
	中耳炎の最新治療法	立木　豊	臨床と研究
	耳迷路外科の経験（第 2 報）— ポルトマン氏手術の成績に就いて —	立木　豊	耳鼻咽喉科
1950	温度性異常頭位眼振に就いて	三好　佑	耳鼻咽喉科
	迷路梅毒の 2 例	山室重遠	耳鼻咽喉科
	自家中毒症による聾の 1 例	山室重遠	耳鼻咽喉科
	ヂフテリーに続発せる扁桃周囲腫瘍の 2 例	神岡蘇二	耳鼻咽喉科
	白血病性壊痕性咽頭炎のペニシリン使用経験例	大内　仁	耳鼻咽喉科
	耳迷路外科の経験	立木　豊	耳鼻咽喉科
	前額洞骨腫の 2 例	立木　豊	グラフ
	巨大なる顎下・口腔底皮様嚢腫	立木　豊	手術
	メニエル氏病及びその治療	立木　豊	医家業書
	外耳道皮瓣整形手術を行はざる中耳根治手術の経験	立木　豊	耳鼻咽喉科
	咽喉頭湯傷症例	和田俊宏	耳鼻咽喉科
1951	Effect of Various Sorts of Ion on the Sensoria of the Labyrinth of Eel (Anguilla japonica)	Inamura S	Tohoku J Exp Med
	Experiences of Labyrinthine Surgery	Tsuiki Y	Tohoku J Exp Med
	眼球振盪と假現運動との相互関係に関する実験的観察（第 1 編）	山室重遠	東北医学雑誌
	爆発による迷路震盪症の 2 例	秋山　登	耳鼻咽喉科
	巨大なる食道ポリープ症例	神岡蘇二	耳鼻咽喉科
	廻轉性迷路刺戟の人脳波に及ぼす影響に就いて	大内　仁	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	小児慢性淋巴性白血病に対するナイトロジェン・マスタード使用経験	大内　仁	耳鼻咽喉科
	廻轉運動の聴器に及ぼす影響に関する実験的研究（前編）	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	耳迷路外科の経験　（第 5 報）水平半規管開窓後の聴力に就いて	立木　豊	耳鼻咽喉科

	耳迷路外科の経験 （第 4 報）ポルトマン氏手術症例追加並びに一部遠隔成績に就いて	立木　豊	耳鼻咽喉科
	中耳炎	立木　豊	医学　特集
	耳性嘔吐並に眩暈	立木　豊	臨床と研究
	難聴	立木　豊	日本臨床
	中耳根本手術、外耳道根治手術又は耳介耳根治手術	立木　豊	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	異物をも含めてのツモールによる窒息死	立木　豊	臨床
	心臓直接通電の海猿内耳に及ぼす影響	和田俊宏	日本耳鼻咽喉科学会会報
1952	Experimental Studies on the Shwartzmam's Phenomeon of the Ear-Labyrinth	Tsuiki Y	Tohoku J Exp Med
	日本産ウナギ Anguilla japonica の聴器迷路の研究	稲村正三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	各種イオーネンの迷路感受部分に及ぼす影響に就いて	稲村正三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	ピロカルピン及びアトロピンの海猿聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	吉田秀一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	種々なる薬物の蜘蛛膜下腔注入が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究 第 2 編　組織学的観察	三好　佑	日本耳鼻咽喉科学会会報
	種々なる薬物の蜘蛛膜下腔注入が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	三好　佑	日本耳鼻咽喉科学会会報
	外耳道入口部に発生せる血管拡張性肉芽腫の 1 症例	三塚大悦	耳鼻咽喉科
	初生児上顎洞炎の 1 症例	渋谷友太郎	東北医学雑誌
	外傷が原因となれる急性上顎洞炎の 1 例	渋谷友太郎	耳鼻咽喉科
	両棲類聴器生体染色に関する実験的研究	渋谷友太郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聴器迷路のシュワルツマン型組織反応に関する実験的研究	神岡蘇二	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聴器迷路のシュワルツマン型組織反応に関する実験的研究 第 2 編　病理組織学的所見（其 2）	神岡蘇二	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳鼻咽喉科疾患と性能及び智能検査成績	神岡蘇二	耳鼻咽喉科
	四エチル鉛の聴器に及ぼす影響に関する実験的研究	川田浦保	日本耳鼻咽喉科学会会報
	家兎聴器死後変化に関する実験的研究　第 1 編　断頭浸清固定実験特にコルチ器に就いて	猪狩統一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	家族性進行性内耳性難聴の聴力像に就いて	島田弘夫	耳鼻咽喉科
	瞥見麻痺の治験例	六郷正近	耳鼻咽喉科
1953	国語音の誤聴に就いて	吉田昌八	日本耳鼻咽喉科学会会報
	学童の声音言語障害に就いて	吉田昌八	耳鼻咽喉科
	電気刺激に因る聴器病変の実験的研究	小幡達男	日本耳鼻咽喉科学会会報
	エプーリスの 2 例	小幡達男	耳鼻咽喉科
	上顎性粘膜腺膿腫の 1 例	小幡達男	耳鼻咽喉科
	汎発性構音障害の治験例	小野寺茂	耳鼻咽喉科
	温度性眼振に就いて	武山貢次	日本耳鼻咽喉科学会会報
	電気閃光値と聴器との関係（其 1）	武山貢次	日本耳鼻咽喉科学会会報
	最小可聴域測定に際しての一知見	立木　孝	耳鼻咽喉科
	Poliomyelitis と気管切開	立木　豊	東京医事新誌
	耳迷路外科の経験（第 6 報）	立木　豊	耳鼻咽喉科
	扁桃摘出の自家臨床	立木　豊	耳鼻咽喉科
	咽頭臨床（総論）	立木　豊	日本耳鼻咽喉科全書
	慢性中耳炎の最新の治療	立木　豊	新薬と臨床
	前庭神経中枢導路の髄鞘発生学的研究	六郷正近	日本耳鼻咽喉科学会会報
1954	前額洞骨腫の 1 例	河本和友	耳鼻咽喉科
	外耳道に原発せるチリンドロームの 1 例	河本和友	耳鼻咽喉科
	舌癌手術治癒後約 10 年にして発生せし上顎癌症例	河本和友	耳鼻咽喉科
	言語聴力検査（Speech Audiometry）試験用語の作製（予報）	吉田昌八	耳鼻咽喉科
	舌・軟口蓋及び咽頭の半側を侵したるヂフテリー後麻痺に就いて	吉田昌八	耳鼻咽喉科
	直達鏡下に抽出せる下咽頭異物（縫針）の一例	小幡達男	東北医学雑誌
	オーヂオメーターによる聴域測定法の検討	大内　仁	耳鼻咽喉科
	経過中ジヤクソン氏麻痺を伴える鼻性化膿性脳膜炎の治験例	渡辺　勤	耳鼻咽喉科
	酒精眼振発現時に於ける迷路感覚終末部の組織学的研究	島田弘夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	純音聴力と言語聴力との関係（一報）	武山貢次	耳鼻咽喉科
	囁語検査の 1 つの試み	武山貢次	耳鼻咽喉科
	骨導聴力に関する一考察	立木　孝	耳鼻咽喉科
	雑音下に於ける純音聴力に就いて	立木　孝	耳鼻咽喉科

	自記オーヂオメーターの試作	立木　豊	耳鼻と臨床
	眼球振盪発現時に於ける聴櫛聴班の態度に関する実験的研究	和田俊宏	東北医学雑誌
1955	Studies on the Ear-Labyrinth and its Responsiveness to Various Sorts of Medicaments under Phase Contrast Microscope	Tsuiki Y	Tohoku J Exp Med
	Experimental studies on the influence of various chemicals upon the ear-labyrinth when injected into the tympanic cavity	河本和友	日本耳鼻咽喉科学会会報
	日本語音の誤聴現象に関する研究	吉田昌八	日本耳鼻咽喉科学会会報
	人咽喉腔に於ける温覚及び部位覚に就いて	吉田昌八	耳鼻咽喉科
	頸部交感神経と聴器との関係	秋山　登	日本耳鼻咽喉科学会会報
	診療の経験（その二）	小山芳輝	治療
	絞扼による喉頭挫傷の 1 症例	小野寺茂男	耳鼻咽喉科
	鼻中隔の出血性鼻茸症例	小野寺茂男	東北医学雑誌
	モニリヤ症と思われる咽頭潰瘍剖検例	新井　泰	耳鼻咽喉科
	放射性同位元素による扁桃シュワルツマン型組織反応の観察	倉井寛子	日本耳鼻咽喉科学会会報
	胃切除後の食道鏡的所見	大内　仁	日本気管食道科学会会報
	位相差顕微鏡による鼻腔及副鼻腔粘膜の観察	渡辺　勤	日本耳鼻咽喉科学会会報
	咽頭疾患の細胞学的診断法	渡辺　勤	日本気管食道科学会会報
	喉頭試験切除片の迅速標本作成法	渡辺　勤	日本気管食道科学会会報
	純音聴力と言語聴力との関係　（基礎的研究　第 2～4 報）	武山貢次	日本耳鼻咽喉科学会会報
	正常幼児の語音の発達と後天性ろう児の発語の阻碍についての観察	武山貢次	耳鼻咽喉科
	先天性ろう児の語音の発語と Lipreading に関する観察	武山貢次	耳鼻咽喉科
	耳の音方向定位に関する研究	豊嶋昭夫	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	自記オーヂオメーターの臨床的応用に関する基礎的研究　その 1	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	自記オーヂオメーターの臨床的応用に関する基礎的研究　その 2	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	所謂突発性難聴（Sudden Deafness）に就いて	立木　孝	耳鼻咽喉科
	ストレプトマイシンに因る聴覚障害に就いて	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	ステンゲル氏法の 1 変法・詐聾耳聴力の他覚的測定	立木　孝	耳鼻咽喉科
	耳鼻咽喉科領域におけるホルモン療法	立木　豊	総合臨床
	喉頭検査法	立木　豊	日本医事新報
	防音室外に於ける聴力測定法	立木　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
	人工喉頭	立木　豊	日本医事新報　グラビア別刷り
	眩暈とポルトマン氏手術成績　耳迷路外科の経験　第 8 報	立木　豊	耳鼻咽喉科
	耳迷路外科の経験（第 7 報）　ポルトマン氏手術適応症の拡大	立木　豊	耳鼻咽喉科
	抗家兎耳膜様迷路血清が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	立木　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聴覚に於ける方向感に関する考察	立木　豊	耳鼻咽喉科
	位相差顕微鏡下における聴器死後変化の研究	立木　豊	Tohoku J Exp Med
	日本医学会総会の感想	小山芳輝	日本医事新報
	健康保険の実態と其の根本的改正に就いて	小山芳輝	日本医事新報
	熊谷先生の総会講演を聴く	小山芳輝	日本医事新報
1956	一側内耳神経切断後に於ける迷路機能経過の観察	吉田和悦	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳漏内細菌の抗生物質に対する感受性試験に就いて	荒井　泰	耳鼻咽喉科
	咽頭における高圧撮影の応用（第一報）	山口　正	日本気管食道科学会会報
	気管切開を余儀なくされた成人の咽後膿瘍症例	小野寺茂男	耳鼻咽喉科
	抗耳膜様迷路血清が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	小野寺茂男	日本耳鼻咽喉科学会会報
	乳様突起及び外耳道に発生した Cylindrom の 1 例	小野寺茂男	耳鼻咽喉科
	聾亜と変質性徴候	松山信夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	我教室 15 年間における聾唖の統計的観察並びにその後の経過調査成績	松山信夫	耳鼻咽喉科
	聾唖の失管原因に就いて	松山信夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	Candida albicans による実験的並びに臨床的病理組織学的知見	新井　泰	日本耳鼻咽喉科学会会報
	Contactlens による眼球偏位の測定	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	迷路機能検査の再検討	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	手動式廻転法による Cupulometrie の検討	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	雑音による純音聴力遮蔽に関する基礎的研究	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	Recruitment 測定法の検討（4）　各法の比較検討並びに総括	立木　孝	耳鼻咽喉科
	自記オーヂオメーターの臨床的応用に関する基礎的研究	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	ストレプトマイシンによる聴覚障碍特にその発生機転に関する考察	立木　孝	耳鼻咽喉科

	Recruitment 測定法の検討（2） D.L. Test について	立木　孝	耳鼻咽喉科
	耳迷路外科　特に聴神経腫瘍の場合	立木　豊	耳鼻科最近の進歩
	Recruitment 測定法の検討（1） ファウラー氏法に就いて	立木　豊	耳鼻咽喉科
1957	聾唖の遺伝学的研究	松山信夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聾唖諸多発部落調査成績	松山信夫	耳鼻咽喉科
	Horstummheit 症例	松山信夫	耳鼻咽喉科
	家族的発生を見たストレプトマイシンに因る聴覚障害	大内　仁	耳鼻咽喉科
	気管気管支検査法としての高圧撮影の意義	大内　仁	日本気管食道科学会会報
	ストレプトマイシン使用患者に於ける聴器検査の成績	島田弘夫	耳鼻咽喉科
	自記オーヂオメーターの臨床的応用に関する基礎的研究　その 5	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	所謂突発性難聴に対するピロカルピン療法の効果に就いて	立木　孝	耳鼻咽喉科
	自記オーヂオメーターの臨床的応用に関する基礎的研究（その 4）連続周波数聴域自記の観察	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	防音室外における骨導聴力測定法	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	久保猪之吉先生の書翰	立木　豊	日本医事新報
	Multiplane Fluoroscopy と其応用	立木　豊	日本医事
	Multiplane Fluoroscopy による胸部食道外異物（縫針）摘出の経験	立木　豊	日本気管食道科学会会報
1958	A Study on the motion of the vocal cords during vocakization by means of high speed motion picture	Tsuiki Y	VII International congress of bronchoesophagology
	視性眼振の臨床的意義に就いて	高倉　稔	耳鼻咽喉科
	ヒステリー性咳払いの 1 症例	高倉　稔	耳鼻咽喉科
	眼震に認められる末梢性変化と中枢性変化との鑑別診断に関する考察	高倉　稔	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	咽喉頭ヂフテリーに於けるロイコマイシンの試用経験	新井　泰	新薬と臨床
	オーヂオグラムの左右対称性に関する一考察	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	頭部外傷後聴覚障害の統計的観察	立木　孝	耳鼻咽喉科臨床
	先天性迷路梅毒症例	立木　孝	耳鼻咽喉科
	各種聴覚障害耳におけるオージオグラム聴力型の臨床統計的研究	立木　孝	耳鼻咽喉科
	ネマトール中毒による聴器障害の 1 例	立木　孝	耳鼻咽喉科臨床
	聴閾の変動帯（transition zone）とその測定の臨床的意味について	立木　孝	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳性側頭葉膿瘍手術治験例	立木　豊	手術
1959	蝸牛迷路のコリンエステラーゼについて	河本和友	日本耳鼻咽喉科学会会報
	先天性頸部嚢状淋巴管腫の 1 例	河本和友	耳鼻咽喉科
	内耳神経切断が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	吉田和悦	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聴覚疲労並びに音響外傷の電気生理学的研究	高倉　稔	日本耳鼻咽喉科学会会報
	聴毛形態とコルチ器の支持構造について	渡辺　勤	日本耳鼻咽喉科学会会報
	眩暈	立木　豊	治療
	気道及び食道の異物 ― 診断及び予後方面―	立木　豊	日本の医学の 1959 年 ―第 15 回日本医学会総会学術腫会記録―
1960	悪性黒色腫の 2 症例	河本和友	耳鼻咽喉科
	単球の増多を伴つた悪性ジフテリーの 1 剖検例	高橋健一	耳鼻咽喉科
	蝸牛反応による聴覚疲労の実験的研究	高倉　稔	日本耳鼻咽喉科学会会報
	音声の純度あるいは嗄声度の定量法に就いて （ソナグラフによる研究）	高倉　稔	日本耳鼻咽喉科学会会報
	陳旧性気管支異物の 2 症例	四方田　孝	耳鼻咽喉科
	振子様扁桃の 2 症例	草刈信一	耳鼻咽喉科
	排出困難なりし乳児消化管異物症例	草刈信一	耳鼻咽喉科
	電子顕微鏡による膜様迷路の研究	中山和彦	日本耳鼻咽喉科学会会報
	位相差顕微鏡による新鮮蝸牛膜様迷路の形態学的研究	渡辺　勤	日本耳鼻咽喉科学会会報
	咽頭粘膜における細菌叢　特にブドウ球菌の最近の実態	渡辺景子	東北医学雑誌
	抗生物質感受性を中心とせる耳鼻科領域のブドウ球菌に関する研究	波多野信夫	東北医学雑誌
	理学的療法に依るメニエル氏症候群治験例の観察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	メニエール氏症候群に対する Bellergal の効果について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	電子顕微鏡及び組織化学的立場より見たる聴器迷路	立木　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
	新しい診療・耳鼻咽喉科	立木　豊	新しい診療（別冊）
	理学的療法に依るメニエル氏症候群治験例の観察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
1961	興味ある経過を示した Behcet 氏病の 1 症例	角田　幸	耳鼻咽喉科

	正常海猿聴器迷路における種々なる化学物質の分布について	高橋健一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳鼻咽喉科領域に於ける Oradol の使用経験	高橋健一	耳鼻咽喉科
	正円窓誘導による聴神経活動電位並びに Summating potential の研究	桜井時雄	日本耳鼻咽喉科学会会報
	鼻腔及び上咽頭腫瘍を示した下垂体癌腫の 2 剖検例	新井　泰	耳鼻咽喉科
	廻転中眼振を対象とせる簡易廻転検査法の試み ― Entschleunigungstest の応用―	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	眩暈を対象とした “Vestibular Asymmetry” の臨床的研究	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	上肢緊張反応の研究 （その 1）自発性上肢緊張反応の検討 （その 2）Tonic Cupulometry の試み （その 3）上肢緊張反応の筋電図学的考察	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳性眩暈と血圧変動曲線の相関関係について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	電気眼振記録装置の使用小験	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	異方向性迷路刺激に対する自発眼振の態度	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	電気性眼振の本態に関する臨床的考察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	眩暈・嘔吐に対するトリオミンの効果	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	Summating potential について	立木　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
1962	Study of the influence of rotatory stimulation upon respiration	Usami M	Oto-Rhino-Laryngo-Society of Japan
	廻転刺激の呼吸に及ぼす影響に関する研究	宇佐神正海	日本耳鼻咽喉科学会会報
	咽頭異物感に関する考察	河本和友	日本気管食道科学会会報
	血管帯における呼吸酵素に関する研究	河本和友	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳垢腺腫の 1 例	河本和友	耳鼻咽喉科
	行動発達テストを併用した幼児聴力検査	三好　保	耳鼻咽喉科
	強大音響刺激が聴器迷路に及ぼす影響に関する実験的研究	新井　泰	日本耳鼻咽喉科学会会報
	加速度回転室による眼振の研究 ―特に眼振持続時間を左右する諸要因について―	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	電気的眼振記録法と光学的眼振記録法との比較研究	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	強大音響刺激が蝸牛有毛細胞に及ぼす影響に関する電子顕微鏡的研究	鈴木　孚	日本耳鼻咽喉科学会会報
1963	聴器迷路の組織化学的検索について	河本和友	東北医学雑誌
	咽喉頭異常感の展望	高橋健一	東北医学雑誌
	咽頭食道憩室の症例	桜井時雄	耳鼻咽喉科
	ヒステリー性聾の 1 例	三好　保	耳鼻咽喉科
	鼓室形成術 104 例の経験	大内　仁	東北医学雑誌
	音刺激による蝸牛内直流電位変動の観察	中塚満郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	鼻・副鼻腔悪性腫瘍の臨床	片桐主一	東北医学雑誌
	外有毛細胞の神経終末に関する電子顕微鏡的及び組織化学的研究	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	頸部交感神経節剔出の内耳に及ぼす影響に関する実験的研究	北条　仁	東北医学雑誌
	垂直性（上向性）自発性眼振症例	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	ストレプトマイシンに因る聴覚障害の臨床的研究	立木　孝	東北医学雑誌
	小児慢性副鼻腔炎に関する研究	鈴木篤郎	東北医学雑誌
	蝸牛電位位相に及ぼす薬物の影響	片桐主一	Audiology
1964	上咽頭畸型腫の 1 症例	河本和友	耳鼻咽喉科
	鼻根本手術時に見られた対側性皮下出血について	高倉　稔	耳鼻咽喉科
	上顎洞根本手術後に発生したと思われる濾胞性歯芽嚢腫	高倉　稔	耳鼻咽喉科
	有茎性扁桃嚢腫の 1 症例	桜井時雄	耳鼻咽喉科
	副鼻腔 X 線写真陰影の客観的測定法	三好　保	耳鼻咽喉科臨床
	電報局通信騒音が聴覚に及ぼす影響（第一報）	小関芳晃	耳鼻咽喉科
	“自記クプロメトリー” と “前庭補充現象” について	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	第八脳神経切断の蝸牛電位及び聴神経活動電位に及ぼす影響	片桐主一	Audiology
	上顎腫瘍に対する術前照射の影響について	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	サリチル酸製剤の聴器に及ぼす影響　第 1 報	片桐主一	Audiology
	新しい診療・耳鼻咽喉科	片桐主一	新しい診療
	内耳性難聴に対する “アリナミン” 及び “アリナミン F” 使用法の一考察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	交代性眼振 3 症例	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	外因性咽頭気管障害　とくに直接外的咽頭気管障害について	前川重和	日本気管食道科学会第 6 回学術講演会
	耳神経学的立場よりみた眩暈の診断	朴沢二郎	第 14 回東北耳鼻咽喉科連合学会特別講演要旨

1965	Alteration of Acetylcholinesterase in the cochlea	Kaneko Y	Tohoku J Exp Med
	腺エナメル上皮腫の 1 症例	金子　豊	耳鼻咽喉科
	鼻疾患に対する Disophrol 使用経験	三好　保	耳鼻咽喉科
	篩骨洞に発生した悪性メラノームの症例	田中　弘	耳鼻咽喉科
	聴覚のレクルートメントに関する研究　特にその発現機構に就いて	渡辺昭夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳鼻咽喉科領域疾患の X 線学的研究	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会報
	眩暈症の治療　手術的立場から	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	顔面神経麻痺と前庭平衡障害	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	頭頸部外傷による「めまい」の耳神経学的分類	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	聴神経腫瘍の X 線検査法に対する再検討	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
1966	Reissner 氏膜の機能についての一考察	河本和友	内耳病態研究会論文集
	槌骨を利用した鼓室形成術	高倉　稔	耳鼻咽喉科
	舌根甲状腺の 1 例	池田　学	耳鼻咽喉科
	前庭性インパルスの研究	片桐主一	42 年度文部省研究報告集録（医学及び薬学）
	ルーチンテストとしての平衡機能検査法の問題点（治療指針の考察）	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床増刊号 2 日耳鼻 67 回総会
	瞬目描写による顔面神経麻痺検査法	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
1967	The Atypical Epithelial Formations of the Utricle	Kawamoto K	Arch Otolaryngol
	慢性中耳炎肉芽組織の病理組織学的検索　特に憩室細胞・肥胖細胞を中心として	河本和友	耳鼻咽喉科
	モルモット外側半規管膨大部稜神経の活動電位	吉野幸雄	日本耳鼻咽喉科学会会報
	所謂耳介腔骨導の伝音機能とその臨床的意義に就いて	高倉　稔	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	鼓室形成の経験	桜井時雄	耳鼻咽喉科
	猫、モルモットの第 8 脳神経切断の蝸牛内諸電位に及ぼす影響に関する研究	千葉正敏	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳鼻咽喉科領域疾患の X 線学的研究	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会 第 68 回学術講演会宿題報告
	前庭平衡機能検査法および‘めまい’の診断治療に関する研究	朴沢二郎	東北医学雑誌
	電気性眼振の発現機構について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	めまい（問診の際にはどのような点に注意すべきか）	朴沢二郎	実験治療
	圧迫眼振に対する 1 考察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
1968	Some surface views of the stria vascularis and its adjacent areas	Katagiri S	Acta Otolaryngol
	Some surface views of the inner ear by light microscopy	Katagiri S	Acta Otolaryngol
	Some morhological observations of Reissner’s membrane	Watanuki K	Acta Otolaryngol
	プロタルゴール過敏症の 1 例	河本和友	耳鼻咽喉科
	慢性上顎洞炎に対する TSP 錠の使用経験	河本和友	耳鼻咽喉科臨床
	アレルギー性鼻炎に対するプロエントラ（持続性抗ヒスタミン剤）の使用経験	河本和友	耳鼻咽喉科臨床
	蝶型骨洞のアスペルギルス症について	河本和友	耳鼻咽喉科
	Kanamycin の蝸牛組織に及ぼす影響に関する実験的研究	柿崎一郎	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳鼻咽喉科咽喉科領域における蛍光現象	菊田宣男	日本耳鼻咽喉科学会会報
	蝸牛毛細胞の Cholinesterase	金子　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
	ワイヤレスマイクを使用した普通教室で行われる難聴教育	三好　保	オージオロジー別冊
	頭頸部外傷後遺症としてのメマイの研究	内藤　儁	医学および薬学
	上顎洞 X 線写真陰影の客観的測定法　（デンシトメーターの試作）	片桐主一	日本医事新報
	小脳橋角腫瘍の進展方向に関する神経耳下学的考察	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
1969	Activity of Acethlcholinesterase on the Endolymphatic Surface of Outer Hair Cells	Kaneko Y	Acta Otolaryngol
	Reissner’s Membrance, its Light Microscopic Structures and Permeability Problems in Literature	Watanuki K	Arch Klin Exp Ohr Nas Kehlk Heilk
	Some Structural Observations of the Saccule	Watanuki K	Arch Klin Exp Ohr Nas Kehlk Heilk
	Repair pattern in the reticular lamina of the organ of corti after hair cell loss	Watanuki K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	老人性難聴に対する周波数弁別機能検査	横瀬宏允	オージオロジー別冊
	内耳性難聴発症とその背景 ―電子顕微鏡学的立場より―	河本和友	日本耳鼻咽喉科学会会報
	上顎洞穿刺	河本和友	耳鼻咽喉科
	Fucloxacillin による耳鼻咽喉科領域感染症の治療成績	河本和友	Chemotherapy
	臨床的電気味覚検査	吉野幸雄	耳鼻咽喉科

	金属の接触電位差を利用した定性的電気味覚検査法	吉野幸雄	耳鼻咽喉科
	爆発事故により集団的に発生した音響外傷例	高倉　稔	オージオロジー
	回転中眼振を対象とした迷路機能の定量法に関する研究	佐々木美隆	日本耳鼻咽喉科学会会報
	回転中眼振を対象とした迷路機能の定量法に関する研究 ―自記クプロメトリーについて	佐々木美隆	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	耳石器官の反応様式について	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会報
	めまいの病巣診断的立場より見た自記クプロメトリーの意義について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	注視方向性眼振を伴う混合性咽頭麻痺症例について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	家　蝸牛ライスネル膜の光学顕微鏡的研究	綿貫幸三	耳鼻咽喉科
	蝸牛組織の表面像	綿貫幸三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	猫蝸牛ライスネル膜の光学顕微鏡による観察	綿貫幸三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	蝸牛基底板の下面の結合組織の形態および配列について	綿貫幸三	オージオロジー別冊
	鼓室形成術に関する臨床的研究	鈴木知水	日本耳鼻咽喉科学会会報
1970	The interglobular space in the human labyrinthine capsule	Kakizaki I	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Electorophysiological Studies on the Otolith Organ	Kusakari J	Tohoku J Exp Med
	Surface Structure of the Cochlea	Watanuki K	Tohoku J Exp Med
	Surface Structure of the Ampulla of the Semicircular Canal in the Guinea Pig	Watanuki K	Pract oto-rhino-laryng
	Surface structure of the saccule in the guinea pig	Watanuki K	Abstruct of J of Otology of Japan
	Reissner's membrane after kanamycin administration	Kaneko Y	Arch Otolaryngol
	小児の誘発反応波形の判定について	沖津卓二	Audiology Japan
	II-2. 蝸牛における神経支配の様式について	河本和友	耳鼻と臨床
	I-2. 蝸牛毛細胞の電子顕微鏡的部位的特異性	河本和友	耳鼻と臨床
	前庭第一次ニューロンのインパルスより見た Ewald の法則	吉野幸雄	日本耳鼻咽喉科学会会報
	膜様半規管壁細胞の光学顕微鏡的観察	吉野幸雄	耳鼻咽喉科
	聴覚、前庭および味覚における補充現象に関する一つの考え	吉野幸雄	耳鼻咽喉科
	電気性眼振に関する実験的研究	吉野幸雄	日本耳鼻咽喉科学会会報
	半規管膨大部稜感覚上皮の光学顕微鏡学的研究	吉野幸雄	耳鼻咽喉科
	他覚的嗅覚検査に興味ある所見を呈した症例について　嗅覚脱失に対する一鑑定法	高橋　忍	耳鼻咽喉科
	猫の蝸牛神経核ニューロン応答様式について	三好　保	日本耳鼻咽喉科学会会報
	上顎洞自然口抵抗の測定	三好　保	耳鼻咽喉科臨床
	強大加速度刺激の内耳に及ぼす影響に関する実験的研究	小松田吉弥	日本耳鼻咽喉科学会会報
	磁気結合型振動ゾンデの研究	相馬　廉	日本耳鼻咽喉科学会会報
	耳管機能の解析	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	めまいに対する椎骨起始部周囲交感神経叢剥離術の効果について	片桐主一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	聴神経腫瘍の早期診断を目的とした顔面神経・三叉神経機能検査法	片桐主一	脳と神経
	突発性難聴患者の平衡機能 ―特に迷路が障害される過程と平衡機能の回復する過程について―	朴沢二郎	Audiology Japan
	反復性交代性顔面神経麻痺症例	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	下交代性片麻痺を伴った MLF 症候群の 2 例	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	頸部に起因する前庭性眩暈発作と椎骨動脈起始部周辺交感神経叢剥離術の効果について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	耳石における細胞分布	綿貫幸三	耳鼻と臨床
	前庭感覚上皮の構造研究への銀反応および脱水素酵素染色の応用	綿貫幸三	耳鼻咽喉科臨床
	モルモット前庭球形のうの表面構造	綿貫幸三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	内耳リンパ液への放射性同位元素局所投与によるオートラジオグラフィー	綿貫幸三	耳鼻と臨床
	内耳表面構造観察への銀反応の応用	綿貫幸三	耳鼻と臨床
	前庭半規管膨大部の基礎構造	綿貫幸三	耳鼻咽喉科臨床
1971	The osteocytes of the human labyrinthine capsule	Kakizaki I	Arch Otolaryngol
	Acetylcholinesterase in the organ of corti	Kaneko Y	Acta Histochemica et Cytochemica
	Auditory receptor organ of reptiles, birds and mammals	Smith CA, Takasaka T	Contribution to Sensory Physiology (ed. Neff WD)
	Fine Structure of the Infiltrative Cells in the Lamina Propria of the Human Nasal Mucosa in Allergy	Takasaka T	Tohoku J Exp Med
	The fine structure and innervation of the pigeon's basilar papilla	Takasaka T	J Ultrastuct Res
	Streptomycin and Kanamycin Effect upon the Vestibular Sensiry Epithelia of the Macula sacculi and utriculi in the Guinea Pig	Watanuki K	Pract oto-rhino-laryng

	Distribution pattern of the statoconia in the statoconial organs	Watanuki K	Abstract of J of Otolaryngology of Japan
	Structure of the otolithic layers on the maculae sacculi and utriculi in the guinea pig	Watanuki K	Equilibrium Res Suppl
	Morphologie der Sinnesepithelien des Vestibularorgans	Watanuki K	Tohoku J Exp Med
	Structure of Reissner's membrane in the cat cochlea — a light microscopic study	Watanuki K	Tohoku J Exp Med
	浸出性中耳炎成立機転に関する実験的研究	金子　豊	日本耳鼻咽喉科学会会報
	回転刺激による鳩半規管クプラの運動機構に関する研究	桑島利力	日本耳鼻咽喉科学会会報（Journal of Otolaryngology of Japan）
	Vein graft による鼓膜形成の経験	三好　保	耳鼻咽喉科
	頭頚部悪性腫瘍に対するブレオマイシンの治療効果の検討	中川　惇	青森県立中央病院医誌
	耳管の物理的性質の解析	湯浅　涼	日本耳鼻咽喉科学会会報
	末梢性眩暈と中枢性眩暈の簡易鑑別診断法	片桐主一	耳鼻咽喉科臨床
	ENG の適応について	片桐主一	耳鼻咽喉科
	聴神経腫瘍の診断　とくに外来で実施可能な検査法について	片桐主一	耳鼻咽喉科
	頭頸部外傷の神経耳科学検査	朴沢二郎	災害医学
	遠隔経過よりみた平衡機能検査法の問題点 ―特にメニエール病を中心として―	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	扁桃摘出術の適応	朴沢二郎	medicina
	聴神経腫瘍を疑わせた側頭骨転移癌の 1 例	朴沢二郎	耳鼻咽喉科
	前庭感覚器の SM および KM 中毒の病理学的研究	綿貫幸三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	扁摘術における結紮法の工夫	綿貫幸三	耳鼻咽喉科臨床
	前庭感覚上皮のゲンタマイシンによる病理変化	綿貫幸三	耳鼻咽喉科臨床
	前庭耳石器官における耳石分布様式	綿貫幸三	日本耳鼻咽喉科学会会報
	抗生物質によるコルチ器変性の修復機構	綿貫幸三	Audiology Japan
1972	Degeneration of the Otolithic Layers of the Otolothic Organs Due to Streptomycin Ototoxicity	Watanuki K	J Otolaryngology of Japan
	Degenerative changes of the otolithic layers of the vesticular organs in streptomycin-ototoxicosis	Watanuki K	Equilibrium Res Suppl
	睡眠時難聴幼児の ERA の域値のついて	沖津卓二	日本耳鼻咽喉科学会会報
	下咽頭、食道腫瘍と Pharyngeal Stasis	河本和友	日本気管食道科学会会報
	内耳性難聴の発生機序について	河本和友	東北医学雑誌
	浸出性中耳カタル	河本和友	耳鼻咽喉科
	浸出性中耳炎成立機転に関する一考察	河本和友	耳鼻咽喉科
	中耳結核の一症例	柿崎一郎	耳鼻咽喉科
	耳石器官の形態と機能（第二報）　一側迷路破壊後の眼球反対回施について	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	耳石器官の形態と機能（第一報）	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	聴神経腫瘍診断のためのスクリーニングテスト	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	椎骨動脈起始部周囲交感神経叢剥離術の適応症に対するセファドール使用成績	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	メニエール病におけるグリセロール試験結果とポルトマン手術成績との関係について	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	Lividomycin の聴器におよぼす影響について	堀　克孝	Audiology Japan
	Vistamycin の聴器におよぼす影響について	堀　克孝	CHEMOTHERAPY
	耳鼻咽喉科領域の急性感染症に対する SF-837 の使用経験	堀　克孝	診療と新薬
	アレルギー鼻粘膜上皮層の電子顕微鏡的観察	高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
1973	New test methods for estimation of facial weakness	Hozawa J	Tohoku J Exp Med
	Perivascular sympathectomy of the vertebral artery and its effect on the cervicovestibular syndrone	Hozawa J	Tohoku J Exp Med
	Labyrinthine compensatory eye position of the guinea pig	Kusakari J	Laryngoscope
	Human mast cells in the allergic nasal mucosa	Takasaka T	Tohoku J Exp Med
	Dysfunctions of Energy Releasing and Consuming Prosesses of the Cochlea	Thalmann R, Kusakari J	Laryngoscope
	Quantitative Approaches to the Ototoxicity Problem	Thalmann R, Miyoshi T	Audiology
	内耳液循環に関する実験的研究	伊勢郁夫	内耳生化学
	聴器毒による蝸牛管組織の障害	伊勢郁夫	Audiology Japan
	ラセン隆起部の微細構造と同部位における K.M. の影響	伊勢郁夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	浸出性中耳炎とその治療	河本和友	臨床と研究　別冊

	気道異物	河本和友	日本医事新報「ジュニア版」
	鼻副鼻腔のアスペルギルス症	河本和友	耳鼻咽喉科
	青色鼓膜	河本和友	日本医事新報
	聴器毒による内耳病変	金子　豊	耳鼻と臨床
	小脳の視運動性眼振に与える影響に関する実験的研究	山崎義春	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	舌癌の治療について　―約 9 年間の治療統計―	片桐主一	耳鼻と臨床
	前庭平衡機能検査より得られる情報	朴沢二郎	臨床神経学
	メニエール病に対する手術法の選択	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
1974	Averaged Electroencephalograhic Response to Intensity Modulated Tone	Okitsu T	Tohoku J Exp Med
	ポルトマン手術前後の眼振所見	伊藤善哉	Equilib Res
	詐聴における ERA の診断的意義について	沖津卓二	Audiology Japan
	滲出性中耳炎	河本和友	医学のあゆみ
	幼小児の呼吸困難	河本和友	医学のあゆみ
	急性中耳炎ならびに急性扁桃炎に対する 3′,4′-dideoxy-kanamycin B の 2 重盲検試験による薬効評価	河本和友	耳鼻と臨床
	耳鼻咽喉科領域の術後疼痛と腫脹に対する 31252-S の臨床効果	河本和友	薬理と治療
	滲出性中耳炎	河本和友	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	下咽頭悪性腫瘍の X 線所見について	河本和友	医学のあゆみ
	実験的漿液性内耳炎	金子　豊	耳鼻咽喉科臨床
	頭部外傷による Cervicovestibular syndrome	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	高圧肺動脈の圧迫による乳児気管支狭窄症に対する肺動脈吊り上げ術	鈴木康之	心臓
	鼻アレルギーに対する「リノビン」の使用経験	髙坂知節	耳鼻咽喉科臨床
1975	The structure of the utricular wall in albino guinea pigs	Tanaka K	Auris Nasus Larynx
	Normal and abnormal energy metabolism of the inner ear	Thalmann R, Miyoshi T	Otolaryngologic Clinics of North Am
	幼小児の滲出性中耳炎	河本和友	日本医誌
	鼓膜の可動性検査	河本和友	医学のあゆみ
	利尿剤と難聴	河本和友	医学のあゆみ
	耳鼻咽喉科領域の術後疼痛および腫脹に対する 17190R.P.（プロチジン酸）の使用経験	河本和友	The Clinical Report ―基礎と臨床―
	慢性上顎洞炎に対する抗生剤使用の検討	金子　豊	耳鼻と臨床
	頭部外傷後の心因性難聴症例	小野寺亮	日本災害医学会々誌
	内リンパ電位に関する電気生理学並びに生化学的研究　第 1 報　蝸牛内リンパ電位と Anoxia	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	エタクリン酸の EP に及ぼす影響並びにその作用機序について	草刈　潤	Audiology Japan
	Ouabain 中毒動物の EP の Anoxia に対する反応について	草刈　潤	内耳生化学
	内リンパ電位に関する電気生理学ならびに生化学的研究　第 2 報　膨大部内リンパ電位と Anoxia	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	平衡障害	朴沢二郎	臨床と研究
	メニエール病の手術適応をめぐって	朴沢二郎	治療
1976	Effects of anoxia and ethacrymic acid upon ampullar endolymphatic potential and upon high energy phosphates in ampullar wall	Kusakari J	Laryngoscope
	CG-A4T（Allopydin）の耳鼻咽喉科領域の術後疼痛に対する使用経験	河本和友	基礎と臨床
	急性化膿性中耳炎	河本和友	小児外科・内科
	いわゆる Burning Tongre の 3 症例	佐野浩一	耳鼻咽喉科
	口蓋扁桃・アデノイドの肥大によりうっ血性心不全をきたした 3 例	小林俊光	耳鼻咽喉科
	頭頚腫瘍患者の治療中における全身管理の問題点	神林潤一	耳鼻咽喉科
	内リンパ電位に関する電気生理学並びに生化学的研究　第 3 報　膨大部内リンパ電位と利尿剤	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	サリチル酸の蝸牛電位に及ぼす影響について	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	めまい発作の起り方に関するメニエール病と突発性難聴の比較	朴沢二郎	耳鼻咽喉科臨床
	めまいのみならず聴力改善を目的とした内リンパ嚢手術	朴沢二郎	日本耳鼻咽喉科学会会誌
1977	Ultrastructural changes of the nerve elements following disruption of the organ of Corti	Terayama Y, Kaneko Y	Acta Otolaryngol
	鼓膜可動性検査と Tympanoametry	沖津卓二	耳鼻咽喉科
	頭頂部中間反応（Middle Latency Response）について	沖津卓二	Audiology Japan
	慢性副鼻腔炎に対する sfer' case の臨床評価 ―二重盲検法による serratiopeptidase との比較―	河本和友	耳鼻咽喉科展望

	上顎洞炎の治療に対する検討	金子　豊	耳鼻と臨床
	頭頸部腫瘍術後感染に対する DKB の使用経験　特に他抗生剤との併用について	小野寺亮	耳鼻咽喉科臨床
	感音難聴を伴ったインフルエンザ中耳炎	青葉裕子	耳鼻咽喉科展望
	内リンパ電位に関する電気生理学並びに生化学的研究（4）（エタクリン酸及びウワバイン溶液による外リンパ灌流）	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	ブメタニドのモルモット内リンパ電位へ与える影響について	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	いわゆる static bone defect の一症例	飯野ゆき子	耳鼻咽喉科
	鼻副鼻腔粘膜病態の電子顕微鏡的研究	髙坂知節	耳鼻と臨床
1978	Single-cell layer membrane covering the degenerated cochlear duct after perily, phatic perpusion of streptomycin	Kaneko Y	Acta Otolaryngol
	Effect of ethacrynic acid, furosemide, and ouabain upon the endolymphatic potential and upon high energy phosphates of the stria vascularis	Kusakari J	Laryngoscope
	Reduction of the endcochler patential by loop diuretic bumetanide	Kusakari J	Acta Otolaryngol
	Changes of the stria vascularis induced by ethacrynic acid	Kasajma K	Auris Nasus Larynx
	長期間介在せる空気銃弾気管支異物症例	栗田口敏一	耳鼻咽喉科
	真珠腫性中耳炎にみられる J-結晶観察	伊勢郁夫	耳鼻と臨床
	電気眼振図を利用した視運動性眼振解発機構に対する前庭器の作用について	伊藤和也	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	幼小児のための補聴器の fitting についての私の考え	沖津卓二	聴覚言語障害
	中耳炎に対する最近の治療動向	河本和友	医事新報
	最近の中耳炎について	河本和友	医師会報
	滲出性中耳炎	河本和友	小児科診療
	滲出性中耳炎カタル	河本和友	耳鼻咽喉科
	副鼻腔慢性炎症の特徴	河本和友	耳鼻と臨床
	真珠腫における耳小骨破壊に関する我々の考え	金子　豊	耳鼻と臨床
	副鼻腔貯留液の抗菌作用について	金子　豊	耳鼻と臨床
	術後性上顎嚢胞の電子顕微鏡的研究	小野寺亮	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	副鼻腔嚢胞粘膜上皮の超微形態的研究	小野寺亮	P.C.E.M
	鼻中隔に発生した唾液腺型良性混合腫瘍の 1 例	小林俊光	耳鼻咽喉科
	真珠腫性中耳炎及び非真珠腫性中耳炎における耳小骨の組織学的研究	新川秀一	耳鼻と臨床
	Paper patch 及び中耳手術時の皮弁被覆材料について	新川秀一	耳鼻と臨床
	鼻前庭部正中に発生した平滑筋腫の 1 例（Vascular Leiomyoma）	神林潤一	耳鼻咽喉科
	内耳血流遮断時間と内リンパ電位の回復性に関する研究	神林潤一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Pepleomycin（NK631）の使用経験	草刈　潤	Japanese J Antibiotics
	真珠腫 matrix 内の pH	湯浅　涼	耳鼻と臨床
	中耳手術の術前検査としての耳管検査法	湯浅　涼	耳鼻と臨床
	慢性中耳炎における耳小骨の酸フォスファターゼ活性	飯野ゆき子	耳鼻と臨床
	真珠腫性中耳炎 133 例の臨床的観察	富岡幸子	耳鼻と臨床
	慢性中耳炎における耳小骨の X 線学的観察	六郷正暁	耳鼻と臨床
1979	Effect of ethacrynic adid upon the peripheral vestibular nystagums	Kusakari J	Adv Otorhinolaryngol
	Foreign bodies in the tracheobronchial tree a review of 110 cases	Saijo S	Arch Otorhinobryngol
	Frontal and ethmoidal mucocele	Takasaka T	J Otolaryngol Soc Australia
	各種条件下における蝸牛内直流電位に関する実験的研究	伊勢郁夫	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	三角波様回転刺激による眼振反応	伊藤善哉	Equlibrium Res
	インピーダンスオージオメトリーの学童検診への導入の試み	沖津卓二	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	聴性脳幹反応の耳垂　―頭頂と鼓膜―　頭頂の同時誘導記録	沖津卓二	耳鼻咽喉科臨床
	外耳道炎、中耳炎	河本和友	小児内科
	気道・食道の異物	河本和友	小児外科
	滲出性中耳炎の治療方針　滲出性中耳炎の増加現象	河本和友	耳鼻咽喉科臨床
	Gradenige 症候群	河本和友	現代医療
	血管状嚢腫	金子　豊	内耳生化学
	上顎洞の洗浄療法	金子　豊	耳鼻咽喉科
	慢性上顎洞炎の洞内貯留液の抗菌作用について	金子　豊	耳鼻咽喉科
	モルモット血管条の発達	上野陽之助	内耳生化学
	内耳局所免疫反応の電顕病理学的研究　第一報	新川秀一	内耳生理学
	突発的な聴力低下を呈した聴神経腫瘍の 2 症例	草刈　潤	耳鼻咽喉科
	Marsupialization Technique によるガマ腫の治療	飯野ゆき子	耳鼻と臨床

	ループ利尿剤投与時にみられるいわゆる “negative electrogenic potential” の検討	六郷正暁	Audiology Japan
1980	Bone destruction due to the rupture of a cholesteatoma sac : A pathogenesis of bone destruction in aural cholesteatoma	Kaneko Y	Laryngoscope
	Reersibility of the endolymphatic potential after tramsient anoxia	Kusakari J	Tohoku J Exp Med
	Study of a simultaneous lobe-vertex and membrane-vertex recording technique in auditory brainstem response	Okitsu T	ORL
	Atypical cilia of the human nasal mucosa	Takasaka T	Ann Otol Rhino Laryngol
	頭蓋内合併症（耳）	河本和友	耳鼻咽喉科
	滲出性中耳炎の診断	河本和友	耳鼻咽喉科臨床
	異物による頚部食道周囲膿瘍の 1 症例	橋本　省	日本気管食道科学会会報
	3 紙 disc による味覚定性定量検査（SKD-3）の臨床知見	三好　彰	薬理と治療
	X 線写真上内耳道に所見のない聴神経腫瘍の 4 症例の検討	小林俊光	耳鼻咽喉科
	耳下腺結核の 3 症例	小林俊光	耳鼻咽喉科
	耳鼻咽喉科領域の CT Scan 検査法　第 1 報 : 頭頸部腫瘍の翼口蓋窩等への進展について	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	血管条に関する電気生理学並びに生化学的研究	草刈　潤	25　オージオロジー学会勉強用
	聴覚障害の可逆性と非可逆性は予知し得るか	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	超音波洗浄器の聴器に及ぼす影響について	大山健二	臨床耳科
	副鼻腔炎に対する Pipemidic acid の薬効評価	馬場駿吉	耳鼻と臨床
	小脳橋角部腫瘍における聴性脳幹反応の検討	六郷正暁	耳鼻咽喉科臨床
	めまい・平衡障害例におけるセロクラール（酒石酸イフェンプロジル）の使用経験　―末梢性障害例における検討―	六郷正暁	耳鼻咽喉科臨床
	超高圧電子顕微鏡による内耳の観察	髙坂知節	PCEM
	百万ボルト電子顕微鏡下の内耳微細構造について	髙坂知節	第 18 会日耳鼻総会特別講演モノグラフ
	Depression に合併した味覚障害の一症例	三好　彰	味と匂いのシンポジウム
1981	The effect of transient anoxia upon the cochlear potentials	Kusakari J	Auris Nasus Larynx
	ABR audiometry in the deagnosis of cerebellopontine angle tumors	Kusakari J	ORL
	The inner ear dysfunction in hemodialysis patients	Kusakari J	Tohoku J Exp Med
	中耳炎について	河本和友	日本医事新報
	滲出性中耳炎	河本和友	日本医事新報ジュニア版
	多形滲出性紅斑症候群の一症例	三好　彰	耳鼻咽喉科展望
	咽喉頭異常感を言訴として当科受診した Depression の 1 症例	三好　彰	耳鼻と臨床
	Depression による咽喉頭異常感症々例の検討	三好　彰	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	聴神経腫瘍及び脳幹部腫瘍に対する味覚検査の応用	三好　彰	味と匂のシンポジウム論文集
	インピーダンスオージオメトリーの学校検診への導入の試み（第 2 報）	柴原義博	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	腎透析患者の聴力並びに平衡機能検査について	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	嗅覚の認知域値測定に関する一考察	池田勝久	味と匂のシンポジウム論文集
	手術的療法　―電顕病理学的立場―	髙坂知節	耳鼻と臨床
	抗アレルギー剤 Traxanox（Y-12141）の鼻アレルギーに対する臨床的検討（第 1～3 報）	髙坂知節	耳鼻咽喉科展望
	超高圧電子顕微鏡による聴器の構造	髙坂知節	神経研究の進歩
	喉頭癌の頸部郭清により発見された甲状腺癌の 1 例	森　永、草刈　潤	手術
1982	上顎に発生した Odonto-Ameloblastoma の一例	中谷俊彦	耳鼻咽喉科臨床
	滲出性中耳炎を対象とした集団健診のデータ処理	伊藤和也	耳鼻と臨床
	胎児の感覚器疾患　A. 胎児・新生児期における	河本和友	臨床胎児医学
	胎児の感覚器疾患　B1　耳・鼻	河本和友	臨床胎児医学
	C 先天性難聴	河本和友	臨床胎児医学
	カナマイシンの内耳への影響	原　晃	Ear Res Jpn
	Kainic acid の AP への影響	荒川栄一	Ear Res Jpn
	Keratosis obturams に対する Urea 外用の効果	三好　彰	臨床耳科
	X-P 及び CT scan 上比較的特異な所見を呈した副鼻腔嚢胞の 2 症例	三好　彰	耳鼻咽喉科展望
	蝸牛における HRP の動脈灌流実験	新川秀一	Ear Res Jpn
	球形嚢内リンパ電位とアノキシア	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床

	耳鼻咽喉科領域の CT scan 検査法　第 2 報　耳下腺腫瘍の診断	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	第一鰓裂奇形の 1 症例	草刈　潤	耳鼻咽喉科
	ループ利尿剤と球形嚢内リンパ電位	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	急性化膿性中耳炎および慢性中耳炎急性増悪症に対する AM-715 の薬効評価 — ABPC との二重盲検比較試験—	馬場駿吉、 橋本　省	耳鼻咽喉科臨床
	ロック音楽による急性音響外傷の 2 症例	富岡幸子	耳鼻咽喉科
	蝸牛内リンパ電位（EP）の negative potential に関する検討	六郷正暁	Audiology Japan
	抗アレルギー剤の鼻アレルギー薬効検定に及ぼす心身医学的因子の影響 Trasanox（Y-12141）の二重盲検テストから	高坂知節	心身医学
	百万ボルト電子顕微鏡下の内耳微細構造について	高坂知節	東北医学雑誌
1983	Orgnic acids and anaerofic microorganiams in the contents of the cholesteatoma sac	Iino Y	Ann Oto Rhino Laryngol
	Generation mechanism of the negative endto-cochlear potential during early stage of anoxia	Kusakari J	ORL
	High-voltage electron microscopic study of the inner ear	Takasaka T	Ann Otol Rhinol Laryngol
	低体温によるモルモット蝸牛内電気現象に及ぼす影響	稲村直樹	Ear Res Jpn
	低体温麻酔下における蝸電図並びに聴性脳幹反応の変化について	稲村直樹	Audiology Japan
	滲出性中耳炎のティンパノグラム　—モデル実験による考察—	遠藤里見	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	通年性鼻アレルギーに対する N-5′ の臨床評価 —多施設群間比較二重盲検法による検討—	奥田　稔、 高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	環境庁委託研究結果報告書　大気汚染健康影響調査 —鼻アレルギーの成因に関する臨床疫学的研究—	河本和友	鼻疾患と環境研究会
	側頭骨の CT　—特に内耳道を中心に—	橋本　省	東北 CT スキャン研究会誌
	聴神経腫瘍の CT　—小腫瘍の診断について—	橋本　省	CT 研究
	内有毛細胞神経終末の微細構造について（第 1 報）	橋本　省	Ear Res Jpn
	滲出性中耳炎貯留液のライソソーム酵素活性	原　　晃	Ear Res Jpn
	両側反復性交代性顔面神経麻痺の一例	荒川栄一	Facial N. Res. Jpn
	内リンパ水腫における蝸牛及び球形嚢の EP	荒川栄一	Ear Res Jpn
	負の EP が正常下にも存在することの根拠	小林俊光	Audiology Japan
	解糖阻害剤モノヨード酢酸の蝸牛電気現象への影響および CM2 の発生機序	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Anoxia-sensitive Negative EP の動物種差に関する検討	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	末梢性耳性めまいに対する adenosine triphosphate の臨床評価 —多施設二重盲検法による betahistine mesylate との比較—	水越鉄理、 草刈　潤	医学のあゆみ
	内耳障害モデル動物における N1 潜時の検討	草刈　潤	耳鼻咽喉科
	蝸牛から記録出来る電気現象について	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	中耳の高分解能 CT　—その有効性、診断の限界、臨床応用について—	池田勝久	耳鼻咽喉科
	急性化膿性中耳炎および慢性化膿性中耳炎急性増悪症に対する Norfloxasin の薬効評価	馬場駿吉	耳鼻と臨床
	急性化膿性中耳炎および慢性化膿性中耳炎急性増悪症に対する 9,3″-diacetylmideccycin（MOM）の薬効評価	馬場駿吉、 河本和友	CHEMOTHERAPY
	慢性中耳炎に対する Combipenix の臨床的、細菌学的検討	飯野ゆき子	診療と新薬
	耳鼻咽喉科感染症における Cefadroxil の使用経験	飯野ゆき子	The Japanese Journal of Antibiotics
	Surfer's ear（外耳道 exostosis）の 1 症例	飯野ゆき子	耳鼻咽喉科
	鼻アレルギーに対する E-0659（Azelasrine）の長期投与における臨床的検討	高坂知節	耳鼻と臨床
	通年性鼻アレルギーに対する HC20-511（ketotifen）と Clemastine fumarate との二重盲検比較試験による臨床的検討	高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	Cefotiam の化膿性中耳炎に対する薬効評価 — Cefazolin との比較対照試験—	河本和友	耳鼻咽喉科展望
	慢性副鼻腔炎に対するミナトール P の二重盲検法による臨床評価	河本和友	Clin Eval
1984	The bone-resorbing activities in tissue culture of lipopolysaccharides from the bacteria actino bacillus actinomycetemcomitans, bacteroides gingivalis and capnocytophaga ochracea isolated from human mouths	Iino Y	Archs oral Biol
	Prolonged maintenance of endocochlear potencial by vascular perfusion with media devoid of oxygen carriers	Kobayashi T	Archives of ORL
	Effect of hypothermia upon the electrochleogram and auditory evoked brainstem response	Kusakari J	Tohoku J Exp Med
	Effect of kainic acid upon N1 latengy	Kusakari J	Laryngoscope
	A multi-centre, double-blind study of serrapeptase versus placebo in post-antrotomy buccal swelling	Tachibana M, Kawamoto K	Pharmatherapeutica
	Supprot of cchlear metafobic and ion transport processes solely by perilymphatic perfusion	Marcus DC, Kobayashi T	Hear Res

	Three dimensional reconstructions of the neural terminals on the guinea pig outer hair cells	Takasaka T	Ear Res Jpn
	耳鼻科領域における乳糖分解酵素製剤 S-2107 の使用経験	粟田口敏一	基礎と臨床
	低体温における NARROW BAND AP	稲村直樹	Audiology Japan
	低体温の蝸牛内電位（AP, SP, CM, EP）に及ぼす影響　—第 1 報—	稲村直樹	Audiology Japan
	滲出性中耳炎の病態と治療	河本和友	耳鼻咽喉科領域の最新の進歩
	環境庁委託研究結果報告書　大気汚染健康影響調査 —鼻アレルギーの成因に関する臨床疫学的研究—	河本和友	鼻疾患と環境研究会
	滲出性中耳炎の臨床像	河本和友	耳鼻咽喉科
	日本耳鼻咽喉科学会総会のご案内	河本和友	耳鼻咽喉科展望
	仙台市近郊における幼稚園、小学校健康診断について	河本和友	昭和 59 年度環境庁委託研究結果報告書、大気汚染健康影響調査、鼻疾患と環境研究会
	内有毛細胞神経終末の微細構造について（第 2 報）	橋本　省	Ear Res Jpn
	急性上気道炎に対するフルルビプロフェンの臨床試験	橋本　省	Jpn Pharmocol Ther
	耳鼻咽喉科の核磁気共鳴（NMR）— CT	橋本　省	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	中耳貯留液のライソゾーム酵素活性	原　　晃	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	内リンパ水腫動物における球形嚢並びに蝸牛内リンパ電位について	荒川栄一	耳鼻咽喉科臨床
	カラゲニン注入による実験的滲出性中耳炎	柴原義博	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	一側聾・他側 CP の両側内耳奇形	小林俊光	耳鼻咽喉科
1984	喉摘後に魚骨誤嚥による下咽頭皮膚瘻を形成した症例	小林俊光	耳鼻咽喉科
	虚血下の蝸牛における外リンパ経由酸素供給による EP の回復性	小林俊光	Audiology Japan
	Jannetta 手術および聴神経腫瘍手術中の蝸電図・ABR 同時記録の経験	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	滲出性中耳炎の CT 像とティンパノグラムの相関	小林俊光	耳鼻咽喉科
	中耳腔のガス分析（第一報）	草刈　潤	Ear Res Jpn
	聴神経腫瘍の診断　—小腫瘍の診断を中心に—	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	聴神経腫瘍の治療	草刈　潤	臨床耳科
	「蝸牛神経活動電位 N1」— AP（N1）に関する解説—（その他）	草刈　潤	Ear Res Jpn
	メニエール病に対するイソソルバイドの効果について	草刈　潤	耳鼻咽喉科臨床
	超音波刺激による蝸電図	大山健二	Audiology Japan
	内耳における超音波受容の特殊性	大山健二	Audiology Japan
	小児滲出性中耳炎の CT による病態と治療効果の解析	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	慢性副鼻腔炎等に対するレフトーゼの治療成績 —成人と小児の臨床効果の比較—	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	耳鼻咽喉科領域のアレルギーをめぐって	髙坂知節	日本医事新報
	滲出性中耳炎の慢性化因子に関する実験的病理学的解析	髙坂知節	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	実験的中耳炎における耳管粘膜の病態	髙坂知節	セラピューティック・リサーチ
	中耳・耳管粘膜の機能的形態学　—正常と病態の比較—	髙坂知節	耳鼻咽喉科
1985	Clinical and experimental studies on the pathogenesis of otitis media with effusion	Kawamoto K	Auris Nasus Larynx
	Forward-backward tracing tympanometry in the diagnosis of middle ear pressure	Kobayashi T	Auris Nasus Larynx
	Gas analysis of the middle ear cavity in normal and pahological conditions	Kusakari J	Auris Nasus Larynx
	Ultrasonic electrocochleography in guinea pig	Ohyama K	Hear Res
	Histopathological changes of the eustachain tube in OME animal models	Takasaka T	Auris Nasus Larynx Suppl
	Mucociliary dysfunction in experimental otitis media with effusion	Takasaka T	Am J Otolaryngol
	低体温の蝸牛内電位に及ぼす影響　—第二報—	稲村直樹	Audiology Japan
	通気前後の Tympanogram	沖津卓二	耳鼻咽喉科展望
	滲出性中耳炎の疫学概論	河本和友	JOHNS
	第 86 回日本耳鼻咽喉科学会総会から	河本和友	日本医師会雑誌
	小児の滲出性中耳炎の治療	河本和友	医薬ジャーナル
	滲出性中耳炎の発症とその対策総括研究報告	河本和友	耳鼻咽喉科展望
	Verrucous carcinoma の 2 症例	菊地俊彦	耳鼻咽喉科
	鼻アレルギー特異的減感作療法の遠隔成績について（アンケート調査を中心として）	菊地俊彦	免疫アレルギー
	滲出性中耳炎におけるセファランチン大量内服療法とその効果	原　　晃	耳鼻咽喉科展望
	中耳手術の術前検査法としての CT の有用性	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床

	術後に骨導聴力の著明な改善をみた真珠腫による迷路瘻孔 ―2症例の報告―	小林俊光	耳鼻咽喉科
	Anoxia-sensitive Negative EP の蝸牛内責任部位	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	正円窓への酸素吹き付けと内耳機能	小林俊光	Ear Res Jpn
	順行逆行ティンパノメトリ（仮称）	小林俊光	臨床耳科
	鼓膜小穿孔耳のティンパノグラム	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	順行逆行ティンパノメトリー	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	内リンパ水腫における利尿剤の効果	新川秀一	Ear Res Jpn
	TV 画面を用いた簡易眼運動検査	川瀬哲明	耳鼻咽喉科
	後頭蓋窩腫瘍の ABR 所見について	草刈　潤	臨床耳科
	感音難聴における N1 潜時延長の発症機序について	草刈　潤	日本音響学会誌
	内耳における電気生理学的研究	草刈　潤	東北医学雑誌
	上顎神経鞘腫の 1 症例	池田勝久	耳鼻咽喉科
	実験的腎不全動物における蝸牛の電気生理学的研究	池田勝久	Audiology Japan
	ビタミン D 欠乏ラットの蝸牛電位への影響	池田勝久	Ear Res Jpn
	耳介癌の 2 症例	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	ビタミン D 欠乏ラットにおける外リンパ液 Ca^{2+} 濃度	池田勝久	Audiology Japan
	実験的慢性中耳炎・電気生理学的研究	池田勝久	Ear Res Jpn
	嗅神経を含んだ頭蓋底脳髄膜瘤の 1 例	天笠雅春、 草刈　潤	NEUROLOGICAL SURGERY
	中耳貯溜液中のエンドトキシン	飯野ゆき子	耳鼻咽喉科展望
	両側性真珠腫と retraction pocket	飯野ゆき子	耳鼻咽喉科
	中耳粘膜における Arthus 反応　―実験的滲出性中耳炎モデル―	朴沢孝治	Tohoku Univ Med Sch
	スギ花粉症の現状と治療	高坂知節	アレルギー臨床
	花粉症症例	高坂知節	アレルギーの臨床
	花粉症	高坂知節	検査と技術
	滲出性中耳炎の発症と成因に関する考察	高坂知節	耳鼻咽喉科展望
1986	Stereo photography of the temporal bone	Caparosa RJ, Shibahara Y	J Biol Photogr
	Altering ATPase activity between guinea pigs' sensory hair cells and afferent nerve endings during the experimentally induced vertiginous attack	Hozawa K	Ear Res Jpn
	The effect of the perilymphatic ionic composition on the N1 response of guinea pig with special reference to change in potassium and sodium ions	Ikeda K	Ear Res Jpn
	Maintenance of cochlear function solely by perilymphatic perfusion	Kobayashi T	Ear Res Jpn
	Tympanograms in ears with small perforations of the tympanic membranes	Kobayashi T	Arch Otolaryngol Head Neck Surg.
	Saccular and cochlear endolymphatic potentials in experimentally induced endolymphatic hydrops of guinea pig	Kusakari J	Acta Otolaryngol
	Effect of diuretics on endlymphatic hydrops	Shinkawa H	Acta Otolaryngol
	Histopathology of the inner ear in Usher's syndrome as observed by light and electron microscopy	Shinkawa H	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Mast cell degranulation in nasal polyps	Takasaka T	Acta Otolaryngol Suppl
	Mesenchyme remaining in human temporal bones	Shibahara Y	Otolaryngol Head Neck Surg
	低体温の蝸牛内電位に及ぼす影響　―第三報―	稲村直樹	Audiology Japan
	鼻副鼻腔領域における NMR-CT	稲村直樹	日本鼻科学会会誌
	Tympanogram と中耳腔圧の関係　―モデル実験からの考察―	沖津卓二	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Acoustic Otoscope の臨床的検討	沖津卓二	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	臨床ノート　滲出性中耳炎の診療	河本和友	耳鼻咽喉科臨床
	鼻アレルギー特異的減感作療法の遠隔成績	菊地俊彦	耳鼻咽喉科
	緑膿菌感染を伴った慢性化膿性中耳炎の治療 ―細菌学的検索と鼓室形成術術後経過―	菊地俊彦	耳鼻咽喉科臨床
	耳鼻咽喉科における MRI（NMR-CT）の現況と将来	橋本　省	耳鼻咽喉科
	中耳炎の最近の特徴	金子　豊	小児科 MOOK 小児の目・耳・鼻・のど
	低音障害型感音性難聴と I 波潜時	渋谷　守	臨床耳科
	鼻副鼻腔の嚢胞性疾患および良性腫瘍	小野寺亮	耳喉頭頸 MOOK
	側頭骨含気腔容積と Static Compliance の関係　―モデル実験による検討―	小林俊光	臨床耳科
	虚血蝸牛における経蝸牛窓酸素供給の有効性に関する実験的研究	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	蝸牛の生体外灌流法　―その発達と今後の展望―	小林俊光	Ear Res Jpn
	起床直後の中耳腔圧	新川秀一	臨床耳科

	エタクリン酸の前庭神経一次ニューロン自発放電に対する影響	川瀬哲明	Ear Res Jpn
	ループ利尿剤と耳石器反射 ―モルモット眼球反対回旋に与える影響について―	川瀬哲明	耳鼻咽喉科臨床
	ループ利尿剤とモルモット眼球反対回旋	川瀬哲明	Ear Res Jpn
	聴神経腫瘍の長期経過観察例について	草刈　潤	臨床耳科
	めまいの臨床	草刈　潤	宮城県医師会報
	疾患別薬物療法 中耳炎	草刈　潤	日本臨床
	分担別報告　病態生理　―生理―　メニエール病モデル動物としての内リンパ水腫動物の検討	草刈　潤	厚生省特定疾患前庭機能異常調査研究班　昭和 61 年度研究報告書
	交叉性オリーブ蝸牛束刺激下の超音波 AP	大山健二	Audiology Japan
	慢性関節リウマチの滑膜における細胞動態	沢井高志、朴澤孝治	関節外科
	Nitrogen mustard-N-oxide による蝸牛障害モルモットの N1 潜時の延長について（Narrow-band AP による周波数分析）	池田勝久	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	2 経路注入療法におけるシスプラチンとチオ硫酸ナトリウムの体内動態について	池田勝久	癌と化学療法
	ビタミン D 欠乏によるラットの蝸牛電位への影響	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	副甲状腺機能低下症患者の神経耳科学的所見	池田勝久	臨床耳科
	Kallmann 症候群の 2 症例の嗅覚検査について	池田勝久	耳鼻咽喉科
	内リンパ Ca^{2+}濃度の測定 ―酸素欠乏；フロセマイド、アセタゾラミドの影響―	池田勝久	Audiology Japan
	内リンパの pH と HCO_3^-の測定 ―酸素欠乏；フロセマイド、アセタゾラミドの影響―	池田勝久	Audiology Japan
	Hunt 症候群における抗ウィルス剤の適応と効果	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	滲出性中耳炎の和漢薬（ツムラ柴苓湯による治療効果）	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	マクロファージ分化活性化因子の免疫病変における重要性	能勢真人、朴澤孝治	Medical Immunology
	化膿性中耳炎に対する Norfloxacin の臨床効果について ― Pipemidic acid との二重盲検試験による比較検討―	馬場駿吉、河本和友	耳鼻と臨床
	Ramsay-Hunt 症候群の ABR 所見について	武山　実	耳鼻咽喉科臨床
	実験的滲出性中耳炎における免疫複合体の生理活性	朴沢孝治	Ear Res Jpn
	免疫複合体による実験的滲出性中耳炎モデルにみられる粘膜病変	朴沢孝治	Therapeutic Research
	鼻のアレルギー　―特に花粉症について―	髙坂知節	宮城県医師会報
	鼻副鼻腔領域の出血　鼻粘膜血管の構築	髙坂知節	JOHNS
	超高圧電顕によるらせん器聴毛ならびに神経終末の観察	髙坂知節	細胞
	昭和 60 年度　環境庁委託研究結果報告書　大気汚染健康影響調査 ―鼻アレルギーの成因に関する臨床疫学的研究―	内田　豊、河本和友	鼻疾患と環境研究会
	静注による VP-16-213（Etoposide）の第 1 相試験	涌井　昭、河本和友	癌と化学療法
1987	Topographic diagnosis of facial paralysis by the assay of lysozyme concentration in tears	Hara A	Acta Otolaryngol
	Progressive hearing loss from strial dysplasis	Hashimoto S	Ann Otol Rhinol Laryngol
	The value of 'Trapezoid rotation test' by contraves computerized rotary chair system	Hozawa J	Acta Otolaryngol
	Effect of high perilymphatic potassium concentration on the guinea pig vestibular sensory epithelium	Hozawa K	Acta Otolaryngol Suppl
	Biological property of immune complex to prolong the duration of otitis media with effusion	Hozawa K	Acta Otolaryngol Suppl
	Prognosis and endotoxin contents in middle ear effusions in cases after acute otitis media	Iino Y	Acta Otolaryngol Suppl
	The effect of the cationic composition in perilymph upon the N1 latency of the guinea pig	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	The Ca^{2+} activity of cochlear endlymph of the guinea pig and the effect of inhibitors	Ikeda K	Hear Res
	Extracranial chondroma of the skull base	Ikeda K	Arch Otorhinol
	Cochlear potentials of guinea pigs with experimentally induced renal failure	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	The effect of vitamin D deficiency on the cochlear potentials and the perilymphatic ionized calcium concentration of rats	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	N1 latency prolongation in the guinea pig cochlea treated with nitrogen mustard-N-oxide studied by narrow band analysis	Ikeda K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Sensorineural hearing loss associated with hypoparathyroidism	Ikeda K	Laryngoscope

	Pathophysiology and prognosis of sudden deafness with special reference of the N1 latency	Ikeda K	ORL
	Early effects acetazolamide on anionic activities of the guinea pig endlymph : Evidence for active function of carbonic anhydrase in the cochlea	Ikeda K	Hear Res
	Effect of hypothermia on the cochlear potentials	Inamura N	Acta Otolaryngol Suppl
	Effect of Iodoacetic acid upon cochlear potentials	Kobayashi T	Acta Otolaryngol
	Forward-backward tracing tympanometry	Kobayashi T	Acta Otolaryngol Suppl
	Correlation between morbid adenoid and atelectatic ear	Kowata I	Acta Otolaryngol
	Time-related changes in cochlear potentials in guinea pigs with experimentally induced endolymphatic hydrops	Kusakari J	Acta Otolaryngol
	Clinical report : cylindrical cell papilloma of the paranasal sinus	Kusakari J	Arch Otorhinolaryngol
	Sound perception in the ultrasonic region	Ohyama K	Acta Otolaryngol
	CT scan findings in blue ear drum	Sakurai T	Acta Otolaryngol
	Ultrastructural pathology of the middle ear mucosa in otitis media with effusion	Shibuya M	Acta Otolaryngol Suppl
	Three dimensional reconstructions of neural terminals on outer hair cells in guinea pig	Shinkawa H	東北大学百万ボルト電顕室研究報告
	Positive intratympanic pressure in the morning and its etiology	Shinkawa H	Acta Otolaryngol
	Three dimensional reconstruction of neural terminal on outer hair cells in guinea pig（fourth report）	Shinkawa H	Ear Res Jpn
	Serial section reconstruction of the guinea pig outer hair cells as studied with a high-voltage electron microscope and a computer-graphic display	Takasaka T	Acta Otolaryngol Suppl
	A case-control study of nasal cancers	Takasaka T	Acta Otolaryngol Suppl
	New techniques for three-dimensional reconstructions : Computer-aided 3-D analyses on the acoustic nerve terminals as studied with high-voltage electron microscopy（HVEM）	Takasaka T	J Clin Electron Microscopy
	Sensation of aural fullness and its treatment with an autonomic nerve blocking agent	Yuasa R	Acta Otolaryngol
	耳鼻咽喉科	粟田口敏一	化学療法の領域
	難治性中耳炎の細菌学的検討	粟田口敏一	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	スギ花粉症に対するトラニストの予防効果（第一報） ―トラニスト非投与群との比較検討試験―	伊東善哉	耳鼻咽喉科展望
	音響外傷に対する低体温の影響について	伊東善哉	Ear Res Jpn
	耳鼻咽喉科領域の MRI ― NMR パラメーターへ影響を及ぼす因子および諸疾患における鑑別―	稲村直樹	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	強大音響負荷下における蝸牛遠心性線維の役割	稲村直樹	Ear Res Jpn
	鼻過敏症に対する Sch 1000 の鼻汁抑制効果（第 1 報） ―薬効および用量の検討―	岡本途也、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	口腔より深部に刺入せる箸異物の 2 症例	菊地俊彦	耳鼻咽喉科臨床
	大錐体神経領域の電気味覚域値測定による末梢性顔面神経麻痺障害部位診断の試み	菊地俊彦	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	マウス内耳原基の頂面微細構築について	菊地俊彦	Ear Res Jpn
	画像診断　― MRI ―	橋本　省	耳鼻咽喉科診療 Q&A
	好中球走化能の加齢などによる変動	栗原　篤	アレルギー今日の考え方
	成人例、真珠腫性中耳炎の耳管軟性鏡下、通気の VTR	古和田勲	臨床耳科
	鼓室形成術後の含気化の問題	桜井時雄	臨床耳科
	喉頭鏡下顕微鏡手術（ラリンゴマイクロサージェリー）後の味覚障害 ―症例の報告と原因の検討―	桜田隆司	耳鼻咽喉科
	2 年間視力障害が続いた蝶形骨洞嚢胞の一症例	桜田隆司	山形市立病院済生館医誌
	上咽頭癌の放射線治療	笹内清司、草刈　潤	臨床放射線
	東北大学耳鼻咽喉科における入院患者統計とその推移	志賀伸之	耳鼻咽喉科臨床
	〈目で見る耳鼻咽喉科〉鼓膜小穿孔耳のティンパノグラム	小林俊光	耳鼻咽喉科
	難聴・髄液漏症候群	小林俊光	日本臨床
	発見の遅れた聴神経腫瘍　―慢性中耳炎との合併症―	小林俊光	耳鼻咽喉科
	内耳奇形に合併した髄液漏　―内耳道を交通路と確認した症例―	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	ティンパノグラムの利用法	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	強大音響負荷時の蝸牛内酸素分圧の動態	小林俊光	Ear Res Jpn
	蝸牛の生体外灌流法　―その発達と今後の展望―	小林俊光	内耳の病態をさぐる
	Mondini 奇形	新川秀一	日本臨床
	起床時の中耳腔陽圧とその原因	新川秀一	日本耳鼻咽喉科学会会誌

	内耳における超高圧電子顕微鏡の応用 ―蝸牛外有毛細胞神経終末の三次元的観察―	新川秀一	内耳の病態をさぐる
	モルモット自発眼振モデル（K^+イオン内耳導入）における上前庭神経一次ニューロン自発放電の経時的観察 ―外リンパ高カリウム化の一次ニューロンへの影響―	川瀬哲明	耳鼻咽喉科臨床
	聴神経腫瘍の増大速度に関する検討	草刈　潤	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Meniere 病	草刈　潤	日本臨床
	メニエール病モデル動物としての内リンパ水腫動物の検討	草刈　潤	Equilibrium Res Suppl
	動物実験による超音波聴覚の電気生理学的研究	大山健二	東北医学雑誌
	種々なる液体、特にその浸透圧の鼻粘膜上皮に与える形態学的影響について	大平裕子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	基準嗅覚検査における判別域値の提案（嗅覚正常者への試行）	池田勝久	耳鼻咽喉科
	外リンパイオンの組成変化の N1 反応への影響 ―第一報、K^+、Na^+について―	池田勝久	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	外リンパのイオン組成変化の N1 反応への影響　―第 2 報、Ca^{2+}について―	池田勝久	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	柴胡加竜骨牡蛎湯による咽喉頭異常感症への治療成績	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	頭蓋外頭蓋底軟骨腫の一症例	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	柴朴湯による咽頭異常感症の治療成績	池田勝久	耳鼻と臨床
	副甲状腺機能低下症患者における聴力障害	池田勝久	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	モルモット蝸牛内リンパイオン濃度の音響外傷による影響	池田勝久	Ear Res Jpn
	咽頭および口腔の炎症性疾患に対するアズノール ST の臨床効果	池田勝久	医学と薬学
	基準嗅覚検査における判別閾値の提案（嗅覚障害者への応用）	池田勝久	耳鼻咽喉科
	突発性難聴における N1 潜時について	池田勝久	臨床耳科
	音響刺激の蝸牛電位に与える影響について	武山　実	Ear Res Jpn
	慢性中耳炎の術前耳管機能検査	末武光子	臨床耳科
	重篤な再生不良性貧血に合併した鼻副鼻腔アスペルギルス症 2 症例	末武光子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	笑気麻酔下における中耳腔圧の変化	鈴木秀明	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	血管条におけるイオンの動向　― K、Cl、および Na を中心に―	六郷正暁	内耳の病態をさぐる
	中耳の動特性解析　―人工中耳モデルによる検討―	和田　仁、小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	滲出性中耳炎の漢方治療　Oriental medicine in otitis media with effusion	髙坂知節	PTM（Physicians' Therapy Manual）
	スギ花粉症と気象条件　―飛散予報への可能性を探る―	髙坂知節	日本医事新報
	頭頸部癌臨床の現況 ―教授就任記念講演―	髙坂知節	東北医学雑誌
	真珠腫における骨吸収機序	髙坂知節	耳鼻咽喉科
	急性中耳炎の検査	髙坂知節	耳喉頭頸 MOOK
	超高圧電子顕微鏡とコンピューターの応用による三次元的形態学	髙坂知節	PCEM（Tohoku Univ. Med. School）
	鼻アレルギーの発症機序からみた治療方針	髙坂知節	医報フジ
1988	Computer-aided three-dimensional reconstruction and morphometry of the outer hair cells of the guinea pig cochlea	Hashimoto S	Acta Otolaryngol
	Ionic changes in cochlear endolymph of the guinea pig induced by acoustic injury	Ikeda K	Hear Res
	Change of the permeability of round window membrane in otitits media	Ikeda K	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Patassium ion conductance of the cochlear partition : Differences between the chinchilla and guinea pig	Ikeda K	Hear Res
	Magnesium ion activity in the mammalian endolymph measured with ion-selective microelectrodes	Ikeda K	Arch Otorhinolaryngol
	Calcium transport mechanism in the endolymph of the chinchilla	Ikeda K	Hear Res
	Treatment of secretory otitis media with Kampo medicine	Ikeda K	Arch Otorhinolaryngol
	Electrochemical aspects of monobalent ions of the stria vascularis in the chinchilla	Ikeda K	Society for neuroscience
	Clinical investigation of olfactory and auditory function in type pseudohypoparathyroidism : participation of adenylate cyclase system	Ikeda K	J Laryngol Otol
	The effects of various inhibitors on ion transport mechanisms in mammalian cochlea	Ikeda K	Second International Symposium on Meniere's Disease
	Electrochemical aspects of calcium ions in the stria vascularis	Ikeda K	J Acoust Soc Am
	A case of carcinoid tumor of the middle ear producing peptide hormones	Kambayashi J	Auris Nasus Larynx
	Development of apical-surface structures of mouse otic placode	Kikuchi T	Acta Otolaryngol
	Electrogustometry of the soft palate as a topographic diagnostic method for facial paralysis	Kikuchi T	Acta Otolaryngol

	Tympanometric diagnosis of the aditus block in chronic otitis media	Kobayashi T	Choleastoma and Mastoid Surgery（Proc. of the 3rd Int. Conf. on Cholestoma and Mastoid Surgery）
	Bone resorption mechanism of cholesteatoma study of decalcified ossicle	Koike S	Cholesteatoma and Mastoid Surgery
	Studies with electrocochleography and audiology brainstem response in Ramsay Hunt symdrome	Kusakari J	Acta Otolaryngol Suppl
	Electorophysiological evaluation of the guinea pig with endolymphatic hydrops as an animal model of meniere's disease	Kusakari J	Second International Symposium on Menieres Desease Campridge
	The effects of cetrimide and potassium bromate on the potassium ion concentration in the inner ear fluid of the guinea-pig	Morizono T, Ikeda K	Physiologia bohemoslobaca
	Volume flow rate of perilymph in the guinea-pig cochlea	Ohyama K	Hear Res
	Frequency and location of congenital anomalies of the middle and inner ears : a human temporal bone histopathological study	Sando I, Shibahara Y	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Congnital middle and inner ear anomalies	Sando I, Shibahara Y	Acta Otolaryngol
	Histopathologic study of eustachian tube in cleft palate patients	Shibahara Y	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Histopathological study on the human tympanic membrane and middle ear mucosa with secretory otitis media	Shinkawa H	J Clin Electron Microscopy
	Relation of prognosis of peripheral facial nerve palsy to the period between onset of illness and date of denervation	Takahashi K	Tohoku J Exp Med
	各科領域における化学療法の実際～耳鼻咽喉科	粟田口敏一	月刊　臨床と研究
	中耳手術後の鼓索神経の障害と回復について	伊東善哉	臨床耳科
	中耳手術後の鼓索神経の障害について ―電気味覚域値と顎下腺腫瘍流量の変化―	伊東善哉	耳鼻咽喉科臨床
	スギ花粉飛散に与える気象の影響	稲村直樹	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	耳鼻咽喉科領域感染症に対する CS-807 の臨床的検討	稲村直樹	CHEMOTHERAPY
	抗アレルギー薬 Traxqqnox（Y-12141）の通年性鼻アレルギーに対する臨床的検討　―多施設二重盲検法による Tranilast との比較試験―	奥田　稔、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	抗アレルギー剤 Tazanolast（WP-833）の鼻アレルギーに対する臨床的検討 ―至適量の検討―	奥田　稔、高坂知節	日本鼻科学会会誌
	鼻過敏症に対する Sch 1000 の鼻汁抑制効果（第 2 報） ―プラセボとの群間比較二重盲検試験―	岡本途也、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	内耳奇形による髄液漏の 1 治療例	加藤正哉、小林俊光	脳神経外科
	化膿性中耳炎に対する CS-807 の臨床評価 Cefaclor を対照とする二重盲検群間比較試験	河村正三、高坂知節	耳鼻と臨床
	コンピューターによるモルモット蝸牛外有毛細胞の立体再構築	橋本　省	Ear Res Jpn
	モルモット蝸牛内外有毛細胞の立体再構築	橋本　省	Ear Res Jpn
	滲出性中耳炎におけるアラキドン酸代謝	栗原　篤	Therapeutic Research
	頭頸部進行扁平上皮癌に対する Carboplatin+PEP 療法と CDDP+PEP 療法の無作為比較試験	犬山征夫、高坂知節	耳鼻と臨床
	慢性中耳炎の発症年齢・有病年数と中耳含気腔容積 ―ティンパノメトリー法による検討―	佐々木豊	臨床耳科
	中耳腔圧とガス拡散	佐々木豊	Ear Res Jpn
	花粉と気象　スギ花粉予報の方法と検討	柴原義博	JOHNS
	中耳手術再建材料としての自家軟骨の評価	渋谷　守	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	ティンパノメトリーによる中耳含気腔容積ならびに上鼓室疎通性の診断	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	骨 Paget 病による難聴について　―難聴を初発症状とした症例を中心に―	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	外リンパ瘻に関する検討　―外リンパ腔空気置換の内耳機能への影響―	小林俊光	Ear Res Jpn
	中耳炎に対する Ceftazidime の有用性	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	滲出性中耳炎における鼓膜及び中耳粘膜の病理組織学的研究	新川秀一	Ear Res Jpn
	外リンパ圧の CM 域値に対する影響 ―実験的内リンパ水腫動物における検討―	川瀬哲明	Ear Res Jpn
	実験的内リンパ水腫動物における外リンパ圧の CM 域値に対する影響	川瀬哲明	Equilibrium Res Suppl
	広範な膿瘍を形成した先天性耳瘻孔 2 例　―局所皮弁を用いた皮膚形成術―	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	リノセルム使用が鼻粘膜形態並びにその透過性に与える影響に関する研究	大平裕子	耳鼻咽喉科展望
	水注入後における鼻粘膜上皮透過性の経時的変化について	大平裕子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	頭頸部領域における術後疼痛に対するロキソプロフェンナトリウムの臨床的有用性	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	めまいなどの内耳性障害に対する Calan 錠の臨床効果	池田勝久	耳鼻と臨床
	耳鳴に対するツムラ大柴胡湯の臨床的効果　―脂質代謝との関連―	池田勝久	耳鼻と臨床

	耳鳴	池田勝久	日本医師会雑誌
	耳鼻咽喉科感染症に対する Cefotiam hexetil の臨床的検討	池田勝久	CHEMOTHERAPY
	通年性アレルギー性鼻炎に対する Terfenadine の臨床第二相試験	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	通年性アレルギー性鼻炎に対する Terfenadine の臨床的検討 — Ketotifen を対照とした多施設二重盲検試験—	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	急性陰窩性扁桃炎に対する CS-807 の臨床評価 Cefaclor を対照とする二重盲検群間比較試験	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	最近当科において経験した鼻副鼻腔乳頭腫症例	白土正人	山形市立病院済生館医誌
	耳下腺部手術後の顔面神経麻痺とその予後	八木沼裕司	Facial N Res Jpn
	培養真珠腫組織の産生する骨吸収活性	豊嶋　勝	Ear Res Jpn
	滲出性中耳炎の病理組織学的研究（第 1 報） —滲出性中耳炎患者の中耳粘膜病理—	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	滲出性中耳炎の病理組織学的研究（第 2 報） — III 型アレルギーによる実験的滲出性中耳炎モデル—	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	実験的滲出性中耳炎モデルにおける免疫組織学的研究（第 1 報） —中耳粘膜の局所免疫能—	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	実験的滲出性中耳炎モデルにおける免疫組織学的研究（第 2 報） —免疫複合体の生理活性と中耳病態—	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	実験的滲出性中耳炎モデルにおける免疫組織学的研究（第 3 報） —耳管粘膜内分泌細胞の免疫組織学的解析—	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	胃癌の耳下腺転移症例	末武光子	耳鼻咽喉科臨床
	換気チューブ留置後の含気腔容積の変化（第 1 報） —ティンパノメトリーによる follow up —	末武光子	臨床耳科
	換気チューブ留置後の含気腔容積の変化（第 2 報） —含気腔容積と耳疾患、上気道疾患との関係—	末武光子	臨床耳科
	先天性真珠腫 5 例 6 耳小骨奇形を伴った両側例を中心に	末武光子	臨床耳科
	耳管粘膜に与える副鼻腔炎の影響 —滲出性中耳炎症例における耳管咽頭口粘膜の形態学的検討—	末武光子	Ear Res Jpn
	中耳の動特性解析（三次元ティンパノメトリーの理論解析）	和田　仁、小林俊光	日本機械学会論文集
	鼓膜のヤング率および減衰係数について	和田　仁、小林俊光	Ear Res Jpn
	滲出性中耳炎の最新の治療	高坂知節	日本医事新報「ジュニア版」
	アレルギ—性鼻炎に対する AA-673（amlexanox）錠の臨床的検討	高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	超高圧電子顕微鏡とコンピューターの応用による三次元的形態学	高坂知節	北海道医学雑誌
	腎障害と聴覚・平衡障害	高坂知節	耳喉頭頸 MOOK
	頚部の神経原性腫瘍	高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	滲出性中耳炎	高坂知節	月刊カレントテラピー
	鼻アレルギー	高坂知節	アレルギーの臨床
1989	Computer-aided serial section reconstruction of nerve endings on the outer hair cells of the cochlea	Hashimoto S	Acta Otolaryngol
	Fine structures of small efferent synapse on the lateral wall of the cochlear outer hair cell	Hashimoto S	Ear Res Jpn
	Vestibular Sympathetic Nervous System in Guinea Pig	Hozawa K	Acta Otolaryngol
	Effects of nitrogen mustard-N-oxide on ionic activities of inner ear fluid and ionic permeablities of the cochlear partition in the guinea pig	Ikeda K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Evaluation of vitamin D metabolism in patients with bilateral sensorineural hearing loss	Ikeda K	Am J Otol
	Effect of albumin-bound furosemide on the endocochlear potential of the chinchilla	Ikeda K	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Electrochemical profile for calcium ions in the stria vascularis : Cellular model of calcium teansport mechanisms	Ikeda K	Hear Res
	Immunological abnormality of the serological tests in bilateral sensorineural hearing loss	Ikeda K	ORL
	Effect of carbon dioxide in the middle ear cavity upon the cochlear potentials and cochlear pH	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	The preparation of acetic acid for use in otic drops and its effect on endocochlear potential and pH in inner ear fluid	Ikeda K	Am J Otolaryngol
	Expression of multiple tau isoformas and microtubule bundle formation in fibroblasts transfected with a single tau cDNA	Kanai Y, Oshima T	J Cell Biology
	Effect of external auditory canal pressure upon the hearing threshold in patients with Meniere's disease	Kawase T	Acta Otolaryngol Suppl
	Fine structure of guinea pig vestibular kinocilium	Kikuchi T	Acta Otolaryngol

	前庭 Kinocilium の微細構造	Kikuchi T	Ear Res Jpn
	Fine structure of the vestibular kinocilium	Kikuchi T	Abstracts of the 12th ARO Midwinter Meeting
	Effects of gentamicin application on the vestibular labyrinth	Kimura RS, Hashimoto S	Meniere's didease J.B. Nadol Jr. Ed. Kugler& Ghedini
	Labyrinthine fistulae caused by cholesteatoma. Improved bone conduction by treatment	Kobayashi T	Am J Otol
	Bone resorption mechanism of cholesteatoma. Immunohistochemical study of decalcified ossicles	Koike S	Cholesteatoma and Mastoid Surgery
	Calcium Gradients in Inner Ear Endolymph	Salt AN, Inamura N	Am J Otolaryngol
	Congenital anomalies of the eustachian tube in Down syndrome	Shibahara Y	Ann Otol Rhinol Laryngol
	EP Change in experimental round window membrane rupture	Shiga N	Ear Res Jpn
	Anatomy of the cerebello- pontine angle visualized through the translabyrinthine approach	Tos M, Hashimoto S	Acta Otolaryngol
	Biochemical analysis of bone resorbing activity produced by cholesteatoma tissue in culture	Toshima M	Cholesteatoma and Mastoid Surgery
	Dynamic behavior of the middle ear based on sweep frequency tympanometry	Wada H, Kobayashi T	Audiology
	Histopathological analysis of the tympanic membrane with otitis media with effusion	Yaginuma Y	J Cli Electron Microscopy
	鼻アレルギーに対する WP-833（ダザノラスト）の臨床評価 ―トランストを対照とする多施設二重盲比較試験―	奥田　稔、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	小児における睡眠時無呼吸音記録（Sleep Sonograpy）と睡眠時無呼吸	沖津卓二	小児耳鼻咽喉科
	急性陰窩性扁桃炎に対する Cefotiam hexetil の薬効評価 ― Cefaclor との二重盲検比較試験―	河村正三、高坂知節	耳鼻と臨床
	MRI について　―基礎と臨床―	橋本　省	専門医通信
	通年性鼻アレルギーに対する局所温熱療法（リノセルム）の効果	橋本　省	耳鼻咽喉科展望
	コンピューターによる蝸牛有毛細胞の立体再構築と形態解析	橋本　省	PCEM
	鼻茸・副鼻腔炎	金子　豊	JOHNS
	感音性難聴と血清亜鉛値	佐竹充章	耳鼻咽喉科臨床
	アレルギー性鼻炎におけるベコナーゼ（Beclomethasone disropionate）の臨床的有効性	柴原義博	耳鼻咽喉科展望
	耳鼻咽喉科疾患とアトピー性皮膚炎	柴原義博	アレルギーの臨床
	耳下腺部に発生した Castleman lymphoma の 1 例	若狭加奈子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	外リンパ瘻の実験的研究　鼓室階空気置換時の蝸牛機能	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	中耳炎に対する（eftazidime CCAZ）の基礎的・臨床的検討	小林俊光	日本耳鼻咽喉科感染症研究会
	両側同時性突発性難聴の検討	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	メニエール病、変動する低音障害型感音難聴における Gelle test（外耳道圧負荷骨導聴力検査）	川瀬哲明	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	鼻・副鼻腔乳頭腫 10 例における臨床的および免疫組織学的検討	大井聖幸	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	慢性副鼻腔炎に対する NA872 の治療成績 ―多施設共同プロトコールによる臨床研究―	大山　勝、高坂知節	薬理と治療
	慢性副鼻腔炎に対する NA872 の薬効評価 ―メシステイン錠との二重盲検比較試験―	大山　勝、高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	耳鳴に対するツムラ大柴胡湯の臨床的効果	池田勝久	和漢医薬学会誌
	Ceftriaxone の急性化膿性中耳炎及び慢性化膿性中耳炎急性増悪症に対する薬効評価	馬場駿吉、高坂知節	Japanese J Antibiotics
	副鼻腔炎に対する Cefodizime（CDZM）の薬効評価	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	化膿性中耳炎に対する Cefodizime の薬効評価 ― Cefotiam との比較対照試験―	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	化膿性中耳炎（急性および慢性の急性増悪症）に対する Cefotiam hexetil の薬効評価　― Cefaclor との二重盲検比較試験―	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	化膿性中耳炎に対する TE-031 の薬効評価 ― Josamycin との二重盲検比較試験成績―	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	化膿性中耳炎に対する Flomexet（FMOX）の薬効評価 ― Cefotiam（CTM）との二重盲検比較試験	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻と臨床
	遊離空腸による再建を行った下咽頭癌の 2 症例	白土正人	山形市立病院済生館医誌
	培養真珠腫組織の産生する骨吸収活性（第 2 報）	豊嶋　勝	Ear Res Jpn
	滲出性中耳炎の反復のメカニズム	朴沢孝治	JOHNS
	モルモット蝸牛内交感神経分布	朴沢孝治	Ear Res Jpn

	実験動物モデルによる滲出性中耳炎病因解析の試み （昭和 63 年度医学部奨学賞銀賞受賞）	朴沢孝治	東北医学雑誌
	頭頸部腫瘍患者における血清中の TN 活性	鈴木秀明	頭頸部腫瘍
	食道扁平上皮癌由来の樹立細胞株における腫瘍壊死因子（TNF）感受性および TNF、IFNr の併用効果	鈴木秀明	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	滲出性中耳炎と鼻アレルギー	髙坂知節	アレルギー診療
	滲出性中耳炎　治療　保存治療　―薬物	髙坂知節	耳喉頭頸 MOOK
	鼻汁過多症に対するフルブロン（臭化フルトロピウム）の臨床効果	髙坂知節	基礎と臨床
	老年者と耳鼻咽喉科　老人に多い、または特徴的な耳の疾患　滲出性中耳炎とその治療	髙坂知節	耳喉頭頸 MOOK
	滲出性中耳炎	髙坂知節	JOHNS
	上気道と中耳・耳管病変のかかわりに関して	髙坂知節	フルブロン新発売記念学術講演会記録集
	コンピューターの応用による三次元復構	髙坂知節	細胞
	超電圧電顕とコンピューターグラフィックスの応用による三次元復構法	髙坂知節	細胞
	救急医療について　―緊急気管切開―	髙坂知節	日本気管食道科学会会報
	スギ花粉症	髙坂知節	公衆衛生情報みやぎ
	耳・鼻科領域の年齢変化と成人病	髙坂知節	加齢のプロセスと成人病の予防
	喉頭外傷の臨床　Trauma of the Larynx	髙坂知節	喉頭
	睡眠時無呼吸症候群患者における UPPP の効果	瀧島　任、神林潤一	厚生省特定疾患呼吸不全調査研究班昭和 63 年度研究報告
1990	Computer-aided three-dimensional reconstruction of the inner hair cells and their nerve endings in the guinea pig cochlea	Hashimoto S	Acta Otolaryngol
	Cholinergic and noradrenergic nervous systems in the cynomolgus monkey cochlea	Hozawa K	Acta Otolaryngol
	The cholinergic nerve system in the cochlea of cynomolgus monkey	Hozawa K	Ear Res Jpn
	Permeability of the round window membrane to middle-sized molecules in purulent otitis media	Ikeda K	Arch Otol Head Neck Surg
	Electrochemical aspects of cations in the cochlear hair cell of the chinchilla : a cellular model of the ion movement	Ikeda K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Round window membrane permeability during experimental purulent otitis media : altered cortisporin ototoxicity	Ikeda K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Acid-base regulation in cochlear outer hair cells of the guinea-pig	Ikeda K	Ear Res Jpn
	Effects of Ear Drops upon the Round Window Membrane : Changes in Permeability and Thickness	Ikeda K	Ear Res Jpn
	Vanadate-induced intracellular calcium elevation in the stria vascularis of the guinea pig : fluorescence ratio imaging microscopy	Ikeda K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	The effects of pressure on cochlear microphonics in experimentally induced hydropic ears in the guinea pig	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Guinea pig vestibular microtubules by TEM	Kikuchi T	Abstructs of 27th Inner Ear Biology Workshop, Stockholm
	Effect of perilymphatic air perfusion on cochlear potentials	Kobayashi T	Acta Otolaryngol
	Effect of escherichia cobi endotoxin on cochlear potentials following its application to the chinchilla middle ear	Morizono T, Ikeda K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	The differentiation of polyps and their mucosal ultrastructure	Takasaka T	Am J Rhinol
	Partial amino acid sequence of organ of Corti protein OCP-II	Thalmann I, Suzuki H	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Dynamical behavior of middle ear : theoretical study corresponding to measurement results obtained by a newly developed measuring appratus	Wada H, Kobayashi T	J Account Soc Am
	内耳感覚上皮における微小管の微細構築とその配列様式	菊地俊彦	Ear Res Jpn
	口腔癌の CT・MRI 診断	橋本　省	JOHNS
	咽頭癌の画像診断	橋本　省	JOHNS
	中耳真珠腫の免疫組織化学および生化学的検討 ―特に骨破壊機序について―	栗原　篤	炎症
	病態をめぐる諸問題　骨吸収機序	栗原　篤	耳喉頭頸 MOOK
	仙台地方におけるスギ花粉予報の実施状況	佐竹充章	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	セルテクトの通用性アレルギー性鼻炎患者に対する使用経験	佐竹充章	耳鼻咽喉科展望
	鼻中隔より発生した平滑筋腫の 1 症例	佐藤美栄子	山形市立病院済生館医誌
	鼻背部の扁平上皮癌の 1 症例	佐藤美栄子	山形市立病院済生館医誌
	外リンパ瘻に関する検討　―前庭階空気注入と鼓室階空気注入の比較―	桜田隆司	Ear Res Jpn

	スギ花粉飛散予報（仙台地方の現況）	柴原義博	アレルギーの臨床
	耳後部に膿瘍を形成した先天性外耳道狭窄症の 5 症例	若狭加奈子	臨床耳科
	真珠腫をめぐる諸問題　真珠腫の病理　―免疫組織学的側面―	小池修治	耳喉頭頸 MOOK
	口腔・舌の痛みと潰瘍	小池修治	JOHNS
	頭蓋内浸潤をきたした篩骨洞悪性腫瘍の治療	小池修治	山形市立病院済生館医誌
	小脳橋角部血管性病変による顔面神経麻痺	小池修治	Facial N. Res Jpn
	真珠腫の病理　―免疫組織学的側面―	小池修治	耳喉頭頸 MOOK
	滲出性中耳炎	小林俊光	JOHNS
	X 線所見、画像診断	小林俊光	耳喉頭頸 MOOK
	術後骨導聴力の著明改善例	小林俊光	耳喉頭頸 MOOK
	中耳換気チューブ留置術	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	頭振後眼振検査の臨床的検討	川瀬哲明	耳鼻咽喉科臨床
	小児滲出性中耳炎における上咽頭細菌叢についての検討	大井聖幸	臨床耳科
	蝸牛リンパにおける K^+ イオン濃度の調節	大山健二	Ear Res Jpn
	欧米における内耳研究の動向とその学術集会	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻すすりによる中耳病変について	八木沼裕司	臨床耳科
	術後性上顎嚢胞に合併した続発性高眼圧症の 1 例	八木沼裕司	耳鼻咽喉科展望
	鼻すすりと耳管閉鎖障害	八木沼裕司	臨床耳科
	遅発性に対側前頭葉膿腫を合併した一側性副鼻腔炎の 1 症例	八木沼裕司	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	スギ花粉症に対するトラニラストの予防効果（第 2 報）	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科展望
	ティンパノメトリーの 3 歳児健診への導入の試み	豊嶋　勝	臨床耳科
	用語の解説	朴沢孝治	JOHNS 97. 神経ペプチド、 98. サブスタンス P、 99. VIP、100. C 線維、 101. カプサイチン
	モルモット鼻粘膜におけるニューロペプチド	朴沢孝治	第 28 回日本鼻科学会サテライトシンポジウム「鼻粘膜におけるニューロペプチド」
	モルモット内耳に分布する交感神経	朴沢孝治	PCEM （Tohoku Univ. Med. Sch.）
	鼓膜穿孔を有する中耳の動特性解析	和田　仁、 小林俊光	日本機械学会論文集
	誘発耳音響放射と中耳動特性の相関 ―誘発耳音響放射が最も明瞭に測定できる入力刺激音周波数について―	和田　仁、 小林俊光	Audiology Japan
	中耳動特性の 3 次元表示	和田　仁、 小林俊光	日本音響学会誌
	鼓膜の動特性解析（ヒト鼓膜のヤング率、厚さおよび減衰比について）	和田　仁、 小林俊光	日本機械学会論文集
	コルメラタイプセラミックス製人工耳小骨の最適設計（理論解析による人工耳小骨形状の決定）	和田　仁、 小林俊光	日本機械学会論文集
	誘発耳音響放射と中耳動特性の相関 ―誘発耳音響放射に及ぼす中耳耳動特性の影響―	和田　仁、 小林俊光	Ear Res Jpn
	中耳炎の臨床	高坂知節	日本医事新報
	MRI による鼻副鼻腔疾患の鑑別診断	高坂知節	耳喉頭頸 MOOK
	24. 耳漏 A. 総論 / B. 一般検査	高坂知節	検査と技術
	喘息の随伴症状　鼻症状、耳症状　―耳鼻咽喉科の立場から―	高坂知節	ASTHMA
	滲出性中耳炎の漢方治療～現代医学の立場から～	高坂知節	現代東洋医学
	鼻粘膜の電顕構築	高坂知節	JOHNS
	形態面からみた鼻茸の病態について	高坂知節	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
1991	A digital hearing aid that compensates loudness for sensorineural impaired listeners	Asano F, Kakehata S	Acoustics, Speech, and Signal Processing
	Identification of N-acethylglycosamine-binding immunoglobulins in chicken egg yolk and serum distinct from the major mannose-binding immunoglobulins	Hoppe CA, Suzuki H	Glycobiology
	Sympathetic Nerve Supply to the Endlymphatic Sac of the Guinea Pig	Hozawa K	Otology Japan
	Ca-ATPase in the Normal and Hydropic Ear of the Guinea Pig	Hozawa K	Otology Japan
	Vestibular sympathetic nervous system in guinea pig	Hozawa K	Acta Otolaryngol
	Physiological and Pathophysiological Bases of Ion Transport in the Endolymphatic Hydrops	Ikeda K	Otology Japan
	Ionic activities of inner ear fluid and ionic permeabilities of the cochlear duct in endolymphatic hydrops of the guinea pig	Ikeda K	Hear Res

Effect of neuroregulators on the intracellular calcium level in the outer hair cell isolated from the guinea pig	Ikeda K	ORL
Otic preparations altered permeability and thickness of the round window membrane of the chinchilla	Ikeda K	ORL
The ionic and electric environment in the endolymphatic sac of the chinchilla : Relevance to the longitudinal flow	Ikeda K	Hear Res
Cochleotoxicity of otic drops in normal and infected ears	Ikeda K	Conference on the Eustachian Tube and Middle Ear Diseases
Effect of pH on intracellular calcium levels in isolated cochlear outer hair cells of guinea pig	Ikeda K	Am J Physiol Soc
Transport of 5-hydrozydopamine and horseradish peroxidase through the perilymphendolymph barrier	Ikeda K	Ann Otol RhinoLaryngol
Cochleotoxicity of otic drops in the chinchilla : comparative study of bestron and cortisporin	Ikeda K	Am J Otol
Effect of hypoxia and furosemide upon spontaneous otoacoustic emission in the guinea pig	Inamura N	Otology Japan
Middle Ear Cholesteatoma Extending into the Petrous Apex : Evaluation by CT and MR Imaging	Ishii K, Kobayashi T	Am J Neuroradial
MR Image of Middle Ear Cholesteatomas	Ishii K, Kobayashi T	J Comput Assist Tomogr
Pathophysiology of Inner Ear Fluid Imbalance	Juhn SK, Ikeda K	Acta Otolaryngol
Microtubules of guinea pig cochlear epithelial cells	Kikuchi T	Acta Otolaryngol
Microtubule Subunits of Guinea Pig Vestibular Epithelial Cells	Kikuchi T	Acta Otolaryngol Suppl
Voluntarily retractable tympanic membranes : case report	Kobayashi T	Am J Otol
Effect on cochlear potentials of lateral semicircular canal destruction	Kobayashi T	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
Bone destruction mechanisms in chronic otitis media with cholesteatoma : specific production by cholesteatoma tissue in culture of bone-resorbing activity attributable to interleukin-1 alpha	Kurihara A	Ann Otol Rhinol Laryngol
Electrophysiological Aspects of Surgically-Induced Endolymphatic Hydrops	Kusakari J	Meniere's Disease CHAPTER5
Low Frequency Acoustic Biasing in Chinchillas with Altered Perilymphatic Pressure : APreliminary Study	Morizono T, Ikeda K	Otology Japan
Calcium channel in isolated outer hair cells of guinea pig cochlea	Nakagawa T, Kakehata S	Neurosci Lett
Spontaneous otoacoustic emissions in the guinea pig	Ohyama K	Hear Res
Evaluation of Procedures to Reduce Fluid Flow in the Fistulized Guinea-pig Cochlea	Salt AN, Inamura N	Acta Otolaryngol
Radical communication between the perilymphatic scalae of the cocholea I : Estimation by tracer perfusion	Salt AN, Ohyama K	Hear Res
Radial communication between the perilymphatic scalae of the cochlea. II : estimation by bolus injection of tracer into the sealed cochlea	Salt AN, Ohyama K	Hear Res
Bilateral congenital cholesteatomas associated with ossicular anomalies : a case report	Suetake M	Am J Otol
Astemizole（NJD-30）の鼻アレルギーに対する臨床試験 — Ketotifen fumarate を対照薬とした二重盲検比較試験—	奥田　稔、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
鼻アレルギーに対するノイロトイピン錠の臨床評価　—至適用量の検討—	奥田　稔、高坂知節	医学と薬学
鼻茸の成因について　—微少血管系とインスリン様成長因子 I を中心に—	菊地俊彦	日本鼻科学会会誌
高位頚静脈球症例　—慢性中耳炎合併例の術中所見—	高橋　辰	Otology Japan
当科補聴器外来の状況	佐竹充章	山形市立病院済生館医誌
スギ花粉飛散と気象因子	柴原義博	日本鼻科学会会誌
顔面神経麻痺に対する大量ステロイド療法の治療効果	小池修治	Facial N Res Jpn
［私はこうしている］　露出した半規管の処理 1	小林俊光	JOHNS
いわゆる鼓膜 epidermosis	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
鼓膜の振動異常	小林俊光	JOHNS
内耳瘻孔検査	小林俊光	JOHNS
アレルギー性鼻炎	石川　哮、高坂知節	呼吸
ラウドネス補償特性を有するディジタル補聴器の一構成法	浅野　太、佐竹充章	日本音響学会誌
ディジタル信号処理による補聴器の開発	大山健二	病態整理
CLAIDHA　ダイナミックレンジの狭小化に対応	大山健二	モダンメディシン

	聴覚障害補償へのディジタル技術の応用 ―ラウドネス補償ディジタル補聴器の開発―	大山健二	日本音響学会誌
	カルシウム代謝と聴覚障害	池田勝久	Audiology Japan
	治療における耳科用液の位置付け	池田勝久	MEDICAL DIGEST
	慢性中耳炎の抗生剤・点耳薬　慢性中耳炎の治療について　1）抗生剤による局所治療の意義　2）市販点耳薬の抗菌力	池田勝久	耳鼻咽喉科診療 Q&A
	咽喉頭異常感症因子による患者の分類と和漢薬の選択	池田勝久	和漢医薬学会誌
	OFLX 単独投与による中耳手術後感染予防	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科臨床
	中耳手術後感染予防に対するオフロキサシンの有用性について	豊嶋　勝	日本耳鼻咽喉科感染症研究会
	化膿性中耳炎および外耳道炎に対する NY-198（Lemefloxacin）耳用液の薬効評価	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科展望
	上眼瞼より刺入した上顎洞竹片異物症例	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科臨床
	スギ花粉症に対する塩酸アゼラスチンの予防効果	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科展望
	内耳における交感神経分布	朴沢孝治	耳鼻と臨床
	学校検診における滲出性中耳炎の検出	本橋ほづみ	Otology Japan
	滲出性中耳炎の重症度・予後と中耳含気腔容積	末武光子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	滲出性中耳炎予後予測への判断分析導入の試み	末武光子	Otology Japan
	4 KHz までのモルモット及びヒトの中耳動特性	和田　仁、小林俊光	日本音響学会誌
	聴力正常耳の耳音響放射	和田　仁、小林俊光	日本機械学会論文集（C 編）
	滲出性中耳炎の病態と抗アレルギー薬	高坂知節	JOHNS
	滲出性中耳炎　―高度難聴に移行しやすい―	高坂知節	Modean　Medicine
1992	Audiological findings in acoustic neuromas	Hashimoto S	Acoustic Neuroma
	Strategy for the early diagnosis of acoustic neuromas	Hashimoto S	Acoustic Neuroma
	Tumor growth rate and timing of surgery	Hashimoto S	Acoustic Neuroma
	Intracellular pH regulation in isolated cochlear outer hair cells of the guinea-pig	Ikeda K	Journal of Physiology
	Na^+-Ca^{2+} exchange in the isolated cochlear outer hair cells of the guinea-pig studied by fluorescence image microscopy	Ikeda K	Pfugers Arch（Euro J Physiol）
	Permeability changes of the blood labyrinth barriea measured in vivo during experimental treatment	Inamura N	Hear Res
	ACh activates inositol phosphate cascade via a PTX-sensitive G-protein in dissociated outer hair cells of guinea-pig cochlea	Kakehata S	Proc Sendai Symposium
	Glycine response in isolated dorsal cochlear nucleus of C57BL/6J mouse	Kakehata S	Brain Res
	Spatial Organization of the Auditoty Nerve According to Spontaneous Discharge Rate	Kawase T	J Comp Neurol
	IgA_1 localization in tonsillar follicular dendritic cells is characteristic of IgA nephropathy	Kusakari C	Advances in Oto-Rhino-Laryngology
	MRL/MP-1pr/1pr mouse as a model of immune-induced sensorineural hearing loss	Kusakari C	Annals of Oto-Rhino-Laryngol
	Effects of Ca^{2+} antigonists and aminoglycoside antibiotics on Ca^{2+} current in islated outer hair cells of guinea pig cochlea	Nakagawa T, Kakehata S	Brain Res
	Immunocytochemical localization of 205 KDa microtubule-associated protein（205 KDa MAP）in the guinea pig organ of Corti	Oshima T	Brain Res
	Membrane potential measurement in isolated outer hair cells of the guinea pig cochlea using conventional microelectorodes	Sunose H	Hear Res
	Ion channels in the luminal membrane of the marginal cell	Sunose H	Proc Sendai Ear Symposium
	Quantitative carbohydrate analyses of the tectorial and otoconial membranes of the guinea pig	Suzuki H	Hear Res
	Analysisi of dynamic behavior of human middle ear using a finite-element method	Wada H, Kobayashi T	J Acoust Soc Am
	Evidence for the involvement of a K^+ channel in isosmotic cell shrinking in vestibular dark cells	Wangemann P, Shiga N	Am Physiol Soc
	A digital hearing aid that conpensates loudness for sensorineural impaired listeners	Asano F, Takasaka T	Brain Res
	通年性アレルギー性鼻炎に対する減感作療法 ―ノイロトロピン併用減感作療法の検討―	奥田　稔、高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	WAL801 CL（epinastine）錠の通年性鼻アレルギーに対する臨床初期第 II 相試験	奥田　稔、高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	真珠腫性中耳炎に合併した Bezold 膿腫の 1 例	古川加奈子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Palato-pharyngo-laryngeal myoclonus の一症例	佐々木高綱	喉頭
	下顎骨合併切除を要した顎下腺腫瘍の 1 例	佐竹充章	山形市立病院済生館医誌

	扁桃の不思議 —上皮リンパ球相関—	佐藤葉子	細胞
	慢性鼻副鼻腔炎に対する漢方製剤の治療成績 —辛夷清肺湯と四逆散の臨床効果—	桜田隆司	耳鼻咽喉科臨床
	［気象病・季節病とその臨床］ 6. 花粉症	柴原義博	日本医師会雑誌
	食道未分化小細胞癌の 1 例	手塚文明、草刈千賀氏	日本臨床細胞学会雑誌
	自然発症自己免疫疾患モデル動物 MRL/lpr マウスにおける聴力障害	小池修治	日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会誌
	急性中耳炎後に発症した両側聾 — Mondini 型内耳奇形と髄膜炎—	小林俊光	JOHNS
	［私はこうしている］外耳道と鼓膜の剥離操作 2	小林俊光	JOHNS
	化膿性中耳炎に対しての Cefuroxime axetil の基礎的・臨床的検討	小林俊光	耳鼻咽喉科展望
	非定型的ティンパノグラム	小林俊光	JOHNS
	中耳炎	小林俊光	医薬ジャーナル
	鼻すすりが誘因の中耳病変	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	蝸牛瘻孔 —中耳根本手術後の眩暈の一因—	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	放射線治療とレーザー治療 Radiotherapy and Laser Surgery	小林俊光	日本レーザー医学会会誌
	癒着性中耳炎の耳管病態 —耳管開放症と耳管狭窄症—	小林俊光	JOHNS
	KTP/532 レーザーの耳科手術における有用性	小林俊光	第 13 回日本レーザー医学会大会大会論文集
	喉頭軟骨肉腫の 1 症例	松浦一登	山形市立病院済生館医誌
	Levofloxacin の中耳炎および外耳炎に対する第 III 相一般臨床試験	石井哲夫、髙坂知節	CHEMOTHERAPY
	扁桃 B 細胞とその機能 — IgA 腎症症例の扁桃における B 細胞の免疫応答—	草刈千賀志	日本扁桃研究会
	外耳道有生異物（フタトゲチマダニ）の 2 症例	大井聖幸	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	口蓋扁桃に発生した線維腫の 1 症例	大井聖幸	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	Levofloxacin の扁桃炎、咽喉頭炎および唾液腺炎に対する有用性検討	大山 勝、髙坂知節	CHEMOTHERAPY
	歪成分耳音響放射（DPOAE）による蝸牛機能の評価	大山健二	Audiology Japan
	モルモットの DPOAE に対する中耳動特性の影響	大山健二	Audiology Japan
	FAST（Fluorescence Allergosorbent Test : 蛍光酵素免疫測定法）による総 IgE および特異 IgE 抗体の測定	中川武正、髙坂知節	アレルギー
	Levofloxacin の副鼻腔炎に対する一般臨床試験	馬場駿吉、髙坂知節	CHEMOTHERAPY
	頚動脈小体腫瘍の 1 例	八木沼裕司	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	マウス頭蓋冠培養系による骨吸収活性測定法	豊嶋 勝	日本耳鼻咽喉科免疫アレルギー学会誌
	—耳鼻咽喉科からの提言— アレルギー性鼻炎における副腎皮質ステロイド	豊嶋 勝	日本アレルギー協会東北支部会「特集号」
	真珠腫性中耳炎骨破壊における IL-1α、TNFα	豊嶋 勝	炎症
	錐体部真珠腫 5 症例	豊嶋 勝	Otology Japan
	仙台市における三才児検診の現況	豊嶋 勝	Audiology Japan
	GVHD に見られる外耳皮膚病変	鈴木雅明	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	原発性孤立性蝶形骨洞真菌症の 1 症例	鈴木秀明	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	ヒトにおける synchronous evoked otoacoustic emissions の抽出	和田 仁	Audiology Japan
	三次元表示可能な新しいインピーダンスメーター — Middle ear analyser（MEA）—	和田 仁	JOHNS
	モルモットの耳音響放射	和田 仁、大山健二	日本音響学会誌
	外有毛細胞の能動的な動きを考慮に入れた蝸牛の挙動解析	和田 仁、大山健二	日本機械学会論文集（C 編）
	耳音響放射の臨床応用に関する最近の知見	髙坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	通年性アレルギーに対する WAL801CL（塩酸 epinastine）の臨床評価	髙坂知節	耳鼻咽喉科展望
	巻頭言 「スギ花粉情報」事始め	高坂知節	呼吸
1993	Antibody feedback regulation in MRL/lpr mice	Heyman B, Kusakari C	J Antoimmun
	Hearing and glycoconjugates : localization of Ley, Lex and sialosyl-Lex in guinea pig cochlea, particularly at the tectorial membrane and sensory epithelia of the organ of Corti	Hozawa K	Glycobiology
	Catecholaminergic innervation in the vestibular labyrinth and vestibular nucleus of guinea pig	Hozawa K	Acta Otolaryngol Suppl
	Functional morphology of mucous blanket of guinea pig eustachain tube	Hozawa K	Recent Advances in Otitis Media

Sympathetic and CGRP-positive nerve supply to the endolymphatic sac of guinea pig	Hozawa K	Acta Otolaryngol Suppl
Effects of free radicals on the intracellular calcium concentration in the isolated outer hair cell of the guinea pig cochlea	Ikeda K	Acta Otolaryngol
Confocal laser microscopical images of calcium distribution and intracellular organelles in the outer hair cell isolated from the guinea pig cochlea	Ikeda K	Hear Res
Confocal laser-scanning microscopical image of the distribution of intracellular organelles in cochlear outer hair cells	Ikeda K	Japanese J Physiology
Benefits and complications of ototopical drugs in otitis media with spescial reference to the round window membranne	Ikeda K	Cholesteatoma and Mastoid Surgery（Proceeding of the Fouth International Conference Niigata）
In vitro activity of ototopical drops against middle ear pathogens	Ikeda K	Am J Otol
Substance P decreases the non-selective cation channel conductance in dissociated outer hair cells of guinea pig cochlea	Kakehata S	Annals of the New York Academy of Science
Cellular mechanism of acetylcholine-induced response in dissociated outer hair cells of guinea-pig cochlea	Kakehata S	J Physiol
Fine structure of the lamina basilaris of guinea pig cochlea	Katori Y	Acta Otolaryngol
Antimasking effects of the olivocochlear reflex. I. Enhancement of compound action potentials to masked tones	Kawase T	J Neurophysiol
Antimasking effects of the olivocochlear reflex. II. Enhancement of auditory-nerve response to masked tones	Kawase T	J Neurophysiol
Differential physiologic effects of perfusion of scala tympani versus scala vestibuli in the ischemic cochlea	Kobayashi T	Acta Otolaryngol
Use of surfactant in the treatment of secretory otitis media : a preliminary report	Kobayashi T	Recent Advances in Otitis Media
Inner Ear Injury Caused by Air Intrusion to the ScalaVestibuli of the Cochlea	Kobayashi T	Acta Otolarygol
Reconstitution of immunological imbalance in SCID mice given tonsillar mononuclear cells from patients with IgA nephropathy	Kusakari C	Acta Otolaryngol Suppl
Accumulation of potassium in scala vestibuli perilymph of the mammalian cochlea	Salt AN, Ohyama K	Ann Otol Rhinol Laryngol
Expression of c-erb B-2 in Human Esophageal Carcinoma Cells : Overeexpression Correlated with Gene Amplification or with GATA-3 Transcription Factor Express	Shiga K	Anticancer Research
Regulation of bone resorbing activity produced by cholesteatoma tissue in culture	Shoji F	Cholesteatoma and Mastoid Surgery（Proceeding of the Fourth International）
Sodium extrusion mechanism in mammalian cochlear outer hair cell	Sunose H	Japanese J Physiology
Nonselective cation and Cl channels in luminal membrane of the marginal cell	Sunose H	Am J Physiol
Age-related changes in the Mongolian gerbil cochlea	Takasaka T	The Audiotory System
Partial amino acid sequence of organ of Corti proteins OCP1 and OCP2 : A progres report	Thalmann I, Suzuki H	Hear Res
Interaction between IL-1 αand TNF α in cholesteatoma	Toshima M	Cholesteatoma and Mastoid Surgery（Proceeding of the Fourth International）
Cytokine network in cholesteatoma	Toshima M	Cholesteatoma and Mastoid Surgery（Proceeding of the Fourth Internatiolal）
Nicotinic acetylcholine receptor in dissociated rat nucleus tractus solotarii neurons	Ueno S, Kakehata S	Neurosci Lett
Relationship between Evoked Otoacoustic Emissions and Middle Ear Dynamic Characteristics	Wada H, Ohyama K	Audiology
The Na^+/H^+ exchanger in transitional cells of the inner ear	Wangemann P, Shiga N	Hear Res
Morphopathology of the tympanic membrane : in vivo and in vitro	Yaginuma Y	Recent Advances in Otitis Media
世界の異物事情　ブラジルにおける耳鼻咽喉科領域の異物	リリアン・イシダ	JOHNS
急性乳様突起炎 4 例の経験	熊谷重城	耳鼻咽喉科臨床
カナマイシンによる蝸牛障害動物の DPOAE と外有毛細胞の組織像との関連性	熊谷重城	Audiology Japan
感音性難聴の聴力レベルと DPOAE レベルの相関	佐藤利徳	Audiology Japan
ビスマスヨードホルムパラフィン軟膏（BIPP）の中耳手術後感染予防効果	小林俊光	耳鼻咽喉科展望
鼻すすりと中耳疾患・習慣性鼻すすりによる鼓膜の陥凹	小林俊光	医学のあゆみ
1. 聴覚検査 ［6］他覚的検査―・インピーダンスオージオメトリー	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
KTP レーザーの中耳手術における有用性	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科

	頭頸部癌組織内のインテグリン α3, α5 の局在に関する免疫組織学的検討	松浦一登	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	モルモット鼻中隔粘膜下の鼻腺細胞の単離法	石垣元章	耳鼻咽喉科臨床
	ハイドロキシアパタイト耳小骨による連鎖再建術の検討	千葉敏彦	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	声門部喉頭癌 T1 症例の放射線治療	千葉敏彦	喉頭
	IgA 腎症における扁桃リンパ球の病原性の可能性に関する研究 ― SCID-Hu マウスを用いた解析―	草刈千賀志	日本扁桃研究会（第 32 回）
	頭頸部ガス壊痕（いわゆるガス蜂窩織炎）の 3 症例	大井聖幸	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	頭頸部扁平上皮癌における上皮成長因子受容体（EGF レセプター）の局在について	大井聖幸	日本耳鼻咽喉科学会会報
	鼻すすり滲出性中耳炎　―鼻疾患との関連について―	八木沼裕司	耳鼻咽喉科臨床
	歯科関連異物の診断と摘出法	豊嶋　勝	JOHNS
	耳鼻咽喉科領域感染症に対する S-1108 の臨床的検討	豊嶋　勝	CHEMOTHERAPY
	呼吸上皮の mucous blanket の超微構造	朴沢孝治	日本鼻科学会会誌
	モルモット耳石に存在する 58kDa 糖蛋白	鈴木秀明	Otology Japan
	滲出性中耳炎	髙坂知節	日本医師会雑誌
	［頭頸部痛］　耳痛・鼻痛・口腔・舌の痛み	髙坂知節	総合臨床
1994	Is facial nerve decompression surgery effective?	Hashimoto S	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Collagenase in middle ear effusion and its effect on the pathology of the tympanic membrane	Hozawa K	Recent Advances in Otitis Media
	Immune-mediated inner ear dysfunction caused by histones, as planted target antigens	Hozawa K	Immunobiology in Otorhinolaryngology-Progress of a Decade
	Involvement of Na^+-H^+ exchange in intracellular pH recovery from acid load in the stria vascularis of the guinea-pig cochlea	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	Ion transport mechanisms in the outer hair cell of the mammalian cochea	Ikeda K	Prog Neurobiol
	Inhibitory effects of sho-seiryu-to on acetylcholine -induced responses in nasal gland acinar cells	Ikeda K	Am J Chi Med
	Endscopic laser sinus surgery : Holmium YAG and KTP/532 Lasers	Ikeda K	The 8th Congress of International YAG Laser Symposium 論文集
	Immunohistochemical examination of secretory activity in the guinea pig eustachian tube	Ishidoya M	Recent Advances in Otitis Media
	Otological manifestations in cleft palate patients	Ishidoya M	Recent Advances in Otitis Media
	Fine structure and lectin histochemistry of the apical surface of the free neuromast of lampetra japonica	Katori Y	Cell & Tissue Research
	Gap junction systems in the rat vestibular labyrinth innunohistochemical and ultrastructural analysis	Kikuchi T	Acta Otolaryngol
	Pathogenesis of attic retraction pocket and cholesteatoma as studied by computed tomography	Kobayashi T	Am J Otol
	Immunopathological features of palatine tonsil characteristic of IgA nephropathy : IgA1 localization in follicular dendritic cells	Kusakari C	Clin Exp Immunol
	Dysgenesis of melanocytes and cochlear dysfunction in mutant microphthalmia (mi) mice	Motohashi H	Hear Res
	Ionic properties of IK,n in outer hair cells of guinea pig cochlea	Nakagawa T, Kakehata S	Brain Res
	Prevention of an unexpectedly early extrusion of a tympanostomy tube	Obara Y	Recent Advances in Otitis Media
	Prognostic Significance of hst-1 Gene Amplification in Primary Esophageal Carcinomas and its Relationshiip to Other Prognostic Factors	Shiga C, Shiga K	Anticancer Res
	Tympanosclerosis of the tympanic membrane after tympanostomy tube insertion	Shoji F	Recent Advances in Otitis Media
	Intravenous immunoglobulin therapy for otitis prone children	Suetake M	Infections in Childhood (Sade, editor)
	Isolation of acini from nasal glands of the guinea-pig	Sunose H	Acta Physiol Scand
	Voltage-activated K channel in luminal membrane of marginal cells of stria vascularis dissected from guinea pig	Sunose H	Hear Res
	Erythromycin treatment for secretory otitis media in children	Suzuki M	Recent Advances in Otitis Media
	Strial dysfunction caused by immune injury : a possible pathogenesis of immune-induced sensorineural hearing loss	Takasaka T	Immunobiology in Otorhinolaryngoloby-Progress of a Decade
	Intractable otitis media in cases with bronchial asthma. Recent advances otitis media	Tomioka S	Recent advance otitis media

	Cell volume control in vestibular dark cells during and after a hyposmotic challenge	Wangemann P, Shiga N	Am Physiol Soc
	Ba2+ and amiloride uncover or induce a pH-sensitive and a Na^+ or non-selective cation conductance in transitional cells of the inner ear	Wangemann P, Shiga N	Pfugers Arch
	Ionic currents evoked by acetylcholine in isolated acinar cells of the guinea pig nasal gland	Wu DZ, Sunose H	Biochem and Biophys Res Comm
	The role of the habit of sniffing induced by nasal diseases in the pathogenesis of secretory otitis media	Yaginuma Y	Recent Advances in Otitis Media
	Cisplatin blocks voltage-dependent calcium current in dissociated outer hair cells of guinea-pig cochlea	Yamamoto T, Kakehata S	Brain Res
	The role of inositol trisphosphate on ACh-induced outward currents in bullfrog saccular hair cells	Yoshida N	Brain Res
	Mucous blanket of guinea pig eustachian tube in health and disease	Yoshida S	Recent Advances in Otitis Media
	咽頭の腫脹（副咽頭間隙・後咽頭間隙を含む）	稲村直樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	宮城県における花粉情報システム	稲村直樹	アレルギーの臨床
	内耳におけるギャップ結合ネットワーク	菊地俊彦	PCEM（Tohoku Univ. Med. School）
	外傷性顔面神経麻痺の治療方針	橋本　省	Facial Nerve Research
	蝸牛外有毛細胞における化学受容体	欠畑誠治	Otology Japan
	細身軟骨コルメラを用いた鼓室形成術の術後成績	洲崎　洋	Otology Japan
	中耳の手術　中耳真珠腫合併症手術	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 MOOK
	TYMPANOGRAM と耳管機能	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	中耳手術におけるレーザー	小林俊光	JOHNS
	中耳真珠腫の診断と治療	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	耳のための鼻すすり	小林俊光	小児耳鼻咽喉科
	アンダーレイ法での鼓膜剥離、挙上	松谷幸子	JOHNS
	口蓋扁桃における接着分子発現と扁桃病巣感染症　―IgA 腎症を中心に―	草刈千賀志	口腔・咽頭科
	当科で経験した鼻副鼻腔様嚢胞癌 2 症例	大島猛史	山形済生館医誌
	耳真菌症に対するフルコナゾールの点耳療法	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	鼻腺細胞と小青竜湯	池田勝久	漢方診療
	外有毛細胞への塩酸ビフェメランの影響	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	甲状腺視神経症に対する内視鏡下眼窩減荷術の 1 症例	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	Holmum : YAG レーザーの内視鏡下鼻内手術への応用	池田勝久	第 15 回日本レーザー医学会大会大会論文集
	MRSA 耳漏に対する FOM 点耳液及び OFLX 点耳液の時間差併用療法の検討	八木沼裕司	耳鼻咽喉科展望
	術前・術後の管理と看護 気管切開術	平野洋子、小林俊光	JOHNS
	各種鼻疾患における鼻汁分泌亢進機序	朴沢孝治	日本鼻科学会会誌
	モルモット耳石膜に存在する globular substance の生物学的性質	鈴木秀明	PCEM（Tohoku Univ. Med. School）
	耳鳴患者の生活指導と QOL の向上	六郷正暁	薬局
	中耳動特性に及ぼす年齢の影響	和田　仁、小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	鼓膜の手術 鼓膜切開と鼓膜チューブ留置術	高坂知節	耳鼻咽喉科・頭頸部外科 MOOK
	アレルギー疾患と臨床　No. 9 日本の花粉症	高坂知節	日本医師会雑誌
	スギ花粉症の予防および治療	高坂知節	アレルギーの領域（3 月号）
	聞こえの衰え“高齢者と聴覚” Age-related hearing deterioration	高坂知節	音響技術
	聾耳への鼓室形成術の適応をめぐって	末武光子	JOHNS
1995	Effects of oxatomide and KW-4679 on acetylcholine-induced responses in the isolated acini of guinea pig nasal glands	Ikeda K	Int Arch Allergy Immunol
	Intracellular Ca^{2+} responses induced by acetylcholine in the submucosal nasal gland acinar cells in guinea pig	Ikeda K	Am J Physiol
	Na^+ transport processes in isolated guinea pig nasal gland acinar cells	Ikeda K	J Cell Physiol
	Calcium mobilization and entry induced by extracellular ATP in the non-sensory epithelial cell of the cochlear lateral wall	Ikeda K	Cell Calcium
	Cellular Mechanisms in Activation of Na-K-Cl Cotransport in Nasal Gland Acinar Cells of Guinea Pig	Ikeda K	J. Membrane Biol
	Inhibition of acetylcholine-evoked Cl^- currents by 14-membered macrolide antibiotics in isolated acinar cells of the guinea pig nasal gland	Ikeda K	Am J Respir Cell Mol Biol

Efficacy of systemic corticosteroid treatment for anosmia with nasal and paranasal sinus disease	Ikeda K	Rhinology
Anosmia following head trauma : Preliminary study of steroid treatment	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
Erythromycin inhibits adhesion of Pseudomonas Aeruginosa and Branhamella Catarrhalis to human nasal epithelial cells	Ishida L, Ikeda K	Am J Rhinol
Xanthine derivatives inhibit an increase in intracellular Ca^{2+} concentration induced by acetylcholine in the nasal gland acinar cells of guinea pigs	Ishitani K, Ikeda K	Eur Resp J
Membrane tension directly shifts voltage dependence of outer hair cell moility and associated gating charge	Kakehata S	Biophysical Journal
Supression of a no seleative cation conductance by substance P in cochlear outer hair cells	Kakehata S	Am J Physiol
Membrane tension directly shifts voltage dependence of outer hair cell motility and associated gating charge	Kakehata S	Biophysical J
The effects of contralateral noise on masked compound action potential in humans	Kawase T	Hear Res
Treatment of labyrinthine fistula with interruption of the semicircular canals	Kobayasji T	Arch Otolaryngol-Head Neck Surg
Disturbance of regulation of sodium by cis-diamminedichloroplatinum in perrilymph of the guinea pig cochlea	Komune S, Kobayashi T	Ann Otol Rhinol Laryngol
Ion selectivity of volume regulatory mechanisms present during a hypoosmotic challenge in vestibular dark cells	Shiga N	Biochim Biophys Acta
Carbohydrate distribution in the living utricular macula of the guinea pig detected by lectins	Suzuki H	Hear Res
Biological characteristics of the globular substance in the otoconial membrane of the guinea pig	Suzuki H	Hear Res
ATP-induced increase in intracellular Ca^{2+} concentration in the cultured marginal cell of the stria vascularis of guinea-pigs	Suzuki M	Hear Res
Subcellular distribution of protein kinase C in the living outer hair cell of the guinea pig cochlea	Ueda N	Hear Res
Caffeine rapidly decreases potassium conductance of dissociated outer hair cells of guinea-pig cochlea	Yamamoto T, Kakehata S	Brain Res
難治性突発性難聴に対する薬物療法 ― Lipo PGE1 使用の試み―	粟田口敏一	東北 MMC 研究誌
咽頭の腫脹（副咽頭間隙・口咽頭間隙を含む）	稲村直樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
抗アレルギー剤の季節前投与法	稲村直樹	アレルギーの臨床
内耳の Barrier System について	稲村直樹	耳鼻免疫アレルギー
慢性中耳炎、滲出性中耳炎	沖津卓二	児童生徒の健康診断マニュアル
慢性副鼻腔炎患者篩骨洞粘膜における細胞浸潤および細胞接着分子発現についての免疫組織化学的検討	下村　明	消化器と免疫
ケーススタディー　めまい・難聴 ケーススタディー ［5］	橋本　省	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
Glomus jugulare tumor の診断と治療	橋本　省	JOHNS
カナマイシンによる蝸牛障害動物における歪成分耳音響放射（DPOAE）	熊谷重城	日本耳鼻咽喉科学会会誌
頭頸部領域悪性腫瘍に対する Ga-67 および Tc-99m シンチグラムの有用性について	熊谷正樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
鼻腔悪性黒色腫を合併した Werner 症候群の 1 例	熊谷正樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
PTP 食道異物症の統計と実験的検討	後藤　了	日本耳鼻咽喉科学会会誌
シスプラチン投与症例における DPOAE	高橋　辰	Audiology Japan
頭頸部扁平上皮癌におけるインテグリン α6 サブユニットの発現	佐竹順一	頭頸部腫瘍
音響性聴器障害のスクリーニング法としての DPOAE の検討（第一報）	佐藤利徳	Audiology Japan
顎顔面骨々折症例における三次元 CT の有用性について	洲崎　洋	岩手県立病院医学雑誌
側頭骨骨折症例の臨床的検討	小岩哲夫	仙台市立病院医学雑誌
無自覚な外耳道および中耳異物による慢性中耳炎	小原由紀子	Otology Japan
長期間の異物介在が誘因と考えられた慢性中耳炎	小原由紀子	Otology Japan
鼻副鼻腔手術における人工材料	小野寺亮	JOHNS
鼓膜形成術の一手技 ―耳鏡内で行う軟骨膜オーバーレイ法―	小林俊光	JOHNS
鼻すすり癖が誘因の真珠腫―その頻度と特徴―	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
手術に際して必要な画像情報 中耳疾患	小林俊光	JOHNS
Cefluprenam の耳鼻咽喉科領域感染症に対する臨床的検討	小林俊光	CHEMOTHERAPY
喉頭摘出患者の喉摘前後の呼吸機能の変化について	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会誌
気管支喘息患者の難治性中耳炎 ―好酸球中耳炎―（eosinophilic otitis media）	松谷幸子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
IgA 腎症の口蓋扁桃の細菌学的検討	松谷幸子	口腔・咽頭科
モルモット鼻中隔鼻腺細胞におけるアセチルコリンの細胞内 Ca^{2+}応答	石垣元章	日本耳鼻咽喉科学会会誌
成人の特発性髄液耳漏例	千葉敏彦	耳鼻咽喉科臨床

	蝸牛遠心性神経（olivocochlear bundle）の anti-masking の効果について	川瀬哲明	Otology Japan
	内視鏡下経鼻的副鼻腔手術による副鼻腔真菌症の治療	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	内視鏡下レーザー手術を行った上咽頭嚢胞症例	大道弘之	耳鼻咽喉科臨床
	鼻腔病態生理から見た慢性副鼻腔炎	池田勝久	日本鼻科学会会誌
	眼窩周辺疾患への内視鏡下鼻内手術の応用	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	OSAS に対する KTP レーザーの使用経験 ―舌根正中部切除術―	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	鼻副鼻腔内向型乳頭腫に対する内視鏡下鼻内手術	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	ロキシスロマイシンによる鼻腺腺房細胞の Cl-電流への抑制効果	池田勝久	耳鼻咽喉科展望
	鼻腺細胞の刺激分泌応答に対する小青竜湯の影響	池田勝久	Progress in Media
	Ho：YAG レーザーと内視鏡下鼻内手術	池田勝久	耳鼻咽喉科臨床
	鼻前頭管の処理と蝶型骨洞開放のコツ	池田勝久	JOHNS
	孤立性蝶型骨洞病変への内視鏡か鼻内経由のアプローチ	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	アレルギー性鼻炎のレーザー下甲介手術の臨床的検討	中林成一郎	アレルギー臨床
	スナネズミの DPOAE に対する麻酔剤の影響	鄭　玉蓮	Audiology Japan
	IgA 腎症の扁摘効果について（第二報）	田畑邦次	口腔・咽頭科
	小青竜湯の通年性鼻アレルギーに対する効果 ―二重盲検比較試験―	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	鼓膜形成術と耳管機能検査	八木沼裕司	JOHNS
	NICU 入院児の聴力スクリーニング	富岡幸子	Audiology Japan
	気管支喘息患者における難治性中耳炎（第 3 報）	富岡幸子	Otology Japan
	慢性副鼻腔炎におけるニューマクロライドの有効例・無効例の検討	平野浩二	耳鼻咽喉科展望
	真珠腫骨吸収をめぐるサイトカインネットワーク	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科展望
	小児滲出性中耳炎に対するマクロライド系抗生物質の効果	朴沢孝治	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌別冊
	免疫グログリン製剤による乳幼児反復性中耳炎の治療	末武光子	Otology Japan
	聾耳への鼓室形成術の適応をめぐって	末武光子	JOHNS
	慢性副鼻腔炎患者の鼻汁浸潤細胞および鼻粘膜における interleukin-8（IL-8）発現の免疫組織学的検討	綿谷秀弥	耳鼻咽喉科展望
	慢性副鼻腔炎病態における好中球滲出に対する IL-8 の役割	綿谷秀弥	炎症
	私の鼓室形成術　―真珠腫症における外耳道後壁の取り扱い―	柳原尚明、小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	上咽頭に発生した髄外性形質細胞腫の 1 症例 ―多角的補助手段による病理診断―	鈴木秀明	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	小児の日帰り全麻下鼓膜チューブ挿入術	鈴木秀明	耳鼻咽喉科臨床
	小児の気管・気管支・食道異物	鈴木秀明	JOHNS
	慢性副鼻腔炎における好中球動員 IL-8 産生に対するマクロライド少量長期投与の効果	鈴木秀明	Japanese Journal of Antibiotics
	スギ花粉症に対するセルテクト®（Oxatomide）の予防投与効果の臨床的検討 ―オキサトミドの臨床的検討―	鈴木直弘	耳鼻咽喉科展望
	2 段階評定尺度法と 1 段階評定尺度法によるラウドネス関数の測定	鈴木陽一、大山健二	Audiology Japan
	ラウドネス補償型デジタル補聴器 CLAIDHA	鈴木陽一、大山健二	JOHNS
	鼻アレルギーに関する話題 花粉症	高坂知節	興和医報
	鼻すすり癖が誘因と考えられる真珠種	八木沼裕司	耳鼻咽喉科展望
	側頭骨・小脳橋角部の MRI　2）腫瘍・炎症	橋本　省	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
1996	Co-expression of Endothelin-1 and Endothelin-Converting Enzyme-1 in patients with chronic rhinitis	Furukawa K	Am J Respir Cell Mol Biol
	Expression of nitric oxide synthase in the human nasal mucosa	Furukawa K	Am J Respir Crit Care Med
	Na^+, K^+-ATPase activity in the cochlear lateral wall of the gerbil	Furukawa M	Neurosci Lett
	Culture and characterization of human nasal gland cells	Furukawa M	Am J Physiol
	The NA-K-CL cotransporters in the rat cochlea：RT-PCR and partial sequence analysis	Hidaka H	Biochem and Biophys Res Comm
	Subjective and objective evaluation in endoscopic sinus surgery	Ikeda K	Am J Rhinol
	Comparison of complications between endoscopic sinus surgery and Caldwell-Luc operation	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Endoscopic laser sinus surgery using KTP/532 laser	Ikeda K	Lasers in Medical Science
	Effects of protein kinase C on the Na^+-H^+ exchange in the cochlear outer hair cell	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	Effects of salicylate and lanthanides on outer hair cell motility and associated gating charge	Kakehata S	J Neurosci

WGA lectin binding sites of the apical surface of corti epithelium : Enhancement by back-scattered electron imaging in guinea-pig inner ear	Katori Y	J Electron Microsc
Immunoreactivity of sensory hair bundles of the guinea-pig cochlea to antibodies against elastin and keratan sulphate	Katori Y	Cell & Tissue Research
Measurement of endocochlear CD potentials in ears with acoustic neuromas : a preliminary report	Kobayashi T	Acta Otolaryngol
Incidence of sniff-related cholesteatomas	Kobayashi T	Acta Otolaryngol
Subcellular distribution and pharmacological identification of M1 receptors in the submucosal nasal gland acinar cells of guinea pigs	Nakabayashi S	Am J Rhinol
Bilateral sensorineural hearing loss associated with the point mutation in mitochondrial genome	Oshima T	Laryngoscope
Distribution of Ca^{2+} channels on cochlear outer hair cells revealed by fluorescent dihydropyridines	Oshima T	Am J Physiol
Morphological subclasses of lateral olivochochlear terminals? Ultrastructural analysis of inner spiral bundle in cat and guinea pig	Satake M	Journal of Comparative Neurology
Reduced reticulization of palatine tonsils with IgA nephropathy	Sato Y	Acta Otolaryngol Suppl.
IgA nephropathy with poorly developed lymphoepithelial symbiosis of the palatine tonsils	Sato Y	Nephron
Carbohydrate composition of stereociliary glycocalyx of the utricle of guinea pig inner ear	Suzuki H	Acta Otolaryngol
Mechanism of neutrophil recruitment induced by IL-8 in chronic sinusitis	Suzuki H	J Allergy Clin Immunol
Pathogenesis of attic retractions and attic cholesteatomas	Takasaka T	Cholesteatoma and Mastoid Surgery
Clinical study of chronic tonsillitis with IgA nephropathy treated by tonsillectomy	Tomioka S	Acta Otolaryngol Suppl
The habit of sniffing in nasal diseases as a cause of secretory otitis media	Yaginuma Y	Am J Otol
Abnormalities and the implication of retinoblastoma locus and its protein product in head and neck cancers	Yokoyama J	Anticancer Res
Mesodermal- vs. neuronal-specific expression of Mafk is elicited by different promoters	Motohashi H	Genes to Cells
鼓膜マッサージ後のティンパノグラムの変化	沖津卓二	Otology Japan
通年性鼻アレルギーに対するラマトロバン（BAY u 3405）の臨床試験 —鼻閉に対する効果の検討—	海野徳二、 髙坂知節	臨床医薬
聴神経腫瘍の画像診断	橋本　省	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
喉頭狭窄を呈した再発性軟骨炎の 1 例	熊谷正樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
頸部腫瘤を主訴とした顆粒球肉腫の 1 症例	熊谷正樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
中耳真珠腫の治療成績と予後因子 —磐城共立病院耳鼻咽喉科・6 年間、72 耳の検討—	熊谷正樹	磐城共立病院医報
ヒト培養粘膜上皮細胞及びヒト培養鼻腺細胞におけるマクロライドのイオン輸送への影響	古川正幸	耳鼻咽喉科展望
歪成分耳音響放射に及ぼす年齢の影響	高橋　辰	日本耳鼻咽喉科学会会誌
モルモット蝸牛基底板における進行波の観察	高橋　辰	日本耳鼻咽喉科学会会誌
三歳児健診で発見され手術を要した中耳疾患	高橋由紀子	Audiology Japan
Gerbil 前庭 Dark Cell の体積調節機構	志賀伸之	日本耳鼻咽喉科学会会誌
口内法により治療した顎下型ガマ腫の 1 例	狩野茂之	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
舌根部に発生した骨性分離腫の 1 例	小野寺亮	JOHNS
耳管の神経支配	石戸谷雅子	JOHNS
エリスロマイシンの蝸牛電位への影響	千葉敏彦	耳鼻咽喉科臨床
アブミ骨筋の Anti-Masking 作用について —病的共同運動症例における検討—	川瀬哲明	Otology Japan
聴覚の加齢変化と純音マスキングパターン	川瀬哲明	耳鼻咽喉科臨床
最近の補聴器技術の進歩	川瀬哲明	MODERN MEDICINE
デジタル補聴器（ラウドネス補償型）の効果と適応　その初期経験より	川瀬哲明	図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH 1 補聴器の選択と評価
嗅覚識別検査（Smell Identification Test）の有用性に関する検討 —多施設における検討—	大山　勝、 髙坂知節	日本鼻科学会会誌
急激な聴力低下をきたした Usher 症候群 III 型症例	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
Usher 症候群	大島猛史	図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH 2. 遺伝子異常と耳疾患
マクロライドと電解質分泌	池田勝久	日本気管食道科学会会報
ESS における眼窩損傷	池田勝久	JOHNS
鼻呼吸障害の下気道への影響	池田勝久	JOHNS

	Ostiomeatal complex の病変とマクロライドの効果	池田勝久	耳鼻咽喉科展望
	喘息を伴う慢性副鼻腔炎	池田勝久	アレルギーの臨床
	内視鏡的鼻・副鼻腔手術　慢性副鼻腔炎の手術	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	蝸牛有毛細胞から蝸牛神経核　解剖／自発放電／単音による反応／複音に対する反応	池田勝久	図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH No. 3 聴覚情報とその異常
	食道魚骨異物の統計的観察	中林成一郎	日本気管食道科学会会報
	スギ花粉症におけるプロピオン酸フルチカゾン点鼻による初期治療の効果	中林成一郎	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	鼻アレルギー鼻粘膜組織中の各浸潤細胞に対する抗原誘発及びステロイド鼻腔内投与の影響	中林成一郎	耳鼻咽喉科展望
	頭蓋外内頸動脈瘤の 3 症例	渡邊健一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	CLAIDHA 型ラウドネス補償デジタル補聴器の臨床的評価について	日高浩史	日本音響学会聴覚研究会資料（1996 年 6 月 13、14 日）
	ラマトロバンの鼻アレルギー臨床第 III 相試験 ―テルフェナジンとの比較―	馬場駿吉、高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	新規トロンボキサン A2 受容体拮抗薬ラマトロバン（BAY u 3405）の通年性鼻アレルギーに対する臨床的検討―用量設定後期第 II 相試験―	馬場駿吉、高坂知節	臨床医薬
	浸出性中耳炎に対する風船を用いた自己通気療法	八木沼裕司	Otology Japan
	鼻すすりの及ぼす影響	八木沼裕司	JOHNS
	電気味覚検査の中耳術前検査としての有用性	八木沼裕司	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	サイトケラチンを伴う上顎洞髄外形質細胞腫	鈴木秀明	耳鼻咽喉科臨床
	平衡器-耳石器に存在する耳石前駆体の性質	鈴木秀明	生体の科学
	慢性副鼻腔炎における好中球動員および IL-8 産生に対するマクロライド少量長期投与の効果	鈴木秀明	耳鼻咽喉科展望
	アレルギー性鼻炎、副鼻腔炎とサイトカインネットワーク	鈴木秀明	図説耳鼻咽喉科 NEW APPROACH 4　耳鼻咽喉科疾患への免疫学的アプローチ
	花粉症の最近の治療　―花粉症の予防と治療の実際―　花粉症の生活指導と Quality of Life	鈴木直弘	Progress in Medicine
	一段階細分評定尺度法によるラウドネス関数の測定について	鈴木陽一、川瀬哲明	日本音響学会聴覚研究会資料（1996 年 6 月 13、14 日）
	中耳手術における顕微鏡と内視鏡の併用	高坂知節	耳鼻咽喉科臨床
	超高齢化社会と聴覚 ―聴覚総合研究所の設立を夢見て―	高坂知節	仙台市医師会報
	高齢者のための新しい補聴器（クレイダ型完全デジタル補聴器）の開発	高坂知節	耳鼻咽喉科展望
	滲出性中耳炎における漢方治療の意義	高坂知節	Progress in Medicine
	先天性真珠種の局在部位、形状と耳小骨奇形の関係 ―自験 40 耳と文献的考察―	末武光子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
1997	Epithelial cell kinetics in the pars flaccida of the tympanic membrane of the Mongolian gerbil	Adachi M	Recent advances in otitis media
	Effects of extracellular ATP on ion transport and $[Ca^{2+}]i$ in mongolian gerbil middle ear epithelium	Furukawa M	Am J Physiol
	Expression and localization of the Na-K-2Cl contransporter in the rat cochlea	Goto S	Brain Res
	Treatment of ipsilateral delayed endolymphatic hydrops	Hashimoto S	Acta Otolaryngol (Stockh)
	Low-dose long-term erythromycin treatment for secretory otitis media in childhood	Hozawa K	Recent advances in Otitis Media
	Increase of Cl^- secretion induced by kampo medicine (Japanese herbal medicine), Sai-rei-to, in mongolian gerbil middle ear epithelium	Ikeda K	Jpn J Pharmacol
	Restoration of the mucociliary clearance of the maxillary sinus after endscopic sinus surgery	Ikeda K	J Allergy Clin Immunol
	Laser-assisted uvulopalatoplasty for habitual snoring without sleep apnea : outcome and complications	Ikeda K	ORL
	Unilateral sinonasal disease without bone destruction	Ikeda K	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Molecular and clinical implications of loop diuretic ototoxicity	Ikeda K	Hear Res
	A case of leimyosarcoma of the sphenoid sinus	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Endonasal endoscopic management in fibrouos dysplasia of the paranasal sinuses	Ikeda K	Am J Otolaryngol
	A case report of salivary duct carcinoma	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	A case of leiomyosarcoma of the sphenoid sinus	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Middle ear inflation as a treatment for secretory otitis media in children	Kaneko Y	Acta Otolaryngol
	Frequency summation observed in the human acoustic reflex	Kawase T	Hear Res
	Ototoxic effect of erythromycin on cochlear potentials in the guinea pig	Kobayashi T	Ann Otol Rhinol Laryngol
	A Press-Through-Pack in the Larynx	Kumagai M	Tohoku J Exp Med

	Expression of voltage-dependent chloride channels in the rat cochlea	Oshima T	Hear Res
	Alternatively spliced isoforms of the Na^+/Ca^{2+} exchanger in the guinea pig cochlea	Oshima T	Biochem Biophys Res Comm
	Expression of adhesion Molecules in nonallergic chronic sinustisis	Shimomura A	Laryngoscope
	Age-related changes of the globular substance in the otoconial membrane of mice	Suzuki H	Laryngoscope
	Effects of long-term low-dose macrolide administration on neutrophil recruitment and IL-8 in the nasal discharge of chronic sinusitis patients	Suzuki H	Tohoku J Exp Med
	P2 purinoceptor of the globular substance in the otoconial membrane of the guinea pig inner ear	Suzuki H	Am J Physiol
	Quantitative uronic acid analysis of the otoconial membrane of the guinea pig	Suzuki H	Hear Res
	Inhibitory effect of macrolides on interleukin-8 secretion from cultured human nasal epithelial cells	Suzuki H	Laryngoscope
	Tympanostomy tube treatment in recurrent otitis media with effusion	Takasaka T	Recent Advances in Otitis Media
	Secretory mechanisms of the submucosal nasal gland cells	Takasaka T	Am J Rhinol
	Effects of potassium channel blickers on the acetylcholine-induced currents in dissociated outer haior cells of guinea pig cochlea	Yamamoto T, Kakehata S	Neurosci Lett
	Effect of anesthetic agents and middle ear pressure application on destortion product otoacoustic emissions in the gerbil	Zheng Y, Ohyama K	Hear Res
	鼻腔洗浄液中遊走細胞に対するザジテン点鼻液の臨床効果	稲村直樹	診療と新薬
	慢性副鼻腔炎患者鼻汁による好中球遊走作用について	下村　明	Japanese J Antibiotics
	Waardenburg 症候群 II 型の 1 症例	舘田　勝	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	中咽頭扁平上皮癌前壁型症例の検討	舘田　勝	口腔・咽頭科
	頸部ガス壊痕の治療経験	菊地俊彦	山形済生館医誌
	耳下腺多形腺腫の CT と MRI	橋本　省	JOHNS
	めまい・脳循環改善薬	橋本　省	JOHNS
	聴神経腫瘍の診療方針	橋本　省	耳鼻咽喉科展望
	感音難聴を合併した急性中耳炎の多発について	熊谷重城	Otology Japan
	鼻・副鼻腔の乳頭腫	熊谷正樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	歪成分耳音響放射の臨床有用性に関する検討	佐藤利徳	東北医学雑誌
	頭頸部癌における遺伝子座 9p21 領域の欠失の検討	志賀清人	頭頸部腫瘍
	モルモット中耳振動様式の周波数特性	洲崎　洋	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	アレルギー性鼻炎患者を対象とした特異 IgE 抗体測定における液相法（アラスタット）とスポンジ法の比較検討	洲崎　洋	アレルギーの臨床
	原発性前頭篩骨洞嚢胞の 1 例	小倉正樹	山形済生館医誌
	当科における中咽頭扁平上皮癌症例の検討	松浦一登	頭頸部腫瘍
	聴力の加齢変化とミトコンドリア遺伝子欠失変異の蓄積との関連性	大島猛史	第 6 回耳鼻咽喉科と老化の研究会基礎シンポジウム論文集
	急性鼻炎	池田勝久	JOHNS
	喉頭疾患への KTP/532 レーザーの応用	池田勝久	日本レーザー医学会誌
	マクロライドの上手な使い方　副鼻腔炎・中耳炎	池田勝久	クリニカ
	耳下腺嚢胞性疾患の 2 症例	陳　志傑	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	TAU-284（ベシル酸ベトタスチン）の通年性鼻アレルギーに対する後期臨床第 II 相試験　―二重盲検比較法による至適投与量の検討―	馬場駿吉、髙坂知節	臨床医薬
	めまい	朴澤孝治	臨床看護
	耳介裂傷	朴澤孝治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻粘膜上皮細胞の interleukin-8 分泌に対するマクロライドの抑制効果	鈴木秀明	日本鼻科学会会誌
	慢性副鼻腔炎に対するマクロライド少量長期投与療法と副鼻腔含気化の改善	鈴木秀明	耳鼻咽喉科展望
	培養ヒト鼻粘膜上皮細胞の IL-8 分泌とマクロライドによる抑制効果	鈴木秀明	Japanese J Antibiotics
	腕動脈蛇行症の 1 症例	鈴木秀明	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	頭頸部再建における広頚筋皮弁の応用	鈴木秀明	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻アレルギー患者の鼻汁中および鼻粘膜組織中の各浸潤細胞の免疫組織学的検討	鈴木直弘	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	花粉症における薬剤投与と鼻汁中細胞の変化	鈴木直弘	耳鼻咽喉科臨床
	パッチクランプ法による単離外有毛細胞の挙動解析	和田　仁	日本機械学会論文集（C 編）
	超音波による鼓膜物性評価 ―本手法による鼓膜疾患の診断可能性について―	和田　仁、朴澤孝治	超音波 TECHNO
	通年性アレルギーに対するラマトロバン（BAY u 3405）の長期投与における臨床的検討	髙坂知節	臨床医薬
	副鼻腔の炎症とアレルギー	髙坂知節	日耳鼻群馬地方部会会報

	滲出性中耳炎は増えているか	安達美佳	JOHNS
	気管支喘息患者の難治性中耳炎	松谷幸子	JOHNS
	真珠種・骨吸収機序とサイトカイン	豊嶋　勝	Otology Japan
	頭頸部癌における自己血輸血の有用性の検討	横山純吉	自己輸血
	IgA 腎症の口蓋扁桃の細菌叢	松谷幸子	日本耳鼻咽喉科感染症研究会誌
	耐性肺炎球菌と急性中耳炎の重症化	末武光子	JOHNS
	肺炎球菌の耐性化と急増する難治性急性中耳炎	末武光子	日耳鼻専門医通信
	中耳炎　特集　小児科医にもここまでできる境界領域	末武光子	小児科
	蝸牛外有毛細胞膜センサー・モーターの機構とその障害	欠畑誠治	Otology Japan
1998	Acute effects of combined administration of kanamycin and furosemide on the stria vascularis studied by distortion product otoacoustic emission and transmission electron microscopy	Alam SA, Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Relationship between cholinergic airway tone and serum immunoglobulin E in human subjects	Endoh N, Takasaka T	Eur Respir J
	A2 adenosine receptors in mongolian gerbil middle ear epithelium and their regulation of Cl- secretion	Furukawa M	Acta Physiol Scand
	Clinical evaluation of a portable digital hearing aid with narrow-band loudness compensation	Hidaka H	Scand Audiol
	Apparent effects of the use of digital hearing aid “CLAIDHA” on several hearing functions of impaired listeners	Hidaka H	Int Congress on Acoustics
	Surgical criteria for obstructive sleep apnea syndrome based on localization of upper airway collapse during sleep : A preliminary study	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Midfacial degloving approach facilitated by endoscope to the sinonasal malignancy	Ikeda K	Auris Nasus Larynx
	A case of basal cell adenocarcinoma of the parotid gland	Ikeda K	Tohoku J Exp Med
	Why do antimicrobial agents become ineffectual ?	Inoue M, Yano H	Yonsei Med J
	The acoustic reflex for filtered broadband stimuli : a lesser contribution of the lower frequency neurons	Kawase T	Tohoku J Exp Med
	Acoustic reflex threshold and loudness in patients with unilateral hearing losses	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Methacholine brochial hyperresponsiveness in chronic sinusitis	Okayama M	Respiration
	Loss of heterozygosity of chromosome 9p21 and 7q31 is correlated with high incidence of recurrent tumor in head and neck squamous cell carcinoma	Matsuura K	Anticancer res
	Loss of heterozygosity of chromosome 3p and 9p in head and neck squamous cell carcinoma and its prognostic implication	Matsuura K	1st World Congress on HEAD AND NECK ONCOLOGY
	Density of motility-related charge in the outer hair cell of the guinea pig inversely related to best frequency	Santos-Sacchi J, Kakehata S	Neurosci Lett
	Effect of membrane potential on the voltage dependence of motility-related charge in outerhair cells of guinea pig cochlea	Santos-Sacchi J, Kakehata S	Journal of Physiology
	pH regulation of the globular substance in the otoconial membrane of the guinea-pig inner ear	Tateda M	Hear Res
	Mitochondrial DNA deletion is a predisposing cause for sensorineural hearing loss	Ueda N	Laryngoscope
	The usefulness of computed tomography in the diagnosis of impacted fish bones in the oesophagus	Watanabe K	J Laryngol Otol
	Expression of a adhesion molecules in cultured human nasal mucosal microvascular endothelial cells activated by interleukin-1β or tumor necrosis factor-α : Effects of dexamethasone	Yamamoto Y, Ikeda K	Int Arch Allergy Immunol
	Endonuclease cleavage of DNA in the aged cochlea of Mongolian gerbil	Zheng Y, Ikeda K	Hear Res
	戦略的抗菌療法のための感受性テスト	井上松久、矢野寿一	日本内科学雑誌
	蝶形骨洞真菌症の診断と外科的治療	菊地俊彦	山形済生館医誌
	副甲状腺腫による原発性副甲状腺機能亢進症の 1 症例	菊地俊彦	山形済生館医誌
	皮膚縫合創に対するフィルム・ドレッシング材の使用例	熊谷重城	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	宮城県における真珠腫疫学調査	高橋由紀子	Otology Japan
	聞こえの衰えと補聴器	川瀬哲明	仙台市医師会健康だより
	聴力検査法	川瀬哲明	臨床医 24 増刊号診察手技マニュアル
	突発性難聴重症例に対するステロイドの大量療法の効果	浅田行紀	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	14 員環マクロライドは副鼻腔粘膜にどのような影響を及ぼしているか	大山　勝、洲崎春海	耳鼻咽喉科展望
	血管条細胞におけるイオン輸送　―分子生物学的手法による研究―	大島猛史	Otology Japan

	いびき、睡眠時無呼吸症候群	池田勝久	今日の治療指針　私はこう治療している
	咽喉頭疾患　―切除かレーザーか―	池田勝久	日本気管食道科学会会報
	鼻・副鼻腔の検査　鼻腔通気度検査．嗅裂部・鼻咽喉・副鼻入口部ファイバースコピー	池田勝久	生涯教育シリーズ 47 生体・機能検査の ABC
	外耳道の臨床解剖と皮膚の特性	朴沢孝治	JOHNS
	副鼻腔炎マクロライド療法の実際　―漫然と投与しないために―	茂木五郎	耳鼻咽喉科展望
	両側外傷性顔面神経麻痺の 1 症例	鈴木秀明	Otology Japan
	慢性副鼻腔炎粘膜における Th1-Th2 均衡	鈴木秀明	日本鼻科学会会誌
	通年性アレルギー性鼻炎に対するアレギサール錠の有用性の検討	鈴木直弘	新薬と臨床
	Ⅳ.　アレルギー性鼻炎　定義、診断、分類、疫学	高坂知節	アレルギーの領域
	巨大な耳下腺腫瘍を形成した神経線維腫症の 1 型の 1 症例	浅田行紀	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻閉を主訴とした下垂体マクロプロラクチノーマの 1 症例	中林成一郎	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	再発を繰り返した下咽頭脂肪肉腫例	中林成一郎	耳鼻咽喉科臨床
	慢性副鼻腔炎粘膜における Th1-Th2 均衡	鈴木秀明	日本鼻科学会会誌
	二経路投与方による超選択的動注療法	横山純吉	頭頸部腫瘍
	頭頸部領域の抗酸菌感染症の遺伝子診断	横山純吉	口腔咽頭誌
	頭頸部悪性腫瘍に対する動注療法	松本　亘、横山純吉	MEDICAL VIEW
	中耳炎・副鼻腔炎　私の処方	松谷幸子	小児科臨床別刷
	中耳・外耳のアレルギー ― 新しい展開 ―	松谷幸子	JOHNS
	IgA 腎症における扁摘後尿所見と誘発テスト	松谷幸子	口腔・咽頭科
	喉頭癌・白板症発症に関わる喫煙と血中ビタミン値の影響	志賀伸之	喉頭
	各種通気法と風船を用いた自己通気療法	八木沼裕司	耳喉頭頸クリニカルトレンド 2
	耳治療に使用する資材・材質	八木沼裕司	JOHNS
	換気チューブはいつ抜去したらよいか	末武光子	耳喉頭頸クリニカルトレンド 2
	IgA 腎症と扁桃濾胞樹状細胞、樹状細胞―免疫システムの司令塔―	草刈千賀志	文光堂
	聴力推移を観察できたムンプス難聴の 2 症例	狩野茂之	仙台市立病院医誌
	児童・生徒の心因性難聴について	沖津卓二	健康教室
	鼓室形成術 O 型の術後聴力	高村博光、末武光子	Otology Japan
1999	Dynamic Ca^{2+} signalling in rat arterial smooth muscle cells under the control of local renin—angiotensin system	Asada Y	J Physiol
	Kinin and histamine stimulate Cl^- secretion in gerbil middle ear epithelium : connection to otitis media	Furukawa M	Hear Res
	Expression and localization of the Na^+-H^+ exchanger in the guinea pig cochlea	Goto S	Hear Res
	Prognosis of sudden deafness with special reference to risk factors of microvascular pathology	Hirano K	Auris Nasus Larynx
	Cytokines and pathogenesis of attic cholesteatoma	Hozawa K	Otitis Media Today
	Pathogenesis of Attic Cholesteatoma. ―シンポジウム II「鼓膜の機能、形態、病態に関する最近の進歩」特集	Hozawa K	Otology Japan
	Endoscopic endonasal repair of orbital floor fracture	Ikeda K	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Pharmacotherapeutic perspective in otitis media with effusion. Based on ion transport mechanism of the cultured middle ear epithelia	Ikeda K	Otitis Media Today
	Endoscopic sinus surgery improves pulmonary function in patients with asthma associated with chronic sinusitis	Ikeda K	Ann Oto Rhino Laryngol
	Nasal airway resistance and olfactory acuity following transsphenoidal pituitary surgery	Ikeda K	Am J Rhinol
	Unilateral examination of olfactory threshold using the Jet Stream Olfactometer	Ikeda K	Auris Nasus Larynx
	Sound localization for a virtual sound source in cases of chronic otitis media	Kawase T	Audiology
	Pathogenesisi of hearing loss in vestibular schwannomas as studies by intraoperative measurement of the endocochlear potentials	Kobayashi T	Third International Conference on Acoustic Neurinoma and Other CPA Tumors
	Altered cochlear fibrocytes in a mouse model of DFN3 nonsyndromic deafness	Minowa O, Ikeda K	Science
	Profound hearing loss attributable to cochlear nerve disease : diagnosis with combination of otoacoustic emission and maagnetic resonance imaging	Ogura M	Laryngoscope
	Sensorineural hearing loss associated with Byler disease	Oshima T	Tohoku J Exp Med
	Hearing loss with a mitochondrial gene mutation is highly prevalent in Japan	Oshima T	Laryngoscope

	Localization of the voltage-gated chloride channel, CIC-3, in human nasal tissue	Oshima T	Proceeding of Airway Secretion Research
	Inhibitory effect of erythromycin on Interleukin-8 secretion from exudative cells in the nasal discharge of patients with chronic sinusitis	Suzuki H	Laryngoscope
	IL-12 recepterβ2 and CD30 expression in paranasal sinus mucosa of patients with chronic sinusitis	Suzuki H	Eur Respir J
	Rhinologic Comouted Tomographic Evaluation in Patients With Cleft Lip and Palate	Suzuki H	Arch Otolaryngol Head Neck Surg
	Factors which influence the recurrence rate of otitis media with effusion after removal of tympanostomy tubes	Takasaka T	Otitis Media Today
	Expression of connexin 26 and Na, K-ATPase in the developing mouse cochlear lateral wall : function implications	Xia A, Kikuchi T	Brain Res
	Presence of Genes for β-Lactamases of Two Different Classes on a Single Plasmid from a Clinical Isolate of Serratia marcescens	Yano H	J Antibiot
	耐性菌感染症の現状	井上松久、矢野寿一	今日の治療
	β-ラクタマーゼの基礎知識	井上松久、矢野寿一	臨床と微生物
	薬剤感受性試験―耐性菌についての概説「臨床検査データブック 1999-2000」（編：黒川清、春日雅人、北村聖）	井上松久、矢野寿一	医学書院（東京）
	口腔・中咽頭癌手術における気管切開術の適応	舘田　勝	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	Extended-spectrum β-lactamases 産生菌に対する β-ラクタム系薬の抗菌力の比較	久我明男、矢野寿一	Jpn J Antibiot
	心理学的聴力検査　純音聴力検査 3　―蝸牛神経性疾患―	橋本　省	JOHNS
	初期聴神経腫瘍の診断と治療、 私はこうしている	橋本　省	Modern Physician
	めまい患者の診断、治療に MRI をどう役立てるか	橋本　省	今月の治療
	Bezold 膿瘍（耳鼻咽喉科疾患の症例とその解説―耳編）	古川加奈子	JOHNS
	喀痰細胞診を契機に発見された Tis 上顎洞扁平上皮癌の 1 例	志賀清人	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	遺伝子変異から見た舌癌の成立ちと予後	志賀清人	口腔・咽頭科
	喉頭部分切除術後における PEG1 の有効性 ―とくに放射線治療後の喉頭癌再発例に対する使用経験	志賀清人	現代医療　Vol. 31　増刊 II
	下咽頭癌・喉頭癌の予後を規定する遺伝子変異	志賀清人	頭頚部腫瘍
	舌癌の術前まで無症状であった先天性気管狭窄症の 1 例	志賀清人	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	口腔・咽頭癌における多重癌症例の検討	小川武則	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	健聴者における両耳ピッチの差と周波数弁別閾	小倉正樹	信学義報
	下咽頭・喉頭・頸部食道切除術後の遊離空腸による食道・音声同時再建術	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	頭頸部癌における遺伝子座 3p21、9p21 領域の欠失と予後の関係	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	喉頭癌術後に生じた MRSA 腸腰筋膿瘍例	須納瀬弘	耳鼻咽喉科臨床
	いびき	池田勝久	呼吸
	アレルギー性鼻炎と漢方―小青竜湯の鼻汁の分泌応答への影響―	池田勝久	漢方と最新治療
	副鼻腔手術後の toxic shock syndrome	池田勝久	JOHNS
	第 17 回聴覚生理研究会　ジーンターゲッティングによるヒト疾患モデルの作製とその応用	池田勝久	Otology Japan
	スギ花粉飛散 1 日飛散量の予測について	中塚　滋	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	喉頭狭窄―耳鼻咽喉科疾患の症例とその解説　喉頭・頚部編	朴沢孝治	JOHNS
	最近の β-ラクタマーゼの分類と疫学	矢野寿一	臨床と微生物
	抗菌薬耐性の機序とその対策	矢野寿一	INFECTION CONTROL
	BLNAR（β-ラクタマーゼ陰性アンピシリン耐性インフルエンザ菌）	矢野寿一	Medical Technology
	アレルギー性鼻炎と副鼻腔炎	鈴木秀明	現代医療
	通年性鼻アレルギー症例に対する下甲介粘膜レーザー手術	鈴木直弘	日本鼻科学会会誌
	一段階細分化評定尺度法によるラウドネス関数の測定	鈴木陽一、日高浩史	Audiology Japan
	新密度を統制した単語了解度試験による難聴者の聴取能力評価の試み	山口崇徳、川瀬哲明	日本音響学会聴覚研究会資料
	非機能性副甲状腺嚢胞の 1 症例	須納瀬弘、浅野重之、豊嶋　勝	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	粘膜病変と Th1-Th2 バランスから観た慢性副鼻腔炎へのマクロライド療法の効果	池田勝久	Jpn J Antibiotics
	ハンセン病既往患者の鼻副鼻腔病変の臨床的観察	中林成一郎	日本鼻科学会会誌
	頸部皮下気腫および縦隔気腫をきたした 1 症例	山内大輔	山形済生館医誌
	反復性中耳炎の病態と治療	小林俊光	耳鼻咽喉科展望

	急性中耳炎と副鼻腔炎	末武光子	小児科臨床
	赤ちゃんの中耳炎と保育園	末武光子	小児耳鼻科
	急性中耳炎 ― 重症化・反復化とその対策 ―	末武光子	小児耳鼻科
	くりかえす気道感染症と中耳炎　4. 耳鼻科から、急性中耳炎.	末武光子	東京小児科会報
	人工中耳―成人症例の適応・手術・合併症	大山健二	Otology Japan
	ステロイド大量療法後に脳腫瘍を併発したハント症候群の 1 例	菅原　充	Facial N Res Jpn
2000	Cisplatin-induced apoptptic cell death in Mongolian gerbil cochlea	Alam SA, Ikeda K	Hear Res
	A case of extramedullary plasmacytoma arising from the nasal septum	Hidaka H	J Laryngol Otol
	Enodonasal endoscopic marsupialization of paranasal sinus mucoceles	Ikeda K	Am J Rhinol
	Increased carbon monoxide in exhaled air of patients with seasonal allergic rhinitis	Ikeda K	Airway Secretion Research
	Current concept of outer hair cell motility	Kakehata S	Auris Nasus Larynx
	Effects of contralateral noise on measurement of the psychophysical tuning curve	Kawase T	Hear Res
	Measurement of stapedius contraction during vocalization effort in patients after laryngectomy or tracheostomy	Kawase T	Hear Res
	Novel mutations in the connexin 26 gene（GJB2）responsible for childhood deafness in the kapanese population	Kudo T	American Journal of Medical Genetics
	A case report of sinonasal teratocarcinosarcoma	Ogawa T	Tohoku J Exp Med
	Characterization of Novel and Identified Genes in Guinea Pig Organ of Corti	Oshima T	Bioechemical and Biophysical Research Communications
	The time-course of the effects of contralateral sound on the level of distortion product otoacoustic emissions	Sasaki N	Tohoku J Exp Med
	Apparent change of masking functions with compressiontype digital hearing aid	Sasaki N	Scand Audiol
	Long-Term follow-up Obstructive Sleep Apnea Syndrome Following Surgery in Children and Adults	Sato M	Tohoku J Exp Med
	Sudden bilateral hearing loss and dizziness occurred with cerebellar infarction	Sunose H	Otolaryngol Head Neck Surg
	Maxillary sinus development and sinusitis in patients with cleft lip and palate	Suzuki H	Auris Nasus Larynx
	Prognostic Factors of Chronic Rhinosinusitis under Long-Term Low-Dose Macrolide Therapy	Suzuki H	ORL
	Nasal lipoma	Takasaki K, Yano H	J Laryngol Otol
	A Clinical Study of Oral Tongue Cancer	Tateda M	Tohoku J Exp Med
	Streptococcus anginosus in head and neck squamous cell carcinoma : implication in carcinogenesis	Tateda M	International Journal of Molecular Medicine
	Expression of the Sox10 gene during mouse inner ear development	Watanabe K	Molecular Brain Research
	Expression of connexin 31 in the developing mouse cochlea	Xia A, Ikeda K	Neuro Report
	Pulsed-field gel electrophoresis analysis of nasopharyngeal flora in children attending a day care center	Yano H	J Clin Microbiol
	PRSP とマクロライド系・ニューキノロン系抗菌薬	井上松久、矢野寿一	日本医師会雑誌
	能動的基底板振動系―外有毛細胞の働き―「細胞伸縮の粘弾性のモデル」	欠畑誠治	Otology Japan
	耐性肺炎球菌にいかに対処するか-耳鼻咽喉科の立場から	高橋博光、矢野寿一	化学療法の領域
	末梢性顔面神経麻痺における MRI 像	小川武則	仙台市立病院医誌
	口腔・咽頭癌の重複癌における遺伝子異常	松浦一登	口腔・咽頭科
	2. 一次神経の形態と生理機能	川瀬哲明	CLIENT21
	蝸牛アクティブメカニズムと遠心性神経の役割	川瀬哲明	Otology Japan
	特集：内視鏡下鼻副鼻腔手術　悪性眼球突出症に対する ESS	池田勝久	JOHNS
	上気道粘膜への KTP/532 と半導体レーザーの応用	池田勝久	日本気管食道科学会会報
	特集：においの臨床　嗅覚障害の診断　静脈性嗅覚検査	池田勝久	JOHNS
	4.　粘膜防御機構　4-1　物理化学的防御機構	池田勝久	CLIENT21
	いびきに対する　laser-assisted uvulopalatoplasty（LAUP）	池田勝久	口腔・咽頭科
	感音難聴における内耳のイオン輸送機構の病因解析	池田勝久	東北医学雑誌
	外耳、中耳	朴沢孝治	CLIENT21
	反復性中耳炎における環境因子としての集団保育について ―保育園における鼻咽腔細菌叢の検討―	矢野寿一	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	感染症治療ガイド―耐性獲得機序について	矢野寿一	治療
	細菌の薬剤耐性―緑膿菌	矢野寿一	治療学
	耐性菌感染症とその緊急具体策―肺炎桿菌	矢野寿一	化学療法の領域

	耐性菌感染症とその緊急具体策―耳鼻科感染症	矢野寿一	化学療法の領域
	耳鼻咽喉科感染症-今日の課題と対策―慢性中耳炎と合併症	矢野寿一	化学療法の領域
	小唾液腺由来の多形腺腫内癌の 1 症例	鈴木秀明	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻・副鼻腔疾患のレーザー治療の適応と成績	鈴木直弘	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻すすりの病態生理	八木沼裕司	JOHNS
	中耳腺腫の 1 例	豊嶋　勝	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	耳鼻咽喉科感染症 ― 今日の課題と対策．深頸部感染症	豊嶋　勝	化学療法の領域
	先天性耳小骨奇形	豊嶋　勝	新図説耳鼻咽喉科頭頸部外科講座 2
	乳幼児色素性神経外胚葉性腫瘍の一例	松浦一登	頭頸部外科
	頬粘膜癌	西條　茂	耳鼻咽喉・頭頸部手術アトラス下巻
	反復する急性中耳炎と起炎菌の同一性に関する検討	末武光子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	ムコーズス中耳炎の現況と問題点	末武光子	Otology Japan
	急性中耳炎病態の変貌	末武光子	変貌する急性中耳炎
	急性化膿性中耳炎	末武光子	化学療法の領域
	耐性菌に対する対策　A. 処置	末武光子	変貌する急性中耳炎
	小児の反復する中耳炎	末武光子	日耳鼻専門医通信
	ペニシリン耐性肺炎球菌	末武光子	内科
	インピーダンスオージオメトリーによる検査	沖津卓二	CLIENT21
	鼓膜音響放射率検査	沖津卓二	CLIENT21
	心因性難聴	沖津卓二	今日の小児治療指針
	三歳児健診・1 歳 6 か月健診の成果	沖津卓二	JHONS
	児童難聴の推移 ― 仙台市における 30 年間の健診結果 ―	沖津卓二	Audiology Japan
	鼻内パッキング	小野寺亮	耳鼻咽喉科診療プラクティス
	アレルギー性副鼻腔真菌症に対する特異的免疫療法	鈴木秀明	耳鼻咽喉科プラクティス 1 鼻科手術支援機器の Up to Date
	CDDP 動注療法	志賀清人	癌化学療法ハンドブック
2001	Tonsillectomy and steroid pulse therapy significantly impact on clinical	Hotta O, Tomioka S	Am J Kidney Dis
	The Expression of Apoptosis-Related Proteins in the Aged Cochlea of Mongolian Gerbils	Alam SA, Oshima T	Laryngoscope
	Carcinoma ex pleomorphic adenoma of the palatal minor salivary gland with extension into the nasopharynx	Furukawa M	Auris Nasus Larynx
	Quantitative assessment of the pharyngeal airway by dynamic magnetic resonance imaging in obstructive sleep apnea syndrome	Ikeda K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Effect of Depth of Conical-Shaped Tympanic Membrane on Middle-Ear Sound Transmission	Koike T, Kobayashi T	JSME International Journal Series C
	GJB2（connexin 26）mutations and childhood deafness in Thailand	Kudo T	Otol Neurotol
	Expresseion of the Voltage-Dependent Chloride Channel CIC-3 in Human Nasal Tissue	Oshima T	ORL
	Point Mutation of the Mitochondrial Genome in Japanese Deaf-Mutism	Oshima T	ORL
	Presence of Streptococcus infection in extra-oropharyngeal head and neck squamous cell carcinoma and its implication in carcinogenesis	Shiga K	Oncology Reports
	Barotraumatic blowout franture of the orbit	Suzuki H	Auris Nasus Larynx
	A case of bilateral middle-ear squamous cell carcinoma	Takano A, Kobayashi T	J Laryngol Otol
	Distribution of protein motors along the lateral wall of the outer hair cell	Wada H, Kakehata S	Hear Res
	Expression of connexin 30 in the developing mouse cochlea	Xia A, Katori Y	Brain Res
	Plasmid-encoded metallo-beta-lactamase（IMP-6）conferring resistance to carbapenems, especially meropenem	Yano H	Antimicrob Agents Chemother
	Fast, but not slow, effects of olivocochlear activation are resistant to apamin	Yoshida N	J Neurophysiol
	Short stay surgery の耳鼻咽喉科・頭頸部外科への本格的導入に向けて	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス
	症状に対する薬物療法	池田勝久	CLIENT21
	副鼻腔嚢胞に対する short stay surgery	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス
	癌専門医療施設を活用したがん診療標準化に関する共同研究	海老原敏、松浦一登	厚労科研報告書
	補聴器の社会医学的側面	沖津卓二	CLIENT21

	顔面骨骨折における 3 次元 CT 画像の検討	沖津卓二	耳鼻咽喉科臨床
	眼科内壁損傷	小野寺亮	JOHNS
	鼻茸の日帰り手術	小野寺亮	JOHNS
	当科における口唇癌の臨床的検討	駒沢大佐	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	中咽頭がん前壁型の手術術式と成績	西條　茂	JOHNS
	フレキシブルファイバースコープによる気管支・食道遺物の day surgery	鈴木秀明	耳鼻咽喉科プラクティス
	耳下腺皮脂リンパ腺腫例	中林誠一郎	耳鼻咽喉科臨床
	好酸球性中耳炎	松谷幸子	医学のあゆみ
	好酸球性中耳炎	松谷幸子	耳鼻咽喉科展望
	耳鼻咽喉科領域感染症の主な起炎菌とは？	矢野寿一	耳鼻咽喉科領域感染症 Q&A
	カルバペネム系薬、とくにメロペネムに耐性を示す―	矢野寿一	Infection $Chemotherapy
	当科における気管切開施行症例の検討	吉田征之	仙台市立病院医誌誌
	肺炎球菌に対する β-ラクタム薬の殺菌効果の検討	海江田哲、小林俊光	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	座位耳管 CT 撮影を施行した高度耳管開放症の一例	吉田晴郎、小林俊光	Otology Japan
	内耳道	橋本　省	CLIENT21
	めまい・平衡障害	橋本　省	MB ENTONI
	聴神経腫瘍手術における EBM	橋本　省	JOHNS
	聴神経腫瘍	橋本　省	JOHNS
	頸動脈小体腫瘍	橋本　省	新図説耳鼻咽喉科・頭頸部外科講座
	第 3 回九州感染症・化療フォーラム―小児と老人の急性中耳炎症例	金澤勝則、小林俊光	臨床と研究
	繰り返す髄膜炎と内耳奇形（解説/特集）	欠畑誠治	小児科臨床
	聴覚の生理学に関する最近の話題	欠畑誠治	電気情報通信学会技術研究報告
	薬物慮法　疾患に対する薬物療法　耳疾患、浸出性中耳炎	髙坂知節	21 世紀耳鼻咽喉科領域の臨床
	内耳・内耳道、発生と解剖	髙坂知節	21 世紀耳鼻咽喉科領域の臨床
	抗アレルギー薬	髙坂知節	薬のサイエンス
	アレルギー性鼻炎の治療ガイドライン	髙坂知節	アレルギー科
	アレルギー治療管理ガイドライン	髙坂知節	アレルギー
	21 世紀は感覚の時代	髙坂知節	通信医学
	注目され始めた好酸球性中耳炎	髙坂知節	アレルギー・免疫
	前頸上部の出もの・腫れもの（解説）	志賀清人	JOHNS
	放射線治療後の外科手術における PGE1 の有効性―下咽頭癌再発例に対する使用経験	志賀清人	現代医療
	切除不能頚部リンパ節転移の治療	志賀清人	JOHNS
	頭頸部扁平上皮癌に対する超選択的動注療法の成績と合併症の検討	志賀清人	頭頸部腫瘍
	家族性頸動脈小体腫瘍の 2 症例	志賀清人	頭頸部外科
	甲状腺癌を疑わせた直腸癌の甲状腺転移例	志賀清人	癌の臨床
	頭頸部癌が腹壁に転移した稀な 2 症例	小岩哲夫	頭頸部腫瘍
	レジデビューピッチによるマスキング	小倉正樹	Audiology Japan
	【錐体尖と頭蓋底の解剖と疾患】 錐体尖疾患　錐体部真珠腫（解説/特集）	小林俊光	JOHNS
	耳管開放症の体位による聴力変動	小林俊光	Otology Japan
	内耳手術	須納瀬弘	CLIENT21
	鼻出血	池田勝久	CLIENT21
	加齢変化	池田勝久	CLIENT21
	鼻性髄液漏	池田勝久	ENT/er
	上顎嚢胞様の形状を呈した上顎癌の 1 例	藤山大祐、菊地俊彦	耳鼻と臨床
	臨床耳鼻科における基本聴力検査法と最近の話題について	日高浩史	電気情報通信学会技術研究報告
	上顎洞血瘤腫に対する CT および MRI による画像解析	馬場明子、菊地俊彦	耳鼻と臨床
	［鼓膜裂傷治療］直達性鼓膜裂傷	八木沼裕司	ENTONI
	小児の鼓膜チューブ挿入術	八木沼裕司	耳鼻咽喉科プラクティス
	耳介の解剖	朴沢孝治	JOHNS

	急性中耳炎	末武光子	耳鼻咽喉科領域感染症 Q&A
	ムコーズス中耳炎	矢野寿一	INFECTION & TECHNOLOGY
	当科にて分離された MRSA の検出状況と薬剤感受性	矢野寿一	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	特集 “耳介” 耳介の炎症―耳介軟骨膜炎	矢野寿一	JOHNS
	生涯教育シリーズ―急性中耳炎	矢野寿一	長崎市医師会報
	アレルギー性副鼻腔炎	鈴木直弘	CLIENT21
	局所麻酔下口蓋垂口蓋形成術の検討	鈴木雅明	口腔・咽頭科
	アレルギー性鼻炎に対するレーザー治療	鈴木直弘	medicina
	最近の感染症・ペニシリン耐性肺炎球菌	矢野寿一	総合臨床
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科の Short Stay Surgery	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 5 巻
	EBM に基づくめまいの診断と治療	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 6 巻
	両側性上顎洞真菌症の一例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
2002	Pathogenesis of Cholesteatoma developed from otitis media with effusion	Adachi M	Proceedings of 7th international symposium on otitis media
	A Case of Lymphoepithelioma-Like Carcinoma Arising from the Palatine Tonsil	Hidaka H	Tohoku J Exp Med
	Surgical management of adhesive otitis media	Hozawa K	Proceedings of 7th international symposium on otitis media
	Is Cholesteatoma a Cytokine disease ?	Hozawa K	Recent advances in otitis media
	Ear injury caused by a sticky-tipped applicator	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Endoscopic sinus surgery in cases of cholesterol granuloma of the maxillary sinus	Kikuchi T	Tohoku J Exp Med
	Modeling of the human middle ear using the finite-element method	Koike T, Kobayashi T	Journal Acoustucal Society of America
	A Case of Solitary Fibrous Tumor of the Parotid Gland : Review of the Literatures	Kumagai M	Tohoku J Exp Med
	Comparative Immunohistochemical Localizations of Aquaporin-4 in the Cochleae of Three Different Species of Rodents	Miyabe Y, Kikuchi T	Tohoku J Exp Med
	Prediction of facial nerve outcome using electromyographic responses in acoustic neuroma surgery	Nakao Y, Kobayashi T	Otol Neurotol
	Hearing performance of a bilateral cochlear implant user	Ohyama K	Cochlear implant
	Complication-free laryngeal surgery after irradiation failure with prostaglandin E1 administration	Shiga G	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Prevelence of anitimicrobial resistance in otitis media	Suetake M	Recent advances in otitis media
	Mode of Action of Long-Term Low-Dose Macrolide Therapy for Chronic Sinusitis in the Light of Neutrophil Recruitment	Suzuki H	Curr Drug Targets Inflam Allergy
	Relationship Between Cephalometrics and Obstructive Sites in Obstructive Sleep Apnea Syndrome	Suzuki M	Angle Orthodontist
	Vascular permeability to fluorescent substance in human cranial nerves	Tabuchi T, Kobayashi T	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Long term effects of degeneration of lamina propria on the otoscopic findings of the ear drum	Takahashi C	Proceedings of 7th international symposium on otitis media
	Mesenchymal chondrosarcoma of the temporal bone	Takahashi Y, Kobayashi T	Auris Nasus Larynx Suppl
	Timing of neural excitation in relation to basilar membrane motion in the basal region of the guinea pig cochlea during the presentation of low-frequency acoustic stimulation	Wada H	Hear Res
	Vibration measurement of the tympanic membrane of guinea pig temporal bones using time-averaged speckle pattern interferometry	Wada H, Kobayashi T	J Acoust Soc Am
	Identification of a Distal Enhancer for the Melanocyte-Specific Promoter of the MITF Gene	Watanabe K	Pigment Cell Res
	Late-onset hearing loss in a mouse model of DFN3 non-syndromic deafness : morphologic and immunohistchemical analyses	Xia A, Kikuchi T	Hear Res
	Middle ear dynamic characteristics in patients with otosclerosis	Zhao F	Ear Hear
	良性腫瘍症例に対する手術	池田勝久	内視鏡下鼻副鼻腔手術の実際と応用
	悪性眼球突出症に対する手術	池田勝久	内視鏡下鼻副鼻腔手術の実際と応用
	内視鏡的副鼻腔手術のための臨床解剖	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス

	顔面・頬部の腫脹	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域におけるレーザー医療の果たす役割	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス
	涙嚢鼻腔吻合術	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス
	舌根正中部切除術	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス
	Ho YAG：腎細胞癌の耳下腺転移の一例	池田勝久	耳鼻咽喉診療プラクティス
	非歯性上皮嚢胞と鼻副鼻腔手術	小野寺亮	JOHNS
	上顎洞真菌症における内視鏡下鼻副鼻腔手術	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	眼窩の内側壁および下壁に広範な骨欠損をきたした巨大な原発性上顎嚢胞の1症例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	滲出性中耳炎、中耳換気チューブを入れると入れるといわれましたが子供に麻酔の影響はないでしょうか？	熊谷正樹	JOHNS
	滲出性中耳炎、中耳換気チューブを入れると入れるといわれましたが子供をプールに入れてもいいでしょうか？	熊谷正樹	JOHNS
	滲出性中耳炎、中耳換気チューブを入れると入れるといわれましたが何か後遺症が残ることはありませんか？	熊谷正樹	JOHNS
	頭頸部扁平上皮癌における遺伝子変異	志賀清人	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	頬骨・上顎骨手術のための臨床解剖	鈴木秀明	耳鼻咽喉科プラクティス
	鼓膜の診かた	古川加奈子	小児科診療
	GERDの非定型的症状	朴澤孝治	食道疾患
	耳介外傷	朴澤孝治	ENT NOW
	咽頭癌におけるパピローマウイルスの関与	朴澤孝治	JOHNS
	PRSP・BLNAR・ESBLsの検出法	保坂美生、沖津尚弘	Infection Control
	突発性難聴におけるbatroxobin（Defibrase®）の効果について	山内大輔	新薬と臨床
	基礎の立場から～Pharmacokinetics と Pharmacodynamics に基づいた経口β-ラクタム薬の評価～	沖津尚弘	化学療法の領域
	穿刺吸引細胞診で診断困難だった腎細胞癌の耳下腺転移の1例	吉田尚弘	JOHNS
	小脳橋角部のMRI	橋本　省	耳喉頭頚
	第1回URIEM報告集―反復性中耳炎の一症例	工藤典代、矢野寿一	化学療法の領域
	透析患者に対し胸鎖乳突筋非弁（下方茎）にて再建を行った頭頸部癌の一症例	高橋　悦	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	口蓋扁桃に転移したepithelioid hemangioendotheliomaの1例	志賀清人	日本耳鼻咽喉科学会会報（Journal of Otolaryngology of Japan）
	「第102回日本耳鼻咽喉科学会総会シンポジウム」頭頸部扁平上皮癌における遺伝子変異（総説）	志賀清人	日本耳鼻咽喉科学会会報（Journal of Otolaryngology of Japan）
	喉頭癌における遺伝子変異と遺伝子診断の可能性	志賀清人	JOHNS
	鼻骨骨折の臨床統計および画像診断	小川武則	耳鼻咽喉科臨床
	頭頸部腫瘍切除における側頭骨の取り扱い	小林俊光	頭頸部腫瘍
	顔面深部へのアプローチ　頭頸部腫瘍切除における側頭骨の取り扱い（解説）	小林俊光	頭頸部腫瘍
	耳閉感、自声強調の診断	川瀬哲明	JOHNS
	人工内耳の両耳装用症例	大山健二	耳鼻と臨床
	アデノウイルスベクターの外リンパ腔投与による遺伝子導入	大島猛史	Otology Japan　シンポジウム・「耳疾患に対する遺伝子医療」特集
	LAUPの適応と手術のコツ	池田勝久	MB ENT
	上顎嚢胞と鼻副鼻腔手術	池田勝久	JOHNS
	鼻茸の治療	池田勝久	アレルギーの臨床
	多彩な症状を呈した中耳鉄粉異物の1例	渡邊健一	耳鼻と臨床
	滲出性中耳炎に対する風船療法	八木沼裕司	耳鼻咽喉診療プラクティス
	急性中耳炎	末武光子	頭頸部外科治療指針
	急性中耳炎　流行の現況と治療予防対策について	末武光子	チャイルドヘルス
	小児の病態生理と特徴　小児の難治性中耳炎	末武光子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	小児急性中耳炎への対応　―早期発見と重症化防止のポイント	末武光子	日本医事新報
	集団保育と急性中耳炎	矢野寿一	保育と保険
	好中球浸潤の観点からみた慢性副鼻腔炎に対するマクロライド療法	鈴木秀明	耳鼻免疫アレルギー
	アレルギー性副鼻腔炎の臨床像と診断	鈴木秀明	ENTONI
	上顎洞性後鼻孔ポリープと鼻副鼻腔手術	鈴木秀明	JOHNS

	嚥下障害を治す	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 7 巻
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科のための臨床解剖	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 8 巻
	小児の耳鼻咽喉科診療	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 9 巻
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科のレーザー治療	池田勝久	耳鼻咽喉科プラクティス 第 10 巻
	ペニシリン系抗菌薬	沖津尚弘	Medical Practice 編集員会・編
	PRSP・BLNAR・ESBLs の検出法	沖津尚弘	INFECTION CONTROL
	蝶形骨洞より生じた巨大な後鼻孔ポリープの 1 症例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	視神経管隆起、内頚動脈隆起、および前頭蓋底に骨欠損を伴った後部副鼻腔嚢胞の一例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	内視鏡的副鼻腔手術による詳細な観察が診断上極めて有用であった Wegener 肉芽腫症の 1 例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	頭蓋底へ進展した低分化型扁平上皮癌の一例	菊地俊彦	耳鼻と臨床
	家族性頚動脈小体腫瘍の 2 症例	志賀清人	頭頸部外科
	EnoG と EBM の相関について	橋本　省	Facial N Res Jpn
2003	Natural killer cell lymphoma of the parotid gland	Furukawa M	ORL
	Classification of vestibular schwannoma	Hashimoto S	Acoustic neuroma
	Two Cases of Plunging Ranula Managed by the Intraoral Approach	Hidaka H	Tohoku J Exp Med
	Stable Expression of the Motor Protein Prestin in Chinese Hamster Ovary Cells	Iida K, Oshima T	JSME Int J
	Surgical treatment of subperiosteal abscess of the orbit : Sendai's ten-year experience	Ikeda K	Auris Nasus Larynx
	Expression of Glutamate Transporter GLAST in the Developing Mouse Cochlea	Jin Z, Kikuchi T	Tohoku J Exp Med
	Induction of telithromycin resistance in Streptococcus pneumoniae	Kaieda S, Okitsu N	J Antimicrob Chemother
	Effects of contralateral noise on the measurement of auditory threshold	Kawase T	Tohoku J Exp Med
	High speed video observation of tympanic membrane rupture in guinea pigs	Koike T, Kobayashi T	JSME Internatiuonal Journal
	Transgenic expression of a dominant-negative connexin26 causes degeneration of the organ of Corti and non-syndromic deafness	Kudo T	Human Molecular Genetics
	Epithelial-myoepithelial carcinoma of the parotid gland	Kumagai M	Auris Nasus Larynx
	Orbital apex syndrome caused by sphenoethmoid mucocele	Kumagai M	Auris Nasus Larynx
	Bacterial florae of palatine tonsils in patients with IgA nephropathy	Matsutani S	International congress series
	APAF-1-ALT, a novel alternative splicing form of APAF-1, potentially causes impeded ability of undergoing DNA damage-induced apoptosis in the LNCaP human prostate cancer cell line	Ogawa T	Biochem Biophys Res Commun
	Protein expression of p53 and Bcl-2 has a strong correlation with radiation resistance of laryngeal squamous cell carcinoma but does not predict the radiation failure before treatment	Ogawa T	Oncology Reports
	Modified binaural pitch-matching test for the assessment of diplacusis	Ogura M	Int J Audiol
	Usefulness of heavily T2 weighted magnetic resonance images for the differential diagnosis of parotid tumours	Sakamato M, Kakehata S	Dentomaxillofac Radiol
	Grading Systems for Preoperative and Postoperative Hearing	Sanna M, Kobayashi T	Acoustic neuroma
	Middle ear and mastoid microsurgery（Thieme）	Sanna M, Sunose H	
	Multiple squamous cell carcinomas of the head and neck show different phenotypes of allelic loss patterns suggesting different clonal origin of carcinogenesis	Shiga K	Anticancer Res
	Defibrinogenation Therapy for Idiopathic Sudden Sensorineural Hearing Loss in Comparison with High-dose Steroid Therapy	Suzuki H	Acta Otolaryngol
	Reporting the Size of Vestibular Schwannomas	Tos M, Hashimoto S	Acoustic neuroma
	Reporting System for the Size and Site of Residual Vestibular Schwannomas	Tos M, Hashimoto S	Acoustic neuroma
	Relationship between the local stiffness of the outer hair cell along the cell axis and its ultrastructure observed by atomic force microscopy	Wada H, Kakehata S	Hear Res
	The expression and localization of heme oxygenase in the adult guinea pig cochlea	Watanabe K	Brain Research
	Possible involvement of keratinocyte growth factor and its receptor in enhanced epithelial-cell proliferation and acquired recurrence of middle-ear cholesteatoma	Yamamoto T, Kobayashi T	Lab Invest

	Occult lymphoma cells prevalent in autologous marrow from non-Hodgkin's diffuse lymphoma	Yokoyama J	Am J Hematol
	CT imaging of the patulous eustachian tube-comparison between sitting and recumbent positions	Yoshida H, Kobayashi T	Auris Nasus Larynx
	Transient evoked otoacoustic emissions in patients with middle ear disorders	Zhao F, Ohyama K	Int J Audiol
	State of Mastication Affects Quality of Life in Patients with Maxillary Sinus Cancer	Terada N, Gorai S	Laryngoscope
	頭部外傷性難聴	沖津卓二	今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針
	真珠腫性中耳炎の手術療法	小林俊光	ENTnow
	下咽頭がんに対する選択的動注療法	西條　茂	JOHNS
	側頭骨・頭蓋底外科	須納瀬　弘	今日の耳鼻咽喉科・頭頸部外科治療指針
	慢性中耳炎・真珠腫性中耳炎	須納瀬　弘	小児科診断
	急性に嚥下障害を発症した Forestier 病の一例	長谷川　純	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	甲状腺疾患の診断と治療	林　隆一、松浦一登	ENTONI
	鼻・副鼻腔炎手術後に発症した好酸球性中耳炎	松谷幸子	アレルギーの臨床
	Masked mastoiditis から発症した otitic hydrocephalus 例	安達美佳	耳鼻咽喉科臨床
	薬剤感受性試験―耐性菌、多剤耐性についての概説「臨床検査データブック 2003-2004」（編：黒川清、春日雅人、北村聖）	井上松久、矢野寿一	医学書院（東京）
	【注射用キノロン剤の使い方とその位置づけ】　基礎	沖津尚弘	化学療法の領域
	急性中耳炎に併発した感音難聴について	沖津卓二	Audiology Japan
	ペニシリン系抗菌薬.「治療薬ガイド 2003 ～ 2004」(編：和田攻、大久保昭行、矢崎義雄、大内慰義)	沖津尚弘	文光堂（東京）
	耐性菌感染症 ―ペニシリン耐性インフルエンザ菌―	海江田哲、末武光子	MB ENT
	内耳におけるギャップ結合システムとカリウムイオンリサイクル機構	菊地俊彦	Otology Japan
	【耳管から鼓室・乳突蜂巣】　耳管の画像診断（解説/特集）	吉田晴郎、小林俊光	JOHNS
	好酸球性中耳炎の内耳障害	宮本育江、小林俊光	Audiology Japan
	ENOG と BMI の相関について	橋本　省	Facial Nerve Res JPN
	選択的動注化学療法の有害事象	橋本　省	耳鼻
	上顎癌における上顎全摘術・拡大上顎全摘術 4）眼窩内容除去術	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	上顎癌における上顎全摘術・拡大上顎全摘術 5）上眼窩裂切除	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経手術 4）経迷路法②顔面神経モニタリング	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経手術 4）経迷路法③硬膜切開法	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経手術 4）経迷路法④顔面神経の同定	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経手術 4）経迷路法⑤腫瘍減量法	橋本　省	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	【難治性中耳炎をどう扱うか】　急性中耳炎　BLNAR と難治性中耳炎（解説/特集）	古川加奈子	JOHNS
	脳底動脈閉塞後に嚥下障害を来し回復した 1 例	香取幸夫	耳鼻咽喉科臨床
	声帯外方移動術が有効であった両側反回神経麻痺 2 症例	香取幸夫	岩手県立病院医学会雑誌
	鼻腔内視鏡手術により整復した眼窩吹き抜け骨折症例	香取幸夫	岩手県立病院医学会雑誌
	胸鎖乳突筋に発生した筋肉内血管腫例	香取幸夫	耳鼻咽喉科臨床
	耳管開放症難治症例に対する経咽頭口的耳管ピン挿入術の 1 症例	佐藤利徳	耳鼻咽喉科展望
	【一般外科医のための血管外科手技】　頸部郭清時の血管の露出・剥離・修復（解説/特集）	志賀清人	手術
	当科における原発不明頸部癌症例の検討	志賀清人	耳鼻と臨床
	超高齢者頭頸部悪性腫瘍症例の治療	志賀清人	耳鼻と臨床
	超選択的動注化学療法を用いた頭頸部腫瘍の治療	志賀清人	頭頸部腫瘍
	耳管機能検査に関するアンケート調査の報告	守田雅弘、小林俊光	Otology Japan
	【頭頸部外科手術　トラブルの予防とその対応】　耳科手術　髄液漏の予防と対応（解説/特集）	小林俊光	JOHNS
	中耳真珠腫と鼻すすり癖	小林俊光	日耳鼻　専門医通信

	顎二腹筋弁を用いた口腔底再建法とその問題点	松浦一登	頭頸部腫瘍
	喉頭がん	松浦一登	ターミナルケア
	好酸球性中耳炎の保存的療法	松谷幸子	Audiology Japan
	口腔内腫瘍におけるフィンガープローブを用いた超音波断層法の有用性についての検討（原著論文/症例報告）	織田　潔	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針　第 2 版	森山　寛、小林俊光	医学書院　出版
	北海道・東北地区における原発不明転移性頚部悪性腫瘍の現状	青柳　優、志賀清人	耳鼻咽喉科展望
	雑音下の信号聴取と聴覚末梢における遠心性コントロール	川瀬哲明	日本音響学会誌
	デジタル補聴器　ノンリニア補聴器　アナログ補聴器との相違	川瀬哲明	ENTONI
	内科診療に役立つ老年医学の知識　難聴	川瀬哲明	Medicina
	聴覚障害とその診断　聴覚情報伝達と聴覚検査	川瀬哲明	臨床検査
	【耳管から鼓室・乳突蜂巣】錐体尖蜂巣（解説）	浅田行紀	JOHNS
	人工内耳埋め込み手術 2）皮膚切開、縫合法	大山健二	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	人工内耳埋め込み手術 5）脱落防止、電極の固定	大山健二	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	LAUP・UPPP 手術におけるトラブルの予防と対策	池田勝久	JOHNS
	難聴遺伝子スクリーニングのための基盤研究	池田勝久	小児耳鼻咽喉科
	レーザーによる口蓋垂口蓋形成術（LAUP）	池田勝久	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	下気道の生体防御機構としての上気道機能の役割	池田勝久	THE LUNG perspectives
	AABR による NICU 入院児の聴覚スクリーニング	中谷理恵子	仙台赤十字病医誌
	急速に進行する両側感音難聴を初発症状とした髄膜癌腫症の 1 例	渡邊健一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	中耳疾患と鼓索神経障害	八木沼裕司	耳鼻咽喉科プラクティス
	ノドが痛い	八木沼裕司	JOHNS
	音に誘発される耳鳴	八木沼裕司	暮らしと健康
	換気チューブ留置術か保存的療法か	朴澤孝治	耳鼻咽喉科プラクティス
	耳鼻咽喉科の耐性菌感染症の実際	末武光子	ベーシックレクチャー
	インフルエンザと中耳炎	末武光子	インフルエンザ
	内耳障害を伴った急性中耳炎症例の検討	矢野寿一	Audiology Japan
	インフルエンザに伴う急性中耳炎症例の検討	矢野寿一	日本化学療法学会雑誌
	保育園児に蔓延する急性中耳炎の園児間感染の実態調査と効果的予防に関する研究（日本抗生物質学術協議会奨励賞受賞講演会記録）	矢野寿一	Jpn J Antibiot
	舌骨上咽頭切開法及び setback tongue flap による再建を行った舌根部癌 2 症例（原著論文/症例報告）	鈴木貴博	口腔・咽頭科
	内耳イオン輸送機構と難聴病態　―臨床家の知っておきたい基礎耳科学―	小林俊光	Otology Japan
	実践、抗生物質・抗菌薬療法ガイド ― ペニシリン系抗菌薬	沖津尚弘	Medical Practice
	緩和ケアのための臨床腫瘍学 II 臓器別にみた進行がんの治療 8.　B. 喉頭がん、ターミナルケア	松浦一登	三輪書店
	国立がんセンターにおけるチーム医療の現状	松浦一登	頭頸部癌
	MRI 症例ファイル ― 下咽頭癌	松浦一登	JHONS
2004	Deafness in Claudin 11-null mice reveals the critical contribution of basal cell tight junctions to stria vascularis function	Gow A, Yamauchi D	J Neurosci
	Relationship between Fluorescence Intensity of GFP and the Expression Level of Prestin in a Prestin - Expressing Chinese Hamster Ovary Cell Line	Iida K, Ikeda K	JSME International Journal
	Identification of a novel Cochlin isoform in the perilymph : insights to Cochlin function and the pathogenesis of DFNA9	Ikezono T, Kobayashi T	Biochem Biophys Res Commun
	Phenotypic Differentiation of Macrolide Resistance among Streptococcus pneumoniae Carrying mefA and/or ermB Genes	Kaieda S, Yano H	Acta Medica Nagasakiensia
	Possible new assessment of patulous eustachian tube function : audiometry for tones presented in the nasal cavity	Kano S	Acta Otolaryngol
	A multi-institutional survey of the effectiveness of chemotherapy combined with radiotherapy for patients with nasopharyngeal carcinoma	Kawashima M, Saijo S	Jpn J Clin Oncol
	Mutation Detection of GJB2 Using IsoCode and Real-Time Quantitative Polymerase Chain Reaction With SYBR Green I Dye for Newborn Hearing Screening	Kudo T	Laryngoscope
	Effect and sound localization with dichotic-listening digital hearing aids	Murase A, Kawase T	Int Congress on Acoustics
	CFE-1, a Novel Plasmid - Encoded AmpC β-Lactamase with an ampR Gene Originating from Citrobacter freundii	Nakano R, Okitsu N	Antimicrob Agents Chemother
	Relationship between respiratory syncytial virus infection and acute otitis media in children	Sagai S	Auris Nasus Larynx

	Allelic loss correlated with tissue specificity in head and neck squamous cell carcinomas and the clinical features of patients	Shiga K	Tohoku J Exp Med
	Survival of Adult Spiral Ganglion Neurons Requires erbB Receptor Signaling in the Inner Ear	Stankovic K, Sugawara M	J Neurosci
	The Effect of Upper Airway Structural Changes on Central Chemosensitivity in Obstructive Sleep Apnea-Hypopnea	Suzuki M	Sleep and Breathing
	Endocochlear potential and endolymphatic K^+ changes induced by gap junction blockers	Suzuki M	Acta Otolaryngol
	Imaging of the cortical cytoskeleton of guinea pig outer hair cells using atomic force microscopy	Wada H, Kobayashi T	Hear Res
	Imaging of the patulous Eustachian tube : high-resolution CT evaluation with multiplanar reconstruction technique	Yoshida H, Kobayashi T	Acta Otolaryngol
	The effects of hypoxia, premature birth, infection, ototoxic drugs, circulatory system and congenital disease on neonatal hearing loss	Yoshikawa S, Ikeda K	Auris Nasus Larynx
	急性中耳炎・急性副鼻腔炎	入間田美保子	内科・小児科研修医のための小児救急医療治療ガイドライン
	夏に多い耳鼻咽喉科疾患	沖津卓二	健康教室
	診断に苦慮した鼻腔 NK/T 細胞リンパ腫の一例	織田　潔	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	アレルギー性鼻炎のエアロゾル療法	神林潤一	Audiology Japan
	手術適応と術式（3）　鼻内アプローチによる内視鏡下整復術	後藤　了	あたらしい眼科
	内視鏡下に排膿術をおこなった眼窩骨膜下膿瘍の 2 例	後藤　了	東北公済病院誌
	舌・口腔底がんの取り扱い	西條　茂	日耳鼻専門医通信通信
	頸部廓清術の範囲　下咽頭がんの場合	西條　茂	JOHNS
	中咽頭癌の治療戦略	西條　茂	頭頸部癌
	治療メモ　乳幼児喘鳴に対する外科的治療	朴澤孝治	小児耳鼻咽喉科
	緩和ケアのための臨床腫瘍学　喉頭がん	松浦一登	ターミナルケア
	好酸球性中耳炎の概要と診断	松谷幸子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	好酸球性中耳炎の概要と診断	松谷幸子	Otology Japan
	好酸球性中耳炎におけるステロイドミニパルス療法の治療経験	松谷幸子	Otology Japan
	鼓膜の膨隆：好酸球性中耳炎	松谷幸子	JOHNS
	耳痛・耳漏	松谷幸子	治療
	当科における上顎洞悪性腫瘍の臨床検討	舘田　勝	頭頸部腫瘍
	挙上皮弁の広頸筋と顎二腹筋の縫合による口腔底再建	舘田　勝	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	鼻茸の鑑別診断	菊地俊彦	JOHNS
	ラセン靱帯繊維細胞とその機能的意義	菊地俊彦	耳鼻咽喉科展望
	末梢性顔面神経麻痺の治療成績について（続報） ―マンニットールおよびアシクロビル併用療法の検討―	吉崎直人	仙台市立病院医誌
	顔面神経鞘腫	橋本　省	JOHNS
	頸部神経鞘腫の被膜間摘出法による機能保存	橋本　省	JOHNS
	噴射式基準嗅力検査の測定方法に関するガイドライン	古川　仭、小林俊光	日本鼻科学会会誌
	5 種の嗅素を用いた噴射式基準嗅力検査の臨床的有用性について	三輪高喜、小林俊光	日本鼻科学会会誌
	CDDP 動注療法	志賀清人	癌化学療法ハンドブック
	アレルギー疾患のエアロゾル療法　アレルギー性鼻炎のエアロゾル療法 局所ステロイド薬の初期治療を中心に	小岩哲夫	耳鼻咽喉科展望
	好酸球性中耳炎の基礎と臨床	小林俊光	Otology Japan
	小児の難治性中耳炎は耳鼻科医の手で	小林俊光	美蕾
	【鼓室形成術　私のコツ・私の工夫】 乳突洞の処理（解説/特集）	小林俊光	MB ENT
	カラー図説　拡大後迷路法による聴力保存聴神経腫瘍手術（図説/症例報告）	小林俊光	耳鼻咽喉科臨床
	当科で経験した下眼瞼悪性腫瘍 2 症例　malar flap と硬口蓋粘骨膜を用いた眼瞼再建	松浦一登	頭頸部外科
	舌扁平上皮癌一次治療症例（274 例）の手術治療成績	松浦一登	頭頸部癌
	好酸球性中耳炎の概念と診断	松谷幸子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	オープン教室の騒音に関する調査・研究	神林潤一	Audiology Japan
	繰り返す突発難聴の 1 症例　聴神経腫瘍との鑑別が困難であった小脳橋角部顔面神経鞘腫（原著論文/症例報告）	須納瀬　弘	JOHNS
	Open 法における再形成真珠腫の予防法	須納瀬　弘	頭頸部外科
	第 3 回耳鼻咽喉科領域感染症臨床分離菌 全国サーベイランス結果報告	西村忠郎、小林俊光	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	【耳閉塞感診断治療 up date】 耳管開放症の診断と治療	川瀬哲明	ENTONI

	両耳分離聴が高齢者の音声明瞭度と方向知覚に与える影響	村瀬敦信、川瀬哲明	信学技報
	人工中耳・人工内耳の今　幼小児人工内耳と補聴器	大山健二	JOHNS
	耳介の外傷	大山健二	耳鼻咽喉科プラクティス
	耳管開放症と耳管狭窄症の鑑別法	八木沼裕司	耳鼻咽喉科・頭頸部外科クリニカルトレンド
	瘻孔症状を有する中耳手術上の留意点	八木沼裕司	耳鼻咽喉科・頭頸部外科クリニカルトレンド
	両側同時性急性感音難聴として発症した 小脳・脳幹多発梗塞の 1 症例	堀　容子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	ベル麻痺における塩酸バラシクロビルの使用経験	堀　容子	磐城共立病院医報
	腕頭動脈蛇行症例における気管切開術	堀　容子	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	ウイルス感染と急性中耳炎	矢野寿一	美蕾
	質問箱「急性中耳炎　術後の登園」	矢野寿一	保育と保健
	小児の難治性中耳炎の臨床所見と診断・治療のポイント ―ウイルス感染と急性中耳炎	矢野寿一	美蕾
	好酸球性中耳炎全国疫学調査	鈴木秀明	Otology Japan
	特集　実地医家のための検査法　画像診断　頸部	渡邊健一	JOHNS
2005	Differential distribution of β- and γ-actin in guinea-pig cochlear sensory and supporting cells	Furness DN, Katori Y	Hear Res
	Three-dimensional culture of newborn rat utricle using an extracellular matrix promotes formation of a cyst	Gaboyard S, Yamauchi D	Neuroscience
	Experimental Assessment of the Performance of an Electromagnetic Hearing Aid in Human Temporal Bones	Hamanishi S, Kobayashi T	JSME Int J
	Construction of an expression system for the motor protein prestin in Chinese hamster ovary cells	Ikeda K	Hear Res
	In vitro investigation of the indirect pathogenicity of beta-lactamase-producing microorganisms in the nasopharyngeal microflora	Kaieda S, Yano H	Int J Pediatr Otorhinolaryngol
	Investigation about the homogeneity of nasopharyngeal microflora at the different location of nasopharynx of children with acute otitis media	Kaieda S, Yano H	Int J Pediatr Otorhinolaryngol
	Recruitment of fusiform face area associated with listening to degraded speech sounds in auditory-visual speech perception : a PET study	Kawase T	Neurosci Lett
	Effects of Mutation in the Conserved GTSRH Sequence of the Motor Protein Prestin on Its Characteristics	Kumano S, Ikeda K	JSME Int J
	Characterization of ermB Gene Transposition by Tn1545 and Tn917 in Macrolide-Resistant Streptococcus pneumoniae Isolates	Okitsu N	J Clin Microbiol
	Neuromagnetic evaluation of binaural unmasking	Sasaki T	Neuroimage
	Trans-Tympanic silicone plug insertion for chronic patulous Eustachian tube	Sato T	Acta Otolaryngol
	Influence of Supporting Cells on Neuronal Degeneration After Hair Cell Loss	Sugawara M	J Associ Res Otolaryngol
	Detection of Human Metapneumovirus From Children With Acute Otitis Media	Suzuki A, Yano H	Pediatr Infect Dis J
	Digital recording and analysis of esophageal pressure for patients with obstructive sleep apnea-hypopnea syndrome	Suzuki M	Sleep Breath
	Management of the Patients with Hypopharyngeal Cancer : Eight-year Experience of Miyagi Cancer Center in Japan	Tateda M	Tohoku J Exp Med
	Vitamin D upregulates expression of ECaC1 mRNA in semicircular canal	Yamauchi D	Biochem Biophys Res Commun
	Isolation of measles virus from middle ear fluid of infants with acute otitis media	Yano H	J infect
	心因性難聴への対応（中山書店）	沖津卓二	
	咽頭腔での safety margin のとり方	西條　茂	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	頭頸部進行がんとの闘いとその克服への道　がん克服への道―解説と症例―（真興交易医書出版部）	志賀清人	
	両耳分離補聴効果に影響する難聴者の聴力特性に関する一検討	高橋恵美、川瀬哲明	日本音響学会聴覚研究会
	後天性外耳道閉鎖症の 1 症例	中目亜矢子	仙台赤十字病医誌病院医学雑誌
	頭頸部癌のリンパ節転移に対する標準的治療法の確立に関する研究	長谷川泰久	頭頸部癌
	滲出性中耳炎・好酸球性中耳炎	松谷幸子	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	好酸球性中耳炎	松谷幸子	JOHNS
	好酸球性中耳炎とアスピリン喘息	松谷幸子	医学のあゆみ
	アスピリン喘息と好酸球性中耳炎	松谷幸子	ENTONI
	口腔癌	舘田　勝	JOHNS

	【実地医家のための感染症の知識】 症状からみた感染症の診断と治療 難聴、めまい（解説/特集）	吉田尚弘	JOHNS
	急性中耳炎の細菌学的検査（INFECTION & TECHNOLOGY 2001 年を再編集して掲載）	金光敬二	Q&A で読む細菌感染症の臨床と検査（国際医学出版）
	小児気管・気管支異物の診断と治療	香取幸夫	小児耳鼻咽喉科
	【耳管機能障害】 耳管開放症（解説/特集）	佐藤利徳	ENTONI
	超選択的動注化学療法 上顎癌	志賀清人	JOHNS
	頚動脈小体腫瘍	小川武則	JOHNS
	耳管閉鎖障害の診断と治療	小林俊光	日耳鼻専門医通信
	下咽頭癌	松浦一登	JOHNS
	PCR によるインフルエンザ菌の BLNAR 検索と微量液体希釈法ならびにディスク法による感受性成績との関係	真崎純子、 矢野寿一	医学検査
	【聴力改善手術】 慢性中耳炎 真珠腫性中耳炎 Open 法	須納瀬弘	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	診断の指針 治療の指針 耳管開放症の診断と治療 （解説）	川瀬哲明	総合診療 2005.1
	症例から見る難治性疾患の診断と治療 耳鼻咽喉科領域編 4. 錐体尖病変（監修：加我君孝）	川瀬哲明	（国際医学出版）
	耳管開放症をどう治療すべきか―耳管ピン挿入の立場から―	川瀬哲明	JOHNS
	慢性疾患に付随する老年症候群 難聴 ―日常診療に活かす老年病ガイドブック「老年症候群のみかた」（大内尉義、井藤英喜、三木哲郎、鳥羽研二編）	川瀬哲明	メジカルビュー社（東京）
	【耳鼻咽喉科領域における難治性疾患】 耳管開放症	川瀬哲明	JOHNS
	錐体尖病変	川瀬哲明	国際医学出版
	両耳分離聴が高齢者の音声明瞭度に与える影響	村瀬敦信、 川瀬哲明	Audiology Japan
	両耳分離聴が高齢者の方向知覚に与える影響	村瀬敦信、 川瀬哲明	Audiology Japan
	内耳奇形	大山健二	JOHNS
	【MRI 症例ファイル】耳管開放症（解説/症例報告/特集）	大島猛史	JOHNS
	耳管機能と中耳真珠腫	長谷川純	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	耳鼻咽喉科医に役立つ幼小児診療のポイント 喘鳴	朴澤孝治	JOHNS
	LPRD 患者における 24 時間下咽頭食道 PH モニター所見	朴澤孝治	耳鼻と臨床
	甲状軟骨形成術 II 型	朴澤孝治	喉頭
	喉頭血管腫に対するレーザー手術	朴澤孝治	イラスト手術手技のこつ 耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	中耳炎 Q&A（話題：ムコーズス中耳炎）	矢野寿一	Q&A で読む細菌感染症の臨床と検査（国際医学出版）
	【反復性中耳炎】 ウイルスの関与	矢野寿一	ENTONI
2006	Diffuse Large B-cell Lymphoma Arising in a Patient with Neurofibromatosis Type I and in a Patient with Neurofibromatosis Type II	Doho O, Hashimoto S	Tohoku J Exp Med
	Effects of hearing level on habitual sniffing in patients with cholesteatoma	Hasegawa J	Acta Otolaryngol
	Audiometry with Nasally Presented Masking Noise : Novel Diagnostic Method for Patulous Eustachian Tube	Hori Y	Otol Neurotol
	Functional inferior turbinosurgery（FITS）for the treatment of resistant chronic rhinitis	Ikeda K	Acta Otolaryngol
	A novel KCNQ4 one-base deletion in a large pedigree with hearing loss : implication for the genotype-phenotype correlation	Kamada F, Kudo T	J of Hum Genet
	Plasma-membrane-associated sialidase（NEU3）differentially regulates integrin-mediated cell proliferation through laminin- and fibronectin-derived signalling	Kato K	Biochem J
	Autophony in Patients with Patulous Eustachian Tube : Experimental Investigation Using an Artificial Middle Ear	Kawase T	Otol Neurotol
	An apparatus for diagnosis of ossicular chain mobility in humans Un aparato para el diagnostico de la movilidad osicular en humanos	Koike T, Yuasa Y	Int J Audiol
	Study of upper respiratory tract bacterial flora : first report. Variations in upper respiratory tract bacterial flora in patients with acute upper respiratory tract infection and healthy subjects and variations by subject age	Konno M, Kobayashi T	J Infect Chemother
	Study of nasopharyngeal bacterial flora. Second report. Variations in nasopharyngeal bacterial flora in children aged 6 years or younger when administered antimicrobial agents Part 1	Konno M, Kobayashi T	J Infect Chemother
	Study of nasopharyngeal bacterial flora. Second report. Variations in nasopharyngeal bacterial flora in children aged 6 years or younger when administered antimicrobial agents Part 2	Konno M, Kobayashi T	J Infect Chemother
	Spontaneous activity in the inferior colliculus of CBA/J mice after manipulations that induce tinnitus	Ma WD, Hidaka H	Hear Res
	Role of Gbx2 and Otx2 in the formation of cochlear ganglion and endolymphatic duct	Miyazaki H	Dev Growth Differ

	Imaging by Atomic Force Microscopy of the Plasma Membrane of Prestin-Transfected Chinese Hamster Ovary Cells	Murakoshi M, Ikeda K	J Assoc Res Otolaryngol
	Local mechanical properties of mouse outer hair cells : Atomic force microscopic study	Murakoshi M, Kobayashi T	Auris Nasus Larynx
	Effects of heat stress on Young's modulus of outer hair cells in mice	Murakoshi M, Yoshida N	Brain Res
	Effects of dividing frequency in filtering for dichotic presentation to reduce masking to a consonant by the preceding vowel	Murase A, Kawase T	Acoust Sci Technol
	A case of angiofibroma originating from the inferior nasal turbinate	Nomura K	Auris Nasus Larynx
	A novel G106D alteration of the SDHD gene in a pedigree with familial paraganglioma	Ogawa K, Ogawa T	Am J Med Genet A
	Morphologic analyses of mandible and upper airway soft tissue by MRI of patients with obstructive sleep apnea hypopnea syndrome	Okubo M, Kobayashi T	Sleep
	Dynamic patterns of neurotrophin 3 expression in the postnatal mouse inner ear	Sugawara M	J Comp Neurol
	Analysis of 95 cases of squamous cell carcinoma of the external and middle ear	Yin M, Shiga K	Auris Nasus Larynx
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　鼓膜切開について	沖津尚弘	小児科臨床
	小児疾患の診断治療基準　急性化膿性中耳炎、外耳炎	沖津尚弘	小児内科
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　鼻腔吸引について	菊地俊晶	小児科臨床
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　抗ヒスタミン薬の有効性について	牛来茂樹	小児科臨床
	鼻茸切除術	後藤　了	外来手術の基本テクニック
	真珠腫診断のポイント―手術適応の決定について	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	鼻すすり型の耳管開放症の診断と治療	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	甲状腺腫瘍の診断	橋本　省	耳喉頭頚
	マイクロサージュリーにおける脳硬膜の取り扱い	橋本　省	JOHNS
	Crouzon syndrome	橋本　省	耳喉頭頚
	Crow-Fukase-syndrome	橋本　省	耳喉頭頚
	耳科領域　聴神経腫瘍	橋本　省	JOHNS
	咽頭異物による深頸部ガス産生蜂窩織炎の一例	堀　　亨	仙台市立病院医学雑誌誌
	頭頸部の腺癌をどう扱うか	松浦一登	JOHNS
	外耳道・鼻腔異物	松谷幸子	JOHNS
	症例で学ぶ鼻科診療の実際　好酸球性中耳炎	松谷幸子	鼻アレルギーフロンティア
	好酸球性中耳炎の耳漏	松谷幸子	ENTONI
	外耳道異物	松谷幸子	仙台赤十字病医誌病院医学雑誌
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　去痰剤、消炎酵素剤の投与について	宮崎浩充	小児科臨床
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　鼓膜チューブ挿入について	宮崎浩充	小児科臨床
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　抗菌薬の通常量の投与について	矢野寿一	小児科臨床
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法　14員環マクロライド系抗菌薬の長期少量投与について	矢野寿一	小児科臨床
	小児紫斑病性腎炎に対する口蓋扁桃摘出術の効果	安達美佳	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	【小児疾患の診断治療基準】関連領域疾患　急性化膿性中耳炎、外耳炎	沖津尚弘	小児内科
	私が愛用する手術器具　30　慈大式彫骨器	菊地俊彦	JOHNS
	急性気道狭窄を起こした咽後縦隔血腫の1症例	宮崎真紀子	頭頸部外科
	甲状軟骨形成術Ⅰ型による嚥下機能改善の評価	香取幸夫	耳鼻と臨床
	T2強調像で低信号を呈した多形腺腫の1例	阪本真弥、志賀清人	歯科放射線
	急激に増大した頸部腫瘤の1症例―仮性動脈瘤破裂―	志賀清人	JOHNS
	悪性リンパ腫を合併した甲状腺腺腫様甲状腺腫の1例	小川武則	頭頸部外科
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴 ①耳疾患/編集・神崎仁（中山書店） 診断47　真珠腫診断のポイント―手術適応の決定について 治療125　鼻すすり型の耳管開放症の診断と治療	小林俊光	
	臨床セミナー4「耳管開放症の治療―手術VS保存」特集 耳管開放症の治療―手術VS保存　司会のことば	小林俊光	Otology Japan
	特集・中耳真珠腫の治療―私はこうしている―　迷耳瘻孔の処理	小林俊光	ENTONI

	小児科医が知りたい・聞きたい「子供の耳・鼻・のど　Q&A」 2. 滲出性中耳炎 （1）耳管通気の有効性について（2）鼻腔吸引について（3）抗ヒスタミン薬の有効性について（4）去痰剤、消炎酵素剤の投与について（5）抗菌薬の通常量の投与について（6）14 員環マクロライド系抗菌薬の長期少量療法（7）鼓膜チューブ挿入について（8）鼓膜切開について	小林俊光	小児科臨床
	Clinical Lecture【症状を読む】特集・難聴	小林俊光	ENT/er
	【中耳真珠腫の治療　私はこうしている】迷路瘻孔の処理	小林俊光	ENTONI
	口腔・中下咽頭扁平上皮癌 pN（+）症例に対する術後治療の有用性について	松浦一登	頭頸部腫瘍
	下咽頭癌と喉頭癌の治療を今改めて考える　喉頭部分切除術および下咽頭喉頭部分切除術の適応拡大を目指して	松浦一登	頭頸部癌
	頭頸部外科医を育てるには　がん治療を志す若き耳鼻科医たちへ	松浦一登	頭頸部癌
	若年者頭頸部癌治療の問題点	松浦一登	耳鼻と臨床
	中耳・側頭骨解剖アトラス（医学書院）	須納瀬弘	
	【滲出性中耳炎 update】滲出性中耳炎と耳管機能障害 ―特に “鼻すすり型耳管開放症” の関与について―	川瀬哲明	ENTONI
	アブミ骨筋と音響外傷	川瀬哲明	JOHNS
	聴覚・視覚機能の低下と言語コミュニケーション	川瀬哲明	日本医事新報
	人工内耳・人工中耳・埋め込み型骨導補聴器など　人工内耳と補聴器の関係	大山健二	ENTONI
	【耳科画像診断マニュアル】　耳管開放症（解説/特集）	大島猛史	ENTONI
	TS-1 新規投与法を用いた術前化学療法により CR となった口唇癌の 1 例（原著論文/症例報告）	中目亜矢子	癌と化学療法
	咽後膿瘍と鑑別を要した石灰沈着性頸長筋腱炎の 1 例	片桐克則	仙台赤十字病医誌
	【小児科医が知りたい・聞きたい「子どもの耳・鼻・のど Q&A」】滲出性中耳炎　日米治療の差異がある理由	朴澤孝治	小児科臨床
	滲出性中耳炎におけるチューブ抜去時期の決定法	朴澤孝治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	滲出性中耳炎に対するマクロライド少量長期療法	朴澤孝治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	IgA 腎症患者に対する扁桃摘出術の実際	朴澤孝治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	LPRD の診断法 ― 胸やけを訴えない例が半数以上	朴澤孝治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科診療のコツと落とし穴
	滲出性中耳炎　日米治療の差異がある理由	朴澤孝治	小児科診療
	急性中耳炎と RS（respiratory）ウイルス感染症	矢野寿一	Virus Report
	【学校定期健康診断で見つかった異常への対応　専門医からのアドバイス】聴力障害	矢野寿一	小児科
	治りにくくなった子供の中耳炎	矢野寿一	仙台市医師会報
	小児急性中耳炎の現状と対策	矢野寿一	山口市医師会報
	耳鼻科領域感染症が疑われるとき「ベッドサイドで役立つ微生物検査ガイド」（河野茂、平潟洋一編）	矢野寿一	文光堂（東京）
	透析中の上顎癌例に対する選択的動注化学療法の経験	鈴木貴博	耳鼻咽喉科臨床
	（書評）Otolaryngology ― Basic Science and Clinical Review ―	小林俊光	美蕾
	聴神経腫瘍の局在とその聴力像について	日髙浩史	Audiology Japan
	滲出性中耳炎に対する通気療法・鼓膜切開・鼓膜チューブ留置術	八木沼裕司	ENTONI
	甲状軟骨形成術 I 型による嚥下機能改善の評価	香取幸夫	耳鼻と臨床
	滲出性中耳炎、耳鼻科でよく使う治療法 ― 耳管通気の有効性について	菊地俊晶	小児科臨床
2007	Malignant Lymphoma Arising from Heterotopic Warthin's Tumor in the Neck : Case Report and Review of the Literature	Gorai S	Tohoku J Exp Med
	Retropharyngeal Abscess Complicated with Torticollis : Case Report and Review of the literature	Hasegawa J	Tohoku J Exp Med
	Objective assessment of autophony in patients with patulous Eustachian tube	Hori Y	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Patulous Eustachian tube associated with hemodialysis	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Habitual sniffing and postoperative configuration of the posterior meatal wall reconstructed with soft tissue	Kawase T	Acta Otolaryngol
	Three-Dimensional Computed Tomography Imaging in the Sitting Position for the Diagnosis of Patulous Eustachian tube	Kikuchi T	Otol Neurotol
	Effects of heat stress on filamentous actin and prestin of outer hair cells in mice	Kitsunai Y, Yoshida N	Brain Res
	Study of nasopharyngeal bacterial flora. Variations in nasopharyngeal bacterial flora in schoolchildren and adults when administered antimicrobial agents	Konno M, Kobayashi T	J Infect Chemother

	Lack of pendrin HCO_3^- transport elevates vestibular endolymphatic [Ca^{2+}] by inhibition of acid-sensitive TRPV5 and TRPV6 channels	Nakaya K	Am J Physiol Renal Physiol
	Involvement of pterygoid venous plexus in patulous eustachian tube symptoms	Oshima T	Acta Otolaryngol
	Combined therapy after superselective arterial cisplatin infusion to treat maxillary squamous cell carcinoma	Shiga K	Otolaryngol Head Neck Surg
	Management of the Patients with Early Stage Oral Tongue Cancers	Shiga K	Tohoku J Exp Med
	Puromycin insensitive leucyl-specific aminopeptidase (PILSAP) affects RhoA activation in endothelial cells	Suzuki T	J Cell Physiol
	Loss of cochlear HCO_3^- secretion causes deafness via endolymphatic acidification and inhibition of Ca^{2+} reabsorption in a Pendred syndrome mouse model	Wangemann P, Nakaya K	Am J Physiol Renal Physiol
	Acute otitis media associated with cytomegalovirus infection in infants and children	Yano H	Int J Pediatr Otorhinolaryngol
	Anatomy of the Bony Portion of the Eustachian Tube in Tubal Stenosis : Multiplanar Reconstruction Approach	Yoshida H, Kobayashi T	Ann Otol Rhinol Laryngol
	External auditory canal closure : an alternative management for the refractory chronically draining ear	Yoshida N	Otolaryngol Head Neck Surg
	口腔がんにおける頸部郭清後の術後治療の有用性に関する研究	西條　茂	厚労科研報告書
	がん専門医療施設を活用したがん診療の標準化に関する共同研究	吉田茂昭、西條　茂	厚労科研報告書
	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	吉野邦俊、松浦一登	厚労科研報告書
	耳管開放症・耳管閉鎖不全の診療の実態ならびに耳鼻咽喉科医の意識に関するアンケート調査	沖津尚弘	Otology Japan
	頸部結核性リンパ節炎の確定診断・治療とその問題点	舘田　勝	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	耳管閉鎖障害シリーズ⑦耳管開放症に対する画像診断	菊地俊晶	JOHNS
	耳管閉鎖障害シリーズ③耳管開放症の成因	吉田尚弘	JOHNS
	音響外傷に関する最近の知見	吉田尚弘	耳鼻咽喉科臨床
	症例をどう見るか-経乳突法の変法により治癒せしめた側頭骨内髄膜脳瘤の 1 例	宮崎浩充	JOHNS
	耳管閉鎖障害シリーズ②耳管の系統発生―両生類とヒトとの比較	香取幸夫	JOHNS
	自殺企図による頸部切創の 4 症例	山崎宗治	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	頬粘膜癌　T1・earlyT2 症例の治療	志賀清人	JOHNS
	急性中耳炎の EBM に基づいた治療法の実際	小林俊光	EBM 小児疾患の治療
	耳管閉鎖障害シリーズ⑤耳管開放症の隠蔽	小林俊光	JOHNS
	TODAY'S THERAPY 2007　今日の治療指針　25 耳鼻咽喉科疾患　真珠腫性中耳炎（中耳真珠腫）	小林俊光	
	耳管閉鎖障害シリーズ⑧鼻すすり型耳管開放症	小林俊光	JOHNS
	耳管機能検査	小林俊光	Audiology Japan
	ムンプス難聴	小林俊光	こどもの感染症の診かた
	（学会報告）第 2 回日本小児耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会	小林俊光	小児耳鼻咽喉科
	【口腔癌にどう対応するか　症例から学ぶ】舌癌　late T2・T3 症例の手術治療	松浦一登	JOHNS
	【中咽頭癌の手術　術後 QOL を考慮したアプローチ法と再建法を考える】中咽頭癌前壁型の根治手術と QOL	松浦一登	頭頸部外科
	【好酸球性病変の診断と治療】好酸球性中耳炎の保存的治療　ステロイド療法	松谷幸子	JOHNS
	【好酸球性病変の診断と治療】好酸球性中耳炎の概念	松谷幸子	JOHNS
	【新生児・乳児の診断・治療マニュアル】異物、その他　外耳道・鼻腔・咽頭異物	松谷幸子	JOHNS
	小児急性化膿性中耳炎における肺炎球菌血清型に関する疫学調査	神谷　齊、矢野寿一	感染症学雑誌
	急性喉頭蓋炎の臨床統計	石田英一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	耳管閉鎖障害シリーズ⑩耳管開放症の手術療法	千葉敏彦	JOHNS
	耳管閉鎖障害シリーズ④耳管開放症の症状に影響を与える因子	川瀬哲明	JOHNS
	耳管閉鎖障害シリーズ⑨耳管開放症の保存療法	川瀬哲明	JOHNS
	【診療所における先端補聴器機に関する説明は？　人工内耳・人工中耳・埋め込み型骨導補聴器など】人工内耳と補聴器の関係	大山健二	ENTONI
	内視鏡下に摘出した鼻腔神経鞘腫の 1 症例	長谷川純	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経腫瘍の局在と聴力像について（第 2 報）	日高浩史	Audiology Japan
	【上気道疾患のマクロライド療法】小児滲出性中耳炎に対するマクロライド療法	朴澤孝治	臨床免疫・アレルギー科
	【医療におけるトラブルをめぐって　予期せぬ出来事への対応】口腔・咽頭・唾液腺領域　扁桃摘出術後のトラブル	朴澤孝治	JOHNS

	【最近のウイルス感染症の話題】中耳炎と呼吸器ウイルス	堀　　亨	小児科
	耳管閉鎖障害シリーズ①耳管閉鎖障害―総論と疫学	堀　容子	JOHNS
	耳管閉鎖障害シリーズ⑥耳管開放症に対する音響学的診断法	堀　容子	JOHNS
	臨床分離菌に対するマクロライド系抗生物質の抗菌力、殺菌力、postantibiotic effects の比較と走査型電子顕微鏡観察	矢野寿一	THE JAPAN JOURNAL OF ANTIBIOTICS
	ウイルス感染症と急性中耳炎	矢野寿一	小児耳鼻咽喉科
	頸部外切開により摘出した下咽頭壁内埋没針金異物の 1 例	鈴木貴博	大崎市民病院誌
	開口障害を主訴とした破傷風例	牧　敦子	耳鼻咽喉科臨床
	嚥下機能改善手術症例の検討	香取幸夫	日本気管食道科学会報
	Triamcinolone acetonide（ケナコルト-A）局注が奏功した高位気管切開後の声門下狭窄症例	菊地俊晶	日本気管食道科学会報
2008	Bach1 inhibits oxidative stress-induced cellular senescence by impeding p53 function on chromatin	Dohi Y, Nakanome A	Nat Struct Mol Biol
	The dimensions and structural attachments of tip links in mammalian cochlear hair cells and the effects of exposure to different levels of extracellular calcium	Furness DN, Katori Y	Neuroscience
	The effects of mastoid aeration on autophony in patients with patulous eustachian tube	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Esopahgeal manometry and 24-hour pH monitoring to evaluate the effect of PPI therapy and laparoscopic Nissen's Fundoplication in the patient with severe LPRD.　A case report	Kuo K, Adachi M	Abstracts of The 9th Japan-Taiwan Conference in Oto-Rhino-Laryngology, Head and Neck Surgery
	Ototoxic interaction of kanamycin and 3-nitropropionic acid	Lin C, Oshima T	Acta Otolaryngol
	Magnetic resonance imaging of the eustachian tube cartilage	Oshima T	Acta Otolaryngol
	Digastric Muscle Sew-Up Procedure for the Repair of the Floor of the Mouth Following Pull-Through Operation for Oral Cancers	Suzuki H	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Nonrecurrent inferior laryngeal nerve without vascular anomaly as a genuine entity	Tateda M	Tohoku J Exp Med
	上部消化管内視鏡のスクリーニング検査で発見された中下咽頭の微小異型上皮病巣の 2 例	加藤勝章、松浦一登	耳鼻咽喉科展望
	椎体を貫通した包丁による頸部外傷	舘田　勝	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	特集　癌を見落とさないために―頭頸部腫瘤の診かた　症例から学ぶ―頭頸部悪性腫瘤　上頸部の腫瘤	舘田　勝	JOHNS
	鼻茸切除術 II	吉田尚弘	小児耳鼻咽喉科
	喉頭浮腫で気管切開を要した上大静脈症候群の 1 例	牛来茂樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	錐体部 MRSA 感染へのテトラサイクリンコーンの効果	牛来茂樹	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	聴神経腫瘍「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	橋本　省	医学書院（東京）
	鼻性視神経症の 3 例	工藤貴之	耳鼻と臨床
	喉頭良性腫瘍（アミロイドーシスを含む）「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	香取幸夫	医学書院（東京）
	特集　聴神経腫瘍の治療：症例呈示と治療原則　2. 聴神経腫瘍の治療指針	高田雄介	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	グラム染色による小児急性中耳炎症例の起炎菌迅速診断	佐々木一葉	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	後頸三角機能的郭清術のための臨床解剖	志賀清人	JOHNS
	当科における同時重複癌症例の頭頸部癌と他臓器癌の治療方針	志賀清人	頭頸部癌
	頭頸部腫瘤の診かた　癌を見落とさないために　顔面の腫瘤（解説/特集）	小川武則	JOHNS
	鼻涙管閉塞「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	小野寺亮	医学書院（東京）
	耳管開放症の多彩な症状と難治例に対する耳管ピン挿入術	小林俊光	医学のあゆみ
	中耳真珠腫「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	小林俊光	医学書院（東京）
	先天性真珠腫「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	小林俊光	医学書院（東京）
	鼻すすり型耳管開放症（耳管閉鎖不全症）「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	小林俊光	医学書院（東京）
	頭頸部癌に対する超選択的動注化学放射線療法後の救済手術	松浦一登	頭頸部外科
	IgA 腎症患者と扁桃「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	松谷幸子	医学書院（東京）
	「第 108 回日本耳鼻咽喉科学会総会シンポジウム」 耳鼻咽喉科医の育成を目指して―学生のクリニック実習―	神林潤一	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	大胸筋皮弁によって閉鎖しえた術後性咽頭瘻の 2 症例	西川　仁	磐城共立病院医報

	耳下腺腫脹「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	西條　茂	医学書院（東京）
	鼻骨骨折「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	千葉敏彦	医学書院（東京）
	機能性難聴「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	川瀬哲明	医学書院（東京）
	上咽頭癌治療後に発生した放射線誘発肉腫の 2 例	大越　明	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	【補聴器と人工内耳　最近の進歩と将来展望】人工内耳の最新知見　補聴器と人工内耳の接点（解説/症例報告/特集）	大山健二	JOHNS
	特集【手術・処置に役立つ臨床解剖】　耳管手術のための臨床解剖	大島猛史	JOHNS
	耳管の障害 ―わたしの治療戦略―「すぐに役立つ外来耳鼻咽喉科疾患診療のコツ」（肥塚泉編）	大島猛史	全日本病院出版会（東京）
	小児・若年者の癒着性中耳炎に対する早期低侵襲手術症例	池田怜吉	JOHNS
	声門上喉頭部分切除術後、嚥下リハビリテーションにより摂食可能となった 2 例	長坂　誠、香取幸夫	耳鼻と臨床
	下咽頭・頸部食道腔外異物の 2 症例	日高浩史	日本気管食道科学会会報
	石灰沈着性頚長筋腱炎の一例	峰岸英絵、小野寺亮	東北公済病院誌
	難治の食道胃逆流症に対する、PPI 投与並びに Nissenn 法による噴門形成術の効果	朴澤孝治	日本気管食道科学会会報
	サージトロンとマイクロデブリッダーによる咽頭手術	朴澤孝治	JOHNS
	扁桃病巣感染症「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	朴澤孝治	医学書院（東京）
	【中耳炎　New Trends】急性中耳炎をめぐって　急性中耳炎におけるウイルスの関与（解説/特集）	堀　　亨	JOHNS
	IgA 腎症に扁桃摘出術は本当に有効か？	堀田　修、朴澤孝治	口腔・咽頭科
	臨床微生物検査・5　薬剤耐性インフルエンザ菌	矢野寿一	臨床検査
	【特集　かぜ診療のステップアップ】かぜ総論　耳鼻咽喉科領域のかぜウイルス	矢野寿一	JOHNS
	一般細菌の検出と薬剤感受性試験「今日の耳鼻咽喉科頭頸部外科治療指針」（森山寛、岸本誠司、小林俊光編）	矢野寿一	医学書院（東京）
	第 4 回耳鼻咽喉科領域感染症臨床分離菌　全国サーベイランス結果報告	鈴木賢二、小林俊光	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
2009	Efflux pump inhibitors reduce the invasiveness of Pseudomonas aeruginosa	Hirakata Y, Yano H	Int J Antimicrob Agents
	Antimicrobial activities of piperacillin-tazobactam against Haemophilus influenzae isolates, including beta-lactamase-negative ampicillin-resistant and beta-lactamase-positive amoxicillin-clavulanate-resistant isolates, and mutations in their quinolone resistance-determining regions	Hirakata Y, Yano H	Antimicrob Agents Chemother
	Cochlin-Tomoprotein : A Novel Perilymph-Specific Protein and a Potential Marker for the Diagnosis of Perilymphatic Fistula	Ikezono T, Kobayashi T	Audiol Neurotol
	Measurement of (1-3)-β-D-Glucan Derived from Different Gauze Types 117-121	Kanamori H, Yano H	Tohoku J Exp Med
	New objective assessment of acoustic transfer function via patulous eustachian tube using time-stretched pulse	Kawase T	Nano-Biomedical Engineering 2009
	Bimodal audio-visual training enhances auditory adaptation process	Kawase T	Neuro report
	Masked Patulous Eustachian Tube : An Important Diagnostic Precaution Before Middle Ear Surgery	Kobayashi T	Tohoku J Exp Med
	Effects of Contralateral Noise on 40-Hz and 80-Hz Auditory Steady-State Responses	Maki A	Ear Hear
	Evoked potentials in response to electrical stimulation of the cochlear nucleus by means of multi-channel surface microelectrodes	Oda K	Nano-Biomedical Engineering 2009
	Localization of aquaporins, water channel proteins, in the mouse eustachian tube	Takahashi E	Acta Otolaryngol
	Specific expression of Gsta4 in mouse cochlear melanocytes : a novel role for hearing and melanocyte differentiation	Uehara S, Kobayashi T	Pigment Cell Melanoma Res
	Developmental delays consistent with cochlear hypothyroidism contribute to failure to develop hearing in mice lacking Slc26a4/pendrin expression	Wangemann P, Nakaya K	Am J Physiol Renal Physiol
	Predominant Expression of Mutated Allele of the Succunate Dehydrogenase D (SDHD) Gene in the SDHD-related Paragangliomas	Yamashita R, Hashimoto S	Endocr J
	Detection of respiratory viruses in nasopharyngeal secretions and middle ear fluid from children with acute otitis media	Yano H	Acta Otolaryngol
	Auditory evoked magnetic fields in children with functional hearing loss	Yoshizaki N	Int J Pediatr Otorhinolaryngol
	EBM に基づく咽喉頭がんの頸部リンパ節転移に対する手術治療ガイドラインの確立に関する研究	松浦一登	厚労科研報告書

	地方中核病院における気道異物症例の検討 ―とくに耳鼻咽喉科受診 17 例と三次救急搬送 62 例の検討―	角田梨紗子	日本耳鼻咽喉科学会会報
	細菌学的診断が困難であった上咽頭結核の一例	舘田　勝	口腔・咽頭科
	耳管開放症診断基準（案）の提唱	菊地俊晶	Otology Japan
	Translabyrinthine approach：聴神経腫瘍（編：大畑健治）	橋本　省	メディカルビュー社
	Bach1 による細胞老化の制御機構	五十嵐和彦、中目亜矢子	日本臨床
	側頭骨傍神経節細胞腫の手術治療方針	高田雄介	耳鼻咽喉科臨床
	新種の Capnocytophaga leadbetteri を胸水から分離・同定できた胃食道接合部手術後の膿胸の 1 例	佐藤延子、矢野寿一	日本臨床微生物学雑誌
	口腔ケアと再建手術術後合併症の検討	山崎宗治	頭頸部外科
	内耳におけるイオンチャネル測定法	山内大輔	Equilibrium Research
	T1/2 喉頭癌・下咽頭癌に対する少量 Docetaxel 化学療法併用放射線治療	志賀清人	喉頭
	超選択的動注化学療法を用いた上顎癌の治療	志賀清人	日本鼻科学会会誌
	特集　耳鼻咽喉科と副腎皮質ステロイド ―エビデンスを探る　副腎皮質ステロイド治療の臨床　周術期および術後	志賀清人	JOHNS
	上顎洞扁平上皮癌 T3-4 症例に対する治療法の選択は？ ―超選択的動注療法の立場から―	志賀清人	JOHNS
	特集　放射線治療における有害事象　4. 滲出性中耳炎	小川武則	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	癒着性中耳炎「小児耳鼻咽喉科頭頸部外科診療指針」（編：日本小児耳鼻咽喉科学会）	小林俊光	金原出版株式会社（東京）
	化学放射線療法（CRT）後の頸部郭清術	松浦一登	耳鼻と臨床
	滲出性中耳炎「小児耳鼻咽喉科頭頸部外科診療指針」（編：日本小児耳鼻咽喉科学会）	松谷幸子	金原出版株式会社（東京）
	好酸球性副鼻腔炎と耳疾患	松谷幸子	ENTONI
	真珠腫性中耳炎「小児耳鼻咽喉科頭頸部外科診療指針」（編：日本小児耳鼻咽喉科学会）	松谷幸子	金原出版株式会社（東京）
	特集　聴覚障害を生じる薬物　2. 抗菌薬（アミノグリコシドを除く）	織田　潔	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	頭頸部癌診療ガイドライン 2009 年版（編：日本頭頸部癌学会）	西條　茂	金原出版株式会社（東京）
	アブミ骨筋の生理と機能	川瀬哲明	耳鼻咽喉科臨床
	当科における内視鏡下咽頭喉頭手術（ELPS）	浅田行紀	頭頸部癌
	私が愛用する手術器具 69 頭頸部手術への“鼻鏡”の利用	大山健二	JOHNS
	特集　耳の奇形　発生・分類・遺伝子　外耳・中耳奇形と遺伝子異常、症候群	大島猛史	JOHNS
	鼻出血処置中の急変への対応	大島猛史	ENTONI
	耳鳴、耳閉塞感「今日の治療指針　私はこう治療している　TODAY'S THERAPY　2009」（総編集：山口　徹、北原光夫、福井次矢）	大島猛史	医学書院（東京）
	症例をどうみるか　鼓室型グロムス腫瘍に術前血管塞栓術は必要か？	長谷川純	JOHNS
	最近 5 年間、当科で入院加療を行った扁桃急性疾患 383 症例に関する検討～入院に至る経路や喫煙の関与について～	日高浩史	磐城共立病院医報
	外切開または口蓋扁桃摘出術を要した咽頭腔外異物 2 例	八木沼裕司	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	耳介・外耳道の外傷	朴澤孝治	JOHNS
	ウイルス性難聴「小児耳鼻咽喉科頭頸部外科診療指針」（編：日本小児耳鼻咽喉科学会）	矢野寿一	金原出版株式会社（東京）
	CASE40　膿性鼻汁と頭痛を訴えて来院した 30 歳女性　「New 専門医を目指すケース・メソッド・アプローチ 11　感染症 」（編：山口恵三、舘田一博）	矢野寿一	日本医事新報社
	地方中核病院（福島県いわき市）における喉頭癌の臨床的検討	鈴木　淳	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	外科的気管切開術　日本気管食道科学会編	橋本　省	外科的マニュアル
	ホメオパシーの口蓋扁桃摘出後疼痛緩和作用	朴澤孝治	ホメオパシー医学 2
	喉頭温存・下咽頭喉頭部分切除術における切除範囲と再建法について	松浦一登	頭頸部外科
	喉頭機能を温存した頭頸部がんの標準的治療法の確立に関する研究	松浦一登	厚生労働省がん研究助成金による報告集
2010	Congenital cholesteatoma of mastoid region manifesting as acute mastoiditis : case report and literature review	Hidaka H	J Laryngol Otol
	Osteochondroma of the mandibular condyle manifesting only as conductive hearing loss	Hidaka H	Otolaryngol Head Neck Surg
	Monolayer culture systems with respiratory epithelial cells for evaluation of bacterial invasiveness	Hirakata Y, Yano H	Tohoku J Exp Med
	Eosinophilic inflammation in the middle ear induces deterioration of bone-conduction hearing level in patients with eosinophilic otitis media	Iino Y, Usubuchi H	Otol Neurotol
	Upper airway obstruction by epiglottis and arytenoids hematoma in a patient treated with warfarin sodium	Ikeda R	Auris Nasus Larynx

	A case of paranasal sinus lesions in IgG4-related sclerosing disease	Ikeda R	Otolaryngol Head Neck Surg
	Calcium concentration in cochlear endolymph after vestibular labyrinth injury	Ikeda R	Neuroreport
	Effect of vestibular labyrinth destruction on endocochlear potential and potassium concentration of the cochlea	Ikeda R	Hear Res
	Salicylate restores transport function and anion exchanger activity of missense pendrin mutations	Ishihara K, Kobayashi T	Hear Res
	Smooth-to-striated muscle transition in human esophagus : an immunohistochemical study using fetal and adult materials	Katori Y	Ann Anat
	Developmental changes in the distribution of calretinin-immunoreactive cells in human fetal nasal epithelium	Katori Y	Okajimas Folia Anat Jpn
	Three-dimensional computed tomography imaging of the eustachian tube lumen in patients with patulous eustachian tube	Kikuchi T	ORL J Otorhinolaryngol Relat Spec
	Salicylate-induced translocation of prestin having mutation in the GTSRH sequence to the plasma membrane	Kumano S, Ikeda K	FEBS Letters
	Changes in guinea pig cochlea after transient cochlear ischemia	Lin C, Oshima T	Neuroreport
	False positive reactivity of a substance P-antibody in the ectodermal/epithelial plug of the nose, ear, eye and perineum of the human and mouse fetuses	Masumoto H, Katori Y	Okajimas Folia Anat Jpn
	Estimation of heat requirement and stress index in head and neck cancer patients under chemoradiation therapy	Matsuura K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Fetal Anatomy of the Human Carotid Sheath and Structures In and Around It	Miyake N, Kawase T	Anat Rec
	New treatment for invasive fungal sinusitis : Three cases of chronic invasive fungal sinusitis treated with surgery and voriconazole	Nakaya K	Auris Nasus Larynx
	A case of myoepithelioma of the nasal cavity	Nakaya K	Auris Nasus Larynx
	Survival of a free jejunal graft after the resection of its nutrient vessels	Ogawa T	Auris Nasus Larynx
	A cDNA microarray analysis identifies 52 genes associated with cis-diamminedichloroplatinum susceptibility in head and neck squamous cell carcinoma cell lines	Ogawa T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Upregulation of IGF2 is associated with an acquired resistance for cis-diamminedichloroplatinum in human head and neck squamous cell carcinoma	Ogawa T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Prevalence of acoustic neuroma associated with each configuration of pure tone audiogram in patients with asymmetric sensorineural hearing loss	Suzuki M	Ann Otol Rhinol Laryngol
	A New Model of Experimentally induced Cholesteatoma in Mongolian Gerbils	Yamamoto-Fukuda T, Kobayashi T	Am J Pathol
	Pathogenesis of middle ear cholesteatoma : a new model of experimentally induced cholesteatoma in Mongolian gerbils	Yamamoto-Fukuda T, Kobayashi T	Am J Pathol
	Expression of epithelial calcium transport system in rat cochlea and vestibular labyrinth	Yamauchi D	BMC physiology
	Bach1-dependent and -independent Regulation of Heme Oxygenase-1 in Keratinocytes	Okada S, Nakanome A	J Biol Chem
	ヒトメタニューモウイルス	堀　亨	JOHNS
	進行上顎癌に対して眼動脈経由動注療法を施行した 3 症例	松本　恒、松浦一登	頭頸部癌
	子どもにインフルエンザの予防注射をしたのですが、インフルエンザになってしまいました？　どうしてきかなかったのですか？	矢野寿一	JOHNS
	知っておきたい耐性菌の特徴	矢野寿一	月刊薬事
	疾患からみたインフォームド・コンセントの実際　耳管開放症	菊地俊晶	JOHNS
	頸動脈小体腫瘍摘出術における NBCA を用いた術前経皮的直接穿刺法による腫瘍内血管塞栓術の有用性	荒川一弥	頭頸部外科
	20 年の経過を経て auditory neuropathy の診断に至った 1 症例	高田雄介	JOHNS
	顎下腺腫瘍の手術	志賀清人	JOHNS
	中咽頭癌 133 例の臨床統計	小川武則	耳鼻咽喉科展望
	中咽頭癌に対する化学放射線治療	小川武則	耳鼻と臨床
	頭頸部癌治療後の摂食嚥下リハビリテーションが摂食嚥下機能と QOL に及ぼす効果	小野二美、志賀清人	頭頸部癌
	特集 1　感覚器（視覚と聴覚）障害の新しい治療　耳管疾患と新しい外科的治療法	小林俊光	学術の動向
	耳管開放症の新しい考え方	小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	ダブル・スコープ法による内視鏡的咽喉頭手術（ELPS）について	松浦一登	頭頸部癌
	仙台医療センターにおける中咽頭癌の治療成績	織田　潔	耳鼻咽喉科展望
	遷延性意識障害例の聴性定常状態誘発磁界	菅野彰剛、川瀬哲明	臨床脳波
	特集　伝音難聴の耳よりな話　アブミ骨筋は何のためにあるのか？	川瀬哲明	JOHNS

	耳管疾患に対する内視鏡の使い方とコツ	大島猛史	JOHNS
	耳・側頭骨-耳管開放症	大島猛史	JOHNS
	I. 聴覚検査　5. 耳管機能検査	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	性感染症による急性扁桃炎の 2 症例	大島英敏	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	耳管開放症の診断と治療	大島猛史	MB ENT
	耳・側頭骨-髄膜癌腫症	日高浩史	JOHNS
	宮城県立がんセンターにおける中咽頭癌症例の検討	片桐克則	耳鼻咽喉科展望
	インフルエンザの感染経路	堀　　亨	日本医事新報
	ヒトメタニューモウイルス	堀　　亨	JOHNS
	インフルエンザ菌感染症	矢野寿一	公衆衛生
	新型インフルエンザの現状とその対策	矢野寿一	小児耳鼻咽喉科
	インフルエンザに関するガイドライン	矢野寿一	JOHNS
	拡散が懸念される KPC 型 β-ラクタマーゼ	矢野寿一	医学のあゆみ
	職員教育（手洗い・隔離など）「ICD スキルアップの実践ガイド」（監修：賀来満夫）	矢野寿一	株式会社ケアネット（東京）
	BLNAR（β ラクタマーゼ非生産アンピシリン耐性）インフルエンザ菌	矢野寿一	月刊薬事　臨時増刊号
	顔面神経麻痺に関するインターネット上の情報の問題点	鈴木　淳	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	顔面神経を経由して髄膜播種をきたした耳下腺癌の一例 ～症例報告と現在の当科の基本術式の紹介～	鈴木　淳	Facial N Res Jpn
	前耳部より総頸動脈分岐間を通り、下咽頭に穿通した杙創の 1 例	佐藤宏樹	頭頸部外科
	食道癌術後胃管浸潤を来した広義の肝門部胆管癌および下咽頭癌の同時性重複癌の 1 例	高舘達之、小林俊光	胆道
	口内炎を初発症状とした尋常性天疱瘡の 2 例	池田怜吉	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	耳管機能検査	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	耳管開放症診断基準（案）の提唱	菊地俊晶	Otology Japan
	私が愛用する手術器具 81：北村式鼻内手術用持針器	牛来茂樹	JOHNS
	頸静脈孔神経鞘腫	橋本　省	JOHNS
	口腔・咽頭編 Q&A-7、扁桃・アデノイド	朴澤孝治	JOHNS
	放射線治療に対する期待と希望	松浦一登	JASTRO NEWS LETTER
	アナフィラクトイド紫斑病は扁桃摘出術で治る？　EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療 2010-2011	松谷幸子	中外医学社
	好酸球性副鼻腔炎と好酸球性中耳炎との関連	松谷幸子	アレルギー
	伝音難聴の耳よりな話　外耳道後壁の不思議	松谷幸子	JOHNS
	お母さんへの回答マニュアル Q&A 2010. 扁桃・アデノイド 4、子どもがよく扁桃炎をおこします　予防法や良い治療はありませんか？	松谷幸子	JOHNS
2011	Emergence of fluoroquinolone-resistant Streptococcus pyogenes in Japan by a point mutation leading to a new amino acid substitution	Arai K, Yano H	J Antimicrob Chemother
	Application of the Hybrid Capture 2 assay to squamous cell carcinomas of the head and neck	Bishop JA, Ogawa T	Cancer Cytopathol
	An analysis of clinical risk factors of deep neck infection	Hasegawa J	Auris Nasus Larynx
	Creutzfeldt-jakob disease with paralysis of the unilateral vocal cord and soft palate	Hasegawa J	Tohoku J Exp Med
	Precipitating factors in the pathogenesis of peritonsillar abscess and bacteriological significance of the Streptococcus milleri group	Hidaka H	Eur J Clin Microbiol Infect Dis
	Glomangiopericytoma of the nasal cavity	Higashi K	Auris Nasus Larynx
	Preventative effect of various fluids used in the epitympanic bulla on deterioration of cochlear function during labyrinthectomy	Ikeda R,	Acta Otolaryngol
	Management of Patulous Eustachian Tube With Habitual Sniffing	Ikeda R,	Otol Neurotol
	Effect of Aspiration of Perilymph during Stapes Surgery on the Endocochlear Potential of Guinea Pig	Ikeda R,	Otolaryngol Head Neck Surg
	High prevalence of extended-spectrum β-lactamases and qnr determinants in Citrobacter species from Japan : dissemination of CTX-M-2	Kanamori H, Yano H	J Antimicrob Chemother
	Molecular characteristics of extended-spectrum β-lactamases in clinical isolates of Enterobacteriaceae from the Philippines	Kanamori H, Yano H	Acta Trop
	Fetal development of the human epiglottis revisited : appearance of GFAP-positive mesenchymal cells and fibrous connections with other laryngeal and lingual structures	Katori Y	Ann Anat
	Early fetal development of hard tissue pulleys for the human superior oblique and tensor veli palatini muscles	Katori Y	Ann Anat
	CD34-positive primitive vessels and other structures in human fetuses : An immunohistochemical study	Katori Y	Acta Otolaryngol

	Early fetal development of the intermediate tendon of the human digastricus and omohyoideus muscles : a critical difference in histogenesis	Katori Y	Clin Anat
	Effects of neck muscle vibration on subjective visual vertical : comparative analysis with effects on nystagmus	Kawase T	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Outcomes of surgically treated rhinogenic optic neuropathy	Nakaya K	Acta Otolaryngol
	Surgical treatment is recommended for advanced oral squamous cell carcinoma	Ogawa T	Tohoku J Exp Med
	Binax NOW® Streptococcus pneumoniae test of middle ear fluid for detecting causative pathogens in children with acute otitis media	Okitsu N	J Microbiol Methods
	Identification of senescence-associated genes and their networks under oxidative stress by the analysis of Bach1. Antioxid Redox Signal	Ota K, Nakanome A	Antioxid Redox Signal
	A Human Head and Neck Squamous Cell Carcinoma Cell Line with Acquired cis-Diamminedichloroplatinum-Resistance Shows Remarkable Upregulation of BRCA1 and Hypersensitivity to Taxane	Saiki Y, Ogawa T	Int J Otolaryngol
	Distinct Features of Second Primary Malignancies in Head and Neck Cancer Patients in Japan	Shiga K	Tohoku J Exp Med
	Congenital vallecular cyst in an infant : case report and review of 52 recent cases	Suzuki J	J Laryngol Otol
	Phase I trial of chemoradiotherapy with the combination of S-1 plus cisplatin for patients with unresectable locally advanced squamous cell carcinoma of the head and neck	Tahara M, Matsuura K	Cancer Sci
	Introduction of New Laryngeal Closure methods for aptients with intractable aspiration	Tateda M	Japanese Clinical Medicine
	Sodium selectivity of semicircular canal duct epithelial cells	Yamazaki M	BMC Res Notes
	Sodium selectivity of Reissner's membrane epithelial cells	Yamazaki M	BMC Physiol
	Multicenter phase II study of an opioid-based pain control program for head and neck cancer patients receiving chemoradiotherapy	Zenda S, Matsuura K	Radiother Oncol
	症例をどうみるか　いわゆる軟組織材料再建法後に再発した真珠腫症例	原　陽介	JOHNS
	術中心停止にて再建手術を行えなかった舌喉頭全摘術症例	松浦一登	頭頸部外科
	動き出した頭頸部がん専門医制度	松浦一登	頭頸部外科
	頸部膿瘍の病態に関する検討	河本　愛	頭頸部外科
	経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）を行った頭頸部癌患者の検討	角田梨紗子	頭頸部癌
	耳管開放症	菊地俊晶	JOHNS
	緊急気管内挿管を要した乳児舌根部嚢胞症例	牛来茂樹	小児耳鼻咽喉科
	頭頸部悪性腫瘍の初期症状とその対応　難聴・眩暈・耳痛	志賀清人	ENTONI
	当科における喉頭全摘術後の合併症の検討	志賀清人	喉頭
	乳突削除―顔面神経高位切断法を用いた拡大耳下腺全摘術の検討	志賀清人	頭頸部外科
	耳鼻咽喉科・頭頸部外科を志す諸君へのメッセージ	小林俊光	耳鼻咽喉科・頭頸部外科研修ノート
	頭頸部外科医が行う化学放射線療法：―その有効性と安全性―	松浦一登	頭頸部癌
	化学放射線療法の QOL 向上を目指した支持療法の開発	松浦一登	平成 22 年度総括・分担研究報告
	外科的治療を要した小児深頸部膿瘍の 3 例	西川　仁	耳鼻咽喉科臨床
	診断に苦慮した難治性口腔咽頭潰瘍の 4 症例	西川　仁	耳鼻免疫アレルギー
	一地方中核病院におけるめまい入院患者動態（特に耳鼻咽喉科常勤医師減少と病床数減少の影響について）	西川　仁	Equilibrium Res
	食道壁内膿瘍に至った魚骨食道穿孔の 1 症例	西川　仁	日本気管食道科学会会報
	鼻副鼻腔内反性乳頭腫：術前診断の意義と、再発期間、再発部位	西川　仁	日本鼻科学会会誌
	東日本大震災をふりかえる　県の考え、地元の判断	大庭正敏	宮城県医師会報
	抗 IgE モノクローナル抗体（オマリズマブ）が奏功した好酸球性中耳炎・副鼻腔炎例	大島英敏	耳鼻咽喉科臨床
	耳科・神経耳科手術における内耳操作 ―とくに聴力保存的部分的迷路切除術について―	池田怜吉	耳鼻咽喉科臨床
	耳鼻咽喉科領域の救急処置	日高浩史	救急・集中治療
	先天性外耳道閉鎖症例における埋め込み型骨導補聴器（Bone-Anchored Hearing Aid : BAHA）の有効性に関する検討	福島邦博、小林俊光	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	【小児感染症 2011 ―今どうなっているの？小児の感染症―】最近話題の耐性菌、今どうなっているの？　β-ラクタマーゼ非産生アンピシリン耐性インフルエンザ菌（BLNAR）	矢野寿一	小児科臨床
	巨大耳下腺上皮筋上皮癌例	鈴木　淳	耳鼻咽喉科臨床
	頭頸部癌治療におけるエコーガイド下上腕末梢穿刺中心静脈カテーテルの有用性	鈴木　淳	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
	私が愛用する手術器具 91　手術用顕微鏡	大島猛史	JOHNS
	耳管機能検査	大島猛史	JOHNS

	頭頸部癌化学放射線療法の位置づけと今後頭頸部外科医が行う化学放射線療法　その有効性と安全性	松浦一登	頭頸部癌
	胃瘻造設（PEG）を行った 235 例の頭頸部癌患者の検討	角田梨紗子	頭頸部癌
2012	HPV Analysis in Distinguishing Second Primary Tumors From Lung Metastases in Patients With Head and Neck Squamous Cell Carcinoma	Bishop AJ, Ogawa T	Am J Surg pathol
	Application of the hybrid capture 2 assay to squamous cell carcinomas of the head and neck : a convenient liquid-phase approach for the reliable determination of human papillomavirus status	Bishop JA, Ogawa T	Cancer Cytopathol
	Human Papillomavirus-related Carcinomas of the Sinonasal Tract	Bishop JA, Ogawa T	Am J Surg Pathol
	The anatomy of fetal peripheral lymphatic vessels in the head-and-neck region : an immunohistochemical study	Cho KH, Katori Y	J Anat
	First carbapenem-resistant isolates of Acinetobacter soli in Japan	Endo S, Yano H	Antimicrob Agents Chemother
	Molecular epidemiology of carbapenem non-susceptible Acinetobacter baumannii in Japan	Endo S, Yano H	J Antimicrob Chemother
	Petrous bone cholesteatoma removed by trans-superior semicircular canal approach : Long-term hearing results in three cases	Hasegawa J	Acta Otolaryngol
	Surgical treatment for congenital absence of the oval window with facial nerve anomalies	Hasegwa J	Auris Nasus Larynx
	Post-Tsunami Outbreaks of Influenza in Evacuation Centers in Miyagi Prefecture, Japan	Hatta M, Yano H	Clin Infect Dis
	Traumatic Pneumolabyrinth : Air Location and Hearing Outcome	Hidaka H	Otol Neurotol
	Bactericidal effects of antimicrobial agents on epithelial cell-associated Pseudomonas aeruginosa	Hirakata Y, Yano H	J Infect Chemother
	Fetal development and variations in the cartilages surrounding the human external acoustic meatus	Ikariya Y, Katori Y	Ann Anat
	Risk factors for deterioration of bone conduction hearing in cases of labyrinthine fistula caused by middle ear cholesteatoma	Ikeda R	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Case report of Mammary Analog Secretory Carcinoma of the parotid gland	Ito S, Ishida E	Pathol Int
	Molecular etiology of second primary tumors in contralateral tonsils of human papillomavirus-associated index tonsillar carcinomas	Joseph AW, Ogawa T	Oral Oncol
	Molecular characteristics of extended-spectrum β-lactamases and qnr Determinants in Enterobacter Species from Japan	Kanamori H, Yano H	PLOS ONE
	Salvage surgery for recurrent oropharyngeal cancer after chemoradiotherapy	Kano S, Shiga K	Int J Clin Oncol
	Prestyloid compartment of the parapharyngeal space : a histological study using late-stage human fetuses	Katori Y	Surg and Radiol Anat
	Suprahyoid neck fascial configuration, especially in the posterior compartment of the parapharyngeal space : A histological study using late-stage human fetuses	Katori Y	Clin Anat
	Prestyloid compartment of the parapharyngeal space : a histological study using late-stage human fetuses	Katori Y	Surg Radiol Anat
	Transient Appearance of Tyrosine Hydroxylase Immunoreactive Cells in the Midline Epithelial Seam of the Human Fetal Secondary Palate	Katori Y	Cleft Palate Craniofac J
	Initial stage of fetal development of the pharyngotympanic tube cartilage with special reference to muscle attachments to the tube	Katori Y	Anat Cell Biol
	Transient appearance of tyrosine hydroxylase immunoreactive cells in the midline epithelial seam of the human fetal secondary palate	Katori Y	Cleft Palate Craniofac J
	Elastic fiber-mediated enthesis in the human middle ear	Kawase T	J Anat
	Contralateral white noise attenuates 40-Hz auditory steady-state fields but not N100m in auditory evoked fields	Kawase T	Neuroimage
	Reconsideration of the Autonomic Cranial Ganglia : An Immunohistochemical Study of Mid-Term Human Fetuses	Kiyokawa H	Anat Rec
	Frequency characteristics of contralateral sound suppression of 40-Hz auditory steady-state response	Kiyokawa H	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Phase II Feasibility Trial of Adjuvant Chemoradiotherapy with 3-weekly Cisplatin for Japanese Patients with Post-operative High-risk Squamous Cell Carcinoma of the Head and Neck	Kiyota N, Matsuura K	Jpn J Clin Oncol
	Contralateral-noise effects on cochlear responses in anesthetized mice are dominated by feedback from an unknown pathway	Maison SF, Usubuchi H	J Neurophysiol
	Bach1 is critical for the transformation of mouse embryonic fibroblasts by Ras（V12）and maintains ERK signaling	Nakanome A	Oncogene
	Electrophysiological mapping of the cochlear nucleus with multi-channel bipolar surface microelectrodes	Oda K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Methylation of death-associated protein kinase is associated with cetuximab and erlotinib resistance	Ogawa T	Cell Cycle

	Correct Diagnosis of Warthin Tumor in the Parotid Gland with Dynamic MRI	Ogawa T	Tohoku J Exp Med
	miR-34a is downregulated in cis-diamminedichloroplatinum treated sinonasal squamous cell carcinoma patients with poor prognosis	Ogawa T	Cancer Sci
	Suprabasin is hypomethylated and associated with metastasis in salivary adenoid cystic carcinoma	Shao C, Ogawa T	PLOS ONE
	Differences between oral cancer and cancers of the pharynx and larynx on a molecular level	Shiga K	Oncol Lett
	Malignant melanoma of the head and neck : A multi-institutional retrospective analysis of cases in Northern Japan	Shiga K	Head Neck
	Carcinoma cuniculatum mimicking leukoplakia of the mandibular gingiva	Suzuki J	Auris Nasus Larynx
	Auditory evoked magnetic fields in patients with absent brainstem responses due to auditory neuropathy with optic atrophy	Takata Y	Clin Neurophysiol
	Giant cell reparative granuloma of the temporal bone successfully resected with preservation of hearing	Takata Y	J Laryngol Otol
	The prolonged presence of a fish bone in the neck	Watanabe K	Tohoku J Exp Med
	High frequency of IMP-6 among clinical isolates of metallo-β-lactamase-producing Escherichia coli in Japan	Yano H	Antimicrob Agents Chemother
	Elastic fiber-mediated enthesis in the human middle ear	Kawase T	J Anat
	IMP-1-producing carbapenem-resistant Acinetobacter ursingii from Japan	Endo S, Yano H	J Antimicrob Chemother
	Fetal developmental change in topographical relationship between the human lateral pterygoid muscle and buccal nerve	Katori Y	J Anat
	医療情報の IT 化をめぐって	伊東潤造、橋本　省	宮城県医師会報
	【災害医療―東日本大震災から学ぶこと】運営側からみた避難所における医療と保健	伊東潤造、橋本　省	日本医師会雑誌
	経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）を行った頭頸部癌患者の検討	角田梨紗子	頭頸部癌
	副咽頭間隙に進展し即時口蓋扁桃摘出による排膿を要した症例	舘田　豊	JOHNS
	喉頭軟骨肉腫の 1 症例	舘田　勝	喉頭
	鼻すすり型耳管開放症と耳管狭窄症の鑑別	菊地俊晶	ENTONI
	【急性感音難聴の最新治療戦略】注意すべき急性感音難聴の鑑別診断　聴神経腫瘍	橋本　省	JOHNS
	【めまい― Vertigo, Dizziness or Else?】聴神経腫瘍	橋本　省	Clin Neurosci
	【反復するめまいへの対応】聴神経腫瘍	橋本　省	ENTONI
	重度誤嚥に対して喉頭中央部切除術を施行した 2 症例	香取幸夫	嚥下医学
	実戦的音声機能検査	香取幸夫	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	Amalgam tatoo と診断された口腔内黒色病変例	高梨芳崇	耳鼻咽喉科臨床
	蝸牛電気生理から耳科臨床へのフィードバック：新しい人工内耳時代に向けて	小林俊光	Otology Japan
	耳管開放症と鑑別すべき疾患	小林俊光	ENTONI
	実践的耳鼻咽喉科検査法	小林俊光	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	実践的耳管機能検査法―鼓膜形成術前の耳管機能評価	小林俊光	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	低音障害型オージオグラムの鑑別―耳管開放症を忘れないで！	小林俊光	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	実戦的ティンパノメトリー	小林俊光	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	咽頭 STD に対する意識調査　アンケート結果から	小澤大樹	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	頸部腫瘤の治療法選択	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会報
	頭頸部癌周術期におけるクオリティ・コントロールとしての口腔ケアの導入	松浦一登	頭頸部外科
	頸部腫瘤の診察と診断法	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会報
	化学放射線療法の QOL 向上を目指した支持療法の開発 . 厚生労働省科学研究費補助金　がん臨床事業　進行頭頸部がんに対する化学放射線療法を中心とした集学的治療の開発に関する研究	松浦一登	平成 23 年度総括・分担研究報告書
	第 5 章　頭頸部腫瘍、とくに悪性腫瘍・器質的疾患とその術後 ⑤下咽頭癌術後	松浦一登	疾患別に診る嚥下障害
	スキルアップ講座「頸部腫瘤の治療法選択」	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	スキルアップ講座「頸部腫瘤の診察と診断法」	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会誌
	新しい内視鏡診断「NBI による癌の診断」①	松浦一登	ENT 臨床フロンティア―実践的耳鼻咽喉科検査法
	通年性アレルギー性鼻炎に対するモメタゾン点鼻薬単独投与の効果 ―第 2 世代抗ヒスタミン薬投与で効果が不十分な症例での切り替え試験―	松原　篤、大島猛史	耳鼻と臨床

	放射線・化学療法時に気管切開を必要とした喉頭癌・下咽頭癌症例の検討 転帰と気管孔閉鎖の規定因子の検討	西川　仁	日本気管食道科学会会報
	急性腎不全にて透析治療を要した急性咽喉頭炎と頸部蜂窩織炎の 2 症例	西川　仁	日本耳鼻咽喉科感染症研究会会誌
	喉頭の変形と嗄声症状を残した幼児喉頭カンジダ症の 1 例	西川　仁	日本気管食道科学会会報
	フォガティーカテーテルを用いた小児気管支異物摘出法	西川　仁	日本気管食道科学会会報
	鼻出血例 367 例の検討	西川　仁	耳鼻咽喉科臨床
	めまいで発症した卵巣原発の髄膜癌腫症例	西川　仁	耳鼻咽喉科臨床
	聴覚再建医療の聴取能改善に関する研究　(1) 脳幹インプラントのプレサイスロケーション　(2) 聴覚―視覚相互作用と聴覚リハビリテーション　(3) 聴性誘発脳磁界に	川瀬哲明	ナノ医工学年報 4
	聴性定常反応に関する研究　対側音の影響について	川瀬哲明	ナノ医工学年報 5
	後迷路性難聴を疑ったときに行う検査	川瀬哲明	ENT 臨床フロンティア ―実践的耳鼻咽喉科検査法
	当科における涙嚢鼻腔吻合術についての検討	堀　亨	大崎市民病院誌
	【小児の耳鼻咽喉科 108 の疑問】鼻・副鼻腔疾患　急性鼻副鼻腔炎においてウイルス性か細菌性かの鑑別は？	矢野寿一	JOHNS
	【感染症と抗菌薬の使い方―多剤耐性菌感染症時代の予防から治療まで】多剤耐性菌の現状、対策、予防	矢野寿一	診断と治療
	カルバペネム系薬を分解するメタロ-β-ラクタマーゼ	矢野寿一	仙台市医師会報
	【臨床感染症ブックレット 5 巻、内科医にとって必ず知っておくべき感染症を診る、「かぜ」という病名はありません】	矢野寿一	急性上気道炎（急性副鼻腔炎、急性咽頭炎、急性扁桃炎など）へのアプローチ
	【JAID/JSC 感染症治療ガイド 2011】中耳炎および副鼻腔炎	矢野寿一	JAID/JSC 感染症治療ガイド委員会編、ライフサイエンス出版
	感染症に関する検査	矢野寿一	ENT 臨床フロンティア ―実践的耳鼻咽喉科検査法
	コラム：MIC の結果から薬剤をどのように選択するか？	矢野寿一	ENT 臨床フロンティア ―実践的耳鼻咽喉科検査法
	「神経堤」　脳科学辞典　http://bsd.neuroinf.jp/wiki/神経堤、2012	鈴木　淳	
	入院加療を要した鼻出血症例 203 例の検討	西川　仁	日本鼻科学会誌
	【先天性真珠腫治療のプランニング】Stage 分類にもとづく先天性真珠腫 31 症例の動向　当科における先行報告 40 耳との比較を含めて	日高浩史	Otology Japan
	前庭神経鞘腫の手術を受けて	高田雄介	Otology Japan
	【側頭骨悪性腫瘍～手術 vs 放射線化学療法】化学放射線治療を第一選択とする聴器癌の治療	志賀清人	Otology Japan
	耐性菌予防における高用量使用の意義	矢野寿一	感染と抗菌薬
	「インターネットにおけるがん情報―頭頸部がんを中心として」⑩がんを見逃さないために―頭頸部癌診療の最前線	松浦一登	ENT 臨床フロンティア ―実践的耳鼻咽喉科検査法
	化学放射線療法後の頸部郭清に関する検討　feasibility study	花井信広、松浦一登	頭頸部外科
	広頸筋皮弁により再建した頬粘膜癌の 1 例	今井隆之、松浦一登	頭頸部外科
	東日本大震災後の避難所において発生した A 型インフルエンザアウトブレイク事例	遠藤史郎、矢野寿一	日本環境感染学会誌
2013	Electrophysiological mapping of the cochlear nucleus with multi-channel bipolar surface microelectrodes	Oda K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Suprahyoid neck fascial configuration, especially in the posterior compartment of the parapharyngeal space : A histological study using late-stage human fetuses	Katori Y	Clin Anat
	Infantile Tullio Phenomenon	Kakisaka Y, Miyazaki H	J Pediatr
	A ganglion cell cluster along the glossopharyngeal nerve near the human palatine tonsil	Oda K	Acta Otolaryngol
	Human Papillomavirus-related Carcinomas of the Sinonasal Tract	Bishop JA, Ogawa T	Am J Surg Pathol
	Fetal development of the elastic-fiber-mediated enthesis in the human middle ear	Takanashi Y	Ann Anat
	Masking Effects in Patients With Auditory Neuropathy-Possible Involvement of Suppression Mechanism Caused by Normal Outer Hair Cell Function	Oda K	Otol Neurotol
	Congenital Cholesteatoma Is Predominantly Found in the Posterior-Superior Quadrant in the Asian Population : Systematic Review and Meta-analysis, Including Our Clinical Experience	Hidaka H	Otol Neurotol
	Unique Extension of Peritonsillar Abscess to the Masticator Space Encountered in the Early Phase of Antiviral Therapy for Hepatitis C	Hidaka H	Clin Microbiol

Identification of Actinomyces meyeri actinomycosis in middle ear and mastoid by 16SrRNA analysis	Kakuta R	J Med Microbiol
Bach1 is critical for the transformation of mouse embryonic fibroblasts by RasV12 and maintains ERK signaling	Nakanome A	Oncogene
Neural crest-derived horizontal basal cells as tissue stem cells in the adult olfactory epithelium	Suzuki J	Neurosci Res
Human papillomavirus-related carcinoma with adenoid cystic-like features : a peculiar variant of head and neck cancer restricted to the sinonasal tract	Bishop JA, Ogawa T	Am J Surg Pathol
Acquired idiopathic laryngomalacia treated by laser supraglottic laryngoplasty	Kawamoto A	Tohoku J Exp Med
Logistic regression analysis of risk factors for prolonged pulmonary recovery in children from aspirated foreign body	Hidaka H	Int J Pediat Otorhinolaryngol
Osseous hamartoma arising from the Eustachian tube	Kawamoto A	Clin Pract
Rathke's pouch remnant and its regression process in the prenatal period	Cho KH, Katori Y	Childs Nerv Syst
Deep fat of the face revisited	Cho KH, Katori Y	Clin Anat
Heterogeneity of grandular cells in the human salivary glands : an immunohistochemical study using elderly adult and fetal specimens	Katori Y	Anat Cell Biol
Fetal anatomy of the upper pharyngeal muscles with special reference to the nerve supply : is it an enteric plexus or simply an intramuscular nerve?	Abe S, Katori Y	Anat Cell Biol
Transsphenoidal meningocele : an anatomical study using human fetuses including report of a case	Katori Y	Eur Arch Otorhinolaryngol
Chronic rhinosinusitis in ex-lepromatous leprosy patients with atrophic rhinitis	Suzuki J	J Laryngol Otol
Giant cell reparative granuloma of the temporal bone successfully resected with preservation of hearing	Takata Y	J Laryngol Otol
Middle ear myoclonus cured by selective tenotomy of the tensor tympani : strategies for targeted intervention for middle ear muscles	Hidaka H	Otol Neurotol
Roles of Keap1-Nrf2 System in Upper Aerodigestive Tract Carcinogenesis	Ohkoshi A	Cancer Prev Res
Laterally attached superior turbinate is associated with opacification of the sphenoid sinus	Nomura K	Auris Nasus Larynx
Association between Septal Deviation and Sinonasal Papilloma	Nomura K	Tohoku J Exp Med
Sinus fungus ball in the Japanese population : clinical and imaging characteristics of 104 cases	Nomura K	Int J Otolaryngol
Frontal sinusitis with mixed bacterial colonies treated with the combination of endoscopic modified lothrop procedure and external approach	Nomura K	Case Rep Otolaryngol
CD271 Defines a Stem Cell-Like Population in Hypopharyngeal Cancer	Imai T, Matsuura K	PLOS ONE
Matched-pair analysis in patients with advanced oropharyngeal cancer : surgery versus concurrent chemoradiotherapy	Kano S, Shiga K	Oncology
Inflammatory Myofibroblastic Tumor of the Nasal Septum	Okumura Y	Case Rep Otolaryngol
Improvement rate of acute otitis media caused by Haemophilus influenzae at 1 week is significantly associated with time to recovery	Yano H	J Clin Microbiol
Molecular characteristics of extended-spectrum β-lactamases in clinical isolates from Escherichia coli at a Japanese tertiary hospital	Yano H	PLOS ONE
Tuberculosis exposure among evacuees at a shelter after earthquake, Japan, 2011	Kanamori H, Yano H	Emerg Infect Dis
Characteristics of infectious diseases in hospitalized patients during the early phase after the 2011 great East Japan earthquake : pneumonia as a significant reason for hospital care	Aoyagi T, Yano H	Chest
トリシズマブ投与中に発症した敗血症性ショックを伴う深頸部感染症例	西川　仁	耳鼻咽喉科臨床
症例をどうみるか　扁桃周囲膿瘍が起点となり咀嚼筋間隙膿瘍へと進展した1症例	鈴木貴博	JOHNS
気道異物の入院加療期間を左右する因子について	日高浩史	日本気管食道科学会会報
KTP レーザーで治療を行った下咽頭・喉頭静脈奇形	渡邊健一	日本気管食道科学会会報
処置中、処置後の急変への対応法　耳管通気	大島猛史	耳鼻咽喉科・頭頸部外科
【気道確保 !!】輪状甲状膜切開の実際と留意点	香取幸夫	JOHNS
メタロ-β-ラクタマーゼ産生菌	矢野寿一	臨床と微生物
検査結果をどう読むか？　細菌・ウイルス検査 ウイルス迅速診断キット	角田梨紗子	JOHNS
細菌感染症　グラム陰性桿菌感染症　インフルエンザ菌感染症	矢野寿一	日本臨床
最終講義　耳管開放症と側頭骨外科　私のライフワークの見つけ方	小林俊光	東北医学雑誌
聴覚領域の検査　耳管機能検査	菊地俊晶	JOHNS
化学放射線療法に対する栄養管理・口腔ケア	加藤健吾	耳鼻と臨床

	神経堤	鈴木　淳	脳科学辞典
	頭頸部癌の化学放射線療法における支持療法 ―治療中の QOL 向上をめざして―	松浦一登	癌と化学療法
	抗がん剤の有害事象対策	松浦一登	日本耳鼻咽喉科学会会報
	EBM に基づいた頭頸部癌の術後治療	松浦一登	頭頸部癌
	喉頭全摘術後の咽頭皮膚瘻に対する創管理の工夫	斎藤大輔	頭頸部外科
	難聴の診断と治療―最新の進歩から―	川瀬哲明	仙台市医師会報
	頭頸部の稀な部位に発生した神経鞘腫　画像と病理の対比	石井　清、 小倉正樹	仙台市立病院医学雑誌
	1 年間に経験した頸部結核 3 例	河本　愛	耳鼻咽喉科臨床
	耳管開放症診断における音響耳管法（sonotubometry）の問題点　高い偽陽性率と検査法の位置づけ	菊地俊晶	Otology Japan
	児童難聴の推移　仙台市における 11 年間の聴力検診の結果	高橋　薫	Audiology Japan
	【プロに学ぶ手術所見の記載法】聴神経腫瘍に対する手術	高田雄介	JOHNS
	症例から学ぶ―診療のポイントとピットフォール・頭頸部―	松浦一登	日耳鼻第 27 回専門医講習会テキスト
	II. 各論 A 表在癌や他の悪性腫瘍との鑑別を必要とする疾患群 8. 咽頭白板症	松浦一登	一目でわかる咽頭表在がんアトラス（武藤学・渡邉昭仁編）
	II. 各論 B 表在癌例―内視鏡病型と亜部位から― 3.0-IIa 型赤色調病変 1）中咽頭の 0-IIa 型①	松浦一登	一目でわかる咽頭表在がんアトラス（武藤学・渡邉昭仁編）
	II. 各論 B 表在癌例―内視鏡病型と亜部位から― 3.0-IIa 型赤色調病変 4）下咽頭梨状陥凹の 0-IIa 型①	松浦一登	一目でわかる咽頭表在がんアトラス（武藤学・渡邉昭仁編）
	II. 各論 B 表在癌例―内視鏡病型と亜部位から― 3.0-IIa 型赤色調病変 7）下咽頭その他の部位の 0-IIa 型①	松浦一登	一目でわかる咽頭表在がんアトラス（武藤学・渡邉昭仁編）
	下咽頭・喉頭部分切除に対する再建手術の検討　空腸パッチの適応に関する考察	後藤孝浩、 松浦一登	頭頸部癌
	頭頸部癌術後同時化学放射線治療施行例における予防照射 40 Gy/20 分割領域の局所制御	塩見美帆、 西條　茂	臨床放射線
	【感染症症候群（第 2 版）―症候群から感染性単一疾患までを含めて― ［上］】細菌感染症　グラム陰性桿菌感染症　インフルエンザ菌感染症	矢野寿一	日本臨床
	上顎洞原発扁平上皮癌 T4 症例の多施設による後ろ向き観察研究	本間明広、 松浦一登	頭頸部癌
	中咽頭癌に対する治療の現状　多施設による後ろ向き観察研究	本間明広、 松浦一登	頭頸部癌
2014	Unusual parapharyngeal extension of peritonsillar abscess to the masticator space : successfully drained by extraoral and intraoral endoscopic approaches	Hidaka H	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Surgical treatment for the aberrant internal carotid artery in the middle ear with pulsatile tinnitus	Honkura Y	Auris Nasus Larynx
	Positive auditory cortical responses in patients with absent brainstem response	Kawase T	Clin Neurophysiol
	Change in endocochlear potential during experimental insertion of a simulated cochlear implant electrode in the guinea pig	Oshima H	Otol Neurotol
	Clinical and bacteriological influence of diabetes mellitus on deep neck infection : a systematic review and meta-analysis	Hidaka H	Head Neck
	Dislocated dental bridge covering the larynx : usefulness of tracheal tune guides under video-assisted laryngoscopy for induction of general anesthesia, thus avoiding tracheotomy	Hidaka H	Head Face Med
	Transcription factors with conserved binding sites near ATOH1 on the PU4F3 gene enhance the induction of cochlear hair cells	Ikeda R	Mol Neurobiol
	The regulation of gene expression in hair cells	Ryan AF, Ikeda R	Hear Res
	Severe acute otitis media caused by mucoid streptococcus pyogenes in a previously healthy adult	Kakuta R	Tohoku J Exp Med
	A case of culture-negative endocarditis due to Streptococcus tigurinus	Kanamori H, Kakuta R	J Infect Chemother
	Helicobacter cinaede infection of abdominal aortic aneurysm, Japan	Kakuta R	Emerg Infect Dis
	Site-dependent differences in density of sympathetic nerve fibers in muscle-innervating nerves of the human head and neck	Hosaka H, Katori Y	Anat Sci Int
	Distribution of CD10-positive epithelial and mesenchymal cells in human mid-term fetuses : a comparison with CD34 expression	Kim JH, Katori Y	Anat Cell Biol
	Central-part laryngectomy is a useful and less invasive surgical procedure for resolution of intractable aspiration	Kawamoto A	Eur Arch Otorhinolaryngol

	Contribution of detailed parts around talker's mouth for audio-visual speech perception	Sakamoto S, Kawase T	J Acoust Soc Am
	Effect of HMB/Arg/Gln on the prevention of radiation dermatitis in head and neck cancer patients treated with concurrent chemoradiotherapy	Imai T, Matsuura K	Jpn J Clin Oncol
	Endoscopic balloon dilatation for pharyngo-upper esophageal stricture after treatment of head and neck cancer	Maejima R, Ogawa T	Dig Endosc
	Ototoxic effect of Ultrastop Antifog Solution applied to the guinea pig middle ear	Nomura K	Otolaryngol Head Neck Surg
	Endoscopic drainage of orbital subperiosteal hematoma secondary to acute rhinosinusitis in a child	Nomura K	Tohoku J Exp Med
	Recurrent chondro-osseous respiratory epithelial adenomatoid hamartoma of the nasal cavity in a child	Nomura K	Ear Nose Throat
	Detection of Chlamydia trachomatis or Neisseria gonorrhoeae in otorhinolaryngology patients with pharyngeal symptoms	Oda K	Sex Transm Infect
	Human papillomavirus status of head and neck cancer as determined in cytologic specimens using the hybrid-capture 2 assay	Smith DF, Ogawa T	Oral Oncol
	Diagnostic value of capsule-like rim enhancement on magnetic resonance imaging for distinguishing malignant from benign parotid tumours	Sakamoto M, Ogawa T	Int J Oral Maxillofac Surg
	Unique migration of a dental needle into the parapharyngeal space : Successful removal by an intraoral approach and simulation for tracking visibility in X-ray fluoroscopy	Okumura Y	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Ototoxic effect of daptomycin applied to the guinea pig middle ear	Oshima H	Acta Otolaryngol
	Septal deviation is associated with maxillary sinus fungus ball in male patients	Oshima H	Tohoku J Exp Med
	Twelve-year survey (2001-2012) of the antimicrobial susceptibility of Streptococcus pneumonia isolates from otorhinolaryngology clinics in Miyagi Prefecture, Japan	Ozawa D	J Infect Chemother
	Preservation of cochlear function in Fabp3 (H-Fabp) knockout mice	Suzuki J	Neurosci Res
	Osteoma of the internal auditory canal mimicking vestibural showannoma : case report and review of 17 recent cases	Suzuki J	Tohoku J Exp Med
	Audiological evidence of therapeutic effect of steroid treatment in neuromyelitis optica with hearing loss	Takanashi Y	J Clin Neurosci
	Effects of contralateral noise on the 20-Hz auditory steady state response – magnetoencephalography study	Usubuchi H	PLOS ONE
	Clear cell carcinoma of the base of the tongue : case review and literature review	Watanabe K	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Closure technique for labyrinthine fistula by "underwater" endoscopic ear surgery	Yamauchi D	Laryngoscope
	Establishment and clinical application of a portable system for capturing influenza viruses released through coughing	Hatagishi E, Yano H	PLOS ONE
	先天性真珠腫の発生部位の国際的地域差について　システック・レビューとメタ分析からみて	日高浩史	小児耳鼻咽喉科
	小児用ケリーを用いた副咽頭間隙への経口的アプローチ	日高浩史	JOHNS
	脳深部刺激術後に長期経過で悪化した嚥下障害に対し喉頭気管分離術が有効であった 2 症例	安藤肇史、香取幸夫	臨床神経学
	当科におけるめまい外来症例の臨床検討	八幡　湖	Equilibrium Research
	拡大耳下腺全摘術症例の検討	齋藤大輔	日本耳鼻咽喉科学会会報
	声門上に陥頓した有鉤義歯異物　気管チューブイントロデューサーによる気道確保が有効であった 1 症例	日高浩史	日本気管食道科学会会報
	副咽頭間隙に迷入した医原性異物の 1 例	奥村有理	日本耳鼻咽喉科学会会報
	今、明らかにされた扁桃と IgA 腎症を結びつけるエビデンス　腎臓内科学、病理学、耳鼻咽喉科学のアプローチから IgA 腎症扁桃炎の病理学的特性とその糸球体腎炎との関連	城　謙輔、渡邊健一	口腔・咽頭科
	北日本 12 施設における耳下腺多形腺腫由来癌の治療成績	鈴木政博、小川武則	頭頸部癌
	放射線療法・頸部郭清部位における移植床血管の非侵襲的操作 hydrodissection 法の有用性	武田　睦、小川武則	頭頸部癌
	重度嚥下障害に対して手術治療を行った 44 症例の検討	香取幸夫	日本耳鼻咽喉科学会会報
	【治療アルゴリズムにそった小児滲出性中耳炎の取り扱い】滲出性中耳炎の後遺症とその対応　中耳の形態的変化、真珠腫性中耳炎	日高浩史	JOHNS
	急性鼻副鼻腔炎	小澤大樹	日本医師会雑誌
	下顎骨骨髄炎が原因と考えられた深頸部ガス壊疽の 1 例	吉崎直人	耳鼻咽喉科頭頸部外科
	耳鼻のどの疾患の診かた　一般医が知っておくべき耳鼻咽喉科領域の診察. レジデントノート	宮崎浩充	レジデントノート
	ブラウン腫瘍を契機として診断された副甲状腺腫瘍の 1 症例	浅田行紀	頭頸部外科
	嚥下手術　私の術式（series06）種々の誤嚥防止手術	河本　愛	嚥下医学
	【治療に苦慮する耳科疾患（ここまでは診療所レベルで対応したい）：耳管疾患】耳管開放症の診断と治療　660 例の経験より	菊地俊晶	Otology Japan

	【聴覚に関する検査の読み方―ここがポイント―】耳管機能検査	小林俊光	ENTONI
	【症例をどうみるか】中耳手術と隠蔽性耳管開放症　気骨導差を残す手術法を選択した症例を含めて	小林俊光	JOHNS
	【勤務医のページ】医療事故調査制度について	橋本　省	宮城県医師会報
	地域医療において東北メディカル・メガバンクに期待すること	嘉数研二、橋本　省	宮城県医師会報
	【咽頭癌・頸部食道癌の治療戦略 Update】機能温存手術 下咽頭・頸部食道に対する機能温存手術　外切開による喉頭温存手術	松浦一登	耳鼻咽喉・頭頸部外科
	地域における頭頸部癌治療の均一化を目指した病病連携の試み	松浦一登	頭頸部癌 Frontier
	頭頸部癌治療の QOL 向上のために　口腔ケア導入のススメ　頭頸部癌治療への口腔ケア導入のススメ	松浦一登	口腔・咽頭科
	慢性腎不全・血液透析患者に発症した外耳道真珠腫の検討	橋本　研	日本耳鼻咽喉科学会会報
2015	Pyramidal lobe of the thyroid gland and the thyroglossal duct remnant : a study using human fetal sections	Takanashi Y	Ann Anat
	Ganglioside GM3 is essential for the structural integrity and function of cochlear hair cells	Yoshikawa M, Katori Y	Hum Mol Genet
	Bilateral endoscopic endonasal marsupialization of nasopalatine duct cyst	Honkura Y	Clin Pract
	Clinical factors indicating the presence of malignant lymphoma before lymph node dissection	Okumura Y	Acta Otolaryngol
	Effect of intratympanic application of efinaconazole 10% solution in the guinea pig.	Arakawa K	Eur Arch Otorhinolaryngol
	Change in and Long-Term Investigation of Neuro-Otologic Disorders in Disaster-Stricken Fukushima Prefecture : Retrospective Cohort Study before and after the Great East Japan Earthquake	Hasegawa J	PLOS ONE
	Unique Migration of a Dental Needle Into the Parapharyngeal Space : Successful Removal by an Intraoral Approach and Simulation for Tracking Visibility in X-ray Fluoroscopy	Okumura Y	Ann Otol Rhinol Laryngol
	Intraoral drainage under surgical microscopy with tonsillectomy for parapharyngeal abscesses	Okumura Y	J Laryngol Otol
	Phase II trial of chemoradiotherapy with S-1 plus cisplatin for unresectable locally advanced head and neck cancer (JCOG0706)	Tahara M, Matsuura K	Cancer Sci
	Outcomes of frontal mucoceles treated with conventional endoscopic sinus surgery	Nomura K	Acta Otolaryngol
	Minimally invasive transnasal approach to infratemporal fossa abscess	Nomura K	J Laryngol Otol
	Clinical factors indicating short nasal bone overlap	Nomura Y	Acta Otolaryngol
	Morphological differences in innervation between mucous glands and serous glands : a quantitative histological study using the sublingual glands of elderly humans	Kawamoto A	Acta Otolaryngol
	Innervation of submandibular and sublingual glands in elderly donated cadavers : a preliminary histological study of differences in nerve morphology between mucous and serous acini	Asakawa S, Katori Y	Anat Cell Biol
	Horizontal basal cell-specific deletion of Pax6 impedes recovery of the olfactory neuroepithelium following severe injury	Suzuki J	Stem Cells Dev
	Impact of the 7-Valent Pneumococcal Conjugate Vaccine on Acute Otitis Media in Japanese Children : Emergence of Serotype 15A Multi-Drug Resistant Streptococcus Pneumoniae in Middle Ear Fluid Isolates	Ozawa D	Pediatr Infect Dis J
	Switching of the laryngeal cavity from the respiratory diverticulum to the vestibular recess : a study using serial sagittal sections of human embryos and fetuses	Yamamoto M, Honkura Y	J Voice
	Cricothyroid articulation in elderly Japanese with special reference to morphology of the synovial and capsular tissues	Kawamoto A	J Voice
	嚥下障害・誤嚥に対する手術療法	渡邊健一	MB ENT
	科学技術の進歩と聴覚医学「脳磁図を用いた聴性誘発脳磁界計測」	川瀬哲明	Audiology Japan
	手術用顕微鏡を用いた口蓋扁桃摘出術とその応用	日高浩史	耳鼻咽喉科臨床
	耳管開放症の治療法は？	日高浩史	EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療
	アブミ骨筋反射陽性の顔面神経麻痺への対応	日高浩史	JOHNS
	喉頭蓋転移をきたした腎細胞癌症例	渡邊健一	JOHNS
	喉頭・下咽頭血管腫治療のエビデンスは？	渡邊健一	EBM 耳鼻咽喉科・頭頸部外科の治療

耳鼻咽喉科学教室　年表

一九一一（明治44年）
和田徳次郎教授開講
一九一七（大正6年）　医局員一名看護婦二名、二五床
一九二六（大正15年）　宿題報告「扁桃肥大の治療法」
一九三一（昭和6年）　東北地方会発足
第三十五回大日本耳鼻咽喉科会総会

一九四〇（昭和15年）
立木　豊教授開講
一九四一（昭和16年）　宿題報告「ムコーズス中耳炎」
真珠湾攻撃、日米開戦
一九四五（昭和20年）　太平洋戦争敗戦
一九四八（昭和23年）　医学部奨学賞「金・銀賞」設立
一九五〇（昭和25年）　鈴木篤郎教授就任（信州大学）
一九五一（昭和26年）　片桐主一教授就任（弘前大学）
神岡蘇二先生「銀賞」受賞
一九五二（昭和27年）　白幡克二教授就任（福島県立医科大学）
一九五三（昭和28年）　第一回日本耳鼻咽喉科学会東北・岩手地方連合学会
一九五四（昭和29年）　第五十三回日本耳鼻咽喉科学会総会
一九五七（昭和32年）　高倉　稔先生「銀賞」受賞
日本気食学会特別講演「喉頭検査法」
大内　仁教授就任（福島県立医科大学）

一九六二（昭和37年）
片桐主一教授開講
一九六五（昭和40年）　粟田口省吾教授就任（弘前大学）
一九六六（昭和41年）　宿題報告「耳鼻咽喉科領域疾患のX線学的研究」
朴澤二郎先生「金賞」受賞
一九六七（昭和42年）　立木　孝教授就任（岩手医科大学）
一九七〇（昭和45年）　東北大医学部耳鼻咽喉科学教室同窓会発足
第七十一回日本耳鼻咽喉科学会総会

一九七二（昭和47年）
河本和友教授開講
一九七四（昭和49年）　宿題報告「滲出性中耳炎」
綿貫幸三先生「銀賞」受賞
一九七七（昭和52年）　朴澤二郎教授就任（弘前大学）
一九八一（昭和56年）　高橋記念賞設立
高坂知節先生「金賞」受賞
開講七十周年記念祝典
一九八二（昭和57年）　湯浅　涼先生高橋記念賞受賞
一九八四（昭和59年）　草刈　潤先生「金賞」受賞
一九八五（昭和60年）　第一回国際滲出性中耳炎学会
第八十六回日本耳鼻咽喉科学会総会

一九八五（昭和60年）
高坂知節教授開講
一九八六（昭和61年）　大山健二先生「銀賞」受賞
一九八八（昭和63年）　朴澤孝治先生「銀賞」受賞
草刈　潤教授就任（筑波大学）
一九九一（平成3年）　宿題報告「蝸牛の微細構造と音受容機構」
池田勝久先生「銀賞」受賞
開講八十周年記念祝典
一九九二（平成4年）　小林俊光先生「金賞」受賞
新川秀一教授就任（弘前大学）
一九九六（平成8年）　小林俊光教授就任（長崎大学）
一九九七（平成9年）　沖津卓二先生高橋記念賞受賞
一九九九（平成11年）　第百回日本耳鼻咽喉科学会総会
池田勝久先生「金賞」受賞
二〇〇一（平成13年）　第四回国際滲出性中耳炎学会
開講九十周年記念式典

二〇〇一（平成13年）
小林俊光教授開講
二〇〇二（平成14年）　原　晃教授就任（筑波大学）
二〇〇三（平成15年）　池田勝久教授就任（順天堂大学）
鈴木秀明教授就任（産業医科大学）
飯野ゆき子教授就任（帝京大学）
工藤貴之先生「銀賞」受賞
宿題報告「耳管閉鎖障害の臨床」
沖津卓二教授就任（東北文化学園大学）
第九回日台耳鼻咽喉科学会議
川瀬哲明教授就任（東北大学大学院聴覚再建医工学分野）
飯野ゆき子教授就任（自治医科大学附属さいたま医療センター）
第百十回日本耳鼻咽喉科学会総会
須納瀬弘教授就任（東京女子医科大学東医療センター）
小川武則先生「銀賞」受賞
東日本大震災

二〇〇五（平成17年）
志賀清人教授就任（岩手医科大学）
二〇〇七（平成19年）　欠畑誠治教授就任（山形大学）
鈴木雅明教授就任（帝京大学ちば総合医療センター）
二〇〇八（平成20年）
松谷幸子教授就任（東北文化学園大学）
開講百周年記念式典
二〇一〇（平成22年）
本橋ほづみ教授就任（東北大学加齢医学研究所）
二〇一一（平成23年）
高卓　輝教授就任（東北大学大学院頭頸部腫瘍学連携講座）
小川武則教授就任（東京女子医科大学東医療センター）

二〇一二（平成24年）
松浦一登教授就任（東北大学大学院頭頸部腫瘍学連携講座）
二〇一三（平成25年）
矢野寿一教授就任（奈良県立医科大学微生物感染症学講座）
大島猛史教授就任（日本大学）
吉田尚弘教授就任（自治医科大学附属さいたま医療センター）

二〇一三（平成25年）
香取幸夫教授開講
二〇一四（平成26年）
二〇一五（平成27年）

編 集 委 員

沖津　卓二　　佐々木美隆　　柴原　義博　　川瀬　哲明　　古川加奈子
宮倉　秀人　　渡邊　健一　　山内　大輔　　野村　和弘　　豊田さと子

東北大学耳鼻咽喉科学教室　開講 100 周年記念誌

平成 27 年（2015 年）9 月 1 日　発行

編集・発行／東北大学耳鼻咽喉科学教室

〒 980-8574　仙台市青葉区星陵町 1-1

印　　刷／笹氣出版印刷株式会社